

頭註

國譯本草綱目

第三冊

春陽堂藏版

原著　明　李時珍

監修・校註　理學博士　白井光太郎

顧問　木村博昭

考定　理學博士　牧野富太郎

考定　理學博士　脇水鐵五郎

考定　岡田信利

考定　矢野宗幹

考定　木村康一

譯文　鈴木眞海

頭註國譯本草綱目第三冊例

一、本冊には本草綱目第五卷水部天水類・地水類、第六卷火部、及び第七卷土部、第八卷金石部金類・玉類、第九卷・第十卷石部石類上・下、第十一卷石部鹵石類、卽ち鑛物部の都てを收載した。

一、校訂竝に鼇頭註解の執筆は凡て監修白井光太郎博士親ら擔當されたものである。

一、本冊に收めた藥名標目下の和名・學名竝に英譯名の考定は脇水鐵五郎博士が擔當された。凡て博士の執筆に成つたのである。

一、原本は所依の本文を大字、歷代諸家の註を小字としてあるが、本書は藥名標目に四號活字を用ゐた外、本文竝に歷代諸家註を悉く五號活字に一定し、原本の大字には括弧【 】及びゴジック活字を用ゐ、又、諸家註の首に某曰とあるには字傍に小圈を添へ、引據・出典を示す書名・姓氏には六號活字を用ゐて區別した。本冊以下皆これに倣ふ。

一、鼇頭の註解は、多くは繁を避けて重記を省いた。引照はすべて本書第十五冊索引

徐に依られたい。

附記　譯者私註の地理釋はすべて飜譯執筆中極めて匆卒の間に加へたもので、頗る疎漫を免れなかつた。元來本草の記載には周秦已往の古地名と覺しきものも數〻あり、漢魏已來の地名と雖もその遷移殊に甚しいので、これが穿鑿は尤も難中の至難とされてある。況や古城廢邑の遺蹟を訪ねると異つて、特殊なる一草一石の山澤を窮むるに至つては、たとひ世の達識博覽の士に竢つにしても、その詳確を庶幾するはなかなか六ヶ敷いことであらう。謭陋譯者の如き、固より夢想だも企て及ぶべきところではない。ただ纔に史籍の手の屆く範圍に於て亥步を進め得たならば、他日別行本として本書私註の遺漏の幾分を補ひたいと希望して居る。

昭和四年八月十六日　　鈴木眞海記

頭註國譯本草綱目　第三册

目次

地水類

本草綱目火部第六卷

本草綱目土部第七卷

本草綱目金石部第八卷

本草綱目石部第九卷

本草綱目石部第十卷

本草綱目石部第十一卷

本草綱目水部

第五卷

本草綱目水部目錄第五卷

李時珍曰く、水は(一)坎の象であつて、その文は横にすれば☵であり、縦にすれば☵である。その體は純陰、その用は純陽であつて、上にしては雨、露、霜、雪となり、下にしては海、河、泉、井となり、流、止、寒、溫とその氣の鍾るところを異にし、甘、淡、鹹、苦とその味の含入するところを同うせぬ。このゆゑに、往昔の人は水と土とに據つて境域を(二)九州に分ち、それぞれの地方の水土に隨つて人に美惡、壽夭の差異あることを考へた。蓋し水は萬化の源であり、土は萬物の母である。飲むことは水の資けに依り、食ふことは土の資けに依る。この飲、食こそまことに人間の命脈なのであつて、(三)營、衞は全くこれに因つて成立するものだから、水分が去れば營が竭き、穀食を去れば衞が亡びるともいふのである。水の性味に就ては、疾を愼み生を衞るものの特に潛心せねばならぬところである。本書は水にして藥、食に關するもの凡そ四十三種を集め、天と地との二類に分けて載錄した。舊本には水類すべて三十二種を玉石部に散見してある。

(一) 坎ハ易ノ象名。

(二) 禹貢九州ハ兗、冀、靑、徐、豫、荊、揚、雍、梁、是ナリ。

(三) 營衞ハ氣血ノ別名、又營行脉中、衞行脉外ノ語アリ。一說ニ動脈ヲ營トナシ、靜脈ヲ衞トナストモ曰フ。

名醫別錄二種　梁の陶弘景註。　本草拾遺二十六種　唐の陳藏器。

嘉祐本草四種　宋の掌禹錫。　本草綱目十一種　明の李時珍。

附註

魏李當之藥錄　魏吳普本草　宋雷斅炮炙論　齊徐之才藥對

唐蘇恭唐本草　唐孫思邈千金方　唐李珣海藥　唐甄權藥性

唐楊損之刪繁　唐孟詵食療　南唐陳士良食性　蜀韓保昇重註

宋馬志開寶　宋蘇頌圖經　宋唐慎微證類　宋寇宗奭衍義

宋大明日華　金張元素珍珠囊　元李杲法象　元王好古湯液

元朱震亨補遺　明汪穎食物　明汪機會編　明王綸集要

水の一　天水類十三種

雨水 拾遺　潦水 綱目　露水 拾遺　甘露 拾遺　甘露蜜 拾遺

明水 拾遺　冬霜 拾遺　臘雪 嘉祐　雹 拾遺　夏冰 拾遺

神水 綱目　半天河 別錄　屋漏水 拾遺

右附方　舊一　新三

水の二　地水類三十種

流水 拾遺　井泉水 嘉祐　節氣水 綱目　醴泉 拾遺
玉井水 拾遺　乳穴水 拾遺　溫湯 拾遺　碧海水 拾遺
鹽膽水 拾遺　阿井水 綱目　山岩泉水 拾遺　古冢中水 拾遺
糧罌中水 拾遺　赤龍浴水 拾遺　車轍中水 綱目　地漿 別錄
熱湯 嘉祐　生熟湯 拾遺　虀水 綱目　漿水 嘉祐
甑氣水 拾遺　銅壺滴漏水 綱目　三家洗碗水 拾遺　磨刀水 綱目
浸藍水 綱目　豬槽中水 拾遺　市門溺坑水 拾遺　洗手足水 綱目
洗兒湯 綱目　諸水有毒 拾遺

右附方　舊十八　新四十七

互攷

鐵漿　淬鐵水　玉泉　石腦油　菊潭水　石中黃水　漚麻湯
米泔水　酒　醋　飴餹　沙糖　茶　蜜
蚯蚓水　蝸牛水　繅絲湯　螺螄水　蜆子水　燖雞湯　燖猪湯
洗褌水　蟹化漆水　胞衣水

水の一　天水類十三種

雨水（拾遺）

和名　あまみづ（雨水）
英譯名　Rain-water

【釋名】時珍曰く、地の氣は升つて雲となり、天の氣は降つて雨となる。故に、人の(一)汗を天地の雨を以て名けてある。

【氣味】【鹹し、平にして毒なし】

【主治】(二)**立春雨水**【夫婦が各ゝ一盃を飲んで房に還れば、機會さへ適當であれば姙娠せしむるの神效がある】（藏器）【發散、及び補中、益氣の藥を煎ずるによし】（時珍）

【發明】時珍曰く、(三)虞搏の醫學正傳に『立春の節の雨水はその性が始めて春升、生發の氣を得るものであるから、これを用ゐて中氣、不足、(四)清氣不升の藥を煮るがよい。古方に、婦人の子無きものはこの日夫婦各ゝ一盃を飲んで房に還れば受胎するといふも、やはりその含まれた成分に始めて萬物を發育する力があるとの

(一)素問應象大論ニ、陽之汗以天地之雨名之トアルヲ引ケルナリ。
(二)立春、陰暦正月節、凡十五日間。
(三)虞搏ハ明人。
(四)清氣ハ清新ノ氣、不升ハ循環セザルコト。

意義を取つたものだ』とある。

梅雨水　【主治】　【瘡疥を洗へば瘢痕を滅する。(五)醤に入れば熱し易い】(藏器)

【發明】　藏器曰く、(六)江淮以南は氣が卑濕で、五月上旬から下旬にかけて殊に甚しい。(七)月令に(八)土潤溽暑とあるは五月中の氣をいふのであつて、この節を過ぎてから書畫の蟲干も出來るのである。梅雨は衣類を沾せば腐黑し、垢を洗へば灰汁のやうで、他の水とは異るところがある。黑腐したものはただ梅葉湯で洗へばそれが落ちるが、その他は何で洗つても落ちないものだ。

時珍曰く、梅雨は黴雨とも書く。それは衣類その他のものが沾ふと皆黑黴が生ずるからである。(九)芒種後の壬に當る日が入梅、小暑後の初めの壬に當る日が出梅となつて居る。また三月を迎梅雨、五月を送梅雨ともいふ。この期間は皆濕熱の氣が停滯し、それが欝釀するために霏雨となつて降る。人がその氣を受ければ病を生じ、物がその氣を受ければ黴が生ずる。故にこの水で酒、醋を造つてはならぬものだ。土潤溽暑といふは六月中の氣をいふのであつて、(一〇)陳氏が五月といつたのは誤である。

(五)醤ハ味噌。
(六)江淮トハ長江ト淮河ノ中間、江蘇、安徽地方ヲイフ。
(七)月令ハ書名、禮記ニ出ヅ。秦ノ呂不韋ノ撰スル所ト云フ。
(八)字書ニ溽ハ濕ナリトアリ。
(九)芒種ハ陰暦五月節、凡十五日間。
(一〇)陳氏ハ藏器ヲ指ス。

液雨水 【主治】「あらゆる蟲を殺す。蟲を殺し積を消する藥を煎ずるによし」（時珍）

【發明】時珍曰く、(一)立冬後の十日間を入液といひ、それから(二)小雪に達する日を出液といふ。その間に降つた五日間の雨を液雨といふのである。また藥雨ともいふ。あらゆる蟲はこれを飲んで皆蟄伏し、來春雷鳴に至つて蟄を起つて出るのである。

潦水（綱目）

和名 ながあめ（霖雨）のみづ
英譯名 Water of continued rain

【釋名】時珍曰く、降り注いだ雨水を潦といふ。また(一)淫雨を潦といふ。韓退之の詩に(二)『潢潦無根源、朝灌夕已除』とあるが是である。

【氣味】「甘し、平にして毒なし」【主治】「脾、胃を調へ、濕熱を去る藥を煎じる」（時珍）

【發明】(三)成無己曰く、張仲景が、傷寒の瘀熱が裏に在つて身體に黄を發せるを治するに、麻黄連軺赤小豆湯を煎ずるに潦水を用ゐた目的は、その味が薄くして濕

(一)立冬ハ陰曆十月節。
(二)小雪ハ陰曆十月中。

(一)淫雨ハ久雨。
(二)韓文六卷符讀書城南ニ灌ヲ滿ニ作ル。
(三)成無己、金人、傷寒論註ヲ著ス。
(四)呉氏食物本草ニ利ヲ發ニ作ル。

氣が熱を(日)利するを助けぬにある。

露水（拾遺）

和名　つゆ
英譯名　Dew

【釋名】時珍曰く、露は陰氣の液である。夜間の氣は物に着いて道を歩いても潤澤になるものだ。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【秋露の繁き時、盤に收取して煎じて飴のやうにしたものは、人の天年を延べ、饑ゑざらしむるものである】（藏器）【肅殺の氣を稟くるもので、肺を潤し、祟を殺すの藥を煎じ、疥癬、蟲癩に用ゐる諸種の散藥を調へるによし】（虞摶）

百草頭上の秋露【未だかわかぬうちに收取して用ゐれば、あらゆる疾を癒し、消渇を止め、人をして身體を輕快にし、饑ゑず、肌肉の血色を潤澤ならしめる。別に雲母を化し、粉にして服する法もある】（藏器）【八月朔日に收取して墨を摩り、それを(一)太陽の穴に點くれば頭痛を止め、(二)膏肓の穴に點くれば勞瘵を治す。これを天灸といふ】（時珍）

(一)太陽ノ穴トハ、東醫寶鑑ニ、瞳子髎一名太陽、一名前關トアリ。目尻ノ横ノ經穴ヲ云フ。
(二)膏肓ノ穴ハ、背柱第四椎第五椎ノ間、兩傍背中ヲ去ル各三寸半。

(三)薛用弱、唐代ノ人。

(四)郭憲、後漢ノ人。

(五)洞冥記ニ曰ク、東極ニ吉雲澤アリ。ソノ國俗、雲氣ヲ以テ吉凶哀樂ノ事ヲ占フ。吉ナレバ滿室雲起リ、五色人ヲ照ストアリ、ソノ地點考フベカラズ。

百花上の露【人の顔色を好くする】(藏器)

柏葉上の露、菖蒲上の露【いづれもよく目を明にする。毎日早朝に目を洗ふ】(時珍)

韮葉上の露【白癜風を去る。毎朝、これを塗る】(時珍)

凌霄花上の露【目に入れば目を損ふ】

發明 藏器曰く、(三)薛用弱の續齊諧記に『司農の鄧紹が八月一日に華山へ登つて、一童子が五彩の嚢に柏葉下の露滴を取り、やがてそれが嚢に滿ちて居るを見て、訊ねて見ると、童子は「赤松先生が目を明にするために取らせるのだ」と答へた』と書いてある。今俗間で八月一日に露華嚢といふを作り、それに露を取るのはこれに象へたものである。また(四)郭憲の洞冥記に『漢の武帝の時、(五)吉雲國といふところがあつて、そこには吉雲草といふ草が生え、これを食へば死ぬといふことがない。その露を日に照して見ると皆五色である』とあり。また『東方朔は黑、青、黄の三種の露を取り、各〻五合を盛つて帝に獻じた。帝がそれを群臣に賜つて服ませたところ、臣下の病あるものが皆平癒した。東方朔は「一日が初めて出る處の露は

皆飴の如きものだといひ、且つ今の人も露を煎じて飴の如くして久しく服めば饑えない」といつた」とある。呂氏春秋には『水の美なるものに(六)三危の露といふのがある』とある。水にして見ても普通の水よりは重いものである。時珍曰く、秋露で酒を造れば極めて淸冽なものとなる。(七)姑射の神人は風を吸ひ露を飲むといひ、漢の武帝は金盤を作つてそれに露を承け、玉屑に和して服食したともいひ、楊貴妃は毎朝花上の露を吸つて渴を止め、酒の惡醉を解したともいふ。外國には薔薇露といふがあつて、まことに芳香の美しいものであるが、それは花上の露水だといふ。その眞否のほどは判らない。○藏器曰く、凡そ秋露、春雨の草に着いたものに、瘡や破傷のある者が觸れば、瘡は頓に痒痛しなくなる。これは(八)風、及び毒水に中るので、身體が必ず(九)反張して角弓を張つたやうな狀態になるが、急に鹽豉と麪を和し盌子の形を作り、それを瘡上に置いて(一〇)一百壯を灸すれば、惡水數升を出し、それで痛痒を感ずるやうになつて癒えるものである。

甘露（拾遺）

和名　あまきつゆ・かんろ（甘露）
英譯名　Nectar or Honey-dew

(六)三危ハ山名、今ノ甘肅省敦煌縣ノ南ニ在リ。一說ニハ西藏ノ地ナリトイフ。
(七)姑射ハ山名、山西省臨汾縣ニアリ。
(八)風ハ無形ノ毒氣。
(九)反張、ソリカヘル。
(一〇)壯ハ炷ニ同ジ。

膏露（綱目）瑞露（綱目）天酒（綱目）神漿

釋名

時珍曰く、按ずるに、(一)瑞應圖に『甘露は美露である。神靈の精、仁瑞の澤であつて、凝つて脂の如く、その甘きこと飴の如くなるところから甘膏、酒漿の稱呼がある』とあり、(二)晉中興書には『王者が耆老を敬養するときは松柏に降り、賢を尊び衆を容るるときは竹葦に降る』とあり、列星圖には『天乳の一星が明潤なるときは甘露が降る』とある。以上の諸說はいづれも瑞氣の所感として說明したものである。呂氏春秋には『水の美なるものに三危の露あり、和して美なるものに(三)揭、雩の露があり、その色は紫である』とあり、(四)拾遺記には『(五)崑崙の山に甘露がある。ながめたところは丹の如く、それが草木に着けば皎瑩として雪の如くだ』とあり、(六)山海經には『(七)諸沃の野、搖山の民は甘露といふものを飲むので、壽命の短いものでさへ八百歲だ』とあり、(八)一統志には『(九)雅州の蒙山には常に甘露がある』とある。以上の諸說はいづれも國內に於て嘗て產した地方を擧げたものである。杜鎬は『甘露は何等瑞なるものではない。これは草木が將に枯れんとして一時にその精華を外部に發したもので、雀餳などといふものの如きものだ』と言つて居るが、理論とし

(一)瑞應圖、梁ノ孫柔之ノ著。

(二)晉中興書ハ晉ノ何法盛ノ著、說郛第五十九局ニアリ。

(三)揭ハ揭嶺、廣東省潮州揭陽縣ノ西北一百五十支里ニ在リ。雩ハ雩山、江西省雩都縣北三十五支里ニ在リ。古代ニハ此ニ雨ヲ祈リタリトイフ。

(四)拾遺記ハ秦ノ王嘉ノ著、漢魏叢書ニアリ。

(五)崑崙ハ大崑崙山ヲイフ。ハミルノ東境葱嶺ヨリ西藏、新疆ノ境ニ沿ヒ、東走シテ支那本部ニ入リ東西ニ連亙ス。

(六)山海經ハ漢土禹益ノ書トイヒ周秦間ニ成ルトモイフ。隋書經籍志ニ書名ヲ記

てなことに妥當な見方である。

［氣味］『甘し、大寒にして毒なし』［主治］『之を食すれば五臟を潤し、壽命を延べ、饑ゑ瘦れず、神仙となる』（藏器）

甘露蜜（拾遺）

和名　かんろみつ・つゆのあめ（露の飴）
英譯名　Manna

［集解］藏器曰く、（一〇）巴西地方の中國より最も隔絕せるところに生ずるもので、その狀餳の如きものである。時珍曰く、按ずるに、方國志に『（一一）大食國では秋季露を取り收めて朝日の光に曝すと糖霜になる』とあるは、蓋しこれであらう。又一統志には『（一二）撒馬兒汗は西番に在る地方で、そこには葉の細い藍のやうな小草が叢生し、その上に凝る秋露は蜜のやうな味があり、煮めれば餳になる。土民はこれを達郎古賓と呼ぶ。蓋し甘露のことだ』とある。これは刺蜜に相近いものだ。又果部にも掲げてある。

［氣味］『甘し、平にして毒なし』［主治］『胸膈の諸熱に用ゐ、目を明にし渴を止める』（藏器）

載ス。

（七）諸沃ノ野、搖山未詳。

（八）大明一統志ハ明ノ李賢等英宗ノ勅ヲ奉ジ選述スルモノ、凡九十卷、天順五年四月成ル。

（九）雅州ハ今ノ四川省、雅安ノ地也。蒙山ハ今ノ四川省雅安・名山・蘆ノ三縣ノ北ニアリ。卽チ禹貢蒙山ニシテ、大渡河ハ此ニ源ヲ發ス。

（一〇）巴西ハ後漢末ニ劉璋ガ設置セル州名、今ノ四川省閬中縣。

（一一）大食國ハ往時ノアラビヤ帝國、現今ノ波斯、アラビヤヲ奄有ス。

（一二）撒馬兒汗ハ中央亞細亞ノ一州、西紀前三二九年歷山大王ノ據ル所。十三世紀

ニハ成吉思汗コノ地ヲ破リ、ソノ後帖木兒コノ地ニ都ス。一八六八年露國ノ版圖ニ歸ス。

（一）大蚌、ドブガヒ。

（二）陽燧ハ、ヒヲトルカガミ。

（三）陳僎ハ宴席ノ食物。玄酒、水ノ別名。古代水ヲ酒ニ代用ス。

（四）參同契ハ漢ノ魏伯陽ノ著、漢魏叢書ニ收ム。

（五）淮南子ハ漢ノ淮南王劉安著、凡ソ二十一卷アリ。

（六）考工記ハ漢ノ武帝ノ時ニ周禮ニ合併セシ書ニシテ、漢土古代ノ工事ヲ記録セシモノナリ。

（七）高堂隆ハ三國魏ノ人、明帝ニ仕ヘテ散騎常侍ニ拜セラル。

明水（拾遺）

和名　つきのみづ

英譯名　Lunar water (Dew formation on the surface of metal)

釋名　**方諸水**　藏器曰く、方諸とは（一）大蚌のことである。十分に摩し熱して月に向けると水二三合取れる。やはり朝露のやうなものだ。（二）陽燧を日に向け方諸を月に向けると、いづれもよく火や水を招き召ぶもので、周禮に『明諸は水を月に承け、（三）陳僎の時の玄酒にする』とあるのはこれである。時珍曰く、明水とはその清明純潔なるの意味で、頗る神聖視したわけである。周禮に『司烜氏はかの燧を以て明火を日に取り、鑑を以て明水を月に取り、以て祭祀に供す』とあるはそれである。魏伯陽の（四）參同契には『陽燧は以て火を取る。日以外に光を生ずるものはない。方諸も月星に因らねば水漿を得られやうはない』とある。（五）淮南子には『方諸月を見れば津して水となる』とあり、その註に『或は方諸とは石のことだ』といひ、或は『それは大蚌のことだ』といひ、或は『五種の石で錬つたものだ』などとあるが、いづれも誤である。按ずるに、（六）考工記に『銅、錫相半するものを鑑、燧の劑と謂ふ』とあつて、これは火を燧とし、水を鑑としたものである。（七）高堂隆は『陽

燧、一名陽符といひ、火を日に取る。陰燧、一名陰符といひ、水を月に取る。いづれも銅を以て作るもので、これを水、火の鏡といふ』といつて居る。この說の方が正しいのである。(八)干寶の搜神記には『金と錫とは性が同一であつて、五月丙午の日の午の時に鑄て陽燧を作り、十一月壬子の日の子の時に鑄て陰燧を作る』とある。

[氣味]【甘し、寒にして毒なし】[主治]【目を明にし、心臟を鎭め、小兒の煩熱を去り、渴を止める】(藏器)

冬霜（拾遺）

和名　しも(霜)・ふゆのしも(冬の霜)
英譯名　Frost

[釋名] 時珍曰く、陰盛なるときは露が凝つて霜となる。霜はよく物を殺し、露はよく物を滋すもので、その性は時に隨つて異るのである。乾象占に『天の氣が下降して露となり、露に淸風が薄つて霜となる。霜は萬物を殺し、妖氣を滅すをその本來とする。當に降すべくして降さず、當に物を殺すべくして殺さぬは、いづれも政令が弛んで墮落したものだ。當に降すべからざるを降し、當に物を殺すべからざるに殺すは、政令が輕卒にして殘暴なるものだ』とある。(一)許愼の說文には『早霜を

(八)干寶、晉人。

(一)許愼、後漢ノ時ノ人。

(二)玄霜ハ丹藥ノ名。

(三)痱瘡一名汗疹。和名アセモ。

(一)劉熙ハ後漢ノ時ノ人。

(二)成數ハ整數ニ同ジ。

氣といひ、白霜を皚といふ」とある。また(二)玄霜といふものもある。承曰く、凡そ霜を取収めるには、雞羽で瓶の中へ掃ひ込み、密封して光線の當らぬ處に貯藏する。それで久しい間經つてもそのまゝに保つものだ。

氣味　【甘し、寒にして毒なし】　**主治**　【之を食すれば、酒熱、傷寒の鼻塞、酒後の諸熱で顏色の赤さを解す】（藏器）【蚌粉に和して暑季の(三)痱瘡、及び腋下の赤腫に傳ければ立ろに瘥える】（陳承）

附方　新一。【寒熱瘧疾】秋後の霜一錢半を熱酒で服す。（集玄方）

臘雪（宋嘉祐）

和名　しはすのゆき
英譯名　A spate-winter snow

釋名　時珍曰く、按ずるに、(一)劉熙の釋名に『雪は洗なり』とあつて、瘴癘蟲蝗を洗除するものである。凡そ花は五出、雪花は六出であつて、これは陰の(二)成數である。冬至後第三の戊の日を臘といひ、臘以前に三回の降雪あれば、菜、麥の發育に好影響があり、また蟲蝗を殺すものである。臘雪を光線の當らぬ處に密封して置けば、數十年の長きもそのまま消けずにある。その水に五穀の種を浸せば、旱魃

に耐へて蟲が生ぜず、室内に洒げば、蠅が自ら去り、一切の果物、食物を臘雪水で深く貯藏すれば、(三)蛀蠹に傷められぬ。かやうな功果は、如何にも蟲蝗を除くの實證ではあるまいか。藏器曰く、春雪には蟲があり、水も腐敗し易いから取らぬことになつて居る。

【氣味】【甘し、冷にして毒なし】【主治】【一切の毒を解し、天行時氣、溫疫、小兒の熱癇狂啼、大人の(四)丹石發動、酒後の暴熱、黃疸を治す。それには小溫にして服するのである】(藏器)【日を洗へば赤を退ける】(張從正)【茶を煎じ、粥に煮て用うれば、熱を解し、渴を止める】(吳瑞)【傷寒(五)火暍の藥を煎ずるによく、(六)痱に抹するもまたよし】(時珍)

【發明】宗奭曰く、臘雪水なるものは大寒の水である。故に以上の諸病を治するのである。

雹　音は駁(ハク)　和名　ひよう
(拾遺)　英譯名　Hail

【釋名】時珍曰く、(一)程子は、「雹は陰陽相搏つの氣である」といふ。蓋し沴(ワ

(三)字書ニ蛀ハ木蠹蟲トアリ。ズヰムシ、テツパウムシ。
(四)石藥ヲ鍊製シタルモノヲ服シテ、身體ニ異常ヲ起スコト。
(五)火暍ハ日射病。
(六)痱、アセモ。
(一)程子ハ程明道、宋時ノ人。

(二) 曾子ハ孔子ノ門人。

(三) 陸農師詳ナラズ。唐ノ陸羽字鴻漸、桑苧翁ト號ス、茶經ニ卷ヲ著ス。此人ヲ指スカ。

(四) 懶龍ハ龍ノ升天セズシテ地ニ伏居スル者ヲ云フ。

(五) 斗升ハ一升桝。

(六) 大風ハ癩病。

ザハヒ）の氣である。或は雹は砲であつて、物に中ること砲の如しといふのだともいふ。(二)曾子は『陽の專なる氣は雹となり、陰の專なる氣は霰となる』といひ、(三)陸農師は『陰が陽を包んで雹となり、陽が陰を包んで霰となる。雪は六出で花を成し、雹は三出で實を成す』といふ。これは陰陽に就てのみの說明である。五雷經には、『雹は陰陽不順の氣の結成である。また(四)懶龍の鱗甲の内が寒凍したために水が生じ、その龍が雷のために發動せられて中空を飛走するとき、その氷が墮ちて來るものもあつて、大なるものは(五)斗升ほどあり、小なるものは彈丸ほどある』とある。また蜥蜴が水を含むとよく雹になるなどともいふが、果してさやうな事實があり得るや否やは審でない。

[氣味] 『鹹し、冷にして毒あり』時珍曰く、按ずるに、五雷經に『人が雹を食すれば疫疾を患ひ、(六)大風、顚邪の症狀を呈す』とある。藏器曰く、醬が正味を失つたときは、雹一二升を取つてその甕の中へ入れればもとの正しき味に還るものである。

夏冰（拾遺）

和名　なつのこほり
英譯名　Summer ice

釋名　凌　去聲に發音する。時珍曰く、冰は太陰の精であつて、水が極度に變じて土のやうになつたもの、柔が變じて剛と爲つたものだ。所謂物極つて反つて兼ね化すといふそれである。故に冰の字は水に從ひ仌に從ふのである。周禮に、『凌人冰を掌つて以て祭祀、賓客に供す』とあり、左傳に『古は日(一)北陸に在つて冰を西陸に藏し、(二)朝覿之を出す。その之を藏するや、深山窮谷、(三)涸陰沍寒。そのこれを用うるや、祿位、賓客、喪祭』とあり、(四)郎顗は『冰を藏するに時を以てすれば、雷出でて(五)震せず。冰を棄てて用ゐざれば、雷發せずして震す』といふ。今の人が冬季冰を窖に藏し、それに鹽を覆ふて置くは適當な方法である。(六)淮南萬畢術には『凝水石で冰を作る法』といふがあるが、それは事實ではない。

氣味　【甘し、冷にして毒なし】

主治　【熱煩を去る。乳石を服して熱腫を發したものを熨す】（藏器）【煩渇を解し、暑毒を消す】（吳瑞）【傷寒陽毒の熱盛にして昏迷するには、冰一塊を(七)膻中に置くがよし。また燒酒の毒を解す】（時珍）

(一)五雜組ニ南至ヲ北陸トナシ北至ヲ南陸トナスハ何ゾヤ、其影ノ地ニ在ル者ヲ以テ言フナリトアレバ、北陸ハ冬至ノコトナリ。
(二)朝覿ハ奎星東見ノ時。
(三)涸字、周禮左傳共ニ固ニ作ル。
(四)郎顗、後漢順帝ノ時ノ人。
(五)震ハ物ヲ振動スルコト。
(六)淮南王劉安ノ著、前漢代ノ人。
(七)膻中ハ胸中兩乳ノ間ヲ云フ。

（八）理中丸、人蔘、乾薑、甘草、白朮。

（九）瘢痕ハ瘡痕。

發明　藏器曰く、暑夏の熱い盛りに冰を食ふことは氣候と相反するわけであつて、決して良好なる理由はない。恐らく腹に入れば冷熱相激して、却つて諸種の疾病を招くであらう。食譜に『凡そ夏季に冰を用うるは、ただ飲食物に暑さの當るを遮つて氣を冷しくするだけのものだ。これは食ふべきものではない。これを食へばその當座、暫時の間だけ快く感ずるが、反するのだから久しき後にはいづれも疾となるものだ』とある。時珍曰く、宋の徽宗皇帝が冰を食ひ過ぎて脾疾を患つたとき、侍醫の手當が效かないので楊介を召して診療させた。その時介が（八）大理中丸を用ゐると、帝は「その藥ならば度度服んだのだ」といはれたが、介は「しかし疾は冰の過食が原因だから、この藥は冰で煎じたものである。これは病を受けたその源を治するのだ」と答へてそれを薦めると、帝の疾は果して癒えたといふことである。これなどは如何にもその宜きを得た活機の士といふべきである。

附方　新一。〔（九）瘢痕を滅す〕冰を以て頻に熨するが良し。（千金方）

神水（綱目）

和名　たけのなかのみづ
英譯名　Water in the bamboo-stalk

集解　時珍曰く、(一)金門記に『五月五日の午時に雨が降つたならば、その時急に竹を切ると幹の中に必ず神水がある』それを(二)瀝し取つて藥にする』とある。

氣味　【甘し、寒にして毒なし】　主治　【心腹の積聚、及び蟲病に、獺肝を和し丸にして服す。また之を飲めば、熱を消し、痰を化し、驚を鎭め、精神を安にする】(時珍)

半天河 (別錄下品)

和名　木や竹のうつぼのたまりみづ
英譯名　Water in the hollow of tree-trunk or bamboo-stalk

釋名　**上池水**　弘景曰く、これは竹籬頭の水、及び空樹穴中の水である。時珍曰く、(一)戰國策に『長桑君は扁鵲に上池の水を飲ませて明に臟腑を洞見した』とあり、註に『上池水は半天河也』とある。けれども別に法があるのである。

氣味　【甘し、微寒にして毒なし】　主治　【鬼疰、狂邪の氣、惡毒に用ゐる】(別錄)　【諸瘡を洗ふ】(弘景)　【蠱毒に主效があり、(二)鬼精を殺す。恍惚として妄語するには、それと知らしめずにこれを與へて飲ます】(甄權)　【槐樹の間から取つた

(一)唐時代ノ書。
(二)瀝ハ滴下。

(一)漢ノ劉向ノ集錄、戰國時代ノ作トイフ。
(二)鬼精ハ化ケモノ。

ものは、諸風、及び惡瘡、風瘙疥痒に主效がある】（藏器）

發明 宗奭曰く、牛天河水は、上に在る（三）天澤の水である。故に心病、鬼疰、狂邪、惡毒を治す。

附方 舊一、新一。【時疫の辟禳】牛天河水を飲む。（醫林集要）（四）【身體の白駮】樹木孔中の水を取つて洗ひ、桂を搗いて末にして唾で和し、一日二回づつ傅ける。（張文仲備急方）

屋漏水（拾遺）

和名　あまもりみづ・やれのもりみづ
英譯名　A leaking water from the roof

氣味 【辛く苦し、毒あり】李廷飛曰く、この水の滴つた（一）脯肉を食へば、或は癥瘕になり、惡瘡を生ずる。また簷下の雨の滴つた野菜も毒があるから食つてはならぬ。

主治 【犬咬瘡を洗ひ、更に水を屋簷に澆いで、滴つた下の土を取つて傅ければ效がある】（藏器）【（二）肬目に塗り、丹毒に傅ける】（時珍）

（三）天澤ハ上天下澤ノ略。
（四）白駮、シロナマヅ。
（一）脯ハ乾肉。
（二）肬目、イチノメ。

水の二　地水類三十種

流水（拾遺）

和名　ながれみづ・かはのみづ
英譯名　A running water, Stream water

集解　時珍曰く、流水とは、大にしては江河小にしては溪澗皆流水である。その外觀は動であるが性は靜であり、その質は柔であるが氣は剛であつて、湖澤、陂塘の止水とは同一でない。また江河の水は濁つて居るが、溪澗の水は清んで居る、これも同一ではないのである。濁水、流水の魚と清水、止水の魚とを較べて見ると、その性質といひ色といひ遙に相違があつて、（一）劍を淬し、帛を染めて見ると、各その色に相異があり、粥を煮、茶を烹てもその味がまた異つて居る。これに依つて見れば、藥に入れる場合にもそれぞれの別を明にせねばならぬわけである。

千里水。東流水。甘爛水　一名勞水。**氣味**【甘し、平にして毒なし】**主治**【病後の虛弱。これを（二）揚ぐること萬遍にして煮た藥は鬼神を禁呪するに最も驗がある】（藏器）【五勞七傷、腎虛、脾弱、陽盛に陰虛して目の瞑する能はざるもの、及

（一）字書ニ、刀劍ヲ鍛錬スルニ、水ヲ以テ火ヲ滅スルヲ淬ト云フ。
（二）揚ルトハ杓揚シテ瀉下スルコト。

び霍亂の吐利、傷寒後に奔豚とならんとするものに主效がある】(時珍)

逆流水 【主治】【中風、卒厥、頭風、瘧疾、咽喉の諸病に用ゐて痰飲を(三)宣吐せしめる】(時珍)

【發明】 藏器曰く、千里水、東流水の二水はいづれも邪穢を蕩滌するもので、湯藥を煎煮し、鬼神を禁呪するに適當である (四)潢汙行潦すら尙ほ之を王公に薦むべし、況やその靈長なるものをやである。(五)本經に『東流水は雲母に畏れらる』とあつて、雲母を錬るにこれを用うれば他の諸水を用ゐたと同じくない。そこに特異な點が認められる。思邈曰く、(六)江水は流泉が長い流域を勢に順つて海に流入するもので、逆に上へは流れないものだから、これを用ゐて頭の病を治すれば必ず病を下に歸する。故に五勞七傷、羸弱の病を治する藥を煎じるには、(七)陳蘆と勞水とを用うるをよしとする。それは、水は強からぬ點を、火は盛ならぬ點を取るのである。江水の無い地方では、千里東流水、卽ち(八)涇水、(九)渭水などの如き流れの水を代用する。時珍曰く、勞水とは(一〇)揚泛水のことであつて、張仲景は之を甘爛水といつた。流水二斗を大きな器に入れ、杓で千萬遍も高く揚げては注ぎ落すと、ぞろぞ

(三) 宣ハ發揚ノ義。

(四) 蓄水ヲ潢ト曰ヒ、水流レザルヲ汙ト曰フ。左傳隱公三年ノ條ニ出ヅ。

(五) 本經ハ神農本艸經。

(六) 江水ハ大河ノ水。

(七) 陳蘆ハ枯蘆ノ古キモノ。

(八) 涇水トハ涇河ヲイフ。甘肅省化平縣ノ西南大關山ニ源ヲ發シ、東流シテ陝西省ニ入リ、東南ニ向ヒ、長武、邠縣、醴泉、涇陽、高陵ヲ經テ渭水ト合ス。

(九) 渭水トハ渭河ヲイフ。甘肅省渭源縣

ろ泡が沸き立つやうになる、それを取つて藥を煎ずるのである。蓋し水の性はもと鹹であり、體は重いものであるが、之を勞すれば甘く輕くなる。これは腎氣をば助けずして脾胃を益する點を取るのである。虞摶の醫學正傳に『甘爛水は甘、溫にして性柔だから傷寒陰證等の藥を煮るに用ゐ、順流水は性順にして下流するから下焦、腰膝の證を治し、及び大小便を通利するの藥に之を用ゐ、急流水は湍上し峻急なる水で、その性急速にして下達するものだから二便を通ずる藥、風痺の藥にこれを用ゐ、逆流水は洄瀾の水だからその性は逆であつて、倒に上に向ふ、故に痰飮を發吐するの藥に之を用ゐる』といつてある。宗奭曰く、東流水は、その性が順であつて速に膈を通じ關を下す點を取り、倒流水は、その回旋し流上し、上つて下らざる點を取るのである。張從正曰く、昔(二一)小便閟の患者があつて多くの醫師の手當で治癒しなかつたが、それまで服ませた同一の藥を長川急流の水で煎じて與へて見ると、一回飮んで立ろに排尿したといふことだ。故に水に關する撰擇は忽にならぬものである。

附方　新三　【日を瞑し得ぬもの】これは陽氣盛にして陰に入ることを得ず、

ノ西北鳥鼠山ニ源ヲ發シ、東南流シテ陝西ノ境ニ入リ、渭、黑、澇ソノ他ノ諸水及ビ涇河、洛水ヲ合セ、潼關ニ至ッテ黃河ニ入ル。

(二〇)揚泛水ハ水ヲ杓ニ汲ミテハ注ギ又汲ミテハ注ギタルモノ。

(二一)字書ニ、閟ハ閉門ナリトアリ。

（二）效驗ナ知覺スルコト。

陰氣が虚するから目を眠り得ぬのである。治法は、半夏湯を用ゐ、先づ千里以上の流水を八升取り、これを一萬遍揚泛して清めるもの五升を取り、秫米一升、半夏五合を入れ、葦薪火で徐に炊いて十分煮出し、一升までに煮詰めて滓を去り、一日三回、その汁を一小盃づつ飲む。（二）知を以て程度とする。詳細は半夏の條を見よ。（靈樞經）【汗後の奔豚】茯苓桂枝湯——發汗後臍下が悸し、奔豚とならんとするを治す。茯苓一兩、炙甘草二錢半、桂枝三錢、大棗二箇を甘爛水二升で煮て半を減じ、一日二回に服す。（張仲景金匱要略）【服藥過劑】煩悶するには、東流水一二升を飲む。（肘後方）

井泉水（宋嘉祐）

和名 ゐどみづ
英譯名 Well-water

釋名 時珍曰く、井の字は井桁の形容、泉の字は水が穴中から流れる狀態の形容である。

集解 頴曰く、汲みたての井水は病を療じ人を利す。早朝第一番目に汲んだ水を井華水といふ、その功用の極めて廣汎なことは他の諸水の比ではない。凡そ井

水は遠く地脈から涌いて來るものを上とし、近い處の江湖から滲みて來るものはこれに次ぐ。市街地で溝渠に近く、汚水が雜り入るものは(一)鹼になるものだから、これを用ゐるにはよく煎じ滾らして一時停め、鹼の澄むを待つて用ゐねばならぬ。さもなくば氣、味共に惡しく、藥や食物、茶、酒に入れるに不適當である。雨後の濁つた水は、桃杏仁を擂り込み、それを澄して用ゐるがよい。

時珍曰く、凡そ井に(二)黑鉛の底を入れると水が淸くなつて結を散ずる。久しく飲めば疾がなくなる。丹砂を入れて鎭めた井の水は人をして長命せしめる。按ずるに、(三)麻知幾の水解に『九疇が昔靈臺太史を訪ふたとき(四)銅壺の漏水を見て居ると、太史はその水の取扱者を呼んで「この水は已に三回も繰返して用ゐたから水は滑する。隨つて漏が迅い。漏が迅ければ時刻に差を生ずるから新しい水に取換へよ」といはれた。予はそれを聽いて悟るところがあつた。天下の水なるものは之を用ゐれば、火を滅することも同一であり、乾いたものを濡すことも同一であるが、その性は地に從つて變じ、質は物と共に遷るといふ點から見れば、決して同一なものではないのである。故に(五)蜀江で錦を濯へば鮮になり、(六)濟源で楮を烹れば皛になる。

(一)鹼ハ阿爾加里性。

(二)黑鉛、一名石墨。

(三)麻九疇、字知幾、金人、大常博士トナル。天興ノ亂ニ元兵ニ獲ラレ病ンデ卒ス。
(四)銅壺ハ水時計。

(五)蜀江ハ即チ岷江、四川ノ岷山ニ源ヲ發シ、成都ヲ經テ大渡河ニ合ス。
(六)濟源ハ濟水ノ上流、河南濟源縣ノ西方王屋山ニ源ヲ發ス。

(七)南陽ハ河南沁陽縣ノ地。
(八)遼東ハ今ノ奉天ノ東南境、遼水以東ヲイフ。
(九)晉ハ今ノ山西省地方ヲ指ス。
(一〇)戎ハ戎州ヲ指スカ、戎州ハ今ノ山東曹縣ノ一帶。別錄石硫黄ノ條ニ曰ク、石硫黄ハ東海牧牛ノ山谷中ニ生ズト。或ハソノ地ヲイフカ。
(一一)楊子トハ楊子江ヲイフカ。荈ハ茶ノ別名。
(一二)淮水、一本ニ淮菜ニ作ル。淮水トハ淮河ヲイフ。
(一三)鹵ハ鹹氣ヲ含ム土壤、滄鹵トハ滄州ノ鹵土、滄州ハ今ノ直隸省天津府ノ附近。
(一四)阿井ハ山東省陽穀縣北東ノ地。
(一五)藻帶ハ海藻、海

(七)南陽の潭水は菊を充分に繁らせ、その地方の人人も長命である。(八)遼東の澗水は葠の性分に通じ、その地方の人人は髮が多い。山に礬石を產する(九)晉の地方の泉は疽を癒す。(一〇)戎の麓には硫黄が埋在するので、そこの湯は癘を浴するによい。(一一)楊子は荈に適し、(一二)淮水は醪に適し、(一三)滄鹵は鹽によく、(一四)阿井は膠によく、垢を澡へば以て汚れ、茂田の水は以て苦し、癭は(一五)藻帶の波で消え、痰は半夏の洳に破れ、氷水を嚥めば霍亂が息み、流水を飲めば(一六)癃閟が通じ、雪水で目を洗へば赤が退き、鹹水で肌を濯へば瘡が乾く。菜は虀となり、鐵は漿となり、麴は酒となり、蘗は酢となるのであつて。千派萬種、言葉ではいひ盡せない。井の水といへば一種のものに決つて居るやうに思はれるが、それさへ數種の別があるのだから、況やその他のものはいふに及ばぬ。井水では、反酌して傾くるを倒流といひ、甃を出てまだ放れぬを無根といひ、時に拘らず汲みたてのものを新汲といひ、夜明け方眞先に汲んだものを井華といふ。かやうにただ一の井の水でさへその功用は同じくない。烹煮の作用を加へて藥の力を發揮させんとする以上、水だけを撰擇の必要なしとする理由が何處にあらうか。昔(一七)小溲閟の患者に對し、多くの醫師が治癒し得

帶ノ併稱ニシテ、海藻ノコト。
(一六)癃閉ハ小便閉。
(一七)小溲閉ハ小便閉。
(一八)馬刀毒ハ瘰癧ノ一種。

なかつたとき、張子和が水を易へて長川の急流で今までの藥を煎じて用ゐたところ、一回飮んだだけで立ろに排尿したといふ。これは正に靈樞經の不瞑を治する半夏湯に、千里流水を用うるといふ意味と同一だ。後世水を用うる者は、子和の用意、手際を以て藥を制する心得が必要であると思ふ。ここに感ずるところあつて水解を作る』とある。

井華水　[氣味]　【甘し、平にして毒なし】　[主治]　【酒後の熱痢。日中の膚翳を洗ふ。人が大いに驚いて、九竅、四肢、指の股等あらゆる所から出血するには顏に噀く。硃砂に和して服すれば人の顏色を好くし、心臟を鎭め、精神を安にし、口臭を治す。諸種の藥石を錬るに適する。酒、醋に投ずれば腐敗しない】(嘉祐)【補陰の藥を煎ずるに適する】(虞摶)【一切の痰火、氣血の藥を煎ずるに適する】(時珍)

新汲水　[主治]　【消渴、反胃、熱痢、熱淋、小便の赤澀に、邪を却け、中を調へ、熱氣を下す。いづれもこれを飮むがよし。癰腫を射て散ぜしめる。漆瘡を洗ふ。墜損の腸出を治するには、冷水をその身體面部に噴けば腸が自ら入る。また閉口椒の毒を解し、魚骨哽を下す】(嘉祐)【(一八)馬刀毒を解す】(之才)【砒石、烏喙、燒酒、

（一九）天地自然ノ眞氣。

（二〇）性慾ノ旺盛ニナルコト。

（二一）壽命ノ伸ビルコト。

煤炭の毒を解し、熱悶、昏瞀、煩渇を治す』（時珍）

【發明】禹錫曰く、凡そ水を飲んで疾を療するには新汲の清泉を用ゐる。停汚、濁暖の水を用ゐてはならぬ。ただ效が無いばかりではなく、人體を損ふものである。虞摶曰く、新汲、井華水は（一九）天一の眞氣が水面に浮ぶを取るので、これを用ゐて補陰の劑を煎じ、また丹を錬り、茗を煮るのである。性、味は雪水と同じである。

時珍曰く、井泉は大地の脈であつて、人間の經血はこれに象るものである。必ず土厚く、水深く、源遠くして質の潔きものを取つて食用にするがよいのである。易に『井泥は食せず。井冽なる寒泉を食す』とあるがこの意味である。人間は地上に生産し棲息するもので、その天稟の資質は山川の氣と相互に流通するものだから、美、惡や夭、壽もまたそれに深い關係がある。金石、草木さへ尚ほ水土の性に隨ふのだから、まして萬物の靈たるものは更に深刻な關係があるべき道理であつて、『（二〇）貪淫に泉あり、（二一）仙壽に井あり』とある往昔の書の記載は必ず我を欺くものではない。淮南子には『土地は各〻類を以て人を生ずる。この故に山氣は男多く、澤

氣は女多く、水氣は(二二)瘖多く、風氣は聾多く、林氣は癃多く、木氣は傴多く、岸氣は(二三)瘇多く、石氣は力多く、險氣は癭多く、暑氣は夭多く、寒氣は壽多く、谷氣は痺多く、丘氣は狂多く、(二四)衍氣は仁多く、陵氣は貪多く、堅土の人は剛く、弱土の人は脆く、(二五)壚土の人は大に、沙土の人は細に、(二六)息土の人は美しく、(二七)耗土の人は醜く、輕土には快利なるが多く、重土には遲鈍なるが多く、清水のものは音が小さく、濁水のものは音が大きく、湍水の地の人は輕く、遲水の地の人は重い。それは皆その類に應ずるのだ』といつてある。また(二八)河圖括地象には『九州それぞれ(二九)題を殊にし、水泉の剛柔各〻異つて居て、(三〇)青州は角と徵の發音が會し、その氣質が慓輕で人の聲が急であり、その泉は酸にして苦い。(三一)梁州は商と徵の發音が近く、その氣質が剛勇で人の聲が塞り、その泉は苦くして辛い。(三二)兗州、(三三)豫州は宮と徵の發音が會し、その氣質が平靜で人の聲が端しく、その泉は甘くして苦い。(三四)雍州、(三五)冀州は商と羽の發音が合し、その氣質は駃烈で人の聲が捷く、その泉は鹹くして辛い』とある。この二説に依つても、人は水土に賴つて以て生を養ふものであることが觀察される。その撰擇は愼重を要するわけである。

(二二)瘖ハ啞ニ同ジ。
(二三)瘇ハ脛ノ氣腫ヲ云ノ。
(二四)衍ハ高平ニシテ美ナル土地ヲ云フ。
(二五)壚ハ黑剛土(くろぼこ)ヲ云フ。
(二六)息土ハ肥エタ土、土ノ能ク成長スルモノト云フ。
(二七)耗土ハ瘠土、疎薄ノ地ヲ云フ。
(二八)此書漢代ノ作、博物志ニ引用セラル。
(二九)題ハ品題ノ意ニテ特徵アルヲ云フ。
(三〇)青州ハ今ノ山東省膠東道ト濟南道ノ東境、及ビ奉天省遼河以東ノ地ヲ指ス。
(三一)梁州ハ今ノ陝西省ノ漢中道、及ビ四川省以西ノ地ヲ指ス。
(三二)兗州ハ今ノ山東省ノ舊東昌府、及ビ兗州、濟南、青州ノ西北境、直隷省ノ舊大

名府、及ビ正定、河間ノ東南境ノ地ヲ指ス。
(三三)豫州ハ今ノ河南省黄河以南一帶ノ地ヲ指ス。
(三四)雍州ハ今ノ陝西、甘肅二省、及ビソノ西北一帶ノ地ヲ指ス。
(三五)冀州ハ今ノ直隷、山西二省、及ビ河南省ノ黄河以北、奉天省ノ遼河以西一帶ノ地ヲ指ス。
(三六)後漢書百二十卷ノ內、十本紀八十列傳ハ六朝ノ宋ノ范曄ノ撰、八志凡三十卷ハ晋ノ司馬彪ノ撰ナリ。
(三七)寒熱注ハ寒熱往來年ヲ連ネ、時ニ暫ク瘥エテマタ發ルモノ。
(三八)南史八十卷、唐ノ李延壽ノ撰。

○時珍曰く、按ずるに、(三六)後漢書に『ある婦人が世にいふ(三七)寒熱注病といふ病に幾年か罹つて居た。華佗がそれに治療を加へたのであるが、十一月中、患者を石槽中に坐らせ、早朝、冷水を百回灌がせた。七十回まで灌ぐと、患者は冷え顫へて死にはせぬかと思はれたので、灌いでゐた者が非常に懼れて止めようとすると、華佗は許さず、尚ほ續けて八十回まで灌がせた。すると熱氣が蒸出し始め、囂囂然として二三尺に立上る。そのまゝ滿百回まで灌がせて、そこで火を燃して牀を溫め、夜具を厚く重ねて患者を安臥させた。しばらくして冷汗が出るので、それに粉を撲つてやると、病はそれで癒えて了つた』とある。また(三八)南史に『將軍房伯玉は、五石散を十劑ほど服して新に冷疾に罹り、眞夏でも衣類を重ねて着るといふ有樣であつた。後に嗣伯がそれを診て「これは伏熱の病といふもので、水で發せねばならぬのだが、それは冬月でなければいけない」といつた。そして十一月、冰雪の最も盛な時に入つて、伯玉を衣類を脫いで石の上に坐らせ、新汲の冷水を取つて頭から澆ぎかけた。二十斛まで澆ぐと遂に口噤し、氣絶して了つたので、家人は驚いて啼き叫び、止めて欲いと縋つたが、嗣伯は嚴として許さない。諫める者をば引捕へて鞭ち、更に冷

水を百斛まで澆ぎ盡した。すると伯玉は始めて動き出し、背上から彭彭と氣を出して忽ち起きて坐り直し『熱くて耐らぬ。冷い飲が欲い』といひ出した。そこで嗣伯が水一升を與へて飲ませると、伯玉の疾はそれで癒えて了ひ、爾來常に熱を發して冬季でも單衣を着るやうになり、身體は更に肥壯になつた』とある。時珍竊に謂ふに、この二患者の病はいづれも伏熱の證である。素問に所謂『(三九)諸禁鼓慄は皆火に屬す、治法は、火鬱するときは之を發す』とあるが卽ちかかる場合をいふのである。二名醫が冬の日の早朝、澆ぐに冷水を以てしたといふは、冬至後は陽氣が内に在るからであり、早朝はまた陽氣の方に盛なる時であるからだ。之を折くに寒を以てして、熱氣をして鬱過せしめ、激發せしめ、汗解せしめたものである。乃ち物極らざれば反せずといふ。これはやはり發するの意をいふのであつて、素問に所謂『正者は正治し、反者は反治す』といふことで、逆にして之に從ひ、從つて之を逆にし、その趨くべきところの道を疏通して、氣を調和せしむるものである。春は陽氣が已に洩れ、夏、秋は陰氣が内に在る。必ず十一月冬至以後に始めて之を行ふが最も適當な時期である。二名醫の手際は誠に神術といふてよい。

(三九)諸禁鼓慄ハ諸ノ噤瘈戰慄スルコト。素問ノ至眞要大論ニ出ヅ。

(四〇)顖ハヒヨムケ。一名チドリ。

(四一)瘂門ハ腦後ノ穴名。

(四二)蒙汗、覺睡藥。

附方　舊八、新三十一。【九竅の出血】方は主治の部を見よ。【衄血の止まぬもの】葉氏の方では、出血する鼻孔の左右に隨ひ、新汲水でその方の足を洗へば直に止る。屢、效があつた。○ある方では、冷水を顏面に噀く。○ある方では、紙を冷水に浸して(四〇)顖上に貼り、熨斗で熨すれば立ろに止む。○ある方では、冷水一瓶を頂上、及び(四一)瘂門の上に淋射し、或は濕紙を貼る。【金瘡の出血】止らぬには、冷水に浸せば止る。(延壽方)【犬咬の出血】水で洗ひ、血が止つたならば綿で裹む。(千金方)【蠍蠆の螫傷】水で故布を浸して搨し、暖まれば取換へる。(千金方)【馬汗の瘡に入つたもの】また馬毛が瘡に入れば腫れる。腹に入れば人を殺す。これには頻に水を換へて冷水に浸し、好き酒を飲めば立ろに瘥える。(千金方)【魚骨の哽咽】水一盃を取り、口を合せて水に向け、口を張つて水氣を取れば哽は自ら下るものである。(肘後方)【砒石の中毒】新汲の井水を多く飲んで吐利するがよし。(集簡方)【烏喙の中毒】(同上)【(四二)蒙汗の中毒】冷水を飲めば安全である。(濟急方)【煤炭の中毒】忽ち昏倒するものは、手當を加へねば死亡する。これには急に淸水を口に灌ぐ。(唐瑤經驗方)【服薬の過劑】卒に嘔して已まぬには、新汲水一升を飲む。(肘後方)【燒酒の

醉死】急に新汲水でその髮を浸し、外には故帛を浸濕してその胸膈に貼り、甦るまで少量づつ絶えず口に灌ぎ込む。（瀕湖集簡方）【飮酒齒痛】井水で頻に含漱する。（直指方）【破傷風病】（四三）火命の既婚婦人に無根水を汲ませ、その水一盞に百草霜を入れて調へ、捏つて餅にし、それを患部へ置いて三五回取換へれば神の如き效がある。これは蔣亞香の方である。（談野翁試驗方）【墜損の腸出】方は主治の部を見よ。【眼睛の突出】一二寸突出したものには、新汲水で睛中を灌漬し、數〻取換へれば自ら入る。（梅師方）【時行火眼】患者が毎日井の中を視ながら三遍その周圍を廻ればよく火氣を洩す。（集玄方）【心悶して汗の出るもの】殆ど意識を失へるには、新汲水に蜜を和して飮めば甚だ效がある。（千金方）【嘔吐陽厥】卒死するものには、新汲水三升を飮ますれば佳し。（千金方）【霍亂吐瀉】熱い物を食つてはならぬ。冷水一盌を飮み、一盌の水で兩足を浸せば立ろに止る。（救急良方）【瘟疫の厭禳】臘の日の朝と大晦日の夜、小豆、川椒各四十九粒を、人に知られぬやうに井戸に投ずればよく瘟疫を却ける。○また他の法では、元旦に大麻子二十一粒を井戸に投ずる。【口氣の臭惡】元旦に井華水を含んで數回廁中に吐き棄つれば瘥える。（肘後方）【心腹の冷痛】男子の

（四三）火命ハ火運ノコト。

病には婦人に水一盃を汲ませて飲み、婦人の病には男子に水一盃を汲ませて飲む。（肘後方）【寒熱注病】方は發明の條項を見よ。【火病惡寒】方は發明の條項を見よ。【丁毒・疽瘡】凡そ手指その他に瘡が生じて痒くなり、身熱し、惡寒し、或は麻木するならば、それは極毒の瘡である。それには急に針で刺し破つて惡血を排出し、血が出盡したとき、口に凉水を噙んでそれを吮ひ、水が溫れば再び換へて吮ふ。それで痛痒がすべて住めば癒える。これは誠に妙法である。（保壽堂方）【婦人の臨產】井華水半升を服すれば暈を發せぬ。（千金方）【初生兒の不啼】冷水を灌ぎ、外をば葱白莖で細かに鞭てば啼き出すものである。（全幼心鑑）

節氣水（綱目）

和名　季節の水・ときのみづ
英譯名　Seasonal water

【集解】時珍曰く、一年は二十四節であつて、一節は半月間を支配する。水の氣味が之に隨つて變遷するのは、天地の氣候が相感するのである。彊域の如何に拘るものでない。月令通纂に、正月初一日から十二日までを、毎一日が各〻一个月を主るものとして、毎朝瓦瓶で水を取つて、その輕重を秤つて視ると、重かつた日の數に

當る月は雨が多く、輕ければ雨が少いとある。これで觀ると一日の內でもなほ同じくないのだから一个月全體としては尙更のことである。

立春、淸明の二節に貯へた水を神水といふ　主治　【諸風、脾、胃の虛損に用ゐる種種の丹、丸、散藥、及び藥酒はこれに浸して造るがよし。久しく保存して腐敗せぬ】

寒露、冬至、小寒、大寒の四節、及び臘日の水　主治　【五臟の滋補、及び痰火、積聚、蠱毒の諸丹、丸藥はこれに浸し造るがよし。また藥酒を煮釀すれば、その功果は雪水と同樣である】

立秋の日の五更の井華水　主治　【年長者も幼者も、各一盃を飮めばよく瘧痢、百病を却ける】

重午の日の午の時の水　主治　【瘧痢、瘡瘍、金瘡、百蟲、蠱毒の諸丹、丸藥を造るによし】

小滿、芒種、白露の三節の內の水　主治　【いづれも毒あり。藥を造つても、酒、醋を釀しても、一樣に食物にこれが入れば皆腐敗し易い。人が之を飮めば、や

はり脾、胃の疾を生ずる】（並に時珍）

醴　泉（拾　遺）

和　名　靈泉・神水・さけのいづみ
英譯名　A divine fountain, Sweet-water fountain

釋名　**甘泉**　時珍曰く、醴は(一)薄酒である。泉の味が酒のやうだといふところから名けたもので、涌出地が一定して居るのではない。王者の徳が淵泉にまで及んで時代が昇平であれば、何處にでも醴泉が涌き出て老を養ふのである。瑞應圖に『醴泉は井の精である。味甘くして泉の如く、流の及ぶところ草木皆茂り、これを飲めば人をして多壽ならしむ』とあり、(二)東觀記に『光武帝の中元元年に醴泉が出た。京師の人がこれを飲んだところ、痼疾ある者は皆癒えた』とある。

氣味　【甘し、平にして毒なし】　**主治**　【心腹痛、(三)疰忤、鬼氣、邪穢の屬の病には、いづれも空腹にしてその泉出の所へ往つて飲む。また熱を止め、消渇、及び反胃、霍亂を止める上藥である。就中新汲のものが佳い】（藏器）

玉　井　水（拾　遺）

和　名　玉のある山から出る水
英譯名　Spring in the gem locality

(一)薄酒ハ味ノ淡ナル酒。

(二)東觀記即チ東觀漢紀ハ後漢ノ明帝ヨリ靈帝ニ至ル間ニ修録セル一百四十三巻ノ書ナリ、今二十四巻僅存ス。

(三)疰忤、物ニ驚キ急ニ心痛スルヤマヒ。

【集解】○○藏器曰く、諸種の玉のある處の山谷から涌く水泉は皆それである。山に玉があれば草木が潤ひ、身に玉を佩れば毛髪が黒くなる。玉は重寶であり、水は靈長だから、生を延べるの傾きと力を有つて居る。今の人で山に近く居るものの長命なのは、玉石の津液の功があるからではあるまいか。(一)太華山にある玉には水が溜つて滴る。その地方の人はそれを取つて飲むが、多くは長命である。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】　【主治】【久しく服すれば神仙となる。人間の身體を潤はせ、毛髪を白くならしめない】(藏器)

乳穴水（拾遺）

和名　鍾乳洞の中の水
英譯名　Water in the stalactite grotto

【集解】○○藏器曰く、(一)乳穴の附近から流出する泉であつて、多くはこれを取つて飲とする。又、酒を釀して用ゐれば大に益あるものである。その水は濃くして秤つて見ると他の水よりも重い。煎じると上に(二)鹽花が出るものが眞の(三)乳液である。

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】　【主治】【久しく服すれば肥健になり、食物

(一)太華山ハ五岳ノ一、西岳ト稱ス。今ノ陝西省華陰縣ニ在リ、ソノ西ニ少華山アリ、故ニ此山ヲ太華トイフ。

(一)乳穴ハ鍾乳洞。

(二)鹽花ハ鹽粒ナリ。
(三)乳液ハ鍾乳水。

の消化をよくし、身體が潤ひ、老衰せぬ。鍾乳と功力が同一である】（藏器）

温　湯（拾　遺）

和　名　温泉（をんせん）
英譯名　Hot-spring

【釋　名】温泉（綱目）沸泉　藏器曰く、地下に硫黄があるために水が熱するので、その水に何となく硫黄の臭がある。硫黄は諸瘡に主效のあるものだから、その水もやはり同様なわけであらう。その熱する處に當てれば、豬、羊を(一)燖ることも、雞子を熟することも出來る。時珍曰く、温泉の涌出する處は甚だ多い。按ずるに(二)胡仔の漁隱叢話に「温泉は多く硫黄の臭があつて、之に浴すれば人の肌膚を厚くするものだ。(三)新安の(四)黄山の温泉だけは硃砂泉で、春になるとその水の色が微紅色になり、茗を煮るによい。(五)長安の(六)驪山は礬石泉で甚しく臭くはない。硃砂泉は紅色でも熱くないが、これは雄黄に因るものかも知れぬ。また砒石のある處にも湯泉が涌くが、これは有毒だから浴してはならぬ」とある。

【氣　味】【辛し、熱にして微毒あり】

【主　治】【諸風の筋骨攣縮、及び(七)肌皮の頑痺、手足の不遂、眉髮なきもの、疥癬諸疾の皮膚、骨節に在るものは入浴する。

(一)燖ハ、ニルコト。
(二)胡仔、宋代ノ人。
(三)新安ハ漢末ノ新都郡ノ一地方、晉ニ初メテ新安郡ヲ置ク。故城ハ今ノ浙江省淳安縣ノ西ニ在リ。隋ノ時治ヲ休寧ニ移シ、更ニ歙ニ移ス。今ハ休寧、歙共ニ安徽省ニ屬ス。此ニ云フ新安ハ即チソノ歙縣ノ地ヲ指ス。
(四)黄山ハ今ノ安徽省歙縣ノ西北ニ在リ。即チ古ノ新安ノ地也。
(五)長安ハ漢時代ノ

浴し訖(をは)ると大に虛憊(きよはい)するものだから、病のそれぞれに隨つて藥を與へ、また飲食の補養を爲すがよし。有病者以外は輕輕(かるがる)しく入つてはならぬ】(藏器)

【發明】　頴曰く、(八)廬山(ろさん)に溫泉があつて、方士(はうし)が往往疥癬、風癩、楊梅瘡の患者をして飽食(はうしよく)してその池に浴せしめて居るが、汗がよく出るまで久しく浴せしめると、旬日にして自ら癒える。

碧海水（拾遺）

和名　しほみづ・うみのみづ
英譯名　Saline water, Marine water

【集解】　藏器曰く、(一)東方朔(とうはうさく)の十洲記(じつしうき)に『夜間海中に行つて撥(はつ)すると火の星があるのは鹹水である。色が碧なところから碧海(へきかい)といふ』とある。時珍曰く、海は百川の會するところで、天地は四方皆海水が相連り通じ、大地はその中に在るのである。その味鹹く、その色は黑い。五行中の水行の正體である。

【氣味】　【鹹し、小溫にして小毒あり】　【主治】　【煮て浴すれば風瘙、疥癬を去り、一合を飲めば宿食を吐下する。(二)臚脹(ろちやう)に用ゐる】(藏器)

故都、今ノ陝西省長安縣ノ北ニ在リ。太平寰宇記ニ曰ク、長安トハ蓋シ古ノ郷聚ノ名ナリト。古ハ今ノ陝西省中部一帶ヲ長安ト稱セルガ如シ。

(六)驪山ハ今ノ陝西省臨潼縣ノ東南ニアリ。唐ノ玄宗此ニ溫泉宮ヲ置キ楊妃ト共ニ遊ブ。後ニ華清宮ト改稱ス。

(七)膱、肌、音通ズ。

(八)廬山ハ今ノ江西省星子縣ノ西北、九江縣ノ南ニアリ。江西ノ名山ナリ。

(一)東方朔、漢ノ武帝ノ時ノ人。

(二)腸前ヲ臚ト曰フ。

鹽膽水（拾遺）　和名 にがり　英譯名 Bittern

【釋名】鹵水　藏器曰く、これは鹽が初め槽中に熟して瀝下する黒汁である。時珍曰く、鹽下の瀝水は味が苦く、食するに堪へない。現在ではこの水を用ゐて豆腐を凝らせる。獨孤滔は『鹽膽で(一)四黄を煮て物を縮ぐ』といつて居る。

【氣味】【鹹く苦し、大毒あり】【主治】【(二)䘌蝕、疥癬、瘻疾、蟲咬、及び馬、牛が蟲に蝕せられ、その毒蟲が肉に入つて繁殖するものに用ゐる。六畜は一合飲めばその場に死亡し、人間も同様である。凡そ瘡に血あるものは之を塗つてはならぬ】（藏器）【痰厥で人事不省なるには、これを灌ぎ込んで吐かすがよし】（時珍）

阿井泉（綱目）　和名 あせいのみづ　英譯名 Well water in the Province A.

【氣味】【甘く鹹し、平にして毒なし】【主治】膈に下り、痰を疏し、吐を止める】（時珍）

【發明】時珍曰く、阿井は今の兗州陽穀縣、卽ち古の東阿縣の地に在る。(一)

(一)四黄、獨孤滔ノ丹房鏡源ニ、五黄丸子ノ製方アリ。雄黄、雌黄、砒黄、硫黄、黄礬ヲ用フ。四黄ハ此中ノ黄礬ヲ除キシモノナラン。

(二)䘌蝕ハ腋下、陰部等ノ膿瘡。

沈括の筆談に『古説に(二)濟水は地下に伏流するといふが、現今でも(三)歷下の地方では地さへ掘ればその下に流水がある。東阿もやはり濟水の通過して居る處と見える。その井水を取つて煮た膠を阿膠といひ、その性は下に趨き、清くして重い。これを入れて濁水を攪き廻せば清くなる。故に淤濁、及び逆上の痰を治するのだ。また靑州の范公泉も通過する濟水から出るもので、その水で(四)白丸子を造れば膈を利し、痰を化す』とあり、管子には『(五)齊の水はその泉靑白、その人堅勁、疥瘙あるもの寡く、終に(六)痟醒無し』とある。かやうに水の性は同じくない。陸羽は茶を烹てさへ天下の水性の美惡を辨別したといふ。藥を烹る醫者が却てこれを辨別することを知らぬやうでは、誠に怪しからぬことではあるまいか。

山岩泉水（拾遺）

和名　いはしみづ
英譯名　A spring gushing out between rocks

釋名　時珍曰く、これは山岩、土石の間から泉となつて流出し、溪澗となる水である。爾雅に『正しく出るを檻泉といひ、懸つて涌き落つるを沃泉といひ、逆に噴出するを氿泉といふ』とある。その泉源の遠くして清冷なるもの、或は山に玉石

(一)沈括、字ハ存中、宋ノ神宗ノ時ノ人。
(二)濟水ハ亦沇水ト稱ス。河南省濟源縣ノ西、王屋山ニ源ヲ發シ、東南流シテ黄河ニ入ル。
(三)歷下ハ歷山下ノ地名。今ノ山東省歷城縣ノ西ニ故城趾存ス。
(四)白丸子、婦人良方ニ出ヅ。
(五)齊ハ春秋、戰國時代ノ一强國ナリ。桓公ノ時管仲相トナル。管子ハ即チ仲ガ書トイフ。當時ノ齊國ハ今ノ山東省一帶ノ地ナリ。
(六)痟醒、フツカヨヒ。

(一)潯陽ハ古ノ潯陽郡ノ地、今ノ江西省九江縣ナリ。

や美しき草木のある處に涌くものが良く、その山に黑土、毒石、惡草のある處に涌くものは用ゐてはならぬ。陸羽は『凡そ瀑涌瀨湍の水を飲めば頸疾が起る』といつてある。○頴曰く、嘗て(一)潯陽に居たとき、ある日城中で突然數百頭の馬が斃死した。訊いて見ると、數日前に雨が降つて、山谷中の蛇蟲の毒を洗ひ出した、その水を馬が飲んで死んだのだといふことであつた。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【霍亂、煩悶、嘔吐、腹空、轉筋が腹に入るの恐あるには、これを多く服するがよし。名けて洗腸といふ。腹を空にしてはならぬので、空になつたときは更に服する。一般人はこれを危險視するが、嘗て實驗上有效であつたのだ。ただ身體が冷え力弱きものには臟寒を起すを防がねばならぬから、充分注意して適當を得なければならぬ】(藏器)

古塚中水(拾遺)

和名　ふるづかのたまりみづ
英譯名　Water in an old grave

【主治】【有毒。人を殺す。諸瘡を洗へば皆癒える】(藏器)

糧罌中水（拾遺）

和名　古墳の食器の中に溜つてゐる水
英譯名　Water in the pot of an old grave

【集解】藏器曰く、乃ち古塚中にある食罌中の水である。古くして清澄なるを取るがよし。（一）古文に『蕉は餘節を留め、（二）瓜は遺犀を表す』とある。その意味は、節、犀の二物は腐爛せぬが、その他は皆水になることをいつたものである。

【氣味】【辛し、平にして小毒あり】【主治】【鬼氣、中惡、疰忤、心腹痛、惡夢、鬼神。蚘蟲を殺すには一合を進める。心悶を起すから多く飲んではならぬ。また眼を洗へば鬼を見るといふが、それはまだ實驗したことはない】（藏器）

【附方】新一。【噎疾】古塚内の（三）罐罌中の水をただ取つて飲めば癒える。極めて神效がある。（壽域方）

赤龍浴水（拾遺）

和名　あかへびの居るさはの水
英譯名　Water of a marsh in which red snake is living

【集解】藏器曰く、これは澤間の小泉に赤蛇が居るものをいふので、もしそれを見たならば、一雨降つてからその水を取つて服するのである。

（一）古文トハ惠運ガ祭古冢文ヲ指ス。
（二）遺犀トハ瓜ノ種子ノコト。
（三）食物本草ニハ罐ヲ食ニ作ル。

【主治】【少毒あり、寝を治し、結氣、諸瘕、惡蟲が腹に入りたるもの、及び咬まれて瘡を生じたものに主效がある】（藏器）

車轍中水（綱目）

和名　車のわだちの中の水
英譯名　Water in wheel-ruts

【釋名】時珍曰く、轍といふは車の通つた跡である。

【主治】【(一)瘧瘍風には、五月五日に取つて洗ふが甚だよし。(二)牛蹄中の水もまたよし】（時珍）

地漿（別錄下品）

和名　黄土を攪きまはした後に澄んだ水
英譯名　Settled water after stirring loess

【釋名】土漿　弘景曰く、これは黄土の地に深さ三尺の穴を掘り、新汲水を沃ぎ入れて攪濁し、少頃して清んだものを取つて用うるのである。故に地漿ともいひ、また土漿ともいふ。

【氣味】【甘し、寒にして毒なし】【主治】【中毒煩悶を解す】（別錄）【一切の魚肉、果菜、藥物、諸菌の毒を解し、霍亂、及び(一)中暍卒死者を療す。一升を飲む

(一)瘧瘍ハ汗斑ナリ。
(二)食物本草ニハ牛蹄ノ次ニ跡字アリ。

(一)中暍ハ日射病。

が妙である】（時珍）

【發明】弘景曰く、楓の木に出た菌を食へば止めどなく人を笑はせるが、この水を飲めば直ちに解す。時珍曰く、按ずるに、(一)羅天益の衛生寶鑑に『中暑霍亂は暑熱の内傷で、(二)七神迷亂するより發するものであつて、陰氣が靜なれば神が藏へられるが、躁なるときは消亡するの理である。これは至陰の氣を用ゐる以外では癒えない。坤は地であり、地は陰に屬するから、土は靜順といふ。地漿は墻陰の坎中で作るから、陰中の陰であつて、よく陽中の陽を瀉するのだ』とある。

【附方】舊一、新六。【熱渇煩悶】地漿一盞を飲む。（聖惠方）【乾霍亂病】吐かず下らず、脹痛して死せんとするには、地漿三五盞を服すれば癒える。甚だ米湯を忌む。（千金方）【服藥過劑】悶亂するには、地漿を飲む。（肘後方）【閉口椒毒】白沫を吐き、身體冷えて死せんとするには、地漿を飲む。（張仲景金匱方）【野芋の中毒】土漿を飲む。（集簡方）【黃鱨魚の毒】此の魚を食つて荊芥を服するとよく害を受けるが、地漿を服すれば解す。（集簡方）【砒霜の中毒】地漿で(四)鉛粉を調へて服すれば直ちに解す。（集玄方）

(一)羅天益、元代ノ人。
(二)道家ニ、人身ニ三魂七魄アルノ説アリ。七神ハ七魄ノコトナルベシ。
(四)鉛粉ハオシロイ。

熱湯（宋嘉祐）

和名　熱湯（にえゆ）
英譯名　Boiling water, Hot water

【釋名】百沸湯（綱目）麻沸湯（仲景）太和湯

【氣味】【甘し、平にして毒なし】時珍曰く、按ずるに、汪穎は『熱湯は百沸して用ゐるが佳いので、若し半沸のものを飲めば、反つて元氣を傷り、脹となる』といつて居る。また或ものは、熱湯で口を漱げば、齒を損じ、目を病む。また熱湯で洗浴してはならぬ。凍えて僵れたものを熱湯で濯つてはならぬ。よく指の爪が脱けるものである。銅瓶で煎た湯を服すれば聲を損ずるともいふ。

【主治】【陽氣を助け經絡を行らす】（宗奭）【霍亂轉筋の腹に入りたるもの、及び客忤で死んだものを熨す】（嘉祐）

【發明】宗奭曰く、熱湯はよく經絡を通ずる。風冷氣痺の患者は、脚を湯に(一)浸し、段段膝上まで浸してから、寢具を厚くして全身の汗を取る。かくして別に藥を用ゐるのであるが、それもその湯の氣を假りて行らすのである。四時の暴泄痢で、四肢が冷え、臍腹の疼むには、深湯の中に坐して腹の上まで漬け、(二)頻に之を摩す

(一)浸字ヲ淋ニ作レドモ、大觀本草ニ浸トアリ。今之ニ從フ。
(二)頻頻作之ノ作字食物本草ニハ摩ニ作ル。今之ニ從フ。

れば陽を生ずるもので、諸藥を用ゐてもこれ以上の效力を發生するものはない。虚寒のものを湯の中に坐らすると、始は必ず顫を發するものだから、常に別人に見張らして注意する必要がある。張從正曰く、凡ゝ傷寒、傷風、傷食、傷酒の初期に藥の無かつた場合には、直ちに太和湯一盌ほどを飮ませる。或は酸虀汁でもよし、そして手で肚を揉む。恍惚となるやうであれば、更に再び飮ませて揉み、それ以上腹に飮む餘地がなくなつた時(三)探吐し、汗が出ればそれでよし。時珍曰く、張仲景が、心下痞で之を按ずるに濡ありて、(四)關上の脈浮なるを治するに、大黄黄連瀉心湯を麻沸湯で煎じたといふは、その氣薄くして虚熱を洩すに適する點を取つたものであらう。(五)朱眞人の靈驗篇には『風疾の數年に亘る患者があつたので、坑を掘つてその内に坐らせ、衣服を解いて熱湯を淋ぎ、暫くして篭を以てこれを蓋ふたところ、汗が出て癒えた。これも亦經絡を通ずるの法である』といつてある。時珍は常にこの意を推し、寒濕を治するには艾を加へて湯に煎じ、風虚を治するには(六)五枝、或は五加を加へ煎湯で淋洗を施して居るが、效力の顯れが更に一層速なるを認めて居る。

(三) 探吐、咽喉ヲ刺擊シテ吐ヲ催サシムルコト。
(四) 關ハ手首ノ寸ト尺トノ中間ノ部位。
(五) 朱眞人ハ孫眞人ノ誤。
(六) 丹溪心法脚氣門ニ五枝湯アリ。桃、柳、椿、桑、槐ノ五枝ヲ用ウ。

附方　舊四、新九。【傷寒の初期】熱湯を飲み、吐くまで飲んで止める。（陳藏器本草）【風寒を感ぜる初期】頭痛、憎寒するには、鍋を赤く燒いてその中に七盌の水を投じ、其水を他に移して鍋を再び燒き、前の水を再び投じて七回繰返す。これを沸湯と名ける。それを熱きまま一盌飲み、夜具を頭から被つて汗を取れば神效がある。（傷寒蘊要）【忤惡の卒死】銅器或は瓦器に熱湯を入れ、衣服の上から腹の上を熨し、冷えればまた取換へる。立ろに效のあるものだ。（陳藏器本草）【霍亂轉筋】器に湯を入れて熨し、それからその器を蹋ませて足の底まで熱を徹らせる。冷えれば取換へる。（嘉祐本草）【暑卒の暍死】湯を徐徐に口に灌ぎ、少し頭を擧げて腹へ湯の入るやうにすれば甦る。（千金方）【火眼の赤爛】緊く目を閉ぢさせて熱湯を沃ぎ、湯が冷えれば止める。頻に沃げば安になるものだ。妙は目を閉づるところに在る。或は薄荷、防風、荊芥を加へて湯に煎じ、それを沃ぐも妙である。（趙原陽濟急方）【金瘡の出血】止らぬには、故布を熱湯に浸して之を罨ふ。（延壽書）【代指の腫痛】麻沸湯に漬ければ安になる。（千金方）【癰腫の初期】熱湯を頻に沃げば散る。（集簡方）【凍瘡の瘥えぬもの】熱湯で洗ふ。（陳藏器）【馬汗の瘡に入つたもの】腫痛して死せんとするには、

沸湯で温めて洗へば瘥える。(千金方)【蠍蠆の螫傷】温湯に漬け、數〻取換へて曉まで續ければ愈える（華陀が彭城夫人を治したる方）【蛇が搦んで解けぬもの】熱湯を淋けば脱ける。(千金方)

生熟湯（拾遺）

和名　なまぬるゆ
英譯名　Luke water

〔釋名〕　**陰陽水**　時珍曰く、新汲水と百沸湯とを一器の中で合するから生熟といふのである。現今では陰陽湯といふ。

〔氣味〕【甘く鹹し、毒なし】〔主治〕【中を調へ、食物を消化する。凡そ痰瘧、及び毒惡物の宿食で臚脹し、霍亂を作さんとするものには、中に鹽を投じて一二升を進め、痰食を吐き盡させればそれで癒える】(藏器)【凡そ霍亂、及び嘔吐で、食物並に藥が納らず、甚だ危篤なるには、先づ數口を飲めば落付く】(時珍)

〔發明〕　時珍曰く、上焦は受納することを主り、中焦は消化し、下焦は排出することを主る。三焦が通利し、陰陽が調和し、升降して周流すれば臟腑が暢達するが、一たびその常軌を失すれば二氣が淆亂し、濁陰は降らず、淸陽は升らなくなるから、

霍亂嘔吐の病となるのであつて、この湯を飲んで落付くといふは、その湯が陰陽を分つて其の平衡を得しめるからである。藏器曰く、凡そ大いに醉つたもの、または瓜果を過度に食つたものの全身を生熟湯に浸せば、その湯は酒や瓜の味になる。博物志に『腰まで浸せば瓜を五十箇食へる。頸まで浸せば更に無限に食へる』とあるが、それはまだ實驗したことがない。

虀水（綱目）

和名　なづけのみづ
英譯名　Water of preserved greens

【集解】時珍曰く、これは黄虀菜の水である。

【氣味】【酸く鹹し、毒なし】【主治】【諸種の痰飲、宿食を吐かす。酸苦は涌泄するもので、陰なのである】（時珍）

漿水（宋嘉祐）

和名　すみづ
英譯名　A sour water, Vinegar water

【釋名】酸漿　嘉謨曰く、漿は酢である。粟米を炊ぎ、熱に乘じて冷水に投じ、五六日浸せば味が酢くなり、白花を生ずる。その色が漿に類するところから名けた

ものだ。腐敗するまで浸したものを用うれば人體に害がある。

【氣味】【甘く酸し、微温にして毒なし】宗奭曰く、李と共に食合せてはならぬ。霍亂吐利を發すものである。姙婦が食へば胎兒が骨瘦になるから食つてはならぬ。就中(一)冰漿は飲んではならぬ。姙娠不能になるものである。醉後に飲めば失音になる。

【主治】【中を調へ、氣を引き、宣和し、力を強くし、關を通じ、胃を開き、渴、霍亂、洩利を止める。宿食を消化するには、粥を煮て食ふがよく、それを日沒時に啜れば、煩を解し、睡を去り、腑臟を調整する。酸くなるやうに煎じて飲めば、嘔噦を止める。皮膚の質を羽二重のやうに白くする】(嘉祐)【小便の通じをよくする】(時珍)

【發明】震亨曰く、漿水は性涼にしてよく走るものだから、煩渴を解して滯物を化するのである。

【附方】舊五、新一。【霍亂吐下】酸漿水で乾薑屑を煎じて呷ふ。(兵部手集)【(二)脯腊の過食】筋痛で悶絶するには、漿水で煮た粥に少量の鷹屎を入れ和して食ふ。(孫眞人方)【胎を滑にし出産を易くす】酸漿水を水に和して少量を頓服する。(產寶)【手

(一) 冰漿ハ冬ノ結冰ノ水。
(二) 脯腊ハ乾肉。

指の腫痛】漿水に少量の鹽を入れて之を漬け、冷えれば取換へる。（孫眞人方）【面上の黒子】煖めた漿水で顔を洗ひ、布で揉む。また白檀香をそれで磨つた汁を塗る。（外臺秘要）【骨哽の咽に在るもの】火に煆いて醋に淬した磁石、紅く焙じた陳橘、多年の(三)漿水脚の炒つたものと等分を末にし、別の漿水脚で和して(四)芡子大の丸にし、一丸づつ含嚥する。（聖濟錄）

(三)漿水脚ハ沈澱。
(四)芡子、ミヅブキ、一名オニバスノ種子。

甑氣水（拾遺）

和名「むしがめ」のたりみづ
英譯名 A water dropping from steam-pan

主治 【器に受けて取り、それで頭を沐すれば、毛髮を長くし、黒く潤はす。毎朝小兒の頭をこれで摩で梳る事を續ければ健康に益がある】（藏器）

附方 新一。【小兒の諸疳】全身、或は顏面に瘡が生じ、爛れて孔臼となり、大人の楊梅瘡のやうになれるには、糯米を蒸して甑の簀の四邊から滴下する氣水を器に承けて取り、それで瘡上を掃へば數日ならずして效がある。あらゆる藥の效なきときは、これを用ゐれば妙に治癒する。（集簡方）

銅壺滴漏水（綱目）

和名　みづどけいのなかのみづ
英譯名　A water in water-clock

主治　【性は滑にして上は顚にまで達し、下は泉にまで達する。(一)四末の藥を煎ずるによい】（虞搏）

三家洗盌水（拾遺）

和名　三軒のごき洗ひ水
英譯名　Water of dish-washing of three different houses.

主治　【惡瘡の久しく瘥えざるには、煎沸し鹽を入れて洗ふ。三五回を過ぎずして立ろに效がある】（藏器）

磨刀水（綱目）

和名　かたなのとぎみづ
英譯名　A sword grinding water

氣味　【鹹し、寒にして毒なし】時珍曰く、手を洗へば癬を生ずる。

主治　【小便を利し、熱腫を消す】（時珍）

附方　新五。【小便不通】刀の(一)交股を磨つた水一盞を服すれば效がある。（集簡方）【肛門腫痛】痔瘡とならんとするものには、急に屠刀の磨水を服すれば甚だ效

(一)四末ハ一名四極。四肢、卽チ兩手、兩足ヲ云フ。

(一)立效ノ二字、本草拾遺ヲ以テ補フ。

(一)交股ハ錢貨ノ刀布ノ交股ノコトナラン。

がある。（集簡方）【(二)盤腸生産】腸が乾いて上に收らぬには、磨刀水少量で腸を潤し、好き磁石を煎じ、一盃を溫服すれば自然に上に收る。これは扁鵲の方である【蛇咬の毒攻】腹に入りたるには、兩刀を水中で相摩してその汁を飮む。（救急方）【耳中の卒痛】磨刀鐵漿を入るれば癒える。（活人心統）

浸藍水（綱目）

和名　あゐつぼの水
英譯名　Water in an indigo-dye vat

氣味　【辛く苦し、寒にして毒なし】**主治**　【熱を除き、毒を解し、蟲を殺す。誤つて水蛭を呑んで積となり、脹痛し、黃瘦するには、これを飮んで下を取れば癒える】（時珍）○【染布水は咽喉の病、及び噎疾を療す。一鍾を溫服するが良し】（時珍）

發明　時珍曰く、藍水、染布水は、いづれも藍、及び石灰が能く蟲を殺し、毒を解するところから用ゐたもので、昔ある人が醉つて田の中の水を飮み、誤つて水蛭を呑んだために胸腹が脹痛し、顏色が黃になり、あらゆる醫師の手當も效がなかつたが、たまたまある町の旅館へ宿つた際、甚しく渴を覺え誤つて浸藍水を飮ん

(二) 盤腸産ハ子宮脱出。

だところ、大いに下痢を始めた。翌朝その瀉下したものを見ると、無數の水蛭が出てゐたが、それから病は頓に癒えて了つたといふことである。

豬槽中水（拾遺）

和名　ぶたぶれのみづ
英譯名　Water in a pig-pail

主治　【蠱毒には一盞を服す。また蛇咬瘡を療するにはこれに浸せば效がある】（藏器）

市門溺坑水（拾遺）

和名　共同便所の尿水
英譯名　Urine in the pot of a public latrine

主治　【毒なし。消渇を止める。重きものには、本人には知らせずに一小盞を服ます。三回にして瘥える】（藏器）

洗手足水（綱目）

和名　手足を洗つた水
英譯名　Water after hand-washing

主治　【病後の(一)勞復、或は頭を梳つた爲め、或は食物の爲に復發せるには、一合を服すれば效がある】（聖惠）

(一)勞復ハ過度ノ勞働ニヨル病ノブリカヘシ。

洗兒湯（綱目）

和名　うぶゆ
英譯名　Hot water used for the washing of a new-born infant

【主治】「胎衣の下らぬには、これを知らせぬやうに一盞を飲ませる」（延年祕錄）

諸水有毒（拾遺）

「(一)水府龍宮に觸れ犯してはならぬ」藏器曰く、水の怪は魍魎であつて、(二)溫嶠が、犀を燃し、水を照して神に怒られたといふはこれである。水中に赤脈のあるは、それを斷つてはならぬ。○「井水が突然沸き溢るるを飲んではならぬ」時珍曰く、ただその三十歩以内で青石を取り、一塊をこれに投ずれば止る。○「古井(三)眢井に入つてはならぬ。毒があつて人を殺す」時珍曰く、夏季は陰氣が下にあるから、就中之を忌む。それを知るには雞毛を投じて見る、くるくると舞つて底へ下らぬものは必ず毒があるのである。それには熱醋(四)數斗を投じてからならば入つてもよい。古塚も同樣である。○「古井は塞いではならぬ。塞げば盲、聾になる」○「陰地の(五)流泉には毒があつて、二月と八月に通行人がこれを飲めば(六)瘴瘧となり、脚力を損ずる」○

(一)水府ハ水神ノコト。龍宮ハ龍神居ル所ノ宮殿。
(二)溫嶠ハ東晉ノ人ナリ、昔此人武昌ノ牛渚ヲ過リシトキ、磯下ニ怪物多シ、嶠犀角ヲ燃シテ之ヲ照シタルニ、水族形ヲ現セリト云フ。
(三)眢井、井ニ水無キモノ。
(四)本草纂要ニ、斗ヲ升ニ作ル。
(五)本草纂要ニ、泉ヲ水ニ作ル。
(六)瘴瘧ハマラリヤ熱。

【澤中の停水には、五月、六月には魚鼈の精がある。これを飲めば瘕病になる】〇【沙河中の水を飲めば(七)瘖になる】〇【雨山が水を夾む土地の人には(八)癭が多い】〇【流水に聲のある土地の人には癭が多い】〇【花瓶の水は、之を飲めば人を殺す。臘梅を生けた水は就中甚しい】〇【米を炊いだ蒸籠の湯で顏を洗へば、顏の色艶がなくなり、身體を洗へば癬となり、脚を洗へば疼痛して瘡が生ずる】〇【銅の食器上の汗が食物中に入れば、それを食つたものは疽を生じ、惡瘡を發する】〇【冷水、熱泔で頭を沐すれば、いづれも頭風になる。就中婦人は之を忌む】〇【水が一夜經つて表面に五色のあるものには毒がある、手を洗つてはならぬ】〇【時病後に冷水に浴すれば、(九)心胞を損ずる】〇【盛暑に冷水に浴すれば、傷寒になる】〇【發汗して後冷水に入れば骨痺になる】時珍曰く、顧閔は、遠行して汗を出した後水を渡つた爲に遂に骨痺痿躄になり、數年にして死亡したのである。〇【産後洗浴すれば痓風になり、多くは死亡する】〇【(一〇)酒を飲みながら冷水を飲めば手が顫へる】〇【酒後に茶を飲めば(一一)酒癖になる】〇【水を飲んで直ぐ睡れば水癖になる】〇【小兒が瓢や瓶に直接口を着けて水を飲めば吃音になる】〇【夏季遠路を行いて．冷水で足を濯いではならぬ】〇【(一二)冬季遠

(七)瘖ハ瘂ナリ、和名オシ。

(八)癭ハ瘤ナリ。和名コブ。

(九)心胞ハ心臓。

(一〇)物類相感志ニ、酒中ヲ醉中ニ作ル。

(一一)癖ハ腹ニ積聚アツテ塊ヲナスコト。俗ニ之ヲ痞塊ト云フ。

(一二)食物本草ニ、冬月遠行ヲ涉水踏雪ニ作ル。理アルニ似タリ。

路を行つて、熱湯で足を濯いではならぬ】

本草綱目水部第五卷 終

本草綱目火部

第六卷

(一)行、五行ノ一。

(二)國火ヲ變ズルトハ、新規ニ火ヲ取リ改ムルヲ云フ。

(三)時疾ハ時氣疫病。

本草綱目火部目錄第六卷

李時珍曰く、水、火は人類を育生するところのものであつて、人類はこれに依つて生存する。本草や醫方に、いづれも水のみの研究があつて火の研究のないといふは、如何にも學問としての缺點ではあるまいか。火は南方の(一)行であつて、その文は横にすれば☲の卦となり、竪にすれば火の字となる。炎え上る有様を形容したものだ。その氣は天に趣き、地に藏し、人に功用を有つ。太古の燧人氏は、上觀、下察し、木を鑽つて火を取り、人民に熟食の方法を敎へて腹疾なからしめた。周官の司烜氏は、燧を以て明火を日に取り、鑑を以て明水を月に取り、以て祭祀に供し、司爟氏は、火の政令を掌つて四時(二)國火を變じ、以て(三)時疾を救つたといふ。曲禮には『聖王は水、火を取るに金、木を用ゐ、飮食必ず時にす』とある。これに由つて觀れば、古先聖王が火の問題に就いて、宇宙と人類との交渉に如何に痛切な注意を拂つたかが判るのである。然るに、後世の者がこれを忽に視るといふは何事であらう。本書は、火にして日用灸焫に切實なもの十一種を撰んで獨立の火部を置くこ

とにした。

本草拾遺一種　唐の陳藏器。　本草綱目十種　明の李時珍。

附註

元朱震亨

火の一　凡て十一種

陽火陰火　綱目　燧火　綱目　桑柴火　綱目　炭火　綱目

蘆火竹火　綱目　艾火　綱目　陽燧、火珠を附す。　神鍼火　綱目

火鍼　綱目　燈火　綱目　燈花　拾遺　燭燼　綱目

右附方　新十三

火の一　凡て十一種

陽火　陰火（綱目）

和名　をび・めび
英譯名　Positive fire and negative fire
(Man's fire and female fire)

集解　李時珍曰く、火は五行の一で、氣はあるが實質は無く、天地の間に(一)造化の作用を爲して萬物を生殺し、仁を顯し、用を藏し、神妙窮りない。火の作用たるや誠に至大なものである。余が嘗て深く推究するところに據れば、五行はいづれも單一であるが、ただ火のみに二ある。二とは、陰火と陽火とであつて、その大綱は凡て三に別れ、更に細目にすれば十二になる。所謂三大別とは、天火と、地火と、人火とである。十二の細目とは、天の火が四、地の火が五、人の火が三である。試にこれを說明しよう。

天の陽火の二は、太陽の眞火と、星の精の飛火とであつて、赤き强力な光の物が降るときは災がある。俗に火殃と呼ぶものである。天の陰火の二は、龍火と、雷火とである　龍の口にある火光と霹靂の火は神火である。地の陽火の三は、木を鑽つて出る火と、石を擊つて出る

(一)造化ノ作用、新陳代謝ノ作用。

火と、金を戛つて出る火とであり、地の陰火の二は、石油の火と石部の石腦油の條を見よ。水中の火とである。江湖、河海の水が夜動くと火がある。或は水神が夜出るから火光があるのだともいふ。人の陽火の一は、(二)丙丁の君火であり、心臓、小腸の離の火である。人の陰火の二は(三)命門の相火と、(四)北海に起る坎の火であつて、三焦に遊行し、位を肝、膽に寄する。(五)三昧の火である。純陽の乾の火である。これを陰陽に統合していへば、陽火も六、(六)陰火も六、都合十二となるのである。

諸の陽火は、草に遇へば焫き木に付けば燔く。けれども、濕を以て伏し、水を以て滅することを得るのである。諸の陰火は、草木を焚かずして金石を熔し流す。濕を得ればいよいよ焔を上げ、水に遇へばますます熾になり、これを消さうとして水をかければ、火焔が天に上り、燃焼すべき物が盡きてから始めて止む。火を以てこれを逐ひ、灰を以て之を撲てば、焼灼性は自ら消え、光焔は自ら滅するのである。故に、人が善く自分の身體を反省して、上は天に體し、下は物の本質に鑑るならば、君火、相火や正治、從治の理も思半に過ぐるであらう。

この外にまた、(七)蕭丘の寒火、蕭丘は南海の地方にある。上に自然の火があつて、春生じ秋は滅

(二)丙丁ハ火ノ別名。
(三)命門ハ兩腎間ノ經穴。
(四)北海、北方絶遠ノ海。
(五)三昧ノ火ハ世間平等炊烹ノ火也。三昧ハ梵語、正受、正定等ト譯ス。意識ノ純一狀態ヲイフ。
(六)陰火六トアレドモ、三昧ノ火ハ諸ニ據レバ陽火ニ屬ス、故ニ陽火七、陰火五トセザルベカラズ。
(七)蕭丘、未考。山

する。一種の木があるが、それも小く焦黒であると(八)抱朴子外篇に出て居る。また陸游は『(九)火山軍の地方は、土地を耕して深く鋤を入れると烈しい焔が出る。けれども作物を種ゑるには差支ない』といつて居る。これも寒火である。澤中の陽焰、狀は火焔の如く、水面から起るものだと素問の王冰が註に出て居る。野外の鬼燐、その火は色青く、狀は炬の如く、或は聚り、或は散る。俗に鬼火と呼ぶ。或は諸血の燐光だといふことである。金銀の精氣などがある。すべて金銀玉寶には皆夜中に火光がある。これはいづれも火には似て居るが、物を焚く能はざるものである。樟腦、猾髓などは皆能く水中で火を發し、樟腦は木部に、猾髓は獸部に出て居る。濃酒、積酒は熱氣に觸れると火が自ら生ずる。燒酒、醇酒は火氣を得れば自ら焚け、油を百石に滿てると火が自ら生じ、油紙、油衣、油鐵は熱氣を得て蒸激すれば皆自ら火が生ずる。遠き南方の蠻地には火を饜くまで食ふ人種があり、その國は(一〇)黑崑崙に近いところで、人民はよく火炭を食ふ。火を食ふ獸類が居る。原化記に禍斗獸は狀犬の如くにして火を食ふ。糞も復火となり能く人屋を燒くとある。(一一)西戎には火を食ふ鳥が居り、駝鳥。禽部を見よ。火鴉、蝙蝠は能く焰煙を食ひ、火龜、火鼠は火地に棲息する。火龜は介部龜の條下を、火鼠は獸部の鼠の條を見よ。これ皆五行物理の當然であつて、卒然これを聞いたものは奇怪千萬な話と思ふであらうが、それはまだ深くこの理に造詣がな

海經ニ青丘之山ナル記載アレドモ、葛洪說ノ蕭丘ニ似ズ。

(八)抱朴子、晉ノ葛洪ノ著。

(九)火山軍ハ今ノ山西省河曲、偏關二縣ノ地。軍ハ趙宋時代ノ行政竝ニ軍管區域ノ稱。コノ地火山アルヲ以テ稱トナス。當時遼ノ侵入ヲ防グノ要地ナリ。

(一〇)黑崑崙、或ハ墨崑崙トハ今ノ馬來半島ノ人種ヲ指ス。

(一一)西戎ハ西方異人種ノ諸國ノ總稱、甘肅以西ノ地ヲ指ス。

いからのことに過ぎない。また至人といふがあつて、水に入つて溺れず、火に入つて焚けず、金石に入つても無礙であり、日月の上を歩んでも影がないといふ。この人たるや、道と眞との合するもので、名くべきものがないところから、ただ至人といふのである。蔡九峰はただ木火、石火、雷火、水火、蟲火、燐火のみを說いて居るが、それではまだすべてを網羅したものとはいひ難いやうである。

震亨は「太極は、動いて陽が生じ、靜にして陰が生ずる。陽は動いて變じ、陰は靜にして合する。而して水、火、木、金、土を生ずるのであつて、各〻その性は單一であるが、獨り火のみは二ある。それは君火、卽ち人火と、相火、卽ち天火である。火は內は陰にして外は陽に、動を主るものである。されば、凡て動は皆火に屬するのである。火には本形が無い、これを名を以て言ふときは、形氣相生じて五行に配す——心之れが主となる——故に君といふ——物に藉つて用を顯す——位を以て言ふときは、虛無に生じて位を守り命を稟ける。その動に因つて始めて見ることを得るのだから、これを相といふのである。天は生物を主るが故に動を恒とし、人が此の生を有つにもまた動を恒とするのであつて、動なる現象は皆相火に因つて現れるもの

である。それが天に現るるものでは、龍、雷となつて出るものは木の氣、海に出るものは水の氣である。人體に現るるものでは肝、腎の二部に寓するのでその肝は木、腎は水であつて、膽は肝の腑、膀胱は腎の腑、心包絡は腎の配である。三焦は焦げるの意味に因る稱呼であつて、下焦の肝、腎の分を司るはいづれも陰にして下なるものである。されば、天はこの火にあらずんば物を發生し能はぬやうに、人はこの火にあらずんば生を有ち能はぬのである。天の火は木に出づるのではあるが、またその本を尋ぬれば地に在るのであつて、——靜にして潛藏し、動いて彰る——故に雷にして伏せず、龍にして蟄せず、海にして地に附かないとしたならば、鳴ることも、飛ぶことも、波立つことも出來ないのだ、鳴や、飛や、波や、いづれもそれは動であり、火としての現れである。人身に於ては、肝、腎の陰は悉く相火を具へて居るものであつて、この點に於て人そのものは天そのものに同じきものである』といつて居る。

けれどもまた、東垣は、火は元氣の賊であつて、元氣と兩立せず、一が勝てば一が負けるといつてある。これは少少問題であるが、周子は『神の發し現れたものが

知である。（一二）五性が物に感じ、そこにあらゆる現象の存在といふことがあり、知るといふことがあつて、始めて五の性が物のために感ぜられ、そこに動くといふ現象がある。これは卽ち内經の五火である。五性の厥の陽の火と相火と相扇くときは妄動となり、火が妄の上に起るのときは變化測り難いこととなり、眞陰を煎熬して陰が虛すればそこに病が發り、陰が絕するに至れば死亡することになるのである。君火の氣に就ては、經では暑と濕とで說明し、相火の氣に就ては、經では火を以て說明してあるが、それは相火そのものの暴悍酷烈なることは、君火よりも甚しいといふ意味を含めてあるのである。かやうな次第であれば、相火を元氣の賊なりともいひ得るわけだ』といつてある。

周子はまた『聖人は之を定むるに中正と仁義とを以てして、靜を以て主とす』ともいひ、朱子は『必ず道の心をして常に一身の主たらしめ、人の心をして每に命を聽かしむ』といつて居る。一體人の心が命を聽き、而して又之を主るに靜を以てすることであれば、彼の五火の動はいづれもその節に中るわけであつて、相火はただ造化を裨補して生生不息の運用を爲すに止ることになる。元氣の賊であるといふ理

（一二）五性、仁、義、禮、智、信。

由は何處にもないわけである。

ある者は『内經はただ(一三)六氣に於てのみ火を說明してあるだけで、臟腑の關係にまでは言及してない』といふが、しかし、岐伯は病機十九箇條を一一列擧して『火に屬するもの五、諸熱、(一四)瞀瘛はみな火に屬し、諸逆、衝上はみな火に屬し、諸躁、狂越はみな火に屬し、諸禁、(一五)鼓慄して神守を喪ふが如きはみな火に屬し、諸病の胕腫、疼酸、驚駭はみな火に屬する』といつてある。劉河間も『諸風掉眩は肝に屬するの風火である。諸氣膹鬱は肺に屬するの燥火である。諸濕腫滿は脾に屬するの濕火である。諸痛痒瘡は心に屬するの鬱火である』といつて居る。以上はいづれも火が病となつて臟腑に現れる事實を說いたものであるが、陳無擇の如き明敏通達の人でさへ、暖、溫は君火、日用の火は相火だなどといふ位だから、後人の無見識は敢て怪むまでもないことである。

燧火（綱目）

和名　きりび
英譯名　Flint fire

集解　時珍曰く、周官の司爟氏は四時國火を變じて以て時疾を救ひ、(一)季春

(一三)六氣ハ熱、濕、火、燥、寒、風。
(一四)瞀ハ眼ノ明ナラヌコト、瘛ハ筋脈拘急ナルヲ云フ。
(一五)鼓慄ハ振慄。
(一)季春ハ舊暦三月。

には火を出し、(二)季秋には火を納め、民咸な之に從ふといふ。蓋し人は火食に資る者だから疾病と壽夭とが生ずるので、四時に燧を鑽つて新火を取り、以て飲食の用を辨じたといふは、歲氣に隨つて過不及なきやうにし、それに依つて人民の時疾を救つたといふことであらう。楡、柳はあらゆる木に先つて青くなる、それで春これを取る。その火の色は青い。杏、棗は木の心が赤い、それで夏これを取る。その火の色は赤い。柞、楢の木は理が白い、それで秋これを取る。その火の色は白い。槐、檀の木は心が黑い、それで冬これを取る。その火の色は黑い。桑、柘の木は肌が黃だ、それで季夏にこれを取る。その火の色は黃である。(三)天文の大火の位置、順序は星に於ける心臟であつて、季春には龍が辰の方に現れて火を出す、時候として暑である。季秋には龍が戌の方に伏して火を納める、時候としては寒である。すべての人間の營みの始めまた終が皆天道に順つて行はれるならば、水旱、災祥の漫延流行を免れ得るわけである。後世寒食の日に火を使はぬのは、季春に火を改めるといふ意味の遺風であつて、俗に(四)介推の故事などを附會するのは謬である。道書に『竈下の灰火はこれを伏龍屎といふ。これで香を焚いて神を祭つてはならぬ』と書

(二)季秋ハ舊曆九月。

(三)大火ハ二十八宿ノ一星心宿ノ別名。

(四)介之推ハ周代ノ人、晉ノ文公ノ臣ナリ。介之推ノ寒食ニ

いてある。

桑柴火（綱目）

和名　くはのきをたくひ
英譯名　Fire got by burning mulberry tree

【主治】【癰疽發背で危篤のもの、瘀肉の腐らぬもの、及び陰瘡、瘰癧(一)流注、(二)臁瘡、頑瘡には、火を燃して吹き滅し、それで一日二回づつ灸すれば、まだ潰れぬものは、毒を拔き、痛を止め、已に潰れたものは、陽氣を補接して腐を去り、肌を生ずる。凡そ一切の補藥、諸膏はこの火で煎ずるがよい。但し艾を點してはならぬ、肌を傷めるものだ】（時珍）

【發明】震亨曰く、火を用うるは暢達して鬱毒を拔き引くためであつて、これは從治の法である。時珍曰く、桑木はよく關節を利し、津液を養ふもので、その火を用うれば、毒氣を拔引し、風寒を驅逐する。その結果、よく腐を去り、新を生ずるのである。抱朴子に『一切の仙藥は桑で煎じたものでなければ服してはならぬ』とあるは、桑は(三)箕星の精で、よく藥力を助け、風寒痺の諸痛を除き、久しく服すれば終身風疾に罹らぬといふためである。藏器曰く、桑柴火で蛇を炙れば足が現れ

關スル故事、事林廣記ニ具載ス。

(一) 流注ハ寒膿腫。

(二) 臁瘡ハガンガサ。

(三) 箕星、二十八宿ノ一。

る。

炭火（綱目）

和名　炭火（すみび）
英譯名　Charcoal fire

集解　時珍曰く、木を燒いたものが炭である。木は久しく經てば腐ちるが、炭は土に入れても腐ちない。それは、木には(一)生性があり、炭には生性がないからである。死骸の埋葬を取扱ふものが、蟲や蟻が中に入らぬため、又、竹や木の伸ぶる根を他へ避けさすためによく炭を用ゐるのも、その生性のない點を利用するのである。古は冬至と夏至の二日前に、(二)衡の兩端が水平になるやう輕重相均しき量の土と炭とを懸けて時候の推移を計つたものだ。陰氣が來れば土が重くなり、陽氣が來ると炭が重くなるのである。

主治　【櫟炭火は一切の金石藥を煆き錬るによく、浮炭火はあらゆる藥の丸、散を烹煎し焙炙するによい】（時珍）

(三)**白炭**　主治　【誤つて金、銀、銅、鐵を呑み、それが腹に在るには、紅く燒いて急に末にし、湯に煎じて呷ふ。甚しきものは白末を刮つて三錢を井水で調へて服

(一)生性ハ生物ヲ養フ物質。
(二)衡ハ天秤。
(三)白炭ハ一名生炭火。紅熱外面ニ白灰アルモノ。

し、なほ効なきときは再服する。又水銀、輕粉の毒を解す。火の附きたる炭を水底に納るればよく水銀を取り出す。(四)上立炭を身に帶びれば邪惡の鬼氣を避け、除夜にこれを戸内に立てても邪惡を避ける】(時珍)

【附方】新六。【突然の咽噎】炭末を蜜で丸にして含嚥する。(千金方)【(五)白虎風痛】晝夜走注し、全身のあらゆる節節が齧むやうに痛むには、炭灰五升、蚯蚓屎一升、紅花七捻を和して熬り、醋を拌ぜて故布で二包にし、更互に痛處を熨すれば効がある。(聖惠方)【久近(六)腸風】下血するには、緊炭三錢と、燒いて性を存した枳殼五錢を末にし、三錢づつ五更に米飲で一服し、曉方に再服すればその日に效が現れる。油膩、毒物を忌む。(普濟方)【湯火の灼瘡】炭末を香油で調へて塗る。(濟急方)【白癩頭瘡】白炭を紅く燒いて沸湯中に投じ、溫にして洗つて效を取る。(百一方)【陰囊濕痒】麩炭、紫蘇葉の末を撲つ。(經驗方)

蘆火竹火(綱目)

和名　よしやたけをもやすひ

英譯名　Fire got by burning reed or bamboo

【主治】【一切の滋補の藥を煎ずるによし】(時珍)

(四)上立炭、未詳。

(五)白虎風痛、關節僂麻質斯。

(六)腸風ハ腸出血、一名便血。

【發明】時珍曰く、凡そ湯藥を服する場合、藥品も精良であり、修治も法に稱つてゐても、藥を煎ずる者が粗暴輕卒なために、水、火が不良で火力の適度を失すればその藥は效が無くなる。それは茶の味の美惡や飯の味の甘し不味しが皆水加減、火加減の得失に因するを觀ても知ることが出來る。故に藥を煎じるには、小心の老成人に取扱はせ、深い鑵の中に密封し、新水、活火を用ゐ、始めは强く、後には柔にし、すべて法則を嚴守して製した上で服すれば效力が現れぬといふことはない。すべて火に古い蘆、枯れた竹を用ゐるのは火力が强からずして藥力を損ぜぬためである。桑柴火を用ゐるのはそれがよく藥力を助けるからである。桴炭はその力のゆるさを取り、櫟炭はその力のきつさを取り、温養する場合に糠や牛、馬の糞を用うるのは、暖にして常に藥力の匀徧を保たせるためである。

艾火（綱目）

和名　灸（きうのひ・もぐさのひ）
英譯名　Moxa fire

【主治】【あらゆる病に灸する。諸風冷疾に灸するには、硫黃末小量を入れるが尤もよし】（時珍）

【發明】時珍曰く、凡そ灸艾の火には、第一に陽燧、火珠を用ゐて日輪から太陽の眞火を取るがよく、それに次いでは槐を鑽つて火を取るがよし。急卒の場合、それ等の準備のないときは、眞麻油の燈、或は蠟燭の火を用ゐ、艾莖で炷を燒點すれば、灸瘡を滋潤して癒ゆるまで痛まない。その火には、金を戛つた火、石を擊つた火、燧を鑽つた火、また八木の火は皆用ゐてはならぬ。邵子が『火に體はなく、物に因つて體が現れる。金石の火は草木より烈しい』といつたのはこのことである。その所謂八木とは、松の火は瘥え難く、柏の火は神を傷めて汗を多くし、桑の火は肌肉を傷め、柘の火は氣脈を傷め、棗の火は内を傷めて吐血し、橘の火は營衛、經絡を傷め、楡の火は骨を傷めて志を失し、竹の火は筋を傷め目を損ずるものである。

南齊書に『武帝の時、ある僧が(一)北齊から赤い火を持つて來た。その火は普通の火より赤くて小さいものであつた。それで病を療するといふので、貴賤は爭つてそれを用ゐたが、七炷まで用ゐると多くはその效驗が現れた。(二)吳興の楊道慶の二十年の虛疾もこの灸で瘥えたので、世間では聖火と稱して喧傳した。政府で禁じたけれども、その灸術が止まなかつた』といふことを記載してある。この火は何物の火で

(一)北齊ハ、南北朝ノ北朝ノ一朝代。鄴即チ今ノ河南省ノ安陽ニ都シ、今ノ直隸、山東、山西、河南各省、及ビ奉天省ノ西部ヲ領有ス。凡テ五世、二十八年。西曆五五九年ヨリ五七七

年ニ至ル。
（一）吳興ハ三國時代ニ初メテ置キタル郡名。今ノ浙江省吳興縣ノ地ナリ。

あつたか判然せぬ。

附録　**陽燧**　時珍曰く、火鏡である。銅で鑄造したもので、その面が凹んでゐて、摩擦し熱を出して日に向け、艾で承けると火が取れる。周禮に、司烜氏は夫の燧を以て明火を日に取るとあるはこれである。

火珠、石部水精の條下を見よ。

神鍼火（綱目）

和名　桃の木の針の火
英譯名　Fire got by burning small piece of peach tree

主治　【心腹冷痛、風寒濕痺、附骨陰疽、凡そ筋骨に在つて隱痛するものにこれを鍼すれば、火氣が直ちに病所に達して甚だ效がある】（時珍）

發明　時珍曰く、神鍼火とは、五月五日に東方へ伸びた桃の枝を取り、太さ雞子ほど長さ五六寸の木針に削つて乾したものだ。これを用ゐるには、まづ綿紙三五枚を重ねて患部へ當て、鍼に麻油を蘸け、それに火を點けて吹き滅し、熱に乘じて針するのである。又、雷火神針の法といふがある。それは熟蘄艾末二兩に乳香、沒藥、穿山甲、硫黃、雄黃、草烏頭、川烏頭、桃樹皮末各一錢、麝香五分、以上を末

(一)川蜀トハ今ノ四川省一帶ノ地ヲイフ。

(二)火筋ハ火箸。

(三)點穴、灸點ノ位置ヲキメルコト。墨記ハ灸點ノ位置ヲ墨ニテ記スコト。

にして艾に拌ぜ、厚紙を數條に裁つて一條毎にその藥艾を入れ、長さ三四寸太さ指ほどに緊く巻き、瓶に入れて七日間地中に埋め、それを取出して用ゐる。用法は、まづ燈火で火を點けて吹き滅し、紙十枚を隔てた上から熱に乗じて患部に鍼する。熱氣が直ちに病處に入つて、甚だ速に奏效する。いづれも冷水を忌む。

火鍼（綱目）

和名　燒針（やきばり）
英譯名　A Red-hot needle

【釋名】燔鍼（素問）焠鍼（素問）燒鍼（傷寒論）煨鍼　時珍曰く、火鍼は素問に所謂、燔鍼、焠鍼である。張仲景は燒鍼といひ、(一)川蜀地方の人は煨鍼といふ。その用法は、まづ盞に麻油を滿て、それに燈心十四本を入れて燈を點け、その燈火で頻に麻油を塗りながら鍼を燒き、鍼全體を赤く燒いて用ゐる。赤くないもの、冷えたものを用ゐては却て人に害を及ぼし、病を去り得ない。鍼は(二)火筋鐵を用ゐて造るが佳し。(三)點穴の墨記は明白に、正確にする必要がある。もしその箇所を差へば功がない。

【主治】『風寒筋急、攣引痺痛、癱緩不仁のものには、鍼を下して直ちに拔き出

し、急にその孔穴を押し揉めば疼きが止む。押し揉まねば疼きが甚しい。癥塊、結積、冷病の者には鍼を下してゆるゆる抜き出し、そして轉動して汚濁を發出する。癰疽發背の化膿して頭のないものには鍼して膿を潰出さす。その場合は孔穴を押し揉んではならぬ。凡そ火鍼を用うるに注意すべきことは、甚だ深過ぎれば經絡を傷め、甚だ淺過ぎれば病を去り得ない。要はその程度要領の適中を得るに在るので、鍼を用ゐた後發熱惡寒すれば、それは病に適中したのである。凡そ病の顏面に在るもの、及び夏季に濕熱の兩脚に在るものには、いづれもこれを用ゐてはならぬ」（時珍）

發明　時珍曰く、素問に『病が筋に在るには之を筋に調へ、燔鍼でその箇所を劫刺して筋の急せるものに及ぼす。病が骨に在るには之を骨に調へ、焠鍼を用ゐて之を熨治する』とあり。また靈樞經には十二經筋に發る諸痺痛を說明して『いづれも治は燔鍼の劫刺に在り、知を以て度と爲し、痛を以て愈と爲す』とあり、又『經筋の病は、寒なれば反折して筋急し、熱なれば縱弛して收らないものである。陰痿には焠刺を用ゐてはならぬ。焠刺は寒急を刺すものだ、縱緩にして收らぬものには

燔鍼は無用である』といつてある。これに依つて觀れば、燔鍼は筋の寒し急するものに施すための熱を以て寒を治する正治の法であつて、後世積塊に鍼すると、やはり火氣を假りて寒凋を散じ汚濁を發出するのである。或は又、これで癧疽を治するは從治の法を以てその毒氣を潰泄するのである。然るに無識の者が、これを傷寒、熱病を治するに用ゐるは誤である。張仲景は『太陽の傷寒は溫鍼を加へれば必ず驚を發し、營氣微なる者に燒鍼を加へれば、血が流れて行らず、更に發熱して煩燥する。太陽の病は下せば心下が痞し、表裏俱に虛し、陰陽俱に竭きる。更に復た燒鍼を加へれば、胸煩し、顏色靑黃となり、皮膚潤ふもので、此うなれば難治である』といつてある。これはいづれも鍼を用うる者が、先哲の鍼を設けた理論、根據を知らずして謬り用ゐ、爲に人を害ふ事實を擧げたものである。又、凡そ肝虛で目昏し淚多きもの、或は風赤、及び翳膜を生じ、それが頑厚にして病となり、後に白膜を生じて失明せるもの、或は五臟の虛勞から、風熱が目に上衝して翳を生ずるもの等は、いづれも熨烙の法が適當である。蓋し氣血は溫を得れば宣流し、寒を得れば凝澀するものだからである。その方法は、翳の大小に準じた平頭鍼を用ゐ、それを赤

く燒き輕く翳中に當てて烙するのである。烙して後翳が破れたならば、翳を除く藥を傳點する。

燈火（綱目）

和名　燈火（ともしび）
英譯名　A light

主治　【小兒の驚風、昏迷、搐搦、(一)竄視の諸病。また頭風脹痛を治するには、頭、額の太陽の絡脈の盛なる處を視て、燈心に麻油を蘸け燈を點けて焠くが良し。外痔の腫れ痛むものも亦之を焠くがよし。油はよく風を去り毒を解し、火は能く經を通ずるからである。初生兒が寒氣に冒されたるが原因で絕命せんとするには、臍帶を斷つてはならぬ。急に絮を烘いて包み、胎衣を持ち添へて烘熱し、火の點いた燈心を臍下に往來さして爇する。煖氣が腹に入れば呼吸が回つて自ら甦るものである。又銅匙柄を燈火で燒いて(二)眼弦內を熨烙すれば、風を去り、赤を退けること甚だ妙である】（時珍）

發明　時珍曰く、凡そ燈は胡麻油、蘇子油を燃したもののみが、目を明にし、病を治す。諸魚油、諸禽獸油、諸菜子油、綿花子油、桐油、豆油、石腦油の諸燈は、

(一)竄視ハソラメツカヒ、目ノスワルコト。
(二)眼弦ハ眼瞼ノコトナルベシ。

㈢顖門、頭ノチドリ。

その燈煙がよく目を損じ、病を治するにも效がない。

附方 新七。【攪腸沙痛】陰陽腹痛で手足が冷え、身體に紅點の現れるものには、燈草を油に浸して火を點け、その紅點の上を焠く。（濟急方）【小兒の諸驚】仰いで後へ反り返るには、その㈢顖門、兩眉、臍の上下を焠く。人事不省なるには、その手足の心、心臟の上下を焠く。拳を開かず、口を吊上げるには、その頂の心、兩手の心を焠する。撮口して白沫を出すには、その口の上下、手足の心を焠く。（小兒驚風祕訣）【あらゆる蟲の咬傷】燈火を以て熏ずれば水を出すこと妙である。（濟急方）【楊梅毒瘡】方廣心法附餘に『鉛汞の結砂、銀硃各二錢、白花蛇一錢を末にし、紙に卷き込んで七本の撚を作り、第一日には三本、次の日からは一本づつを用ゐ、香油で烘爐の中に燈を點けてそれを寢具の內へ入れ、風の透らぬやうにしてその寢具を被つて臥し。充分に食事を攝つて、口に椒茶を含み、熱くなれば吐き出して再び含む』とある。○神燈熏法では、銀硃二錢、孩兒茶、龍掛香、皂角子各一錢を末にし、紙で長さ三寸太さ燈心ほどに卷き、一本づつ燈盞の內に入れて香油に浸して點火し、それを水桶の中に置き、患者は寢具で坐を圍んで鼻でその煙を吸ひ且つ嚥み、

口に冷水を含んで、熱すれば吐き出し、一日二回づつ熏じて三日後に口中の皮が破れたならば陳醤水で含漱する。○神燈照法では、年久しき楊梅瘡で破れ爛れて坑陷するものには、銀硃、水粉、線香各三錢、乳香、沒藥各五分、片腦二分を末にし、紙に巻き込んで撚を作り、油に浸して燈を點け、一日三回づつ瘡を照せば七日にして效が現れる。そこで先づ通聖散數貼を服し、隨時に口に椒茶を含んで毒氣の齒に入るを防ぐ。【年深き疥癬】全身に蔓延するには、硫黄、艾葉等分を研り、撚に作り油に浸して寢具の中で燈を點じて熏じ、油を口、鼻、耳、目に塗つて露出する。（集玄方）

燈花（拾遺）

和名　ちやうじがしら
英譯名　The Snuff of a lamp wick

氣味　缺。　**主治**　【金瘡に傅ければ、血を止め、肉を生ずる】（藏器）【小兒の邪熱が心に在つて夜啼止まざるには、二三顆を燈心湯で調へ、乳房に抹して吮はす】（時珍）

發明　時珍曰く、昔、陸賈は『燈火爆して百事喜ぶ』といひ、漢書藝文志に

は燈火で占ふ術の書がある位だから、燈火は固より靈物である。錢乙がこれを用ゐて夜啼を治したといふはこの道理に基いたものであらう。我が明の皇室宮順王の一人の孫君は、燈火を嗜んでその臭さへ嗅げば泣いて欲がつて已まなかつたが、時珍が拜診してその癖なることを推定し、殺蟲治癖の藥を丸にして一料を進めると平癒された。

燭燼（綱目）

和名　らふそくのもえさし
英譯名　Half-burned candle-wick

【集解】時珍曰く、燭に蜜蠟燭、蟲蠟燭、桕油燭、牛脂燭などの種類はあるが、ただ蜜蠟、桕油で作つたものの燼だけを藥に入れ得る。

【氣味】缺。【主治】【丁腫には、胡麻、鍼砂と共に等分を末にし、醋で和して傅ける。九漏を治するには、陰乾の馬齒莧と等分を末にし、泔水で洗淨してから臘豬脂に和して一日三回づつ傅ける】（時珍）

本草綱目火部第六卷　終

本草綱目土部

第七卷

本草綱目土部目錄第七卷

時珍曰く、土は五行の中心であつて(一)坤の體である。五色を具へて居るが黄を以て正色とし、五味を具へて居るが甘を以て正味とする。ここを以て、禹貢には九州の土色を辨じ、周官には十有二壤の土性を辨じてある。蓋しその德たるや至柔にして剛、至靜にし常である。五行を兼ね統べて萬物を生ずるのであるが、その物箇箇の性能の如何に對しては毫も與るところはない。坤の德たるや誠に至れるものである。人間の身體に在つては脾、胃が之に應ずるものだから、諸種の土を藥に入れるは、皆その戊己を裨助するの效力を取るのである。本書は土に屬するもの六十一種を集めて土部とした。(舊本の三十九種は玉石の部に散見する。)

神農本經二種　梁の陶弘景註。
名醫別錄三種　梁の陶弘景。
唐本草三種　唐の蘇恭。
本草拾遺二十八種　唐の陳藏器。
四聲本草一種　唐の蕭炳。
開寶本草一種　宋の馬志。
證類本草一種　宋の唐愼微。
衍義補遺一種　元の朱震亨。

(一)坤ハ易ノ卦名。

本草綱目二十一種　明の李時珍。

附註

魏李當之藥錄　吳普本草　宋雷斅炮炙　齊徐之才藥對　唐甄權藥性
孫思邈千金　唐楊損之删繁　李珣海藥　蜀韓保昇重註　宋掌禹錫補註
蘇頌圖經　大明日華　宋寇宗奭衍義　金張元素珍珠囊　元王好古湯液
明汪機會編　元李杲法象　陳嘉謨蒙筌

土の一　凡て六十一種

白堊 本經　甘土 拾遺　赤土 綱目　黃土 拾遺
東壁土 別錄　太陽土 綱目 天星上土、六癸上土、上壬日土、清明戊上土、神后土を附す。
天子籍田三推犁下土 拾遺 社稷壇土、春牛土、富家土、亭部中土を附す。
道中熱土 拾遺　車輦土 拾遺　市門土 拾遺
戸限下土 拾遺　千步峯 綱目　鞋底下土 拾遺　柱下土 拾遺
牀脚下土 拾遺　燒尸場上土 綱目　塚上土 拾遺　桑根下土 拾遺
胡燕窠土 拾遺　百舌窠中土 拾遺　土蜂窠 拾遺　蜣蜋轉丸 拾遺
鬼屎 拾遺　鼠壤土 拾遺　鼢鼠壤土 拾遺　屋內壖下蟲塵土 拾遺

右附方　舊五十六　新一百七十五

土の一　凡て六十一種

白堊　音は惡（本經下品）　和名　はくあ（白堊）　英譯名　Chalk

釋名　**白善土**（別錄）　**白土粉**（衍義）　**畫粉**　時珍曰く、土は黃を正色とすれば白は土としての惡色である。故に堊と名けたものであつて、後世の者が惡の音を諱んで白善とも呼んで居る。

集解　別錄に曰く、白堊は(一)邯鄲の山谷に生ずる。采收に一定の時期はない。弘景曰く、これは現今の畫家の用ふるもので、產出が多く價格も安いものである。俗方に稀に用ゐる。頌曰く、胡居士は『(二)始興の(三)小桂縣、(四)晉陽鄕に白善がある』といつて居るが、今では處處にあつて、往往洗濯などに用ゐられて居る。西山經には『大次之山、その陽に堊多し』とあり。中山經には『葱聾之山、その中に大谷あつて白、黑、靑、黃の堊多し』とある。堊には五色あるが藥に入るはただ白いもののみである。宗奭曰く、白善土は京師では白土粉といひ、四角な塊に切つて洗濯

(一) 邯鄲ハ戰國時代ノ趙ノ國都ナリ。秦時代ニ郡トナス。卽チ今ノ直隸省ノ舊廣平府、及ビ河南省舊彰德府ノ地ナリ。趙ノ國都邯鄲ハ今ノ直隸省大名道ニ屬ス。
(二) 始興ハ三國吳ノ時、今ノ廣東省曲江縣ニ郡ヲ置キ、蕭梁ノ時、今ノ始興縣ノ地ニ徙ス。大庾嶺ノ

用として一般に賣つて居る。時珍曰く、白土は處處にある。(六)白瓷器を燒く陶土のことだ。

【修治】敩曰く、凡そ色の青きもの幷に底の白きものは用ゐぬやうにする。搗き篩つて末にし、鹽湯で(七)飛過して晒し乾して用ゐれば腸を結澀する虞れがない。大明に曰く、藥に入れるには燒いて用ゐる。湯、飲には入れない。

堊二兩毎に鹽一分を用ゐる。

【氣味】【苦し、溫にして毒なし】別錄に曰く、辛し、毒なし。久しく服してはならぬ。五臟を傷り、羸瘦となる。權曰く、甘し、溫煖なり。

【主治】【婦人の寒熱、癥瘕、月閉、積聚】(本經)【陰腫痛、漏下、不姙、洩痢】(別錄)【婦人の血結を療し、腸を澀し、痢を止める】(甄權)【(八)鼻紅、吐血、痔瘻、洩精、男子の水臟の冷え、婦人の子宮の冷えを治す】(大明)【王瓜と等分を合せて末にし、二錢を湯に點して服すれば頭痛を治す】(宗奭)

【發明】時珍曰く、諸種の土はよく濕に勝ち、脾を補ふものであるが、白堊土は兼て氣分にも入るものである。

南ニ在リ。

(三)小桂縣ハ太平寰宇記荊州江陵縣竹林堂ノ記事ニ『郭璞云。桂竹出始興小桂縣。來風防露。上合下疏』トアリ。現地位未詳。唐ノ時古桂縣アリ今ノ廣西省柳江道宜山縣ノ西南ニ當ル。然レドモ始興ノ地ニ非ズ。

(四)晉陽ハ今ノ山西省太原縣。春秋ノ末趙簡子此處ヨリ邯鄲ニ從ス。

(五)大次之山、葱聾之山共ニ無攷。

(六)白瓷器ハ瀨戸物。

(七)飛過ハ粉ヲ水ニ混ジ攪拌シテ沈澱セシムルコト。

(八)鼻紅ハ衂血。俗ニハナヂ。

附方　新九。【衄血の止まぬもの】白土末五錢を井華水で調へて服す。二服で根を除く。（瑞竹堂方）【水泄して不消化のもの】日夜止まぬには、煆いた白堊、炮じた乾薑各一兩、生で研つた楮葉二兩、これを末にして糊で綠豆大の丸にし、二十丸づつ米飲で服す。（普濟方）【翻胃吐食】男女いづれにもよし。白善土を赤く煆いて米醋一升に淬し、再び煆き再び淬して醋全部が乾くまでを度とし、その一兩を取つて研り、乾薑二錢半を炮じたものと末にし、一錢づつを調へて服す。一斤まで服すればその效甚だ妙である。（千金翼）【卒暴欬嗽】白善土粉と白礬一兩を末にし、薑汁の糊で梧子大の丸にし、就寢時に薑湯で二十丸を服す。（普濟方）【風赤爛眼】倒睫、拳毛も同じ。華佗の方では、白土一兩、銅靑一錢を末にし、半錢づつを湯に泡けて洗ふ。〇乾坤生意では、焰消半兩を加へて末にし、湯に泡けた杏仁と杵き和して皂子大の丸にし、一丸づつを凉水に浸して眼を洗ふ。（乾坤祕韞）【小兒の熱丹】白土一分、寒水石半兩を末にし、新水で調へて塗る。（錢乙小兒方）【痱子瘙痒】舊屋の梁上にある赤、白堊を刮り取り、末にして傅ける。（普濟方）【代指の腫痛】豬膏で白善土を和して傅ける。（肘後方）【臁瘡の乾かぬもの】白善土を煆いて研末し、生油で調へて搽る。（集玄方）

甘土（拾遺）

和名　漂布土の類・かみあらひつち・さらしつち
英譯名　Fuller's earth

【集解】藏器曰く、甘土は(一)安西、及び(二)東京の(三)龍門の土の底から出る。澄し取つて衣服に附いた膩を洗へば灰を落すやうに落ち、水に和して衣類に塗れば油垢を去る。

【主治】【草藥、及び諸菌の毒には、熱湯で末を調へて服す】（藏器）

赤土（綱目）

和名　あかつち
英譯名　Red soil, Red earth

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【湯火傷に主效がある。研末して塗る】（時珍）

【附方】新三。【(一)牙宣疳䘌】赤土、荊芥葉を共に研つて一日三回づつ揉み付ける。（普濟方）【風疹瘙痒】甚だ忍び難きには、赤土を研末し空心に溫酒で一錢を服す。（御藥院方）【身體面部の(二)印文】刺し破つて醋で赤土を調へて傅け、乾けばまた易へて傅ける。（千金方）

(一)安西トハ今ノ新疆省吐魯番縣ヨリ西方、今ノ庫車縣ニ亘ル一帶ノ地ヲ指ス。古ノ龜茲國ノ地ニシテ、唐朝ニ安西都護ヲ置ク。
(二)東京トハ洛陽、卽チ今ノ河南省河洛道管下ノ地ナリ。
(三)龍門ハ山名、洛陽ノ南、洛河ヲ隔テタル地ニ在リ、今ノ伊闕山ナリ。

(一)牙宣、一名齒衄。牙齦ガ露出シテ血ノ出ル事ナリ。
(二)印文ハ痣。

黄土（拾遺）

和名　わうど（黄土）
英譯名　Loess

【釋名】藏器曰く、張司空の言に『土三尺以上を糞といひ、三尺以下を土といふ。凡そこれを用うるには、上の惡物を去つて用うべきものだ。(一)客水を入らせてはならぬ』といつてある。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】藏器曰く、人が久しく土氣に觸るれば顏色が黄になる。土を掘つて(二)地脈を犯せば上氣して身體が腫れる。土を掘つて(三)神殺を犯せば腫毒を生ずる。

【主治】【洩痢の冷熱赤白、腹内の絞結痛。下血には、乾ける土を取つて水で三五回煮沸し、滓を絞り去つて一二升を暖服する。また諸藥毒、肉毒、合口椒毒、野菌毒を解す】（藏器）

【發明】時珍曰く、按ずるに、劉跂の錢乙傳に『宋の元豐年間、皇子儀國公が(四)瘈瘲を病み、國醫達も容易にそれを治し得なかつたが、公の姉第一皇女の推擧で錢乙が參入し、黄土湯を進めたところ、公の病はそれで癒えた。そこで公の父神宗皇帝が特に謁を賜り、黄土が疾を癒す理由に就いて御下問があつたので、乙は「土は水

(一) 客水ハ溜水。
(二) 地脈ハ水ノ地中ヲ流行スルコト人身ノ脈絡ニ似タルヲ云フ。
(三) 神殺、殺ハ凶神。
(四) 瘈瘲、ソリカヘルヤマヒ、ヒキツケ。

に勝つものだから、水がその平を得れば風が自ら退くの道理である」と奉答した。帝は大に悦んで乙を大醫丞に擢でた』と記してある。又、(五)夷堅志に『呉少師は病に罹つて數月に亘り、その身體は甚しく消痩して、毎日の食事の際、物が咽に入ると幾萬の蟲が一時に集つて攻めるやうに痒く且つ痛む。近侍の者を始めいづれもこれは勞瘵の病であらうと信じられ、明醫張銳を迎へて診療を受けることにした。すると銳はその病狀を視て、その翌朝は食事を攝らせず、僕を遣つて城下から(六)十里ほど隔つた地點の路傍の黄土を採らせ、溫酒二升に入れて攪拌し、藥百粒を投じてそれを飮ませた。すると俄に堪へ難い程痛み出し、廁へ行つて千匹ばかり(七)馬蝗を排泄した。その蟲は宛轉として動いて居るが、その半數程は已に弱つて死んでゐた。呉は頗る衰弱してゐたが、三日ばかり手當をすると漸く回復して、思ひ當る發病の原因に就いて「夏の戰に出陣した際、非常に咽が渇いたので谷間の水を一盃飮んだのだ。そのとき中に何物か咽を通つたやうに思つたが、それから此の病に罹つたのだ」と物語つた。そこで銳は「蟲は人の臟中に入れば勢ひ必ず繁殖する。隨つて饑ゑるから聚つて精血を咂ふのであつて、飽けばそれぞれ臟腑に散じて棲息する。

(五)夷堅志、宋ノ洪邁ノ著。

(六)十里ハ日本里程ノ約一里半。

(七)馬蝗、ムマビル。

(八) 朝陽ノ地ニ兩處

かやうな次第だから殺して掃き取る以外には結局治癒する方法がない。それゆゑに貴下に空腹を忍んで戴いて、蟲を一處に誘ひ集めたわけである。蟲は久しく土の味に遭はぬのと、また酒が好きなものだから、彼の劑を用ゐると饑に乘じて皆畢く集つた。それを一擧に洗ひ出して了つたのだ」と説明した。呉公は大いに喜んで厚く謝禮の物を贈り、丁重に送り歸した』と書いてある。

附方 舊二。新十。【小兒の土を喫ふもの】乾いた黄土一塊を研末し、濃く煎じた黄連湯で調へて服す。(救急方)【烏紗驚風】小兒の驚風で全身悉く黒きには、急に推して下に向け、黄土一盌を搗いて末にし、古い醋一鍾を入れて炒熱し、それを包んで熨し下げ、足まで熨し下げたとき刺し破るが妙である。(小兒祕訣)【突然の心痛】地上に王の字を書いてその中央の土を撮取し、水で一升を和して服するがよし。(陳藏器本草)【突然の視力喪失】黄土を水中で攪拌し、その水を澄して洗ふ。(肘後方)【牛馬の肉の毒】及び牛馬の肝の毒には、好き土二升を水で煮て淸し、一升を服すれば癒える。ある方では、頭髮を一寸ほどに截つてそれに和す。髮が皆肝を貫いて出る。(肘後方)【內痔痛腫】(八)朝陽の黄土、黄連末、皮消各一兩を豬膽汁と共に研つて泥のやうに

アリ、一ハ今ノ河南省鄧縣ノ東南八十支里ニ在リ。漢縣ヲ置キ劉宋ニ廢ス。一ハ今ノ山東省章邱縣ノ西北ニ在リ。漢ニ侯國ヲ置キ、蕭齊ニ廢ス。

（九）迮ハ迫ナリ。

し、毎日棗大に旋めて丸して肛内に納れ、一夜を過ぎて大便に隨つて之を去り、内用として烏梅、黄連二味の丸藥を服す。（孫氏集效方）【攧撲で死せんとするもの】一切の損傷、高所よりの墜落、木石に（九）迮られ、落馬し、車に撲たれ、その淤血が凝滯して氣絶し、瀕死に陷つたものもこれで活きる。淨き土五升を蒸熱して故布を重ねて裹み、二包みにして更互に熨す。熱過ぎて肉を破つてはならぬ。痛みが止れば已める。神效の方である。（孫眞人千金方）【杖瘡の未だ破れぬもの】乾いた黄土末を、童尿に雞子清を入れて調へて瘡上に塗刷し、乾けば止めて同時に熱水で洗ひ去り、復た塗刷して復た洗ふ。紫が紅に變るまで數十回繰返し、そこで兩膀を刷して血が陰を攻めるを防ぐ。（攝生方）【湯火傷灼】醋が黄土を調へて塗る。（談野翁方）【蜈蚣の螫傷】地上に王の字を書き、その内の土を取つて摻れば癒える。（集簡方）【蜂蟻の叮螫】手を反して地上の土を取つて傅ける。（千金方）【蠼螋尿の瘡】地上に蠼螋の形を畫き、刀を以て細にその腹の部分の土を取り、唾で和して塗る。再び塗れば癒える。孫眞人云く『予はこの疾で五六日經つても癒えなかつたが、ある人からこの法を敎へられて遂に瘳えた。やはり萬物相感ずるところのあるものと見え

る。が、それが如何なる理由に據るものか判らない」(千金方)

鑄鐘黄土（拾遺）［主治］【突然の心痛、疰忤、惡風には、溫酒で一錢を服す】(藏器)

鑄鏵鉏孔中黄土（拾遺）［主治］【男子の陰嚢濕痒、及び陰汗には、細末にして撲つ】(藏器)

東壁土（別錄下品）

和名　家の東側にある壁の土
英譯名　Earth of the wall on the eastern side of the house

［氣味］【甘し、溫にして毒なし】［主治］【下部の瘡、脱肛】(別錄)【洩痢、霍亂、煩悶を止める】(藏器)【溫瘧。目に點ければ(一)瞖を去る。蜆殼と共に末にして(二)豌豆瘡に傅ける】(甄權)【小兒の(三)風臍を療す】(弘景)【乾、濕の二癬に摩すれば極めて效がある】(蘇恭)

［發明］弘景曰く、これは家屋の東側の壁土であつて、常に眞先に日を見るといふ理由に依るのである。また衣類の油垢を除くには石灰、滑石に勝る。藏器曰く、陽に向つて久しく乾く點を取るのである。宗奭曰く、久しく乾くの說は當らな

(一)瞖、メボシ。
(二)豌豆瘡ハ痘瘡。
(三)臍風ハ小兒ノヒキツケ。

い。蓋し東壁は先づ第一に太陽の眞火を得て烘炙するものだから瘟疫を治するのである。太陽の初めて出たときは(四)少火の氣が壯であるが、正午には壯火の氣が衰へる。故に南壁は用ゐずして東壁を用ゐるのである。時珍曰く、昔、ある女が何時からともなく河中の汚泥を嗜むやうになり、毎日數盌を食ふやうになつたが、玉田隱者が壁間の敗土を水で調へて飮ませると、それで癒えたといふ。又、凡そ脾胃に濕多く吐瀉霍亂するには、東壁土を新汲水で攪化して澄まして服すれば止る。蓋し脾は土を主り、燥を喜び、濕を惡むものだから、太陽の(五)眞火の照した土を取つて眞火の生發の氣を引き、土を補つて濕に勝てば吐瀉が自ら止むわけである。嶺南方には、(六)瘴瘧を治する香椿散の内に南壁土を用ゐ、(七)近方には、反胃嘔吐を治するに西壁土を用ゐてある。これは、或は太陽の(八)離火の照す所の氣を取り、或は西方の收斂の氣を取るのであるが、いづれも氣を借りて脾胃を補ふに過ぎぬのである。

附方　舊三。新九。【急心痛】五十年の古い壁土と枯礬と二錢を末にし、蜜で丸にして艾湯で服す。(集玄方)【霍亂煩悶】陽に向ふ壁土の煮汁を服す。(聖濟錄)【藥毒の煩

(四)少火ノ氣旺ナリト云フハ、周圍ノ溫度低キガ故ニ旺ナルガゴトク思フナリ。

(五)眞火、直射光線。

(六)瘴瘧、マラリヤ。

(七)近方、近世ノ方。

(八)離火、南方ノ火。

悶】溺死なるには、東壁土を水で調へて三升を頓服する。（肘後方）【烏頭の毒を解す】川烏頭の毒と草烏頭の毒とに拘らず、陳壁土を湯に泡け服す。冷水でもよし。（通變要法）【六畜の肉の毒】東壁土の末一錢を水で服すれば安全である。（集玄方）【目中の翳膜】東壁土の細末を日毎に點ければ涙が出て良好である。（肘後方）【肛門の凸出】故き家屋の東壁上の土一升を研末し、それを長皂莢で酌んで摻りかけ、その上で皂莢を炙いて更互に熨す。（外臺祕要）【(九)痱子瘙痒】乾いた壁土の末を傅けば手に隨つて癒える。（普濟方）【耳瘡、唇瘡】東壁土を胡粉に和して傅ける。（救急方）【癧の破れて年經るもの】膿水の絶えざるには、百年の茅屋の厨中の壁土を末にし、輕粉を入れて調へて傅ければ半月にして乾いて癒える。（永類方）【諸般の惡瘡】拔毒散——東墻上の土、大黄等分を末にし、無根井華水で調へて塗り、乾けば再び塗る。（瑞竹堂方）【發背癰癤】多年烟熏した壁土と黄蘗等分を末にし、薑汁で拌ぜ調へて攤して貼り、更に一錢匕を茅香湯で調へて服す。（經驗方）

太陽土（綱目）

和名　にちりんのあるはうがくのつち
英譯名　Earth on the direction of the sun

(九)痱子、アセモ。

【主　治】【人の家で土を動かし(一)禁を犯せば小兒が氣喘を病む。それにはただ(二)九宮を按じて太陽が何宮に在るかと見、その方角の土を取つて湯に煎じて飲めば喘が鎭る】(時珍)正傳に出づ。

【附　錄】　(三)**執日天星上土**　藏器曰く、これを取つて薫草、柏葉に和し、門戸の一尺四方を塗れば盜賊が來なくなる。

執日六癸上土　時珍曰く、抱朴子に『常に執日に(四)六癸上の土、城下の南門の土、(五)歲破の土、(六)月建の土を取り合せて人形を作り、それを(七)朱鳥地上に着ければ盜を辟ける』とある。

(八)**二月上壬日土**　藏器曰く、泥にして屋根の四方に塗れば養蠶に宜い。

(九)**清明日戌上土**　時珍曰く、狗毛と共に泥にし、室の扉の穴に塗れば永く蛇、鼠、諸蟲が入らぬ。

(一〇)**神后土**　時珍曰く、毎月の第一日にこれを取つて屋根の四角に塗り、また鼠の穴を塞げば一箇年間鼠が皆迹を絶つ。これは李處士の鼠を禁ずる方である。神后は正月中に始り十二辰を順行する。

(一)禁トハ惡イ方角。
(二)八方ニ中央ヲ加ヘタルモノヲ天ノ九宮ト名ク。群書拾唾ニ出ヅ。
(三)執日ハ曆日ノ配當ニ、建除滿平定執破危成收開閉ノ十二ノ名目アリ。其執日ヲ云フ。此ノ執日ニ天星ノアル處ノ方角ノ土、天星トハ天恩星、天祐星、天慶星、天瑞星、天厚星、天德星ノ六星。天星ノ事萬通曆ニ詳ナリト云フ。
(四)執日六癸トハ癸酉、癸未、癸巳、癸卯、癸丑、癸亥ヲ云フ。此方角ノ土。
(五)歲破ハ曆ノ八將神ノ中歲神ノ方角。
(六)月建土ハ斗柄ノ指ス方角ノ土ナリ。正月ハ建寅二月ハ建卯ノ類ナリ。

天子藉田三推犂下土（拾遺）

和名　天子正月のすきぞめのからすきの下のつち
英譯名　Soil under the plow of Emperor's plowing ceremony.

【釋名】時珍曰く、月令に『天子は元日を以て(一)穀を(二)上帝に祈り、親しく(三)耒耜を載せ、(四)三公、九卿、諸侯、大夫を率ゐて躬ら耕し、天子は三推、三公は五推、卿、諸侯は九推し、宮中に還つて正殿で祝盃を擧げる。これを命けて勞酒といふ』とある。

【主治】〔水で服すれば、驚悸、癲邪に主效があり、神を安んじ、魄を定め、志を強くする。これを藏して官衙に入れば事に懼れず、大官に謁するに利あり、婚姻や取引事によし。王者が封禪した地の五色の土は之に次ぐ〕（藏器）

【附錄】**社稷壇土**　藏器曰く、地方長官が赴任のとき、自らこの土を取つて門戸に塗れば盜賊をして管轄地域内に入らせない。

春牛土　藏器曰く、角の上の土を取つて戸上に置けば田作をよくする。時珍曰く、宋朝の頃、立春の日に春牛を御藥院に納め、牛の眼睛を取つて眼藥の材料に貯

(七)朱鳥地上トハ南方ノ地上。
(八)二月ノ初ノ壬ノ日。
(九)清明日戌上土ハ三月節ノ戌ノ方角ノ土。
(一〇)神后ハ正月申、二月酉ト順ニ十二月ヲ運ル毎月一日ニ其方角ノ土ヲ取ル。
(一)穀ハ穀作。
(二)上帝ハ天神。
(三)耒耜ハ犂ノ如キ農具、柄ノ曲木ヲ耒ト云ヒ、土ニ入ル刀部ヲ耜ト云フ。上古ハ全體木ヲ以テ作ル、後世耜ヲ鐵ニ易ユ。
(四)周ノ三公ハ太師、太傅、太保。周ノ九卿ハ冢宰、司徒、宗伯、司馬、司寇、司空、少師、少傅、少保、諸侯ハ大名。大夫ハ

郡長。
(五)三推ハ農具ヲ以テ耕スコト。
(六)封禪ハ天ヲ祭ル壇ノ名。泰山ト梁父ノ兩所ニ之ヲ作ル。
(七)牛土ハ牛身ニ附着スル土。
(八)亭ハ漢書ニ十里ニ一亭トアリテ、北海道ニアリシ驛傳舍ノ如キモノ。亭長ハ盜賊ノ吟味ヲモ兼ヌ。
(一)熱土、大觀本草ニハ熱塵トアリ。

へ、また人民にその牛を鞭たしめて春の來たことを知らしむる行事があつた。その時に庶民が爭つて(七)牛土を取つて持行き、それで養蠶の結果がよいといひ、又、その土を取つて簷下に撒けば蚰蜒を辟け得るといつた。

富家土　藏器曰く、七月の丑の日に人に知られぬやうにしてその中庭の土を取り、それを竈に塗れば富裕になる。時珍曰く、大晦日に富家の田の中の土を取つて竈に塗れば吉事を招ぐ。

(八)**亭部中土**　時珍曰く、これを取り泥にして竈に塗れば、水、火、盜賊の難に罹らぬ。屋根の四角に塗れば鼠が蠶を食はぬ。倉庫に塗れば鼠が稻を食はぬ。穴を塞げば百日で鼠が皆絶える。以上の諸說は陰陽雜書に出て居ることだ。

(一)道中熱土（拾遺）

和名　かいだうのやけつち
英譯名　Parched ground on the highway

主治　【夏季の暍死には、その土を心口に積んで少し冷えれば取換へる。それで氣が通じて甦る】(藏器)【また熱土で臍の傍を圍んで人をして臍中に尿させ、その上に熱土、大蒜等分を水に搗き滓を去つて灌げば活きる】(時珍)

十字道上土　主治【頭面の黄爛瘡に主效あり。竈下土と等分を傅ける】（時珍）

車輦土（拾遺）

和名　くるま・てぐるまのほこり
英譯名　Dust on the waggon and hand-cart

主治　【黄汁の出る惡瘡には、(一)鹽車邊脂角上の土を取つて塗る】（藏器）【行路者の噎死せるには、車輪の土五錢を取つて水で調へ、澄まして一盞を服すれば甦る。又、初生兒の皮膚なく色赤きものは、受胎してからまた土氣を得ないからである。それには車輦土を取つて碾いて傅ければ三日の後に皮膚を生ずる】（時珍）

市門土（拾遺）

和名　いちばのもんのしたつち
英譯名　Earth under the gate of market

釋名　時珍曰く、日中人出の多い場所の門柵である。

主治　【婦人の出産を安くする。臨月に入つてこれを身に帶び、臨産の際酒で一錢を服するのである】（藏器）

戸限下土（拾遺）

和名　しきゐのしたつち
英譯名　Earth under the groove of sliding-door

(一) 車邊脂角ハ牛角ノ一名、證類本草ニ見ユ。截鹽車牛角ナリ。

釋名　時珍曰く、限とは門の敷居である。

主治　【産後の腹痛には、熱酒で一錢を服す。また(一)吹奶を治するには、雄雀糞と和して煖酒で方寸匕を服す】（藏器）

千步峯（綱目）

和名　にはこぶ
英譯名　Earth elevation on the entrance of the house

集解　時珍曰く、これは人家の通路に隆起して居る土であつて、人の往來の鞋履の沾ひが積つて出來るものである。家相家の言に、人の宅地にこれがあるのは、家運の興盛なる印だといふ。

主治　【便毒發生の初期には、生薑を醮した醋で泥に磨つて塗る】（時珍）

鞋底下土（拾遺）

和名　わらぢのそこのつち
英譯名　Earth on an old straw-sandals

主治　【他鄕へ往つて水、土に(一)伏せぬには、刮り落して水に和して服すれば止む】（藏器）

(一)吹奶、一本吹乳ニ作ル。

(一)伏セズトハ順應セザルヲ云フ。

(一)膊ハ肩。

柱下土（拾遺）

和名　はしらのしたのつち
英譯名　Earth under pillars

主治　【突然の腹痛には、水で方寸匕を服す】（藏器）【胎衣の下らぬには、その宅中の柱下の土を取つて研末し、雞子清で和して服す】（思邈）

牀脚下土（拾遺）

和名　ゆかのしたのつち
英譯名　Earth under the floor

主治　【狂犬に咬まれたるには、水で和して傅け、七壯を灸する】（藏器）

燒尸場上土（綱目）

和名　やきばのつち
英譯名　Earth of the crematory

主治　【邪瘧には、黑を帶びた土を取つて葱と共に搗き、丸にして耳を塞ぎ、或は、(一)膊上に掛ければ止る。男は左に、女は右に掛ける】（時珍）

附方　新四。【よく魘はれて夢多きもの】枕の中と履の中に燒人灰を置けば自ら止む。（本草拾遺）【尸厥卒死】人事不省なるには、燒尸場の土二三錢を細に擂り、湯に泡けて灌げば活きる。この物が無いときは竈の心の土でこれに代へる。（何氏方）【小

兒の夜啼】燒尸場の土を枕邊に置く。（集簡方）【脚底の多汗】燒人場上の土を鞋底內に鋪いて踐む。灰もよし。（集玄方）

塚上土（拾遺）

和名　つかのうへのつち
英譯名　Earth on the mound

主治【瘟疫には、五月一日に土、或は甎石を取り、瓦器中に入れて門外の階下に埋める。それで一家族が時氣に罹らない。また元旦に古塚の甎を取り、咒して大門の上に懸ける。それでその一箇年は疫疾がない】（藏器）

附方　新一。【（一）腸癰】死人塚上の土を泥にして塗るが良し。（千金方）

桑根下土（拾遺）

和名　くはのきのねのしたつち
英譯名　Soil under the mulberry-tree root

主治【惡風、惡水に中つて肉の腫れたるには、水で和して傅け、二三十壯を灸して熱氣が透入すれば平癒する】（藏器）

胡燕窠土（拾遺）

和名　おほつばめのすのつち
英譯名　Earth of the swallow nest

（一）腸癰ハ腸炎。ハラワタノデキモノ。

【主治】【毒なし。屎と共に湯にして小兒を浴すれば驚邪を去る】（弘景）【風瘙、癮疹、及び（一）惡刺瘡が浸淫して全身に瘑瘡が瀰漫し、心に至るものは死亡する。いづれも水で和して傅ければ三兩日で瘥える】（藏器）【口吻白禿諸瘡を治す】（時珍）

【附方】舊三。新七。【濕瘑疥瘡】大なる胡燕窠の子を抱く處の土を末にし、瘡を淡鹽湯で洗つて拭ひ、乾した上へ傅ける。一日一回。（小品方）【黃水肥瘡】燕窠土一分、麝香半分を研つて傅ける。（普濟方）【浸淫濕瘡】心下に發するものは、早く治療せねば死亡する。胡燕窠中の土を研末し、水で和して傅ける。（葛氏）【口角の爛瘡】燕窠泥を傅けるがよし。（救急方）【（二）白禿頭瘡】百年の古い屋下の燕窠泥と蠨蛸窠を研末し、麻油で調へて髮を剃つた後へ搽る。（聖濟錄）【蠼螋尿瘡】全身に遶り、汁の出るには、燕窠中の土を猪脂、苦酒に和して傅ける。（外臺祕要）【瘭疽惡瘡】手足、肩背に生じ、纍纍として赤豆の如くなり、汁の出るには、痂を剝いで溫醋、米泔で洗淨し、胡燕窠土を生後百日の男兒の屎に和して傅ける。（千金方）【（三）皮膚中毒】瘭疰と名ける。醋で燕窠土を和して傅ける。（千金方）【風瘙癮疹】胡燕窠土を水で和して傅ける。（千金方）【小兒の丹毒】陽に向ふ燕窠土を末にし、雞子白で和して傅ける。（衞生易簡方）【一切の

（一）惡刺瘡・癩病ノ如キ膿瘡。瘑瘡ハ膿窠瘡。

（二）白禿、シラクモ。

（三）皮膚中毒。千金方ニ見ルニ皮膚中痛トアリ。

惡瘡】燕窠の內外の泥糞を研細し、油で調へて搽る。黃蘗末を加へる。（瑞竹堂方）

百舌窠中土（拾遺）

和名　ひやくぜつとりのすのつち
英譯名　Earth in the nest of Pei-su

【主治】【蚯蚓、及び諸惡蟲の咬瘡には、醋で調へて傅ける】（藏器）

土蜂窠（拾遺）

和名　ぢばちのすのつち
英譯名　Earth of the wasp comb

【釋名】蠮螉窠　時珍曰く、卽ち細腰蜂である。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【癰腫風頭】（別錄）【小兒の霍亂吐瀉には、炙いて研り、乳汁で一錢を服す】（聖惠）【醋で調へて腫毒、及び蜘蛛の咬傷に塗る】（藏器）【醋で調へて蜂蠆の毒に塗る】（宋奭）【丁腫、（一）乳蛾、婦人の難產を治す】（時珍）

【附方】新六。【婦人の難產、】土蜂窠を水に泡け湯にして飮む。取る時に一箇の蜂窠に逢へば男子が生れ、二個ならば女子が生れる。最も驗がある。（婦人良方）【腫毒の焮痛】陳藏器の本草には、醋で蜂窠を和泥して塗るとある。（一）直指では、川烏頭

（一）乳蛾ハ扁桃腺炎。

等分を加へる。それでまだ結せぬものは散じ、已に結したものは破れる。〔丁瘡の腫痛〕土蜂窠を煆き、蛇皮を焼き、等分を酒で一錢を服す。(直指方)〔咽喉の乳蛾〕土蜂窠一箇を末にし、先づ楮葉で患者の舌を擦り破つて血を出させてから、その末を醋で和して羽で點ければ痰涎を出させて效力を發する。後に竹根を水に擂つて數口服し、通じをつける。(瑞竹堂方)〔手足發指〕毒痛忍び難きには、壁間の泥蜂窠を末にし、乳香少量を入れて研りまぜ、醋で調へて塗る。乾けば醋で潤す。(奇效方)〔蠷螋尿瘡〕蟢蛉窠を水で調へて傅ける。(集玄方)

蜣蜋轉丸（拾遺）

和名 くそこがれのまろがせつち
英譯名 Dung pellet of Scarabaei.

〔釋名〕土消 藏器曰く、これは蜣蜋が推して丸める土のことで、土中に埋藏するものだから地を掘つて取るのである。正圓形のもので、人が捻つて作つたやうである。久しく時を經たものほど佳し。

〔氣味〕〔鹹く苦し、大だ寒にして毒なし〕〔主治〕〔湯に淋し汁を絞つて服すれば、傷寒、時氣、黃疸の煩熱、及び霍亂吐瀉を療ず。燒いて性を存し酒で服すれ

ば項癭を治す。一切の瘻瘡に塗る】（藏器）

鬼屎（拾遺）

和名　ちばす（變形菌の一種）
學名　Fuligo septica, Gmel.

【集解】藏器曰く、陰濕の地に生じ、屎のやうでもあり、また地錢のやうでもあり、色は黃白である。

【主治】【人、馬の(一)反花瘡に、刮り取つて油に和して塗る】（藏器）

鼠壤土（拾遺）

和名　ねずみのはららげつち
英譯名　Light soil excavated by fieldmouse

【釋名】時珍曰く、柔にして塊なきを壤といふ。

【主治】【中風の筋骨不隨、冷痺の骨節疼、手足の拘急、(二)風掣痛、偏枯死肌には、多く取收めて曝乾し、蒸熱して袋に盛り、それで更互に熨す】（藏器）【小兒の屎に和して丁腫に塗る】（思邈）

鼴鼠壤土（拾遺）

和名　うごろもちのもちたろつち
英譯名　Light soil excavated by moles

(一) 飜花瘡ハ圭狀瘡。一名束狀瘡。

(二) 風掣痛、詳ナラズ。或ハ風痙ノ異名カ、然ラバ子癇卽チ産婦搐搦ノコト。

【集解】藏器曰く、これは田中に棲む嘴の尖つた小鼠で、陰に地中を穿つて棲み、日を見ることの出來ぬものである。

【主治】【（一）鬼疰の氣痛には、秫米の泔汁で和して餅にし、燒き熱して綿に裹んで熨す。また腫毒に主效があり、醋に和して傅ければ極效がある】（藏器）【姙婦の腹内が鐘鳴するには、研末二錢を麝香湯で服すれば立ろに癒える】（時珍）

屋内壖下蟲塵土（拾遺）

和名　いへのうちかべのほとりのむしくそのつち
英譯名　An excrement of house-worms

【釋名】時珍曰く、壖の音は軟（ナン）で、平聲に發音する。河邊の地、及び垣下の地をいづれも壖といふ。

【主治】【惡瘡の久しく乾かぬには、油で調へて傅ける】（藏器）

蟻垤土（拾遺）

和名　ありづかのつち
英譯名　Soil of ant-mound

【釋名】蟻封　時珍曰く、垤の音は迭（テツ）である。高く盛り上げた形をいふ。封とは土を聚めた形である。

（一）鬼疰ハ卒然心腹痛ヲ發シテ悶絶スルヲ云フ。

【主　治】【(一)狐刺瘡には、七粒を取つて醋で和して搽る。又、死胎の腹に在るもの、及び胞衣の下らざるには、炒つて三升を嚢に盛り、心下を搨すれば自ら出る】(藏器)

白蟻泥（綱目）

和名　はありのくそ
英譯名　An excrement of white-ants

【主　治】惡瘡腫毒には、松の木の上のものを用ゐ、黄丹と共に各ゝ黒く炒つて研り、香油に和して塗る　瘥れば止める。(時珍)

蚯蚓泥（綱目）

和名　みみずのふん
英譯名　An excrements of earthworms

【釋　名】(二)蚓螻　音は婁(ロウ)である。六一泥

【氣　味】【甘く酸し、寒にして毒なし】【主　治】【久しきに亘る赤白熱痢には、一升を取つて煙の出なくなるまで炒り、汁半升を沃いで濾し淨めて飲む】(藏器)【小兒の陰嚢が突然虛熱し、腫痛するには、生甘草汁に輕粉末を入れて調へて塗る。鹽で研つて瘡に傅ければ熱毒、及び蛇、犬の咬傷を去る】(日華)【狂犬傷に傅ければ犬毛を出して神效がある】(蘇恭)

(一)狐刺瘡ハ狐尿ニ刺サレテ發スル瘡ナリト云フ。

(二)螻ハ塿ノ誤、金陵本ニ螻ニ作ル。

(二) 吹乳ハ乳癰。

(三) 月蝕ハ瘡腫。

附方　舊五、新十七。【熱瘧を斷截する】邵氏の靑囊方では、五月五日正午に蚯蚓糞を取り、麪で和して梧子大の丸にし、硃砂のころもをかけ、三丸づつ無根水で服す。生もの、冷たきものを忌む。瘧はそれで止つて完全な效がある。或は菖蒲末、獨頭蒜を加へて同じく丸にする。【傷寒讝語】蚯蚓屎を涼水で調へて服す。（簡便方）【小便不通】蚯蚓糞、朴消等分を水で和して臍下に傅ければ通じる。（皆效方）【小兒の吐乳】田中の地龍糞一兩を取つて研末し、空心に米湯で半錢を服す。二三服を過ぎずして效がある。（聖惠方）【小兒の卵腫】地龍糞を薄荷汁で和して塗る。（危氏得效方）【婦人の(二)吹乳】韭地中の蚯蚓屎を研細して篩ひ、米醋で調へて厚く傅け、乾く度に取換へれば三回で癒える。涼水で調へてもよし。（藺氏經驗方）【時行腮腫】柏葉汁で蚯蚓泥を調へて塗る。（丹溪方）【一切の丹毒】水で蛐蟮（ミミズ）泥を和して傅ける。（外臺）【脚心の腫痛】長時間の步行や直立から發つたものには、水で蚯蚓糞を和して傅ければ一夜で癒える。（永類鈐方）【耳後の(三)月蝕】蚯蚓糞を燒き、豬脂で和して傅ける。（子母祕錄）【聤耳出水】瘡を成すには、蚯蚓糞を末にして傅け、竝に吹き込む。（千金方）【齒斷宣露】蚯蚓泥を水で和して團にし、赤く煆いて研末し、臘豬脂で調へて一日三

回づつ傅ける。(千金方)【咽喉骨哽】五月五日の正午に韭畦中で無言のまま東を向いて蚯蚓泥を取り、少量づつ喉外に塗擦すればその骨は自ら消える。これを六一泥と名ける。【蜈蚣の螫傷】蚯蚓泥を傅ければ效がある。(集效方)【金瘡困頓】蚯蚓屎末を一日三回水で方寸匕を服す。(千金方)【射罔の毒を解す】蚯蚓屎末二方寸匕を井水で服す。(千金方)【吐血の止まぬもの】石榴根下の地龍糞を研末し、新汲水で三錢を服す。(聖惠)【反胃轉食】地龍糞一兩、木香三錢、大黄七錢を末にし、五錢づつ無根水で調へて服す。煎、煿、酒、醋、椒、薑、熱物を忌む。一二服で神效がある。(邵眞人經驗方)【(四)燕窩生瘡】韭地の蚰蜒屎を米泔水で和して煆き、百草霜等分を入れて研末し、香油で調へて塗る。(摘玄方)【小兒の頭熱】鼻が塞つて通ぜぬには、濕つた地龍糞を捻つて餅にし、顖上に貼つて一日に數回取換へる。(聖惠方)【足臁爛瘡】韭地の蚯蚓泥を乾して研り、輕粉を入れ、清油で調へて傅ける。(便民圖)【外腎の生瘡】蚯蚓屎二分、綠豆粉一分を水に研つて塗り、乾けばまた塗る。(便民圖纂)

螺螄泥（綱目）

和名　になのくそ
英譯名　An excrement of Cerithium

(四) 燕窩生瘡、意義解シガタシ。

主治【性は涼なり。反胃吐食に主效がある。螺螄一斗を取つて水に浸し、泥を取つて晒し乾し、一錢づつ火酒で調へて服す】（時珍）

白鱓泥（綱目）

和名　うなぎにつけるどろ
英譯名　Earth adhered to the body if eels

主治【(一)火帶瘡には、泥を水で洗ひ取つて炒り、研つて香油で調へて傅ける】（時珍）

猪槽上垢土（拾遺）

和名　ぶたぶねのうへのつち
英譯名　Earth on the pig's manger

主治【難產には、一合を取つて麪半斤、烏豆二十粒と煮てその汁を服す】（藏器）【(二)火餤丹毒の赤黒色なるものには、槽下の泥を取つて傅け、乾けばまた傅ける】（時珍）

犬尿泥（綱目）

和名　いぬのせうべんのかかりたろつち
英譯名　Earth stained by dog's stale

主治【妊娠傷寒の患者をして胎兒を落させぬやうにするには、腹の上に塗り

(一)火帶瘡ハ帶狀匍匐疹。俗名ツヅラゴ。

(二)火炎丹毒ハ丹毒ノコト。

乾けば取換へる】（時珍）

驢尿泥（拾遺）

和名　うさぎうまのせうべんのかかりたるつち
英譯名　Earth stained by donkey's stale

【主治】【蜘蛛の咬傷に傅ける】（藏器）

尿坑泥（綱目）

和名　せうべんつぼのどろ
英譯名　Earth of an urine pot

【主治】【蜂、蠍、諸蟲の咬傷に主效がある。これを取つて塗る】（時珍）

糞坑底泥（綱目）

和名　こえつぼのそこのどろ
英譯名　Earth on the bottom o' dung-crack

【主治】【背部に發する諸惡瘡には、陰乾して末にし、新水で調へて傅ければ痛みが立ろに止る】（時珍）

【附方】新一。【丁腫】糞下土、蟬蛻、全蠍等分を搗き、錢大の餅にし、香油で煎じ溶して溫服し、滓を瘡の周圍に傅ければ丁は自ら出る】（聖濟總錄）

簷溜下泥（綱　目）

和名　あまだれおちのどろ
英譯名　Mud under rain drops

【主　治】【豬咬、蜂螫、蟻叮、蛇傷等の毒には、いづれもこれを取つて塗る。又、羊脂に和して腫毒、丹毒に塗る】（時珍）

【附　方】新一。【蠍蠆の螫叮】蠍には雌雄があり、雄の螫傷は痛が一箇所である。それには井底泥で痛所を封じ、乾けば取換へる。雌の螫したものは痛みが諸處に牽き渉るものである。それには瓦溝下の泥で封ずる。若し雨が降らぬときは、新汲水を屋上に注ぎ淋下して泥を取る。（肘後方）

田中泥（綱　目）

和名　たのなかの「どろつち」
英譯名　Mud of the rice-field

【主　治】【馬蝗が人の耳に入りたるには、泥一盆を取つて耳の邊に枕すれば、蟲は臭氣を聞いて自ら出る。誤つて馬蝗を呑み、それが腹に入つた場合には、酒に一二升を和して服し、下し出す。（時珍）

井底泥（證類）

和名　ゐどのそこの　どろ
英譯名　Mud from the bottom of the well

主治　【湯火瘡に塗る】（證類）【姙婦の熱病を療するには、これを取つて心下、及び丹田に傅けて胎氣を護るがよし】（時珍）

附方　新五。【頭風の熱痛】井底泥に大黃、芒消の末を和して傅ける。（千金方）【胞衣不下】井底泥を雞子一箇ほど井華水で服すれば下る。（集玄方）【臥して俄に寤めぬもの】火で照してはならぬ。ただその踵と足の拇指の爪際を痛く嚙み、その顏面に多く唾し、その目に井底泥を塗り、別の人が井戸に頭を垂れてその患者の姓名を呼べば甦る。（肘後方）【小兒の熱癤】井底泥を周圍に傅ける。（談野翁方）【蜈蚣の螫傷】井底泥を頻に傅ける。（千金方）

烏爹泥（綱目）

和名　あせんやく
英譯名　A decoction of Acacia Catechu, willd.

釋名　烏壘泥（綱目）孩兒茶　時珍曰く、烏爹を或は烏丁と書く、皆外國語で、何の字が正しいといふことはない。

(一)南番トハ嶺南、交趾以外ノ諸外國ヲ指ス。
(二)老撾ハ雲南省境勞水以南今ノ佛領安南ノ北西境ヲナスノ地ナリ。
(三)暮雲場、未攷。
(四)䐈ハ肌ニ同ジ。

【集解】時珍曰く、烏爹泥は(一)南番の瓜哇、暹羅諸國に産出する。現今では雲南、(二)老撾、(三)暮雲場の地方で製造するといふことである。所謂烏爹泥は、細茶末を竹筒中に入れて兩端を密閉し、永い間汚泥溝中に埋めて取出し、汁に搗いて熬製して造るもので、その塊の小くて潤澤なものを上等とし、塊が大く焦枯したものはこれに次ぐ。

【氣味】【苦く濇し、平にして毒なし】【主治】【上膈の熱を淸くし、痰を化し、津を生ずる。金瘡、一切の諸瘡に塗れば、(四)䐈を生じ、痛を鎭め、血を止め、濕を收める】(時珍)

【附方】新八。【鼻淵流水】孩兒茶末を吹き入るが良し。(本草權度)【牙疳口瘡】孩兒茶、硼砂等分を末にして搽る。○積德堂方では、走馬牙疳を治するに、孩兒茶、雄黃、貝母等分を末にし、米泔で口を漱淨してからそれを搽る。【下疳陰瘡】外科には、米泔で洗淨し、孩兒茶末を傅ければ神效がある。或は胡黃連等分を加へる。○纂奇方では、孩兒茶一錢、眞珠一分、片腦半分を末にして傅ける。○唐氏は、孩兒茶一錢、輕粉一分、片腦一字を末にして搽る。【痔瘡腫痛】孩兒茶、麝香を末にし、

唾津で調へて傅ける。(孫氏集玄方)【脱肛氣熱】孩兒茶二分、熊膽五分、片腦一分を末にし、人乳で肛上に搽る それで熱汁が自ら下り、肛が收る また痔瘡を治す (董炳方)

彈丸土 (拾遺)

和名 だんごのみのつち
英譯名 Earth ball used in bow shooting

【主治】【婦人の難産には、熱酒で一錢を服す】(藏器)

自然灰 (拾遺)

和名 海泡石の類
英譯名 A kind of sepiolite

【集解】藏器曰く、(一)南海地方に產するもので、狀態は黃土灰の如く、洗濯用になる 琉璃、瑪瑙、玉石をこの灰に埋めれば、爛れて泥の如く柔になり、雕刻が容易になる。

【主治】【白癜風、(二)癧瘍風には、重淋して汁を取り、醋に和して傅け、布を以て揩り破つた上に傅ける 瘡になつても心配に及ばぬ】(藏器)

(一)南海ハ秦時代ノ郡名、廣東省ノ沿海地方、及ビ廣西省梧州以南ノ地ニシテ、陳氏ノ當時ナホ之ニ因ル。一般ニハ、臺灣海峽以南、安南地方ニ亘ル沿海地方ノ總稱ナリ。

(二)癧瘍風、一名汗斑。和名アセナマヅ。

伏龍肝（別錄下品）

和　名　へつつひのなかのつち
英譯名　Earth in the hearth

【釋名】 **竈心土** 弘景曰く、これは竈の中の、(三)釜月と相對する眞下の黄土である。竈には神があるから伏龍肝と號したのだ。殊更廻りくどい隱名をつけたまでのことである。今世間では(四)廣州の(五)鹽城屑を用ゐて、漏血、瘀血を治療して居るが、あれもまた近月の土である。蓋し火燒の意義を推して利用したのだ。斅曰く、凡そこれを使用する際に、竈下の土を誤用してはならぬ。伏龍肝なるものは、十年以來の永い間、竈の額の内に火氣が積り、そこに自ら結晶する赤色の石のやうなもので、中は黄色だ、その形は八箇の稜角がある。これを取つて研細し、水で飛過して用ゐるのである。

時珍曰く、按ずるに、廣濟曆に竈を作るに忌む日を說明して『伏龍の在る日に移し作つてはならぬ』とある。これで見ると伏龍といふのは竈神のことで、後漢書に『陰子方が臘の日の早朝、炊事をして居ると竈神が形を現した』とあり、その註に『豬肝を買つて竈に塗るがよい。嫁が孝貞になる』とある。伏龍肝なる名稱と意義はこれ

(三) 釜月ハ釜臍ノ事。

(四) 陶氏ノ所謂廣州トハ今ノ廣東、廣西二省ノ地ヲ指ス。三國時代以來ノ州名ナリ。

(五) 鹽城ハ製鹽ノ土釜。屑ハ其土屑ナラン。

から來たものだ。(六)臨安の陳興の言に『竈を築く時に豬一頭分の肝を土に納れて、それが久しくして土と一になるのを俟つて之を用うるのだ』とある。これで始めて名稱と事實が符合する。蓋し伏龍肝なるものはこれに本くものであらう。獨孤滔の丹書に『伏龍肝とは、十年を經ち竈の下を深一尺掘つて取るもので、紫瓷のやうな色のものが眞物である。(七)賀を縮め、丹砂を伏し得るものだ』とあるが、蓋しこれも猪肝の實際を知らずして、竈下の土を伏龍肝なりと思つてゐたらしい。

氣味　【辛し、微溫にして毒無し】權曰く、鹹し。大明に曰く、熱にして微毒あり。

主治　【婦人の崩中、吐血、欬逆血を止める。醋で調へて癰腫毒氣に塗る】(別錄)【鼻紅、腸風、帶下、尿血、洩精を止め、分娩を催し、胞衣を下し、小兒の夜啼を止める】(大明)【心痛、狂顚、風邪、蠱毒を治し、姙娠には胎を護る。小兒の臍瘡、重舌、風噤、反胃、中惡、卒魘、諸瘡に用ゐる】(時珍)

附方　舊十六。新十七。【卒に惡氣に中れるもの】伏龍肝末を一雞子ほど水で服して吐を取る。(千金方)【魘寐の暴絕】竈心の鍋底に對する所の土を研末して水で二錢

(六)臨安ハ今ノ杭州。

(七)賀、錫ノ一名。

を服し、更に鼻に吹入る。（千金方）【中風口噤】言語不能、心煩恍惚、手足不隨、或は腹中痛滿、或は時に絶息してまた甦るものには、伏龍肝末五升を水八升に入れて攪拌し、澄淸して之を飮ませる。（千金方）【狂顚謬亂】意識錯亂せるには、一日三回、伏龍肝末方寸匕を水で服す。（千金方）【小兒の夜啼】伏龍肝末二錢、硃砂一錢、麝香少量を末にし、蜜で綠豆大の丸にし、五丸づつを桃符湯で服す。（普濟方）【小兒の重舌】釜下の土を苦酒に和して塗る。（千金方）【重舌腫木】伏龍肝末を牛蒡汁で調へて塗る。（聖惠方）【冷熱心痛】伏龍肝末方寸匕を、熱には水で溫服し、冷には酒で服す。（外臺祕要）【反胃吐食】年古き竈中土を末にし、米飮で三錢を服す。これは已に實驗を經たものである。（百一選方）【突然の欬嗽】釜月土一分、豉七分を搗いて梧子大の丸にし、四十九丸づつを服す。（肘後方）【吐血衄血】伏龍肝末半升を新汲水一升で淘り、その汁に蜜を和して服す。（廣利方）【吐血瀉血】心腹の痛むには、伏龍肝、地壚土、多年の烟壁土等分を、五錢づつ水二盌に入れて一盌に煎じ、澄淸して空心に服し、白粥で補ふ。（普濟方）【婦人の血漏】伏龍肝半兩、阿膠、蠶沙を炒つて各一兩を末にし、空腹にして二三錢づつを酒で服し、知あるを度とする。（寇氏衍義）【赤白帶下】

日久くして黃色に痩せ、(八)六脈が微濇するには、烟の盡きるまで伏龍肝を炒り、椶櫚灰、屋梁上塵を烟盡きるまで炒り、等分を末にして龍腦、麝香各少量を入れ、三錢づつを溫酒、或は淡醋湯で服す。發病以來一年の者は半月で安になる。(大全方)【產後の血氣】攻心痛、惡物下らぬには、竈中心土を研末し、酒で二錢を服す。惡物を瀉出して立ろに效がある。(救急方)【妊娠熱病】伏龍肝末一雞子ほどを水で調へて服し、同時に水で和して臍の周圍一寸四方に塗り、乾けば再び塗る。(傷寒類要)【胎兒死亡】母體が(九)氣して絕息せんとするには、伏龍肝末三錢を水で調へて服す。(十全博救方)【橫產、逆產】鍋の底と對する竈の中心の土を細研し、一錢づつを酒で調へて服し、母の臍中に搽る。(救急方)【胞衣不下】竈下土一寸を醋で調へて臍中に納れ、續けざまに甘草湯三四合を服す。(產寶)【諸蠱の中毒】伏龍肝末一雞子大を水で服して吐を取る。(千金方)【六畜肉の毒】同上。【陰冷發悶】冷氣が腹に入つて腫滿すれば死亡する。これには釜月下土を雞子白に和して傅ける。(千金方)【男陰の卒腫】同上。【諸腋狐臭】伏龍肝末を頻に傅ける。(千金方)【聤耳の出汁】伏龍肝を綿に裹んで塞ぎ、一日に三回づつ易へる。(聖濟錄)【小兒の臍瘡】伏龍肝末を傅ける。(聖惠方)【小兒の

(八) 六脈ハ心脈、肝脈、腎脈、以上左手ニアリ。肺脈、脾脈、命門、以上右手ニアリ。

(九) 此ニイフ『氣』トハ、精神、肉體ニ內的衝撃ヲ受ケテ内臓機能ノ極度ニ迫促スル狀態ヲイフモノノ如シ、卽チ氣逆、氣消ノ氣ナリ。靈樞本心論ニハ『地之在我者氣也』トアリ、素問擧痛論ニハ『怒則氣逆。甚則嘔血及飧泄。故氣上矣』トアリ、又『恐則氣下』トアリ。

丹毒】多年の竈下の黄土末を屋漏水に和して傅ける。新汲水もよし。雞子白、或は油もよし。乾けば易へる。(肘後方)【小兒の熱癤】釜下土、生椒末等分を醋で和して塗る。(千金翼)【臁瘡の久爛】年久しき竈內の黄土を研細し、黄蘗、黄丹、赤石脂、輕粉末等分を入れて淸油で調へ、油絹中に入れて貼る。動いてはならず、縱ひ痒くとも忍ぶがよし。數日にして癒える。(濟急方)【發背で瀕死のもの】伏龍肝末を酒で調へて厚く傅けて乾けば易へる。平安になれば止める。(千金)【一切の癰腫】伏龍肝を蒜で和して泥にして貼り、乾けば再び易へる。或は雞子黄で和するもよし。(外臺祕要)【杖瘡の腫痛】釜月下土を末にし、油で和して塗る。羊皮上に臥して頻に塗る。(千金方)【灸瘡の腫痛】竈中黄土の末の煮汁を淋ぐ。(千金方)

土墼　墼の音は急(キフ)である（綱目）

和名　「いしばひがま」に出來る石灰華

英譯名　Calc-sinter in the lime-kiln

【釋名】煤赭　時珍曰く、これは石灰を燒く窯中に流れて結晶する土滓である。輕く虛で、色が銹び赤い。

【主治】【婦人の(一)鼈瘕、及び頭上の諸瘡。男、女を問はず、(二)痰核が生じて指

(一)鼈瘕ハ婦人腹中

位の大さの紅腫するには、菜子油で調へて搽ればその腫は消える。或は膿の出るには、膏藥にして貼る」（時珍）

附方　新一。【(三)白禿臘梨】灰窯の内で紅く燒いた土墼四兩、百草霜一兩、雄黄一兩、膽礬六錢、楡皮三錢、輕粉一錢を末にし、豭膽汁で調へて剃頭後に搽る。百發百中の神方である。（陸氏積德堂方）

(一)甘鍋（綱目）

和名　るつぼ
英譯名　Crucible, melting-pot

釋名　**銷金銀鍋**　(二)吳の地方では、瓷器の屑を集めて碓舂で末にし、篩ひ澄ませて粉を取り、これを滓粉と呼び、膠水の和劑を用ゐてその粉で金銀を銷す鍋を作る。これはその物をいふのである。

主治　【偏墜疝氣には、研末し熱酒で調へて二錢を服す。又(三)煉眉瘡、湯火瘡に主效があり、研末して輕粉少量を入れて傅ける。鍋の(四)黝は肉を爛す】（時珍）

砂鍋（綱目）

和名　すやきのなべ
英譯名　Unglazed pottery

ニ生ズル癰狀ノカタマリ。
(二)痰核ハ頸項ノ間或ハ臂或ハ遍身ニ核ノヤウナルモノヲ生ジ之ヲ推セバ動クナリ。
(三)白禿臘梨、和名シラクモ。

(一)金陵本ニ、甘鍋トアリ。甘ハ坩ノ誤。
(二)俗ニ江蘇ノ地方ヲ吳ト稱ス。
(三)煉眉瘡ハ小兒眉叢中ノ瘡ヲ云フ。
(四)黝ハサビ。

(一)字書ニ、埏ハ和土、埴ハ黏土トアリ。

(一)瓷、磁同ジ、支那河南ノ磁州瀬戸物ニ名アリ、故ニ磁器ト云フト、五雜組ニ云フ。

(二)定州ハ唐代十道中河北道ノ一州。今ハ直隷省保定道ニ屬ス。往時ノ州治ハ今ノ保定ノ西南方滱河ノ南畔ニ在リ。

(三)坯、陶瓦未ダ燒カザルモノヲ云フ。

(四)饒州ハ今ノ江西省鄱陽縣ノ地、彭蠡湖ノ東南畔ニ在リ。

【集解】 時珍曰く、沙土で(一)埏埴を焼いて造つた器である。

【主治】 【積塊黄腫を消するには、年久しく用ゐたものを研末し、水で飛過して丸にし五錢づつを酒で服す】(時珍)

(一)白瓷器（唐本草）

和名 しろのなんきんちやわん
英譯名 white porcelain

【集解】 恭曰く、(二)定州のものが良し、他は皆及ばない。時珍曰く、これは白土を(三)坯にし、その坯を焼いて造るもので、古人は白堊の代用にした。今は(四)饒州のものも良い。

【氣味】 【平にして毒なし】 【主治】 【婦人の帶下、白崩。嘔吐を止める。血を破り血を止める。水で磨して瘡に塗れば瘢を滅す】(唐本) 研末して癰腫に傅ければ鍼の效力に代る。又目に點ければ翳を去る。(時珍)

【附方】 舊二、新七。【鼻衄の止まぬもの】定州の白瓷を細末し、少量を吹き入れば立ろに止る。(經驗方) 【吐血の止まぬもの】色の最も好き白瓷器の末二錢を皂莢子仁の煎湯で服し、續けざまに三服すれば癒える。(聖濟方) 【小便淋痛】眞定の瓷器を

煆き研つて二兩、生、熟地黃末各一兩を用ゐ、二錢づつを木通の煎湯で服す。（傳信適用方）【一切の(五)齁鼾】(六)處州の瓷器を末にし、發つた時二錢を用ゐる。まづ手の指に津液を點けて藥を蘸け、それを舌の下に點けて嚥めば效がある。（普濟方）【目に生じた翳膜】(七)細料の白瓷鍾一箇を強力な火で煆き研末して紙で篩ひ、雄黃二分を加へて末にし、朝、夕各少量づつを點ける。一時に多く點けてはならぬ。牛角簪で翳膜を撥出して點けるが妙である。若し紅ければ(八)人退の末を四角へ點ければ癒える。（孫天仁集效方）【身體面部の(九)白丹】白瓷瓦末を猪脂に和して塗る。（梅師方）【(一〇)赤黑丹疥】或は痒く、或は燥くものは、急に治せねば全身に蔓延して死亡する。これには白瓷末、猪脂を和して塗る。（聖濟錄）【湯火傷灼】(一一)多能鄙事では、青瓷の碗片を末にして水で飛過し、桐油に和して傅ければ數囘で癒える。(一二)活幼口議では、(一三)景德鎭の瓷器を打碎いて竈內に埋め、炭火をその上に鋪き載せて一夜置き、取出して火毒を去つて末にし、黃丹少量を入れて傅ければ立ろに癒える。

烏古瓦（唐本草）

和名　やねのうへのふるきかはら
英譯名　An old roof-tile

(五)齁ハ鼻息、鼾モ鼻息ノアラキ病氣。
(六)處州ハ今ノ浙江省麗水縣ノ地ナリ。
(七)細料ハ上等ノモノ。
(八)人退ハ亂髮ノコト。
(九)白丹ハ丹毒ノ一種色白キモノ。
(一〇)赤黑丹病ハ丹毒ノ種類。
(一一)多能鄙事ハ書名、明ノ劉基文成ノ作。
(一三)景德鎭ハ今ノ江西省浮梁縣ノ西南二十支里ニアリ。宋朝ノ景德年間ニ鎭チ置ク。故ニコノ稱アリ。支那ニ於ケル陶器ノ產地トシテ随一ニ居ル。

［集解］時珍曰く、夏の桀王が始めて泥坯を燒いて瓦を作つたといふ。

［氣味］【甘し、寒にして毒なし】［主治］【水で煮、または漬けた汁を飮めば消渴を止める。長年月の間屋上に在つたものを取るがよし】（唐本）【湯に煎じて服すれば、人の心中の大熱を解す】（甄權）【小便を止めるには、汁に煎じて服す】（大明）【研末して湯火傷に塗る】（藏器）【折傷を治し、骨を接ぐ】（時珍）

［附方］舊一、新六。【暑季の暍死】屋上兩端の瓦を熱して心頭を熨す。冷えれば易へる。（千金方）【筋骨の折傷】祕傳神效散——跌撲の傷損で骨が折れ、骨が碎け、筋が斷れて痛み忍び難きには、此の藥を用ふれば極めてよく傷を理し、斷を續ぐ。屢〻用ゐて屢〻效驗があつた。往來の人がよく放尿する路傍の垣根の下に久しく碎けてある瓦片の一塊を取つて洗淨し、火で煨いて米醋に淬し、黃色になるまで五回繰返して刀で刮つて細末にし、三錢づつを好き酒で調へて服す。患部が上體に在るには食前に服し、下體に在るには食後に服す。輕易なものとて賤んではならぬ。誠に神方である。（邵以正眞人經驗方）【湯火傷灼】年古き屋上の（一）吻獸を取つて末にし、油で和して塗れば立ろに效がある。（儒門事親方）【牙痛の灸法】土底に年深く埋在して

（一）吻獸、獸形ノ屋根瓦。

（二）三角ニ破レタル瓦。

（一）黄瓜樓、キカラスウリ。

古く且つ潤ふた（二）三角瓦一塊を取り、三軒の家の子供に星の出初めるを見張らせて、第一に星が出たと指した時その瓦上に火を下して灸する。（本草拾遺）【唇吻の生瘡】新瓦を末にし、生油で調へて塗る。（集玄方）【瘢痕の凸起】熱瓦で頻に熨す。（千金方）【蜂蠆の螫傷】瓦で傷の上を摩し、十四回唾を吐きかけてその瓦を故の處へ置く。（千金方）

古磚（拾遺）

和名　ふるきしきかはら
英譯名　An old tile

【主治】【噦氣】には水で煮て汁を服す。久しき白痢で虚寒するもの、秋季に小腹が多く冷ゆるものには、いづれも焼き熱して布に裹んだ上に坐り、熱氣を腹に入らしむれば良し。又、婦人の五色帶下を治するには、麪で煎餅七箇を作り、赤く焼いた黄磚の上に置き、（一）黄瓜樓をその麪上に傅け、更にその上に二重の布を置いて患者を坐らせ、藥氣を腹に入らしめるやう熏す。蠶子のやうな蟲が出るもので、三五囘に過ぎずして瘥える。（藏器）

【附方】新三。【寒濕脚氣】磚を紅く焼いて陳く臭い米泔水に淬し、その三塊を

（三）腦子ハ樟腦ノ事ナラン。

（一）岸トハ煙ノ凝結セルモノヲ云フ。

（二）牛皮血癬ハ魚鱗狀癬。俗ニコセガサ。

熱して布で包み、それを兩膝で夾み留めて蒲團でその上を覆ふ。三五回で癒える。（扶壽方）【赤眼腫痛】新磚を年久しく糞池中に浸して取出し、日陰に置いて生えたカビを刷き落し、（三）腦子を入れて和して點ける。（普濟方）【臀に生じた濕瘡】日毎に新磚の上に坐ればよく濕氣を去る。（集玄方）

煙膠（綱目）

和名　瓦を燒く爐の煙突の煤

英譯名　Scot on the inside of the chimney of tile-making furnace

【集解】時珍曰く、牛皮を熏消する竈の上、及び瓦を燒く窯の上の黒土である。

【主治】【頭瘡、白禿、疥瘡、風癬で癢痛して水の流れるには、牛皮竈の（一）岸を取つて末にし、麻油で調へて塗る　或は輕粉少量を和す】（時珍）

【附方】新三。【（二）牛皮血癬】烟膠三錢、寒水石三錢、白礬二錢、花椒一錢半を末にし、臘豬脂で調へて搽る。（積德堂方）【消渴引飲】瓦窯の煙突の黒煤の乾いて鐵屎のやうになつたもの半斤を末にし、生薑四兩を入れて共に搗いて絹袋に盛り、水五升に浸してその汁を五合づつ飲む。（聖濟方）【胞衣不下】竈突後の黒土を三本指

で撮ひ取り、五更に酒で飲下す。（陳藏器）

墨（宋開寶）

和名　すみ
英譯名　Chinese ink stick

釋名　烏金（綱目）陳玄（綱目）玄香（綱目）烏玉玦　時珍曰く、古代には黑土で墨を作つたものだから墨の字は黑と土とに從ふのだ。許愼の說文には『墨は烟煤にて成す所、土の類也、故に黑土に從ふ』とある。劉熙の釋名には『墨は晦也』とある。

集解　宗奭曰く、墨は松の煙である。世間に粟草灰で僞造するものがあるが用ゐてはならぬ。松烟墨でこそ始めて藥用に差支ないのであつて、就中年古りた細い煙で造つたものを佳とする。粗いものは用ゐてはならぬ。當今では(一)高麗國から每年墨を貢納するが、何物を合せてあるか判らぬから藥には入れられない。(二)鄜延には石油といふものがあり、煙が甚だ濃でその煤は黑く光り漆の如き墨になるが、藥に入れてはならぬ。

時珍曰く、上等の墨は松烟を(三)梣皮汁で解いた膠に和して造り、或は香藥等の物

(一)高麗國、宗奭ノ當時ハ今ノ朝鮮全土ヲ指ス。
(二)鄜延ハ當時ノ鄜州、延州一帶ノ地ヲ指ス。今ノ陝西省北部ノ地也。東ハ黃河、西南ハ洛水、西北ハ長城ニ至ル。

を加へるのであるが、現在のものは多く窯突中の黑烟で造り、その中へ再三麻油を入れて火で燒いて墨を造る。之は墨烟と謂つて、墨の光澤は黑いには違ひないが、松烟ではないのだから用ゐる者はよく心得て置かねばならぬ。石墨は石炭の條下に、烏賊魚腹中の墨、(四)馬の寶墨はそれぞれその本條下に記載してある。

【氣味】〔辛し、溫にして毒なし〕【主治】〔血を止め、肌膚を生じ、金瘡を合す。産後の血暈、崩中、突然の下血を治するには、醋で磨つて服す。又、血痢、及び小兒の客忤を止むるには、揭げ篩つて溫水で服す。又(五)眯目、(六)物芒の目に入りたるには、瞳子の上に點けて摩する〕(開寶)〔小便を利し、月經を通じ、癰腫を治す〕(時珍)

【發明】震亨曰く、墨は金に屬して火がある。藥に入れては、性が甚だ健であり、又よく血を止める。

【附方】舊十、新六。〔吐血の止まぬもの〕金墨の磨汁を萊菔汁と共に飮む。或は生地黃汁でもよし。(集簡方)〔衄血の止まぬもの〕(七)眩冒して瀕死の者には、濃墨汁を鼻中に滴し入る。(梅師方)〔熱病の衄血〕數升の出血あるには、好き墨を末にし、

(三)樗、トネリコ。
(四)本條馬腎ノ部ニ、馬ニ墨アリテ腎ニアリトアリ。熊太古ガ冀越集ニ見ユト云フ。
(五)眯ハ字書ニ物入目中トアリ。
(六)物芒ハ米麥ノ刺芒ヲ云フ。
(七)眩冒ハ眩運ニ同ジ。

雞子白で梧子大の丸にし、生地黃汁で二三十丸を服し、少頃して再服する。同時に葱汁で墨を磨つて鼻へ滴し入れれば止る。（外臺祕要）【大小便血】好墨の細末二錢を阿膠を化した湯で調へて服す。熱多き者に就中適當である。（寇氏本草衍義）【卒淋不通】好墨を燒いて一兩を末にし、一字づつ溫水で服す。（普濟方）【赤白下痢】薑墨丸――乾薑、好墨各五兩を末にし、醋漿で和して梧子大の丸にし、三四十丸づつ米飲で服す。晝夜に六七服すれば癒える。（肘後方）【崩中漏下】靑、黃、赤、白のものが下つて不娠のものには、好墨一錢を一日二回づつ水で服す。（肘後方）【墮胎血溢】血の止らぬには、墨三兩を火に燒いて醋に淬し、三回繰返して火毒を出し、沒藥一兩と末にして二錢づつ醋湯で服す。（普濟方）【婦人の難產】墨一寸を末にして水で服すれば立ろに瘥える。（肘後方）【胎兒死亡】新汲水で金墨を磨つて服す。（普濟方）【胞衣不出】腰脊に引いて痛むには、好墨二錢を酒で服す。（肘後方）【癰腫發背】醋で墨を濃く磨つて四圍に塗り、中央には豬膽汁を塗り、乾けば更に繰返す。一夜にして消える。（趙氏方）【客忤中惡】多く門外や道路上で發作するもので、心腹が絞痛し、脹滿して心胸に氣沖するものは直ちに治療せねば死ぬものである。これには墨を搗き水

で和し二錢を服す。（肘後方）【飛絲入目】墨を濃く磨つて點ければ出る。（千金方）【塵物入目】同上。【産後の血暈】心悶氣絶するには、男子の尿で濃墨一升を研つて服す。（子母祕錄）

釜臍墨（四聲）

和名　かまのへそのすみ
英譯名　Soot carbon on the boiler's bottom

〔釋明〕釜月中墨（四聲）鐺墨（開寶）釜煤（綱目）釜炲（綱目）鍋底墨　時珍曰く、大なるものを釜といひ鍋といひ、小なるものを鐺といふ。

〔氣味〕【辛し、溫にして毒なし】〔主治〕【中惡、蠱毒、吐血、血運には、酒或は水で二錢を溫服する。また金瘡に塗れば血を止め、肌を生ずる】（開寶）【食積を消する。舌腫、喉痺、口瘡、陽毒發狂に用ゐる】（時珍）

〔發明〕頌曰く、古方の傷寒を治する黑奴丸には、釜底墨、竈突墨、梁上塵三物を用ゐて同じく諸藥を合せてある。その功用は相近いものと見える。

〔附方〕舊七、新六。【突然の心氣痛】鐺墨二錢を熱した小便で調へて服す。（千金方）【中惡心痛】鐺墨五錢、鹽一錢を研りまぜ、熱水一盞で調へて服す。（千金方）【轉

筋入腹】釜底墨末を酒で和して一錢を服す。(肘後方)【霍亂吐下】鍋底墨煤半錢、竈額上墨半錢を百沸湯一盞で急に數千回掻き廻し、盌を覆ひ口を付けて一二口服すれば立ろに止る。(經驗方)【吐血咯血】鍋底墨を炒つて研細し、井華水で二錢を服す。續けざまに三服を進める。(濟急方)【婦人の逆產】手の中指で釜下墨を取り、兒の足の底に十文字を畫けば順になる。(千金方)【產血不下】鍋底墨煙二錢を熱酒で服す。(生生編)【舌の突然の腫大】恰も豬の膀胱の如き形になつて口に滿るものは治療せねば死亡するものである。釜墨を酒に和して塗る。(千金方)【鼻氣壅塞】水で釜墨一錢を服す。(千金方)【(一)鼻中息肉】方は同上。三五日にして癒える。(普濟方)【聤耳膿血】釜月下の灰を耳に吹き滿す。深く入つても苦しからず、それで自ら出る。(肘後方)【小兒の口瘡】釜底墨を時時搽る。(普濟方)【手で掻きたる瘡腫】化膿せるには、鍋臍墨を研細し淸油で調へて搽る。(簡便方)

百草霜（綱目）

和名　けむだしのすすと「かまど」のひたひのすす
英譯名　Soot of the chimney and that on the front of kitchen-furnace

【釋名】竈突墨（綱目）竈額墨　時珍曰く、これは竈額、及び煙爐中の墨烟で

(一)鼻中息肉、ハナタケ。

ある。その質が輕細なるが故に霜といふ。

【氣味】【辛し、溫にして毒無し】【主治】【積滯を消化する、食物と藥の中に入れて用ゐる】（蘇頌）【上下の諸血を止める。婦人の崩中、帶下、胎前產後の諸病、傷寒、陽毒發狂、黃疸、瘧痢、噎膈、咽喉、口舌、一切の諸瘡に用ゐる】（時珍）

【發明】時珍曰く、百草霜、釜底墨、梁上倒掛塵はいづれも煙氣の結成であるが、その體質には輕く虛なるものと、結して實なるものとの相違があつて、重きものは中、下の二焦に歸し、輕きものは心、肺の分に入る。古方の陽毒發狂を治する黑奴丸には三者並びに用ゐ、內に麻黃、大黃を入れてある。これもやはり三焦の結熱を攻解し、同時に火化の作用を取る從治の意味である。積滯を消するのも從化の點を取るのである。故に（一）疽膈、瘧痢の諸病に多くこれを用ゐる。失血、胎產の諸病を治するといふも、血は黑を見れば止るものには相違ないが、やはり從化の關係以外には出でぬものだ。

【附方】新二十。【衄血止まぬもの】百草霜末を吹けば立ろに止る。【衄血、吐血】劉長春の經驗方では、吐血、及び酒食で傷めたもの、醉ひ過ぎて頭を低れたために

（一）疽膈ハ噎疽ニ同ジ。

肺臓を(二)掬損して、吐血、汗血し、(三)口鼻妄行し、まだ發聲不能にならぬだけのものを治するには、村外れの人家の百草霜末二錢を糯米湯で服す。○ある方では、百草霜五錢、槐花末二兩を用ゐ、二錢づつ茅根湯で服す。【齒縫出血】百草霜末を摻れば立ろに止る。(集簡方)【婦人の崩中】百草霜二錢を狗膽汁によく拌ぜ、二服に分けて當歸酒で服す。(經驗方)【胎動下血】或は胎兒の已に死亡したるには、百草霜二錢、棕灰一錢、伏龍肝五錢を末にし、一二錢づつ白湯に酒、及び童尿を入れて調へて服す。(筆峰雜興方)【胎前産後】逆産、横産、(四)瘦胎、産前、産後の虚損、月候不調、崩中には、百草霜、白芷等分を末にし、二錢づつを童尿、醋各少量で調勻し、熱湯で化して服す。二服を過ぎてはならぬ。(杜壬方)【婦人の白帶】百草霜一兩、香金墨半兩を研末し、三錢づつを猪肝一個を開いた中に入れ、紙に裹んで煨熟し、細に嚼んで温酒で送下する。(永類方)【(五)臟毒下血】百草霜五錢を米湯で調へて一夜露し、次の早朝空心にして服す。(邵眞人經驗方)【突然の劇しき瀉痢】百草霜末を米飲で調へて二錢を服す。(續十全方)【一切の痢下】初期には一服で神效がある。これを鐵刷丸と名ける。百草霜三錢、金墨一錢、半夏七分、煮た巴豆十四粒を研りまぜ、黄蠟三錢と

(二) 掬損シトハ鉤曲シタ爲ニ傷ムコト。
(三) 口鼻妄行ノ意解シガタシ。
(四) 瘦胎ハ胎兒發育不良ノコトカ。
(五) 臟毒下血ハ腸出血。

香油とを化開したもので和して劑とし、大人、小兒それぞれ體格に應じて毎服三五丸から四五十丸までを薑湯で服す。(濟江方)【小兒の積痢】駐車丸——百草霜二錢、煨いて油を去つた巴豆一錢を研勻し、飛羅麪粉で和して綠豆大の丸にし、毎服三五丸を赤痢には甘草湯で、白痢には米飮で、紅白同時のものには薑湯で服す。(全幼心鑑)【熱を挾む下痢】膿血あるには、竈突中の墨、黄連各一兩を末にし、二錢づつを一日二回酒で服す。(聖惠方)【寒熱瘧疾】方は鉛丹の條下にある。【魘寐卒死】鍋底墨二錢を水で灌ぎ、幷に鼻に吹く。(醫說)【尸厥不醒】脈動の依然變らぬには、竈突墨を彈丸ほど漿水に和して飲み、(六)百會、足の大趾、中趾の甲側に針する。(千金方)【咽中の結塊】飲食が通らず、衰弱して瀕死なるには、百草霜を蜜で和して芡子大の丸にし、新汲水で一丸に化して灌ぎ下す。甚しきものでも二丸を過ぎてはならぬ。これを百靈丸と名ける。(普濟方)【鼻瘡の膿臭】百草霜末二錢を冷水で服す。(三因方)【白禿頭瘡】百草霜を豬脂で和して塗る。(簡便方)【頭瘡諸瘡】瘡を醋湯で洗淨して百草霜に膩粉少量を入れ、生油で調へて塗れば立ろに癒える。(證類本草)【瘭疽の汁の出るもの】手足肩背に生じ、累累として米の如くなるには、竈突墨、竈

(六)百會ハ經穴ノ名。頂上、兩耳尖ヲ連結スル線ノ中央部ヲ云フ。

屋塵、釜下土を研勻し、水一斗で煮て三回沸騰させ、その汁を取つて一日三四回づつ洗ふ。(外臺祕要)

梁上塵(唐本草)

和名　うつばりのうへのほこり
英譯名　Dust on the beam

【釋名】倒掛塵を烏龍尾と名ける。(綱目)煙珠。

【修治】斅曰く、凡そ梁上塵は、火や烟から遠く隔つた高い殿堂の上のものを撰び、拂ひ落して篩ひ淨め、末にして用ゐる。時珍曰く、倒掛塵を用うるには、烟の盡きるまで燒き、篩つて末を取つて藥に入れる。雷斅の所說もこれをいふらしい。梁上灰燼は現今では用ゐられぬやうである。

【氣味】【辛く苦し、微寒にして毒なし】大明曰く、平なり。

【主治】【腹痛、噎膈、中惡、鼻衄、小兒の軟瘡】(唐本)【食積、金瘡の出血、齒齗の出血を止める】(時珍)

【附方】舊七、新十二。【翻胃吐食】梁上塵を黑驢尿で調へて服す。(集簡方)【霍亂吐利】屋根下の倒掛塵を沸湯で泡けて澄淸して服すれば止る。(衞生易簡方)【小便

不通】梁上塵を二指撮つて水で服す。(外臺祕要)【大腸脫肛】烏龍尾、即ち梁上塵を鼠屎と共に桶の中で燒烟し、その上に坐して熏すれば數囘で脫せぬやうになる。(濟急)【(一)喉痺乳蛾】烏龍尾と枯礬と豬牙皂莢とを鹽で炒黃したもの各等分を末にして或は吹き或は點ける。いづれも妙である。(孫氏集效方)【牙疼に鼻に嗜ふ】壁上を掃つた土を鹽で炒つて末にし、牙疼の左右に隨つてその方の鼻孔に嗜ふ。(普濟方)【鼻中息肉】梁塵を吹き入る。(普濟方)【就寢中の魘死】火で照してはならぬ。急に梁塵を取つて鼻中に納るれば活きる。(瑣碎錄)【縊死自殺】梁上塵を豆ほど筒中に入れ、四人各〻一筒づつを持ち、同時に力を極めて死者の兩耳と鼻の兩孔を吹けば活きる。(外臺祕要)【經血不止】烏龍尾を烟の盡きるまで炒り、荊芥穗と各半兩を末にし、二錢づつ茶で服す。(聖濟錄)【婦人の胎動】月足らずで產せんとするものには、梁上塵、竈突墨等分を酒で方寸匕を服す。(千金方)【橫產、逆產】梁上塵方寸匕を酒で服す。(子母祕錄)【(二)婦人の妬乳】醋で梁上塵を和して塗る。(千金方)【石癰不膿】梁上塵灰、葵根莖灰等分を醋で和して傅ける。(千金方)【發背腫痛】厨の內の倒吊塵を末にし、生葱の中心にある嫩芽と共に搗いて膏にし、頂だけを殘して傅け

(一)乳蛾ハ喉痺ノ一種、一方ノ腫ルルモノ。

(二)妬乳ハ乳房炎、及ビ乳房膿腫。

る、一日に一回換へて乾けば水で潤す。(瀕湖集簡方)【無名惡瘡】梁上倒掛塵二條、韮地の蚯蚓泥少量を蜜で和し、捻つて錢大の餅にして陰乾し、蜜水で調へて頻に傅ける。(楊起簡便方)【小兒の頭瘡】浸淫して薄平き片となるには、梁上塵を油瓶の下滓に和し、瘡を皂莢湯で洗つて後に傅ける。(子母祕錄)【(三)小兒の赤丹】屋塵を臘豬脂に和して傅ける。(千金方)【老嗽不止】古き茅屋上の塵の年久しく火煙の着いたものを、石黃、款冬花、婦人の月經時に用うる衣帶と和して末にし、水で和して茅の先に塗り、乾くを待ち竹筒中に入れて燒烟し、その烟を吸つて嚥めば瘥えぬものはない。(陳藏器本草)

門臼塵(綱目)

和名　もんのとびらのうすのあなのほこり
英譯名　Dust in the door-hole

主治　【金瘡の出血を止める。又、諸種の毒瘡には、蒜を切つてこれを蘸けて擦れば汗が出て消する】(時珍)

寡婦牀頭塵土(拾遺)

和名　やもめのとこのまへのほこり
英譯名　Dust on the bed of widow

(三)赤丹ハ丹毒。

(一)月割瘡ハ月蝕瘡ニ同ジ。兩耳、及ビ鼻面ノ間ニ生ジ、下部ノ孔竅ノ側ニモ生ズ。

(二)岸ハ香爐ノ蓋ノ裏面ニ凝結スル煤煙ナリ。

主治 【耳上の(一)月割瘡に油に和して塗る】(藏器)

瓷甌中白灰 (拾遺)

和名 やきもののなかのじやう
英譯名 Ash in the glazed porcelain

集解 藏器曰く、初め瓷の器物を燒く時、幾箇かを並べて坩を灰泥で隔てて燒くところから、瓷器になつたときに裏に灰が付いて居る。それを取つて藥に用ゐるのである。

主治 【遊腫に醋で磨つて傅ける】(藏器)

香爐灰 (綱目)

和名 かうろ(香爐)のはひ
英譯名 Ash in the incenser

主治 【趺撲や金刃の傷損には、これで罨すれば血を止め、肌を生ずる。○(二)香爐岸は疥瘡に主效がある】(時珍)

鍛竈灰 (別錄下品)

和名 かれふきがまのはひ
英譯名 Ash of the melting furnace

集解 弘景曰く、これは鐵を鍛へる竈の中の灰である。鐵の力を兼ね得るか

ら用うるのだ。

［主治］【癥瘕堅積に邪惡の氣を去る】（別錄）　恭曰く、(一)暴癥を療するに有效なもので、古方の貳車丸の中に用ゐてある。

［附方］　新一。【産後の陰脫】鐵爐中の紫塵と羊脂の二味を、むらなく和し、布に裹んで炙熱し、熨して推納れる。（徐氏胎產方）

冬灰　（本經下品）

和名　冬の灰
英譯名　Ash in the winter

［釋名］　宗奭曰く、諸種の灰は一度蒸けば出來るので、その體が輕く、力も劣るのであるが、冬灰は三四個月經て爐から拂ひ取るので、その間每日朝夕燒灼されて力が全く燥烈になり、體も益重くなつて居る特長がある。

［集解］　別錄に曰く、冬灰は(二)方谷の川澤に生ずる。弘景曰く、これは現今洗濯用に使ふ黃灰である。諸種の蒿、藜を燒いて積聚したものを鍊つて作つた性の烈しいものであるが、荻の灰が就中烈しいものである。恭曰く、冬灰とは元來藜灰のことだ。その他の草のものは眞物でない。また靑蒿灰、柃灰といふものがある。柃

(一)暴癥ハ卒然ト發スル消化不良。

(二)方谷未攷。今ノ江蘇省江寧縣ノ東南ニ方山アリ。太平寰宇記ニ曰ク、方山ハ縣ノ東南五十里ニ在リ、周迴二十里、高サ一百一十六丈、其

山四面峯方孤絕ト。或ハコノ山ノ川谷チイフカ。

(二) 鹻ハ鹼ト音義同ジ。ホタシユムノコト。

は苓とも書く。これは木葉を燒いて作つたもので、いづれも染料として用ゐ、また惡肉を蝕する功がある。時珍曰く、冬灰とは冬期間竈中で燒く薪柴の灰である。專ら蒿、藜の灰のみを指すものとするが、必ずしもさうではない。原本に一名藜灰とあり、方谷の川澤に生ずとあるに至つては尙更穩當でない。この灰は元來川澤にあるなどといふべきものではないので、獨り方谷のみにあるなどといふ道理のあらう筈はないのである。現今では灰の淋汁から(二)鹻を取る。これを洗濯用にすれば塵粉のこびり付きを拂つて白くする。藥として用ゐれば、瘡を治し、惡肉を蝕する。また藍靛を浸して靑色を染める。

[氣味]【辛し、微溫にして毒あり】[主治]【黑子、肬、息肉、疽蝕、疥瘙を去る】(本經)【これで豆を煮て食へば大いに水腫を下す】(蘇恭)【醋に熱灰を和して心腹の冷氣痛、及び血氣絞痛を熨し、冷えれば易へる】(藏器)【犬咬を治するには熱灰を傅ける。また溺死、凍死を治し、諸癰疽、惡肉を蝕する】(時珍)

[發明] 時珍曰く、古方に、溺死者を治するには竈中の灰一石で頭から足まで全身を埋め、ただ七孔だけを露して置けば良久うして甦るとある。凡そ水に溺れて

死んだ蠅を試に灰に埋めると少頃して活きる、甚だ驗のあるものだ。蓋し灰の性は暖にしてよく水を拔くものだからであらう。

附方　新七。【溺死】方は上に見ゆ。【水に墮ちて凍死したもの】只微に氣息さへあるものならば、火に炙つてはならぬ。布袋に熱灰を盛つて心臟の上へ載せ、冷える毎に易へて眼を開くを待つて溫酒を飲ませる。（普濟方）【陰冷疼悶】冷氣が腹に入つて腫滿するものは死に至るものである。醋で熱灰を和して頻に熨す。（千金方）【湯火の傷灼】餅爐中の灰を麻油で調へて傅け、風に當てぬやうにする。水を著けてはならぬ。（寇氏衍義）【犬の咬傷】苦酒で灰を和して傅ける。或は熱湯で和す。（千金方）

石鹼（補遺）

和名　石鹼石
學名　Soapstone

釋名　**灰鹼**　**花鹼**　時珍曰く、狀態が石のやうで、鹼に類するところから、名稱に鹼を付けて呼んだものである。

集解　時珍曰く、石鹼は山東の濟寧附近の各所から產出する。その地方では蒿、蓼の類を採り、窖を掘つてそれに入れ、水に浸して漉し、晒し乾して灰に燒き、

（一）二百斤ヲ引ト爲ス、鹽類ノ量ヲ計ルニ引ヲ用ウルガ彼地ノ慣習ナリ。

原水で淋汁を取り、（一）百引毎に粉麪二三斤を入れて久しく置くと沈澱し凝結して石のやうになるのである。それを水共に各地へ賣り出すのだが、洗濯に用ゐ、又、麪包を作る發酵藥とするところから、大いに歡迎されて甚だ商利を獲て居る。他の方法として、竈の灰から濃き淋汁を取つて用ゐても、やはり垢を去り麪を膨脹せしむる效がある。

［氣味］【辛く苦し、温にして微毒あり】［主治］【濕熱を去り、心痛を止め、痰を消し、積塊を磨し、食滯を去り、垢膩を洗滌する。病體の虚實を量つて用ゐねばならぬ。過服すれば人體を損ふ】（震亨）【齒蟲を殺し、目翳を去り、噎膈、反胃を治す。石灰と共に用うれば、䐅肉を爛し、癰疽、瘰癧を潰し、瘀肉を去る。痣、黶、疣贅、痔核に點けて神效がある】（時珍）

［附方］新六。【多年の反胃】方は鉛の條を見よ。【積を消し、氣を破る】石鹼三錢、山査三兩、阿魏五錢、半夏を皂莢水で制し過したもの一兩、これを末にし、阿魏を醋で化したもので煮た糊で丸にして服す。（摘玄方）【一切の目疾】白鹼を用ゐ、その黑き小き塊の部分を揀り去つて厚紙七層に包み、四十九日間風の吹く處に掛

けて取卸し、極細に研つて日毎に點ける。（普濟方）【拳毛倒睫】刀を以て掻き動かして藥を(二)眼胞の上に泥る。それで睫毛が自ら起きる。石鹼一錢、石灰一錢を醋で調へて塗る。（摘玄方）【蟲牙の疼痛】(三)花鹼で孔の內を塡むれば立ろに止る。（儒門事親）【痣、黶、疣贅】花鹼、礦灰二味を小麥稈の灰汁で別別に煎じて乾し、等分を末にして水で調へ、針で刺し破つて點ける。三日に三回すれば除き去る。新に合せて用ゐた方が效果がある。（聖濟錄）

(二)眼胞は眼瞼。

(三)花鹼は鹼末。

本草綱目土部第七卷終

本草綱目金石部

第八卷

本草綱目金石部目錄第八卷

李時珍曰く、石は氣の核、土の骨であつて、大なるは岩巖となり、細なるは砂塵となる。その精は金となり玉となり、その毒は礜となり砒となる。氣が凝れば結晶して丹、靑となり、氣が溶化すれば液體としての礬、汞となる。その變化の狀態からいへば或は柔から剛となる、乳鹵の石となるがそれだ。或は動から靜となる、草木の石となるがそれだ。鳥、獸、大小の動物が石となるは有情から無情に變ずるのである。雷や星が隕ちて石となるは無形から有形と成るのである。大地はあらゆる金石を組織成分として發生し存在し、昇平無爲の間にあらゆる物を變化し生成しつつあるのであつて、金石そのものは何の意味もない頑物のやうなものではあるが、しかも造化は窮りない。人生は鑛物の利用に賴つてその存在を營み、あらゆるものを經濟化、榮養化して生存を保つのであつて、金石そのものは何の價値のない死んだ寶のかけらのやうに思はれるが、しかも利用は窮りないのである。このゆゑに、禹貢や周官にはまじめにその生産地を列擧し、神農本經や黃帝の醫書には詳にその

本草綱目金石部目録第八巻

李時珍曰く、石は氣の核、土の骨であつて、大なるは岩巖となり、細なるは砂塵となる。その精は金となり玉となり、その毒は礜となり砒となる。氣が凝れば結晶して丹、靑となり、氣が溶化すれば液體としての礬、汞となる。その變化の狀態からいへば或は柔から剛となる、乳鹵の石となるがそれだ。或は動から靜となる、草木の石となるがそれだ。鳥、獸、大小の動物が石となるは有情から無情に變ずるのである。雷や星が隕ちて石となるは無形から有形と成るのである。大地はあらゆる金石を組織成分として發生し存在し、昇平無爲の間にあらゆる物を變化し生成しつつあるのであつて、金石そのものは何の意味もない頑物のやうなものではあるが、しかも造化は窮りない。人生は鑛物の利用に賴つてその存在を營み、あらゆるものを經濟化、榮養化して生存を保つのであつて、金石そのものは何の價値のない死んだ寶のかけらのやうに思はれるが、しかも利用は窮りないのである。このゆゑに、禹貢や周官にはまじめにその生産地を列擧し、神農本經や黃帝の醫書には詳にその

性質功用を記載されたものである。優れたる宰相たり、優れたる醫者たらんものも亦、當然深き注意を用ゐねばならぬところのものだ。そこで、本書には國家に有益であり、疾病を驅除するに有效なるもの百六十種を集めて金石部とし、金、玉、石、鹵の四類に分けて錄することにした。舊本には玉石の部三品共に二百五十三種あるが、今ここには二十八種だけを併入し、三十二種は水部に移し、三十九種は土部に入れ、三種は服器部に入れ、一種は介部に入れ、一種は人部に入れた。

神農本草經四十一種　梁の陶弘景註。　　名醫別錄三十二種　同上。
唐本草十四種　唐の蘇恭。　　本草拾遺十七種　唐の陳藏器。
藥性本草一種　唐の甄權。　　開寶本草九種　宋の馬志。
嘉祐本草八種　宋の掌禹錫。　　圖經本草三種　宋の蘇頌。
日華本草八種　宋人大明。　　證類本草一種　宋の唐愼微。
本草綱目三十六種　明の李時珍。

附註

魏李當之藥錄　　吳普本草　　宋雷斆炮炙　　齊徐之才藥對　　唐孫思邈千金

李珣海藥　唐楊損之刪繁　蕭炳四聲　蜀韓保昇重註　宋寇宗奭衍義
陳承別說　金張元素珍珠囊　元李杲法象　王好古湯液　朱震亨補遺
明汪機會編　徐用誠發揮　王綸集要

金石の一　金類二十八種

金 別錄　銀 別錄 黃銀、烏銀を附す。　錫恡脂 綱目 卽ち銀礦。
銀膏 唐本　硃砂銀 日華　赤銅 唐本　自然銅 開寶　銅礦石 唐本
銅青 嘉祐　鉛 日華　鉛霜 日華　粉錫 本經 卽ち胡粉。
鉛丹 本經 卽ち黃丹。　密陀僧 唐本　錫 拾遺　古鏡 拾遺
古文錢 日華　銅弩牙 別錄　諸銅器 綱目 銅盆、鈷鉧、秤錘、銅匙、銅瓶、銅器汗。
鐵 本經　鋼鐵 別錄　鐵落 本經　鐵精 本經　鐵華粉 開寶
鐵鏽 拾遺　鐵爇 拾遺　鐵漿 拾遺　諸鐵器 綱目 鐵杵、秤錘、鐵斧、鐵刀、刀鐶、剪刀股、故鋸、布針、倚鎌、鑰匙、鐵釘、鐵鏈、鑱犂、車轄、馬銜、馬鐙。

右附方　舊五十二　新百八十三

石の二　玉類十四種

玉 別錄　白玉髓 別錄　青玉 別錄 璧玉、玉英を玉石に合せ附す。

右附方　舊十二　新十八

金石の一　金類二十八種

金（別錄中品）

和名　きん・こがね
學名　Gold

校正　拾遺の金漿を併せ入る。

釋名　**黃牙**（鏡源）**太眞**　時珍曰く、按ずるに、許愼の說文に『五種の金屬の内で黃色のものを最上とする。久しく埋れても銹を生ぜず、百たび錬つても輕くならず、如何樣に革めて見ても變らない。それが土中に生ずるものだから、その文字は左右に點を打つて、金の土中に點在する有樣を形容したものだ』とある。爾雅には『黃金はこれを湯といひ、美なるものは之を鏐といひ、鉼金は之を鈑といひ、絕澤なるを銑といふ』とある。獨孤滔は『(一)天生牙を黃牙といふ』といひ、印度の書には『蘇伐羅』と謂つてある。弘景曰く、仙方には金を太眞と呼ぶ。

集解　別錄に曰く、金屑は(二)益州に產出する。採收に一定の時はない。弘景曰く、金は各地に產出するけれども、(三)梁州、益州、(四)寧州に多く、水沙の中から

(一)天生牙ハ俗名インス。自然ニ筝ノ狀ノ如ク長クカタマリタル金ヲイフ。
(二)益州ハ今ノ四川省。
(三)梁州ハ今ノ陝西

出る。これは屑の形を成すもので、生金の名がある。(五)建平、(六)晋安にも石中から金沙を産出し、焼き落し、鋳型に入れて磚を作る。しかしこれは未だ熟せぬものだから、更によく錬らねばならぬ。(七)高麗、(八)扶南、及び(九)西域、外國の金で作つたものもすべて錬熟すれば服し得る。

藏器曰く、生金は(一〇)嶺南(一一)夷獠、(一二)峒穴の山中に産出する。赤黒の砕石で金鐵屎の類の如きものだ。南方の土民は、毒蛇の齒が落ちて石の中に入つたものだとか、蛇屎が石上に着いて出來たものだとか、鴆鳥の屎が石上に着いて出來たものだなどといふ。いづれも毒のある處を砕き取つて生金とするもので、人を殺す大毒がある。本草に「黄金は毒有り」とあるが、それは誤で、生金と黄金とは全く別物である。通常金を採取する状態を見るに、地下一丈餘の深さに掘ると、紛子石の層に達する。その石は一方の端が黒く焦げて居るもので、その石の下に金がある。その金は、大なるものは指ほどあり、小なるものは(一三)麻豆ほどで、色は桑黄のやうだ。咬めば極めて軟い。これが卽ち眞金なのである。夫の採收者が呑込んで竊取するところを見ると、一向毒があるとも思はれない。麩金といふは水沙中から出るもの

省ノ南半。
(四)寧州ハ今ノ雲南省。
(五)建平ハ今ノ四川省巫山縣ノ地。三國呉ニ郡ヲ置ク。
(六)晋安ハ福建省閩侯縣ノ地。晋ニ郡ヲ置ク。
(七)陶氏ノ當時高麗ト稱スルハ今ノ朝鮮ノ北半、及ビ滿州ノ地ヲ指ス。
(八)扶南ハ今ノ暹羅、緬甸ノ地。
(九)西域ハ今ノ新疆省、及ビソノ以西。
(一〇)嶺南トハ今ノ廣東、廣西地方ヲ指ス。
(一一)夷獠トハ今ノ雲南、及ビソノ西南方緬甸ニ亘ル一帶ヲ指ス。當時蠻民所住地ノ總稱。
(一二)峒穴トハ蠻民ノ棲息處ヲイフ。
(一三)麻豆ハ大麻子、

胡豆ノ併稱。

(二四)饒州ハ、士部白礬ノ條ヲ見ヨ。
(二五)信州ハ今ノ江西省上饒縣ノ地ナリ。
(二六)南劍ハ今ノ福建省南平縣ノ地ナリ。
(二七)澄州ハ今ノ廣西省ノ中央、上林縣ノ地ナリ。
(二八)大食國ハ、水部甘露蜜ノ條ヲ見ヨ。
(二九)麗水ハ唐ノ縣名、故城ハ今ノ浙江省麗水縣ノ西三十五里ニアリ。

で、氈絨に淘り沈ませて取り、或は鵝、鴨の腹中から出ることもあり、それを器物に作つて居るが、重ねて錬るまでもないのである。煎じて取つた金汁は、そのまま心を鎮める藥として用ゐ得る。



〔水金〕

志曰く、今の醫家は皆金薄を練熟し、または水で金器を煮てその汁を取る。かくして用ゐれば毒がない。我が宋朝に及び嶺南地方の支配權を回復したので、彼の地方を視察してその地方の者の言ふところを聽いて見るに、蛇屎が金になるなどといふ話は一向聞かぬ。藏器の說は傳聞の誤だ。頌曰く今の(二四)饒州、(二五)信州、(二六)南劍、(二七)澄州等で採出したものにはさまざまで、山石のやうな狀態のものもあり、米や豆の粒のやうなものもある。これ等のものはいづれも未だ火力の加はらぬものだから生金といふのである。

珣曰く、山海經の所說には金を產出する諸山が極めて多數あつて、悉く列記す

るに違ない。廣州記には『（一八）大食國には金の產出が最も多く、物貨の取引にすべて金貨幣を用ゐて居る』とある。異物志には『金は（一九）麗水に產する。また（二〇）蔡州には瓜子金がある。（二一）雲南に出る顆塊金は山石の間に在るのを採取する。（二二）黔南、（二三）遂府、（二四）吉州等でも水中から麩金を產出する』とある。嶺表錄には『五嶺の內、（二五）富州、（二六）賓州、澄州、（二七）涪縣の大小の河流、溪流中に皆金を產出する。その地方民は多く鵞、鴨を飼つて、その屎の中から金片を淘り採るのだが、一日間に一兩、半兩を採ることもあり、終日一粒も獲れぬこともある。その金は夜でも明に光る』と書いてある。

宗奭曰く、顆塊金とは、山に坑を掘つて深さ百千尺に達すると、そこに金を包含する石を發見する。それにあるのだ。その石は褐色で一方の端が火で黑く燒けたやうに見え、その金の色は濃い赤黃に見える。麩金は河の沙に交つて水中に在るもので淘汰してこれを採る。淺黃色のものだ。これ等は皆生金であつて、これを用うるには鑄錬を要するのである。麩金には純分子以外のものを多く含むから、藥に入れるには塊金を用うるがよい。これは色が濃いだけに金氣も隨つて充分である。その他

（二〇）蔡州ハ今ノ河南省汝南縣ノ境、本漢ノ汝南郡ナリ、唐ニ蔡州ヲ置ク。
（二一）雲南ハ今ノ雲南省。
（二二）黔南ハ黔中以南、即チ今ノ貴州省一帶ヲ指ス。
（二三）遂府、未詳。
（二四）吉州ハ今ノ江西省吉安縣、即チ廬陵ノ地ナリ。
（二五）富州ハ今ノ廣西省梧州ノ西北、昭平縣ノ地ナリ。
（二六）賓州ハ澄州ノ東南ニ接ス、今ノ廣西省賓陽縣ノ地也。
（二七）涪縣、未詳。四川省ノ綿州ハ古涪ト稱シ、川ヲ涪水トイフ。或ハ此ノ一帶ヲ指スモノカ。

(二八)防藥ハ試藥。
(二九)點化ハ化合ノ術ヲ行フコト。
(三〇)紫雪ハ製藥ノ名。
(三一)帶胯ハ帶鉤ナリ。

(二八)防藥で製成したものや(二九)點化して始めて出來上るものには、到底滿足に造化の氣を含有すべき道理がない。(三〇)紫雪などのやうに金の煮汁を用ゐるのは、蓋しその自然の氣を假るだけのものである。又、東南の金は色が深く、西南の金は色が淡い。これは産地の地質の影響に因るものである。



〔山金〕

時珍曰く、金には山金、沙金の二種があつて、その色に就いて品等をいへば、青は七、黄が八、紫が九、赤が十となり、赤が最も質の充分を示す色である。銀の交るものは性が柔で、石に試みれば青い色が現れる。銅の交るものは性が硬く、石に試みれば聲がある。

寶貨辨疑には『馬蹄金は馬蹄に象るもので、得難いものである。橄欖金は荊州、湖南、嶺南地方に産出する。胯子金は(三一)帶胯に象るもので、湖南の北部に産出する。瓜子金は大さが瓜子程のもの、麩金は麩片のやうなもので、湖南、及び高麗に産出する、

沙金は沙屑のやうに細なもので、蜀中に產出する」葉子金は雲南に產出する」といつてある。地鏡圖には『黃金の氣は赤い。夜間に火光、及び白鼠がある』とある。或は山に礦のある下には金があるともいふ。凡そ嘗て塚墓の間に在つたものや、(三二)釵、釧、溲器などに用ゐた金は、陶隱居は之を辱金といひ、醫藥や仙丹に合せ煉つてはならぬといつて居る。寶藏論には『金に二十種あり、また外國のものに五種ある。還丹金——これは、丹を取る穴の中から出るもので、組成分には丹砂を含み、色は最も赤く、丹に合せて服するもので、希世の寶である。麩金——これは、(三三)五溪、(三四)漢江に產出し、大なるものは瓜子ほどあり、小なるは麥粒ほどで、性は平にして無毒である。山金——これは、(三五)交州、(三六)廣州、(三七)南韶の諸山に產出し、石に銜んで生ずるものである。馬蹄金——これは最も精なるもので、二箇の重量が一斤ある。毒金——これは卽ち生金のことで、交州、廣州の山石の內から出るもので色は赤い。大毒があつて人を殺すものだが、十餘回に亘つてこれを錬ればその毒がなくなる。以上の五種は皆眞金である。水銀金、丹砂金、雄黃金、雌黃金、硫黃金、曾青金、石綠金、石膽金、母砂金、白錫金、黑鉛金等はいづれも藥で制成したもの、銅金、

(三二)釵ハカンザシ、釧ハウデワ、溲器ハ便器。

(三三)五溪トハ、水經注ニ、武陵ニ五溪アリ。雄溪、樠溪、西溪、潕溪、辰溪ヲ謂フ。悉ク蠻夷ノ居ル所ナリトアリ。今ノ湖南省ノ南方、及ビ、貴州、雲南廣西ニ亘ル一帶ノ地ヲイフ。

(三四)漢江ハ朝鮮ノ大河、江原道ノ南部五臺山ニ源ヲ發シ、忠清北道、京城道ヲ經テ漢城ノ南ヲ過ギテ海ニ入ル。全長約三

(三五)交州ハ今ノ安南地方。
(三六)廣州ハ今ノ廣東地方。
(三七)南詔ハ今ノ雲南地方ヲ指ス。
(三八)波斯ナル當時ノ稱ハ極メテ漠然タルモノニシテ、印度以西ノ地、アラビア、ペルシヤニ亙ル一帶ヲ指ス。
(三九)東夷トハ今ノ遼東ヨリ東北方、及ビ朝鮮、日本等ヲ指ス。
(四〇)林邑ハ今ノ安南南方ノ地ナリ。秦ニ林邑ト稱シ、後漢末ニ區連始メテ林邑王ト稱ス、唐ノ中葉ヨリ國號ヲ環ト改メ、五代ノ末ニ占城ト號ス。此ニ林邑、占城ヲ重出スルハ奇ナリ。
(四一)西戎ハ火部、陽火陰火ノ條ヲ見ヨ。

生鐵金、熟鐵金、鍮石金はいづれも藥で點成したものだ。以上の十五種は皆假金であつて、性は頑滯にして毒がある。外國の五種とは、(三八)波斯の紫磨金、(三九)東夷の青金、(四〇)林邑の赤金、(四一)西戎の金、(四二)占城の金である』と記載してある。

金屑 【氣味】『辛し、平にして毒あり』大明曰く毒なし。珣曰く、生のものは毒あり。熟せるものは毒なし。宗奭曰く、單に金といはずして殊更に屑の字を加へて呼ぶのは、磨屑してから用うべきものとの意味である。必ず烹鍊、鍛屑して薄にし、始めて藥に入るべきものなのだ。金薄もやはり同樣である。生金は有毒でよく人を殺し、その毒は解し難いものである。若し中毒した場合はただ鷓鴣の肉だけがこれを解す。鍛屑を經ぬものであれば用ゐぬがよい。金の性は錫を惡み、水銀を畏れ、(四三)餘甘子に遭へば體が柔になる。これは相感ずるところのあるものと見える。時珍曰く、金を洗ふに鹽、駱駝、驢、馬の脂を用うればその金が柔になる。金は鉛に遇へば碎ける。翡翠石はよく金を屑にする。これは、物の性には相制するところのあるものだからである。金蛇はよく生金の毒を解す。晉の賈后は金屑酒を飲んで死んだといふから、生金に毒のあるといふことが判る。凡そ金薄を用うるに

（四二）餘甘子ハ菴摩羅ノ一名。夷果類ニアリ。

（四三）金漿ハ金ノ煎汁。

は銅薄との別を審別することが肝腎だ。

【主　治】【精神を鎭め、骨髓を堅くし、五臟の邪氣を通利する。これを服すれば神仙となる】（別錄）【小兒が驚で五臟を傷めたもの、風癇で失志せるものを療じ、心を鎭め、魂魄を安ずる】（甄權）【癲癇、風熱、上氣、欬嗽、傷寒、肺損の吐血、骨蒸で極端に衰弱して渴するもの、いづれも薄を丸、散に入れて服す】（李珣）冷氣を破り、風を除く】（靑霞子）

(四三)金漿（拾遺）【氣　味】金に同じ。【主　治】【長生し、神仙となる。久しく服すれば腸中盡く金色となる】（藏器）

【發　明】弘景曰く、生金は惡を辟けるものだが、同時に毒があるから鍊らずに服すれば人を殺す。仙經に、醢、蜜及び猪肪、牡荊酒などで鍊つて極めて柔にしたものを服すれば神仙になるとある。またこれを水銀と化合すれば丹砂となるものだ。醫方に全然使用せぬのは毒の禍を恐れるからであらう。損之曰く、生のものは人を殺すが、百鍊したものは服してもよい。水銀に合膏して飲む場合には鍊らぬのである。頌曰く、金屑は、古方には用ゐなかつたが、金薄にさへすれば藥に入れて差支

(四四)金石凌、大觀本草ニ金石液ニ作ル。

(四五)豕負革防、詳ナラズ。

ない。又、古方に、(四四)金石凌、紅雪、紫雪などいふは、皆金銀の煮汁を用ゐるのだ。是は煎錬を經たものを通用するので、その物の氣を假るだけのものである。

時珍曰く、金は五行の一として方位では西方に配する。その性はよく木を制するものだから、驚癇、風熱、肝膽の病を療ずるのである。しかし古方には用ゐたものが稀で、ただ服食家が問題としただけであつた。淮南の三十六水法には『化して漿として服餌す』とあり、葛洪の抱朴子には『黃金を食ふことは金液に劣らぬものだ。その法は、(四五)豕負、革肪、苦酒を用ゐて百回錬れば柔になり。樗皮で調理し、或は牡荊酒、慈石でこれを消化すれば水となる。それに雄黃、雌黃等を合せて食へば皆地仙となり得るものだ』といひ、又『丹砂で化して聖金といふものにして服すれば、神仙となつて白日昇天する』などともいふ。別錄や、陳藏器もまた『久服すれば神仙となる』といつて居る。それ等の說は、蓋し秦の始皇や漢の武帝の時、方士達が言觸したことの言傳へである。血肉に依る人間の肉體は、水、穀に依つてこそ維持されるものである。いかで金、石等の重量の多い物を久しく腸、胃の中に食ひ貯へて置けやうか。かかる無謀なことを敢てして長生を求め、却て此の生を喪ふとは誠に愚な

る限りといふ外はない。故に太清法には『金は（一六）中宮陰己の氣を稟け、性は本來剛なもので、これを服すれば肌肉を傷損する』とある。又、東觀祕記には『黄金で死人の九竅を塞げば屍が朽ちぬ』とある。これは理に近いやうではあるけれども、やはり盗を誨ふるものである。さやうなことを試みるよりも、寧ろ速く肉體の存在を無に歸さしむる方が却て氣の利いたことではあるまいか。

附方　新五。【（一七）風眼爛弦】金環を紅く燒いて上下の瞼肉を掠める。日毎に數回試むるが甚だ妙である。（集簡方）【牙齒の風痛】金釵を燒いて針すれば立ろに止る。（集簡方）【輕粉で口の破れたもの】凡そ水腫、及び瘡病で、輕粉を服して後に口瘡となり、齒齦の爛れたるには、金器の煮汁で頻頻と含漱すれば、よく輕粉の毒を殺す。癒えるまでを度とする。（外臺祕要）【水銀の耳に入りたるもの】そのまま置けば腦を蝕するものである。これには金を耳邊に枕すれば自ら出るものである。（張仲景方）【水銀の肉に入りたるもの】筋攣を發するものである。これには金の物で熨すれば水銀が出る。水銀は金を蝕するものだから、その金が白色に見えれば水銀の出た證である。頻に用ゐて效を取るがよし。これは北齊の徐玉の方である。（本草拾遺）

（一六）中宮陰己ノ氣トハ、五行十干ノ中土行ノ陰氣ノ意ナラン。

（一七）爛弦ハタダレメ、

銀（別錄中品）

和名　ぎん・しろかね
學名　Silver

校正　開寶の生銀を併せ入る。

釋名　白金（綱目）鋈　時珍曰く、爾雅には『白金之を銀といふ。その美なるものを鐐といふ』とあり、說文には『鋈は白金なり』とある。印度の書には『阿路巴』といふ。

集解　別錄に曰く、銀屑は(一)永昌に產出する。採收に一定の時期はない。弘景曰く、銀の產地も金の產地と同じであるが、ただこれは土中に生ずるものである。錬つて服食する法も金に似て居る。永昌は益州に屬し、今は寧州の管下である。恭曰く、銀と金とは產地が同くない。銀は各地にあるが、就中(二)虢州に產するものが勝れて居る。その地から出るもの



【銀】

(一) 永昌ハ後漢ノ益州永昌郡ノ地、宋、梁ニハ寧州ニ屬ス。今ハ雲南省ニ屬シ、雲南、蒙化ノ西方ニアリ。舊治ハ瀾倉江ノ西、哀牢山ノ西北ニアリ。

(二) 虢州ハ今ノ河南省陝縣ノ地。

は鉛穢が多く、質が劣る。高麗で帖を作るものは(三)銀鉚から出るものではないといふけれども色が青くて虢州産のやうなわけには行かぬ。志曰く、生銀は饒州、(四)樂平の諸坑の銀鑛中から出る。その狀態が硬錫のやうで文理が粗く、不規則で自然なものが眞物である。頌曰く、銀は鑛石中に在つては銅と相雜つて居る。產地の者はそれを鉛で再三煎錬して取る。故に熟銀といふのである。生銀は、銀鑛の中に在る狀態は硬錫のやうであるが、金坑中から取るものは、土石の中から滲み漏れて絲を垂れたやうに條をなすものがある。その土地の者は之を老翁鬚と呼び、極めて得難いものとなつて居る。藥方の書にいふ生銀を用うとあるには此れを得て用うれば眞物だ。

珣曰く、按ずるに、南越志に『波斯國に天生の藥銀なるものがあつて、それを用ゐて藥物試驗用の指環を作る』とある。又、朱粉を燒く甕の下には多年沈積して銀が出來る。これは㔻鉛銀と呼ばれ、光があつて軟く甚だよきものだ。波斯銀と功力は相似たものだが、ただ如何にも得難いものである。今時の(五)燒錬家の如きも、一斤の生鉛を用ゐて一二銖しか取れぬのである。山海經には、東北方樂平郡の(六)堂少山に

(三)字書ニ、鉚ハ鑛金璞ナリトアリ。
(四)樂平ハ漢ノ縣名、晉ノ郡名、今ノ山西省平定縣東南ノ地ナリ。
(五)燒錬家ハ冶金家。
(六)堂少山、未攷。山海經北山經ニ少山トアルハ、昔ノ樂平郡、今ノ平定縣ニアリ。上黨少山ノ脫譌カ。

(七)唐ノ黔中ハ今ノ四川省彭水縣ニ舊趾アリ。一般ニイフ黔中トハ、戰國時代ノ楚國ノ地、今ノ湖南、貴州ノ地ヲ指ス。

(八)閩ハ福建省、浙ハ浙江省、荊ハ湖北省、湖ハ湖南省、饒州ハ江西省、廣ハ廣東省、滇ハ雲南省ヲ指ス。

銀を出すこと甚だ多しとある。(七)黔中の生銀は體質が硬くて藥用には入れられない。

宗奭曰く、鑛石から採る銀は必ず煎錬して採るものだから熟銀といふ。生銀といふは鑛石から採るのではなく、特にそのままの銀で生ずるものだ。これは老翁鬚と呼ばれ、藥用上には殆ど同一功力を有つものである。世間の方術士などが、硃砂から作つたり、鉛汞から作つたり、焦銅で作つたりするものには、全く造化の氣を具有して居らぬものだ。故に藥用に入れ得べき道理はない。截然と區別をせねばならぬ。

時珍曰く、(八)閩、浙、荊、湖、饒、信、廣、滇、貴州、交趾等諸處の山中にはいづれも銀を產し、鑛石から錬つて採るもあり、沙土中から錬つて採るもある。所謂生銀なるものは俗に銀筍、銀牙などと稱するもののことである。また之を出山銀ともいふ。獨孤滔の丹房鑑源に、所謂『鉛坑中から筍のやうな形で褐色の石が出る。打破れば白いものだ、これを名けて自然牙といひ、自然鉛といひ、また生鉛ともいふ。この物は變化の性質があつて服食には堪へぬ』といつてあるは生銀のことである。管子には『上に鉛があれば下に銀がある』とある。地鏡圖には『山に葱があればそ

の下に銀がある。その銀の氣は夜に入ると正白の光となつて地上に流散し、その精が變じて白雄雞となる』といふことが書いてある。寶藏論には『銀に十七種あり、又外國にも四種ある。天生牙――これは銀坑内の石縫中に生じ、狀は亂絲の如く、色の紅なるものを上とする。火に入れて紫白になり、草根のやうなものが之に次ぐ。黑石を銜むものは最も奇なるもの一種である。樂平や(九)鄱陽の鉛を產する山に生ずるもので、一名龍牙といひ、一名龍鬚ともいふ。これは正に生銀の無毒なるもので、至藥の根本である。生銀――これは鑛石の中に片塊をなして生ずるもので、大小一定せず、狀態は硬錫のやうである。母砂銀――これは(一〇)五溪の丹砂坑の中に生ずるもので、色紅く光澤がある。黑鉛銀――これは子、母の氣を受けたものだ。以上の四種は眞銀である。水銀銀、草砂銀、曾青銀、石綠銀、雄黃銀、雌黃銀、硫黃銀、膽礬銀、靈草銀などいふはいづれも藥で制成したもの、丹陽銀、銅銀、鐵銀、白錫銀などいふはいづれも藥で點化したものだ。以上十三種はいづれも假銀である。外國の四種とは、新羅銀、波斯銀、林邑銀、雲南銀で、いづれも精好なものだ』とある。

銀屑　[修治]　弘景曰く、醫方で鎭心丸に之を用ゐるは不可である。これを誤

(九)鄱陽ハ湖名、古ノ彭蠡湖ナリ。ココニハソノ沿岸ノ地ヲ指ス。漢ノ鄱陽縣、三國ノ郡、今ハ江西省潯陽道ニ屬ス。
(一〇)五溪ハ金ノ條ヲ見ヨ。

なく服するには、屑にして水銀で研つて溶してからでなければならぬ。恭曰く、方術家が銀屑を用ゐるには、既成の銀薄を取り、水銀で溶して泥にし、消石と鹽を合せ研つて粉にし、それを燒いて水銀を出し、鹽と消石を淘り去つてから、極めて細な粉にして用ゐる。それでこそ佳いのであつて、ただ磨つて屑にしただけで用ゐてはならぬのである。時珍曰く、藥に入れるには、銀薄の細にし易きものを用うればよいのである。水銀や鹽、消などを用ゐて制したものは反つて毒がある。龍木論に銀液とあるはそれをいふのである。又、錫薄を銀薄と僞られる場合があるから、その識別によく注意せねばならぬ。

氣味 【辛し、平にして毒なし】珣曰く、大寒なり、毒なし。生銀の條下に詳記してある。

主治 【五臟を安んじ、心神を定め、驚悸を止め、邪氣を除く。久しく服すれば身を輕くし、天年を延べる】（別錄）【志を定め、驚癇を去る。小兒の癲疾狂走に用ゐる】（甄權）【冷を破り、風を除く】（靑霞子）【銀薄は、骨を堅くし、心を鎭め、目を明にし、風熱、癲癇を去る。丸、散に入れて用ゐる】（李珣）

生銀【氣味】『辛し、寒にして毒なし』獨孤滔曰く、鉛の內の銀は毒あり。保昇曰く、黃連、甘草、飛廉、石亭脂、砒石を畏れ、羊血、馬目毒公を惡む。大明曰く、冷にして微毒あり。慈石を畏れ、錫を惡み、生血を忌む。時珍曰く、荷葉、蕈灰はよく銀を粉にする。羚羊角、烏賊魚骨、鼠尾、龜殼、生薑、地黃、慈石はいづれもよく銀を瘦せしめる。羊脂、紫蘇子油は皆よく銀を柔にする。

【主治】『熱狂、驚悸、發癇で、恍惚として夜臥して不安なるもの、譫語、邪氣、鬼祟。これを服すれば目を明にし、心を鎭め、神を安らかにし、志を定める。小兒の諸熱、丹毒には、いづれも水で磨つて服す。功力は紫雪に勝る』(開寶)『小兒の中惡、熱毒、煩悶には、水で磨つて服す』(大明)『煮た水に葱白、粳米を入れ粥にして食へば、胎動の不安、漏血を治す』(時珍)

【發明】好古曰く、白銀は肺に屬する。頌曰く、銀屑は、葛洪の肘後方に『癰腫を治す。五石湯の中にこれを用う』とある。宗奭曰く、本草に『銀屑は毒あり、生銀は毒なし』とある文を、注釋者は輕輕に扱つてその說明を漏して居るが、蓋し生銀は已に外に發して蘊積する欝氣がないから毒がなく、鑛石中から採る銀は、石中に

蘊積して鬱結の氣が暢び散じて居らぬから毒なのである。時珍曰く、この說は正しくない。生銀は初め煎出したときは何の文理もなく、そのままの天眞だ。それゆゑに毒はないのである。また鎔けた銀の中へ少量の銅を投ずると、忽ち絲のやうな花のやうな理文が生じ、更に多量の銅を投ずれば銀の性質が破壞される。けれども銅を取り去れば再び銀に還るのであつて、初め少量の銅を入れたときは、銅を排することが出來ずして一種の僞銀となるのである。又、この作用に從ひ、藥石や鉛、錫で一種の合成銀を作ることもある。かやうなわけで、古方では、水銀を用ゐて煎じ鎔し、銀薄に製して之を泥にし、それを藥に入れるのだから、銀屑には毒が含まれて居る譯である。銀本來のものには毒はない。毒ありとすればそれは銀以外の諸物の毒なのである。今一般に銀器に飲食物を盛るが、その物に毒があれば銀は黑色に變ずるものである。中毒で死んだ者に對し、その毒を探り試むるにもやはり銀の物を用ゐる。これは銀そのものの無毒であることを證するものである。銀を藥に入れるのは、肝を平げ、怯を鎭むる作用を認めるからであつて、太清服煉書に「銀は西方辛陰の神を稟け、精を結びて質となす。性は剛戾であつて、之を服すればよく肝

を傷る』とあるは(一一)是である。抱朴子に『銀を水に化して服すれば地仙となる』などいふは、これまた方士の謬言であつて信ずるに足らぬ。斅曰く、凡そ金、銀、銅、鐵を使用するのは、ただ藥品中にそのまま置いてその氣を借りて藥力を生ぜしめるが目的である。藥に入れて服してはならない。よく人の脂を消すものである。

【附方】　舊二、新四。【姙娠腰痛】折くるやうに痛むには、銀一兩、水三升を二升に煎じて服す。(子母祕錄)【胎動で墮胎せんとするもの】痛忍び難きには、銀五兩、苧根二兩、淸酒一盞、水一大盞を一盞に煎じて溫服する。(婦人良方)【胎熱橫悶】生銀五兩、葱白三寸、炒つた阿膠半兩、水一盞を煎じて服す。また糯米を入れ粥にして食ふもよし。(聖惠方)【風牙疼痛】文銀一兩を紅く燒いて燒酒一盞に淬し、熱漱して飮めば立ろに止る。(集簡方)【口鼻の疳蝕】唇を穿ち、頰に透るには、銀屑一兩、水三升を銅器で一升に煎じ、日毎に三四回づつ洗ふ。(聖濟錄)【身體面部の赤疵】常に銀で揉み擦つて熱せしむれば久しくして自ら消える。(千金翼)

【附錄】　**黃銀**(拾遺)恭曰く、黃銀は本草に記載してない。俗に、器にして用うれば惡を辟けるといふ。して見れば一種の靈的なものと見える。藏器曰く、黃銀

(一一)此註、解シガタシ。

（一二）蜀中トハ今ノ四川省ノ成都ヲ中心トセル一帶ノ地ヲ指ス。

は瑞物圖經に記載して在る。既に器として用ゐられるといふ以上、靈的な物でないことは明である。時珍曰く、按ずるに、方勺の泊宅編に、『黃銀は（一二）蜀中に產出する。色は金と異らぬが、ただ石の上に置けば白色となる』とある。熊太古の冀越集には『黃銀は絕えて少いもので、道家では鬼神之を畏るといふ』とある。六帖には『唐の太宗が、房玄齡に帶を賜つて言はれるには、世間には黃銀は鬼神が畏れるものだと言傳へてある云云』と記載してある。春秋運斗樞には『人君が金德を秉つて生ずれば黃銀が現れる』とある。世人が鍮石を黃銀だといふは誤だ。鍮石は藥で合成した黃銅である。

烏銀　藏器曰く、今世間では、銀を硫黃で熏じて二晝夜經つてから洗つて色を黑くし、技工者がそれを用ゐて器物を作る。道家の所謂養生家は、この器で藥を煮、また夜間これを一二丈の高處に置いて露醴を承けて飮み、それで天年を延し、邪惡を辟けると稱して居る。

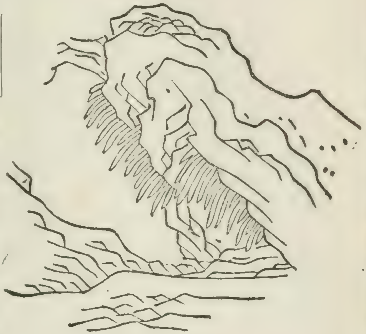
錫恡脂（綱目）

和名　ペルシヤ國から出る銀鑛（角銀鑛？）

學名　Cerargyrite?

【集解】時珍曰く、これは波斯國の銀鉚である。また悉蘭脂とも書く。

【主治】【目に瞖膜を生じたるには、火で銅鏃を燒き、その先に輕く之を點けて目に傅ければ痛まなくなる。又、一切の風氣、及び三焦の消渇飲水に主效がある。いづれも丸藥に入れて用ゐる】（時珍）



（錫恡脂銀礦）

【附方】新一。【小兒の天弔】涎多く、搐搦して定らぬには、錫恡脂一兩を水で淘つて黑汁を盡して水銀一分、棗肉少量と星の見えぬまで研り、これを牛黃半分、麝香半分と共にむらなく研つて粳米飯で黍米大の丸にし、毎服三十二丸づつ新汲水で服す。これを保命丹と名ける。（普濟方）

銀膏（唐本草）

和名　錫又は銀と水銀との合金

英譯名　Amalgam of tin(or silver) and mercury.

〔集解〕恭曰く、このものは白錫を銀薄、及び水銀に和して合成し、凝硬した銀の如きものだ。その合錬には自ら法がある。時珍曰く、現今方術家の銀脆といふものは、恐らくこの物をいふのであらう。

〔氣味〕【辛し、大寒にして毒あり】〔主治〕【熱風、心虚で驚悸、恍惚、狂走するもの、膈上の熱、頭面の熱風が衝心して上下するに用ゐ、神を安んじ、志を定め、心を鎮め、目を明にし、水道を利し、人心風、健忘を治し、また牙齒の缺落を補ふ。(蘇恭)

硃砂銀（日華）

和名　銀と鉛と辰砂の混合物
英譯名　A mixture of silver, lead and cinnabar

〔集解〕時珍曰く、これは方士が諸藥を硃砂に合せて錬製して造るものだ。鶴頂新書に『丹砂なるものは、青陽の氣を受けて始めて鑛石が生じ、それが二百年經つて丹砂となつて(一)青女を孕む。更に三百年經つと鉛になり、更に二百年經つと銀になり、更に二百年經つと、また太和の氣を得て化して金となる』とある。又『金公は丹砂を以て子と爲す。これは陰中の陽であつて、陽死し陰凝り、それで成立し

(一)青女ハ水銀ノ一名。

た至寶である』ともある。

〔氣味〕【冷にして毒なし】大明曰く、石亭脂、慈石、鐵を畏れ、一切の血を忌む。〔主治〕【天年を延べ、皮膚の色澤を益し、心を鎭め、神を安んじ、驚悸を止め、邪を辟ける。中惡、蠱、心熱煎煩、憂忘、虛勞を治す】（大明）

赤銅（唐本草）

和名　しやくどう
英譯名　An Alloy of copper and gold

〔釋名〕紅銅（綱目）赤金（弘景）屑を銅落、銅末、銅花、銅粉、銅砂と名ける。時珍曰く、銅は金と同一物で成るとの意味から、文字は金と同とを从べたのである。

〔集解〕弘景曰く、銅は赤い金であつて、生、熟共に赤い　しかし本草では用ゐてない。現今では銅青や(一)大錢を皆方に入れて用ゐて居る。いづれも生銅であつて、これは本草の下品の中に置いて然るべきものであらう。

時珍曰く、銅には赤銅、白銅、青銅がある。赤銅は四川、廣州、雲南、貴州の諸處の山中から産出し、その地方民は山を掘つて礦を採り、鍊つて之を取るのである。

(一)大錢、周時ノ錢。

(二)南番ハ廣、交以南中國ノ版圖以外ノ諸國ヲ指ス。

(三)響銅、響ハ響ニ同ジ。和名サハリ。

(四)丹陽トハ今ノ河南省丹江ノ南ノ地ヲイフ。

(五)武昌ハ今ノ湖北省鄂城縣ノ治、三國時代ノ郡名。

白銅は雲南に產し、青銅は(二)南番に產するが、最も利用の範圍が廣く、且つ藥に入るべきものは赤銅である。世間では爐甘石で鍊つてその色の金の如き、黃銅を作り、砒石で鍊つて白銅を作り、錫を雜へて鍊つて(三)響銅を作る。山海經には『銅を出すの山四百六十七』とあるが、現在では更に幾許あるか數へきれぬ。寶藏論には『赤金には十一種ある。(四)丹陽の銅、(五)武昌の白慢銅、一生銅、生銀銅、これ等は皆陶冶に由らずして生ずるもので、毒なし、鼎などの飲食器を作るに適する。波斯の青銅は鏡を作るべく、新羅銅は鐘を作るべく、石綠、石青、白青等の銅はいづれも藥で制成したものである。鐵銅は苦膽水で浸して赤煤の出るまで熬鍊して成るものだから、黑くして堅い。錫坑銅は大いに軟いから點化し得るものだ』とある。自然銅に就ては本條に記載してある。鶴頂新書には『銅と金と銀とは同一根源である。紫陽の氣を得て綠が生じ、綠は二百年經つて石を生じ、銅が始めてその石の中に生ずる。その氣は陽を稟くるが故に剛戾だ』とある。管子には『上に陵石あれば、下に赤銅がある』といひ、地鏡圖には『山に慈石があれば、その下に金、若くは銅があり、草莖が黃にして秀でたる處の下には銅器がある。銅器の精は馬になり、童僕になる』といふこ

とを言つて居る。抱朴子には『銅には牝、牡がある。火中で赤く燒いて童男と童女に水を灌がせると、銅は自ら兩段に分れる。その凸起した方が牡、凹下した方が牝であつて、その牝で雌劍を作り、牡で雄劍を作り、それを帶びて大河や湖水に入れば、蛟龍や水神が皆畏れて避ける』といふことが書いてある。

赤銅屑　［修治］　時珍曰く、銅を打つ際に落下する屑である。或は紅銅を火に煅き水に淬しても自ら落下する。それを水で淘り淨めて沙鍋の內へ入れ、好き酒で火の星が出るまで炒り、研末して用ゐる。

［氣味］　【苦し、平にして微毒なり】時珍曰く、蒼朮は銅を粉にし、巴豆、牛脂は銅を軟にし、慈姑、乳香は銅を（六）啞にする。物の性が然らしむるのである。

［主治］　【賊風反折には日毎に三回づつ、熬つて極熱して酒中に投じて五合を服す。或は五斤を赤く燒いて酒二斗の中へ百回納れ、上記の如くして服す。又、腋臭を治するには、醋で和して麥飯の如くして袋に盛り、先づ腋下の脈を刺して血を去り、これで封ずれば神效がある】（唐本）【目を明にし、風眼を治し、骨を接ぎ、齒を著け束ね、婦人の血氣、及び心痛を療ず】（大明）【五倍子と共に用ゐてよく鬚

（六）啞ニストハ聲ナカラシムルコトヲ云フ。

（七）定州ハ土部白瓷器ノ條ヲ見ヨ。

髪を染める】（時珍）

【發　明】　時珍曰く、太淸服錬法に『銅は東方乙陰の氣を稟つて結成したもので、性は利い。之を服すれば腎を傷る』とある。既に腎を傷るといふものが、また能く骨を接ぐといふは何事であらう。藏器曰く、赤銅屑は傷寒に主效があり、よく人の骨を著け束ねる。六畜の損傷に細研して酒で服ませると、直ちに骨の損じた處に入るものだ。その六畜が死んでからその骨を取つて視ると、銅の著け束ねた痕の殘つて居るがその證である。打ち熟した銅ではその用を爲さない。愼微曰く、朝野僉載に『（七）定州の崔務が落馬して足を折つたとき、醫師が銅末を酒に和して服ませるとそれで瘥えた。務が歿して十年の後、改葬の際、その脛骨の折れた箇所を視ると、ありありと銅が骨を束ねてあつた』と書いてある。

【附　方】　舊一。【腋下の狐臭】崔氏の方では、淸水で洗淨し、又は淸酢漿で洗淨して微しく揉り破り、銅屑を酢に和して熱して揉み擦れば甚だ驗がある。（外臺）

自然銅（宋開寶）

和名　自然銅
英譯名　Native copper

【釋名】 石髓鉛　志曰く、その色は青黃で銅の如く、礦を錬つたものでないから自然銅と呼ぶのである。

【集解】 志曰く、自然銅は(一)邕州の山巖の間の銅を產する處の坑中、及び石の間に生ずる。採取したままでは形が方圓一定せず、青黃色で銅のやうである。頌曰く、今は(二)信州、(三)火山軍の銅坑中、及び石の間にいづれもある。信州から出る一種は、銅線を亂したやうな狀態だ。これは銅礦中で山氣の熏蒸に依つて自然に流出するもので、やはり生銀、老翁鬚などの類のやうなものである。藥に入れるに最も好い。火山軍から出るものは。銅のやうな顆塊で、石のやうに堅く重い。醫家は之を鍮石と呼んで用ゐるが、力は薄い。採取に一定の時期はない。南方の醫者の說に依ると、自然銅には兩三體あつて、一體は麻、黍ほどの大さで、或は四角に碎けるものが纍纍と相綴つて斗の大さに塊つたものもある。色は煌煌と明で黃金か鍮石などを見るやうだ。藥に入れるに最上のものである。一體は大小不定の塊で、やはり赤く明な光がある。一體は薑鐵屎などのやうなものだが、それも人工を加へずして成つたやうだ。大小一定せぬ。いづれも銅坑の中から出るもので、擊てば碎け易く、黃赤

(一)邕州ハ唐ニ置ク。今ノ廣西省邕寧縣。節度使此ニ駐剳ス。
(二)信州ハ金ノ條下ヲ見ヨ。
(三)火山軍ハ火部、陽火陰火ノ條ヲ見ヨ。

のものもあり、青赤のものもあり、これを錬れば銅に成るのだといふ。この話は頗る精しく說明してあるが、しかしその亂れた銅絲に似たものといふはまだ見たことがない。又現今の商人は多く鉱石を自然銅と稱して賣つて居るが、その物は燒いて見ると硫黄のやうに青い焰の出るものだ。これにも二三種あつて、その一種は、殼があつて禹餘粮の如く、擊ち破ればその中は明な鏡のやうな光があり、色は黃で鍮石のやうだ。また一種は、青黃で墻壁があり、針を束ねたやうな文がある。また一種は、理が碎けて砂の塊のやうだ。いづれも光があつて銅の如く、色は多くは青白く、赤いものは少い。これを燒けば皆烟と焰になり、頃刻にして悉く無くなつて了ふ。今の醫家は多くは誤つてこれを自然銅だと思つて居るといふことである　商人共は往往これを自然銅と稱して賣つて居る。しかし、自然銅を用ゐるには必ず火に煆くことになつて居るから、形や色では確なことが判らぬにしても、この物は火を畏れるのだからこの點だ



〔自然銅〕

けで十分判別が付くわけだ。

獨孤滔曰く、自然銅は信州(四)鉛山縣の銀採取場の銅坑の深い處から出る。これは多年銅鑛の鑛氣が結晶して馬氣勃のやうになつたものだ。色は紫で重く、食つて見て苦濇いものが眞物である。今世間で(五)大礶石を自然銅といつて居るは誤だ。承曰く、今は辰州の川澤中から一種の自然銅を產出する。形は圓く蛇含のやうで、大なるものは胡桃ほど、小なるものは粟ほどあり、外に黑く光潤な皮があつて、破つて見ると鉱石と變りはないが、ただ鉱石のやうな臭氣がないだけだ。藥に入れて殊に效驗がある。斅曰く、石髓鉛、卽ち自然銅である。これと眞に相似たもので方金牙といふを用ゐてはならぬ。誤つてこれを食へば吐して死亡するものである。石髓鉛は乾銀泥に似て味が微甘である。

時珍曰く、按ずるに、寶藏論には『自然銅は曾靑、石綠の穴中に生じ、狀態は寒林草の根の如く、色は紅膩でやはり墻壁がある。又ある種類のものは、丹砂に似て光があり、堅硬で稜がある。中に銅脈を含むものが尤も佳い。またある種類のものは、木根に似て紅膩ならず、手に隨つて碎けて粉になる』とある。この說明は至つて精明

(四)鉛山縣ハ今ノ江西省豫章道ニ屬ス。西方四支里ニ桂陽山アリ、卽チ鉛山ナリ。今ハソノ山已ニ傾陷ス。

(五)礶、一本火磜石ニ作ル。

だ。銅鑛に近き山にはこれがある。現に俗間で用ゐて居る自然銅は皆贋物だ。

【修治】 斅曰く、石髓鉛を採つたならば、搥き碎いて甘草湯と共に(六)二伏時の間煮る。それを夜の明方に漉し取り、攤げて乾し、臼に入れよく搗き、重ねて篩ひ、醋に一夜浸し、明方に至り(七)六一泥を以て瓷盒子を泥して二升を盛り、(八)文武火中で三晝夜の間熱を加へ、乾いた時その盒子に土を蓋ふて二伏時の間煆き、土を去つて、粉のやうに研つて用ゐるのである。凡そ右の調製には石髓鉛五兩に對し醋二鎰を用ゐるが適度である。時珍曰く、現今では七回火で煆き七回醋に淬して研細し、水で飛過して用ゐて居る。

【氣味】 【辛し、平にして毒なし】大明曰く、涼なり。

【主治】 【折傷に用ゐて血を散じ、痛を止める。積聚を破る】(開寶) 【瘀血を消し、膿を排し、筋骨を續ぎ、産後の血邪を治し、心を安んじ、驚悸を止める。酒に磨つて服す】(大明)

【發明】 宗奭曰く、ある人が自然銅で翅の折れた胡雁を飼つてゐたところ、後に遂に飛び去つたといふことである。現今では打撲損傷に、これを研細して水で飛過し、當歸、沒藥各半錢と共に酒で調へて服し、手で患部を摩す。震亨曰く、自然

(六)一伏時、一日一夜ノコト。二伏時二日二晩。
(七)六一泥ハ蚯蚓泥ノ別名。
(八)文火ハ緩熱火。武火ハ盛熱火。

銅に就て、世間はただ接骨だけの藥と信じて居るので、それ等の方は可なり多いのだが、それの場合は大抵氣を補し、血を補し、胃を補せねばならぬものである。ところが俗醫は徒に病人の希望に迎合して速效を擧げることにのみ驅られ、頗る不用意に用ゐて居るが、銅は煆いたもの以外は用ゐてならない。それも火から出したてのものは火毒、金毒が互に相扇し、香藥熱毒を挾むものだから、成程接骨の功はあるにしても、副作用としての燥散の禍が却て刀劍の害よりも甚しい。特に戒めて置く次第である。時珍曰く、自然銅の接骨の功は銅屑と同樣なること誣ふべからざるものである。けれども接骨の目的を達した後に常服してはいけない。服用する場合には、氣を理し、血を活すことに、充分注意すればよいのである。

【附方】　新三。　【心氣刺痛】自然銅を九回繰返して火に煆き醋に淬して硏末し、醋で一字を調へて服すれば止る。（衞生易簡方）　【項下の氣癭】水甕の中に自然銅を入れて置き、毎日の飮食物を皆その水で調理すれば癭は自ら消える。或は自然銅を火で燒き、その烟氣を徐に吸ふもよし。（楊仁齋直指方）　【暑濕癱瘓】四肢の運動不能には、自然銅を赤く燒いて一夜酒に浸し、炮いた川烏頭、五靈脂、酒に浸した蒼朮各

一兩、當歸二錢、これをその酒に浸して末にし、酒糊で梧子大の丸にし、每服七丸を酒で服す。四肢に痲木を覺えたならば止める。（陸氏積德堂方）

銅礦石　礦の音は古猛の切また鉚と書く。
（唐本草）

和名　銅礦（黃銅礦？）
英譯名　Copper ore (Chalcopyrite ?)

【釋名】　時珍曰く、礦とはあらいもの粗惡なもののことで、五金共いづれも粗石に含まれて居るものだから、その金屬を含有する粗石を礦といふのである。麥の粗いものを麳といひ、犬の惡いものも獷といふと同じ意味である。



〔銅礦〕

【集解】　恭曰く、銅礦石は、形狀は薑石の如く、銅の細片が星のやうに含まれて居る。これを鎔して銅を取るのであつて、銅山の中から出るものである。許愼の說文に、礦銅は鐵樸石なりとある。

【氣味】【酸し、寒にして小毒あり】【主治】【丁腫、惡瘡には末にして傅ける。驢、馬の脊瘡、臭腋には磨汁を塗る】（唐本草）

銅青（宋嘉祐）

和名　綠青（りよくせう・ろくせう）
學名　Verdigris

【釋名】銅綠

【集解】藏器曰く、生、熟銅共に青がある。これは銅の精華であつて、大なるものは空綠、それに次くは空青である。銅青は銅器上に生ずる綠色の銷で、これを淘り洗つて用ゐるのだ。時珍曰く、近頃世間では銅に醋をかけて生ずる綠を取收めて晒し乾して賣つて居る。

【氣味】【酸し、平にして微毒あり】【主治】【婦人の血氣、心痛。金瘡を合し、血を止め、目を明にし、(一)膚赤、息肉を去る】（藏器）【風(二)爛眼の淚の出るに主效がある】（之才）【惡瘡、疳瘡を治し、風痰を吐し、蟲を殺す】（時珍）

【發明】時珍曰く、銅青なるものは銅の液氣の結晶である。酸し、小毒あり。能く肝膽に入る。故に風痰を吐利し、目を明にし、疳を殺すのであつて、これ等は

(一)膚赤、角膜炎。
(二)爛眼、タダレメ。

(三)乳、撓ニ通ズ。

(四)彈子大ハ雞子黃ノ大サ。

(五)芡子大ハ豌豆大ニ同ジ。

(六)走馬疳、和名ハクサ。頰部寒壞疽トモイフ小兒ノ病ナリ。

皆肝膽の病である。抱朴子に『銅青を水に塗れば水に入れても腐らぬ』とある。

附方 舊二、新十一。【風痰卒中】碧琳丹――痰涎が盛に潮し、卒中で言語不能のもの、及び全身の風癱を治す。生綠二兩を(三)乳細し、水で化し石を去つて緩き火で熬り乾し、辰の日辰の時を擇んで辰の方位の場所で修合し、再び研つて麝香一分を入れ、糯米粉の糊で和し、(四)彈子大の丸にして陰乾し、卒中には、一丸づつを二服にして薄荷酒に研つて服す。その他の風には、硃砂酒で化して服す。靑碧色の涎を吐出し、惡物を瀉下して大いに效がある。患者が小兒の場合は、綠雲丹を用ゐる。銅綠を多少に拘らず粉に研り、醋麪糊で(五)芡子大の丸にし、服用するには、薄荷酒で化して一丸を服す。膠のやうな涎を吐いて神效がある。(經驗方)【爛弦風眼】銅靑を水で調へて盌の底に塗り、それを艾で熏じ乾し、それを刮つて爛れた箇所へ塗る。(衞生易簡方)【赤髮、禿落】油で銅錢を磨て末にして塗れば毛が生える。(普濟方)【面黶、黑痣】草でかき破つて銅綠の末を傅ける。三日間は水で洗つてはならぬ。それで自ら落ちる。厚いためになほ取れぬには再び塗る。(聖濟錄)【(六)走馬牙疳】銅靑、滑石、杏仁と等分を末にして擦れば立ろに癒える。(鄧眞人經驗方)【口鼻の疳瘡】銅靑、

枯礬等分を研つて傅ける。○またある方では、人中白一錢、銅綠三分を研つて傅ける。【楊梅毒瘡】銅綠を醋で煮て研末し、燒酒で調へて搽る。極めて痛み、水が出て次の日には乾く。或は白礬等分を加へ、研つて摻る。(簡便方)【臁瘡、頑癬】銅綠七分を研り、黃蠟一兩に化して熬り、厚紙の表裏に塗りのべ、別の紙を隔てて貼る。水を出すこと妙である。また楊梅瘡、及び蟲咬を治す。(筆峰雜興)【(七)腸風、痔瘻】方は密陀僧の條にある。【諸蛇の螫毒】銅靑を傅ける。(千金方)【あらゆる蟲の耳に入りたるとき】生酒で銅綠を調へて滴入する。(衛生家寶方)【頭髮の虱】銅靑、明礬の末を摻る。(摘玄方)

鉛(日華)

和名　なまり・鉛
學名　Lead

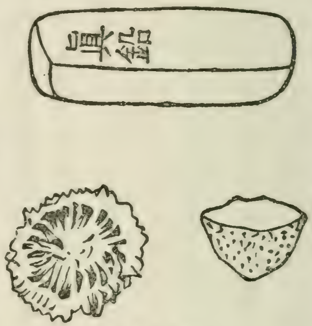
釋名　靑金(說文)黑錫　金公(綱目)水中金　時珍曰く、鉛は沿流し易いから鉛といふのである。錫を白錫といふに對しこれを黑錫といふ。また神仙家では鈆と書き、その文字を二ッに分けて金公と呼び、隱語を用ゐて水中金ともいふ。

集解　頌曰く、鉛は蜀郡の平澤に產出する。今は銀坑のある處にはいづれに

(七)腸風ハ腸出血。

（一）嘉州ハ今ノ四川省樂山縣。
（二）利州ハ今ノ陝西省ノ西南端廣元ノ地ナリ。西漢水ノ東岸ニ在リ。
（三）金剛鑽ハ金剛石ノ一名。
（四）雅州ハ水部甘露

もあつて、礦石を燒いて取るのである。時珍曰く、鉛は山穴石間に生ずるもので、採取するには、油燈を持つてその坑穴に入り、礦脈に隨つて上下、左右に曲折し、



〔鉛〕鑛も同じ

數里（支那里、一里は六丁である）の深さにまで深入りしてその礦石を切取るのである。鉛の氣は人を毒するもので、若し幾月かその坑中に入つて居ると、皮膚が痿黃し、腹が脹つて物を食ふことが出來ず、多くは疾を發して死ぬものである。地鏡圖には『莖の赤い靑草の生ずる地の下には鉛が多い。鉛、錫の精は老婦となる』とある。獨孤滔は『（一）嘉州、（二）利州には草節鉛が出る。生鉛のまだ鍛へぬもので、打破れば脆く、燒けば氣が硫黃のやうである。紫背鉛といふはその熟鉛であつて鉛の純粹なものである。變化があり、能く（三）金剛鑽を碎く。（四）雅州には釣腳鉛が出る。形は皂莢子のやうでもあり蝌斗子のやうでもあつて、色は黑い。山の谷間の沙中に生ずるのである。これは汞を乾す作用がある。盧氏鉛といふは、粗惡で力も

ノ條ヲ見ヨ。
(五)信州ハ金ノ條ヲ見ヨ。
(六)劍州ハ今ノ四川省劍閣縣ノ地。
(七)苗ハ鑛石ノコト。
(八)犍爲ハ今ハ四川省ノ一地方。漢ニハ今ノ宜賓縣ヲ犍爲郡トナシ、後漢、晉、劉宋ニハ今ノ彭山縣ノ東北ヲ犍爲郡トナシ、又、南齊ニハ今ノ雲南境ニ犍爲縣ヲ置キ、隋唐ニハ今ノ犍爲縣ノ東南ニ縣ヲ置キ、宋以來今ノ地ニ犍爲縣ヲ置ク。
(九)上饒ハ信州ノ地
(一〇)樂平ハ銀ノ條ヲ見ヨ。
(一一)倭鉛ハ亞鉛。
(一二)五金ハ金、銀、銅、鐵、錫。
(一三)八石ハ朱砂、雄黃、空青、硫黃、雲母、戎鹽、硝石、雌

劣る。(五)信州の鉛には銅氣が雜つて居る。陰平鉛は(六)劍州に出る。これは銅、鐵の(七)苗である。いづれも藥用にはならぬ』といつて居る。寶藏論には『鉛に數種あつて波斯の鉛は堅く白く、天下第一である。草節鉛は(八)犍爲に產出し、銀の精である。衘銀鉛は銀坑の中の鉛であつて、內に五色を含む。いづれも藥として妙である。(九)上饒、(一〇)樂平の鉛は波斯の草節鉛に次ぐ。負版鉛は鐵の苗であつて、藥には用ゐられぬ。(一一)倭鉛は金を勾出する作用があるといつてある。土宿眞君の本草には『鉛なるものは(一二)五金の祖であつて、五金狴犴、追魂使者などとも稱する。その意味は、よく五金を伏し(一三)八石を殺す力のあることをいふのである。雌黃は金の苗であつて、中にある鉛氣が黃金の祖なのである。銀坑にある鉛、これは白金の祖である。信州の鉛には銅が雜る。これは(一四)赤金の祖である。錫と氣を同じくするものは(一五)青金の祖である。また砞砂は鉛を伏して硫を殺し、硫は鉛を戀して硇を伏し、鐵は磁を戀して鉛を殺し、雄は鉛を戀して(一六)五加を死す。隨つて鉛は變化が最も多く、一變して胡粉となり、再變して黃丹となり、三變して密陀僧となり、四變して白霜となる』とある。雷氏の炮炙論には『鉛を火に住らすには脩天に仗らねばならず、形

を堅くするには紫背を缺くべからざるものだ』とあり、その註に『脩天は補天石、紫背は天葵だ』といつてある。

修治 時珍曰く、凡そ鉛を用うるには、(一七)鐵銚で溶化し、瓦の上に流して渣脚を濾し去る。それを數回繰返して取收めて用ゐる。(一八)黑錫灰といふは鉛沙で取つた黑灰のことだ。白錫灰は藥に入れられない。

氣味 【甘し、寒にして毒なし】藏器曰く、小毒あり。 **主治** 【心を鎮め、神を安んじ、傷寒毒氣、反胃嘔噦を治す。蛇、蜴に咬まれたるにはこれを炙つて熨す】(大明)【癭瘤、鬼氣、疰忤を療ず。錯つて末にし、靑木香に和して瘡腫惡毒に傅ける】(藏器)【瘰癧、癰腫を消し、目を明にし、牙を固くし、鬚髮を黑くし、(一九)實女を治し、蟲を殺し、痰を墜し、噎膈、消渇、風癇を治し、金石藥の毒を解す】(時珍)

黑錫灰 **主治** 【積聚。蟲を殺すには、檳榔の末と等分を五更に米飮で服す】(震亨)

發明 好古曰く、黑錫は腎に屬する。時珍曰く、鉛は北方癸水の氣を稟る陰極の精であつて、その體は重、實であり、その性は濡、滑であり、その色は黑く、

黃。
(一四)赤金、一名赤銅。此文主題ナシ、解シガタシ。
(一五)靑金ハ鉛ノ一名。
(一六)五加、金陵本五知ニ作ル。本書雄黃氣味ノ條ニ、五加皮雄黃ヲ制ス可シノ文アレバ、五知ハ五加ノ誤トスベシ。
(一七)銚ハ釜ノ柄アリテ流レ口ノアルモノ、銚子ノコト。
(一八)黑錫ハ鉛ノ一名。
(一九)實女ハ陰門ノ閉鎖スル者。

內臟では腎に通ずる。故に局方の黑錫丹、宣明の補眞丹にはいづれも之を用ゐてある。汞と配合すれば交感してよく一切の陰陽が混淆し、上盛に下虛し、氣升つて降らず、發して嘔吐、眩運、噎膈、反胃となつて危篤なる諸病を治す。所謂鎭墜の劑であつて反正の功を有するのだが、ただその性に陰毒を帶ぶるものだから多く服してはならぬ。多服すれば恐らくは心と胃を傷めるものである。鉛の性はまた能く肉に食入るもので、女子が耳環の孔を開ける時、鉛の珠を耳朶に結び著けて置けば自ら孔が開く。實女の竅なきには、鉛の鋌を作つて逐日これを著けて置けば、久しくして自ら竅が開く。かやうなことは昔の人人の知らない事柄であつた。また鉛は變化して胡粉や、黃丹や、密陀僧や、鉛白霜となるが、その功力は皆鉛と同じもので、ただ胡粉は氣分に入り、黃丹は血分に入り、密陀僧は鎭墜下行し、鉛白霜は專ら上焦、胸膈を治するだけの相違である。また方術家では鉛を鑄て作つた櫛で梳つて鬚髮を黑く光澤を出し、或は藥で煮て用ゐるが、なかなか佳い效果がある。

附方　舊四、新十七。

【鬚を黑くし、目を明にする】黑鉛半斤を鍋の中で鎔し、少しづつ桑枝の灰を入れながら柳の木で攪き廻し、その沙になつたものを篩つて末

にし、それを毎早朝牙に擦つて水で口漱ぎ、目を洗ふ。よく牙を固くし、目を明にし、鬚髮を黑くする。(勝金方)【牙に揩つて髭を黑くする】黑鉛をよく熔し、虫の食はぬ皂莢を寸斷して投入し、炒つて灰にし、それに少量の鹽を入れてむらなく研り、それを日毎に牙に揩つて吐き出し、白髭を摘去すれば黑いものは白くならぬやうになる。○又ある方では、黑錫一斤を灰に炒り、五日間地中に埋め、それに升麻、細辛、訶子を入れて共に黑く炒り、毎日それで牙を揩れば百日にして效がある。(普濟)

【牙齒の動搖】方は上に同じ。【鬚を黑くする鉛櫛】鉛十兩、錫三兩を先づ熔し、婆羅得三個、針砂、熟地黃半兩、茜根、胡桃皮一兩、沒石子、訶棃勒皮、硫黃、石榴皮、慈石、皂礬、烏麻油各二錢半を末にし、その一半を熔けた鉛錫の中に入れて柳木でむらなく攪きまぜ、それを櫛型の中へ注ぎ込んで櫛の形を作り、それに櫛の齒を付ける。殘り一半の末は水に入れてその櫛を三晝夜煮る。水が耗れば適宜に加へる。かくてその櫛を取り出し、故帛で五日間幾重にも包んで置き、熟皮を手に着けてその櫛を持ち、一百回づつ梳るのである。豫め鬚を皂莢水で洗淨し、拭ひ乾して置く必要がある。(普濟)【腎臟の氣發】氣が心を攻め顏色黑くして死せんとするも

の、及び諸氣の奔豚、喘急には、鉛二兩、石亭脂二兩、木香一兩、麝香一錢を用ゐ、先づ鉛を熔し炒乾して石亭脂を入れ、急に炒つて焰の起つとき醋を噴き入れ、そのまま地坑に注ぎ入れて覆をし、やがて冷えてから取出して前の諸藥を共に研り、粟飯で芡子大の丸にし、二丸づつ熱酒で化して服す。汗を取り、或は下し、或は氣を通じて癒えるものである。もし大便不通ならば、再びその一丸に玄明粉五分を入れて服す。（聖濟錄）【婦人の血氣】冷痛、心を攻むるもの、方は同上。【風癇吐沫】久しく反目し抽掣する患者には、黑鉛、水銀の結砂、炮いた南星各一兩を末にし、糯飯で綠豆大の丸にし、一歲に一丸づつの割合で乳汁で飮下す。（普濟方）【反胃噦逆】黑鉛を汁に熔し、柳木で搥き研つて粉にし、一兩を米醋一升に入れて（二〇）砂鍋で熬膏し、蒸餅末少量を入れて擣いて小豆大の丸にし、一丸づつ薑湯で服す。（聖濟）【多年の反胃】容易に止まぬには、紫背鉛二兩、石亭脂二兩、鹽鹵汁五兩を用ゐ、鉛を燒き、汁がなくなるまで鹵汁に淬して亭脂と共に炒り、焰の起つときは水の上に揚げて焰が止んでからむらなく研り、蒸餅で和して梧子大の丸にし、二十丸づつ石蓮、乾柿を煎じた湯で服す。（聖濟方）【消渴煩悶】黑鉛、水銀等分を結合させて泥の如くし、

（二〇）砂鍋ハ炮烙鍋。

豆程づつの量を含んで流出る唾液を呑込む。（聖惠方）【(二一)寸白蟲病】先づ豬肉一片を食つてから、沙餹水で黒鉛灰四錢を調へて深夜五更に服す。蟲は盡く下る。後一日間は白粥を食ふ。許學士は、(二二)嘈雜を病んだときこの藥を服すると、二匹の蟲が下つた。一匹は寸斷してゐたが、一匹は長さ二尺五寸に及び、節節に斑文があつたといふ。（本事方）【水腫浮滿】烏錫五兩、皂莢一挺を炙り、酒二斗に入れ六回煮沸して頻に服す。小便が二三升出れば腫が引く。（千金翼）【小便不通】黒鉛を錯つた末一兩、生薑半兩、燈心一握を井水で煎じて服す。豫め炒つて葱を臍に貼る。（聖惠方）【突然の欬嗽】爐中の鉛屑、桂心、皂莢等分を末にし、蜜で梧子大の丸にし、十五丸づつを飲で服す。葱を忌む。（備急方）【瘰癧結核】鉛三兩を鐵器で炒つてその黒灰を取り、醋で和し故帛に塗つて貼り、頻に換へて惡汁を去る。半月繰返せば痛まず、破れず、内消して水となり、病は癒える。（劉禹錫傳信方）【癰疽發背】黒鉛一斤、甘草三兩を用ゐ、酒一斗を瓶に入れて置き、それに微し炙つた甘草を浸し、鉛を鎔してその酒中に投ずる。これを九回繰返して滓を去り、その酒を飲んで醉臥すれば癒える。（經驗方）【金石の藥毒】黒鉛一斤を鎔して酒一升の中へ投じて十餘回繰返し、酒が半

(二一)寸白蟲病、絛蟲病。サナダムシ。

(二二)嘈雜ハムネノヤケル病。

升になつたとき一時に飲む。（勝金方）【輕粉の毒を取るには】山から出たままの黑鉛五斤を壺に入れ、それに燒酒十五斤を盛り、土茯苓半斤、乳香三錢を納れ、密封して(二三)重湯で一晝夜煮る。それに土中に埋めて火毒を出し、毎日朝夕性に任せて數盃を飲む。後に瓦盆へ尿を取つて見て、その內に粉のあるを認むれば效驗があつたのだ。筋骨が痛まなくなれば服用を止める。（醫方摘要）【砒霜の毒を解す】煩躁して狂氣の如く、心腹疼痛し、四肢(二四)厥冷し、今にも絶命せんとするには、黑鉛四兩を水に磨つて一盌を灌ぐ。（華佗危病方）【硫黃の毒を解す】黑錫を湯に煎じて服すれば直ちに解す。（集簡方）

鉛霜（日華）

和名　醋酸鉛
學名　Lead Acetate

釋名　鉛白霜

修治　頌曰く、鉛霜は、鉛に水銀十五分の一を雜ぜて鍊合せ、片にして醋甕に入れて密封し、久しく時を經て出來る霜である。時珍曰く、鉛を打つて錢にし、中に孔を穿つて串に通し、生醋を入れた瓦盆の上へ醋から三寸離してその串を橫

(二三)重湯、ユセンナベニテ煎ル。
(二四)厥冷、急ニ冷却スルコト。

へ、その上から別な瓦盆で覆ふて光線の入らぬ場所に置き、霜の生じたとき刷き下し合せて用ゐる。

【氣味】【甘く酸し、冷にして毒なし】宗奭曰く、鉛霜を木瓜に塗れば酸味が無くなる。金が木に克するのだ。【主治】【痰を消し、驚悸を止め、酒毒を解し、胸膈の煩悶、中風の痰實を去り、渇を止める】(大明)【膈熱涎塞を去る】(宗奭)【吐逆を治し、驚を鎮め、怯を去り、鬚髮を黒くする】(時珍)

【發明】頌曰く、鉛霜は性極めて冷であつて、風痰、及び嬰兒の(一)驚滯を治する藥である。今の醫家に之を用うるものがなかなか多い。時珍曰く、鉛霜なるものは、鉛と汞との氣が交感してその英華が結晶したものだ。道家では之を神符白雪と稱して居る。痰を墜し、熱を去り、驚を定め、瀉を止めるには、成る程奇效があるものに相違ないが、しかしこれは久服し常服すべき物ではない。病の上焦に在るのはこれで清鎮するがよし。

【附方】舊二、新九。【小兒の驚熱】心、肺の積熱で就寢中屢々驚くには、鉛霜、牛黄各半分、鐵粉一分を研勻し、一字づつ竹瀝で調へて服す。(聖濟錄)【驚風癇疾】喉

(一)金陵本ニモ驚滯トアレドモ、驚啼若クハ驚瀉ノ誤トセザルベカラズ。

閉、牙緊するには、鉛白霜一字、蟾酥少量を末にし、烏梅肉にその藥を蘸けて齒齦に揩り同時に(二)關を通ずる藥を吹き込めば少時して喉が開く。(普濟方)【消渇煩熱】鉛白霜、枯白礬等分を末にし、蜜で芡子大の丸にし、綿に裹んで含み溶して汁を嚥む。○又ある方では、鉛白霜一兩、根黄、消石各一兩を末にし、冷水で一錢づつ服す。(聖濟錄)【喉痺腫痛】鉛白霜、甘草半兩、青黛一兩を末にし、醋糊で芡子大の丸にし、一丸づつを含嚥すれば立ろに效がある。(聖濟錄)【懸癰腫痛】鉛白霜一分、半生半炙の甘草一分を末にし、綿で裹んで含嚥する。(聖惠方)【口疳齦爛】氣臭く出血するには、大人、小兒に拘らず、鉛白霜、銅綠各二錢、白礬豆ほどの量を末にして掃く。(宣明方)【鼻衄の止まぬには】鉛白霜末一字を新汲水で服す。(十全博救方)【痔瘡腫痛】鉛白霜、白片腦各半字を酒で調へて塗る。手に隨つて效が現れる。(嬰童百問)【未婚婦人の經閉】恍惚煩熱するには、鉛霜半兩を生地黄汁一合で調へて一日三回に服す。(聖惠方)【髮を梳つて黑くする】鉛霜で櫛を包んで日毎に梳る。染めたよりも黑くなる。(普濟方)

(二) 關ハ塞ニ同ジ。

(一)呉越トハ、唐末五代ニ錢氏ガ據リテ呉越ト稱シタル地方、今ノ江蘇、浙江兩省ノ地ヲ指ス。
(二)韶州ハ今ノ廣東省曲江縣。
(三)辰州トハ今ノ湖南省沅陵縣。

粉錫（本經下品）

和名　鉛白・鉛華・京おしろい（炭酸鉛）
學名　White lead (Carbonate of lead)

釋名　解錫（本經）鉛粉（綱目）鉛華（綱目）胡粉（弘景）定粉（藥性）瓦粉（湯液）光粉（日華）白粉（湯液）水粉（綱目）官粉

弘景曰く、今の鉛を化して作る胡粉のことである。而るに粉錫と謂ふは今の事實と違ふやうである。時珍曰く、鉛と錫とは一種類のもので、古人は鉛を黒錫といつたからこれを粉錫といふのである。釋名に『胡は餬也』とある、脂に和して面に餬するから胡粉といふのである。定粉、瓦粉といふはその形から、光粉、白粉はその色からいふのである。俗に(一)呉越のものを官粉と呼び、(二)韶州のものを韶粉と呼び、(三)辰州のものを辰粉と呼ぶ。

正誤　恭曰く、鉛丹と胡粉とは、事實は炒つた錫を用ゐて造るものであつて、陶弘景が鉛を化して作るといふは誤である。震亨曰く、胡粉は錫粉である、鉛粉ではない。往古には錫を粉にして婦人が顔に傅けたものだ。それは色が頰の肉の色に似て居るからである。藥用に入るべきものではない。志曰く、粉錫、黃丹の二物は

（四）參同契ハ漢ノ魏伯陽ノ著ス所、周易、黄老、丹爐三道ノ説ヲ折合歸一セルモノニシテ、後世、錬丹、服餌家ノ祖トスル所ナリ。朱子嘗テ考異一卷ヲ作ル。

倶に鉛を化して作るものである。英公李勣の序に『鉛、錫辨ずる莫し』とあるが、かかることがらを謂ふのであらう。按ずるに、李含光の音義にも『黄丹、胡粉は皆是れ鉛を化すとある。錫を用うるといふことは聞いたことがない。（四）參同契にも、胡粉は炭中に投ずれば色壞れて鉛となる』とある。抱朴子内篇にも『愚人は黄丹、胡粉は鉛を化して作つたものだといふことを信ぜぬ』とある。蘇恭が二物倶に錫を炒つて作ると思ふたのは大いなる誤である。時珍曰く、錫は炒れば黒灰になる。どうして白粉となる道理があらうか。蘇恭が誤つた上に、朱震亨まで誤を重ねるとは何事であらう。

【集解】時珍曰く、按ずるに、墨子に『禹、粉を造る』とあり、張華の博物志に『紂、鉛、錫を燒いて粉を作る』とある。粉の由來は可なりに遠いものである。現在では金陵、杭州、韶州、辰州の各所で製造して居るが、就中辰州のものが精良で、その色は靑みを帶びて居る。その製造法に就いて、辰州の者の語るところに依れば、まづ鉛百斤づつを鎔化して薄い箔片にし、それを卷いて筒にして木甑の中へ入れ、その甑の中部と下部とへ一瓶づつ醋を入れて載せ、外部を鹽泥で固濟して甑の間隙を

紙で封じ、火を入れた風爐をその木甑の四面へ置き、そのまゝ一七日の間養つてから、水缸の内へ掃き入れ、密封してまた養つて置く。次次に此の順序で鉛の形體が盡く無くなるまで繰返す。なほ粉になり切らぬ部分をば別に一纏めにし、炒つて黄丹を作る材料にする。かくて養つた粉をば、一斤毎に豆粉二兩、蛤粉四兩を入れて水中でむらなく攪きまぜ、澄して清水を棄て去り、その澱んだものを別に細灰を幾條かにならして溝を畫いた上へ紙を敷き隔てて幾層かに重ねて置く。かくて漸く乾きかけた頃に瓦や錠の形に截ち切り、全く乾いたときに取り收めるのだといふことである。また范成大の虞衡志には『(五)桂林で作る鉛粉は桂粉と稱して最も有名である。これは黑鉛を糟甕中に入れて罨ふて化するものだ』とある。何孟春の餘冬錄には『(六)嵩陽には鉛を產し、その地の居住民は、多くそれで胡粉を製造する。その製法は、鉛塊を酒缸の中へ吊り下げて四十九日の間密封して置き、開いて見ると粉に化して居るのである。白く化せぬものは炒つて黄丹を作る。その黄丹の滓は密陀僧になる。この三種の製品でなかなか良き利益を獲得して居るのであるが、しかしその鉛氣には毒があるので、職人は必ず肥えた猪、犬の肉を食ひ、酒や鐵漿を飲んで

(五) 桂林ハ今ノ廣西省桂林道ノ地ナリ。

(六) 嵩陽ハ今ノ河南省登封縣ノ地ナリ。

その毒を除けてゐる。もし空腹の時その毒に中れば忽ち病に罹つて死ぬといふ。この土地には、壯年幼年の者で毒の薫蒸のために痿黄、癱攣で死亡するものが多い』と書いてある。その製造法にはそれぞれ多少の相違はあるが、それは巧利な者が適〻新工夫を案出して工程を短縮し、それに依つて利益の増大を圖るために外ならぬ。昔の人が錫を炒つて作るといふ説の謬であることはこれを見ても爭はれぬ。相感志には『蒸して白くならぬときは蘿蔔瓮子で蒸せば白くなる』とある。

氣味　【辛し、寒にして毒なし】權曰く、甘く辛し、涼なり。時珍曰く、胡粉は能く硫黄を制す。また雌黄が胡粉に遇へば色がなくなり、胡粉は雌黄に遇へば色が黒くなる。蓋しその性が相惡むのである。又酒に入れれば酸味を去り、蟹を貯ふるに用うれば變質しない。

主治　【(七)伏尸、毒螫。(八)三蟲を殺す】(本草)【鼈瘕を去り、惡瘡を療し、小便利を止め、胎を墮す】(別錄)【積聚不消を治す。炒焦して用うれば小兒の疳痢を止める】(甄權)【癰腫、瘻爛、嘔逆を治し、癥瘕、小兒の疳氣を療す】(大明)【泄痢、又、積痢を止める】(宗奭)【食復、勞復を治し、瘀を墜し、脹を消し、疥癬、狐臭を治し、鬚髮を黒くする】(時珍)

(七)伏尸、尸病ノ一種。隱伏シテ人ノ五臟中ニアツテ年ヲ積ンデ除カザルモノ。
(八)三蟲ハ長蟲、赤蟲、蟯蟲。

【發明】弘景曰く、胡粉の金色のものは尸蟲を療するになかなか良し。藏器曰く、久痢から起る疳には、胡粉を水、及び雞子白に和して服す。大便の黒くなるを程度とする。それは蟲を殺し痢を止めるために用うるのである。時珍曰く、胡粉は鉛の黒色が白色に變じたものなので、その實體と作用は鉛や黄丹と同じものではあるが、(九)消鹽火燒の性がなく、內に豆粉、蛤粉を雜へ含むから、能く氣分に入るが血分には入らない。これが稍異なる點である。人がこれを服食すれば大便の色が黒くなる。これはその本質に還元するからで、所謂色壞れて還て鉛となるの事實である。また黄丹の代用として膏藥に入れてもよし。

【附方】舊十四、新三十。【勞復、食復】瀕死なるには、水で胡粉少量を服す。(肘後方)【小兒の(一〇)脾泄】容易に止まぬには、紅棗二十箇を核を取去り、宮粉を內へ詰めて(一一)陰陽瓦で焙じ乾し、棗を棄てて粉だけを研り、三分づつ米湯で服す。(孫眞人集效方)【赤白下痢】頻數にして腸痛するには、定粉一兩を雞子淸に和し、炙き焦して末にし、冷水で一錢を服す。(肘後方)【小兒の無辜疳】下痢赤白には、胡粉をよく蒸熬して色を變らせ、米飲で半錢を服す。(子母祕錄)【小兒の腹脹】胡粉を鹽で熬つて

(九)消鹽火燒トハ、黄丹、消石、礬石ヲ用ヰテ煉成スルヲ指ス。
(一〇)脾疳ノ爲ニ起ル下痢。
(一一)陰陽瓦、平瓦ヲ牝トシ丸瓦ヲ牡トシ陰陽ニ法ル。

色を變らせ、腹上を摩する。（子母祕錄）【腹皮の青色】速に治せねば忽ちに死亡する。方は上に同じ。【小兒の夜啼】胡粉を豆三粒ほど一日に三回づつ水で服す。（子母祕錄）【身熱多汗】胡粉半斤、雷丸四兩を末にして身體に粉る。（千金方）【婦人の心痛】急するには、好き官粉を末にし、葱汁で和して小豆大の丸にし、七丸づつ黃酒で飲下せば止る。粉は能く蟲を殺し、葱は能く氣を透すからである。（邵眞人方）【寸白蚘蟲】胡粉を炒り燥し、方寸匕を肉臛の中へ入れて空心に服すれば大いに效がある。（張文仲備急方）【服藥過劑】悶亂するには、水で胡粉を和して服す。（千金方）【鼻衄止まぬには】胡粉を黑く炒り、醋で一錢を服すれば止る。（聖惠方）【齒縫の出血】胡粉半兩、麝香半錢を末にし、就寢時に牙に揩る。（聖濟錄）【墜撲の瘀血】高所から墜落してその瘀血が心を搶き、顏色靑く、呼吸短く、瀕死の容體なるには、胡粉一錢を水に和して服すれば安らかになる。（肘後方）【折傷の接骨】官粉、硼砂等分を末にし、一錢づつを蘇木湯で服すれば大いに效がある。（接骨方）【杖瘡の腫痛】水粉一兩、生の赤石脂一錢、水銀一分を麻油で杵いて膏にし、油紙にのして貼る。肉の消したるには、その箇所を塡めて緊く縛る。（救急方）【顏面の抓傷】香油で鉛粉を調へて搽れば一夜

で癒える。(集簡方)【梅を食ふて痛む牙齒】韶粉を揩る。(相感志)【白鬚髮を染む】胡粉、石灰等分を水に和して塗り、油紙で包み火で乾して暖め、まだ燥き切らぬ間に洗ひ落し、その後油で潤せば漆のやうに黑くなる。(博物志)【腋下の狐臭】常に胡粉をつける。(千金方)【陰股常濕】胡粉をつけ、或は胡粉三合を牛脂に和し煎調して塗る。(備急方)【乾濕癬瘡】方は上に同じ。【黃水膿瘡】官粉を黃に煅き、松香と各三錢、黃丹一錢、飛礬二錢を末にし、香油二兩で熬膏して傅ける。(邵眞人方)【小兒の耳瘡】月蝕には、胡粉を土に和して塗る。(子母秘錄)【小兒の疳瘡】胡粉を熬り、猪脂に和して塗る。(張文仲方)【小兒の舌瘡】胡粉を猪の(一二)髑骨中の髓に和し、一日三回づつ傅ける。(普濟方)【(一三)燕口吻瘡】炒つた胡粉一分、黃連半兩を末にして傅ける。(食醫心鑑)【痘瘡の瘢痕】或は凸に、或は凹になりたるには、韶粉一兩、輕粉一定を猪脂に和し、研り調へて傅ける。(陳文中小兒方)【(一四)妬精陰瘡】鉛粉二錢、銀杏仁七箇を銅銚の中で炒り、杏が黃になつたとき杏を取去つて粉を取り、火毒を出し、研つて搽れば效がある。(集簡方)【(一五)反花惡瘡】胡粉一兩、臙脂一兩を末にし、毎日五回づつ瘡を鹽湯で洗淨してから傅ける。(聖惠方)【蜂窠のやうな瘡】癒えてもまた發るには、

(一二)字書髑字ナシ、髑字ノ誤寫ナラン。髑ハ體中頭頸四肢ヲ除キタル部分。
(一三)燕口吻瘡、和名カラスノキウ。
(一四)妬精陰瘡、下疳ノ類。
(一五)反花惡瘡ハ癌腫。

胡粉、硃砂等分を末にし、蜜で和して塗る。（聖濟錄）【(一六)血風臁瘡】孫氏集效方では、官粉四兩を水で調へて盌内に入れ、蘄州の艾葉で燒烟して熏じ乾し、乳香少量を入れて共に研り、香油で調へ隔紙膏にして幾回となく貼る。（楊氏の簡便方では、官粉を炒り、桐油で調へ隔紙にして貼る。【小兒の丹毒】唾で胡粉を和し、外部から内部へと傅けるが良し。（千金方）【湯火燒瘡】胡粉、羊髓を和して塗る。（孫眞人方）【瘡傷水濕】胡粉、炭灰等分を脂で和して孔に塗る。それで水は出る。（千金方）【蠼螋尿瘡】唾で胡粉を和して塗る。（千金方）【諸蛇の螫傷】胡粉を大蒜に和し搗いて塗る。（千金方）【誤つて金銀を呑みたるとき】及び錢を呑みたるには、胡粉一兩を豬脂で調へ、二回に分ちて服すればその物を消し溶して排出する。（外臺秘要）【三年の口瘡】胡粉を塗る。（聖惠方）【口中乾燥】煩渴して唾液なきには、豬脂五兩を酒で煮て皮を爛し、定粉一兩を入れむらなく研つて芡子大の丸にし、一丸づつを含み溶して汁を嚥む。（太平聖惠方）【腹中鼈癥】胡粉を黍米の淋汁で溫服すれば大いに效がある。（衞生易簡方）【接骨、續筋】痛を止め、血を活かす。定粉、當歸各一錢、硼砂一錢半を末にし、一錢づつを蘇木煎湯で調へて服し、頻に湯を飮む。（同上）【發背惡瘡】諸癰

（一六）血風ハ足ノ三陰穴ニ發スル瘡ニシテ、濃水淋漓シ、體熱盜汗惡寒アリ、食慾缺乏スルモノヲ云フ。

疽には、好き光粉二兩、眞麻油三兩を、柳木で急に攪きまぜながら緩き火で熬り、水に滴せば珠になるやうになつたとき、白膠末少量を入れ、器に移して二日間水に浸し、油紙に攤して貼る。これを神應膏と名ける。（直指方）

鉛丹（本經下品）

和名　たん・鉛丹（酸化鉛）
學名　Red lead, Minium (Oxide of lead)

釋名　黃丹（弘景）丹粉（唐本）朱粉（綱目）鉛華

正誤　粉錫の條を見よ。

集解　別錄に曰く、鉛丹は鉛から生ずるもので、蜀郡の平澤に産出する。弘景曰く、これは現に鉛を熬つて作る黃丹のことで、俗間の方に用ゐることは稀である。ただ仙道の經典に『（一）丹釜を塗るに須うるもので、九光を化成すと云ふ』とあるは、九光丹といふべきところを釜といつただけのことで、別の意味にはないやうである。宗奭曰く、鉛丹は鉛を化して造るものだ。別錄にも鉛に生ずと言つてあるのだから、蘇恭が錫を炒つて作成すると主張するは誤つて居る。別段辨別し難いことはない、錫ならば色が底黑く、鉛ならばはつきりと白い。それだけの相違があるのだ。

（一）此處解シガタシ。

時珍曰く、按ずるに、獨孤滔の丹房鏡源には『鉛丹を炒り作る方は、鉛一斤、土硫黃十兩、消石一兩を用ゐ、先づ鉛を鎔して汁にし、それに醋を點入して沸き立つた時硫黃一塊を投下し、少時して消石少量を投下する。やがて沸き切つて靜まつた時、前のやうに再び醋を點下し、少量づつ硫黃と硝石を投下する。かくて末になつたものが丹である』といつてある。今世間では鉛粉を作る時に粉にならずして殘つた部分を用ゐ、それに消石と礬石を入れて炒つて丹にする。又、丹を鉛に還元するには、ただ連鬚葱白汁を鉛に拌ぜ、緩き火で煎煨すると金汁になる。それを傾けて流し出せば、その時は已に鉛に還つて居る。藥種商人の賣る物には多く鹽、消や砂石が雜つて居るから、使用する場合には水で消、鹽を漂出し、砂石を飛去して澄し乾し、微火で炒つて紫色にし、地上に置いて火毒を去つてから藥に入れるやうにせねばならぬ。會典には『黑鉛一斤、燒丹一斤五錢三分を得』とある。

【氣味】【辛し、微寒にして毒なし】大明曰く、微鹹なり、涼にして毒なし。砒を伏し、硇、硫を制す。震亨曰く、ある婦人は子が多過ぎるといふので、三月內に鉛丹二兩を服したところ、四肢が水の如く冷え、食物が口に入らなくなつた。時は

（三）月內ハ產後一月ノ內チ云フ。

正に仲冬の季節であつたが、急に理中湯に附子を加へて數十帖服ませると安らかになつた。これを涼にして毒なしとは謂ひ得るだらうか。時珍曰く、鉛丹は元來甚しい毒はないものである。震亨の説のその婦人は、産後であり且つ冬季にしかも劑を過量に服んだからだ。病むことは當然である。

〔主治〕【吐逆、(三)胃反、驚癇、癲疾、熱を除き、氣を下す。錬化すれば還つて九光となる。久しく服すれば神明に通ずる】(本經)【小便を止め、毒熱、臍攣、金瘡の血溢を除く】(別錄)【驚悸、狂走、消渇には煎膏して用ゐる。痛を止め、(四)䏲を生ずる】(甄權)【心を鎭め、神を安んじ、吐血、及び嗽を止める。瘡に傅ければ肉を長じ、湯火瘡にも效があり、鬚を染める】(大明)【瘧、及び久積を治す】(宗奭)【痰を墜し、蟲を殺し、怯を去り、忤惡を除き、痢を止め、目を明にする】(時珍)

〔發明〕成無己曰く、仲景が龍骨牡蠣湯中に鉛丹を用ゐたのは、神氣を收斂して驚を鎭めるためである。好古曰く、澀であつて脫を去り、氣を固くし得るものだ。時珍曰く、鉛丹は體重く、性沈み、味は鹹と澀とを兼ね、血分に走り、よく痰を墜し、怯を去る。それ故に驚癇、癲狂、吐逆、反胃を治するに奇功がある。よく積を

(三)胃反ハ朝食暮吐、或ハ朝吐、甚シキ者ハ食了ツテ直ニ吐スルモノ。
(四)䏲ハ肌ニ同ジ。

消し、蟲を殺す。故に瘡疾、下痢、瘧疾を治するに實效を擧げる。よく熱を解し、毒を拔き、肉を長じ、瘀を去る。故に惡瘡腫毒を治するのである。また膏藥に入れるものとして、外科には缺くべからざるものである。

附方　舊八、新二十五。【消渇煩亂】黃丹一錢を新汲水で服し、蕎麥粥を食つて上から壓する。（聖惠方）【吐逆止まぬもの】碧霞丹——北黃丹四兩を米醋半升で煎じ乾し、銚に入れて炭火三秤で紅く煅き、冷え切つてから末にし、粟米飯で梧子大の丸にし、七丸づつ醋湯で服す。（集驗方）【伏暑の霍亂】水浸丹——本部巴豆の條を見よ。【小兒の吐逆】容易に止まぬには淸鎭燒針丸を用うべきである。先づ黃丹を研末し、小棗肉に和して芡子大の丸にし、一丸づつ燈火の上で針を穿ち通して燒き、研細し乳汁で調へて服す。あるひは硃砂、枯礬等分を加へる。（謝氏小兒方）【反胃氣逆】胃虛するには、鉛丹二兩、白礬二兩、生石亭脂半兩を用ゐ、丹と礬を研勻して坩鍋に入れ、炭半秤で赤く煅き、更に一夜の間養ひ、二日間毒を出し、それに亭脂を入れて共に研り、粟米飯で和し、綠豆大の丸にし、毎日米飮で十五丸を服す。（聖濟錄）【泄瀉下痢】赤、白には、棗肉を搗き爛し、黃丹、白礬各皂子大の量を入れ、粳米飯一

團で和して彈子大の丸にし、鐵線を穿ち通して燈火の上で燒き、それを末にして米飲で服す。(摘玄方)【赤白痢下】黄丹を紫に炒り、炒つた黄連と等分を末にし、糊で麻子大の丸にし、五十丸づつを生薑甘草湯で服す。(普濟方)【姙娠下痢】疼痛するには、烏雞卵一箇に孔を開け、白だけ取り去つて黄を殘し留め、それに鉛丹五錢を入れてよく攪きまぜ、泥で裹んで煨き乾して研末し、二錢づつを米飲で服す。その場合一服で癒れば胎兒は男であり、二服で癒れば女である。(三因方)【吐血、咯血】欬血にも、黄丹一錢を新汲水で服す。(經驗方)【寒熱瘧疾】體虛して汗多きには、黄丹、百草霜等分を末にし、發作の際胸をすかして置いて米飲で三錢を服す。二服を過ぎずして癒える。或は糊で丸にし、或は蒜で丸にしても皆效がある。○肘後方では、飛して炒つた黄丹一兩、恒山末三兩を蜜で梧子大の丸にし、五十丸づつ溫酒で服す。その日の朝、及び發作せんとする時一服すれば必ず效果がある。(普濟方では、端午の日に炒つた黄丹二兩、獨蒜一百箇を搗いて梧子大の丸にし、九丸づつを空心に長流水で東を向いて服し、二三回發作した後また用うれば神效がある。また痢瘧を治す。○三因方では、炒つた黄丹、建茶末等分を末にし、溫酒で二錢を服す。

○又黄丹を飛して焙じ、麪糊で芡子大の丸にし、棗子一箇の核を取去つた中に一丸を包み、紙に裹んで煨熟して食ふ。温瘧の止まぬには。炒黄丹半兩、童尿に浸した青蒿二兩を末にし、二錢づつを、寒多きには酒で服し、熱多きには茶で服す。（仁存堂方）【小兒の(五)瘴瘧】壯熱して寒せぬには、黄丹二錢を蜜水に和して服す　冷えるには酒で服す。これを鬼哭丹と名ける。（劉涓子鬼遺方）【風癇の發止】驅風散——鉛丹二兩、白礬二兩を別箇に末にし、三角の甎瓦を寄せ集めた上に紙を七層に鋪き、その上へ丹末を鋪き、またその上へ礬末を鋪き、それを柳木柴十斤で燒く。十斤焚き盡した時を度とし、丹と礬を取つて更に研り、二錢づつ溫酒で服す。（王氏博濟方）【客忤中惡】道路歩行中や門の外で發作し、心腹が刺痛し、氣が心胸を衝いて脹滿するものは、治療せねば一命を害ふものである。これには眞丹方寸匕を蜜三合に和して灌ぐ。（肘後方）【一切の目疾】(六)昏障は治するが、只だ障するは不治である。蜂蜜半斤を銅鍋で熬めて紫色の塊にし、それに飛過した眞黄丹二兩、水一盌を入れて再び煉り、水氣の盡きたとき細い生絹に薄紙一枚を重ねて濾淨し、瓶に封じて二十一日間地中に埋め、それを毎日七回づつ眼に點ける。藥が粘るときはそれを洗ふ。ある方

(五) 瘴瘧ハ熱アツテモ寒カラザルモノヲ云フ。

(六) 昏障ハ星瞖ノ生ズルヲ云フナラン。

(七)太陽ノ穴ハ目尻ノ横ノクボ。

(八)珠管、百病主治目病ノ部ヲ見ヨ。

(九)重舌、百病主治舌病ノ部ヲ見ヨ。

では訶子四箇の肉を入れる。(保壽堂方)【赤眼痛】黄丹を蜂蜜で調へて(七)太陽の穴に貼れば立ろに效がある。(明目經驗方)【赤目及び瞖】、鉛丹、白礬等分を末にして點ける。また一方では鉛丹、烏賊骨等分を合せ研り、白蜜で蒸して點ける。(千金方)【眼に(八)珠管を生ぜるもの】鉛丹半兩を鯉魚膽汁で膏のやうに和し、日毎に三五囘點ける。(聖惠方)【痘疹で瞖を生ぜるもの】黄丹、輕粉等分を末にし、少量を耳の内に吹き入れる。左を患へば右に吹き、右を患へば左に吹く。(痘疹方)【(九)小兒の重舌】黄丹を豆程の大にして舌の下へ置く。(子母祕錄)【小兒の口瘡】糜爛せるには、黄丹一錢、生蜜一兩を相和して蒸し黑め、雞の羽に蘸けて搽れば甚だ效がある。(普濟方)【腋臭】黄丹に輕粉を入れ、唾で調へて頻に摻る。(普濟方)【婦人の逆產】眞丹を兒の足下に塗る。(集驗方)【蚰蜒の耳に入りたるには】黄丹、酥蜜、杏仁等分を熬膏し、綿に裹んで耳を塞ぎ、蟲が香を臭いて出て來たところを抽き出して取る。(聖惠方)【蠍蠆の螫傷】醋で黄丹を調へて塗る。(肘後方)【金瘡出血】藥で速に瘡口を合せてはならぬ。合せれば內部が潰れて肉を傷める。ただ黄丹、滑石等分を末にして傅ける。(集玄方)【外痔腫痛】黄丹、滑石等分を末にし、新汲水で調へて日に五囘づつ傅ける。

（嬰童百問）【血風臁瘡】黄丹一兩、黄蠟一兩、香油五錢を熬膏し、豫め瘡を葱椒湯で洗つてから貼る。（陸氏積德堂方）【遠近臁瘡】飛して炒つた黄丹、酒に七日浸した黄蘗各一兩、研細した輕粉半兩を用ゐ、先づ瘡を苦茶で洗淨して輕粉を塡滿し、次にその上を黄丹でかこひ、外には蘗末を膏にのして貼る。擧げ、又は動してはならぬ。七日經てば效が現れる。（孫氏集效方）

密陀僧（唐本草）

和名　みつだそう・密陀僧（酸化亞鉛）
學名　Litharge (Oxide of Zinc)

【釋名】沒多僧（唐本）爐底　恭曰く、密陀、沒多いづれも外國語である。

【集解】恭曰く、波斯國に產出するもので、形は黄龍齒に似て堅く重い。また白色のものもあり、理石の文がある。頌曰く、現に嶺南、閩中の銀、銅を冶く處にもある。この物は銀鉛の滓脚であつて、初めに銀、銅相雜る礦石を採り、先づ鉛でそれを煎錬すると、銀だけが鉛に隨つて出るのであるが、またその銀と鉛と混じたものを採り別けるために、山木葉を採つて灰に燒き、地を掘つて作つた爐の中へその灰を塡めて所謂灰池なるものを作り、その灰上に銀鉛を載せて更に火を加へて煅

くと、鉛は灰の下へ滲み透つて銀だけが灰の上に殘る。それを火を止めて冷えてから取り出すのであつて、その灰池には永い間鉛、銀の氣が積つてゐて、そこに生ずるものが密陀僧である。必ずしも外國から來るものとは限らない。

承曰く、現に市中で賣つて居るものは鉛丹を小罐に實てて煆き造るもので、大きな塊にはまだ瓶の形が付いて居るものもある。銀を冶く處に產出するものが最良品だが、それは商品には甚だ稀である。外國品といふは一向見たことがない。時珍曰く、密陀僧は、もと銀を冶く處で取るものだが、現今では得難いものとなつて居る。そこで銀を煎銷して爐底に沈み殘つたものを取り、黃丹を造つた脚滓を錬つて密陀僧を作つて居る。所謂瓶のやうな形のものがそれである。



〔密陀僧〕

〔修治〕斅曰く、凡そこれを使用するには、先づ細かに搗いて瓷堝中に入れ、幾重もの紙袋に柳蛀末を盛つて入れて焙じ、次に東流水をその鍋に注ぎ滿てて一伏時の間火で煮てから柳末の紙袋を取去り、その密陀僧を取つて用ゐる。

【氣　味】【鹹く辛し、平にして小毒あり】大明曰く、甘し、平にして毒なし。時珍曰く、狼毒を制す。【主　治】【久痢、五痔、金瘡、顏面の瘢䵟、面膏藥に入れる】(唐本) 保昇曰く、五痔とは牡痔、酒痔、腸痔、血痔、氣痔をいふ。【心を鎭め、五臟を補ひ、驚癇、欬嗽、嘔逆を治し、痰を吐かす】(大明)【反胃、消渇、瘧疾、下痢を療し、血を止め、蟲を殺し、積を消し、諸瘡を治し、腫毒を消し、胡臭を除き、髭髮を染める】(時珍)

【發　明】時珍曰く、密陀僧は鉛、銀の氣を感ずるもので、性は重墜で下沈し、直ちに下焦に走る。故に能く痰を墜し、吐を止め、積を消し、驚癇を定め、瘧痢を治し、消渇を止め、瘡腫を療ずるのである。洪邁の夷堅志に『驚氣が心絡に入り、瘖して言語不能なるときは、密陀僧末一匕を茶で調へて服すれば直ちに癒える。昔ある人が薪を伐りに往つて狼に逐はれたためにこの病に罹つたがある者からこの方を授けられて癒えたことがある。またある一人の軍人は藤のつもりで惡蛇を摑み、それから此の病に罹つたがやはりこの方で癒えた』とある。これは驚けば氣が亂れる。それに對し密陀僧の重を以て怯を去り、肝を平にするのである。その功力は鉛丹と

同じいところから、鉛丹の代用として膏藥の中に入れるのである。

【附方】 舊三、新十五。【胸中の痰結】散ぜぬには、密陀僧一兩を醋、水各一盞で煎じ乾して末にし、二錢づつを酒と水各一小盞で一盞に煎じて溫服する。少時して痰涎を吐出すこと妙である。(聖惠方)【消渇飲水】神效丸——密陀僧二兩を研末し、湯に浸した蒸餅で梧子大の丸にし、濃煎の蠶繭鹽湯、或は茄根湯、或は酒で一日五丸を服し、逐日五丸づつ三十丸まで增して止める。多く服してはならぬ。五六服して後、水を見て惡心を催すを程度とする。惡心する時は、乾いた物を食つて壓すれば一日位で自ら定る。甚だ奇效のあるものだ。(選奇方)【赤白下痢】密陀僧三兩を黃色に燒いて粉に研り、一日三回、一錢づつを醋茶で服す。(聖惠方)【腸風痔瘻】銅靑、密陀僧各一錢、麝香少量を末にし、唾液で和して塗る。(濟急方)【小兒初生】全身の皮膚が(一)魚脬の如く、また水晶のやうで、破れば水になつて流滲してまた生ずるには、密陀僧を生で研つて摻し、それから(二)蘇合香丸を服す。(救急方)【驚氣失音】方は發明の條を見よ。【腋下胡臭】腋下を漿水で洗淨して油で密陀僧を調へて塗り、蒸餅一箇を熱して切開き、それに密陀僧一錢を摻つて腋に夾む。(集簡方)【口を

(一)魚脬、魚ノ氣胞。
(二)小兒服スル能ハズ、恐クハ母ニ服サスルナラン。

香くし臭を去る】密陀僧一錢を醋で調へて口漱ぐ。（普濟方）【大人の口瘡】密陀僧を煆き研つて摻る。（聖濟錄）【小兒の口瘡】乳を吮ひ得ぬには、密陀僧末を醋で調へて足の心に塗る。瘡が癒えれば洗ひ去る。これは蔡醫博の方である。（黎居士簡易方）【鼻內の生瘡】密陀僧、香白芷等分を末にし、蠟燭油で調へて搽る。（簡便方）【（三）鼻齄赤皰】密陀僧二兩を細研し人乳で調へて夜塗り朝洗ふ。（聖惠方）【痘瘡の瘢黶】方は上に同じ。（譚氏）【（四）䵟䵴斑點】方は上に同じ。（外臺）【夏季の汗斑】疹の如きには、密陀僧八錢、雄黃四錢を末にし、先づ薑片を摩擦して熱し、それに末を蘸けて擦る次の日には乾いて了ふ。（活人心統）【骨疽出骨】一名多骨瘡といふ。時ならず細かな骨の出る病で、これは母が受胎後一个月以內に（五）六親骨肉と交合し、その精氣を感ずるに原因するもので、その骨肉の意味から多骨の名が生じたのである。密陀僧末を桐油でむらなく調へてのして貼れば癒える。（壽域方）【血風臁瘡】密陀僧、香油を粗盌の中に入れて磨し溶し、油紙にその膏をのして幾回となく貼る。（孫氏集效方）【陰汗濕痒】密陀僧末を傅ける。○戴氏に蛇床子末を加へる。

（三）百病主治ヲ見ヨ。

（四）百病主治ヲ見ヨ。

（五）六親ハ父母兄弟妻子又ハ父母兄弟夫婦。

錫（拾遺）　和名 すず・錫　學名 Tin

【釋名】 白鑞 鑞の音は臘（ラフ）である。鈏 音は引（イン）である。賀 時珍曰く、爾雅に『錫、これを鈏といふ』とあり。郭璞注に『白鑞なり』とある。方術家ではこれを賀といふ。蓋し錫は（一）臨賀に産出するものを良品とするからである。

【集解】 別録に曰く、錫は（二）桂陽の山谷に生ずる。弘景曰く、今は臨賀に産するが、やはり桂陽の境域内である。鉛と錫とは似て居るけれども、藥に用ゐるには大に異ふ。時珍曰く、錫は雲南、（三）衡州に産する。許愼の説文に『錫は銀、鉛の間なり』とある。土宿本草には『錫は太陰の氣を受けて生ずるもので、その氣は二百年動かずして砒となり、砒が二百年經つたとき始めて錫が生ずるのである。錫は陰氣を稟けたものだからその質が柔なのであつて、更に二百年動かずして太陽の氣に遇へば銀となる。今世人は酒を新しい錫器の中に入れ、そのまま久しい間浸漬して置いたものを人を殺す毒とする。それは砒から錫に化成して間も無いうちに採取したものはその中にまだ毒が含まれて居るからのことだ』とあり、又『砒なるものは

（一）臨賀ハ今ノ廣西省桂林道ノ賀縣ノ地ナ。漢ニ臨賀ト稱ス。

（二）桂陽ハ漢ノ郡名、今ノ廣東省ノ西北部及ビ湖南省ノ南部ヲ包ム。舊治ハ今ノ湖南省郴縣ノ地ナリ。

（三）衡州ハ隋ノ州名、明ニ府ヲ置ク、今ノ湖南省衡陽縣ノ地ナリ。

錫の根であつて、色は銀、質は鉛である。五金のうち獨り錫だけは制し易いもので、その藥を失すれば五金の賊となり、その藥を得れば五金の媒となる」とある。星槎勝覽には「(一)滿刺加國では山の谷間で沙を淘つて錫を取る。これは煎錬せずして塊になつて居るもので、名稱を斗錫といふ」とある。

【正誤】恭曰く、臨賀で採るものを鉛と名ける。一名白鑞といひ、ただこの一箇所の産出だけで全國の需要に應じて居る。錫は銀の産地には何處にもあるもので、體相は似てゐるが藥に入れての功用は大いに異つて居る。時珍曰く、蘇恭は鉛と錫との差異に明確な智識を有たず、錫を鉛といひ、鉛を錫といつて居る。黄丹、胡粉は錫を炒つて造るなどいふもその智識がないための誤である。玆に是正して置く。

【氣味】【甘し、寒にして微毒あり】獨孤滔曰く、羖羊角、五靈脂、伏龍肝、馬鞭草は皆よく賀を縮する。硇、砒は能く錫を硬くする。巴豆、蓖麻、薑汁、地黄は能く錫を制する。松脂は錫を繼ぐ。錫礦は銀を縮する。【主治】【惡毒風瘡】(大明)

【發明】時珍曰く、洪邁の夷堅志に「(二)汝州地方には癭病の者が多い。それは

(一)滿刺加ハ馬來半島ノ南端、マラツカ海峽ヲ隔テスマトラ島ト相對ス。

(二)汝州ハ後魏ニ汝

その土地に風沙が多く、その(六)沙が井中に入り、人がその水を飲むために癭が生ずるといふわけである。故に(七)金、(八)房地方の人家では錫で井桁を造り、皆錫錢を夾んでこれを鎮め、或は錫を井中に沈め、それでこの病を免れる』とある。

【附方】新二。【砒霜の毒を解す】錫器を粗い石の上で水に磨つて服す。（濟急方）

【楊梅毒瘡】黑鉛、廣錫各二錢半を結砂し、蜈蚣二條を末にし、紙で小撚に卷き込み、一夜の間油に浸して燈を點け、日毎に二回づつ瘡を照す。七日で效が現れる。（集玄方）

古鏡（拾遺）

和名　ふるかがみ
英譯名　An old metallic glass

【校正】本經の錫銅鏡鼻を併せ入る。

【釋名】鑑、照子　時珍曰く、鏡は景である。光景があるのである。鑑は監である。前に監るのである。軒轅内傳に『帝、王母に會して鏡を鑄ること十二、(一)日に隨つて之を用う』とあるが鏡の始である。或は堯の臣尹壽に始るともいふ。

【氣味】『辛し、毒なし』大明曰く、平にして微毒あり。【主治】【驚癇、邪

北部ヲ置キ、北齊ニ汝陰トイヒ、隋ニ汝州ヲ置キ、明、清ニハ直隷州トナス。今ハ河南省ニ屬シ、改メテ臨汝縣トナス。

(六)沙ハ細虫ノ見ル可ラザルモノ。

(七)金ハ宋ノ金州、今ノ陝西省安康縣ノ治ナリ。

(八)房ハ宋ノ房州、漢ノ房陵ノ地、今ノ湖北省、襄陽道房縣ノ地ナリ。

(一)日ノ字ハ月ノ字ノ誤ナラン。

(二)諸惡詳ナラズ、急病ノコトナラン。
(三)飛尸ハ心腹刺痛シ、氣息喘急脹滿シ、上ツテ心胸ヲ衝ク急病。

氣、小兒の(二)諸惡には、煮汁で諸藥を和して煮て服す。鑄たり鏤めた文字の古いものほど佳し」(藏器)【一切の邪魅、婦人の鬼交、(三)飛尸、蠱毒を辟け、また暴心痛を治するには、いづれも火に燒き酒に淬して服す。あらゆる蟲の耳、鼻の中に入りたるには、鏡を持つてその鼻、耳を敲けば出る】(大明)【小兒の疝氣で硬く腫れたるには煮汁を服す】(時珍)

發明　時珍曰く、鏡は金、水の精であつて、內が明に外が暗い。古鏡は古劍と同じやうに靈的な力があるらしく、故に能く邪魅、忤惡を辟けるのである。凡そ人家には邪魅を避けるために大鏡を懸けるがよい。劉根傳に『人はそれ自身の形狀に思を致せば長命し得る。九寸の明鏡で己が顏を照し熟視して、自ら己の身體形狀に深く意識を集中すれば、身體と精神が散せず。その身に疾患が入らぬ』とある。葛洪の抱朴子には『あらゆる物が老ゆると、その精は人の形に化して人間を惑すものであるが、ただ鏡中にだけはその實際の形を隱すことの出來ぬものである。故に道士が山に入る際には徑九寸以上の明鏡を背負ふて行く。それで邪魅のものが敢て近かない。鏡にその形の映るのを見れば必ず引返して、ひた走りに逃げ失せるもの

である。その時それを鏡に映して見て、踵のあるものならばそれは山神である。踵がなければそれは年經た魔である』といふことが書いてある。多くの書籍に載せてある記事中、往往古鏡靈異の研究資料たるものを、思ひ當るまゝに左に抄記して置く。

龍江錄——漢の宣帝の御物に八銖錢のやうな寶鏡があつて、よく妖魅が映つて見えた。帝は常にそれを帶びて居られた。

異聞記——隋の時の王度は一面の鏡を所持してゐて、惡疫が流行した際に、村落へ持つて行つて、この鏡で罹病者を照すと直ちに癒えた。

樵牧閑談——孟昶の時、張敵といふ者が一枚の古鏡を手に入れた。徑一尺餘、光が室内全部に照渡つて燭のやうに輝き、ためにその一家全部の者が無病になつた。それでその鏡を無疾鏡と名けた。

西京雜記——漢の高祖は秦の始皇の(四)方鏡を手に入れられた。廣さ四尺、高さ五尺あつて、表裏共に明に物が映り、物を映せば影が倒に見える。鏡の中程を持つて捧げれば腸、胃等の五臓が見え、疾病ある者を照せば疾患の部位が判る。邪心ある

(四)方鏡ノ方ハ方術ノ方ト同意義、不思議ノ鏡、魔ノ鏡トイフガ如キモノナリ。

女子を照せば膽が張り心の動いて居る有樣が見えたといふ。

西陽雜俎――(五)無勞縣の舞溪の石窟に徑一丈の方鏡があつて、人の五臟を照すといふ。これは秦の始皇の照骨鏡だらうといふことだ。

松窗錄――葉法善は一個の鐵鏡を所持してゐて、物を照すと水の如くに映つた。疾病のある人を照して臟腑を見たといふ。

宋史――(六)秦の寧縣の耕夫が鏡を得た。厚さ三寸、徑一尺二寸のもので、水底を照すと太陽の光と相爭ふ程の光明があり、熱病患者を照すと心骨に寒を覺えたといふ。

雲仙錄――京師の王氏は六鼻の鏡を持つてゐた。常に雲烟がかかつて居るやうに見えるが、照して見ると左、右、前の三方のものが皆見える。黃巢の賊が將に襲來せんとしたとき、その方向を照して見ると、甲冑嚴しき賊兵が目の前に在るやうに見えたといふことである。

筆談――呉の地方のある僧の持つてゐた鏡は、未來の吉凶とその吉凶の起る動機まで照し見た。

(五)無勞縣ハ劉宋ニ置ク、古ノ交州日南郡部ヲ今ノ安南ノ廣德、廣南ノ中間ノ地ナリ。

(六)秦ハ秦州、水銀秦州ノ註ヲ見ヨ。寧縣ハ唐ノ寧州ノ地、金部金ノ寧州ノ註參照。

また火鏡といふものがあつて火を取り、水鏡といふものがあつて水を取るなどといふ、いづれも鏡に就ての奇異なる事蹟である。

[附　方] 新一【小兒の夜啼】明鏡を牀臺の脚に掛ける。(聖惠方)

錫銅鏡鼻（本經下品）[釋　名] 弘景曰く、この物と胡粉とは類の異るものだが記載の條を共にして居る。それは、古は純銅で作つた鏡といふものはなくて皆錫を雜へて作つたからである。ここにいふ錫銅鏡鼻なるものは今の破れた古銅鏡の(七)鏡鼻をいふのであつて、之を用ゐるには赤く燒いて酒中に入れ、若くは(八)醋中に繰返して百回入れてから搗くのである。志曰く、凡て鏡を鑄るには皆錫を用ゐる。然らざれば明に光らないものだ、故に錫銅鏡鼻といふのである。現今では(九)廣陵のものが優良なものとなつて居る。時珍曰く、錫銅を熔和し、それに水を注げば極めて硬くなる。それで鏡を鑄るにもこの方法に依つたものだ。考工記に、金、錫相半するを鑑燧の劑と謂ふてあるはこれである。

[氣　味]【酸し、平にして毒なし】權曰く、微寒なり。藥訣に曰く、冷にして毒なし　[主　治]【婦人の血閉、癥瘕、伏陽、絕孕】(本經)【(一〇)伏尸】(別錄)【產後

(七) 鏡鼻ハトリテ。
(八) 醋ハ酢ナリ。
(九) 廣陵ハ郡名、前漢ノ廣陵國、後漢ニ郡ニ改ム。元ニ廢ス。今ノ江蘇省江都縣ノ東北ニ故城址アリ。
(一〇) 伏尸ハ尸病ノ一種。

の餘疹、刺痛、三十六候には、七箇を醋の中に投じ熬つて呷ふ。また當歸、芍藥を入れて煎じて服するもよし】(甄權)

[附方] 新一。【小兒の客忤】顏色靑く、驚痛するには、銅照子鼻を赤く燒いて少量の酒に淬し、その酒を小兒に飮ませる。(聖惠方)

鏡鏽　卽ち鏡上の綠の銷のことで、俗に楊妃垢といふ。[主治]【腋臭。また下疳瘡を療ずるには、五倍子末と等分を、瘡を米泔で洗つて後傅ける】(時珍)

古文錢 (日華)

和名　こせん・古錢
英譯名　An old coin

[釋名] **泉**　**孔方兄**　**上淸童子** (綱目) **靑蚨**　時珍曰く、管子に『禹が(一)歷山の金で貨幣を鑄造して人民の困窮を救つたことが錢の始であつて、周の太公の時に、(二)九府の泉法なる法令を制定した。その形は圓く、中に四角の孔を圍み、重量と價格は銖で計つたものである。四方に周く流通する有樣が、泉の水を周く流出するにも似て居るところから泉といつたもので、後にその音が轉じて錢となつたのだ』とある。錢神論には『世間から神寶として兄のやうに親愛されるところから、字を孔

(一) 歷山ト稱スルモノハ山東省、山西省、安徽省ニモアリテ、ソノ何レナリヤヲ的指シ難ケレドモ、此ニイフ歷山ハ今ノ山東省歷城縣ノ南ニ在ル歷山ナラン。

(二) 周時財幣ヲ掌ルノ官九アリ、之ヲ九府トイフ。

方と呼ばれるのだ』とある。また昔、錢の精が現れて上淸童子と自稱したともいひ、青蚨の血を（三）子母錢に塗るといふ事柄もあるが、それは蟲部に記載する。

【集解】 頌曰く、凡そ鑄銅の物には多くは錫を和してあるもので、考工記に『金の加工方法に用うるものとして六種の劑がある』といふのはそのことである。藥用の古文錢、銅弩牙の類はいづれも錫を含むので、その功用も相近いのである。宗奭曰く、古錢はその銅が赤く焦げて毒があり、壞肉を腐蝕する、特に錫があるためではない。錫を含むの說は誤である。古錢としては、周の景王の時の（四）大泉五十、及び寶貨、秦の半兩、漢の莢錢、大小の五銖、三國吳の大泉五百、大錢當千、劉宋の四銖、二銖、及び梁の四柱、北齊の常平五銖の類だけが方に合せて用ゐ得る。

時珍曰く、古文錢は五百年以上のものであれば用ゐ得る。就中唐の高祖の時に鑄た開元通寶は、輕重大小その中庸を得たもので、古今に重ぜられて居るものだ。綦母氏の錢神論に『黃金を父となし、白銀を母となし、鉛を長男となし、錫を長男の嫁とする』その性の堅剛なるは水を須つて終始するからで、體の圓きは天に應じ、孔の方なるは地に效ふ。これが錢を鑄るの法である。夏三伏に錢を鑄ればそれに用

（三）青蚨ノ子母ノ血ヲ錢ニ塗ル、之ヲ子母錢ト呼ブナラン。偶虫部ヲ見ヨ。

（四）大泉五十及寶貨、周景王廿一年ニ鑄ル。秦ノ半徑一寸三分重八銖。漢ノ莢錢、徑五分重一銖半、文ヲ漢興ト曰フ。大泉五百、孫權嘉禾五年鑄ル、徑一寸一分重四銖六參。大泉當千、孫權赤烏元年鑄ル。四銖、宋文帝元嘉七年鑄ル、徑七分重二銖四參。

ゐた汁は淸くない、これを俗に爐凍と名ける。蓋しこれは火が金に尅するからである』といつてある。唐時代には、端午の日に大江の中央で錢、鏡を鑄たといふ、それはこの意味に依つたものである。

【氣味】【辛し、平にして毒あり】時珍曰く、胡桃と共に嚼めば碎ける。相制するものなのである。【主治】【瞖障に用ゐて目を明にする。風赤眼を療するには、鹽鹵に浸して用ゐ、婦人の橫産、逆産、心腹痛、(五)月膈、(六)五淋には、燒いて醋に淬して用ゐる】(大明)【大靑錢の煮汁を服すれば五淋を通じ、磨つて目に入るれば盲障、膚赤に主效があり、薏苡根に和して煮て服すれば心腹痛を止める】(藏器)

【發明】宗奭曰く、古錢には毒がある。目中の障瘀を治し、壞肉を腐蝕し、婦人の橫、逆産、五淋に多く之を用ゐる。予が若い頃、嘗て赤目腫痛を患ひ數日間口を開き得なかつたが、適ある他鄕人から、生薑一塊を洗淨して皮を去り、それで古靑銅錢を磨つてその汁を點けるがよいと敎へられ、それを試みたところ、初めは非常に苦み、熱淚が顔一面に流れるやうだつたが、しかし、その爲に目を損じることを免れた。その後患者に對してこれを敎へてやるが、往往にして疑惑し、ただ眞面

二銖、宋永光元年鑄ル。
四柱、梁ノ太平三年鑄ル。
常平五銖、齊天保四年鑄ル。

(五)月膈ハ月經來ラズ胞脈閉ヅルヲ云フ。
(六)五淋ハ氣淋、血淋、石淋、膏淋、勞淋。

目に信ずる者のみこれを點けるが、一點だけで癒えぬものなく、再び用ゐるの要はないのである。但し瘡のある者は用ゐてはならぬ。時珍曰く、胡桃と共に嚼んで二三枚を食へば能く(七)便毒を消する。便毒は肝に屬するから、金が木を伐つ道理なのである。

附方　舊一、新二十一。【時氣で死せんとするもの】大錢百文を水一斗で八升に煮詰め、麝香末三分を入れ、少しづつ徐に飮盡せば、或は吐き或は下して癒える。(肘後方)【時氣溫病】頭痛、壯熱、脈大で、感染して一日を經たるには、(八)比輪錢百五十七文を水一斗に入れ、七升に煮その汁を服し、少時して復た水五升で一升に煮詰め、それに水二升を入れて合せて三升にし、錢を取出して汁を飮めば毒を吐出するものである。(肘後方)【心腹の煩悶】及び胸脇痛で死せんとするには、比輪錢二十枚を水五升で三升に煮詰め、三回に分服する。(肘後方)【急心氣痛】古文錢一箇を打碎き、大核桃三箇と共に炒り熱し、醋一盌を入れて(九)沖服する。(楊誠經驗方)【霍亂轉筋】靑銅錢四十九枚、木瓜一兩、炒つた烏梅五箇を水二盞で煎じ、分けて溫服する。(聖濟錄)【慢脾驚風】痰を利する奇效がある。開元通寶——裏面の上下に二箇の月形

(七)百病主治ヲ見ヨ。

(八)比輪錢ハ晋ノ錢ナリ、徑一寸五分重十二銖。

(九)沖ハ注ノ意。

があり、色が淡黑で頗る小形のもの――一箇を鐵匙上に載せ、炭火で焼いて四圍上下に吹き出す珠子を取り出し、冷えるを俟つて盞中に傾け入れて一服とし、南木香湯で飮下す。或は人參を用うるもよし。錢は痰を利するが胃に故障あるものに對しては好ましくないから、木香湯を用ゐて佐とするのである。（楊仁齋直指方）【下血の止まぬもの】大古錢四百文を酒三升で二升に煮詰め、三回に分服する。（普濟方）【赤白帶下】銅錢四十文を酒四升で二升に煮詰め、三回に分服する。（千金方）【小便の氣淋】比輪錢三百文を水一斗で三升に煮詰めて溫服する。（千金方）【沙石淋痛】古文錢の煮汁を服す。（普濟方）【傷水喘急】年少の時冷水を飮み、また驚恐したことが原因で發つたものには、古文錢七枚を洗淨し、白梅七箇と水一鍾に三晝夜浸し、空心に一氣に呷り、少時して吐けば效がある。（仁存方）【唇が腫れ黑み痛むもの】忍び難く(一〇)痒きには、四文の大錢を石上で磨つて猪脂汁で塗れば、數回ならずして癒える。（幼幼新書）【口內の熱瘡】青錢二十文を赤く焼き、酒中に投じて服すれば立ろに瘥える。（陳藏器本草）【眼赤で瘡を生ずるもの】連年癒えぬには、古錢一文、生薑(一一)石一箇を洗淨し、錢を石上で蜜に磨つて濃汁三四滴を取り、それを盞中に置いて、

(一〇)痒ハ痛ノ誤ナラン。

(一一)石ハ德ナラン。

瓦の上へ覆せ、瓦の内へ艾で七壯を灸して熏じ、その蜜を黏けるが效がある。（普濟方）【赤目浮翳】古錢一文、鹽方寸匕を修治し、篩つて黏ける。（千金方）【日の卒に見えぬもの】錢を石の上で磨つてその汁を背中へ注ぐ。（普濟方）【目に生じた珠管】及び膚翳には、銅錢青一兩、細墨半兩を末にし、醋で白豆大の丸にし、乳汁、新汲水各少量に浸し溶して黏ける。（聖惠方）【腋下胡臭】古文錢十文に鐵線を通し、十回燒いて十回醋に淬し、麝香を入れて研つてその末を調へて塗る。（應急良方）【跌撲傷損】半兩錢五箇を、四十九回繰返して火に燒き醋に淬し、甜瓜子五錢、眞珠二錢と研末し、一字づつを好き酒で調へ、上部ならば食前、下部ならば食後に服す。（青嚢）【誤つて鐵錢を呑みたるとき】古文銅錢十箇、白梅肉十箇を漬け爛して搗き、綠豆大の丸にし、一丸づつ流水で呑下せば吐き出す。（聖濟錄）【あらゆる蟲の耳に入つたとき】青錢十四文を猪膏二合で煎じ、少しづつ滴らす。（聖濟錄）【便毒の初期】方は發明の項にある。

銅弩牙（別錄下品）

和名　青銅で作つた弓の鈎
英譯名　A hook of bow, made of bronze

【釋　名】時珍曰く、黄帝が始めて弩を作つたといふ。劉熙の釋名に『弩は怒である。怒の勢があるのである。その柄を臂といふ、人の臂に似て居るからである。絃を鉤くるものを牙といふ、人の牙に似て居るからである。牙の外を郭といひ、下を懸刀といひ、これ等の全部を合せて機と名ける』とある。頌曰く、銅弩牙を藥用にするはその物に錫を含むからである。

【氣　味】【平にして微毒あり】【主　治】【婦人の難産、血閉、月經不通、陰陽隔塞】（別錄）

【發　明】弘景曰く、銅弩牙で諸病を治するには、赤く燒き酒中に納れてその汁を飲む。古きもの程良し。劉元素曰く、弩牙の出產を速にするのは、機、發すればその勢ひ何ものにも拘り滯らぬからであつて、その物の用途に因んで使となすものである。

【附　方】舊一。【誤つて珠や錢を呑みたるとき】咽に閊へたには、銅弩牙を赤く燒いて水中に入れ、冷してその汁を飲めば立ろに癒える。（聖惠方）

諸銅器（綱目） 和名 色色の銅器
英譯名 Several copper (bronze) vessels

[氣味] 『毒あり』時珍曰く、銅器に飲食物、茶、酒を盛つて一夜經てば有毒である。湯を煎じて飲めば聲を損ずる。藏器曰く、銅器上の汗は有毒であつて、惡瘡、内疽を發せしめる。[主治] 『霍亂の轉筋、(一)腎堂、及び臍下の疰痛には、いづれも器を炙き、衣服を隔ててその臍腹、腎堂を熨す』（大明） 『古銅器を蓄へれば邪祟を辟ける』（時珍）

[發明] 時珍曰く、趙希鵠の洞天錄に『山精、水魅などいふは、多く年代を歷て居るところから邪祟をなすのだが、(二)三代の鍾鼎、彝器となれば年代を經て居る點に於て遙にそれを淩駕する』とある。それが精、魅の祟を辟ける所以である。

銅鈷鉧 あるひは鈷鏻と書く。熨斗のことである。[主治] 『折傷接骨には、搗いた末を(三)研飛し、少量の酒に和して服す。量は二方寸匕を過してはならぬ。又、灰火を盛つて臍腹の冷痛を熨す』（時珍）

銅秤錘 [主治] 『難產、横產には、赤く燒いて酒に淬して服す』（大明）

(一) 腎堂ハ腎臟。

(二) 三代ハ夏、商、周。鍾鼎、彝器ハ銅器ノ名。

(三) 研飛、粉末トシ水ニテヨドマス。

銅匙柄【主治】〔風眼の赤爛、及び風熱の赤眼、瞖膜には、熱く焼いて烙する。頻に用うるが妙である〕（時珍）

鐵（本經中品）

和名　てつ・銕・くろがね
學名　Iron

【校正】別錄の生鐵、拾遺の勞鐵を併せ入る。

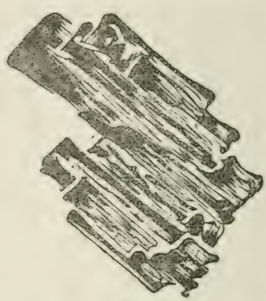
【釋名】**黑金**（說文）**烏金**　時珍曰く、鐵は截である。剛くして物を截つものである。五金の中では水に屬する。故に黑金といふ。

【集解】別錄に曰く、鐵は(一)牧羊の平澤、及び枋城、或は析城に產出する。採收に一定の時はない。弘景曰く、生鐵とは破れぬもの、即ち(二)鑐であつて(三)錡や釜の類である。鋼鐵とは生鑐を雜へ鍊つて鍛へ、刀や(四)鐮を作るものである。鑐の音は柔である。頌曰く、鐵は現に江南、西蜀の製鍊所の設けある地方いづれにもある。礦石を鍊り採つたままを器物に鑄造するものは生鐵である。再三銷して拍ち鍛へ、(五)鍱と作すものは鑐鐵であつて、またこれを熟鐵ともいふ。また生柔のものに相雜和して刀劍、鋒刄を作るものは鋼鐵である。鍛冶工場で鐵を赤く焼き沸し、金敷の

(一)牧羊、枋城、析城、未考。
(二)鑐ハ鍒ニ同ジ、柔キ鐵。
(三)錡ハ鼎ノ類。
(四)鐮ハ鎌。
(五)鍱ハ鋌ナリ。

（六）秦ハ今ノ陝西省及ビ甘肅省ノ東部地方。晉ハ今ノ山西省地方。淮ハ今ノ安徽、江蘇兩省ノ江北一帶。楚ハ今ノ湖北省地方。湖南ハ洞庭湖以南、

上で打下す時、細かい皮屑となつて落ちるものは鐵落である。鐵を鍛竈中に入れて沸す時、火花となつて散り、冷えて紫色の輕虚なものとなり、鍋器を磨く材料になるものは鐵精である。製針工場で鑢で摺り卸した細末をば鍼砂といふ。諸鐵を器中に入れて水に浸し、久しく經つて青い沫が發生し物を黒く染めるものは鐵漿である。鍛へ打つて錠片として、久しく醋糟の中へ入れて置くと衣がかかる。それを刮り取つたものが鐵華粉である。火に入れて飛錬したものは鐵粉である。又、馬銜、秤錘、車轄、及び鋸、杵、刀、斧、いづれも俗間に用ゐられて效がある。



〔鐵〕

○○時珍曰く、鐵はいづれも礦土を炒つて製出するもので、（六）秦晉、淮楚、湖南、閩廣等諸地方の山中からいづれも鐵を産出するが、廣の鐵が良品となつて居る。甘肅地方の錠鐵は色黒く、性堅く、刀劍を作るに適する。（七）西番に産する賓鐵は就中優良だ。寶藏論に「鐵に五種ある。荊鐵は（八）當陽に産し、色は紫で堅利である。（九）上

饒鐵はこれに次ぐ。賓鐵は波斯に産出し、堅利にして金、玉を切り得る。太原、蜀山の鐵は頑滯で鈍い。剛鐵は西南方(一〇)瘴海中の山石の上に生ずる。その狀態は紫石英のやうで、水、火にも壞れず、珠を穿ち玉を切ること土を切るやうだ』とある。土宿本草には『鐵は太陽の氣を受くるもので、その生成の最初は、まづ鹵石が生じ、それが百五十年經つと慈石となり、また二百年經つとその間に孕まれて鐵が生ずる。それがまた二百年そのままであると、採掘、製錬の人工を加へずして銅になる。銅はまた化して白金となり、白金が化して黃金となる。かやうに鐵と金銀とは根源が同一なものであつて、現に慈石を碎いて見ると中に鐵片のあるがその證據である。鐵は太陽の氣を稟けたもので陰氣が交らぬから、燥であるが潔でない。性は錫と相得るものだ』とある。管子には『上に赭あれば下に鐵がある』とある。

鐵（本經）恭曰く、これは柔鐵、卽ち熟鐵のことである。藏器曰く、年久しき間使用されたものを、辛苦し疲れたといふ意味で勞鐵といふ。

【氣味】『辛し、平にして毒あり』大明曰く、慈石、(一一)灰炭を畏れ、能く石亭脂の毒を制す。斅曰く、鐵は神砂に遇へば泥のやう、粉のやうになる。時珍曰く、鐵

今ノ湖南省地方。閩ハ今ノ福建省地方。廣ハ今ノ廣東、廣西兩省地方ヲ指ス。

(七)西番ハ西域、卽チ今ノ新疆省、及ビソノ外境一帶ヲ指ス。

(八)當陽ハ漢ノ縣名、今ノ湖北省襄陽道ニ屬ス。

(九)上饒ハ三國呉ニ縣ヲ置ク。唐、宋、元コレニ因ル。故城ハ今ノ江西省上饒縣ノ西北ニ在リ。今ノ縣ハ明代ニ移治ナリ。

(一〇)瘴海トハ今ノ交趾、緬甸、及ビソノ西南方國外ノ地ヲ指ス。

(一一)金陵本ニ火炭トアリ、大觀本草ニ灰炭トアリ。

は皂莢、猪、犬脂、乳香、朴消、硇砂、鹽鹵、荔枝を畏れる。貘は鐵を食ひ、蛟龍は鐵を畏れる。凡そ諸草木の藥は皆鐵を忌むのであるが、就中補腎の藥に於て最も忌むのである。若しこれを犯せば反つて肝、腎を消し、上肝は氣を傷め、(一二)母氣がいよいよ虛するものである。［主治］「肌を堅くし、痛に耐へしめる」(本經)「勞鐵は賊風を療ず。赤く燒き酒中に投じて飲む」(藏器)

生鐵（別錄中品）［氣味］「辛し、微寒にして微毒あり」鐵の條を見よ。［主治］「下部、及び脫肛」(別錄)「心を鎭め、五臟を安んじ、癇疾を治し、鬢髮を黑くし、癬、及び惡瘡疥を治す。蜘蛛の咬傷には、蒜を鐵で磨り、生油で調へて傅ける」(大明)「瘀血を散じ、丹毒を消す」(時珍)

［發明］恭曰く、(一三)諸藥で病を療ずるいづれの場合にも、散には入れない。皆煮汁を取つて用ゐる。藏器曰く、鐵砂、鐵精はいづれも丸、散に入れる。時珍曰く、鐵は五金の中では色黑くして水に配するのであるがその性は(一四)木を制する。故に癇疾に適するものである。素問に、陽氣大盛にして狂を病み、善く怒る者を治するに生鐵落を用うとあるは、正に伐木の意味を取つたのである。日華子は「鐵は心を

(一二)母氣トハ腎氣ヲ指スモノト思ハル。

(一三)大觀本草ニ藥ヲ鐵ニ作ル、又散ヲ丸散ニ作ル、從フベシ。

(一四)木ハ肝臟ヲ意味ス。

鎮め、五臟を安ずる』と言つて居るが、さやうな事實のあるわけがあらうか。その本草に、太淸服食法の文を載せて、『服鐵傷肺』とあるが肺の字は肝の字の誤である。

附方　舊五、新一。【脫肛の年を歷たるもの】脫して入らぬには、生鐵二斤を水一斗で五升に煮た汁で一日二回づつ洗ふ。（集驗方）【熱甚しく耳聾せるもの】鐵を燒き、酒中に投じて飮み、慈石で耳を塞ぎ、日毎に易へて夜間は取去る。（千金方）【小兒の丹毒】鐵を燒き水に淬して一合を飮む。（陳氏本草）【小兒の燥瘡】一名爛瘡といふ。鐵を燒いて水中に淬すこと十四回繰返し、それに浴すれば二三日で漿が發生するものである。（子母祕錄）【打撲の瘀血】骨節、及び脇外に在つて去らぬには、生鐵二斤を酒三升で一升に煮て服す。（肘後方）【熊虎の傷毒】生鐵の味の出るまで煮た汁で洗ふ。（肘後方）

鋼（別錄中品）

和名　はがね・鋼・刄金
學名　Steel

校正　開寶の鐵粉、拾遺の鍼砂を併せ入る。

釋名　跳鐵　跳の音は條（デウ）である。

集解　時珍曰く、鋼鐵に三種ある。生鐵に熟鐵を合めて鍛錬して成るものと、精鐵を飽くまで錬つて鋼を出すものと、西南の海山中から自然のまま鋼となつて産出する紫石英のやうな狀態のものとである。凡そ刀劍、斧鑿、諸刃は皆鋼鐵であつて、鐵砂、鐵粉、鐵精もやはり皆鋼鐵を用うるものである。按ずるに、沈括の筆談に『世間では、柔鐵に生鐵を包み、それを泥で封して錬り、その兩者をよく混和させたものを鋼鐵と稱して用ゐて居る。しかしこれは團鋼といひ、また灌鋼ともいふ僞鋼である。眞の鋼は、精鐵を飽くまで鍛錬して、何れの部分でも斤兩の耗ることなきものだ。これなれば純粹の鋼であつて、鐵の精純なるものである。その色は明瑩で、磨けば黯然として靑く且つ黑い。普通の鐵とは異ふのである。また如何に錬つて錬り盡しても鋼のないものもある。産地に依つて鐵の成分が異るからだ』とある。又、柔鐵でも二三回（二）地溲に淬すと鋼になつて玉を切り得るものもある。——石腦油の條下を見よ



鋼鐵

（二）地溲八九卷石部

油ノ附錄ニ出ヅ。和名ナシ。

（二）鍛錬スルコト。

——凡そ鐵の內には打つても延びない硬い部分のあるものがある。これを鐵核といふ。香油を塗つて燒けばその硬核は散るものである。

【氣　味】【甘し、平にして毒なし】【主　治】【金瘡の煩滿、熱中の胸膈氣塞、食物の不消化】（別錄）

鐵粉（宋開寶）恭曰く、これは鋼鐵を飛鍊して作るもので、一般にあるものは、多く雜鐵を屑にして（二）飛するからその體が重いので、眞の鋼で作つたものはさうでない。

【氣　味】【鹹し、平にして毒なし】【主　治】【心神を安んじ、骨髓を堅くし、あらゆる病の變異を除き、肌膚を潤し、人をして老いしめず、體健に、食慾を進める。久しく服すれば體量を增し、肥つて黑くなる。諸藥に合和するにはそれぞれの主たる病證がある】（開寶）【痰を化し、心を鎭め、肝の邪を抑へるに特異な效がある】（許叔微）

【發　明】鐵落の條を見よ。

【附　方】新六。【驚癇發熱】鐵粉少量を水で調へて服す。（聖惠方）【急驚涎潮】壯

熱悶亂するには、鐵粉二錢、硃砂一錢を末にし、一字づつ薄荷湯で調へて飲下す。（楊氏家藏方）【傷寒陽毒】狂言妄語し亂走するは、毒氣が臟に在るのである。鐵粉二兩、龍膽草一兩を末にし、磨刀水で調へて一錢を服す。小兒には五分を用ゐる。（全幼心鑑）【頭痛鼻塞】鐵粉二兩、龍腦半分を研勻し、一錢づつを新汲水で服す。（聖惠方）【（三）雌雄疔瘡】鐵粉一兩、蔓菁根三兩を泥の如く搗いて瘡を封じ、一日二回換へる。（集玄方）【風熱脫肛】鐵粉を研り、白蘞末と共に傅けて揉み込む。（直指方）

鍼砂（拾遺）藏器曰く、これは製針場で針を磨く鑪粉の細末である。眞鋼の砂であれば藥用に堪へるが、世間には柔鐵砂を雜へ和し飛して粉にしたものが多く、普通人にはなかなか見別け難い。しかし黑染の染料にはなる。

主治 【功力は鐵粉に同じ。沒食子に和して鬚を染めれば非常に黑くなる】（藏器）【積聚、腫滿、黃疸を消し、肝氣を平にし、癭を散ず】（時珍）

附方 新十。【風濕脚痛】鍼砂、川烏頭を末にしてむらなく和し、炒熱して綿に包んで熨す。（摘玄方）【風痺に手を暖める】鍼砂四兩、硇砂三錢、（四）黑脚白礬六錢を研末し、熱醋、或は熱水で拌ぜ、濕油紙で裹んで袋に入れ、意のままに之を握り、冷

（三）雌疔ハ其狀皰起頭黑靨、四畔仰皰漿起、有水出、色黃、大如錢孔、形狀高厚。雄疔ハ孔爲靨ニシテ灸瘡ニ似、四畔ノ泡漿色赤ク、又赤粟アリ、乃チ瘡ニシテ腫ス、コレヲ刺シテ痛マズ、熱ヲ發ルモノヲ云フ。

（四）黑脚白礬、詳ナラズ。礬石ノ條ニアル黑礬ノコトナランカ。

えれば再び拌ぜ直す。(聖濟錄)【脾勞黃病】鍼砂四兩を七回醋で炒り、乾漆を燒いて性を存して二錢、香附三錢、平胃散五錢を末にし、蒸餅で梧子大の丸にし湯で飲ます。(摘玄方)【濕熱黃疸】脾を助け濕を去る鍼砂丸——鍼砂を多少に拘らず鏽を揩り盡し、淘り洗つて白色にし、鐵銚の中へ米醋を入れてそれを一時浸してから炒り乾し、三五回繰返して全部紅くなつたとき取り出し、また別に陳粳米半升を水に一夜浸して粉に搗いて塊にし、半熟に煮て杵き爛し、甕の鍼砂を二兩半、百草霜を炒つて一兩半を入れ、千杵搗いて梧子大の丸にし、五十丸づつを五加皮、牛膝根、木瓜を浸した酒で服す。先づ第一服で泄瀉すればその病源が去る。(乾坤生意)【水腫で尿少きには】鍼砂を醋で煮て炒り乾し、猪苓、生地龍と各三錢を末にし、葱涎で研り和して臍中に傅け、一寸厚さ程を括つて縛つて置く。小便の十分出るまでを度とし、日に二回づつ取換へる。甘遂を入れるが更に妙である。(德生堂方)【泄瀉の度無きもの】諸藥の效なきには、上記の方を用ゐ、甘遂をば用ゐない。(醫學正傳)【虚寒下痢】腸が滑してしまりなきには、鍼砂七錢半、官桂一錢、枯礬一錢を末にして涼水で調へ、臍の上下へのして縛つて置く。大熱が出る筈だが、その時は水で潤し、

三四回試みる。これを玉胞肚と名ける。(仁存方)【項下の氣瘻】水缸の中へ鍼砂を浸して置き、その水ですべての飲食物を調理する。鍼砂は十日に一度づつ換へる。半年間試みれば自ら消散する。(楊仁齋直指方)【白鬚髮を染むる法】醋で七回炒つた鍼砂一兩、訶子、白芨各四錢、百藥煎六錢、綠礬二錢を末にして熱醋で調へ、鬚髮に刷いて荼葉で包み、翌朝酸漿で洗ひ落す。鬚の質を壞らず紅くもならぬ。また一方では、鍼砂、蕎麪各一兩と百藥煎を末にし、茶で調へて夜塗り翌朝洗ひ、再び訶子五錢、醋で炒つた沒石子一箇、百藥煎少量を水で和して塗り、一夜置いて溫漿で洗ひ落せば黑く且つ艶を出す。

鐵落 (本經中品)

和名　かなくそ・鐵屑
英譯名　A slag of iron

【釋名】鐵液(別錄)鐵屑(拾遺)鐵蛾　弘景曰く、鐵落は黑染に用ゐる鐵漿である。恭曰く、これは鍛冶場で鐵を赤く燒き沸して金敷で鍛へるとき皮甲になつて落つるものをいふのである。漿を鐵落といふならば、鋼を浸した汁をば何と謂つてよいのであるか。落といふは鐵皮である。その滋液は他の鐵より黑いところから

また鐵液とも名ける。時珍曰く、生鐵を打ち鍛へ、また鑄る時に蘭のやうな、蛾のやうな花が出る。故に俗にこれを鐵蛾といふ。現に煙火製造に之を用ゐてゐる。鐵末を醋に浸しそれで紙に字を書き、その裏に墨を塗ると碑の文字のやうになるものだ。

氣味　「辛し、平にして毒なし」別錄に曰く甘し。**主治**　「風熱惡瘡、瘍疽の瘡痂、疥氣の皮膚中に在るもの」（本經）「胸膈中の熱氣を除き、食物が落付かぬに用ゐ、煩を止め、黑子を去り、黑染の染料となる」（別錄）「驚邪、癲癇、小兒の客忤を治し、食物の消化、及び冷氣、いづれも煎じて服す」（大明）「(一)鬼打、鬼疰の邪氣に主效がある。水に漬け沫を出して澄清し、一二盃を暖服する」（藏器）「炒り熱し酒中に投じて飲めば賊風痙を療ず。又裹んで腋下を熨すれば胡臭を療するに效驗がある」（蘇恭）「肝を平にし、忤を去り、善く怒つて發狂するを治す」（時珍）

發明　時珍曰く、按ずるに、素問の病態論に『黃帝曰く、怒狂を病むものがある。此の病は如何して生ずるのであるか。岐伯曰く、陽に生ずるものである。暴折して決せざる故に善く怒るのであつて、この病を陽厥と名ける。曰く、それは何

(一)鬼打ハ急ニ胸肋腹肉絞急シ、切痛シ、抑按ス可ラズ、或ハ吐血シ、或ハ鼻中ヨリ血ヲ出シ、或ハ下血ス。

故に然るか、曰く、陽明なるものは常に動くのであるが、巨陽、少陽は不動である。然るにそれが動けば大いに疾む。今いふ病はその證候である。之を治するには必ず其の食を奪ふべきものであつて、それで病は已む。一體食が陰に入れば氣を陽に增大するものだから、その食を奪へば當然已むべきわけである。それには生鐵落を飲ませる。生鐵落なるものは氣を下すことの速なるものである』とある。これが素問の本文であるが、余は常にこれを斯く解釋して居る。陽氣が怫鬱し、少陽を發して通ずることを得ず、膽木に三焦の少陽相火、巨陽陰火を挾んで上行するから怒り易く狂の如くになるので、それは巨陽、少陽の脈の動きで診ることが出來る。その食を奪ふとあるは、胃火をしてその上に邪を助けしめぬためであり、生鐵落を飲ますとあるは、金を以て木を制するわけである。木が平ぐときは火が降る。故に氣を下すことが疾だ速なのであつて、氣とは火である。また李仲南の永類方に『腫藥として鐵蛾、及び鍼砂を丸藥に入れて用ゐるには一生鹽を斷たねばならぬ。蓋し鹽は性濡潤であつて、腫が若し再發した場合には手當の施しやうがない。制法は、上等のものを醋で半日煮て鐵蛾、鍼砂を取り去り、その醋で蒸餅を和して丸にし、三四十

丸づつ韮湯で服し、效力の現るるを度とする』とある。これも只鐵氣を借るの意に外ならぬ。故に日華子は『煎汁は服して臟腑に留滯せず、鐵虎の氣を借りて肝木を制し、脾土を剋する能はざらしめる。土が邪を受けねば水は自ら消する』といつて居る。鐵精、鐵粉、鐵華粉、鐵砂、鐵漿を藥に入れるのは、皆同一理論である。

【附方】新一。【小兒の丹毒】煆鐵屎を研末し、猪脂で和して傅ける。（千金方）

鐵精（本經中品）

和名　てつのこな・鐵粉
英譯名　A powder (dust) of iron

【釋名】鐵花　弘景曰く、鐵精は鐵の精華である。煆竈の中から出る塵の如く紫色にし輕きものを佳しとする。銅器を磨き輝かすにも之を用ゐる。

【氣味】【平にして微溫なり】【主治】【目を明にし、銅を化す】（本經）【驚悸を療じ、心氣を定め、小兒の風癇、陰癀、脫肛に用ゐる】（別錄）

【發明】鐵落の條を見よ。

【附方】舊五、新二。【下痢脫肛】鐵精をまぶす。（至寶方）【婦人の陰脫】鐵精、羊脂を布に裹み火熱して熨し推し入れる。（聖惠方）【男子の陰腫】鐵精粉を傅ける。（子

（一）淋露骨立ハ淋病ニ罹リ痩セルコト。

母秘錄）【疔腫の根を拔く】鐵渣一兩、輕粉一錢、麝香少量を末にし、針で口を十文字に畫いて藥を內に點け、醋で麪糊を調へて傅ければ神效がある。（普濟方）【食物中の蠱毒】腹中が堅痛し、風色が青黃になり、（一）淋露骨立し、病が變化して常なきには、爐中の鐵精を研末し、雞肝で和して梧子大の丸にし、食前に酒で五丸を服すれば十日を過ぎずして癒える。（肘後）【蛇骨の刺傷】毒痛するには、鐵精粉を豆ほど瘡に吹き入れる。（肘後方）

鐵華粉（宋開寶）

和名　醋酸鐵の粉末
英譯名　Powder of acetate of iron

【釋名】鐵胤粉（日華）鐵艷粉　鐵霜。

【修治】志曰く、鐵華粉の製法は、鋼を鍛へて笏のやうな薄いものにし、或は平たき團にして光るやうに磨き、鹽水を灑いで醋甕の中に入れ、百日の間光線の當らぬ處に埋めて置けば鐵の表面に衣がかかつて粉となる。それを刮り取つて細かに搗き篩ひ、乳鉢に入れて麪のやうに研り、諸藥に合和して丸、散にする。これは鐵の精華であつて、功用は鐵粉よりも強い。大明曰く、醬瓿に吊り下げて置いて生ず

(三)意志ヲ强クスルコト。

る霜を鐵胤粉と名ける。粗滓と鹹味を淘り去り、烘り乾して用ゐる。

【氣味】【鹹し、平にして毒なし】【主治】【心神を安んじ、骨髓を堅くし、(三)志力を強くし、風邪を除き、血氣を養ひ、天年を延べ、白を變じ、あらゆる病を去る。冷熱それぞれに隨ひ諸藥に和して棗膏で丸にする】(開寶)【驚悸、虛癇を止め、五臟を鎭め、邪氣を去り、健忘、冷氣、心痛、痃癖、癥瘕、脫肛、痔瘻、宿食等を治し、また竹木で肉を刺したるに傅ける】(大明)

【發明】鐵落の條を見よ。

【附方】新一。【婦人の陰挺】鐵孕粉一錢、龍腦半錢を研り、水で調へて産門に刷く。(危氏得效方)

鐵鏽（拾遺）

和名　てつさび・鐵鏽（水酸化鐵）
英譯名　Rust of iron

【釋名】鐵衣　藏器曰く、これは鐵の表面の赤い衣である。刮り下して用ゐる。

【主治】【惡瘡、疥癬には油に和して塗る。蜘蛛蟲咬には蒜で磨つて塗る】(藏器)

【肝を平にし、熱を墜し、瘡腫、口舌瘡を消す。醋で磨つて蜈蚣の咬傷に塗る】(時珍)

〔發明〕 時珍曰く、按ずるに陶華は『鐵鏽水を藥に和して服すれば、その性は沈重で最も能く熱を墜し、結を開くに神效がある』といつて居る。

〔附方〕 新八。【風瘙癮疹】鐵鏽を水で磨つて塗る。(集簡方) 【湯火傷瘡】青竹を燒いた油を鐵鏽と共に搽る。(積德堂方) 【丁腫の初期】多年土中にあつた鏽釘を火に煆いて醋に淬し、その鏽末を刮下して幾回となく煆いて取收め、少量づつを人乳に和し、瘡を破つて傅け、更に炒り研つて二錢を煎沸し、冷した蓉水で調へて服す。(普濟方) 【脚腿の紅腫】火で炙くやうに熱するを俗に赤遊風といふ。鐵鏽水を塗れば解す。(惠濟方) 【重舌腫脹】鐵鏽(三)鎖を紅く燒いて打ち落した鏽を研末し、一錢を水で調へて嗽み嚥む。(生生編) 【小兒の口瘡】鐵鏽末を水で調へて傅ける。(集簡方) 【內熱遺精】鐵鏽末一錢を冷水で服す。三服で止る。(活人心統) 【婦人の難產】雜草で燒いた鐵鏽と白芷等分を末にし、一錢づつを童尿、米醋各半で和して服すれば效が現れる。(救急方)

(三) 鎖ハ鏁マヘ。

鐵爇（拾遺）

和名　てつのあせ・はものゝあぶら
英譯名　Oil of blade

【釋名】　刀煙　（(一)綱目）刀油(二)時珍曰く、刀や斧や刃物の上で竹、木を爇(や)けば漆のやうな液が出る、その物をいふのである。江東地方で多くこれを用ゐる。

【主治】　【惡瘡の蝕䘌(しょくちく)、金瘡、毒物の皮肉を傷(きず)けたるには、風水を止めて入らしめず、水に入れても爛れぬ。手足の(三)皸折(きんせつ)、瘡根、結筋、瘰癧(るゐれき)、毒腫(どくしゆ)に用ゐる。鬚髮を染めて永く黑からしめるには、熱してまだ凝らぬ間にこれを塗る。少時置けば乾いて硬くなつて了ふものである。これを用ゐるには水の入らぬやうにせねばならぬ。また蟲を殺すに立ろに效がある】（藏器）

【附方】　新一。【項邊(こうへん)の(四)癧子(れきし)】桃核(たうかく)を刀の上で燒烟して熏ずる。（陳氏本草）

鐵漿（拾遺）

和名　おはぐろのみづ
英譯名　Tooth-dye, Tooth-black

【集解】　藏器曰く、陶弘景は鐵落を鐵漿と謂つて居るが誤である。これは諸鐵を器に入れ水で浸して久しく經ると靑沫が出て物を黑く染め得るものをいふのであ

(一)綱目、當ニ拾遺ニ作ルベシ。
(二)時珍、當ニ藏器ニ作ルベシ。
(三)皸折ハアカギレ。
(四)癧子ハ結核。
白井曰ク鐵漿ハ酸化鐵ヲ含有セル液體ナレバ此英譯名ハ妥當ナラズ

る。承曰く、鐵漿とは生鐵を水に漬けて服餌するもののことである。少しづつ度度新水を入れ、久しく經て鐵の表面に黄膏が生じたものなれば功力が更に優良である。唐の太妃が服用したといふはこれである。染料になるものを漿といつて居るが、それは酸苦、臭澀で到底近けるものでない。餌や服食するなどとは思ひも寄らぬ。

【氣味】【鹹し、寒にして毒なし】【主治】【心を鎭め、目を明にし、癲癇、發熱、急黄、狂走、六畜癲狂に主效がある。蛇、犬、虎、狼や毒蟲等に嚙まれたとき、これを服すれば毒が肉に入らぬ。その他諸毒の腹に入りたるを解す】（藏器）

【附方】舊二、新三。【時氣生瘡】胸中の熱するには、鐵漿を飲む。（梅師方）【一切の丁腫】日毎に鐵漿一升を飲む。（千金方）【發背の初期】鐵漿二升を飲んで下す。（外臺秘要）【蛇皮惡瘡】鐵漿を頻に塗る。（談野翁方）【漆瘡】鐵漿で頻に洗へば癒える。（外臺）

諸鐵器（綱目）

和名　色色の鐵器
英譯名　Several iron vessels

(一)藥杵ハ乳鉢ヲ磨スル杵。

(二)漏胎、懷妊中血ノ下ルモノ。

【集解】時珍曰く、舊本草には鐵器の條が甚だ繁多であるが、玆には一括して大要を取集めた。大抵は皆その氣を借りて木を平げ毒を解し、且つ重墜の性を應用する外に意義はない。

鐵杵（拾遺）卽ち(一)藥杵である。【主治】【婦人の橫産、胞衣不下には、赤く燒き酒に淬して飲めば自ら順になる】（藏器）

鐵秤（宋開寶）【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【賊風、産後の血瘕、腹痛を止める。また喉痺熱塞には、赤く燒き酒に淬して熱飲する】（開寶）【男子の疝痛、女子の心腹妊娠脹滿、(二)漏胎、突然の下血を治す】（時珍）

【附方】新四。【喉痺腫痛】秤錘を燒いて菖蒲根を嚼んだ汁に淬して一盃を飲む。（普濟方）【舌腫咽痛】咽に息肉を生じ、舌の腫れたるには、秤錘を赤く燒き醋に淬して一盞を噉む。（聖惠方）【誤って竹木を呑みたるとき】秤錘を紅く燒いて酒に淬して飲む。（集玄方）【便毒の初期】聲の出るほど強く提起して鐵秤錘で摩壓すれば一夜にして散ずる。（集簡方）

鐵銃（綱目）【主治】【分娩を催すには、赤く燒いて內に酒を注込み、孔から流

れ出たものを熱に乘じて飲めば直ちに分娩する。舊い銃が尤も良し」

鐵斧（綱目）［主　治］「婦人の横、逆の難產、胞衣の出ぬには、赤く燒き酒に淬して服す。また產後の血瘕、腰腹痛を治す」（時珍）

［發　明］　時珍曰く、古人の胎中の女子を轉じて男子にする法に『懷姙三月を始胎と名ける。胎兒はまだ血脈が流れぬが象形はこの時變ずるのだ。故に變性のための服藥は此の際がよく、その姙婦に知らせずに床の下へ斧を繫け、刃を下に向けて置けば變性する』と言傳へられて居る。恐らく信ぜられぬことであるが、しかし、試みに雞にこの法を施して見ると、一窠の卵が悉く雄雞になつてゐた。蓋し胎化の法もやはりしかある可き理由があると見える。故に牡雞を食へば陽精の天產としての至きものを取ることになる。雄黃を佩べば地產としての至きものを取ることになる。弓矢を操り斧斤を藉りるは、人間の受用するものとしての最も剛なる物を取ることになる。氣類潛に感じ、造化密に移るといふことは凡ての物の現れの必然の理として必ずあり得ることである。姙婦が神像や怪異の物を見たために、鬼怪の物を產むだといふことも多く聞くことで、これはその間の消息を現した證徵である。

(三)象牙や犀角の紋は象を逐ふて生じ、(四)山薬や雞冠草の形は人に隨つて變じ、雞卵を以て竈に祈れば母雞が雛を抱くやうになり、(五)苕帚で猫を掃けば孕むといふ。動植物さへやはりかやうな感應があるのだから、靈能の最も優れたる人間に於ては尚更のことであらう。藏器曰く、凡そ身體に胬肉の生じたものは、他家の葬儀で棺に釘打付ける斧の聲を聽いたとき、直ちに手でその胬肉を二七回擦るがよい。その後は自ら消して平安になる。但し產婦は試みぬがよい。

鐵刀（拾遺）主治【蛇咬毒が腹に入りたるには、兩刃を水中で相摩してその汁を飲む。百蟲の耳に入りたるには、兩刀を耳門の上で摩し敲いて音をたてれば蟲が自ら出る】（藏器）【磨刀水を服すれば小便を利す。脫肛、痔核、(六)產腸の收らぬもの、耳中の卒痛に塗る】（時珍）

大刀環（綱目）主治【難產で數日經て分身せぬには、赤く燒き酒に淬して一盃を頓服する】（時珍）

剪刀股（綱目）主治【小兒の驚風には、錢氏の剪刀股丸といふがある。剪刀の環頭を研破して湯に煎じ、それで藥を服する】（時珍）

(三)犀角ノ紋ハ月ヲ望ムニ因リテ生ジ、象牙ノ紋ハ雷花ヲ聞イテ發スト云フ古諺ヲ指ス。
(四)山藥ヤ雞頭花ノ畸形成長ヲナスハ、人ノ意志ニ感應スルモノトセルナリ。
(五)苕帚、猫ノ條ニハ竹帚ニ作ル、苕帚ハ蘆花ニテ作ル帚。
(六)產腸ハ子宮。

鐵鋸（拾遺）主治【誤つて竹木を呑んで咽に入れたるには、故鋸を赤く燒き、酒に漬けて熱飲する】（藏器）

布鍼（七）（綱目）主治【婦人の橫産には、十四本を赤く燒き七回酒に淬して服す】（八）（時珍）

附方 新一。【眼に生じた（九）偸鍼】布鍼一本を井戸に向けて睨み、それを二ツに折つて井戸へ投げ込む。人に見られてはならぬ。（張杲醫說）

鐵鏃（綱目）主治【胃熱呃逆には、七十二箇を湯に煎じて啜る】（時珍）

鐵甲（綱目）主治【憂欝結滯でよく怒り、狂し易きには、藥煎に入れて服す】（時珍）

鐵鎖（綱目）主治【（一〇）齆鼻で香臭を嗅ぎ得ぬには、石上で磨つて末を取り、豬脂に和し綿で裹んで塞げば、日を經て肉が出て瘥える】（普濟）

（一一）鑰匙（日華）主治【婦人の血噤で失音し衝惡するには、生薑、醋、尿と共に煎じて服す。性慾微弱のものも煎じて服するがよし】（大明）

鐵釘（拾遺）主治【酒に醉ひ、齒から血を滿出して止まぬには、赤く燒いて

（七）綱目ハ拾遺ノ誤。
（八）時珍、當ニ藏器ニ作ルベシ。
（九）偸鍼ハメガサ、一名モノモラヒ。
（一〇）齆、字書ニ鼻塞ヲ云フトアリ。
（一一）鑰ハ鍵ヲ開クカギ。

孔中に入れれば止る】（時珍）藏器曰く、ある犯罪者が恩赦で放免された際、枷上の鐵や釘などを持つて出た。その後また拘引されたとき、その鐵や釘を身に著けてゐたところが免除されたといふ。

鐵鏵　即ち（一二）鍤である。（綱目）【主治】【心虛風邪、精神恍惚、健忘には、久しく使用したもの四斤を七回繰返して赤く燒いて醋に投じ、打つて塊にし、水二斗に二七日間浸し、毎食後その水一小盞を服す】（時珍）

【附方】新三。【小兒の傷寒】生後百日以內に壯熱を患ふには、鐵鏵一斤を赤く燒き水二斗に淬すこと三七回繰返し、それを煎じて一半に柳葉七片を入れて浴する。（聖濟錄）【積年の齒䘌】舊き鐵鏵頭一箇を炭火で赤く燒き、硫黃一分、豬脂一分を捻つてその上に截せて熬沸し、柳枝の端を綿で包んでその藥をつけ、熱して齒縫を烙けば數回で癒える。（普濟方）【灌頂油法】腦中の熱毒風を治し、目中の翳障を除き、心を鎭め、目を明にする。生油二斤を用ゐ、打碎いた故鐵鏵五兩、硝石半兩、寒水石一兩、馬牙消半兩、曾青一兩を綿に裹んでその油中に七日間浸し、一錢づつで頂上を摩し、また少量を鼻の中に滴せば甚だ妙である。これは（一三）大食國の旅商が傳

（一二）鍤トハ鍬（スキ）ノコト。

（一三）大食國ハ水部甘露蜜ノ註ヲ見ヨ。

へた方である。（聖惠方）

鐵犂鑱尖（日華）［主治］【水を得れば硃砂、水銀、石亭脂の毒を制す】（大明）

車轄　即ち車軸の鐵鎋頭、一名車缸。（宋開寶）［主治］【喉痺、及び喉中の熱塞には、赤く燒き酒中に投じて熱飲する】（開寶）【小兒の大便下血に主效がある。赤く燒き水に淬して服す】（時珍）

［附方］舊一、新一。【小兒の下血】方は前項にある。【姙娠欬嗽】車缸一箇を赤く燒いて酒中に投じ、冷して飲む。（聖惠方）【走注氣痛】車缸を赤く燒き濕布で裹んで患部を熨す。（千金方）

馬銜　即ち馬の轡の鐵である。大明曰く、古いものほど好し。また醫療用の鍼を作る材料にもよし。（宋開寶）［主治］【小兒の癇、婦人難產の時、これを手に持ち、また汁に煮て一盞を服す】（開寶）【馬喉痺腫で頬まで腫れ、吐血し、氣數なるには水で煎じて服す】（聖惠）

馬鐙（綱目）［主治］【野原で光る燐火は人間の血の化して發するもので、或は現れ或は消え、逼り來つて人の精氣を奪ふものであるが、ただ馬鐙を互に打ち合せ

て聲を立てればその火は滅するものである。故に張華は『金葉を一振すれば遊光色を斂む』といつてある】(時珍)

(一)鰓理ハ外皮ノ滑澤ナルキメ。
(二)舒揚ハヨク透リテ澄ミワタルナリ。
(三)銳廉ハ稜角正シク銳キヲイフ。
(四)忮ハ妬ムト讀ム。忮ナラズハ、俗ニ云フヒネクレヌナリ。

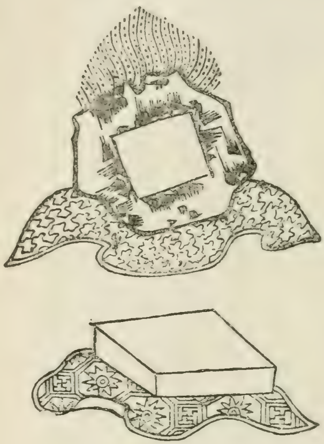
石の二　玉類十四種

玉（別錄上品）

和名　ぎよく
學名　Jade, Jadeite

【校正】別錄の玉屑を併せ入る。

【釋名】**玄眞**　時珍曰く、按ずるに、許愼の說文に『玉は乃ち石の美なるものなり。五德あり。潤澤にして以て溫なるは仁なり。(一)鰓理外より以て中を知る可きは義なり。其の聲(二)舒揚して遠く聞ゆるは智なり。橈まずして折るるは勇なり。(三)銳廉にして(四)忮ならざるは潔なり。其の字は三玉を連ね貫くの形に象る』とあり。葛洪の抱朴子には『玄



〔玉〕

眞は玉の別名であつて、これを服すれば人をして身體輕く擧らしむるものである。故に玄眞を服すればその壽命は極りない』と言つてある。

【集解】別錄に曰く、玉泉、玉屑は(五)藍田の山谷に生ずる。採收に一定の時期はない。弘景曰く、玉の好きものは藍田、及び(六)南陽、(七)徐善亭部の境域、(八)日南の(九)盧容の川中、外國では(一〇)于闐、(一一)疏勒の諸處に產する。その全體が誠に潔白で豬膏の如く、之を叩けば鳴るものが眞正の玉であるが、類似のものも甚だ多いから眞僞の識別は精細なるを要する。燕石を大切に保存したり、卞和のやうに眞正の璞玉を得てゐながら長へに寃枉に嘆くといふもそのためである。珣曰く、異物志に『玉は(一二)崑崙に出づ』とあり、別寶經には、『凡そ石に玉を含むものは、その石を燈火に透して見ると內部に初めて出る太陽のやうな紅い光明がある。そのものこそ玉なのである』と書いてある。

頌曰く、今では藍田、南陽、日南に玉があるといふことを聞かぬが、于闐國からは產出する。晉の鴻臚卿張匡鄴が于闐に使して書いた行程記に、その國で玉を採る地方に關する記事がある。それに依れば『玉河は于闐城下の附近にあつて、その水

(五)藍田ハ山名、今ノ陝西省關中道藍田縣ノ東ニ在リ。

(六)南陽ハ漢ノ南陽郡、今ノ南陽縣ヲ中心トシ、河南省ノ西南部、湖北省ノ北部ニ亘ル。

(七)徐善亭部、未考。

(八)日南ハ郡名、漢ニ置ク。今ノ安南ノ廣治以南廣義ノ地ニ亘ル。

(九)盧容ハ漢ノ縣名、日南郡ニ屬ス。今ノ廣治ト許愛ノ中間フオンヂン附近ニ當ルガ如シ。

(一〇)于闐ハ漢時代西域ノ一古國、今ノ新疆省和闐州ニシテ今ノ于闐ナル地トハ同ジカラズ。乃チ和闐

源は崑崙に發し、西に流れて一千三百里にして于闐境域の牛頭山下に至り、そこで流が三河に別れる。一は白玉河といひ城東三十支里の地點を流れ、二は綠玉河といひ城西二十支里の地點を流れ、三は烏玉河といつて綠玉河の西七支里の地點を流れる。その源は同一だが、流域の相違に隨つて玉が變るのでその色が同一でない。その各河は五六月の頃非常に水嵩が暴漲し、その際玉がその水に流されて來るのであつて、玉の產出の多寡はその歲の增水の多少に比例する。七八月、水が退いてからその玉を採收するので、その土地のものは撈玉と稱して居る。彼の國では、保護、制限に法律で取締つて居る。一般の器物、裝飾などにも往往玉を用ゐて居る。中國にある玉はやはり彼地から來るものだ』とある。王逸の玉論の玉の色の說明には『赤きものは雞冠の如く、黄なるものは蒸栗の如く、白きものは截つた肪の如く、黑きものは純漆の如く、これを玉符といふ』とあつて、獨り青玉に關しては何等の說明もないが、現在では玉は青白なるものが普通であつて、黑いものは時時見ることもあるが、黄赤のものは絕えてない。禮の六器に用ゐた玉といふやうなものでも、實際はやはり眞正なもののみではなかつたのだ。現に(一三)儀州から蒸栗のやうな色の

河畔ノ一都邑ナリ。
(一一)疎勒モ亦漢時代西域ノ一古國、今ノ新疆省客什噶爾、英吉沙爾ノ地域ナリ。
(一二)崑崙トハ秦漢以前ヨリ黄河水源以西ノ山岳高原地ヲ指ス極メテ漠然タル稱呼ナリ。
(一三)宋ノ儀州ハ今ノ

一種の石を産し、その土地のものは栗玉と呼んで居るが、或はこれも黄玉の類であらうとのことである。ただ潤澤がやや劣り、またその聲が淸澄でない點が所謂眞玉に及ばないところである。しかし服食にはただ純白のものを貴ぶので、他の色のものは一向に用ゐない。承曰く、儀州の栗玉といふは、黄石の光の瑩なものといふだけで玉ではない。玉は堅くして理があり、火や刃物では傷かないものだが、この石は小刀を當てても彫刻し得るのである、(一四)階州の白石と同質のものだ、ただ色に相違があるに過ぎない。

時珍曰く、按ずるに太平御覽に『(一五)交州に白玉を産し、(一六)夫餘に赤玉を産し、(一七)挹婁に靑玉を産し、(一八)大秦に菜玉を産し、西蜀に黑玉を産し、藍田に美玉を産する。その色が藍のやうだから藍田といふのである』とある。淮南子には『(一九)鍾山の玉は三日三夜爐炭で炊いても色澤が變じない。天地の精を得たものだ』とある。以上の諸說に依れば玉の産地は相當に多いのだが、現に一向産出しないのは、恐らく産地の者が惜み妨げて出さぬためかも知れないのである。それ故に結局于闐の玉だけが貴ばれることになつたのであらう。古禮に、玄珪、蒼璧、黃琮、赤璋、白琥、

甘肅省平涼府華亭縣。即チ唐ノ義州ナリ。宋ノ太平興國二年太宗ノ諱ヲ避ケテ儀州トス。

(一四)階州ハ今ノ甘肅省武都縣ノ地。

(一五)交州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(一六)夫餘ハ漢ヨリ晉ニ至ル間ノ國名、今ノ奉天省昌圖、洮南以北、及ビ蒙古科爾沁諸旗地ヲ包ヌ。

(一七)挹婁ハ古代ノ國名、今ノ奉天省治ノ東北、吉林、黑龍江以東今ノウスリーノ地ニ亘ル。今ノ奉天省鐵嶺ノ南六十支里

ニ提婁ノ故城アリ。
(一八)古羅馬帝國ヲ呼ンデ大秦國ト稱ス。
(一九)鍾山ハ淮南子註ニ崑崙ナリトアリ。

玄璜を以て天地四時に象つたのは、ただ色澤を象徴として配當し、嚴しい稱號を作つただけのものである。また禮記に『石に玉を蘊むときは氣が白虹の如く、精神が山川に見れる』とあり、博物志に『山に穀あるところ、下に玉有り』とあり、尸子には『水の流が圓く折れるところには珠があり、角立つて折れるところには玉がある』とあり、玉鏡圖には『二月に山中の草木が光を生じて下垂するところには玉がある。玉の精は美女の如きものだ』とあり、玉書には『玉の山にあるものには黒き文があり、川にあるものには蒼き文がある。玉の生ずる山は木に潤ひがあり、玉の出る川は流が芳しく、玉が含まれて璞に在ればその文その光が外に露れる』とある。これ等の諸説に依つて觀れば、玉には山に產するものと水に產するものとの二種があるわけで、中國の玉は多く山に在るもの、于闐の玉は河に在るものだ。石で玉に似たものは、珷玞、琨珉、璁瓔などいふ。北方に鑵子玉といふ雪白なものがあるが、その物には空氣の泡があるところから見れば藥で燒いて作つたものだ。見誤つてはならぬ。もつともその物にはいづれも玉のやうな溫潤はない。小說類には、火玉は色赤くして鼎で物を烹るといひ、暖玉はそれで寒さを凌ぎ、寒玉は暑さを避ける。

香玉には香氣があり、軟玉は質が柔く、觀日玉は洞に日中の宮殿が見える。これは皆希世の寶だなどといふことが記載してある。宗奭曰く、燕玉は（二〇）燕北から出る。形質は柔で脆く、油のやうだ。繪具に和するもので、藥用に入れるものではない。

玉屑（別錄）［修治］弘景曰く、玉屑は玉を屑にしたもので、別に一箇の物があるのではない。仙經の瑴玉を服する法は、米粒ほどに擣き碎き、苦酒などで泥のやうに溶して用うるのである。また合せて漿にして用うるもある。凡そ玉を服するには、既成の器物や塚中の玉璞を用ゐてはならぬ。恭曰く、玉を服するには、溶して水にして用うるが最も佳いのであつて、麻豆ほどの屑にして服するわけは、その精が臟腑を潤して滓穢のものを悉く排出し、屑が完きままで出る點を利用するのである。粉にして服しては（二一）淋癃することがあるので、麻豆ほどの屑にするところに特に深い意義があるのだ。水に溶す法は淮南子の三十六水法中にある。

［氣味］【甘し、平にして毒なし】珣曰く、鹹し、寒にして毒なし。時珍曰く、鹿角を惡み、丹砂を養ふ。［主治］【胃中の熱、喘息煩滿を除く。渴を止めるには、麻豆ほどの屑にして服す。久しく服すれば身を輕くし、天年を延べる】（別錄）【心肺

（二〇）燕北トハ今ノ直隸省北部、及ビソノ以西滿州地方ヲ指ス。

（二一）淋癃ハ小便ガツマルコト。

を潤し、聲喉を助け、毛髮を滋くする』（大明）『五臟を滋養し、煩躁を止める。金、銀、麥門冬等と共に煎じて服するがよし、有益である』（李珣）

附方　新三。【小兒の驚啼】白玉二錢半、寒水石半兩を末にし、水で調へて心下に塗る。（聖惠方）【痃癖鬼氣】往來疼痛、及び心下が苦く忍び難きには、大人、小兒に拘らず、白玉、赤玉等分を末にし、糊で梧子大の丸にし、三十丸づつ薑湯で服す。（聖惠方）【顏面身體の瘢痕】眞玉で日毎に磨れば久しうして自ら滅する。（聖濟錄）

玉泉（本經）

釋名　**玉札**（本經）**玉漿**（開寶）**瓊漿**　普曰く、玉泉、一名玉屑といふ。弘景曰く、これは玉の精華なるものの意味である。形質、色澤が明徹なもので、溶して水にすることも出來るところから玉泉と名ける。今一般人には正確に辨別する智識がないので一概に玉といつて居る。志曰く、按ずるに、別本の注に『玉泉は玉の泉液であつて、仙室玉池中のものが上等である。故に一名を玉液といふ』とあり、現に仙經にある三十六水法中の、玉を化して玉漿と爲すといふもの、それが玉泉である。これを服すれば天年を長くし、老衰せぬといふ。けれども自然の泉液に比すれば功力が劣るものである。

宗奭曰く、本經に『玉泉は藍田の山谷に生ずる。採取に一定の時期はない』とあるが、今では藍田に玉はない。泉水に就いては古も今も採收するといふ說もない。陶氏は玉を水にするから玉泉と名けるといつて居るが、それならば玉水といひさうなもので玉泉といふべきわけはないであらう。泉といふ文字はそこから方方へ流れて行くものの意味なのである。この泉の字に就いて精しく考察して見るに、これは漿の字の誤だ。本經あつて以來、長い年代を經た間に何時しか生じた文字の脫誤であつて、道藏中の經に金飯、玉漿の文があり、唐の李商隱の詩に『瑤漿未だ飲まざるに結して水となる』の句があるのだから、これは玉を採つて漿となすものに斷じて疑ない。別本の註は採用されぬ。若し別本註の言ふ通りならば、何時の世如何なる處にも手に入れやうのないもので、ただ名稱だけの存在といふことになるであらう。時珍曰く、玉泉を玉漿とすべしとの說は甚だ至當である。別本の註に記述したものは玉髓のことであつて、それは別錄に立派に一項目を設けてある。論爭諸家の注意が足らなかつたのだ。

修治　青霞子曰く、玉漿の製法は、玉屑一升に對し地楡草一升、稻米一升を

（三）氣癃ハ氣淋ニ同ジ。尿意頻數而小便不通兼有痛者ヲ云フ。

白礬二升と銅器に入れて煮て、米の熟したとき汁を絞れば玉屑は溶けて水になる。それを藥として入れたものが所謂神仙玉漿である。藏器曰く、玉を朱草汁に投ずれば化して醴となる。朱草は一種の靈的な草である。方術家では、蟾蜍膏で玉を泥のやうに軟にし、それを苦酒で溶せば水になるといふ。

〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】普曰く、神農、岐伯、雷公は甘しといふ。李當之曰く、平なり。款冬花、青竹を畏る。〔主治〕【五臟のあらゆる病。筋を柔にし、骨を強くし、魂魄を安んじ、肌肉を長じ、氣を益し、血脈を利す。久しく服すれば寒暑に耐へ、饑渇せず、老衰せず、神仙となる。死に臨んで五斤を服すれば死後三年の間色が變らない】(本經)【婦人帶下の十二病を療じ、(三)氣癃を除き、耳目を明にする。久しく服すれば身を輕くし、天年を延べる】(別錄)【血塊を治す】(大明)

〔發明〕愼微曰く、天寶遺事に、楊貴妃は玉を含んでその唾液を嚥み、それで肺の渇を解したといふことがある。王莽は孔休に、『君の顏には瘢があるが、美玉は瘢を滅するさうだから』といつて玉を贈つたといふ話もある。後魏の李預は玉を食ふ方法を習得してから、藍田へ採集に行つて環や璧や種種の器のやうな形のもの大

（二二）長安ハ水部溫湯ノ註ヲ見ヨ。

小百餘箇を掘り出し、それを搗き屑にして日毎に食つた。年を經て確に效驗があつたらしい。ところが酒が好きなために志を損して病となり、遂に危篤に及んだとき、妻子に向ひ、『玉を服すには、山林に籠つて世間と交らず、飲食嗜好の欲を棄てねばならぬものであつたのだ。然るに自分は酒色の欲を絕たずして自ら死を招いたわけである。これは決して玉の過ではない。しかしこの屍には必ず通常人と異なるところがある筈だから、急いで葬つてはならない。そして玉を食つた效力を後世の者に知らせよ』と言ひ遺した。折しも七月の中旬で（二二）長安の地は甚しい暑熱であつたにも拘らず、屍體を四日間臨終のままにして置いたが、色も變ぜず、口に穢臭がなかつたといふ。

弘景曰く、張華は『玉を服するには藍田の穀玉の白色なるものを用ゐる。平常これを服すれば神仙となる。もし人が死に臨んで玉五斤を服すれば、死後三年を經てもその色が變らない。古來墓を發いて屍體の生けるが如きものには、その身腹の內外に必ず多くの金、玉の添へられてないものはない』といつてある。漢の時代の制度として、王公を葬るには屍體に珠を着け、玉の匣を添へることになつてゐた。そ

(二三)介部貝子ノ集解ニ玄アリ、玄蟲ハ之ヲ云フカ。

れは永く朽ちないための方法である。玉を錬服する法としては、水屑を適度に用うるがよい。その性平なるものではあるが、玉を服すれば多くは發熱し、寒食散を服した時のやうになるものである。金、玉なるものは元來天地の重寶なのだから、他の石類と同一に扱ふべきものではないのであつて、用うる場合の節制を深く心得たもの以外には輕輕に用ゐてはならない。

○志曰く、抱朴子に『金を服するものは齢長きこと金の如く、玉を服する者は齢長きこと玉の如くであるが、その效果の發現は遲いもので、百斤二百斤を服して始めて判るものだ。玉は烏米酒、及び地楡酒で溶せば水になる。また葱漿で溶せば飴になる。また粉餠にし、丸にして用うるもよし、燒いて粉にして服するもよし。一年以上水に入れても質が沾はず、火に入れても灼けず、刄物を當てても傷かず、あらゆる毒物もその性を死さない。服するには既成の器のものを用ゐてはならぬ、それは却つて人の健康を傷けて、益するところがないものだから、最も純なる璞玉を用ゐねばならぬ。赤松子は(二三)玄蟲の血で玉を漬けて水にしたものを服したので、烟霞に乘じて空中を上下するやうになつたといふ。玉屑と水とを服すれば倶に人をし

て不死ならしめるが金には及ばない。それは寒食散を服した場合のやうに數數發熱させる缺點があるからだ。若し玉屑を服する場合には十日目に一回雄黃、丹砂各一刀圭を服し、髮を散じて冷水で洗ひ、迎ひ風に向つて歩行するがよい。さうすれば熱は發らぬものだ』とある。董君異が嘗て玉醴を盲人に服ませたところ、十日にして自ら癒えたといふ。

◯◯時珍曰く、漢の武帝が金莖露を玉屑に和して服し、これで長生すると信じてゐたといふは此の物のことである。しかし玉なるものも確實に生者を不死ならしむる可能はないのであつて、ただ死者の屍を朽ちなくするだけのものである。然らば屍を永く地中に保存して盜賊に狙はれ、却て死屍を發掘されて凌辱の厄に遭はうより、寧ろ速に朽ちて虛無に歸した方が遙に立派なことではあるまいか。

白玉髓（別錄有名未用）

和玉　白玉髓・しろめなう（俗稱）佛頭石
英譯名　White chalcedony

校正　拾遺の玉膏を併せ入る。

釋名　玉脂（綱目）玉膏（拾遺）玉液

集解

別錄に曰く、藍田の玉石の間に生ずる。時珍曰く、これは即ち玉膏であつて、別本に玉泉とあるのはこれをいふのである。山海經に『(一)密山の上には丹木が多い。丹水はここから出て西に流れて(二)稷澤に注ぐ。その中に白玉が多く、ここに玉膏があり、その水源は沸沸湯湯たるものである。黄帝はこれを食しこれを饗した。ここに玄玉が生ずる。それは玉膏から生ずるものである。源はそこから丹水に灌ぐのだ。黄帝はそこで密山の玉を取り(三)禜して之を鍾山の陽に投じた。瑾瑜の玉を良しとする。それは堅栗精密で、澤にして五色の光があり、發作して柔剛を和す。天地、鬼神は是を食ひ是を饗け、君子は之を服して以て不祥を禦ぐ』とある。謹んで按ずるに、密山といふ山も于闐國の境域に近いところである。これを食すとあるは服食のこと、これを饗すとあるは祭祀のこと、これを服すとあるは佩びることである。玉膏とは玉髓のことだ。河圖玉版には『(四)少室の山に白玉膏あり、之を服すれば仙となる』とあり、十州記には『(五)瀛洲に玉膏の酒の如きものがあり、名けて玉醴といふ。數升を飲めば醉ひ、人をして長生せしめる』とあり、抱朴子には『玉を生ずる山には玉膏があつて流出する。鮮明にして水精の如く、(六)無心草末で之を

(一)山海經ニハ密チ峚ニ作ル音密(ミツ)

(二)稷澤、汪紱之山海經釋ニ『案此稷澤蓋禹貢雍州瀦野也。地志名休屠澤。在今涼州鎭蕃』古之姑臧也』トアリ。峚山、稷澤、鍾山イヅレモ今ノ甘州、涼州ノ間ノ地ナラントイフ。

(三)禜ハ祭事チ行フナリ。

(四)少室山ハ河南省登封縣ノ北、太室山ノ西ニアリ。

(五)瀛洲ハ古傳說ノ東海中ノ仙島ナリ。

(六)薇銜又鼠[illegible]草、

俱ニ無心草ノ名アリ。

(一) 裴郷縣、前漢地

和すれば須臾にして水となる。これを一升服すれば長生する」とあつて、いづれもこの玉髓を指していふのである。藏器曰く、現に玉石の間の水を飲めば長生し、身體が潤澤になる。

【氣味】「甘し、平にして毒なし」【主治】「婦人の子無きものに效あり。老衰せず、天年を延べる」(別錄)

靑玉（別錄有名未用）

和名　靑玉髓・あなめなう（俗稱）
英譯名　Blue chalcedony

【釋名】**穀玉**　時珍曰く、穀は一に瑴と書き、又珏と書く。谷（コク）角（カク）の二音である。二箇の玉の相合するを瑴といふ、この玉は常に合して生ずるからである。

【集解】別錄に曰く、藍田に生ずる。弘景曰く、張華の言に「玉漿を合するには、穀玉の正しい縹白色のもの、石の付いてないものを用ゐる。これは大なるものは升ほどあり、小なるものは雞子ほどあつて、穴中から取るものだ。今の器物に作る玉ではない。(一)裴郷縣の舊い穴中からこれが出るので、(二)黄初年間に征南將軍夏

侯上に詔してこれを採掘させたことがある』といつて居る。時珍曰く、按ずるに格古論に、『古は玉は青玉を上等としたもので、その色は淡青色に黄色を帶びたものである。綠玉は深綠色のものが佳く、淡きものは之に次ぐ。菜玉といふのは青でも綠でもなく菜のやうな色で、これは玉の最下等のものだ』とある。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【婦人の子無きものに效がある。身を輕くし、老衰せず、天年を長くする】(別錄)

【附錄】**璧玉** 別錄に曰く、味甘し、毒なし。目を明にし、氣を益すの主效があり、人をして精多く、子を生ませる。時珍曰く、璧は瑞玉の圜であつて、この玉は璧に作り得るものだから璧玉といふのである。璧は外圓くして天に象り、內が方にして地に象るものである。爾雅に『璧の大さ六寸のものを瑄といふ。肉の(三)好に倍するものを璧といふ。好の肉に倍するものを瑗といふ』とある。

玉英 別錄に曰く、味甘し。風瘙で皮膚の痒きに主效がある。山の穴の中に生ずるもので、明白にして鏡と爲し得る。一名石鏡といふ。十二月に採收する。

合玉石 別錄に曰く、味甘くして毒なし。氣を益し、消渇を療じ、身を輕くし、

理志ニ魏郡卽裴縣アリ。廣韻ニ裴ハ符非ノ切音肥トアリ。今ノ直隷省肥郷縣ハ卽チ漢ノ卽裴縣ノ地ナレバ、此ニイフ裴郷縣ハコノ地ヲ指スナラン。

(二)魏ノ明帝ノ年號。

(三)璧ノ孔ヲ好トイフ。

(四)穀食を辟くるに主效がある。(五)常山の中の丘に生ずる。(六)旋肪の如きものである。時珍曰く、これは玉を礳る砂のことである。玉はこの石で礳り磨いて光が出る。

青琅玕（本經下品）

和名　あをらうかん（青色の蛋白石又は碧石）
英譯名　Opal or Jasper

校正　拾遺の石闌干を併せ入る。

釋名　石闌干（拾遺）石珠（一）（別錄）青珠　時珍曰く、琅玕とはその聲に象つた名稱である。礳つて珠にも作れるから珠の字の名稱を付けたのだ。

集解　別錄に曰く、石闌干は(二)蜀郡の平澤に生ずる。採收に一定の時期はない。弘景曰く、これは蜀都賦に青珠、黃環と唱はれたその青珠である。琅玕といふは、崑崙山上の樹の名にもあり、又九眞經の中の大丹の名にもある。恭曰く、琅玕には數種あつて、色の青きものが藥用として勝れて居る。これは琉璃の類の火齊寶といふものだ。今は(三)嶲州以西の烏白蠻の地、及び于闐國に產する。藏器曰く、石闌干は大海の底に生ずるもので、高さ一尺餘、地上の樹のやうに根や莖があり、莖の上には孔があつて物を黏けたやうである。漁夫が網でこれを取るのだが、初め水

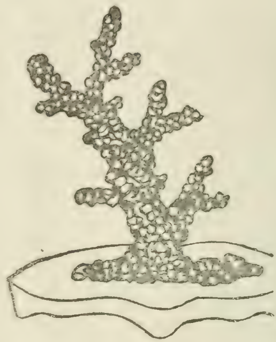
(四)穀食ハ米麥其他ノ穀物。
(五)常山ハ北岳恒山凝水石ノ註ヲ見ヨ。
(六)旋肪ハブタノアブラ。
(一)別錄、當ニ本經ニ作ルベシ。青珠ノ下別錄ノ字ヲ入ルベシ。
(二)蜀郡ハ漢ニ置ク。今ノ四川省ノ一部、成都ヨリ西北大渡河ノ兩岸ニ亘ル一帶ヲ包ム。
(三)唐ノ嶲州ハ漢ノ越嶲郡ノ地、今ノ四川省建昌道ニ屬ス越嶲縣ノ南西西昌縣即チ寧遠ノ地ナリ。烏

円蠻ハ雲南、西藏、緬甸地方ヲ指ス。

（一）雍州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

から出た當時の色は微紅で後に漸次に青くなる。

○頌曰く、現に秘書中に異魚圖なる書籍があるが、それには琅玕は青色にして海中に生ずることを記載し『海人が網を以て海底から取るもので、初め水から出たときは紅色だが、久しくして青黒となる。枝は珊瑚に似て上に孔竅があり、蟲蛀のやうだ。之を撃てば金石の聲がある』とある。これは珊瑚と相類するもので、この說は別錄の蜀郡の平澤に生ずるといふのとも、蘇恭の云ふ所とも相違して居る。世人はこれに就て的確な判斷を下し得ぬやうであるが、謹んで按ずるに、尙書に『（一）雍州、厥の貢は球琳、琅玕』とあり、爾雅には、「西北の美なるものに、崑崙の墟の璆琳、琅玕とあり」とあり、孔安國と郭璞の註には、いづれも、これを石の珠に似たるものとしてある。而して山海經には「崑崙の山に現玕があるといつてある。若しこれがそれだとすれば、琅玕は石の美なるもので、明



〔青琅玕〕

瑩なること珠の色の如く、簇生し茂り立つ形狀のもののことであらう。古人は一般に石の美なるものを珠と稱することが多い。廣雅に琉璃、珊瑚を皆珠といつてある如きがそれである。以上は皆西北山中に產する方の說であるが、今また異魚圖には海底から取るといつてある。蓋し珍貴なものだ、或は山にも海にも倶に產出するものと見える。當今は醫家にも得難いものなので用うることが稀である。宗奭曰く、書經に『雍州、厥の貢は球琳、琅玕』とあり、西域記には『天竺國に正に此の物を出す』とある。蘇恭はこれを琉璃の類だといふが、琉璃ならば火で製するものだ。琅玕は火で製するものではない。いかで類を同うするわけがあらうか。

時珍曰く、按ずるに說文には『琅玕は石の玉に似たるもの』とあり、孔安國は『石の珠に似たもの』といひ、總龜には『南海石厓の間に生じ、狀は筍の如く質は玉に似て居る』とあり、玉冊には『南海の礁石の內に生じ、自然に陰陽の氣に感じて成るもので、珠に似て赤い』とあり、列子には『蓬萊の山には珠玕の樹が叢生する』とある。これ等諸說に據れば、琅玕は西北の山中と海山の厓間に生ずることになるわけだが、海底に生じ網で取るといふそのものは珊瑚なのであつて琅玕ではない。

山に在るは琅玕、水に在るは珊瑚なのだ。珊瑚にも碧色のものがある。現に(五)回回の地方から出る一種の青珠は碧靛に似て居るが、恐らくは琅玕で作つたものらしい。山海經に『(六)明山の北に珠樹がある』とあり、淮南子に『(七)曾城は九重にして珠樹その西に在る』とある。その珠樹とは琅玕のことだ。その他は珊瑚の條下に記述する。

〔氣味〕『辛し、平にして毒なし』。之才曰く、錫毒を殺す。水銀と相得れば良好である。雞骨を畏る。〔主治〕『身痒、火瘡、癰瘍、疥瘙、死肌』(本經)『白禿が皮膚中に浸淫せるもの。煮錬して服すれば陰氣を起す。化して丹となし得る』(別錄)『(八)手足の逆臚を療する』(弘景)『石闌干は、石淋、破血、産後の惡血に主效がある。磨つて服し、或は煮て服す。また火で燒いて酒中に投じて服す』(藏器)

珊瑚(唐本草)

和名 さんご・珊瑚
學名 Coral

〔釋名〕鉢擺娑福羅(梵書)

〔集解〕恭曰く、珊瑚は南海に產し、また波斯國、及び(一)獅子國から來る。頌

(五)回回ハ古代ノ國名。唐書ノ所謂貨勒自彌(クワラツム)國ニシテ宋ノ時突厥此ニ國ヲ建テ、元ノ太祖ニ滅サル。今ノ波斯ノ地ナリ。

(六)明山、未考。

(七)曾城、水經注ニ『崑崙山有三級。上曰曾城。是爲太帝之居』トアリ。

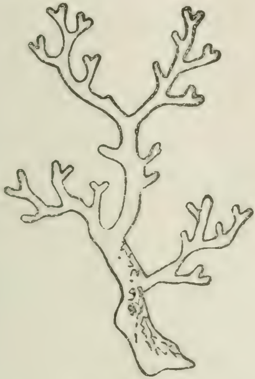
(八)手足逆臚ハ手足ノ皮膚皆腫ルルヲ云フ。

(一)獅子國ハ今ノ錫

嵩島ナイフ。

(二)漢ニ南越ト稱セルハ今ノ廣東、廣西、交州ヲ指ス。

曰く、今は廣州にもある。海底に生ずるものだといふ。枝の分れた形狀をなし、紅玉のやうに明潤で、中に多くは孔があるが、また孔の無いものもある。枝の多いものほど得難いのである。採取に一定の時期はない。謹んで按ずるに、海中經に『珊瑚を取るには、先づ鐵網を作つて水底に沈めて置くと珊瑚はその網の目を貫いて生え、一歳にして高さ二三尺になり、枝はあるのだが葉は生えない。それを網を絞つて取り出すのだが、その際皆折れ摧けて網に掛つて來るために形の完全なものは得難いものだ』とある。今の採取方法も果して同樣なるや否やは判らない。漢の宮中の積翠池には高さ一丈二三尺の珊瑚があつて、三本の大枝に四百六十條の枝があつたといふ。これは(二)南越王趙佗から獻上したものだといふことで、夜間には特に美しい風情があつたといふ。また晉の石崇の家には高さ六七尺の珊瑚があつたといふことだが、今では



珊瑚

一向さやうな高く大なるもののあることを聞かない。

宗奭曰く、珊瑚には紅油色で細かい縦の文の愛すべきものがあり、鉛丹のやうな色で縦の文のないものがある。縦の文のないものは下等品で、薬に入れるには紅油色のものを用ゐる。波斯國の海中には珊瑚洲があつて、海人は大船に乗つてその洲に近づき、鐵網を水底に墮してこれを取るさうである、珊瑚が初め磐石の上に生じたときは白色で菌のやうなものだが、一歳で黄になり、二歳で赤に變じ、枝幹が交錯して高さ三四尺になる。海人達は水中に潜つて鐵でその根を掘り、網に繋けて船の上へ絞り上げて取るのだが、その間に時機を失すれば腐蠹して了ふさうである。

時珍曰く、珊瑚は海底に生じ、五七株づつの林になる。これを珊瑚林といふ。水中に在つては直生して軟いものだが、空氣や日光に當るので曲つて硬くなる。色の紅に變ずるものが上等品だ。漢の趙佗が火樹と稱へたのはこれである。黒色のものもあるが佳くない。碧色のものはまた良い。古代には碧色のものを青琅玕だといつたもので、いづれも珠に作れる。許愼の說文には『珊瑚は色赤く、或は海に生じ、或は山に生ず』とあるが、この說に據れば海に生ずるものは珊瑚、山に生ずるもの

は琅玕といふことの根據となる。琅玕の條參照。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【目中の瞖を去り、宿血を消す。末にして鼻に吹けば鼻衄を止める】（唐本）【目を明にし、心を鎮め、驚癇を止める】（大明）【眼に點ければ飛絲を去る】（時珍）

【發明】珣曰く、珊瑚の主治は金と相似て居る。宗奭曰く、今一般にこれで眼に藥を點ける筯を作つて目瞖を治するに用ゐて居る。藏器曰く、珊瑚は刺せば血のやうな汁が流れる。これに金を入れて丸にしたものを金漿といふ。玉を入れたものを玉髓といふ。久しく服すれば長生する。

【附方】舊一。【小兒の(一)麩瞖】まだ堅からぬには妄に藥を用ゐてはならぬ。珊瑚を粉のやうに研り、日毎に少しづつ點ければ三日で癒える。（錢相公篋中方）

馬腦（宋嘉祐）

和名　めなう・瑪瑙
學名　Agato

【釋名】瑪瑙　文石　摩羅迦隸（佛書）藏器曰く、赤爛紅色で馬の腦に似て居るところから名けたもので、また馬腦珠ともいふ。外國人がこれを馬の口から吐出

（一）麩瞖ハ麩瘡ノ目ニ入ルモノ、麩瘡ハ麻疹。

（一）金陵本ニモ入日本國トアレドモ、大觀本草ニ「出日本國」トアルニ從フ。

すものだなどといふは妄言だ。時珍曰く、按ずるに、增韻に『玉の屬である。文理が交錯して馬の腦に似たところがあるので名けたものだ』とある。拾遺記に『鬼の血の化したものだ』とあるは更に謬妄だ。

〔集解〕藏器曰く、馬瑙は西國の玉石の間に生ずるもので、これも美石の類の重寶である。中國へ來るものは皆器に作つたものだ。また(一)日本國からも出る。馬腦は木で摺つても熱くならぬものが上等で、熱するものは精良なものでない。宗奭曰く、馬腦は玉でも石でもない特殊の一類である。紅、白、黑の三種あつて、絲を纏ふたやうな文のあるものもある。西方諸國の人民は小なるものをば裝飾や細工物にし、大なるものは碾いて器物に作る。



〔馬瑙〕

時珍曰く、馬腦は西南の諸國に產出する。自然灰を用ふれば軟になつて刻めるといふことだ。曹昭の格古論に『多くは北地、南番、西番に產出するもので、石でも玉

でもない。堅く且つ脆く、刀で剳つても切れぬもので、その中に人物、鳥獸の形のあるものが最も貴ばれる』とあり、顧薦の負暄錄には『馬腦は品類が甚だ多く、産地に南と北とあり、大なるものは斗ほどのものもある。その質は堅硬なもので、碾いて種種の物を作るには手のかかるものである。南馬腦は(二)大食國等に産し、色は正紅で瑕なく、杯斝に作り得るものである。西北のものは色が青黑い。(三)寧夏、(四)瓜、(五)沙、羌地の砂磧中で手に入るものに就中奇なものがある。柏枝馬腦といふのは花文が柏枝のやうだ。夾胎馬腦といふは正視すれば瑩白だが、側面から視れば凝血の如く、一物で二色を有つて居る。截子馬腦は黑白相交り、合子馬腦は漆黑の中に一白線が掣のやうに通つて居る。錦紅馬腦はその色が錦の如く、纏絲馬腦は紅白の絲を亂したやうに見える。これ等はいづれも價の貴いものだ。漿水馬腦は淡水の花文があり、醬斑馬腦は紫江の花文があり、(六)曲蟮馬腦は淡紅色の花文がある。いづれも價の低いものだ。又、紫雲馬腦は(七)和州に産し、土馬腦は山東(八)沂州に産し、これにもやはり紅色の雲頭、纏絲、胡桃花などのものがある。又竹葉馬腦は(九)淮右に産し、花文は竹葉のやうだ。いづれも卓面や屏風を作るによい。(一〇)金陵、雨花臺の

(二)大食國ハ水部甘露蜜ノ註ヲ見ヨ。
(三)寧夏ハ明ノ九邊ノ一、今ノ甘肅省寧夏縣ノ地。
(四)瓜ハ瓜州、今ノ甘肅省安西縣ノ南ニ瓜州城アリ。
(五)沙ハ沙州、今ノ甘肅省敦煌縣。
(六)曲蟮ハ蚯蚓ノ別名。
(七)和州ハ今ノ安徽省ノ和縣ノ地。
(八)沂州ハ今ノ山東省蘭山縣ノ地。
(九)淮右ハ淮河右岸

ノ地方ヲ指ス。

(一〇)金陵ハ今ノ南京。雨花臺ハ金陵城南ニ在ル岡阜ノ最高處ニシテ城市ヲ俯瞰スル扼要ノ地ナリ。昔梁ノ武帝ノ時、アル高僧此處ニ於テ佛經ヲ講ジタルニ、天感ジテ花ヲ雨シタリト傳フ、因ツテ名ヲ得タリ。

(一)回鶻ハ古ノ國名。唐ノ時内外蒙古ヲ奄有シ、元ノ時畏吾兒トイフ。卽チ音寫ノ訛ナリ。明ノ時ハ今ノ新疆省土魯番ヲ中心トスル一帶ノ地ヲ有ス。

(二)騾山、未考。

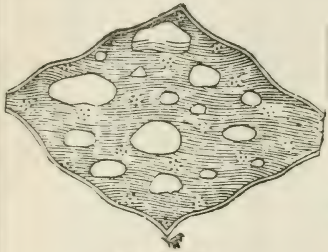
小馬腦は玩弄物にするだけだ。馬腦の善惡を試みる法としては木を摺つて見る。熱くならぬものならば純眞なものだ。

〔氣味〕【辛し、寒にして毒なし】〔主治〕【惡を辟ける。目の赤爛を熨す】(藏器)【目に生じた障瞖には、末にして日毎に點ける】(時珍)

寶石(綱目)

和名　玉髓數種の總稱

英譯名　Precious stones, (Several kinds of chalcedony)



〔寶石〕

〔集解〕時珍曰く、寶石は西番(一)回鶻の地方の諸坑井中から產出し、雲南、遼東にもある。紅、綠、碧、紫等の數色があつて、紅なるものを刺子と名け、碧なるものを靛子と名け、翠なるものを馬價珠と名け、黃なるものを木難珠と名け、紫のものを蠟子と名ける。また鴉鶻石、猫睛石、石榴子、紅扁豆など色に因つて名けたものもあり、いづれも同一種類である。山海經に『(二)騾山に玉が多い。淒水はそこに源を發して西の方海中に注ぐ。采石が多

い』とある。その柔石とは卽ち寶石のことだ。碧色のものを唐代に瑟瑟といひ、紅色のものを宋代に靺鞨といつたが、今は一樣に寶石と呼び、首飾や器物に裝塡する。大なるは指頭ほどあり、小なるは豆粒ほどで、いづれも碾つて珠の形に作る。張勃の吳錄に(三)『越雟、雲南の河中に碧珠が出る。祭を行つてから之を取るのであつて、(四)縹碧、綠碧のものがある』とあり、これが卽ち碧色寶石である。

主治　【翳を去り目を明にするには點藥に入れて用ゐる。灰塵の目に入りたるには、珠で拭ひ拂へば取れる】(時珍)

玻瓈（拾遺）

和名　無色のガラス（硝子・玻璃）
英譯名　Ordinary glass, Colourless glass（自然產の蛋白石をもこめていふ如し）

釋名　**頗黎**（綱目）**水玉**（拾遺）時珍曰く、もとは頗黎と書いた。(一)頗黎とは國名である。その物が透き徹つて水の如く、堅きこと玉の如きところから水玉と名け、水精と名を同しくしてゐる。

集解　藏器曰く、玻瓈は西方の國の寶であつて、玉石の類だ。土中に生ずる。或は千年の古い水が化したものだなどいふが、さやうなことはない。時珍曰く、南

(三)越雟ハ漢、隋共ニ郡ヲ置ク。今ノ四川省西昌縣ニ故城アリ。

(四)縹ハ青白色。

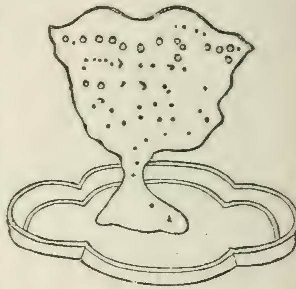
(一)頗黎國トハ古ノ國名、隋書南蠻傳ニ婆利國トアリ、卽チ今ノボルネオナリ。

(一)外丹家ノ外字金陵本列ニ作ル、其字讀ミガタシ。

(三)扶南國トハ今ノ暹羅、緬甸ノ地ヲ指ス。

(四)珂ハ馬勒ノ飾、馬勒ハクツワ、オモガヒ、ダヅナノ總稱。

番に產するもので、酒色、紫色、白色のものがあり、明に透き徹つて水精に似て居る。碾り開いて見て雨點のやうな花文のあるものが眞物である。(一)外丹家でも用ゐる。藥で燒いて製したものは空氣の泡があつて輕い。玄中記に『大秦國には五色の頗黎があつて、紅色のものが貴ばれる』とあり、梁四公子記に『(三)扶南人が賣りに來た碧頗黎鏡は、



〔玻瓈〕

廣さ一尺半、重さ四十斤。內外皎潔なもので、明い方へ向けて視るとその質のあることが判らぬ程に透き徹る』とある。蔡條は『帝室の御庫に玻黎母といふのがある。これは大食國から貢納したもので、狀態は鐵滓のやうだ。煆けばただ(四)珂子の形狀になる。紅、黃、白の數色があつた』といつてある。

【氣味】【辛し、寒にして毒なし】【主治】【驚悸心熱によく心を安んじ、目を明にし、赤眼を去る。熱腫を熨す】(藏器)【翳障を摩す】(大明)

水精（拾遺）

和名　すゐしやう・水品
英譯名　Rock-crystal

【釋名】水晶（綱目）水玉（綱目）石英　時珍曰く、明に透き徹る晶光が水の精英のやうだといふ㈠會意の名稱である。山海經には水玉といひ、廣雅には石英と謂つてある。

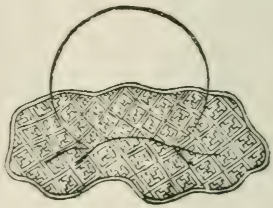
【集解】時珍曰く、水精もやはり頗黎の屬で、黑白の二色がある。水精の多いことでは㈡倭國が第一である。南水精は白く、北水精は黑く、㈢信州、㈣武昌の水精は濁つてゐる。性は堅く脆く、刀で刮つても切れぬ。色は泉のやうに透き徹り清明で瑩だ。水中に置いて取らうとすれば、何れが珠か見判得ぬものが佳いものである。古人の語に水が化したものだなどいふは謬妄だ。藥で燒いて作つたものには空氣の泡があり、硝子とも海水精ともいふ。抱朴子に『交、廣地方で假水精盌を作る』とあるがこれをいふのである。

【氣味】【辛し、寒にして毒なし】【主治】【目に熨して熱淚を除く】（藏器）【點眼藥にも入れる。穴に紐を通して呑み、推して諸種の物の咽に哽へたるを引く】（時

㈠會意ハ六書ノ一文字ヲ作ル主義ノ名ナレドモ、此處ニテハ名稱ノ意義ヲ解ク詞ニ用キタリ。
㈡倭國トハ日本ヲ指ス。
㈢信州ハ金ノ註ヲ見ヨ。
㈣武昌ハ明ノ武昌府、今ノ湖北省政府所在地。

珍）

附録



〔水　精〕

火珠　時珍曰く、說文には火齊珠といひ、漢書には玫瑰——玫瑰の音は枚回である——といふ。唐書に『東南海中の(五)羅刹國に火齊珠を產する。大なるは雞卵ほどあつて、狀態は水精に類し、圓白にして數尺を照す。日中艾の上へ載せて日光に當てれば火が點く』とある。この火を灸艾炷にして用ゐれば人を傷めない。今は(六)占城國にこれがあつて(七)朝霞大火珠と名ける。又、續漢書には『(八)哀牢夷に火精、琉璃を產す』とある。これで見れば火齊といふは即ち火精の訛であつて、正に水精と對にした名稱なのである。

碝石　音は耎である。時珍曰く、(九)雁門に產する石で、玉に次ぐものである。白色で冰のやうだ。また赤いものもある。山海經に『北山に碝石多し』とあり、禮に、『上、碝玫を佩ぶ』とあるがこれである。

(五)羅刹國火齊珠ノ說、新舊唐書ノ文ト少異アリ。本文ハ舊書ニ據レルモノノ如クナレドモ舊書、新書共ニ婆利國トナス。イヅレモ羅刹國ト稱セズ。共ニ火珠トアツテ火齊珠トハ稱セズ。

(六)占城國ハ今ノ安南ノ南部。

(七)朝霞ハ火珠ノ名ニ非ズ布ノ名ナリ。唐ノ貞觀年中林邑王頭黎ヶ馴象、鏐鎖、五色帶、朝霞布、火珠ヲ獻ジ、婆利、羅刹ニ國ノ使者ト共ニ來ルトイフ。林邑即チ占城國ナリ。

(八)哀牢夷ハ今ノ雲南省保山、永平二縣

琉璃（拾遺）

和名　色附のガラス（自然產の塊狀石英及び蛋白石をもこめていふ如し）
英譯名　Coloured glass

【釋名】火齊　時珍曰く、漢書には流離と書いてある。流離なる名稱の意味は、流光陸離たりといふのである。火齊といふは火珠と同一名稱だ。

【集解】藏器曰く、集韻に『琉璃は火齊珠なり』とあり、南州異物志に『琉璃の本質は石である。自然灰を用ゐて扱へば器を作ることも出來るが、若し自然灰を用ゐなければ刮り刻み得ない』とある。佛教經典の所謂七寶とは、琉璃、車渠、馬腦、玻瓈、眞珠のことである。

時珍曰く、按ずるに、魏略に『(一)大秦國には金、銀、琉璃を產し、赤、白、黃、黑、青、綠、縹、紺、紅、紫の十種ある』とある。これは自然產のもので、光彩の潤澤なること他の多くの玉に優るが、今世俗に用うるものは、いづれも石を熔したその汁に種種の藥を加へて作るものだから、質が充實せずして脆い。正しいものではない。格古論には『石琉璃は(二)高麗に產する。刀で刮つても切れない。色は白く、厚さ半寸ばかり、(三)燈明を牛角に點ずべきものだ』とある。異物志には『(四)南天竺

ノ地ナリ。哀牢山ニ因ツテ地方ニ名ク。(九)雁門ハ秦ニ郡ヲ置ク。今ノ山西省ノ舊代州、寧武ノ北部、及ビ朔平ノ南部、大同ノ東部、北部皆ソノ境ナリ。今ノ代縣ノ西北ニ雁門山アリテ關ヲ置ク、即チ雁門關ナリ。

(一)大秦國ハ玉ノ註ヲ見ヨ。

(二)高麗國ハ土部墨ノ註ヲ見ヨ。

(三)燈明ヲ牛角ニ點

の諸國に雲母のやうな狀態の火齊を產する。色は紫金の如く、層を爲して重るもので、一枚一枚に剝げて蟬の羽のやうに薄く、これを積めば紗縠のやうだと』ある、これに依れば琉璃は雲母の類の物である。按ずるに、この石は今世間で燈球に作るもので、甚だ明透で堅く、且つ耐久力のあるものである。蘇頌はこれも藥に入れるといふが、まだ用ゐられたことはないやうである。



〔琉璃〕

主治　【身熱して目赤きには、水に浸し冷して熨す】（藏器）

雲母（本經上品）

和名　うんも・雲母
學名　Mica

釋名　雲華　雲珠　雲英　雲液　雲砂（本經）磷石　時珍曰く、雲母は五色に依つて名稱を立てたものである。その詳細は次項に揭げる。按ずるに、荊南志に〔一〕華容の方臺山に雲母が出る。その地方の者は、雲の發生する處を見定めてその

ズ可シト云フ意解シガタシ。強ヒテ言ヘバ琉璃ニテ燈盞ヲ作リ、牛角ヲ横ニ釣リテ、其中央ニ燈盞ヲ置クトセバ、可ナラン。物理小識ニ「高麗國出琉璃石透明可作燈盞」トアリ、傍證トスベキガ如シ。

（四）異物志ノ所謂南天竺ハ漢然ト印度半島ノ南部地方ヲ指スモノノ如シ。

〔一〕華容ハ漢ノ縣名。

下を掘れば必ず多量に取れるといふ。長さ五六尺、屏風に作り得るものもある。ただ採掘するときには聲を立てることを忌む』とある。この說に據れば、この石は雲の發生する根だといふところから雲母なる名稱が生じたもので、雲母の根は陽起石である。抱朴子には『雲母を十年間服すれば、雲氣が常にその人の上を覆ふ。その母を服すればその子を得るは理の自然である』といつてある。

【集解】別錄に曰く、雲母は(二)太山の山谷、(三)齊山、(四)盧山、及び(五)琅琊の北定山の石間に生じ、二月に採る。雲華は五色が倶に備り、雲英の色は青が多く、雲珠の色は赤が多く、雲液の色は白が多く、雲砂の色は青黃に、磷石の色は正白である。

弘景曰く、按ずるに、仙經の說に據れば『雲母に八種あつて、日に向けて視て色が青白く黑い部分の多きものを雲母と名ける。色黃白にして青い部分の多きものを雲英と名ける。色青白くして赤い部分の多いものを雲珠と名ける。冰露の如く黃に見え白く見えるものを雲砂と名ける。黃白にしてキラキラするものを雲液と名ける。はつきりと純白で透き徹るものを磷石と名ける。この六種はいづれも服して好きものであるが、それぞれ時季と月とに依つて用うるものを異にする。また黯黯た

今ノ湖北省監利縣西北ノ地ナリ。今ノ湖南省洞庭湖西北岸ノ華容ハ宋ノ時ニ從セルモノナリ。

(二)太山ハ五嶽ノ一即チ泰山。山東省泰安縣ノ北ニ在リ。

(三)齊山ハ陽起石ノ蘇恭ノ註ニ『齊山在齊州西北。無陽起石。石乃在齊山西北六七里盧山出之』トアリ、唐、宋ノ齊州ハ漢ノ歷下ノ地即チ今ノ濟南府ノ地ナレドモ、元和志、寰宇記共ニ齊山ナル山名ナシ。蘇恭ノ說ノ如シトスレバ、今ノ濼河ノ西北岸ニ當時齊山ナル山アリタルモノノ如ク

ナレドモ、斉山、或ハ廬山ナル山ハ、宋蘇頌ノ時ニハ既ニ一土山ト呼バレルノミニテ斉山ノ名ナシ蓋シ一丘陵ニ過ギザリシナラン、且ツソノ土山モ宋朝ノ時早ク形ヲ失ハントシタル程ナレバ、現在ニ於テハ到底ソノ所在ヲ指摘スベカラズ。

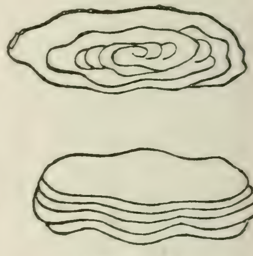
(四)廬山ハ水部温湯ノ註ヲ見ヨ。

(五)琅邪ハ郡名、秦ニ置ク。今ノ山東省舊兗、青、沂、萊四府東境、及ビ膠州ノ地ナリ。北定山未詳。

(六)當時ノ青州ハ今ノ山東省膠東道、及ビ濟南道東境ノ一帯ヲ指ス。

(七)兗州ハ宋ノ一州。州治ハ今ノ山東省滋陽縣ノ地ナリ。

る純黒でマダラに文のある鐵の如きものを雲膽と名け、色の雑黒で分厚なものを地涿と名ける。この二種はいづれも服してはならない』とある。雲母を錬るには法則があるからそれを愼重に守らねば腹に入つて大いに害あるものだ。今江東ではただ廬山のもののみが優良なものとして用ゐられる。(六)青州のも



〔雲母〕

のも好し。沙土に入れて之を養へば月に歳に生長するものだ。

○頌曰く、現今では(七)兗州、(八)雲夢山、及び(九)江州、(一〇)淳州、(一一)坑、越の地方にも雲母がある。土石の間に生ずるもので、薄き片が層を成し、析き離すことが出來る。明滑にして光の白いものを上等とする。その片には非常に大きく麗しく透き徹るものがあつて、それを今世間で燈籠に貼る。古の扇屏に作つた遺風に更に意匠を加へたものである。江南に産するものは多くは青黒で薬用にはならない。謹んで按ずるに、方書に據れば雲母を用うるにはいづれも白き澤のあるものを貴しとしてあるが、中山の衛叔卿の單服法には雲母の五色具るものを用ゐてある。葛洪の抱朴子には

『雲母に五種あつて普通人には見別け難い。しかしその物を取つて太陽の光線を透して見ると、その裡面には雜色の見えぬものである。その五色いづれも具つて就中青の多いものは雲英と名ける、春に服すべきものだ。五色いづれも具つて赤の多いものは雲珠と名ける、夏に服すべきものだ。五色いづれも具つて白の多いものは雲液と名ける、秋に服すべきものだ。五色いづれも具つて黒多きものは雲母と名ける、冬に服すべきものだ。ただ青、黄二色のものは雲砂と名ける、季夏に服すべきものだ。キラキラと純白なものは磷石と名ける、四時共に服し得るものだ。古方には上記五種の雲母を服する方が甚だ多い。しかしこれを藥に用うべく仕立てる法則や適否の度がむつかしく、到底文字では詳細に説明し盡せぬことだ。輕輕に服用してはならない』といつてある。

損之曰く、青、赤、黄、紫、白いづれも服用に堪へるが、白色で輕く薄く透き徹つたものがよい。黒いものは用ゐられぬ。これを服用すれば淋瀝して瘡を發する。

修治

斅曰く、凡そこれを使ふには、黄黒のもの、厚くて頑赤色のもの、婦人が手で把つたことのあるものはいづれも用ゐてはならぬ。瑩に光つて水の色のや

(八) 雲夢山、未攷。或ハ當時ノ滁州ノ雲母山、一名滁上山ヲイフカ。太平寰宇記ニ『雲母山一名滁上山。在州東南四十里。按神仙傳云。雲母彭祖服之。時人共傳採于此山。今或有道者採取不已』トアリ。滁州ハ今ノ安徽省鳳陽縣ノ地ナリ。

(九) 江州ハ宋以後今ノ江西省九江縣ノ地。

(一〇) 淳州未詳。

(一一) 杭ハ今ノ浙江省餘杭縣、越ハ今ノ浙江省紹興縣。錢塘江ヲ隔テ南北ニ在リ。

(二二)一鎰ハ二十四兩。

(二三)無顚草ハ葆銜ノ一名。

うなものを擇ぶがよいのである。それを一斤に對し、小地膽草、紫背天葵、生甘草、地黃汁各(二二)一鎰を用ゐ、乾いたものは細かに剉み、濕つたものは汁を取り、瓷堝中に入れて天池水三鎰を注ぎ、火にかけて七晝夜煮る。水火の加減に適度を失つてはならぬ。雲母が堝の底で自然に碧玉漿となつた時、更に一氣に天池水をその中に投じて攪き拌ぜ、浮び現れる蝸の涎のやうなものを取り去り、かくして三回天池水で淘り淨めてから、沈香一兩を搗いた末を天池水で煎じて沈香湯二升を作り——沈香末は三回に分けて用ゐる——それで再三その雲母漿を淘り、日光に晒して適度に用ゐるのである。

抱朴子曰く、五種雲母を服するの法は、或は桂、葱、水玉で溶して水にし、或は露を鐵器に置き、原水で熬つて水にし、或は消石と筒の中で合せたものを地中に埋めて水にし、或は蜜で溲ねて酪にし、或は秋露で百日間漬け、韋囊に入れて打敲いて粉にし、或は(二三)無顚草、樗血と合せて食ふ。一个年間繼續して服すればあらゆる病が無くなり、三个年間繼續すれば所謂若返りに成功し、五个年間繼續すれば鬼神を意のままに使ふやうになる。

(一四)三伏時ハ三日三夜。

(一五)金陵本露水ヲ流水ニ作ル。

(一六)子精ハ精液。

胡演曰く、錬粉の法は、八、九月の間に雲母を取つて礬石とむらなく拌ぜ、瓦鑵に入れて口を封じ、(一四)三伏時の間置いて自ら柔になつた時礬を取去り、次の日百草頭上の露水を取つて漬け、百日經つてから韋囊中で敲いて粉にするのである。

時珍曰く、道書に『鹽湯で雲母を煮れば粉にし得る』とあり、また『雲母一斤を鹽一斗で銅器中に漬けて一日蒸し、臼で搗いて粉にする』とあり、また『雲母一斤、白鹽一升を共に細かに搗いて二重の布袋に入れて挼み、沃ぎ洗つて悉く鹽味をなくし、高き處に懸けて風に吹かせれば自然に粉になる』とある。

氣味　【甘し、平にして毒なし】權曰く、小毒あり、徐長卿を惡み、羊血粉を忌む。之才曰く、澤瀉が使となる。鮀甲及び(一五)露水を畏れる。弘景曰く、之を錬るに礬を用ゐれば柔に爛れる。やはり相畏れるのだ。百草上の露を用うるが東流水に勝る。また五月の茅屋の溜水を用うることもある。獨孤滔曰く、汞を制し、丹砂を伏する。

主治　【身皮の死肌。中風寒熱で車、船の上に在るやうに覺ゆるもの。邪氣を除き、五臟を安んじ、(一六)子精を益し、目を明にする。久しく服すれば、身を輕くし、天年を延べる】(本經)【氣を下し、肌を堅くし、絕を續ぎ、中を補ふ。五

（一七）腸澼ハシブリバラ。

勞七傷、虚損少氣を療し、痢を止める。久しく服すれば、容貌を悦澤にして老衰せず、寒暑に耐へ、志高く神仙となる】（別錄）【下痢（一七）腸澼に主效があり、腎冷を補ふ】（甄權）

【發明】 保昇曰く、雲母は金に屬す、故に色は白くして肺を主る。宗奭曰く、古には服鍊の法もあつたが現今では服するものが至つて稀である。深く警戒し、迂濶には用ゐぬわけなのである。ただ雲母膏に合して一切の癰、毒瘡等を治するには用ゐて居る。その方は和劑局方に載せてある。愼微曰く、明皇雜錄に、『開元年間の紀朋は、人の顏色や談笑擧動を觀て病の深淺を知り、脈さへも診るに及ばぬといふ名醫であつた。ある時玄宗皇帝は紀朋を宮中に召されてある女官の病を診察させられた。女官の病は、日さへ暮れると笑ひ歌ひ、聲を發てて泣き叫び、さながら狂疾のやうな容態で、足は地さへ履めぬといふのである。朋はその婦人の樣子を視て「これは飽食して強ひて甚しく力を出し、俄に地に仆れたことがあるに相違ない。それが原因だ」といつた。そこで雲母湯を飲ませ熟睡さすと、覺めた時には曩に苦み悶へたことを少しも記憶してゐなかつた。そこで本人に訊いて見ると、女官のい

ふには「姫宮太華公主の御誕生に私が歌の役を仰付かり、聲が續かなくては一大事と思つたので、(一八)豘蹄羹を飽くまで喫つて大曲を歌ひましたが、歌ひ畢ると胸中が非常に熱するので切石の露臺へ出て戯れて居るうちに、誤つて臺から墜落して人事不省となり、しばらくして甦つたが、それ以來この病になりました」と物語つた』と記してある。又、經效方には、『(一九)青城山丈人觀の住職康道豐は雲母粉で百病を治療した。その方は、雲母一斤を用ゐてその片を開き取り、揉んで大瓶の中へギッシリに詰め、上から水銀一兩を注ぎかけて密封し、十斤の(二〇)頂火で赤く煆いて取り出し、香葱紫、連翹草二物を拌ぜ合せて泥のやうに搗いてから、夾絹袋に盛つて大水盆の中で搖つて粉を取る。餘滓がまだ殘るときは再び草藥を入れて搗いて粉を取り、一枚の木盤に灰を平に盛つてその上へ淺い坑をつけ、それに紙を敷いてその上へ粉を傾け入れ、乾くを待つて焙じ、その粉を麪糊で梧子大の丸にする。病有るものに遭ふ毎に之れを服ませて必ず效驗があつた。(二一)成都府の知事辛諫議が曾て(二二)大風を患つて、衆くの醫師が治療し得なかつたとき、道豐がこれを進めて服ませたので神驗があつたといふ。

(一八)豘ハ豚ニ同ジ。

(一九)青城山ハ四川省灌縣ノ西南ニ在リ。一名丈人山トイフ。

(二〇)頂火ハ炭火ヲ瓶頂ニ作ルヲ云フ。

(二一)成都府ハ今ノ四川省ノ首都。

(二二)大風ハ癩病。

抱朴子曰く、他の物は埋めれば朽ち、火を着ければ焦げる。けれども五種の雲母は猛火中に入れて時を經ても焦げず、埋めても腐ちない。故に之を服するものは長生し、水に入つても濡れず、火に入つても燒けず、荊棘を踐んでも傷かないのである。

時珍曰く、昔の人の話に、雲母で死體を詰めて葬ればその骸は朽ちない。盜賊が馮貴人の塚を發いたとき、形貌生けるが如くだつたので共に之を姦したとか、晉の幽公の塚を發いたとき、中に無數の屍が縱橫にあつて、衣服なども生前そのままであつたとかいふ。それは塚中の棺の內部を雲母で詰めてあつたからである。

【附方】 舊七、新七。【雲母の服食法】上等の白い雲母二十斤を薄く開き取り、露水八斗を湯にして半分づつで一回淘り洗ひ、また二斗にその雲母を入れて湯にして芒消十斤を納れ、木器中に二十日間漬けて取り出し、絹袋に入れ屋上に懸けて燥す。直接風や日光に當てはならぬ。それを鹿皮で作つた囊に入れて曉から正午まで揉んで篩ひ、滓はまた揉んで好き粉五斗を取り、殘りは棄てる。更にその粉一斗に崖蜜二斤を入れ、攪きまぜ糊にして竹筒中に入れ、その竹筒を薄く削つて漆で固く口を

封じ、北側の垣の内側の地を深さ六尺掘つて、春、夏は四十日、秋、冬は二十日間埋めて置く。それを出せば水に成つて居るものであるが、なほどろどろして水になり切らぬ時は、また更に三十日間埋める。この水はよく萬病、及び勞氣、風疾を治するものである。溫水で一合を和して一日三回づつ服すれば、十日で小便が黃に變じ、二十日で腹中の寒澼が無くなり、三十日で齲齒が生え變り、四十日で風寒を畏れず、五十日で諸病が皆癒え、顏色が日に日に若くなり、長生して神仙となる。（千金方）【痰飮頭痛】往來寒熱するには、雲母粉二兩を錬り、恒山一兩と末にし、方寸匕づつを湯で服して吐かす。生葱、生菜を忌む。（深師方）【（二）牝瘧多寒】雲母を二晝夜燒き、龍骨、蜀漆を燒いて腥を去つたものと等分を散にし、まだ發作せぬ前に漿水で半錢を服す。（仲景金匱方）【小兒の下痢】赤白、及び水痢には、雲母粉半兩を白粥を煮て調へて食ふ。（食醫心鑑）【赤白久痢】積年癒えぬには、雲母粉方寸匕を飮で調へて服す。二服で立ろに神效が現れる。（千金方）【婦人の帶下】雲母粉方寸匕を水で和して服すれば立ろに神效が現れる。（千金方）【小便淋疾】溫水で雲母粉を和して三錢を服す。（千金方）【婦人難產】日を經て分身せぬには、雲母粉半兩を溫酒で調

（二）牝瘧ハ寒ニシテ熱ナキヲ云フ。

へて服す。口に入れれば直ちに産し、順ならぬものの順になること萬に一も誤らぬ。陸氏は『これを何德楊の方で、已に三五十人を救つた』といふ。（積德堂方）【粉滓面䵟】雲母粉、杏仁等分を末にし、黄牛乳を拌ぜて蒸し、夜塗つて朝洗ふ（聖濟錄）【全身の風疹】あらゆる手當で癒えぬには、雲母粉を煨き、淸水で二錢を調へて服するが良し。（千金方）【一切の惡瘡】雲母粉を傅ける。（千金方）【火瘡の敗壞】雲母粉を生羊髓で和して塗る。（聖惠方）【金瘡の出血】雲母粉を傅けるが絶妙である。（事林廣記）【風熱で汗の出るもの】雲母粉三錢を水で和して服す。再服に過ぎずして立ろに癒える。（千金翼）

白石英（本經上品）

和名　白石英・乳石英・しろすゐしやう
學名　Milky quartz

【釋名】時珍曰く、徐鍇は『英は瑛とも書く、玉の光である』といつてある。今の五種の石英は皆石の玉に似たもので、光の透き徹るものである。

【集解】別錄に曰く、白石英は(一)華陰の山谷、及び太山に生ずる。太さ指ほど、長さ二三寸あり、削つたやうな六面で、白く徹つて光がある。長さ五六寸のものが

(一)華陰ハ華山北方ノ地ヲ指ス。漢ニ縣ヲ置ク。今華陰縣ハ

一層佳い、その黄端白稜なるものを黄石英と名け、赤端白稜なるを赤白英と名け、青端赤稜なるを青石英と名け、黑澤で光あるを黑石英と名ける。二月に採收し、また時に拘らず採る。弘景曰く、今の醫家では、(二)新安産の極めて細長く白澈なるものを用ゐる。(三)壽陽の八公山に大なるものが多いが、これは藥には用ゐない。仙經には大小いづれも用ゐられ、ただ精白で瑕や雜の無いものがよいとしてあつて、この説に從へば大なるものを佳しとするのである。白以外の四色は今は一向に用ゐない。恭曰く、白石英は所在いづれにもあるもので、現に(四)澤州、(五)虢州、(六)洛州の山中倶に産出し、虢州のものは大なるは徑三四寸、長さ五六寸ある。今では一般に澤州の産が優秀なるものとなつて居る。宗奭曰く、白石英は紫白英と同樣でやや大きく、六稜で水精のやうに色が白い。時珍曰く、澤州には石英を食ふ英雞といふがある。その性は最も補の效力を有するものだ。禽部に記載してある。

氣味　【甘し、微溫にして毒なし】別錄に曰く、辛し。普曰く、神農は甘しといひ、岐伯、黄帝、雷公、扁鵲は毒なしといふ。之才曰く、(七)馬目毒公を惡む。

主治　【消渇、陰痿、不足、欬逆、胸膈の久寒。氣を益し、風濕痺を除く。

陝西省關中道ニ屬ス。

(二)新安ハ水部溫湯ノ註ヲ見ヨ。

(三)壽陽即チ壽春ナリ。晉ノ時諱ヲ避ケテ春ヲ陽ニ改ム。今ノ安徽省壽縣ノ地ナリ。八公山ハ淸一統志ニ『八公山在安徽鳳臺縣西北。肥水之北。淮水之南。亦名北山』トアリ。

(四)澤州ハ隋ニ置ク。民國ニ至テ廢ス。今ノ山西省晉城縣ハソノ舊治ナリ。

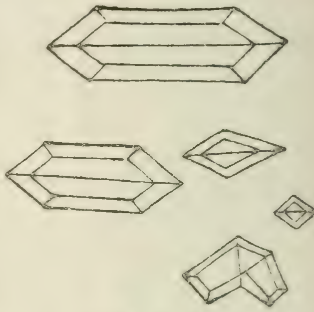
(五)虢州ハ金部銀ノ註ヲ見ヨ。

(六)洛州ハ魏ノ太和中ニ置ク、今ノ陝西省商縣ノ地ナリ。

(七)馬目毒公ハ鬼臼ノ一名。

久しく服すれば、身を輕くし天年を延べる」(本經)「肺痿を療し、氣を下し、小便を利し、五臟を補ひ、日月の光を通じ、寒熱に耐へる」(別錄)「肺癰の吐膿、欬逆上氣、疸黃を治す」(甄權)「大腸を實す」(好古)

五色石英 【主治】「心腹の邪氣、婦人の心腹痛　心を鎭め、胃中の冷氣を治す。毛髮を益し、顏色を好くし、驚悸を治し、魂を安んじ、魄を定め、陽道を壯にし、乳を下し、臟それぞれの病に應じて治す。青きは汗を治し、赤きは心を治し、黃は脾を治し、白きは肺を治し、黑きは腎を治す」(大明)



〔白石英〕

【發明】 藏器曰く、濕は枯を去るもので、白石英、紫石英の屬だとあるはこの物のことである。時珍曰く、白石英は手の太陰、陽明の氣分の藥であつて、痿痺、肺癰、枯燥の病を治するものだが、石類に屬するものだから一時短期間の服用に限る。久しく服してはならない。

頌曰く、古代に服食したのはただ白石英を重んじたので、紫石英は五石に入れて飲んだだけである。他の黄、赤、青、黒の四種は本草に名こそあれ、方家にはすべて用ゐられぬ。乳石論には鍾乳を乳とし、白石英を石とし、六英中で白石のみを貴きものとしてあり、又『乳は陽中の陰、石は陰中の陽である。故に陽の生ずる十一月の後の甲子には乳を服し、陰の生ずる五月の後の甲子には石を服す』といつてある。かかる次第で、互に反し、畏れ、惡むものだから、ややもすれば容易ならぬ害となる。故に乳、石の發する病には藥方も治術も多いが助かるものは稀である。誠に輕卒に服すべきものでない。宗奭曰く、紫、白の二石英で疾を攻むるには短期間煮汁を用うべきものだ。久しく服して益ありといふことは未だ聞かない。張仲景が『只だ㕮咀せしめるのみで細末にせぬ』といふにもそこに意味がある筈だ。若し久しく服するとならば、餘程愼重にし詳細にしての上でなければならぬ。

附方　舊二、新七。【石英の服方】白石英一斤を打つて豆大にし、粗い砂と共に砂盆に入れ、水を入れて二三千回揉み、洗ひ淨めてはまた揉む。かくて柳箕の中へ入れ、それに蒿葉少量と水を入れて淨に光るまで十分に揉み、それを木綿袋に入れ

て門上に懸けて置き、毎日朝起きて髮を梳る前に、水、或は酒で七粒を呑み飯二匙を食つて壓すれば、小腹にある一切の穢惡のものを下すのである。白酒、牛肉は石を服用する人人の忌むものだが、それも皆忌むに及ばぬ。久しく續服すれば、新な石が舊い石を推し出す。石は常に小腹内に在つて溫暖であるから、氣息が調和し、經脈が通達し、腰腎が堅強になり、あらゆる病が自ら除ける。石が若しよく力の發揮を得れば一斤で止める。若し力の發揮を得ぬときは十斤までも服まねばならぬ。服するその石が滑に光るやうであれば、碎け浮いたものが人の腸、胃に著いて瘡となる事はない。また其の石氣で諸病を發作することはないものである。又別法では、澤州の白石英の淨に光つて點翳なきものを用ゐ、小豆大に打ち碎いて細かなものをば取去り、水で淘淨して袋に入れ、鍋に入れて清水五大升で煮汁一斤を取り、澄清して早朝に服す。汁で粥を煮て食へば更に佳し。服して後酒二三盃を飮んで百歩の間を歩行するがよい。一袋の白石英は二十回まで煮て用ゐられるが、若し力が無くなつた時は、布で裹んで南の墻の下の土三尺深さに百日間埋めて置けばまた用ゐ得るやうになる　〇石で豬肉を煮る法、白石英一兩を袋に入れて水五升で四升に煮つ

め、豬肉一斤、葱、椒、鹽豉と共に煮てその汁で羹を作つて食ふ。○石で羊肉を蒸す法、白石英三兩を小塊に打碎いて精羊肉一斤で包み、それを荷葉で裹んで一石の米飯の中で蒸熟し、取出して石を取去り、肉を切つて葱、椒に和して(八)小餛飩にして煮熟し、毎朝空腹に冷漿水で一百箇を呑み、後に冷飯を食つて壓し下す。何等忌むものはない。永く發動せぬ。○石を牛乳で煮る法、白石英五兩を搗碎いて密絹に盛り、牛乳三升、酒三升と共に四升に煎じ、石を取去つて乳を瓶に收め、毎食前に三合を暖服すれば、虛損、勞瘦、皮燥、陰痿、脚弱、煩疼を治す。○石で(九)牸牛を飼ふ法、白石英三斤を搗いて篩ひ、子牛を產んだ十歲以上の母牛一頭を飼ひ、毎日石を和した豆を與へて食はせ、七日を經て乳を搾り、毎朝一升を熱服し、殘餘の乳で粥を煮て食ふ。何等忌むものはない。臟腑を潤養し、肌肉を悅澤にし、身體を健康にする。凡そ石を服するにはいづれも芥菜、蔓菁、蕪荑、葵菜、薺苨を忌むものである。また冬瓜、龍葵を食つて石氣を壓するがよい。(孫眞人千金翼)【風虛冷痺】諸陽不足、及び腎虛耳聾には、精を益し、神を保つ。白石英三兩を坩鍋の內で火で煅いて酒に淬し、それを三回繰返してから氣の洩れぬやうに瓶に入れて密封し、毎朝

(八) 餛飩ハ薄麪ニ肉ヲ包ミ蒸シ又ハ煮ルモノ。

(九) 牸ハ牝牛。

その酒一鍾を溫服し、少量の飯で壓する。また一法では、五回火で煆いて醋に淬した磁石、白石英各五兩を絹袋に入れ、五六日間一升の酒の中に浸して溫服する。盡きたときは更に酒を添へる。(千金翼)【驚悸、物忘れ】心臟の不安、上膈の風熱、痰を化し、神を安んずるには、白石英一兩、硃砂一兩を散にし、半錢づつ每食後に金銀の煎湯で服す。(簡要濟衆方)【(一〇)石水腹堅】脹滿するには、白石英十兩を搥いて豆大にし、瓷瓶に入れ好き酒二斗に浸して泥で密封し、馬糞の火や糠の火で午前六時から正午十二時まで絕えず少しづつ沸して火を止め、翌日中盞で一杯を暖めて飲む。一日三回づつ用ゐ、酒が盡きたときは一回だけ再び燒いて用ゐる。(聖惠方)

紫石英 (本經上品)

和名　むらさきすゐしやう・紫水晶
學名　Amethyst

集解　別錄に曰く、紫石英は太山の山谷に生ずる。採收に一定の時期はない。

普曰く、太山、或は(一)會稽に生ずる。成る可く削つたやうな形の頭まで紫で(二)樗蒲の如きものを擇ぶ。

弘景曰く、今は第一に太山の石の色が重徹して下に根のあるものを用ゐる。次に

(一〇)石水ハ水ガ臍下小腹ニ停聚シ腫レテ石ノ如ク堅キヲ云フ。

(一)會稽ハ郡名、秦ニ置ク。江蘇省ノ東部、浙江省ノ西部ニ亘ル。今ノ江蘇省吳縣ハソノ舊治ナリ。

は(三)雹零山に出るものも好し。また南成石といふ根の無いものもある。また青綿石といふは色が重黑で(四)明澈だ。また林邑石といふがあつて、それは腹に必ず何か眼のやうなものがある。呉興石は四面に纔に紫色はあるが光澤がない。會稽の諸暨石は形と色が石榴子のやうである。既往にはいづれも雜用したが、今はただ太山で採るものを最も勝れたものとする。仙經には用ゐられぬものだが俗間の方に重ぜられるものである。

禹錫曰く、按ずるに、嶺表錄に『(五)瀧州の山中に紫石英多く、その色は淡紫で質はよく澈る。大小皆五稜で兩端が箭鏃のやうだ。水で煮て飲めば暖にして毒なし、北方産の白石英に比すればその力は倍する』とある。宗奭曰く、紫石英は明澈で水精のやうだが色の紫にむらがある。

時珍曰く、按ずるに、太平御覽に『(六)大峴山から太山までの間にいづれも紫石英があるが、太山から出るものが甚だ大きい。(七)平氏、(八)陽山縣から出るものは色深くして特に好い。(九)烏程縣の北壟山から出るものは甚だよく光るがただ形が小く黑い。(一〇)東莞縣の爆山から出るものは舊と貢納物として朝廷へ獻じたものである。

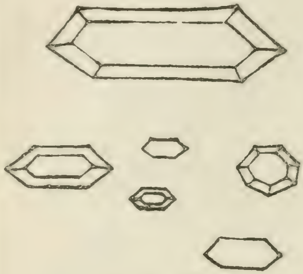
(二)樗蒲ハ双六ノ骰。
(三)雹零山、未攷。
(四)大觀本草ニハ明澈ノ上ニ不ノ字アリ。
(五)瀧州ハ梁ニ置キ宋ニ廢ス。今ノ廣東省羅定縣ノ地ナリ。
(六)大峴山ハ今ノ山東省臨朐縣ノ東南ニ在リ。又、安徽省含山縣ノ東北ニモアリテ一名赤焰山トイフ。
(七)平氏、未攷。
(八)陽山縣ハ今ノ廣東省嶺南道ニ屬ス。

漢ノ縣名。
(九)烏程縣ハ今ノ浙江省吳興縣ノ地ナリ。
(一〇)東莞縣ノ縣名三アリ、此ニイフ東莞縣ハ漢ニ置ク、今ノ山東省沂水縣ノ地ナリ。
(一一)江夏ハ今ノ武昌。
(一二)永嘉トアルハ書名永嘉記ヲ指ス。固陶村、未攷。
(一三)麥句薑ハ天名精ノ一名。

(一一)江夏の礬山にも之が出る。(一二)永嘉の固陶村の小山から出るものは、角の尖頭の様子が甚だ好いがただ小くて薄いのだ』などとの記載がある。

[修治] 時珍曰く、凡そ丸、散に入れて用うるには、七回火に煆き醋に淬し、碾末して水で飛過し、晒し乾して藥に入れる。

[氣味]【甘し、溫にして毒なし】別錄に曰く、辛し。普曰く、神農、扁鵲は味甘し、平なりといひ、李當之は大寒なりといひ、雷公は大溫なりといひ、岐伯は甘し、毒なしといふ。之才曰く、長石が使となる。扁靑、附子を畏れ、鮀甲、黃連、(一三)麥句薑を惡む。茯苓、人參を得れば心中結氣を療じ、天雄、菖蒲を得れば霍亂を療する。時珍曰く、紫石英を服食して乍ち寒し乍ち熱するには、酒を飲めば良し。


〔紫石英〕

[主治]【心腹、欬逆、邪氣、不足を補ふ。婦人の風寒が子宮に在つて絕孕し、十年子無きもの。久しく服すれば、中を溫め、身を輕くし、天年を延べる】(本經)【上氣、心腹痛、

寒熱、邪氣、結氣を療じ、心氣不足を補ひ、驚悸を定め、魂魄を安んじ、下焦を塡め、消渇を止め、胃中の久寒を除き、癰腫を散し、身體を悅澤ならしめる】（別錄）

【肺氣を養ひ、驚癇、蝕膿を治す】（甄權）

發明　○好古曰く、紫石英は手の少陰、足の厥陰の經に入る。○權曰く、虛して驚悸し、不安のものに之を加へ用うるがよし。婦人が之を服すれば姙娠する。○頌曰く、乳石論には單に紫石のみを服するとはなく、ただ五石散の中に之を用ゐるとしてある。張文仲の備急方には心を鎭めるために紫石を水で煮て單服するの法がある。胡洽、及び千金方では、多く諸藥に雜へて用うることになつて居る。今の方では婦人の病、及び心病に使ふものもある。

○時珍曰く、紫石英は手の少陰、足の厥陰の血分の藥である。上部に對してはよく心を鎭め、重を以て怯を去る。下部に對してはよく肝を益し、濕を以て枯を去る。心は血を生ずる處であり、肝は血を藏する處であつて、これに對し紫石英は性が煖で補の作用を現すから、心神不安、肝血不足、及び婦人の（二四）血海、虛寒不姙のものに適するのである。別錄に心氣を補ふといひ、甄權が肺を養ふといふは、氣は陽、

（二四）血海ハ子宮。

血は陰であつて、その營、衛の關係に別のある點に對して甚だ明瞭を缺いて居るが、本經に言つてある諸證は甚だこの理に當つて居る。

【附方】（一五）舊二、新一。【虚勞驚悸】虚を補ひ、驚を止め、食物をよく攝取せしむるには、紫石英五兩を豆大に打碎き、水で一回淘り、水一斗で三升に煮詰め、少しづつ度度服す。或は粥を煮て食ふ。その水を用ゐ盡したときは再び煎じる。（張文仲方）【（一六）風熱瘛瘲】風引湯——風熱瘛瘲、及び驚癇瘛瘲を治す。紫石英、白石英、寒水石、石膏、乾薑、大黄、龍齒、牡蠣、甘草、滑石等分を㕮咀し、水一升で三分の二に煎じ、食後に温にして呷ふ。效必ず現れる。（仲景金匱方）【癰腫毒氣】紫石英を火で燒き醋に淬して末にし、生薑、米醋で煎じて傅け摩るがよし。（日華本草）

菩薩石（日華）

和名 砂金石?
學名 Avanturine ?

【釋名】放光石 陰精石（綱目）説明は下項にある。

【集解】宗奭曰く、（一）嘉州の峨眉山に菩薩石が出る。明に白く透き徹つて太山の狼牙石（二）上饒の水精などの類のやうであるが、これを日中に照して見るとその光

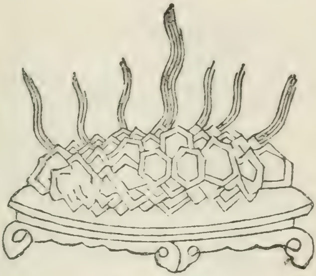
（一五）舊ニ、當ニ三ニ作リ、新一ヲ削ルベシ。

（一六）瘛瘲ハヒキツケ。

（一）嘉州ハ金部鉛ノ註ヲ見ヨ。峨眉山ハ今ノ四川省峨眉縣ノ

西南ニ在リ。
（二）上饒ハ金部鐵ノ註ヲ見ヨ。
（三）五臺山ハ山西省五臺縣ノ東北ニ在リ。
（四）匡廬山ハ江西省星子、九江二縣ノ間ニ在リ。水部温湯ノ廬山ノ註參照。

に五色があつて、佛像の頂の圓い後光のやうなところから此く名けたのである。時珍曰く、蛾眉山、（三）五臺山、（四）匡廬山の岩穴の間から出るものである。形質は六角で大なるは棗、栗ほどあり、色は瑩潔で目に映ると光彩が絲を引いたやうに見える。小なるは櫻珠ほどで五色粲然として愛すべきものだ。これも石英の類である。丹爐家では煆き制して五金三黄匱といふものを作る。



〔菩薩石〕

氣味 【甘し、平にして毒なし】 主治 【藥毒、蠱毒、及び金石藥の副作用から發る癰疽、渇疾を解し、撲損の瘀血を消し、熱狂、驚癇を止め、月經を通じ、風腫を解し、淋を除く。いづれも水に磨つて服す。蛇、蟲、蜂、蠍、狼、犬、毒箭等の傷には、いづれも末にして傅ける】（大明） 【目を明にし、瞖を去る】（時珍）

本草綱目金石部第八卷終

本草綱目石部　第九巻

本草綱目石部目錄第九卷

石の三　石類上三十二種

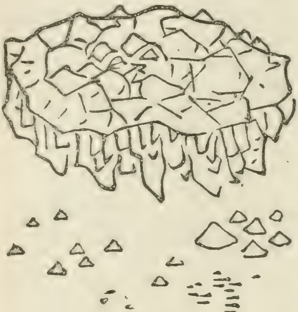
右附方　舊六十九　新三百十七

石の三　石類上三十二種

丹砂（本經上品）

和名　辰砂（硫化水銀）
學名　Cinnabar

【釋名】**朱砂**　時珍曰く、丹といふは石の名である。この文字は井に從ふ、中の一點は丹が井の中に在る有様に象つたものだ。字の說明は許愼の說文にある。後世一般に丹とは朱色を指すものとなつて居るところから朱砂とも呼ぶ。



〔丹　砂〕

【集解】別錄に曰く、丹砂は符陵の山谷に生ずる。採收に一定の時期はない。光色があり雲母のやうに析けるものが良い。末にしたものを眞朱と名ける。弘景曰く、卽ち今の朱砂である。俗醫は別に(一)武都の仇池から雌黃の交つた雄黃を取つて丹砂と稱してゐるがこれは謬である。符陵は(二)涪州の土地で(三)巴

(一)武都ハ漢ノ郡名、今ノ甘肅省武都、文、成、徽ノ各縣、及ビ陝西省寧、羌各縣ノ地ニシテ故城ハ今ノ

郡中の南境に接した地方だが、今その土地では一向に採らぬ。(四)武陵や西川、諸蠻夷の方を巴の地方といふところから、その地方に產するものを一般に巴砂といふて居る。仙經では越砂なるものを用ゐるが、これは(五)廣州、(六)臨漳に產するものだ。この二箇處のものはいづれも好い、光明瑩澈なものでさへあれば佳いのである。雲母の片の如きものを雲母砂といひ、樗蒲子や紫石英の形の如きものを馬齒砂といふ、これもよし。大小豆の如きものの大塊で圓滑なものを豆砂といひ、細末に碎けたものを末砂といふ、この二種は粗なるもので藥には入れない。繪畫の顏料になるだけだ。丹砂を採るには數丈の深さの穴を掘つて取るもので、同一郡縣内で採つたものでも好惡の差があり、(七)水井のものは火井のものより優良である。仙方には、これを煉つて服するを特に長生の寶としてある。

恭曰く、丹砂は土砂、石砂の二種に大別する。その土砂にまた塊砂と末砂とあつて、いづれも體は重く、色は黃黑であつて繪具にはならぬ。瘡疥を療するにはやはりこれも好いが、心腹の藥には入れぬのである。しかし、燒けば水銀が多く取れる。石砂には十數種あつて、最上のものを光明砂といふ。一顆づつ一箇の石龕の內に

成縣ノ西ニアリ。仇池ハ山名。成縣ノ西、古ノ武都城ノ附近ニアリ。

(二)涪州ノ舊治ハ今ノ四川省涪陵縣ノ地ナリ。

(三)巴郡ハ漢ノ郡名、今ノ四川省舊保寧、順慶、夔州、重慶ノ四府、及ビ瀘州ニ亘ル。今ノ巴縣ハソノ舊治ナリ。

(四)武陵ハ漢ノ郡名、當時ノ巴郡ノ東南ニ接ス。今ノ湖南省ノ洞庭湖ヨリ西南方貴州省ノ東北部、沅水、澧水ノ流域一帶ニ亘ル。

(五)廣州ハ土部伏龍肝ノ註ヲ見ヨ。

(六)臨漳ハ今ノ河南省河北道ノ臨漳縣ニシテ漢時ノ鄴縣ノ地ナリ。

(七)水井、火井ハ產

地名。
(八)芙蓉ハ蓮ノ一名。
(九)妙硫砂、大觀本

生ずるもので、大なるは雞卵ほどあり、小なるも棗栗ほどある。形は(八)芙蓉のやうで、破れば雲母のやうにキラキラと光が徹り、龕中の石臺の上に生ずる。これを取つて帯ぶれば惡を辟けるといふ。それが上等のものである。その次は石の中や水の中から出るもので、塊の大なるものは拇指ほど、小なるものは杏仁ほどあつて、光に雜がない。これは馬牙砂、或は無重砂と名け、藥に入れても繪具にしてもよし。これも俗間には稀なものである。磨嵯、新井、別井、水井、火井、芙蓉、石末、石堆、豆末など稱するものは、形も類も頗る相似たもので、藥にも入れ繪具にも用るるが、雜つた土石をよく擇り去つてから用うべきものである。また別に越砂といふがあつて、大なるものは拳ほど、小なるものは雞や家鴨の卵ほどあるが、形は大きくても土石が雜つて居て、細かで明淨なものには及ばぬのである。經に「末にしたものを眞朱といふ」とあるは謬だ。同一物を全きものと末にしたものとで名を異にするわけがあらうか。

斅曰く、丹砂には凡そ百種ほども等差のあるもので、一一論ずるわけにゆかないが、(九)妙硫砂といふは大さ拳ほどで、重量一鎰あるものもある。十四面あつてその

各面は鏡のやうに光り、曇天や雨天の際には鏡面から紅い漿汁が出る。梅柏砂といふは大さ梅子ほどで夜間光を放ち一室が明るく見える。白庭砂といふは大さ(一)帝珠子ほどで面の表に小星が現れて居る。神座砂、金座砂、玉座砂などいふは、丹竈に入れて製せずともそのまま服して自ら壽命を延べる。次に白金砂、澄水砂、陰成砂、辰錦砂、芙蓉砂、鏡面砂、箭鏃砂、曹末砂、土砂、金星砂、平面砂、神末砂などとあるが、到底一一に就いて細說するわけには行かない。

○頌曰く、今は(二)辰州、宜州、階州から出るが、辰砂、即ち辰州の丹砂が最上である。深山の石崖の間に生ずるもので、その地方人はこれを採るに地下數十丈を掘り下げて始めてその苗に掘り當てる。それは白い石であつて朱砂牀と稱へ、その石の上に砂が生ずるのである。砂の塊は大なるは雞子ほど、小なるは石榴の種子ほどのもので、その狀態は(三)芙蓉頭、箭鏃を牀に連ねたやうだ。鐵のやうに紫がかつた黯い色で、光は瑩に澈り、碎けばザクッと岩を切崩したやうに墻壁の狀をなす、また雲母片のやうに析き得る。これが眞の辰砂である。石の無いものならば更に佳い。これ以外のものは、いづれも土石中から淘り出すもので、石牀に生ずるもので

草ニ砂硫砂ニ作ル。

(一)帝珠子、本草原始ニ菩提子ニ作ル。

(二)辰州ハ金部鉛ノ註、階州ハ金部鐵ノ註ヲ見ヨ。宜州ハ今ノ廣西省宜山縣ノ地ナリ。

(三)芙蓉頭ハ菡萏ナリ。蓮花ノ未ダ開カズ顆ヲ成スヲ云フ。

(一三)春州ハ今ノ廣東省陽春縣ノ地ナリ。
(一四)融州ハ今ノ廣西省融縣ノ地ナリ。
(一五)蠻峒トハ蠻夷人ノ棲息地ヲ指シテ稱ス。
(一六)錦州ハ唐ニ置ク、今ノ湖南省麻陽縣ノ地ナリ。
(一七)猜獠トハ當時西

はない。宜砂、即ち宜州の丹砂には非常な大塊があつて、碎けばやはり墻壁のやうに切立つが、ただ罕には何かの物の形狀に似たところがあつて、色のやはり深赤なものもである。その效用辰砂に及ばない。それは土石の間から出るので、白石牀に生ずるものでないからであらう。而して宜州に近い(一三)春州、(一四)融州にも丹砂があつて、そこの水は皆赤く、常に煙霧や鬱蒸して發する氣までが赤黃色を帶びて居るので、その地方の者はこれを朱砂の氣といつて居る。甚だ瘴癘をなして人體を害するものだ。階砂、即ち階州の丹砂は更にこれ以下で藥には用ゐられず、ただ繪具となるだけのものだ。凡そ丹砂として絕好なるものは光明砂であつて、それに次ぐは顆塊、それに次ぐは鹿簌、その下は末砂である。就中藥に入るものは光明砂だけで、それ以外のものはいづれも用ゐない。

宗奭曰く、丹砂は今一般に朱砂といふ。辰州砂は(一五)蠻峒、(一六)錦州の界、(一七)猜獠峒、老鴉井から多く出るもので、その砂の井は深さ數十丈ある。採收するには、先づその井へ薪を聚めて焚くとその靑石壁が迸裂してそこに小さき龕があり、その龕中に玉のやうな白石の牀が自然にあつて、その牀上に砂が生じて居るのである。小

なるは箭鏃ほど、大なるは芙蓉ほどあつて、物が映るほどの光があり、砕けば鮮紅である。その砂と牀の大なるものは重さ七八兩から十兩のものがある（一八）晃州からも箭鏃の如き形のものを産するが、石を帶びて居る。土中から取るのではあるが、到底比較にはならない。

○承曰く、（一九）金州、（二〇）商州にも一種の砂が出るが、色が微黄で土臭い。（二一）陝西、（二二）河東、（二三）河北、（二四）汴東、（二五）汴西のものいづれも藥に入れる。長安、蜀州のものは、研つて銀朱の代用にして漆器を作る。又、信州から近年一種の砂が出る。極大なるものもあり、光芒や、墻壁や、略ぼ宜州産のものに類するが、しかし砒の臭氣があり、破つて見ると多くは生砒色をなして居る。若し藥用に入るる場合、火氣に觸れたならば人を殺す恐がある。今（二六）浙中の市店で往往之を賣つて居るが、深く注意せねばならぬ。

○時珍曰く、丹砂は辰州、錦州のものを最とする。麻陽といふは古の錦州の地のことであつて、此處から出る丹砂の佳きものを箭鏃砂といひ、結して實せぬものを肺砂といひ、細なるものを末砂といふ。色が紫で紙に取つても染らぬものを舊坑砂

南蠻夷ノ稱、今ノ雲南省、四川省ノ西南部、及ビソノ以西ヲ指ス。老鴉井未考。

（一八）晃州ハ今ノ湖南省晃縣ノ境ナリ。當時ノ錦州ノ西南方、沅水ノ岸ニ在リ。

（一九）金州ハ金部鉛ノ註ヲ見ヨ。

（二〇）商州ハ今ノ陝西省漢中道商南縣ノ地ナリ。

（二一）宋ノ陝西路ハ今ノ陝西省ノ一帶、東ハ殽、函、西ハ汧、隴、南ハ商、洛、北ハ蕭關ニ亘ル。

（二二）河東路ハ今ノ山西省一帶、東ハ常山、西ハ黃河、南ハ底柱、北ハ雁門ニ亘ル。

（二三）河北路ハ今ノ直隷省ノ一帶、東ハ海ニ濱シ、西ハ太行山、南ハ黃河、北ハ三關ニ亘ル。

(二四)汴東ハ即チ京東路、今ノ山東全省、及ビ河南ノ東半、直隷ノ南端、安徽、江蘇ノ北部ニ亙ル。黄河以南、淮河以北ノ一帶。
(二五)汴西ハ即チ京西路、今ノ河南省西部、及ビ湖北省西北部ノ一帶。
(二六)浙ハ浙江地方ノ略稱。
(二七)宜州ハ廣西、貴州ノ堺ニ接ス、湖北ト相連ルノ説果シテ何ニ據ルカ。
(二八)大牙山、未考。
(二九)邕州ハ金部自然銅ノ註ヲ見ヨ。
(三〇)五溪ハ水經註ニ『武陵ニ五溪アリ、雄溪、樠溪、酉溪、潕溪、辰溪ナイフ。悉ク蠻夷ノ所居ナリ』トアリ。今ノ湖南省ノ西部辰、沅、永、

といひ、上級品である。色が鮮で紙に染るものを新坑砂といひ、次位にある。蘇頌や陳承の所謂、階州、金州、商州の砂は陶弘景の所謂、武都の雄黄のことで丹砂ではない。范成大の桂海志に『本草に辰砂を上とし、宜砂を次位としてあるが、(二七)宜州で砂を産する地點は湖北の(二八)大牙山と相連つてゐて、北から出るものを辰砂、南から出るものを宜砂といふ。地脈に異りはなく、甚しい差異を認めぬものだ。十分に年を經たものはやはり白石牀上にある』といつてある。蘇頌に云はせると、宜砂は土石の間から出るもので、石牀から出るものでないといふが、それはこの事實を識らなかつたのだ。これとは別物で、色紅く質嫩な一種の土坑砂といふものがある。これならば土石の間から出るもので、甚だ火に弱いものである。(二九)邕州にも亦丹砂がある。その大なる者は数十百兩の塊をなし、暗黒色で墻壁が少く、薬に用ゐるに堪へないもので、ただ焼いて水銀を取るだけである。頌は、融州にもあるといふが、現に融州には砂がないのだから邕州の訛だらう。臞仙の庚辛玉册には『丹砂石は(三〇)五溪の山峒中に産するものが正南の氣を得たもので、上品である(三一)麻陽の諸山の五溪と相接する地點のものが之に次ぐ。雲南、波斯、西胡の砂はいづれも

光潔なもので、用ゐ得る。(三二)柳州の一種の砂は全く辰砂に似て居るが、塊が圓く皂角子ほどのもので、藥用には入れない。商州、(三三)黔州の土丹砂、(三四)宣州、信州の砂は、いづれも内に毒氣、及び金、銀、銅、鉛の氣を含むから服してはならぬ』とある。張杲の丹砂要訣には『丹砂は萬靈の主たるものが宿つたものとして、南方では一種畏敬の念を以て赤龍とか朱鳥とかいふ稱號で呼んで居る。上品は辰、錦二州の石穴に生じ、中品は交州、桂州に生じ、下品は(三五)衡州、(三六)邵州に生ずる。數種の品等差別があつて、その質體に淸濁の相違があり、自ら眞物と僞物との別がある。辰州、錦州の上品の砂は白石牀の上に生じ、十二箇が一座をなして色は未だ開かぬ蓮花の如く、反射するやうな光明がある。また九箇、七箇、五箇が一座を爲すものもあつて、それぞれ數の順に階級が下る。その座の狀態は、座毎に中央に大なるものがあつて主となり、小なるものが臣となつて四周を圍み、謹嚴に王者を護るやうに見えるものである。雜砂一二斗が抱くやうになり、中に芙蓉頭のやうな顆のあるのも上品の部に入る。また馬牙のやうで光明あるものも上品である。雲母の如き白光あるものは中品である。また紫靈砂といふ圓くて筍のやうに長い紅紫のものも上

靖ノ四府州、及ビ永綏、鳳凰、乾州、晃州ノ四廳、貴州省ノ思州、思南、鎭遠、銅仁、黎平ノ五府、及ビ松桃廳ノ地ナリ。

(三一)麻陽ハ本ノ錦州ノ地ナリ。

(三二)柳州ハ今ノ廣西省馬平縣ノ地ナリ。

(三三)黔州ハ今ノ貴州省ノ黔西縣ノ地ヲイフカ。貴州一帶ノ地ヲ古ヨリ黔ト稱ス。

(三四)宣州ハ今ノ安徽省宣城縣ノ地ナリ。

(三五)衡州ハ今ノ湖南省衡陽縣ノ地ナリ。

(三六)邵州ハ今ノ湖南省寶慶府ノ地ナリ。

品である。石片の稜角に青い光を生ずるものは下品である。交州、桂州から出るものでただ座上にあるもの、及び石を碎いて採るものの形芙蓉頭に似て面に光明のあるものもまた上品に入る。顆粒になつてゐて透き徹るものは中品である。碎けた片になつてゐて明徹ならぬものは下品である。衡州、邵州に出るのも紫砂ではあるが砂石中から採るものでこれも下品である。溪砂といふは（三七）溪州の砂石中に生じ、土砂は土穴中に生ずるが、土石が雜るから上品には入らぬ、服餌されないものだ』とある。唐の李德裕の黃冶論には『光明砂は天地自然の寶である。石室の間に在つて雪牀の上に生じ、初生の芙蓉の紅き葩の未だ開かぬもののやうな形狀で、細小なものが周圍を取卷いて輪をなし、大なるものが中央にあつて北辰の位置を取り、君臣位を正したやうに配置されて、光明が外に徹するものである。これを採るには石脈を尋ねて掘るのであつて、この物は造化の作用で自然に鑄成されたものだ』とある。土宿眞君は『丹砂は、（三八）青陽の氣を受けて始めて鑛石を生じ、二百年經てば丹砂となつて（三九）青女が孕み、また二百年にして鉛となり、更に二百年にして銀となり、又二百年にして復び（四〇）太和の氣を得て化して金となる。故に諸種の金は皆丹

（三七）溪州ハ今ハ湖南省辰沅道ニ屬ス。舊治ハ今ノ沅陵縣ノ西、瀘溪縣ノ北、蒿竹溪ノ附近ニ在リタルモノノ如シ。

（三八）青陽ハ春、爾雅ニ「春爲青陽」トアリ。

（三九）青女ハ霜神、淮南子ニ「青女乃出降

霜雪」トアリ。
(四〇)太和、萬物ノ元氣。
(四一)五方草ハ馬齒莧。
(四二)青芝草ハ靈芝ノ一種類。

砂の金の上等なるに及ばない』といつてある。

修治　斆曰く、凡そ朱砂を取扱ふには、静室で香を焚き齋戒沐浴してから先づ砂を取つて香水で浴過し、拭ひ乾して鉢中で搗き碎き、更に三伏時の間研る。かくてその朱砂一兩を瓷鍋へ入れ、上へ甘草二兩、紫背天葵一鎰、(四一)五方草一鎰を入れて東流水で三伏時煮る。水の無くならぬやうに注意を要する。然る後に甘草等の諸藥を取去つて東流水で淘淨し、熬り乾してまた粉の如く研り、小瓷瓶に入れ(四二)青芝草、山鬚草各半兩を入れて蓋をし、十斤の火で午前十時から正午まで煅き、冷えるを待つて取出し、細研して用ゐる。服用する場合には、熬蜜で細麻子大の丸にし、空腹に一丸を服するのである。

時珍曰く、今の法ではただ好き砂を研末し、流水で三回飛してその末を用ゐるのであるが、砂に石末、鐵屑の雜るものは藥に入れられない。又別法では、絹袋に砂を盛り、蕎麥灰の淋汁で三伏時煮て取出し、流水に浸して洗つたものを粉に研り、飛し晒して用ゐる。又別法では、丹砂に石膽、消石を和し、土中に埋めて水に化するのである。

「氣味」［甘し、微寒にして毒なし］普曰く、神農は甘し、岐伯は苦し、毒あり、扁鵲は苦し、李當之は大寒なりといふ。權曰く、大毒あり。大明曰く、涼にして微毒あり。之才曰く、慈石を惡み、鹹水を畏れ、一切の血を忌む。

時珍曰く、丹砂に就ては、別錄には毒無しといひ、岐伯、甄權は毒有りといふ。兩說相矛盾するやうであるが、按ずるに、何孟春の餘冬錄に『丹砂は性寒にして無毒だが、火に入れば熱して有毒となり、能く人を殺す。物の性は火に從つて變ずるのだ』とある。この說が正しいと思ふ。丹砂が慈石、鹹水を畏れるといふは、水が火に剋するのだ。轂は、『鐵は神砂に遇へば泥の如く粉の如くになる』といひ、土宿眞君は『丹砂は陰地蕨、地骨皮、車前草、馬鞭草、皂莢、石韋、決明、瞿麥、南星、白附子、烏頭、三角酸、薄荷、桑椹、地楡、紫河車、地丁を用ゐれば、いづれも伏制し得るものだ。而して鉛は砂を子となすもので相生の關係があるから之を變化し得るのだ』といふ。

「主治」［身體、五臟のあらゆる病。精神を養ひ、魂魄を安んじ、氣を益し、目を明にし、精魅、邪惡の鬼を殺す。久しく服すれば神明に通じ、老衰せぬ。能く化

して來となる】（本經）【血脈を通じ、煩滿、消渇を止め、精神を益し、顏色を悅澤にし、中惡、腹痛、毒氣、疥瘻、諸瘡を除く。身を輕くし、神仙となる】（別錄）【心を鎭め、尸疰に主效があり、風を抽く】（甄權）【心、肺を潤す。瘡痂、息肉を治するには、いづれもこれを塗る】（大明）【驚癇を治し、胎毒、痘毒を解し、邪瘧を驅除し、能く發汗する】（時珍）

【發明】保昇曰く、朱砂は火に法るもので、色赤くして心を主る。杲曰く、丹砂は純陰に浮溜の火を納れたもので神明を安んずる。凡そ心熱の者は、これでなければその病を除き得ない。好古曰く、これは心經血分の主藥であつて、命門の有餘に主效がある。

青霞子曰く、丹砂は外に（四三）八石を包ね、內に金精を含み、氣を（四四）甲に稟け、氣を丙より受け、胎を出ては壬に現れ、塊に結しては庚となり、光を增して戊に歸する。かやうに（四五）陰陽、升降が各〻源に本き、自然に不死である。若し氣衰へ、血敗れ、體竭き、骨枯るるものには、八石の功は次第に能くそれぞれの力を添益する。長命して久しくこの世に生存し、命を保ち、神を安んぜんと欲するならば、須

（四三）八石ハ朱砂、雄黃、空靑、硫黃、雲母、戎鹽、硝石、雌黃。
（四四）甲ハ木ノ氣丹能ク燒ク可キヲ以テ云フカ。丙ハ火ノ氣、火ヲ以テ化スル故ニ云フカ。壬ニ現ルト云フハ、

らく丹砂を服餌すべきである。且つ(四六)丹石は火を見れば悉く灰燼となるが、丹砂は伏火して化して(四七)黄銀となる。變化自在にして重くもなれば輕くもなり、神にもなれば靈にもなり、黒にもなれば白にもなり、暗にもなれば明にもなる。一斛の物も人の力では容易に持ち擧らぬが、萬斤の物も火に遇へば忽ち輕くなつて上騰する。鬼神と雖も如何にしてかく變化があり得るかを捕捉し得ない。

時珍曰く、丹砂は(四八)炎方に生じ、離火の氣を稟つて成り、體は陽、性は陰なるが故に、外には丹色を顯し、内には(四九)眞汞を含む。その氣の熱せずして寒なるは、離中に陰があるのである。その味の苦ならずして甘きは、火中に土があるのである。このゆゑに遠志、龍骨の類と共にすれば心氣を養ひ、當歸、丹參の類と共にすれば心血を養ひ、枸杞、地黄の類と共にすれば腎を養ひ、厚朴、川椒の類と共にすれば脾を養ひ、南星、川烏の類と共にすれば風を除き去る。かくて目を明にすべく、胎を安んずべく、毒を解すべく、汗を發せしむべく、それぞれ佐使に隨つてその功力を現し、往く所として可ならざるは無いのである。夏子益の奇疾方に『凡そ實際の自己の身體以外に自己があつて、その二人が行住坐臥同時に行動するやうに覺え、

水銀ノ形ヲナスヲ指スカ。庚ハ金ノ氣其體質ヲ指スカ。戊ニ歸スト云フハ朱ノ形ヲナスヲ指スカ。

(四五)陰陽升降トハ、其ノ朱トナリ水銀トナルヲ云ヒ、循環究ラザルヲ不死ト云フカ。

(四六)丹石、大觀本草ニハ石ニ作ル。

(四七)黄銀ハ水銀ヲ指ス。

(四八)炎方ハ南方。離火ハ火熱ヲ云フ。

(四九)眞汞ハ水銀。

いづれが眞、いづれが假か、自己が判らぬやうな病を(五〇)離魂病といふ。辰砂、人參、茯苓を濃煎して日毎に飲めば、その眞の身體が爽になり、假の身體と覺ゆるものは消え失せる』とある。類編には『錢丕少卿が毎夜惡夢に襲はれて徹宵一睡もならず、甚だ不吉であることを憂慮してゐた。適(五一)鄧州の(五二)推官胡用之に遇つたとき、推官は「自分も嘗て同様なことがあつたが、道士から箭鏃のやうな形の辰砂を頭上に戴いて寢れば十日ばかりで效驗があるといふことを敎へられ、爾來四五年再び惡夢に襲はれなくなつた」といつて、髻中の一箇の紅絹の囊から取り出して贈與した。少卿はその夜から惡夢がなくなり、神魂が安靜を得たといふ』と記されてある。道書に所謂、丹砂は惡を辟け、魂を安んずるといふ事實はこの二例に依つて立證されるのであらう。

〇抱朴子曰く、(五三)臨沅縣の廖氏の家は代代長命であつたが、その後他へ轉住してからは、子孫が多く短命で世を去つた。ところがその舊宅へ後に住んだ人人は、やはりいづれも長命であつた。そこでその邸の井水の色の赤いのが何か異狀のあるものと疑ひ、改めて掘つて見ると、その中には幾代か前に丹砂數十斛を埋めてあつた。

(五〇)離魂病、カゲノヤマヒト云フ。
(五一)鄧州ハ今ノ河南省ノ鄧縣。
(五二)推官、唐官名、節度觀察使ノ僚屬。
(五三)臨沅縣ハ漢ニ置ク、今ノ湖南省武陵城ノ西ニ故城アリ。

長命はその水を飲むためであつたといふ。況や錬服するの效はいふまでもない。

○頌曰く、鄭康成の周禮の註には、丹砂、石膽、雄黃、礜石、慈石を五毒といつてある。古代にはただ瘡瘍を攻むるに用ゐたのみであつたのだ。然るに本經に丹砂を無毒としてあるところから、世人は多くこれを錬治し服食するが、爲に薬の中毒に罹らぬものは稀である。これは五毒の說がより確實なのではあるまいか。警戒すべきことである。

○宗奭曰く、朱砂は、心神を鎭養するものであるが、それには生で使はねばならぬものだ。錬服しては疾を作さぬものは稀である。ある醫者は病に罹つて伏火のもの數粒を服し、爲に忽ち大熱を發して數日で死亡した。沈存中は『從兄李勝は朱砂を錬つて丹にしてゐたが、一年ばかりの後、沐浴して再び鼎に入れるとき誤つてその一塊を取落した。友人がそれを拾つて丸にして服すると、遂に憒眊の病を發して一夜にして死亡した』といつてある。生の硃砂ならば初生兒にさへ服ませるのだが、火力に因つて變化を生じたものはよく人を殺すのである。大いに愼重にすべきことである。

○○○陳文中曰く、初生兒が產れると直ぐ朱砂、輕粉、白蜜、黃連水を服ませるのは胎毒を下さうといふのであるが、これはいづれも脾を傷り、陽を敗るの藥である。輕粉は痰を下し心を損じ、朱砂は涎を下し神を損ずる。その兒が實するならば、之を服めば軟弱になり、弱きものならば之を服めば傷み易く、變じて諸病を生ずるものである。

○○時珍曰く、葉石林の避暑錄に『林彥振、謝任伯はいづれも伏火の丹砂を服し、俱に腦疽を病んで死亡した』と記載してある。張杲の醫說の記載には『張慤は丹砂を服食して(五四)中消を病み、數年にして(五五)鬢疽を發して死亡した』とある。いづれも丹を服するに就いての戒となすべきことである。けれども周密の野語の記載には『(五六)臨川の推官周某は、平生孱弱で多く丹砂、烏附等の藥を服した。ために晚年に背疽を發し、多くの醫師はすべての罪を丹石に歸して解毒の藥を服ませたが、一向效がない。その時瘍醫の老祝が脈を診て「これは極陰の證候だから、正に伏火の丹砂、及び三建湯を多く服ませねばならぬ」といひ、先づ小劑を試用し、また大劑を作つて用ゐ、三十日の後に膏を用ゐて敷貼すると、半月にしてその瘡は平癒した。

(五四)中消ハ消渴ノ一種、多食スルモノ。
(五五)鬢疽ハ頭部耳ニ近キ腫物。
(五六)臨川ハ三國ノ郡名今ノ江西省臨川縣ノ地ナリ。

（五七）三蟲ハ長蟲、赤蟲、蟯蟲。

その際服した三建湯は凡そ百五十服に及んだ』とある。これは又前の諸説とは趣を異にして居る。蓋し人間の臟腑には自ら禀受する性質によつて千差萬別の相違がある。それゆゑに明智達識の國手が陰陽脈證を確認するには、最初思ひ込んだ意見を決して固守せぬのである。しかしそれは妙精微に透る鑒識を備へたものでなければ企て及ぶところではない。

【附方】　舊八、新二十六。【丹砂の服食法】三皇眞人の錬丹方——丹砂一斤を研末して重篩し、醇酒を沃いで泥のやうにし、銅盤に盛つて高閣の上に置く。婦人の目に觸れしめてはならぬ。燥けばまた酒を沃いで泥の狀態を保たしめ、降雨や風の荒きときは暴露せずに取藏め、三斗の酒が盡くるまで繰返して三百日間暴せば紫色になる。その時七日間齋戒沐浴して靜室の中で飯で麻子大の丸にし、早朝日の出に向つて三丸を呑むのである。一个月にして（五七）三蟲を體外に排出し、半年にして諸病が癒え、一年にして鬚髮が黑くなり、三年にして神人の世界が來る。（太上玄變經）

【小神丹方】眞丹の末三斤、白蜜六斤を攪ぜ合せて丸にし得るまでに日に曝し、麻子大の丸にして毎朝十丸を服す。一年にして白髮が黑くなり、齒の落ちたるは生え變

り、身體が潤澤になり、老翁も少年になる。(抱朴子内篇)【目を明にし身を輕くする】且つ三尸を去り、瘡癩を除く。美き酒五升に朱砂五兩を五晝夜浸し、日光で乾して研末し、蜜で小豆大の丸にし、二十丸づつ白湯で服す。久しく服すれば效が現れる。(衛生易簡方)【神注丹の方】白茯苓四兩を糯米酒で軟く煮て竹刀で切片し、陰乾して研つた末に朱砂末二錢を入れ、乳香水で作つた糊で梧子大の丸にし、朱砂末二錢を衣にかけ、陽日に二丸、陰日に一丸を、(五八)精を祕する目的には新汲水で服し、逆氣過精の目的には溫酒で服す。いづれも空心にして用ゐる。(王好古醫壘元戎)【白髭を黑に變ず】若い雌雞二羽を烏油麻と水とだけで飼ひ、眞先に產んで產みたての卵に穴を明けて朱砂末を塡め、糊でよくその穴を塞いで他の卵と共に母雞に抱かせ、雛の生れる時その卵を取り出せば藥は自然に結實して居る。それを粉に研つて蒸餅で和して綠豆大の丸にし、五七丸づつ酒で服す。ただ鬚の白きを變ずるのみならず、同時に疾も癒える。(張潞方)【小兒の初生】六日目に服すれば、胎毒を解し、腸胃を溫め、氣血を壯にする。朱砂豆ほどを細研して蜜一棗ほどで調へ、一日にそれを吮ひ盡さす。(姚和衆至寶方)【痘毒の豫防】初發の時、或は未だ出ぬ時、朱砂末半錢を蜜水で調

(五八)性慾ヲ抑制スルコトカ、精氣ノ減耗ヲ防グノ意。

(五九)五心ハ頭部五處ノ穴ノコトナラン。

(六〇)一字ハ一撮ノコト。

へて服す。多きをば少くし、少きをば無くし、重きをば輕くする。(丹溪方)【初生兒の驚】生後一个月未滿の兒の驚風で死せんとするには、朱砂を新汲水に磨つて(五九)五心に塗るが最も效驗がある。(斗門方)【小兒の驚熱】夜間就寢中多く啼くには、朱砂半兩、牛黃一分を末にし、(六〇)一字づつ犀角を磨つた水で調へて服す。(普濟方)【急驚搐搦】丹砂半兩、重さ一兩の天南星一箇を炮裂して酒に浸し、全蠍三箇と末にして一字づつ薄荷湯で服す。(聖濟錄)【驚忤の言語不能】打撲驚忤で血が心竅に入りて言語不能なるには、朱砂を末にして雄豬の心血で和して麻子大の丸にし、七丸づつ棗湯で服す。(直指方)【客忤の卒死】眞丹方寸匕を蜜三合に和して灌ぐ。(肘後方)【癲癇狂亂】歸神丹——一切の驚憂、過慮、多忘、及び一切の心氣不足、癲癇狂亂を治す。豬心二箇を切り、大朱砂二兩、燈心三兩を中に入れて麻で括り、石器で三伏時煮て砂を取つて末にし、伏神末二兩を酒で薄糊にしたもので梧子大の丸にし、每服九丸から十五丸乃至二十五丸までを麥門冬湯で服す。甚しきものは乳香人參湯で服す。(百一選方)【產後の顚狂】敗血、及び邪氣が心に入り、祟物を見る如く顚狂するには、大辰砂一二錢を研細して飛過し、兒に飮ます乳汁を茶匙で三ッか四ッで調へ濕し、紫

頂地龍一條でその薬を再三混ぜ、附着した薬を刮り落して地龍をば棄去り、無灰酒一盞を入れて三四回に分服する。(何氏方)【心虚遺精】豬心一個を開き、飛過した朱砂末をふり入れて絲で縛り、白水で煮熟して食ふ。(唐瑤經驗方)【離魂異病】方は發明の條にある。【惡夢の連續】方は發明の條にある。【男女の心痛】朱砂、枯礬等分を末にし、沸湯で調へて服す。(摘玄方)【心腹の宿癥】及び俄に發した癥には、朱砂を研細して飯に混ぜ、雄雞一羽を二日間絶食させてその飯で飼ひ、その糞を取つて曝燥して末にし、一日三回、溫酒で方寸匕づつを服し、盡きれば再び作り、癒えるまで用ゐて止む。(外臺祕要)【霍亂轉筋】身體が冷えて心下の微に溫きには、朱砂を研つて二兩、蠟三兩を和して丸にし、それを(六一)火籠中に置いて熏じ、周圍を厚く覆ふて烟の洩れぬやうにし、牀下に火を置いて腹を微し煖めれば少時して汗が出て甦る。(外臺祕要)【瘴を辟け陽を正す】丹砂三兩を水飛し、半錢づつ溫蜜湯で服す。(普濟錄)【傷寒に對する發汗法】外臺祕要では、傷寒、時氣、溫疫で、頭痛し、壯熱し、脈盛なる發病後一二日の者を治するには、眞丹一兩水一斗を一升に煮詰めて頓服し、夜具を覆ふて汗を取る。生血の物を忌む。○肘後方では、眞丹末を酒で調へて

(六一)火籠ハ懷爐ノ如キモノナラン。

（六二）漿水、ハヤズ。

全身に塗り、火に向つて座し汗を取れば癒える。【溫疫の辟穰】上等の朱砂一兩を細研し、蜜で和して麻子大の丸にし、太歲の日毎に、早朝一家內全部が何物をも食はず先づ東に向つて各人三七丸を齒に觸れずに吞む。永く溫疫に罹らぬ。（外臺）【諸種の吐血】朱砂、蛤粉等分を末にし、酒で二錢を服す。○又別方では、丹砂半兩、金薄四片、蚯蚓三條を共に研つて小豆大の丸にし、二丸づつを冷酒で服す。（聖濟錄）【妊婦の胎動】朱砂末一錢を雞子白三箇に和し、よく攪ぜて頓服する。胎兒の死せるものは流出し、まだ死せぬものは安泰に復する。（普濟方）【胎兒死亡】胎中に留つて下らぬには、朱砂一兩を水で數回煮沸し、末にして酒で服すれば立ろに出る。（十全博救方）【目の障瞖】生辰砂一塊で日毎に擦れば自ら退く。王居雲がこの病に罹つたとき、これを用ゐて故の通りに回復した。（普濟方）【目膜の息肉】丹砂一兩を五月五日によく研つて銅器に入れ、（六二）水漿一盞、臘水一盞で七日間浸し、日光で暴し乾して銅刀で刮り落し、再び研つて瓶に收め、少量づつ眥上に點ける。（聖濟錄）【目の弩肉】及び珠管には、眞丹、貝母等分を末にし、日毎に三四回づつ點注する。（肘後方）【顏面の皯黷】雞子一箇の黃を取り去り、朱砂末一兩をその雞子の內に入れて密封

し、白い雌雞の卵を抱いた中に入れて同じく抱かせて他の卵の雛に孵るとき取り出し、それを顏に塗れば直ちに皯䵳が消え去り、五回以上に及ばずして顏が玉のやうになる。これは陳の時代に張貴妃が常に用ゐた方であつて、西王母枕中方に載つて居る。（外臺祕要）【(六三)沙蜂の叮螫】朱砂末を水で塗る。（摘玄方）【木蝨の瘡毒】南方の地では雨の多い時に木蝨といふものが出る。大さ蛞蝓ほどあつて古木の上に生じ、人の氣色を聞くとひらひらと動いてその下を通りかかると忽ち人の體軀へ墮ちて來るものだ。著くと立ろに瘡になり、久しくすれば全身に蔓延する。これにはただ朱砂と麝香を塗れば直ちに癒えるものである。（張杲醫說）【產後の舌出】收らぬときは、丹砂を傅け、暗いところで盆などの物を地上に擲ち音をたてて驚かせば直ちに自ら收るものである。（集簡方）

水銀（本經中品）

和名　みづかね・すゐぎん
學名　Mercury

【釋名】**汞**（別錄）**澒**　汞に同じ。**靈液**（綱目）**姹女**（藥性）時珍曰く、その狀態が水のやうで銀に似て居るところから水銀と名けたもので、澒とは流動狀態の

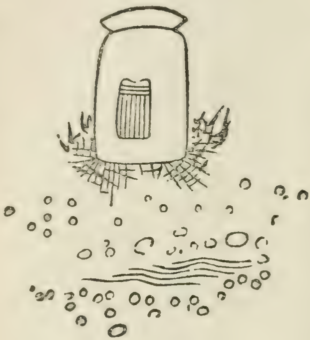
(六三)沙蜂ハ石蠶ノ一名。

(一)符陵ハ漢ノ巴郡ノ南境ニ接ス、今ノ四川省涪陵縣附近ノ地ナリトイフ。今ノ重慶ノ北、潜水ノ西岸渠ノ北ニ漢時ノ符特山アリ。或ハ此ノ附近ノ地ナイフカ。丹砂ノ條、涪州、巴郡ノ註參照。

(二)鍍ハメツキ。

形容である。方術家では、水銀に牛、羊、豕の三種の脂を杵き混ぜて膏にし、それを通草に著けて松明にし、金玉等の寶の所在を照して金、銀、銅、鐵、鉛、玉または龜、蛇、乃至妖怪の屬の所在を見別けるといふところからこれを靈液と謂ふ。頌曰く、廣雅に『水銀、之を澒といふ』とあり、丹竈家で汞と名けるはその字を通用したまでである。

【集解】別錄に曰く、水銀は(一)符陵の平土に生ずる。丹砂から出るものである。



〔水銀〕

弘景曰く、現に水銀には生と熟とがある。ここに符陵の平土に生ずとあるは朱砂の腹中から出るものだが、また別に沙地から出るもので青白色で最も勝れたものもある。丹砂から取るとは現に粗い末の朱砂を燒いて取るもののことで、色がやや白濁だ。生のものに及ばない。水銀は甚だよく金、銀を溶して泥にするもので、世間で物に(二)鍍を

施すものがこれである。これを燒く時に飛んで釜の上に著く灰を汞粉と名け、俗に水銀灰と呼ぶ。最もよく虱を去るものである。恭曰く、水銀は朱砂から出るもので、いづれも熱氣を用ゐて取るのである。朱砂の腹中から自然に出るといふ事實は未だ聞いたことがない。火で燒いて飛して取ることは一般に周知のことだ。南方では蒸して取るが、この方法は水銀採取の量は少いかはり朱砂を損じない。ただ朱砂の色が少し黒く變ずるに止るのである。頌曰く、今は(三)秦州、商州、(四)道州、(五)邵武軍から出るが、秦州のものは西羌の地方から來るものである。經に丹砂から出るといふそのものは、山砂の中から粗き朱砂を採り、爐を作つて砂をその中に入れ、下は水で承けて上を盆で蓋ひ、その器の外部から火を燒き熱を加へて養ふと、烟が上に飛んで水銀が下に溜る。その色はやや白濁である。陶氏は別に沙地から取る青白色のものがあるといふが、今はさやうなもののあることを聞かぬ。西羌地方の者もやはり燒いて採るのだといふことだが、ただ西羌には山中に產するものが極めて多く、是れが爲に一山が自ら拆裂するに至つた。地方人はそこから砂石を採るのであつて、升、斗ほどの大塊があるといふ。それを燒いて採るところから水銀は南方よ

(三)秦州ハ今ノ甘肅省隴山道ノ天水縣ナリ。清ニナホ秦州ト稱ス。商州ハ丹砂ノ註ヲ見ヨ。

(四)道州ハ今ノ湖南省衡陽道ノ道縣ノ地ナリ。

(五)邵武軍ハ宋ノ行政區今ノ福建省邵武縣ハソノ舊治ナリ。

りも西方から來るものが遙に多いのである。又、草汞を取る法がある。それは細葉の馬齒莧を乾して原料とするので、乾いた草十斤から水銀八兩乃至十兩を採り得る。その法は、先づ槐木でその草を搥き、東向きに日の當る場所へ棚のやうに積上げて二三日曬すと幾年か乾したもののやうになる。それを性を存する程度に燒いて瓦甕に入れ、口を封じて四十九日間土坑の中へ埋め、それを取り出すと自ら水銀になつて居るのである。

時珍曰く、汞は丹砂から出るものが眞の汞である。雷斆は草汞といふがあるといひ、陶弘景は沙地汞といふがあるといひ、淮南子には『弱土の氣が白礜石を生じ、礜石が白澒を生ずる』とあり、蘇頌は『陶氏のいふやうなもののある事實を聞かぬ』といふ。按ずるに、陳霆の墨談に『(六)拂林國は太陽の沒する處にあたる國で、そこには周圍四五十支里の水銀の海がある。その國の人民が水銀を採るときには、先づ海岸十支里ばかりの間に數十の坑井を掘り、壯健な若者達が駿馬に跨り、人馬倶に金身に金薄を貼つて海岸へ出る。そしてその金光を日光に照り耀かせると、水銀は沸沸と湧き返つて潮の如く近づいて來るのであるが、その潮は金色の壯夫達を呑み裹

（六）拂林國トハ唐時代ニ當時ノ羅馬帝國、今ノ土耳古、希臘等地中海ニ沿フ一帶ヲ指ス。

まうとする勢を示す。その時壯夫達は直ちに馬首を回して全速力で逃げ返るのだが、水銀はますます追迫して來るので、若しその際逃げ遲れでもするならば人馬共に全滅である。しかし人馬の逃足が速ければ逐かける水銀の勢が弱くなつて途中の塹坑へ落ち溜る。かくて塹坑に溜り積つたものを取るのであつて、その水銀は香草と共に煎れば花銀となる。この點が中國に產するものと同じくない』と記してある。

按ずるに、この記事は陶氏が沙地から取るといふ說とも合致するやうである。又、陳藏器が『人が水銀を服すれば拘攣を病むが、ただ金の物を炙つて熨すれば水銀は必ず出て金を蝕する』といふ說とも符合するやうである。蓋し外番の地方には丹砂が多いから、その液が自ら流れて水銀となることもあるだらう。必ずしも砂を鍊つて取出すのみでないことも事實かも知れぬ。胡演の丹藥祕訣に『砂汞を取るの法は、瓷瓶に多少に拘らず朱砂を盛つて紙で口を封じ、香湯で一伏時の間煮て後取り出して(七)水火鼎に入れ、炭を納れ口を塞いで鐵盤で蓋をし、また地に一つの孔を掘つてそれに水を盛つた一箇の盌を置き、その上へ鼎を盤で蓋ふたまま載せて周圍をよく鹽泥で縫ひ固め、それに火を加へて煅き、やがて冷えるを待つて取り出せば汞は自

(七) 水火鼎ハ蒸溜器。

ら盌に流れ込んで居る。邕州の(八)溪峒で燒いて取る方法は極めて簡易なもので、百兩を一銚とする。銚の構造は豬の膀胱に似たもので、外部を厚紙で幾重にも貼る。それで走漏せぬのである。もし地上に撒失した場合には、ただ川椒末、或は茶末を用ゐて收め取る。或は眞金、及び鍮石で水銀を引けば上つて來る』とある。嘉謨曰く、汞を取去つた砂の殼は天流と名ける。化合術を以て變化し得るものだ。

【修治】斅曰く。凡そ水銀を藥用とする場合には、草汞、並に舊い朱漆中のもの、別藥で加工したことのあるもの、ある期間屍體中に在つたもの、(九)半生半死のもの等を用ゐてはならぬ。朱砂中の水銀は色が微に紅いものである。それを取收めて後葫蘆に入れて貯へれば遺失せぬ。先づ紫背天葵、並に(一〇)夜交藤の自然汁の二味と共に一伏時煮さへすれば水銀の毒は自ら退くものである。水銀十兩を修治するには二汁を七鎰合せるのである。

【氣味】『辛し、寒にして毒あり』權曰く、大毒あり。大明曰く、毒無し。之才曰く、慈石、砒霜を畏る。宗奭曰く、水銀に、鉛を得れば凝り、硫を得れば結し、棗肉と併せて研れば散る。別法では、煨いて膩粉、粉霜としたものを唾で研つて用

(八)溪峒トハ未開人部落ヲイフ。丹砂ノ條蠻峒、五溪ノ註參照。邕州ハ金部自然銅ノ註ヲ見ヨ。

(九)半生半死ハ陳久ノモノヲ云フカ。

(一〇)夜交藤ハ何首烏ノ別名。

ゐれば虱を殺す。銅が水銀を得れば白く光る。屍體に灌げば腐りが遅い。金、銀、銅、鐵をその上へ置けば浮ぶ。紫河車を得れば伏し、川椒を得れば收する。以て金を(一一)勾し、以て泉を涌し得る。(一二)匱蓋藉死は水銀の氣である。土宿眞君曰く、荷葉、松葉、松脂、穀精草、萱草、金星草、瓦松、夏枯草、忍冬、莨菪子、雁來紅、馬蹄香、獨脚蓮、水慈姑は皆よく汞を制す。

【主治】【(一三)疹瘻、痂瘍、白禿を治し、皮膚中の蝨を殺し、胎を墮し、熱を除き、金、銀、銅、錫の毒を殺す。鎔化して還元すれば復た丹となる。久しく服すれば神仙となり、不死となる】(本經)【これを男子の陰に傅ければ陰消して無力となる】(別錄)【水道を利し、熱毒を去る】(藏器)【天行熱疾に主效があり、風を除き、神を安んじ、心を鎭め、惡瘡瘑疥を治し、蝨を殺し、分娩を催し、死胎を下す】(大明)【小兒の驚熱、涎潮を治す】(宗奭)【痰逆、嘔吐、反胃を鎭墜す】(時珍)

【發明】弘景曰く、還元すれば復た丹となると仙經に出て居る。酒に和し日光に曝して服すれば長生する。權曰く、水銀は大毒がある。朱砂中の液であつて、乃ち(一四)還丹の元母、神仙不死の藥だ。よく五金を伏錬して泥となすものである。

(一一)勾スルハ釣リ出スコト。涌スハ溶解スルコトカ。泉ハ錢貨。
(一二)棺中ニ入レテ屍體ヲ藏スルハ水銀ノ氣ヲ取ルナリ。
(一三)疹瘻、大觀本草ニ疥瘻ニ作ル。
(一四)丹朱ノ原料。

(一五)倒陰絕陽ハ陰事不能。

抱朴子曰く、丹砂を燒けば水銀となり、多くの變化を經てまた還つて丹砂と成る。そのものは凡ての草木と性質が甚だ遠い、故に能く人をして長生せしめるのだ。金、汞が九竅に在れば死人がそのために朽ちぬ。況や服食するの效はいふまでもない。

藏器曰く、水銀が耳に入れば腦を盡きるまで食ひ、肉に入つてあらゆる關節を攣縮し、(一五)倒陰、絕陽せしめるものだ。世間の人は瘡疥を患ふと多く水銀を塗るが、水銀は性滑重で直ちに肉に入るから警戒せねばならぬ。頭瘡の場合には絕對に用ゐてはならぬ。恐らく經絡に入つて必ず筋骨を緩め、そのためにあらゆる藥も治し得なくなる。

宗奭曰く、水銀を藥に入れるにはそれぞれの法はあるが、有毒だから極めて愼重にせねばならぬ。婦人が多く服すれば絕對不姙になる。現に水銀を燒いて作つた丹砂があつて、醫者が知らず誤用することもあるが、くれぐれも用心せねばならぬことだ。唐の韓愈は『大學士李于は方士柳泌の說を信じ、水銀を燒いて不死の藥だといつてゐた。それは鉛を鼎に滿てて搖り動かしてからあけて空にし、その中へ水銀を充實して四面を蓋ひ封じ、燒いて丹砂にするのであるが、それを服したために下

血すること四年、ますます病が危急に陷つて死亡した。服食の說なるものはいつの時代から起つたものか余には判らぬが、人を殺すこと數ふべからざるものである。而るに世人が如何にも有難さうに信用して、ますますかかる結果を招いて居るといふは甚しい惑である。物の記述や噂話は且く問題外として、現に直接目擊した事實から、彼等方士の輩に親交し、その藥のために身命を敗つた六七人の紳士に關する現實を例證して、世の人人の鑒誡とする。工部尚書の歸登は、自ら好んで水銀を服用したために病となり、さながら燒いた鐵杖で頭の頂上から肛門まで貫かれ、それが摧けて火となつたものが諸竅や關節を燒き刺して曳き出すやうに狂痛するといひ、病床にあつて號泣し悶絕した。これは水銀のために發したもので、しばらく止んだけれどもその後唾血すること十數年にして斃死した。殿中御史の李虛中は、疽がその背に發して死亡した。刑部尚書の李遜は、自分は藥のために誤られて遂に死ぬのだと余にいつた。刑部侍郎の李建は、一朝病なくして死亡した。工部尚書の孟簡は、余を（一六）萬州から呼び寄せて「自分は祕藥を手に入れて居るのだが、自分だけが不死になるも惡いから君に器に一つ差上げやう。これは棗肉で丸にして服する

（一六）萬州ハ今ノ廣東省萬縣ノ地ナリ。

だ」と人を屏けて余にいつた。ところが尚書は別れて一年にして發病した。後にある者が見舞に往くと、尚書は「前に服した藥が處方を誤つて居た、下劑を用ゐて見よう」といつて下して見ると、その時は平安になつたのだが、病むこと二年にして卒去した。東川の節度、御史大夫の盧坦は尿血が出て筋肉の痛みに耐へかね、殺してくれと訴へた。金吾將軍の李道古は柳泌との關係から罪に問はれた人物だが、泌の藥を服食して五十歲にして海上で死亡した。以上はいづれも鑑戒となすべき實例である。不死を求めて死を與へられるとは、果して賢明なりと謂ひ得やうか。五穀、(一七)三牲、鹽醯、果蔬こそ人間の常食である。お互に、何は兎も角食物をば存分にといふが自然のことである。然るに現に惑溺する人人は「五穀を食ふから短命だ。三牲はいづれも人命を殺すものだ。食物はあくまで量を減ぜねばならぬ。一回の食事、一椀の調理にも十中の二三は禁忌せよ」といふ。自然の狀態を自然に守る道をば信ぜずして、妄誕極る方法に熱中し、結局は死に到達して臨終に始めて後悔する。ところが現にその慘劇を見てさへもなほ妄信の醒めぬ人間は「彼の死亡は遺憾ながら服食上の方法を誤つたのだ、自分ならばさうはしない。始めに反應の見えた時を藥

(一七)三牲ハ牛、羊、豕。

動といふ、それで病が現れるのだ。病が經過し、藥功が行れば、確に不死に達して居るに相違ない」などといふ。この輩もやはり死に直面せねば後悔しない仲間なのだ。如何にも哀れなものといふ外はない』といつてある。

○時珍曰く、水銀なるものは至陰の精であつて沈着の性を稟けて居る。凡そ火力を用ゐて煆煉すれば飛騰し靈變し、人の氣に觸れて熏蒸するときは骨に入り筋を鑽り、陽を絕し腦を蝕するものである。陰毒の物としてこれに及ぶものはない。然るに大明は、無毒のものだといひ、本經には、久しく服すれば神仙となるといひ、甄權は、還丹の元母たるものだといひ、抱朴子は、これは長生の藥だといふ。(一八)六朝以來、長生不死を貪求してこれを服食し、癈疾、危篤の病となり、その身命を喪つたものが數へ切れぬほどである。しかし方士などの無責任な言說は固より問題にならぬとして、本草には必ず根據なき言說のあらうわけはない。水銀はただ服食することだけが不可なのだ。治病上に效力のある事實は否定し得ない。黑鉛と共に結砂したものは痰涎を鎭墜する。硫黃と共に結砂したものは危急の病を救治する。これ等の事實は應變の機微であつて、運用する者がよく誤らずその肯綮を得て、最も適當なそ

(一八)六朝ハ吳、東晉、宋、齊、梁、陳、皆建康ニ都ス。又、晉、宋、齊、梁、陳、隋、ヲ六朝トスベシトイフ。後說正シキガ如シ。

の樞機を把握することに依つて凡てが決を得るのである。その他は鉛白霜、及び靈砂の條下に記載する。

附方 舊五、新二十四。【初生兒の不乳】咽中に痲豆ほどの噤する物があるには、水銀米粒大を與へ、咽に下れば癒える。（聖惠方）【小兒の癇疾】一切の熱を壓するには、水銀を小豆ほど盞中に入れ、その盞のまま湯の中へ沈めて一食頃ほどの間煮て服す。腦に入る恐れがあるから頭を仰向けてはならぬ。（聖濟方）【急驚で涎を流すもの】水銀半兩、生南星一兩、麝香半分を末にし、石腦油を入れて共に搗き和し、綠豆大の丸にして一丸づつ薄荷湯で服す。【失心風疾】水銀一兩、藕節八箇を研つて(一九)砂子にし、芡子大の丸にして一二服、二丸づつを磨刀水で服す。（經驗方）【精魅鬼病】水銀一兩、漿水一升を炭火で三分一に煎じ、水銀を豆一粒ほど神符で裹んで呑み、晩にまた服す。一二日で止る。（廣濟方）【反胃吐食】水を吐いて停らぬには、黑鉛、水銀各一錢半の結砂、(二〇)舶硫黃五錢、官桂一錢を末にし、每服六錢づつ、一半は米湯で、一半は自然薑汁で調へて同時に服す。（聖濟錄）【消渴煩熱】水銀一兩、鉛一兩の結砂、酥で炙いた皂莢一挺、麝香一錢を末にして半錢づつを白湯で服す。

(一九)砂子トハ砂ノ大サニ細研スルコト。

(二〇)舶硫黃ハ硫黃集解ニ舶上倭硫黃トアルモノ是ナルベシ。

(二一)蟣ハ汚血。

(二二)臘猪脂、臘月ニ

(聖濟錄)【(二一)膽熱蟣嚔】血が上に妄行するには、水銀、朱砂、麝香等分を末にして半錢づつ新汲水で服す。(宣明方)【血汗】方は上に同じ【姙婦の胎動】母體が死せんとして胎兒がなほ中に在るにはこれを以て下す。水銀、朱砂各半兩を膏に研り、牛膝半兩を水五大盞で煎じた汁に蜜を入れたもので調へて半匙を服す。(聖惠方)【婦人の難産】水銀二兩を用ゐ、先づ煮て後に服すれば立ろに分娩する。(梅師方)【胎兒の死亡】その母の死せんとするには、水銀二兩を呑めば立ろに墮ちる。(梅師方)【婦人の避姙】水銀を麻油で一日間煎じ、空心に棗大の一丸を服すれば永く姙娠を斷ち、健康を損じない。(婦人良方)【金銀の毒を解す】水銀一兩を服すれば直ちに出る。(千金方)【誤つて金銀を呑みたるもの】及び鐶子、釵子を呑みたるには、汞半兩を呑み、再服すれば出る。(聖惠方)【蟲の耳に入りたるもの】水銀を豆ほど耳中に入れて耳を下向きにし、銅の器物を數聲打鳴らせば出る。水銀はよく腦に食ひ入るものだから、餘程急切の場合の外用ゐてはならぬ。(聖濟錄)【頭上の蝨】水銀を蠟燭油に和して揩れば、一夜にして悉く死ぬ。(摘玄方)【腋下胡臭】水銀、胡粉等分を面脂で和して頻に摻る。(千金方)【少年の面皰】水銀、胡粉等分を研り、(二二)臘豬脂で和して夜塗り朝

取リタル豬ノ脂肪。

洗ふ。水を見てはならぬ。三回で瘥える。（肘後方）【老人、小兒の口瘡】水銀一分、黄連六分、水二升を五合に煮詰め、日毎に十回づつ含む。（普濟方）【白癜風痒】水銀で數〻拭へば消える。（千金方）【蟲𤻲瘙痒】水銀、胡粉等分を研つて傅ける。○又、水銀、蕪荑を酥に和して傅ける。（外臺祕要）【痔蟲の痒きもの】水銀、棗膏各二兩を共に研り、綿で裹んで下部に納るれば翌日蟲が出る。（梅師方）【惡肉毒瘡】ある十四歳の少女が腕の軟い部分に黄豆大のものを生じ、半は肉中に在つて紅紫色になり、痛甚しく、多くの藥も效力がなかつたが、ある方士が水銀四兩を用ゐ、白紙二枚をよく揉み、それに水銀をつけて塗擦すると三日にして自ら落ちて癒えた。（李樓怪證方）【一切の惡瘡】水銀、黄連、胡粉を黄に熬つて各一兩をむらなく研つて傅ける。乾くときは唾で調へる。（肘後方）【楊梅毒瘡】水銀、黑鉛各一錢の結砂、黄丹一錢、乳香、沒藥各五分を末にし、紙で小撚に卷き込み、それに油を滲ませて燈を點じ、一日三回づつ瘡を照せば七日にして效が現れる。○方廣附餘では、水銀、黑鉛の結砂、銀朱各二錢、白花蛇一錢、これを末にして紙撚七本に卷き込み、第一日には三本、次の日から一本づつを香油を用ゐて爐中で燈に點じ、それを寢具の內へ入れて瘡を熏

(二三)號丹ハ號州産ノ丹砂カ。

ずる。風の透らぬやうにせねばならぬ。頭に瘡のある場合は寢具を頭まで被る。〇また一方では、水銀一錢二分、黑鉛、白錫各八分の結砂、黃丹四分、朱砂六分、これを末にして十二本の紙撚に卷込み、小桶の中で香油を盛つた燈盞にその撚を入れて燈を點じ、患者をば寢具で圍み、鼻からその燈の烟を少しづつ吸はせる。三日の後に口から惡物を出して效が現れる。【痘後の瞖】水銀一錢、(二三)號丹五錢を研つて六丸にし、坩鍋へ入れて糊で隙を固め、一日間火で煆いて取出し、薄綿に裹んで左眼の瞖には右耳を塞ぎ、右眼の瞖には左耳を塞ぐ。かくすれば自然にその瞖が墜下する。(危氏方)

水銀粉（宋嘉祐）

和名　甘汞・輕粉(鹽化第一水銀)
學名　Calomel (HgCl)

釋名　**汞粉**　**輕粉**(拾遺)　**峭粉**(日華)　**膩粉**　時珍曰く、輕とはその質をいひ、峭とはその形狀をいひ、膩とはその性をいつたものである。昔の物語に蕭史が舅の秦の穆公と飛雲丹を錬つたとき、第一回の轉化で輕粉となつたといふはこの物である。

【修治】時珍曰く、輕粉を升錬する法は、水銀一兩、白礬二兩、食鹽一兩を共に研つて水銀のつぶつぶの見えぬやうにし、鐵器の内に鋪いて小き黑盆で蓋をし、その盆の合せ目をば竈灰を篩つて鹽水で和したもので固く封じ、炭で二炷香の間燒き熱し、その盆を取つて內側を見ると粉が升り着いて居る。その白さこと雪の如く、輕やかで誠に美しい。一兩の汞から粉八錢を取り得るものである。又、別法では、水銀一兩、皂礬七錢、白鹽五錢を共に研り、上記の方法で升錬する。又、別法では、先づ皂礬四兩、鹽一兩、焰硝五錢を共に黃に炒つて麴にし、水銀一兩とその麴二兩、白礬一錢とをむらなく研り、上記の方法で升錬する。海客論に『諸礬と水銀とは相合はぬものだが、綠礬を鹽に和したものが能く水銀を制して粉にする、何故かといへば、水銀は金の魂魄であり、綠礬は鐵の精華であつて、二氣同根なるところから暫く制して粉となるのである。しかし鹽を交へねば色が白くならぬ』とある。

【氣味】【辛し、冷にして毒なし】大明曰く、慈石、石黃を畏れ、一切の血を忌む。もと丹砂から出るものだからである。時珍曰く、溫燥にして毒あり。その性は升であり、浮である。黃連、土茯苓、陳醬、黑鉛、鐵漿はその毒を制し得る。

主治　【大腸を通じ、小兒の疳痺、瘰癧を轉じ、瘡疥の癬蟲を殺す。及び鼻上の酒皶、風瘡の瘙痒に用ゐる】（藏器）【痰涎、積滯、水腫、鼓脹、毒瘡を治す】（時珍）

發明　宗奭曰く、水銀粉は膈涎を下し幷に小兒の涎潮、瘈瘲の藥に多く用ゐる。けれども常に服し又は量を過してはならぬ。量過多であれば人を損じ、若しその人が驚を兼ねる場合には甚だ危險だから大いに注意を要する。蓋し驚は心氣不足であるから下してはならぬもので、下せば裏が虛して驚氣が心に入り、治療の方法が無くなるものだからである。その本人の大體が虛して居る場合には用うることを禁ぜねばならぬ。特に愼重なる注意を要する。

劉完素曰く、銀粉はよく牙齒を傷める。蓋し上下の齒齦は手足の陽明の經に屬するもので、毒氣が腸胃に感ずれば、精神、氣血、水穀が既にその毒に勝へなくなり、毒は經に循つて上行し、齒齦の耎く薄い部分へ出て害を爲すのである。

時珍曰く、水銀なるものは至陰の毒物であつて、丹砂を火で煅くことに因つて現れ、鹽と礬とを加へて錬れば輕粉となり、硫黄を加へて升すれば銀硃となる。輕飛し靈變して純陰が燥烈となり、その性は走つて守らず、よく痰涎を劫して積滯を

(一)固濟ハ密閉スルコト。

消するものだ。故に水腫、風痰、濕熱、毒瘡は劫されて齒から出で、邪毒はこれがために暫く開き、痰もこれに因つて癒えるのである。しかし若し過量に服するか或は方法の適正を得なければ、水銀の毒氣は人體に蒸せられて經絡、筋骨に竄入し、體外に出ることを得なくなる。それがために痰涎は驅逐し去つたにしても、血液が耗亡して筋の活力を保つことを得なくなり、營、衛が適當に行はれなくなつて、病は變じて筋攣、骨痛となり、外部に發しては癰腫、疳、漏となり、或は手足の皸裂となり蟲癬、頑痺となり、幾歳月を累ねて遂には治すべからざる癈疾となるのであつて、その害毒まことに窮りない。錬丹を本職にする方士達が水銀、輕粉の升錬に用ゐる鼎器が、何時とはなく(一)固濟を失ふところを觀ると、鐵石さへも滲み透るのだから、況や人間の筋骨、皮肉に於てはいふまでもない。陳文中は『輕粉は痰を下すが心氣を損ずる。小兒には輕輕しく用ゐてはならない。脾を傷め陽を敗り、必ず他の病證に變ずるものだ。就中初生兒には愼まねばならぬ』といつて居る。ところが演山氏は『小兒は胎内に在つて母の飲食物に因つて受ける熱毒の氣を胸膈に畜へて居るところから、出生すると箇箇いづれも驚を發する。三日以内に黄連の去熱、膩粉の散

毒を與へ、又人參、朱砂、蜜湯を與へて心、肺を解し淸めるがよい。積毒が既に化すれば生兒は胎毒の患を免れる』といつて居る。この二說は相反して居るが、各〻見る所があるのであつて、一は胎毒無きものに對し輕輕しく服しめてはならぬといふ意味であり、一は胎毒あるものに對し豫めこれを解するがよいといふ意味である。要するに藥を應用する者がその機微を審にすればよいのである。

附方　舊三、新三十二。【小兒の初生】浴湯中に鹽少量を入れ、拭ひ乾してから、膩粉少量をその身體に摩すれば風を畏れなくなり、又諸氣を散ずる。（全幼心鑑）【初生兒の鎖肛】この證は胎中に於ける熱毒が肛門に結するに由るもので、生後三日間閉鎖して通ぜぬときは危急である。婦人をして前後の心、手足の心、幷に臍の七箇處を四五回咂はせ、輕粉半錢、蜜少量を溫水に溶して時時に少量づつ與へ、通ずるまでを度とする。（全幼心鑑）【小兒の涎喘】服藥しても退かぬには、無雄雞子一箇から取つた淸に輕粉十錢を抄ひ入れて拌ぜ和し、銀器に盛り湯瓶の上に置いて蒸熟し、三歲の小兒には、その全部を食はせれば痰を吐し、或は泄して癒える。氣の實するものの場合に用うるのである。（演山活幼口議）【幼兒の吐乳】止まぬには、これを服す

(二) 脹肚ハ腹ノ脹レル病。

(三) 消渴シテ多食スルモノ。

(四) 麻脚、圖經本草

れば立ろに効がある。膩粉一錢、鹽豉七粒を皮を去り、研り勻ぜて麻子大の丸にし、三丸づつ藿香湯で服す。（活幼口議）【小兒の泥を喫ふもの】及び(二)脹肚には、膩粉一分を沙糖に和して麻子大の丸にし、空心に米飮で一丸を服す。少時して泥土を排泄して瘥える。（經驗方）【大小便閉】脹悶して死せんとするは、二三日そのままであれば死亡する。膩粉一錢、生麻油一合を相和して空心に服す。（聖惠方）【大便壅結】膩粉半錢、沙糖一彈丸を研つて梧子大の丸にし、五丸づつ就寢時に溫水で服す。○又一方では、膩粉二錢、黃丹一錢を末にし、米飮で一錢づつを服す。（普濟方）【血痢腹痛】膩粉五錢、定粉三錢を共に研つて水に浸し、蒸餅心少量で和して綠豆大の丸にし、七丸或は十丸づつを、艾一枚、水一盞の煎湯で服す。（祕寶方）【(三)消中嗜食】多くは外傷、痺熱、內積、憂思に因るもので、鹹きものや麪を多食した爲に脾、胃乾燥して飮食が平常に倍加し、肌肉が生ぜず、大便が堅くなり、小便が度なく出るものである。これには、輕粉一錢を末にし、薑汁でよく拌ぜて長流水で飮下す。齒の浮くは效果の現れである。後に豬肚丸を服して之を補ふ。（危氏得効方）【一切の虛風】不二散――膩粉一兩を五回湯で煎じて(四)麻脚のやうにし、緩き火で焙じ乾して麝香半兩と

ニ茶脚トアリ。意味ハ茶ノ煎ジ滓ノ如クスルコトナラン。

細研し、一字づつを溫水で調へて服す。（孫用和秘寶方）【水氣腫滿】汞粉一錢を烏雞子の黄を去つた中に盛つて蒸餅で包み、蒸熟して取出し、炒つた苦葶藶一錢と蒸餅と共に杵いて綠豆大の丸にし、一日三回、三五丸づつを車前湯で服すれば神效がある。（醫壘元戎）【痘瘡の生瞖】輕粉、黄丹等分を末にし、左目の瞖には右耳へ吹き、右目の瞖には左耳へ吹けば退く。（王氏痘疹方）【婦人の面脂】太眞紅玉膏――輕粉、滑石、皮を去つた杏仁等分を末にして蒸し、腦、麝少量を入れて雞子淸で調へ、洗面後に傅ける。旬日の後には顏色が紅玉のやうになる。（閨閣事宜）【面皮の抓破】生薑の自然汁で輕粉末を調へて搽れば、更に痕迹が無くなる。（救急方）【牙齒の疼痛】輕粉一錢、大蒜一瓣を餅に杵き、それを膈骨の前の低く凹んだ中へ置き、その上を銅錢で隔てて蜆殼で蓋ひ、一夜縛り付けて置けば癒える。左の疼きには右側に置き、右の疼きには左側に置く。（摘玄方）【風蟲牙疳】膿血と蟲あるには、輕粉一錢、黄連一兩を末にして摻る。（普濟方）【小兒の耳爛】輕粉、棗子灰等分を研り、油で調へて傅ける。（摘玄方）【底耳の腫痛】汁水の絶えぬには、輕粉一錢、麝香一分を末にして摻る。（簡便方）【爛弦風眼】膩粉末を口津で和し、一日二三回づつ大眥へ點ける。（聖惠方）

【小兒の頭瘡】葱汁で膩粉を調へて塗る。〇又別方では、雞子黄を炒つて油を取り、麻油、及び膩粉末を入れて傅ける。（集簡方）【小兒の癬】豬脂に輕粉を和して抹する。（直指方）【(五)牛皮惡癬】夜五更に炙いた牛肉一片を食ひ、少時して輕粉半錢を溫酒で調へて服す。（直指方）【楊梅瘡癬】嶺南衞生方では、汞粉、大風子肉等分を末にして塗れば癒える。〇醫方摘玄では、輕粉二錢、杏仁四十二個を皮を去つて用ゐ、瘡を洗ひ拭ひ乾して搽る。三回以內で癒える。乾くときは鵞膽汁で調へる。【楊梅毒瘡】醫學統旨では、輕粉一錢、雄黄、丹砂各二錢半、槐花を炒り、龜版を炙き、各一兩を末にして糊で梧子大の丸にし、一日二回、一錢づつ冷茶で服すれば七日で癒える。〇楊誠の經驗方では、輕粉、胡桃仁、炒り研つた槐花、紅棗肉、各二錢を搗いて丸にし、三服に分けて、第一日は雞湯で服し、第二日は酒で服し、第三日は茶で服す。以上三日で服し盡せば、五日で瘡が乾き、七日で痂が落ちる。〇又ある方では、(六)豮豬の腎一對を膜を去つて批開し、各〻輕粉一錢を摻つて押し、麻油二兩で燒熟して一時に食ふ。口を破り牙を腫さぬやうに注意を要する。かくて後(七)金銀花藥を服す。〇又ある方では、大雞卵一箇の黄を取り去つて白を殘し、輕粉を入れて攪き勻

(五)牛皮癬ハ牛頸ノ皮ノ如ク厚クシテ堅キモノ。
(六)豮豬ノ豮ハ去勢シタル豕。
(七)金銀花ハ忍冬。

ぜ、糊と紙で口を貼り塞ぎ、飯の上で蒸熟して食ふ。【下疳陰瘡】輕粉末を乾して摻れば結靨して癒える。（萬表積善堂方）【臁瘡の合せぬもの】虀汁を温めて洗ひ、拭ひ乾してから、葱汁で輕粉を調へて傅ける。○ある方には、輕粉五分、黃蠟一兩を用ゐ、粉を紙上に摻つて蠟を鋪き、瘡上に縛り付けて置けば水が出て癒える。（永類方）【癰疽惡瘡】幷に楊梅諸瘡には、水銀一兩、朱砂、雄黃各二錢半、白礬、綠礬各二兩半を、むらなく研り、罐に盛り燈盞で蓋をして鹽泥で塗り固め、文武火で錬り、罐の口へ蒸升させて掃き取り、三錢づつに乳香、沒藥各五分を入れ、太乙膏の上に灑して貼れば卓越せる效がある。これを五寶霜と名ける。

粉霜（綱目）

和名　昇汞・猛汞（鹽化第二水銀）
學名　Corrosive Sublimate ($HgCl_2$)

【釋名】**水銀霜**　**白雪**（綱目）**白靈砂**　時珍曰く、汞粉を轉化させて霜としたものだから粉霜といふのである。抱朴子に『白雪とは粉霜のことである。(一)海鹵を以て匱蓋とし、土鼎を以て精華を洩さぬやうにし、七日にして成るものである。陽氣を充分にして陰のために侵されぬやうにするには、薑、藕、地丁、河車で煉つて

(一)海鹵ヲ以テ匱蓋トスト云フハ、後段修治條崔氏ノ水銀霜ヲ作ル法ヲ見テ其意ヲ解スベシ。

點化するがよい。これは仙道にあつては玄壺に比すべく、人間にあつては精原に比すべく、丹にあつては木精に比すべく、造化にあつては白雪に比すべく、天にあつては甘露に比すべきものである』といつてある。

修治　時珍曰く、升錬して粉霜を作る法は、眞汞粉一兩を瓦罐の內に平均に入れ、燈盞を仰向けて罐の口に蓋をし、隙間を鹽泥で塗り、先づその罐の四圍に少しの炭火を鋪いて熱を加へながら、水で濕した紙で蓋にした燈盞の內側を間斷なく摩擦し、漸次に炭火を加へて罐の頸まで積上げた程度で火を止め、冷えきつてから取出せば白蠟のやうな霜に成るのである。按ずるに、外臺祕要に記載した古方中の崔氏の水銀霜を造る法には『水銀十兩、石硫黃十兩を各別に鐺で熬り、少時して銀が熱し硫黃が溶けた時、急にその一方を他の一方の鐺に移す。少しでも動作が緩慢では互に相入らぬものである。そこで急に攪き拌ぜると、少時して硫黃は灰になり水銀は見えなくなる。その時伏龍肝末十兩、鹽末一兩を入れて攪き拌ぜ、別に鹽末を鐺の底に一分厚さに鋪いてそれを移し、鐺の表面にも鹽末を一分に敷き、鐺の口を瓦盆で覆ひ、鹽土を和した泥で隙間を塗り、炭火で一伏時の間煨く。火力は、始

めは弱く終には強くする。かくて盆を開けて刷き下すのである。かやうにして全部を一回轉化して後、その(二)舊土を分けて四分し、その一分を霜に和し、鹽末二兩を入れ、前記の法の如くして飛錬し、それが終るとまた殘りの土一分に鹽末二兩を和して前の如く飛錬し、凡そ四回に轉化して土が盡きたならば、更に(三)新土を用ゐて此の方法で七轉する。かくて霜になつたものを用ゐるのだ』といつてある。この方法は後世知る人が稀だから、此に掲げて參考に供する。

【氣味】『辛し、温にして毒あり』時珍曰く、蕎麥稈灰、硫黄を畏る。

【主治】『痰涎を下し、積滯を消し、水を利す。功力は輕粉と同じ』(時珍)

【發明】元素曰く、粉霜、輕粉もやはりよく府を潔淨し、膀胱中の垢膩を去るものだ。しかし元來毒あるもので、齒を損ずるから少量だけを用うるがよい。時珍曰く、その功過は輕粉と同様である。

【附方】新六。『小兒の急驚』搐搦して涎の盛なるには、粉霜二錢、炒つた白牽牛、輕粉各一錢を末にし、一字づつを薄荷湯で服すれば涎を吐いて效がある。(全嬰方)『小兒の躁渴』粉霜一字——大兒には半錢——を蓮花湯で調へて服す。冬季に

(二)舊土トハ鑪底ニ殘留スル伏龍肝末ヲ指ス。

(三)新土トハ伏龍肝末ノ新シキモノヲ指ス。

(四)面脂ノ製法、水銀粉ノ附方中ニアリ。

は蓮肉を用ゐる。(保幼大全)【風熱驚狂】神白丹——傷寒積熱、及び風で驚搐を生じ、或は狂病の如く、諸薬の效なきものを治す。粉霜一兩を白麪六錢に和し、餅にして炙熟し、輕粉半兩、鉛白霜二錢半と共に研末し、水を滴して梧子大の丸にし、十丸乃至十五丸づつ米飲で服す。(宣明方)【瘢疹で生じた瞖】粉霜八分、朱砂一錢を末にし、水で調へて少量を耳に入れる。(鴻飛集)【腋臭】粉霜、水銀等分を(四)面脂に和して塗る。(聖濟錄)【楊梅惡瘡】粉霜一味を搽る。(集簡方)

銀朱(綱目)

和名 朱(硫化第二水銀)
學名 Vermillion

【釋名】猩紅 紫粉霜 時珍曰く、古人が謂つた水銀は丹砂から出るもので、鎔化して還元すればまた朱となるとはこの物のことである。銀朱なる名稱もまたそれに由つたのだ。

【集解】時珍曰く、胡演の丹藥秘訣に『銀朱を升錬するには、石亭脂二斤を新しき鍋で鎔し、次に水銀一斤を入れて炒つて青砂頭にし、星點の見えぬまで炒つて研末し、罐に入れ石版で蓋をして鐵線で縛り、鹽泥で隙間を固めて大火で煆き、冷

めてから取出すと罐に著いて居るのが銀朱、口に著いて居るのが丹砂である」とある。今は一般に黄丹、及び(一)礬紅を雜ぜたものが多く、それは色が黄黯だから注意するがよい。眞物は水華朱と呼ばれて居る。水銀一斤に對し燒朱十四兩八分、次朱三兩五錢の割合で製し得るものだ。

【氣味】【辛し、溫にして毒あり】【主治】【積滯を破り、痰涎を劫し、結胸を散じ、疥癬惡瘡を療じ、蟲、及び虱を殺す。功力は粉霜に同じ】(時珍)

【發明】時珍曰く、銀朱なるものは硫黄と汞とを共に升錬して成るものである。その性は燥烈であつて、やはりよく齒齦を爛らせ、筋を拘攣させる。その功過は輕粉と同樣だ。現に料理人が往往これで色付けた料理を出すことがあるから、その場合は棄て去るがよい。

【附方】新十二。【小兒の(二)内釣】多く啼くには、銀朱半錢、乳香、煨蒜各一錢を研末して黍米大の丸にし、生後半歲の小兒には五丸を薄荷湯で服ます。(心鑑)【男女の(三)陰毒】銀朱、輕粉各一錢を五日獨蒜一箇と搗き和して餅にし、男は左、女は右の手の心に貼り、兩手を重ね合せて陰の下へ置けば、少頃して呼吸を囘復し、汗

(一) 礬紅ハ綠礬ヲ煅キ赤色ニ變ジタルモノヲ云フ。

(二) 内釣ハ小兒ノ疝氣。

(三) 陰毒ハ筋肉炎カ。

(四)結胸、消化不良ニテ胸ノ痛ムヤマヒ。

(五)海螵蛸ハイカノカフ。

(六)魚臍丁ハ魚ノ臍ノ形ニ腫レル疔腫。

が出て癒える。口に微に息のあるものならば活きるものである。(唐瑤經驗方)【痰氣(四)結胸】鶴頂丹——陰陽、虛實を問はず、陷胸、瀉心等の藥を炒り、銀朱半兩、明礬一兩と共に碾つて瓦盞に入れ、火を盛つた熨斗で鎔し、急に刮り搓つて丸にし、一錢づつを薑汁少量を入れた眞茶で服す。心上にかすかに音が聞えて結胸は自ら散じ、臟腑を動搖せず、眞氣を傷らない。明礬は痰を化し、銀朱は積を破るものだからである。(會世榮活幼全書)【正水腫病】大便の利する者には、銀朱半兩、硫黃を煆いて四兩を末にし、麪糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを服す。(普濟方)【咽喉の疼痛】銀朱、(五)海螵蛸末等分を吹いて涎を取る。(救急方)【火焰丹毒】銀朱を雞子淸で調へて塗る。(李樓怪症方)【湯火の灼傷】銀朱を研細し、菜油で調へて傅ければ二回で癒える。(多能鄙事)【疽瘡發背】銀朱、白礬等分を湯に煎じ溫めて洗ひ、桑柴火で遠火に炙る。一日三回試むれば甚だ效がある。(救急方)【(六)魚臍丁瘡】四面赤く中央黑きには、銀朱を水に和して丸にし、一回に一丸を酒で飮む。これを走馬丹と名ける。(普濟方)【楊梅毒瘡】銀朱、官香等分を末にし、紙撚に卷き込んで燈に點じ、桶の中へ置いて鼻でその烟を吸ふ。一日一回、七日で癒える。〇又ある方では、銀朱二錢、

孩兒茶一錢、龍掛香一錢、皂角子一錢を末にし、上記の方法の如くして用ゐる。○又ある方では、銀朱、輕粉各一錢、黃蠟、淸油各一兩を溶和し、油紙にのして貼れば瘡痂は自ら落ちる。【筋骨疼痛】猩紅三錢、枯礬四錢を末にして三本の紙撚を作り、毎朝その一本を油に蘸し火を點けて臍を熏じ、寢具を被つて臥し汗を取る。（纂要奇方）【日久しき頑瘡】收らぬには、銀朱一錢、(七)千年地下の石灰五分、松香五錢、香油一兩を末にして溶し、紙に攤して貼る。（應急良方）【臁瘡の收らぬもの】方は上に同じ。【血風臁瘡】脚や股に生ずるは濕毒で風となつたものである。黃蠟一兩を溶し、銀朱一兩を入れ、攪きまぜて紙にのし、瘡を刺し孔をあけて貼る。（簡便方）【黃水濕瘡】銀朱、鹽梅を搗き和して傅ける（集玄方）【癬瘡の蟲あるもの】銀朱、牛骨髓を桐油で調へて搽る。（醫方摘要）【頭上の虱】銀朱を醋に浸して日毎に頭髮を梳く。○銀朱の包紙を盌を覆せて燒き、盌に附着した烟煤を(八)茶淸で洗ひ落して頭髮に搽みつけ、一夜頭を包んで置けば朝までには虱が盡く死ぬ。（積德堂方）

靈砂（證類）

和名　硫酸水銀
英譯名　Sulphate of Mercury

(七) 千年地下石灰、古墓中ノ石灰ヲ云フ。

(八) 茶淸ハ茶ノ煎汁。

(一)水火既濟爐ハ蒸溜器。
(二)東鍼紋ハ縦ニ並行セル線紋アル結晶。
(三)逍遙爐ハ昆爐ノコトナラン。

釋名　**二氣砂**　愼微曰く、茅亭客話の記載に『靈砂を以て猿や鸚鵡や鼠や犬などを飼へば、それ等の動物の心が變じて人間の言語を解するやうになる。これは丹の力が感應するために靈となるのだ』とある。時珍曰く、この物は至陽を以て至陰を勾し、陰を脱して陽に返すものだ。故に靈砂と呼ぶのである。

修治　愼微曰く、靈砂は、水銀一兩、硫黄六銖を研り、炒つて青砂頭にしてから(一)水火既濟爐に入れ、それを引き出して見て、(二)東鍼紋の如くになれば完全に出來上つたのである。

時珍曰く、按ずるに、胡演の丹藥祕訣に『靈砂を升錬するの法は、新しき鍋を(三)逍遙爐にかけ、蜜を鍋の底に揩つて弱き火で燒き、硫黄二兩を入れて鎔し、水銀半斤を入れ、鐵匙で急に攪き廻して青砂頭にする。若しその際焔が起ちさうになつたときは醋を噴きかけて鎮める。かくて汞に星の見えなくなつてから取り出して細研し、水火鼎の中に盛り入れて鹽泥で固濟し、下から自然火の熱を加へて蒸發させるのであつて、鼎内の水が十二盞まで乾くを程度とし、取り出して見て東鍼紋の如くなつて居れば完全に出來上つたのだ』とある。庚辛玉冊には『靈砂は至神の物であ

(四)五行ハ木火土金水。

(五)九還ハ九遍丹ノ略ナリ。化合ノ術ニヨリ幾遍モ物質ヲ離合シテ元ノ化合物ニ復歸セシムルヲ云フ。

(六)一伏時周天ノ火トハ一日一夜間火ヲ用ウルコト。

(七)陰陽ヲ升降ストハ、冷熱ヲ調節スルコト。

つて、硫と汞とで化合して形を成す。これを丹基と謂ふ。天地造化の功を奪ひ、陰陽不測の妙を竊み、以て(四)五行を變化し、(五)九還を錬成し得るものだ。そのもののまだ鼎中で升錬を經ぬものをば青金丹頭といひ、已に鼎中で升錬を經たものをば乃ち靈砂といふのである。靈砂に三種あつて、(六)一伏時周天の火を以て錬成したものを金鼎靈砂といひ、九回繰返して鼎に入れ、周天火で錬成したものを九轉靈砂といひ、地數三十日を以て炒錬して製したものをば醫家の老火靈砂といふ。いづれも桑灰に醋を用ゐて淋取した汁で煮伏してから用うるやうにすれば良好である』と記してある。

〔氣味〕【甘く、溫にして毒なし】〔主治〕【五臟のあらゆる病。神を養ひ、魂魄を安んじ、氣を益し、目を明にし、血脈を通じ、煩滿を止め、精神を益し、精魅、惡鬼の氣を殺す。久しく服すれば神明に通じ、老衰せず、身を輕くして神仙となり、人の心を靈ならしめる】(愼微)【上盛下虛、痰涎壅盛、頭旋、吐逆、霍亂、反胃、心腹冷痛に主效があり、(七)陰陽を升降し、(八)水火を既濟し、五臟を調和し、元氣を補助する。研末し、糯糊で丸にして棗湯で服するは、最も能く鎭墜するの神丹である】

（八）既濟ハ水火相交リテ用ヲ爲スヲ云フ。

（九）陰陽水ハ熱湯ト新汲水トヲ混合シタルモノ。

（時珍）

【發明】時珍曰く、硫黃は陽の精、水銀は陰の精であつて、夫婦の關係に擬すべきものだ。純陰、純陽の二體が完全に結合するから、能く造化の妙を奪つて陰陽を升降し、水火を既濟し、危きを扶け、急を救ふの神丹となるのである。ただ久しく服してはならぬだけである。蘇東坡は『この藥は、反胃の久患や一切の吐逆、小兒の驚吐を治してその效神の如くである。それは陰陽に配合するの妙があるからだ』といつて居る。時珍は常に（九）陰陽水でこれを服ませるやうにして居るが、就中妙である。

【附方】新七。【伏熱吐瀉】陰陽丸――硫黃半兩、水銀一錢を黑く研り、薑汁の糊で小豆大の丸にし、三歲の小兒は三丸を冷水で服し、大人は三四十丸を服す。（鄭氏小兒方）【諸種の吐逆】方は上に同じ【霍亂吐逆】盧賓、冷熱を問はず、二氣散、一名靑金丹――水銀、硫黃等分を星の見えぬまで研り、每服一字乃至半錢を生薑湯で調へて服す。（錢氏小兒方）【脾疼反胃】靈砂一兩、蚌粉一兩を共に赤く炒り、丁香、胡椒各四十九粒を末にし、自然薑汁で煮た半夏粉糊で梧子大の丸にし、二十九丸づつ

薑湯で服す。（普濟方）【冷氣心痛】靈砂三分、五靈脂一分を末にし、稀糊で麻子大の丸にし、二十丸づゝを食前に石菖蒲生薑湯で服す（直指方）【九竅の出血】突然の劇しき驚から發し、その脈の虛するものには、靈砂三十粒を人參湯で服すれば三服で癒える。この病證を血が熱に遇ふたために流れるものと誤認して、妄に涼藥を用ゐて事を誤つてはならぬ。（楊仁齋直指方）【養正丹】また交泰丹と名ける。これは寶林眞人谷伯陽の方であつて、邪を却け、正を輔け、陽を助け、眞を接し、元氣が缺乏して陰邪が擅に交り、上盛にして下虛し、氣が升降せず、呼吸が足らず、頭が眩暈して呼吸短く、心怯し、驚悸し、虛煩し、狂言し、盜汗、腹痛、腰痛、反胃、吐食、霍亂、轉筋、欬逆するものを治す。又、中風で涎を流し、意識明瞭ならず、陽氣が脫せんとして四肢厥冷し、傷寒陰盛で自汗し、唇青く、脈沈むもの、婦人の產後、月經不順、帶下腹痛を治す。（一〇）黑盞一箇に黑鉛の溶汁を入れ、次に水銀を入れ、次に朱砂末を入れて星の見えぬまで炒り、少頃して硫黃末を入れて急に攪きまぜ、焰の起つときは醋をかけて焰を鎭める。かくて取り出して研末し、糯粉を煮た糊で綠豆大の丸にし、二十丸づつを鹽湯で服す。之れに用うる四味ともに分量は等分であ

（一〇）黑盞ハ黑金盞即鐵盞ナラン。

(一)石門ハ山名凡ソ八箇所アリ、此ニハ今ノ四川省慶符縣ノ南ニアル山ヲイフナラン。或ハ縣名、今ノ湖南省澧州ノ地ヲイフカ。

る。この薬は、陰陽を升降し、心腎を既濟するもので、その神效は悉く述べ盡せぬ。（和劑局方）

雄黄（本經上品）

和名　ゆうわう・鷄冠石（二硫化砒素）
學名　Realgar（As_2S_2）

釋名　**黄金石**（本經）**石黄**（唐本）**熏黄**

普曰く、雄黄は山の陽に生ずる。丹の雄なるものだ。故に雄黄と名くるのである。

恭曰く、(一)石門から出るものを石黄と名ける。やはりこれも雄黄であつて、通じて黄金石と名けるが、石門のものは比較的劣るのである。質の悪いものは熏黄と名ける。これは瘡疥を熏する以外に用ゐられぬから熏黄と名けたのである。藏器曰く、今世間では石黄の中から吟味して精明なものを取つて雄黄といひ、外の黒いものを熏黄といふ。雄黄は焼いて臭くないが熏黄は焼けば臭い。この點で辨別し得る。

權曰く、雄黄は金の苗だ。故に南方の冶金場附近には時としてこれがある。ただ西方から來る眞物のやうに良質なわけに行かぬだけである。宗奭曰く、金の苗ではない。金鑛の出る處に雄黄はない。時珍曰く、雄黄は黄金を點化する場合に入れて

用ゐるから黄金石といふのである。金の苗ではない。

【集解】別錄に曰く、雄黃は(二)武都の山谷、(三)敦煌の山の陽に生ずる。採收に一定の時期はない。弘景曰く、武都は氐、羌の地で、(四)仇池と呼ぶ地方のことである。(五)宕昌にもあるが、質がやゝ劣る。敦煌は(六)涼州の西數千里の地點であつて、近來擾亂が繼續してこの物が來なくなつたため、皆石門、(七)始興の石黃の良質のものを用ゐて居る。涼州產の黃の良質のものは、雞冠のやうな色で臭くなく、質が堅實だ。黯黑色のもの、及び虛軟なものは良品でない。

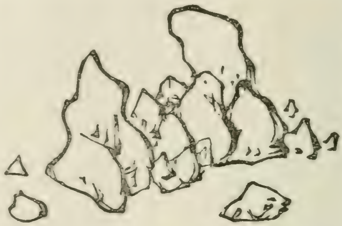
恭曰く、宕昌、武都のものは質が良く、塊が方數寸ほどあり、明徹で雞冠のやうなものだ。或はこれを枕にしこれを服すれば邪惡のものを辟けるともいふ。青黑色で堅いものは藥用には入れない。(八)貞觀年間に(九)宕州から新に出たものに方數尺の大なるものを得たが、重く且つ脆いのでその形を全うして運搬することが出來なかつたさうだ。

禹錫曰く、水經注に『黃水は(一〇)零陵縣の西北に源を發する。(一一)そこから巫山溪に至る間に雄黃を產し、頗る神異があるので、冬季に入つて祭祀をしてから數丈の

(二)武都ハ丹砂ノ註ヲ見ヨ。
(三)敦煌ハ漢ノ郡名、今ノ甘肅省安肅道敦煌縣ハソノ舊治ナリ。
(四)仇池トハ甘肅省成縣ノ西ニ在ル山ノ名ニシテ、ソノ一帶ノ地ヲ仇池ト稱ス。
(五)宕昌ハ西羌ノ別種ノ國名。ソノ地ハ今ノ甘肅省岷縣ノ南方ニアリ。
(六)涼州ノ舊治ハ今ノ甘肅省武威縣ノ地ニアリ。
(七)始興ハ土部白堊ノ註ヲ見ヨ。
(八)貞觀ハ唐太宗ノ年號、元年ハ西暦六二七年ニ當ル。
(九)宕州ハ今ノ甘肅省ノ宕昌鎭ノ地ナリ。
(一〇)零陵縣ハ漢ニ置ク、故城ハ今ノ廣西

省全縣ノ西南七十八支里ニ在リ。
(一二)巫山溪ハ今ノ四川省巫山縣ノ東、所謂巫山峽ノ溪谷ナリ。

深さに石を鑿つて雄黄を取る。故に黄の字を取つて河の名としたものだ』とある。又抱朴子には『雄黄は武都の山から出たものを擇び取るがよい。純にして雜なく、その色が雞冠のやうに赤く、光の曄曄たるものならば用ゐられる。純黄色の雌黄の色に似て光なきものならば仙藥には役に立たぬ、病を治する藥になるだけのものだ』とある。



〔雄黄〕

◯頌曰く、今の階州が卽ち古の武都であつて、山中に雄黄がある。形は塊で丹砂の如く、明徹で石が雜らず、その色の雞冠の如きものが眞物である。青黑色で堅いものもある。それは熏黄といふのだ。形や色が眞物に似てゐても臭いものがある。それは臭黄と名ける。いづれも服食には入れず、ただ瘡疥の治療に用うるに過ぎない。しかしその臭氣は醋で洗へば取れるので、眞物と僞る場合があるから特にその辨別に注意を要する。又、階州の西戎に接する地方から一種の水窟雄黄といふが出る。山岩中の水流のある處に生ずるもので、その石を青煙石、白鮮石といひ、

その中から雄黄が出るのである。その塊の大なるは胡桃ほど、小なるは粟、豆ほどで上部に孔竅があり、その色は深紅で微に紫を帶び、體質は極めて輕虛である。功用が格別勝れて居るので、丹竈家では特に貴重品として居る。

時珍曰く、武都の水窟雄黄を北方の地では丹砂の代用にするが、しかし研細するとその色に黄を帶びて居るものだ。丹房鑑源に『雄黄は千年にして化して黄金となる。武都のものが上級品で西番のものは之に次ぐ。鐵色なるものが上等で雞冠色のものは之に次ぐ(一二)沈水銀脚の鐵末で表面を拭ひ了つたとき、やや黄色の衣の生ずるものが眞物である。またこれを試驗するに、その物で蟲を熁して蟲が死ぬるものならば眞物であり、口中で細嚼し湯を含んでも鋭く臭くないものならば之に次ぐ』とある。

斅曰く、凡そ雄黄を用うる場合に、臭黄といふ臭きもの、黑雄黄といふ烏雞頭の如き色のもの、夾膩黄といふ一層は黄で一層は石のもの等を用ゐてはならぬ。いづれも藥用に堪へぬものだ。眞の雄黄は鷓鴣鳥の肝の色に似たものを上級品とする。

【修治】斅曰く、雄黄三兩に對し、甘草、紫背天葵、(一三)地膽、碧稜花各五兩を

(一二)沈水銀脚ノ鐵末、鐵砂ノ一種カ。

(一三)地膽草、苦芙ノ

一名ニ

（一四）大觀本草、如布ノ上ニ引之ノ二字アリ。

用ゐ、細かに剉んで東流水を入れ、坩鍋中で三伏時の間煮て漉し、粉のやうに搗いて水飛し、澄まして黑きものを取去り、晒し乾して再び研つて用ゐる。雄黄の中に劫鐵石があるものは赴矢黄といふ、これは鐵を劫すものだ。藥用に入れてはならぬ。思邈曰く、凡そ服食には武都の雄黄を用ゐ、必ず油で九晝夜煎じてから藥に入れる。然らざれば毒があるものだから、決して生で用ゐてはならぬ。

時珍曰く、ある法では、米醋に蘿蔔汁を入れたもので雄黄を煮て乾し用ゐるがよし。抱朴子には『服食の法は、或は蒸煮し、或は消石で溶して水にし、或は豬脂で裹んで赤土の下で蒸し、或は松脂を和し、或は三物で（一四）布の如く錬り、白きこと水の如くする。此の如くして服すれば長生し、あらゆる病を除き、三蟲を殺すものである。伏火のものは銅に點じて金となし、銀を變じて金となすものだ』とある。

【氣味】【苦し、平寒にして毒あり】別錄に曰く、甘し、大溫なり。權曰く、辛し、大毒あり。大明曰く、微毒あり。土宿眞君曰く、南星、地黄、萵苣、五加皮、紫河車、地榆、五葉藤、黄芩、白芷、當歸、地錦、鵞腸草、雞腸草、苦參、鵞不食草、圓桑蝟脂はいづれも雄黄を制し得る。

【主治】【寒熱、鼠瘻、惡瘡、疽痔、死肌。物の精、惡鬼、邪氣、あらゆる蟲毒を殺すこと(一五)五兵に勝る。錬つて之を食へば、身を輕くし、神仙となる】(本經)【疥蟲、䘌瘡、目痛、鼻中の息肉、及び絕筋、破骨、あらゆる關節中の大風、積聚、癖氣、中惡、腹痛、鬼疰を療じ、諸種の蛇虺の毒を殺し、藜蘆の毒を解し、顏色を悅澤にする。これを餌服すれば皆腦中に飛入して、鬼神に勝ち、天年を延べ、壽命を益し、中を保つて饑ゑぬ。銅と結合すれば金となし得る】(別錄)【疥癬、風邪、癲癇、嵐瘴、一切の蟲獸傷に主效がある】(大明)【肝氣を搜り、肝風を瀉し、涎積を消す】(好古)【瘧疾の寒熱、伏暑の泄痢、飮酒に因する癖、驚癇、頭風、眩運を治し、腹中の瘀血を化し、勞蟲、疳蟲を殺す】(時珍)

【發明】權曰く、雄黃はよく百毒を殺し、百邪を辟け、蠱毒を殺す。人が之を佩ぶれば鬼神が敢て近かぬ。山林に入つても虎狼が伏し、川水を渉つても毒物が敢て傷けない。抱朴子に曰く、雄黃を帶びて山林に入れば蛇を畏れぬ。蛇に咬まれたとき少量を傅ければその場で直ちに癒える。吳、楚の地方は暑濕、鬱蒸して毒蟲、及び(一六)射工、沙虱の類が多いのだが、雄黃、大蒜等分を搗合せた一丸を佩びてゐ

(一五)五兵は戈、殳、戟、酋矛、夷矛。

(一六)射工、沙虱、百

病主治ヲ見ヨ。

（一七）黄門ハ官名、皇帝ノ近侍者、位階ハ散騎ニ同ジ。

（一八）大庾嶺ハ江西、廣東兩省堺ノ大山脈、庾嶺以南ヲ嶺南、嶺表等ト稱ス。

て、傷けられたときに塗れば良い。

宗奭曰く、焚けば蛇が皆遠く去る。蛇咬を治する方は五靈脂の條に記載してある。

唐書に『甄立言は方書を研究して大常丞になつた人であるが、適〻年六十餘のある尼が心腹鼓脹し、身體が痩せ衰へ、已に二年もその病を患つてゐたが、立言がそれを診て「腹中に蟲がある。これは誤つて頭髪を食つたことがあるだらう。病はそれが原因だ」といつて、雄黄一劑を服ませると、暫くして太さ拇指ほどで目のない一條の蛇を吐き出した。それを燒いて見るとやはり髮の臭氣があつた。老尼の病はそれで癒えた』と書いてある。又、明皇雜錄には『ある（一七）黄門が交州、廣州の地方へ勅使として派遣されて歸京したとき、太醫周顧がその人を顧みて「この人の腹中には蛟龍が居る」といつた。玄宗皇帝は驚いて「確に疾があるか」と訊ねると、その黄門は「騎馬で（一八）大庾嶺を越える際、甚しき暑熱に渇を覺えたので、苦し紛れに谷間の水を飲んだところ、爾來腹中が堅く痞へ、石の如く感ぜられる」と奉答した。そこで、消石、雄黄を煮て服ませると、立ろに何か一物を吐き出した。長さ數寸、太さ指ほどあつて、よく視るとその物には已に鱗甲が悉く具つて居た』といふ

(一九)黃堥ハ瓦合、素燒ノ蓋物。

ことが記されてある。これはいづれも蠱毒を殺すの實例だ。

○頌曰く、雄黃を瘡瘍に用ゐた歷史は古いものであつて、周禮に『瘍醫が瘍を療するには五毒を以て之を攻む』とあり、鄭康成の注に『今の醫方の五毒の藥の製法は、(一九)黃堥を合せて其中に石膽、丹砂、雄黃、礬石、慈石を入れ、燒くこと三晝夜にして蒸升する烟が上の合に着く。それを雞の羽で掃き取つて瘡に注けるのであつて、惡肉、破骨を悉く出すものだ』とある。楊億の筆記には『楊嵎が若い頃、頰に瘍が生じて上下の顎に連り、外部は頤をかぶせたやうに高く腫れ上り、內部は潰れて膿血を出し、痛楚忍び難く、あらゆる治療を試みたが幾年經つても癒えなかつた。ところがある人から、鄭注に記載してある方法で藥を燒き、それを注けるがよいといふことを敎へられ、實行して見ると、少時して朽骨が牙と共に潰れ出して遂に癒えた。古方の病を攻むる功力の速なる事實が信ぜられる』と書いてある。堥の字の音は武で、素燒の蓋物である。

○時珍曰く、五毒の藥に就いては、范汪の東陽方に、變じて飛黃散となし、緩疽惡瘡を治し、惡肉を蝕するものとしてある。その法は、一箇の瓦盆の中央に雌黃を置

き、丹砂を南に置き、慈石を北に置き、曾青を東に置き、白石英を西に置き、礜石を上に置き、石膏をその次に置き、鍾乳を下に置き、その全部を雄黄で覆ひ、下に雲母を布く。分量は各二兩の末を用ゐる。それを一枚の盆で蓋ふて羊毛泥で固濟し、三隅竈に入れて古葦で一日間燒き、その飛黄を取つて用ゐるのである。そもそも雄黄なるものは、瘡を治し、毒を殺すの要藥であるが、また肝經の氣分に入るものだから、肝風、肝氣、驚癇、痰涎、頭痛、眩運、暑瘧、泄痢、積聚の諸病に用ゐて殊功があり、またよく血を化して水にする。しかし方士の徒は鍊製して服餌に充て、それに如何にも不思議さうな有難さうな説明を附け加へるので、そのために害毒を被るものも多いのである。按ずるに、洪邁の夷堅志に『虞雍公允文は暑氣に中つて下痢し、月を累ねて瘥えなかつたが、ある時の夢にある處へ行くと、そこに一人の仙官のやうな人が居て、公は請ぜらるるままに座に著き、壁間を見ると藥方の文句が書いてある「暑毒脾に在り、濕氣脚に連るは、泄せざれば則ち痢し、痢せざれば則ち瘧す。獨雄黄を鍊り、蒸餅にて藥を和せよ。別に治療を作して、醫家大いに錯る」といふのであつた。公はこの夢に見た方に依つて雄黄を九回水飛し、竹筒に入

れて七回蒸して研末し、蒸餅で和して梧子大の丸にし、日毎に三回、甘草湯で七丸づつを服すると、果して病が平癒した』といふことが書いてある。太平廣記には、成都の劉無名が、雄黄を服して長生したといふ話が載せてあるが、方士のいふ言とて的にはならない。

【附方】　舊十三、新三十九。【卒中邪魔】雄黄末を鼻中に吹く。（集驗方）【鬼に襲はれて作つた病】腹中が煩滿して氣絶せんとするには、一日三回、雄黄粉一刀圭づつを酒で服すれば血を化して水にする。（孫眞人千金方）【魘魔を禳ふ】雄黄を頭上に帶び、或は棗ほどを左腋下に繫ければ終身魔の禍を受けぬ。（張文仲方）【家屋の邪氣】眞雄黄三錢、水一盌を用ゐ、東南の桃の枝を以て酒を捧げ呪を誦へて屋根裏へ入れて置けば邪氣が絶える。女に見られてはならぬ。（集簡方）【婦人の邪病】婦人が妖邪の物と交媾して、獨語をいひ、獨り笑ひ、わけもなく悲愁し、恍惚たる狀態のものには、雄黄一兩、松脂二兩を溶し、虎の爪で攪きまぜて彈丸子ほどの丸にし、夜間籠の中でそれを焚いて病婦をその上に坐らせ、寢具を被て頭だけ外に出させて置く。三劑を過ぎずして邪交を斷つものである。その後は雄黄、人參、防風、五味子

等分を末にし、毎朝水で方寸匕を服して癒す。(肘後方)【小丹服法】雄黃、柏子仁各二斤、煉つた松脂十斤を合せ搗いて丸にし、毎朝北に向いて五丸を服す。百日後には魂を拘し、魄を制し、神人と交際が出來る。(太上玄變經)【胎中の女兒を男兒に變ずる】婦人が妊娠を自覺したとき、雄黃一兩を紅絹の囊に盛り、それを胎に當てて胎を養へば女を轉じて男にする。陽精の地產として至きものの力を感ずるわけである。(千金方)【小兒の諸癇】雄黃、朱砂等分を末にし、毎服一錢を、豬心血を虀水に入れたもので調へて服す。(直指方)【骨蒸發熱】雄黃末一兩を尿一升に入れて粉のやうに研り、方、圓一尺の黃理石一枚を三食頃の間炭火で燒き、その石上に前の雄黃と尿との濃汁を淋してその上に薄氈を敷き、患者の衣を脫がせてそれに坐らせ、衣類などで四邊を圍んで氣の洩れぬやうにする。三五回で癒える。(外臺祕要)【傷寒欬逆】服藥無效なるには、雄黃三錢、酒一盞を七分に煎じ、熱に乘じてその氣を嗅げば止る。(活人書)【傷寒狐惑】蟲が下部を蝕して痛痒止まぬには、雄黃半兩を瓶の中で燒いてその下部を熏ずる。(聖惠方)【偏頭風病】至靈散――雄黃、細辛等分を末にし、一字づつを鼻に吹く。左痛には右に吹き、右痛には左に吹く。(博濟方)

【五尸注病】發作すれば痛み、部位が一定せず、視力が沈重になり、臟腑に纏結して上に心脇を衝く。これは身體中の尸鬼が內部を攪亂して害を爲すのである。雄黃、大蒜各一兩を杵いて彈子大の丸にし、熱酒で一丸づつを服す。（肘後方）【腹脇の痞塊】雄黃二兩、白礬一兩を末にし、麪糊で膏に調へ、のして貼れば不思議に功力がある。一回でなほ效なきには再び貼る。數百斤あると思ふほどの大便が通じて癒える。祕方である。（集玄方）【脇下の痃癖】及び飲食傷には、煮黃丸——雄黃一兩、巴豆五錢を共に研つて白麪二兩を入れ、水を滴して梧子大の丸にし、二十四丸づつを、三十回煮沸した漿水に冷漿水を入れて冷したもので服す。通じのつくを度とする。效神の如きものだ。（保命集）【飲酒で發つた癖】酒癥丸——過度の飲酒に因する惡心、嘔吐、及び酒が胃に停滯するために飲物を見ると吐氣を催し、久しくして癖となりたるを治す。皂角子大の雄黃六箇、巴豆を皮油のまま十五箇、蠍稍十五箇を共に研つて白麪五兩半を入れ、水を滴して豌豆大の丸にし、乾かんとするとき麩の中へ入れて香しく炒り、一粒を水に入れて見て浮くやうにして取り收め、毎服二丸を溫酒で服す。（和劑局方）【髮癥で油を飲むもの】油を五升ほど飲めば快く、然らざれば病

むものがある。これは髮が胃に入つて氣血がそれを裹み、化して蟲となつたものである。雄黄半兩を末にし、水で調へて服すれば蟲が自ら出る。（夏子益奇疾方）【癥瘕積聚】三尸を去り、氣を益し、天年を延べ、老衰を却ける。雄黄二兩を末にして九回水飛し、新しき竹筒内に入れて蒸餅一塊で口を塞いで七回蒸し、好き粉脂一兩で和して綠豆大の丸にし、一日三回、七丸づつ酒で服す。（千金方）【小腹痛滿】尿を通ぜぬには、雄黄末を蜜で丸にして尿道孔を塞ぐ。（傷寒類要）【陰腫】斗ほどに腫れて痛み忍び難きには、雄黄、礬石各二兩、甘草一尺を水五升で二升に煮て陰を浸す。（肘後方）【飲食物の中毒】雄黄、青黛等分を末にし、二錢づつ新汲水で服す。（鄧筆峰方）【蟲毒、蠱毒】雄黄、生礬等分を端午の日に研り、蠟で化して梧子大の丸にし、七丸づつを藥王菩薩を七回念じて熟水で服す。（蘇東坡良方）【結陰便血】雄黄を多少に拘らず棗の中へ入れて線で括つて湯で煎じ、鉛一兩を汁に溶してその湯に傾け入れ、朝から夕まで、湯盡れば沸湯を添へて煮て取出し、それを末にし、棗と共に杵き和して梧子大の丸にし、三十丸づつを黑鉛を煎じた湯で空心に服す。只三服で止む。（普濟方）【暑毒泄痢】方は發明の項を見よ。【中風の舌強】正舌散——雄黄、荊芥穗

等分を末にし、豆淋酒で二錢を服す。（衛生寶鑑）【破傷中風】雄黃、白芷等分を末にし、酒で煎じて灌げば甦る。（邵眞人經驗方）【狂犬の咬傷】雄黃五錢、麝香二錢を末にし、酒で二回に服す。（救急良方）【蟲の耳に入つたとき】雄黃を撚にして熏ずれば自ら出る。（十便良方）【馬汗の瘡に入るもの】雄黃、白礬各一錢、烏梅三箇、巴豆一箇を合せ研り、油で半錢を調へて傅けるがよし。（經驗方）【蜘蛛の咬傷】雄黃末を傅ける。（朝野僉載）【金瘡內漏】豆半分ほどの雄黃を納れてから、尿で五錢を服す。血は皆化して水となる。（肘後方）【杖瘡の腫痛】雄黃二分、密陀僧一分を研末し、水で調へて傅けるが極めて妙である。（救急方）【藥箭の毒】雄黃末を敷ければ、汁が沸き出て癒える。（外臺秘要）【藜盧の毒を解す】水で雄黃末二錢を服す。（外臺）【小兒の痘疔】雄黃一錢、紫草三錢を末にして胭脂汁で調へ、まづ銀簪で突き破つてから搽る。極めて妙である。（痘疹證治）【白禿頭瘡】雄黃を豬膽汁で和して傅ける。（聖濟錄）【眉毛脫落】雄黃末一兩を醋で和して塗る。（聖濟錄）【筋肉化蟲】蟹のやうな蟲があつて皮下を走り、小兒の啼聲のやうな音のするは、筋肉が化したものである。雄黃、雷丸各一兩を末にし、豬肉に摻りかけて炙き、熱して盡く食へば自ら平安になる。（夏

（二〇）廣東瘡ハ楊梅瘡。

氏奇疾方）【蟲の如き風痒】成煉した雄黄、松脂等分を研末し、蜜で梧子大の丸にし、一日三回、十九づつを服すれば百日にして癒える。酒、肉、鹽豉を忌む。（千金方）【丁瘡惡毒】千金方では、四邊、及び中心を刺して雄黄末を傅けるが神效がある。○積徳堂方では、雄黄、蟾酥各五分を末にし、葱、蜜と搗いて小米大の丸にし、針で瘡の頂を刺破つて插入する。甚だ妙である。【（二〇）廣東惡瘡】雄黄一錢半、皮を去つた杏仁三十粒、輕粉一錢を末にし、瘡を洗淨してから、雄猪膽汁で調へて塗れば二三日で癒える。天下第一の方であつて、武定侯家の家傳である。（積徳堂方）【蛇纏惡瘡】雄黄末を醋で調へて傅ける。（普濟方）【纏喉風痺】雄黄を新汲水に磨つて一盞を服し、吐下すれば癒える。（續千金方）【風熱痛】雄黄、乾薑各等分を末にし、左痛には右へ、右痛には左へ鼻に嗅ぐ。【牙齒蟲痛】雄黄末を棗肉に和して丸にし、孔を塞ぐ。（類要）【走馬牙疳】臭く爛れて出血するには、豆ほどの雄黄七粒を用ゐ、一粒毎に核を去つた淮棗で包み、鐵線で串して燈火の上で燒き化し、末にして少量づつを摻る。涎の去るを度とする。（全幼心鑑）【小兒の牙疳】雄黄一錢、銅綠二錢を末にして貼る。（陳氏小兒方）【疳蟲の蝕鼻】雄黄、葶藶等分を研末し、臘豬膽に和して槐枝

で點ける。(金匱方)【耳の臭膿】雄黃、雌黃、硫黃等分を末にして吹く。(聖濟方)【日久しき臁瘡】雄黃三錢、陳皮五錢を青布で大撚に捲いて烟に燒いて熏ずる。熱水が流れ出て數回で癒える。(筆峯雜興)【鼻準の赤きもの】雄黃、硫黃各五錢、(二一)水粉二錢を頭生の乳汁で調へて傅ける。三五回に過ぎずして癒える。(攝生妙用方)

熏黃【主治】【惡瘡、疥癬。蟲虱を殺す。諸藥に和して熏嗽する】

【附方】新五。【小便不通】熏黃末豆ほどを尿道に入れるが良し。(崔氏方)【三十年の呷嗽】熏黃、木香、莨菪子等分を末にし、羊脂を塗つた青紙にその末を鋪き、竹筒中で烟に燒いて吸ふ。(崔氏方)【欬嗽の熏法】熏黃一兩を蠟紙で巧に捲いて十箇の筒を作り、燒烟を吸ひ嚥んで吐かすれば止る。一日に一回づつ熏じ、ただ白粥のみを食ひ、七日後に羊肉羹で補ふ。(千金方)【水腫上氣】欬嗽腹脹には、熏黃一兩、款冬花二分、熟艾一分を用ゐ、蠟紙に艾を鋪き、それに前の二味の末を洒し、荻管で捲いて筒にし、烟に燒いて吸ひ嚥めば三十口で瘥える。三日に一劑を用ゐ盡し、百日間は鹽、醋を斷つ。(外臺祕要)【手足の甲疽】熏黃、蛇皮等分を末にし、泔で疽を洗淨してから甲が肉に入つた部分を割き取つて傅ける。一時で痛を鎮め、神效があ

(二一)水粉ハ粉錫、和名タウノツチ。

る。（近効方）

雌　黄（本經中品）

和名　しわう・雌黄（三硫化砒素）
學名　Orpiment (As_2S_3)

【釋名】 坐　發音は七火の切（サ）。時珍曰く、山の陰に生ずるところから雌黄といふ。土宿本草に『陽氣が未だ足らぬものが雌となり、已に足りたものが雄となり、相距ること五百年にして結して石となる。造花の過程に於いて夫婦の關係にある。故に雌、雄と稱するのだ』とある。



〔雌　黄〕

【集解】 別錄に曰く、雌黄は武都の山谷に生じ、雄黄と同一の山の陰に面した方に生ずる。金のある山でその（一）金精が熏ずるときはそこに雌黄が生ずるものである。採收に一定の時期はない。弘景曰く、今の雌黄は、（二）武都、仇池から出るものを武都仇池黄といふ。色が少し赤い。（三）扶南、林邑から出るものを崑崙黄といふ。色が金のやう

（一）金ノ精氣ガ煙ノ如ク働ク。
（二）武都、仇池ハ丹砂ノ註ヲ見ヨ。
（三）扶南、林邑ハ金部金ノ條、及ビ石部黄礬ノ條ノ註ヲ見ヨ。

で雲母のやうに(四)甲が錯つて居る。畫家に珍重されるものだ。黄にして雌、雄の別は同一の山の陰と陽のやうなものだ。藥に合せるには武都產のものが勝れて居る。仙經には單服の法はない、ただ丹砂、雄黄と合せ飛錬して丹にするだけである。金の精は雌黄、銅の精は空青だ。然るに空青を服して反つて雌黄に勝つは、その理由が判らない。

○斅曰く、雌黄は、一塊の重さ四兩のもので、開けば千枚も重つたもののやうにめくり取れ、軟にして(五)爛金のやうなものが佳い。石の附着せるものや、黒く鐵の如き色のものは用ゐてはならぬ。

○時珍曰く、按ずるに、獨孤滔の丹房鑑源に『背陰のものが雌黄である。(六)淄、成のものは、色黒く、輕く乾き、焦錫の塊のやうだ。臭黄で作つたものは、硬くして衣がない。これを試驗するには、ただ指の爪の上で磨つて見て色のよいものならば良品である。又、燒いた熨斗の底へ描いて見てその色に(七)一筋の赤黄線が現れるやうなものが好い。舶來品で、血を噀いたやうなものも上等だ。(八)湘南のものは之に次ぐ。青いものは就中佳く、薄い葉子のものが上等である。黄金を造化するにはこ

(四)薄片重ナリアツテ居ル。

(五)爛金ハ熟金。

(六)淄ハ淄州、今ノ山東省濟南府ニ屬ス。成ハ成州、今ノ甘肅省成縣ノ地ナリ。

(七)丹房鑑源ニ「如赤黄線一道者」ニ作ル。

(八)湘南、大觀本草ニ湖南トアリ。湖南

省ノ湘水ヲ泝ル一帶ノ地ヲ湘南トイフ。

(九)不男五種アリ、天、犍、漏、怯、變、是ナリ。人部傀ノ條ニ解アリ。

(一〇)非形ハ畸形。カタハ。

(一一)天碧草、兎絲子下ニアリ。

(一二)陽草ハ葵ノ集解ニ出ツ。

(一三)字書ニ、庾ハ露石。

(一四)獨帚ハ地膚ノ一名。

(一五)羊不食草ハ羊躑

れがなければ成らない。また能く五金を柔げ、汞を乾し、硫黄を轉じ、粉霜を伏すものだ』といひ、又『雄黄は鐵を變し、雌黄は錫を變ず』ともいつてある。

〔修治〕 斅曰く、凡そこの修治には、婦人、雞、犬、淫を犯した直後の人、病ある人、(九)不男の人、(一〇)非形の人に觸れしめてはならぬ。また曾て刑獄の在つた地や臭穢の地を犯してはならぬ。もしこの禁を犯せば雌黄は鐵のやうに黒くなつて役に立たなくなり、これを用ゐれば反つて人の壽命を損ずる。修治には(一一)天碧枝を用ゐ、雌黄四兩を(一二)陽草、粟遂子草各五兩に和し、瓷鍋中に入れて三伏時の間煮て、色が金のやうな一團になり、鍋の底に淀んだところへ、徐に東流水を注ぎ込む。此の如くして三度淘り、水を棄て拭ひ乾し、臼で搗き篩つて研り、塵のやうにして用ゐる。又曰く、雌黄は、芹花に遇へば立ろに(一三)庾となる。芹花、一名立起草といふ、形が芍藥のやうなもので、雌黄を煮るに能く火を住むるものだ。

〔氣味〕【辛し、平にして毒あり】別錄に曰く、大寒なり。煎藥として用うるものには入れない。土宿眞君曰く、芎藭、地黃、(一四)獨帚、益母、(一五)羊不食草、地榆、五加皮、瓦松、冬瓜汁はいづれも雌黄を制伏し得る。また雌黄は鉛、及び胡粉を見

鷄ノ一名。

れば黑くなる。【主　治】【惡瘡、頭禿、痂疥、毒蟲、虱を殺し、身痒、邪氣、諸毒にはこれを錬つて用ゐる。久しく服すれば身を輕くし、天年を延べ、老衰せぬ】（本經）【鼻内の息肉、下部の䘌瘡、身體顏面の白駮を蝕し、皮膚の死肌、及び恍惚、邪氣を散じ、蜂、蛇の毒を殺す。久しく服すれば人の腦を充實せしめる】（別錄）【冷痰、勞嗽、血氣、蟲積、心腹痛、癲癇を治し、毒を解す】（時珍）

【發　明】保昇曰く、雌黃は土に法るものだから、色が黃で脾を主る。時珍曰く、雌黃と雄黃とは同一の地に產するが、ただ山の陽と山の陰とで受くる氣が同一でなく、隨つて二種に區別がされたわけである。服食家で雄黃を重んずるが、その理由は純陽の精を得るものだといふに在るので、雌黃は陰氣を兼有するから重ぜられぬといふのである。けれども治病の點に於ては、二黃の功力共に彷彿たるもので、いづれも中を溫め、肝を搜し、蟲を殺し、毒を解し、邪を退ける力を利用するに過ぎぬのである。

【附　方】舊七、新五。【反胃吐食】雌黃一分、生甘草半分を末にし、飯で梧子大の丸にし、五葉草、糯米の煎湯で四丸づつ服す。（聖濟錄）【痰の胃に停滯するもの】喘

息して呼吸が通ぜず、絶息せんとするには、雌黄一兩、雄黄一錢を末にし、蠟で化して彈子大の丸にし、一丸づつを夜半に熱き糯米粥中に投じて食ふ。（濟生方）【心痛で水を吐くもの】飲食物が通らず、不定に發作するには、雌黄二兩、醋二斤を慢火で煎じて膏にし、乾蒸餅で和して梧子大の丸にし、七丸づつ薑湯で服す。（聖惠方）【婦人の久冷】血氣が心を攻め、痛んで止まぬには、(一六)葉子の雌黄二兩を細研し、醋一升を濃く煎じ、和して小豆大の丸にし、十五丸づつ醋湯で服す。（聖惠方）【小腹痛滿】天行病で小腹がはり、尿の通ぜぬには、雌黄末を蜜で丸にして尿道へ半寸入れる。（肘後方）【癲癇瘈瘲】眼暗く、舌を嚼むには、雌黄、黄丹を炒り、各一兩を末にして麝香少量を入れ、牛乳半升を熬膏したものに和して千回杵き、麻子大の丸にして溫水で三五丸を服す。（直指方）【肺勞欬嗽】雌黄一兩を瓦合に入れ、固濟せずに地上に置いて灰で二寸厚さに培し、炭一斤を瓦合の上に盛り上げて火で煆き、炭の三分一が燃え盡きたとき火を退けて毒を出し、末にして(一七)糖酥で和して粟米大の丸にし、毎日空心に杏仁湯で三丸を服す。（斗門方）【久嗽、暴嗽】金粟丸――葉子の雌黄一兩を研り、紙筋泥で固濟して乾した一箇の小さき合子に入れ、水で赤石脂を調へ

(一六)葉子ハ薄片。

(一七)糖ハ蜡ノ誤字ナラン。然レトモ金陵本亦糖ニ作ル。

て合子の口を封し、更にその上を泥で封じ固め、物に載せて地上に置き、炭火十斤を盛上げて圍んで煅き、火が三分の一消えたとき火を撤去して冷えるのを待つて取出すと、鏡面のやうに光のある紅色のものになつて居る。それを鉢の中で細研し、蒸餅で粟米大の丸にし、三丸乃至五丸づつ甘草水で服す。服して後少時睡るが良い。(壽金方)【腎消して尿の頻數なるもの】乾薑半兩を鹽四錢で黃色に炒り、顆塊に成つた雌黃一兩半と共に末にし、蒸餅で和して綠豆大の丸にし、十丸乃至三十丸を空心に鹽湯で服す。(聖濟錄)【小便のしまりなきもの】顆に塊つた雌黃一兩半を研り、乾薑半兩を鹽四錢で共に炒り、薑の色が黃になつたとき末にして水で和し、蒸餅で綠豆大の丸にして十丸乃至二十丸を空心に鹽湯で服す。(經驗方)【烏癩蟲瘡】雌黃粉を醋と雞子黃で調へて塗る。(聖惠方)【牛皮頑癬】雌黃末に輕粉を入れ、豬膏で和して傅ける。(直指方)

石膏(本經中品)

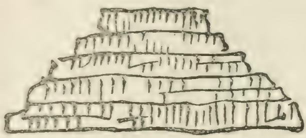
和名　石膏(含水硫酸石灰)
學名　Gypsum, Selenite

【釋名】細理石(別錄)寒水石(綱目)震亨曰く、火で煅いて細研し、醋で調

へて丹竈を封ずれば脂、膏よりも甚だ固く密である。蓋し質と能とを兼ねた名稱であつて、正に石脂の名稱の意味と同じである。時珍曰く、その物の文理が細密だから細理石と名け、その性が大寒で水のやうだから寒水石と名けたものだ、凝水石とは同名異物である。

集解　別錄に曰く、石膏は(一)齊山の山谷、及び(二)齊の盧山、(三)魯の蒙山に生ずる。採收に一定の時期はない。理が細かで白い艶のあるものが良し。黄なるものは人を淋せしめる。弘景曰く、齊、魯二郡の山とは、青州、徐州の地である。現今では(四)錢塘縣から出る。いづれも地中にあつて雨後時時自ら現れるもので、手に取つて見て碁石のやうに白く透き徹るものが最も佳い。(五)彭城のものも好し。近道にも多くあるが、大塊のもので、用ゐて見るに彼の地のものに及ばない。仙經にはこの物をば用ゐて居らぬ。

恭曰く、石膏と方解石とは大體相似たもので、碎けて居るものと碎けて居らぬものとの相異である。當今の商人は皆方解を石膏の代りに賣つて



［石　膏］

(一)齊山ハ雲母ノ註ヲ見ヨ。

(二)齊ハ今ノ山東省ノ地ヲ指ス。盧山ハ膠東道平度縣ニ在リ。太平寰宇記ニ「盧山在縣東十八(支)里、北與東牟縣觀山相連」トアリ。

(三)魯ハ今ノ山東省南部江蘇省北部ノ一帶ヲ指ス。蒙山ハ所謂禹貢蒙山ニシテ山東省費縣ノ西北ニアリ。

(四)錢塘縣ハ秦ノ錢唐縣、今ノ浙江省杭縣ノ地ナリ。

(五)彭城ハ秦ニ縣ヲ

居るので、眞の石膏といふもののあることを知らないが、石膏は石に著いて生ずるものである。ここにいふ方解は石に著いて生ずるのではなく、立派に獨立して生ずるものだ。その大なるは升のほどあり、小なるは拳のほどのもので、或は土中に在り、或は溪の流れに生ずる。その土や水のために上皮は苔の色になつて居るが、碎けば四角に崩れ、大なるものには一尺四方のものもある。今一般にこれを石膏と稱して居るが、風を療じ、熱を去ることは同樣でも、肌を解し、汗を發する點では、やはり眞の石膏に及ばない。

大明曰く、石膏は明に理が通つて雲母の如きものが上等である。又方解石と名ける。

斅曰く、凡そ石膏を用ゐるときに方解石を用ゐてはならぬ。方解は白いけれども透明でなく、その性が燥である。石膏は(六)剡州若山縣の義情山から出るものが色は淨く水精のやうに明で、その性は誠に善良である。

頌曰く、石膏は今の(七)汾、(八)孟、(九)虢、(一〇)耀の各州や(一一)興元府にもある。山石の上に生じ、色は至つて白く明で肌理、形狀、剛柔が甚だよく方解石と類似して居

置ク、今ノ江蘇省銅山縣ハソノ舊治ナリ。

(六)剡州若山縣未考。今ノ浙江省嵊縣ノ地ハ漢ニ剡縣ヲ置ク、或ハコノ地ヲイフカ。元和郡縣志ニ『剡縣漢舊縣。故城在今縣西南一十二里。呉賀

齊爲令。移理今所。隋末陷於李子通。武德中以縣爲嵊州。六年廢州。縣依舊』トアリ。

(七)汾州ハ今ノ山西省ニ屬ス、汾陽縣ハソノ舊治ナリ。

(八)孟縣ハ今ノ河南省孟縣ノ地ナリ。

(九)饒州ハ金部銀ノ註ヲ見ヨ。

(一〇)耀州ハ今ノ陝西省耀縣ノ地ナリ。

(一一)興元府ハ今ノ陝西省南鄭縣ノ地ナリ。

(一二)汴京ハ宋ノ國都、今ノ河南省開封府。

(一三)平直ノ析開面ヲ云フ。

る。現在では眞物は甚だ得難い。使用する際碎いて見て四角に角立つものは皆方解石である。今世間にある石膏のうち、美しく瑩徹し縱の理があつて方解せぬものが時時ある。或はそれを石膏の眞物だともいふが、しかし本草に據ればそれは長石といふものらしい。或は又、所謂靑石の間にあるもので、往往白脈がよく徹つて肉が膏肪のやうなものを石膏だといふが、これも又、本草に所謂理石と稱するもののやうである。一體石膏とは如何なるものをいふのか判らない。今はしばらく商人任せに方解石を用ゐて居るやうな次第である。

閻孝忠曰く、南方では寒水石を石膏といひ、石膏を寒水石といひ、正に(一二)汴京でいふものと相反して居る。これは大なる誤だ。石膏なるものは色は潔白、質が堅硬で(一三)墻壁があるが、寒水石ならば軟爛なるもので手でも碎け、外が微し靑黑く、中に細かい文があるものである。又、堅く白くて全く石膏に類似する一種の物もあるが、それは敲けば四角に崩れるもので、方解石と名けるものである。

承曰く、陶氏の錢塘の山中から雨後たまたま自ら出るといふそのものは、今も錢塘で山を掘つて多量に採り、搗いて齒の藥として賣つて居る。浙江地方ではそれを

寒水石といつて居る。藥に入れた結果が他の地方に産するものよりも大いに勝れて居る。

宗奭曰く、石膏に關する說は紛然として確定せず、その推理も未だ徹底したものはないのである。しかし、本草に、明瞭に齊山、盧山、蒙山に生じ、細理にして白澤なものが良しといつてあるのだから、他の地の產は石膏ではないのである

震亨曰く、本草に於ける藥の命名はいづれも相當の意義根據を內容とするもので、或は色を以てし、或は形を以てし、或は氣を以てし、或は質を以てし、或は味を以てし、或は能を以てし、或は時を以てするといふが例である。石膏の場合では、丹爐を固濟するに苟も石膏がなければ爐の用を完全にし得ぬものだから、その點から見て、やはり質と能とを兼ねて命名したに相違ない。既往の人人が方解を石膏なりとしたのは誤だ。石膏は味が甘くして辛い。これは本來陽明の經の藥である。陽明は肌肉を主るのであつて、その味の甘さはよく脾を緩にし、氣を益し、渴を止め、火を去る。その味の辛さはよく肌を解し、汗を出し、上行して頭に至り、また太陰、少陽に入るものである。彼の方解石なるものは、ただ體重く、質堅く、性

が寒なるだけのものだ。膏としての有能と（一四）三經の主治たる効果はその物の何處に求めやうがあらうぞ。

時珍曰く、石膏には軟、硬の二種ある　軟石膏は大塊で石中に生じて層をなし、扁く壓して作つた米糕のやうな形で、その毎層は數寸の厚さがある　これにまた紅、白の二色があつて、紅いものは服されぬ。その白いものは潔淨で短く密な束針のやうな細文があり、白蠟を凝したやうに鬆軟で碎け易く、焼けば白爛して粉のやうになるものである。その中の明潔で色に微青を帶び、文が長く細く白い絲のやうなものを理石と名ける。これは軟石膏と一物の二種であつて、碎けば形も色も一様で殆と見別けのつかぬものである。硬石膏は塊になつて生ずるもので、理が直線で稜角があり、馬齒のやうで堅く白く、撃てば段段に横に崩れ、雲母や白石英のやうに光が明で墻壁があり、焼けばやはり散じ易いが硬くして粉にはならぬ。この硬石膏に似た塊になつて居るもので、撃てば箇箇四角の塊に崩れて墻壁があり、光の明なものを方解石と名ける。これは焼けばハネ散るがやはり爛れない。これも硬石膏と同一類の二種であつて、碎けばやはり形も色も一様で殆と見別けのつかぬもの

（一四）三經トハ陽明、太陰、少陽ノ三經ヲ指ス。

である。

陶弘景以來、蘇恭、大明、雷斅、蘇頌、閻孝忠などの學者は、いづれも硬きものを石膏、軟きものを寒水石と稱して來たのだが、朱震亨に至つて始めて軟きを石膏と斷定し、爾來一般にそれを遵用して實證を擧げて居る。千古の疑惑が始めて解決されたわけである。蓋し昔の人の所謂寒水石は軟石膏のことだ。所謂硬石膏なるものは長石なのである。石膏、理石、長石、方解石の四種はその性、氣いづれも寒なるもので、倶によく大熱、結氣を去るが、石膏だけはまたよく肌を解し、汗を發するところに特異な點がある。理石は石膏の類、長石は方解の類で、それぞれその類に從つて代用し得る。今一般に石膏で豆腐を凝收するに用ゐて居るが、これは昔の人の知らぬところであつた。

【修治】斅曰く、凡そこれを用うるには、石臼の中で粉に搗いて羅篩ひをかけ、生甘草水で飛過して澄まし、晒し篩つてから研つて用ゐる。時珍曰く、古法では、ただ豆ほどに打碎き、絹に包んで湯に入れて煮たのであるが、近頃の人は、その性の寒なるところから火で煆いて用ゐて居る。或は糖を拌ぜて炒つて用ゐれば脾、胃

を妨げない。

【氣味】〔辛し、微寒にして毒なし〕別錄に曰く、甘し、大寒なり。好古曰く、足の陽明、手の太陰、少陽の經の氣分に入る。之才曰く、雞子が使となる。莽草、巴豆、馬目毒公を惡み、鐵を畏る。

【主治】〔中風寒熱、心下の逆氣、驚喘、口乾き舌焦れて呼吸し能はぬもの、腹中の堅痛。邪鬼を除く。產乳、金瘡〕(本經)〔時氣の頭痛、身熱、三焦の大熱、皮膚の熱、腸胃中の結氣を除き、肌を解し、汗を發し、消渴、煩逆、腹脹、暴氣喘、咽熱を止める。また湯にして浴するもよし〕(別錄)〔傷寒の裂けるが如き頭痛、壯熱で皮が火で燥く如きを治す。葱に和して煎じた茶は頭痛を去る〕(甄權)〔天行熱狂、頭風旋を治し、乳を下す。齒に揩れば齒を益す〕(大明)〔胃熱、肺熱を除き、陰邪を散じ、脾を緩にし、氣を益す〕(李杲)〔陽明の經の頭痛、發熱、惡寒、日晡潮熱、大渴引飮、中暑潮熱、牙痛を止める〕(元素)。

【發明】成無己曰く、風は陽の邪であり、寒は陰の邪である。風は進んで陽を傷らんとするものであり、寒は進んで陰を傷らんとするものであつて、營衞、陰陽

が風寒のために傷られたときは輕劑だけでは到底散ずるものでない。必ず輕、重の劑を併用して之を散じてこそ陰陽の邪が去り、隨つて營衞の氣が共に和することを得るのである。この理論から大靑龍湯には石膏を使として入れる。それは石膏は重劑であつて、また專ら肌表に達するものだからである。又、熱淫の勝つ所は苦、甘を佐とし、知母、石膏の苦、甘で熱を散ずるともいふのである。

元素曰く、石膏は性は寒、味は辛にして淡。氣味俱に薄く、體重くして沈降する。要するに陰である。ゆゑに陽明の經、大寒の藥であつて、善くその經の頭痛、牙痛を治し、消渴、中暑潮熱を止めるのである。けれどもよく胃を寒し、物を食へなくするものだから、腹に極熱あるもの以外には輕輕しく用ゐてはならぬ。又、陽明の經の中熱、發熱、惡寒、燥熱、日晡潮熱、肌肉壯熱、小便赤濁、大渴引飮、自汗、頭痛に苦むものの藥であつて、仲景が白虎湯を用ゐたのはこの理由に依つたのである。けれども若し前記の諸證無きには之を服してはならぬ。血虛の發熱に白虎の證そのままのものがあり、脾胃の虛勞に形體と病證の初期に白虎の證と同じきものが多く、醫者がそれを識別せずして誤つて石膏を用ゐ、爲に救治の施しやうがなくな

(一五)此下甚雅ノ二字アリ。證類本草ヲ按スルニ、甚雅ノ二字ハ兩書ヨリ七字ノ前ニアリテ、此書ニ出ヅルハ全ク衍文ナリ。

ることがある。

○杲曰く、石膏は足の陽明の藥である。故に仲景は之を以て傷寒陽明の證で身熱し、目痛み、鼻乾きて、身を臥すことを得ざるものを治したのであつた。身心の前は胃の經、胸の前は肺の室であつて、邪が陽明にあれば肺が火の壓迫を受けるのである。故に辛寒を用ゐて肺氣を淸くする。これが白虎なる名稱が付せられた所以であつた。又、三焦、皮膚の大熱を治し、手の少陽に入るものだから、凡そ病の脈が頻數にして減退せぬものには之を用うるがよいのであるが、胃の弱きものには用ゐられぬ。

○宗奭曰く、孫兆は『四月以後の天氣熱する時は白虎を用ゐるがよい。しかしその地方に依つて氣候が一定せぬものであり、その歲の内に在つても五運、六氣に因り一定せぬのだから、兩ながらよくその理を審にすべきである』(一五)といつてある。

○時珍曰く、李東垣氏は『立夏の節以前に白虎湯を多く服すれば小便にしまりがなくなるものである。これは降ることの度を甚だ過ごすので、陽明の津液を上の肺に達ることが出來ぬと同時に、肺の淸氣がまた下降するがための現象だ』といはれた。

初虞世の古今錄驗方に諸種の蒸病を治する五蒸湯といふがあつて、これも亦白虎に人參、茯苓、地黄、葛根を加へて病に隨つて加減したものである。王燾の外臺祕要にも『骨蒸の勞熱、久嗽を治するに、石膏の鑛を束ねた如き文のもの一斤、粉甘草一兩を細研して麪の如くし、日毎に水で調へて三四服す』とあり、且つ『この物は毒なくして大益があり、養命の上藥である。その價格の安いために忽にして、その寒なる眞價を疑つてはならぬものだ』といつてある。名醫錄には『(一六)睦州の楊士丞の女が骨蒸を病み、内熱、外寒して多くの醫師が瘥し得なかつたとき、(一七)處州の吳醫が此の方を用ゐたので體がそのために凉なるを得た』とあるが、余の考では、これは皆肺、胃の火が盛にして食物を充分に攝れる少壯の者の病に對してのことであつて、若し老境に入つて衰退の期にあるものや、氣虛、血虛、胃弱の者の場合には恐らく適當ではあるまいと思ふ。廣濟の訓導林氏は年五十にして痰嗽發熱を病んだ。そのときある醫師が石膏を單服させ、續服すること一斤に及ぶと遂に食事不能となつて、欬はますます頻發し、病はますます重くなり、遂に回復し能はざるに及んだのであつた。これは蓋し藥を用ゐた醫師が盲目なためであつて、石膏には一向

(一六)睦州ハ今ノ浙江省建徳縣ノ地ナリ。

(一七)處州ハ土部白瓷器ノ註ヲ見ヨ。

に罪はないことだ。楊士瀛は『石膏は、煆いたものが最もよく瘡、暈を收め、肌を爛すに至らない』といつて居る。按ずるに、劉跂の錢乙傳に、『某皇族の王子が嘔泄を病んだとき、醫師が温藥を用ゐると喘はますます加つた。その時乙が「病因は中熱だ。それに剛劑を用うるとは何事であらう。ますます燥して大小便不通となるに相違ない。これは石膏湯を進めるがよい」といつた。宮家の人人も醫師もその場は信じなかつたが、後二日、果して再び御召があつたので、乙は「やはり石膏湯を用うべき病證なのだ」といつてその通り實行した。すると王子の病はそれで平癒したのであつた』と書いてある。又按ずるに、古方に用ゐてある寒水石は凝水石である。唐、宋以來の諸方に用ゐてある寒水石は今の石膏である。故に寒水石の諸方を後に附錄する。近頃ではまた一般に長石、方解石を寒水石と思つて居るが、その相違はよく辨別せねばならぬことだ。

【附方】 舊四、新二十五。【傷寒發狂】垣を踰え、屋根に上るなどいふやうに狂するには、寒水石二錢、黄連一錢を末にし、甘草の煎湯で冷服する。これを鵲石散と名ける（本事方）【風熱心躁】口が乾き、狂ひ躁ぎ、渾身壯熱するには、寒水石半斤を

(一八)兩餾飯ハ二度蒸シタ飯。
(一九)滾酒ハ熱キ酒。

半日燒き、淨地に坑を掘つて盆を合せた中へ藥を入れてその坑內へ置き、四面を濕土で圍んで一夜置いて取出し、甘草末、天竺黃各二兩、龍腦二分を入れて糯米糕で彈子大の丸にし、蜜水で磨つて服す。(集驗方)【諸種の中毒を解す】方上に同じ。【乳石で渴を發せるもの】寒水石一塊を含む。瘥ゆるを度とする。(聖濟錄)【男女の陰毒】寒水石を多少に拘らず末にし、(一八)兩餾飯を用ゐて搗いて栗子大の丸にし、日光で乾し、一丸づつを炭火で紅く燒いて研り、(一九)滾酒で調へて服し、つづいて葱醋湯を飮み汗を發すれば癒える。(蔡氏經驗必用方)【小兒の丹毒】寒水石末一兩を水で和して塗る。(集玄方)【小兒の身熱】石膏一兩、靑黛一錢を末にし、糕糊で龍眼大の丸にし、一丸づつ燈心湯で化して服す。(普濟方)【骨蒸勞病】外寒內熱し、骨に附いて蒸するものは病根が五臟、六腑の中に在る。必ず他の病を患つた後に發するもので、骨肉が日に日に落ち、飮食物に味なく、或は皮膚が燥いて光澤なく、蒸の盛なるときは四肢が瘦せ細り、足の趺が腫起するものである。石膏十兩を乳粉のやうに研り、一日二回、方寸匕を水で和して服す。身の凉となるを度とする。(外臺祕要)【熱盛なる喘嗽】石膏二兩、甘草を炙いて半兩を末にし、三錢づつを生薑蜜で調へて服す。

（普濟方）【痰熱喘嗽】痰が泉の如く涌くには、石膏、寒水石各五錢を末にし、人參湯で三錢づつを服す。（保命集）【食積痰火】肺火、胃火を瀉す。白石膏を火で煆き、火毒を出して半斤を末にし、醋糊で和して梧子大の丸にし、四五十丸づつを白湯で服す。（丹溪方）【胃火の牙疼】好き軟石膏一兩を火で煆き淡酒に淬して末にし、防風、荊芥、細辛、白芷五分を入れて末にし、日毎に牙に揩れば甚だ効がある。（保壽堂方）【老人の風熱】内熱し、目赤く、頭痛し、物を視んとして見えぬには、石膏三兩、竹葉五十片、沙糖一兩、粳米三合、水三大盞を用ゐ、石膏と竹葉を煎じて滓を取去つた汁二盞を取り、その汁で粳米の粥を煮て沙糖を入れて食ふ。（養老方）【風邪眼寒】これは風が頭系に入つて敗血が凝滯し、上下に流通し能はぬところから風寒が眼に客となり、ために眼が寒するのである。石膏を煆いて二兩、川芎二兩、甘草を炙いて半兩を末にし、一日二回、一錢づつを葱白茶湯で調へて服す。（宣明方）【頭風涕涙】疼痛止まぬには、方は上に同じ。【鼻衄頭痛】心煩するには、石膏、牡蠣一兩を末にし、新汲水で二錢づつを服し、幷に鼻中に滴す。（普濟方）【筋骨の疼痛】風熱に因るものである。石膏三錢、飛羅麪七錢を末にして水で和し、紅く煆いて冷してから滾酒で化

して服し、寝具を被て汗を取る。三日連續して服すれば根治する。（筆峯雜興）【雀目夜昏】あらゆる手當の効なきには、石膏末一錢づつを薄く批いだ豬肝一片に摻り、引纏めて沙瓶で煮熟し、一日一回、切つて食ふ。（明目方）【濕溫多汗】妄言し、煩渴するには、石膏、炙甘草等分を末にし、二錢匕づつを漿水で調へて服す。（龐安時傷寒論）【小便の俄に頻數なるもの】淋ではなくて痩せるものである。石膏半斤を搗き碎き、水一斗で五升に煮て五合づつ服す。（肘後方）【小兒の吐瀉】色の黄なるは傷熱である。玉露散——石膏、寒水石各五錢、生甘草二錢半を末にし、滾湯で調へて一錢を服す。（錢乙小兒方）【水瀉腹鳴】雷の如く鳴るは火あるものである。石膏を火で煆き、倉米飯で和して梧子大の丸にして黄丹を衣にし、米飲で二十丸を服す。二服ならずして効がある。（李樓奇方）【乳汁不下】石膏三兩を水二升で三回煮沸し、三日に飲み盡すが妙である。（子母祕錄）【婦人の乳癰】一醉膏——石膏を紅く煆いて火毒を出して研り、三錢づつを溫酒で服し、更に酒を飲み充分に醉つて睡り、覺めて再び一服を進む。（陳日華經驗方）【油傷火灼】痛みの忍び難きには、石膏末を傅けるが良し。（梅師方）【金瘡出血】寒水石、瀝青等分を末にし、乾して摻る、水に著けてはなら

ぬ。（積德堂方）【刀瘡の傷濕】潰爛して肌を生ぜぬには、寒水石を煆いて一兩、黃丹三錢を末にして洗傅する。甚しきには、龍骨一錢、孩兒茶一錢を加へる。（積德堂方）【瘡口の斂らぬもの】肌肉を生じ、疼痛を止め、惡水を去る。寒水石を赤く燒き研つて二兩、黃丹半兩を末にして摻る。これを紅玉散と名ける。（和劑局方）【口瘡、咽痛】上膈に熱あるものである。寒水石を煆いて三兩、朱砂三錢半、腦子半（二〇）兩を末にして摻る。（三因方）

【附錄】**玉火石** 頌曰く、（二一）密州九仙山の東南隅の地中から出る一種の石は、青白にして脆く、擊てば內から火を發する。彼の地では玉火石と呼んで醫師が使用して居る。味は甘くして微し辛く、溫である。傷寒を療し、汗を發し、頭、目の昏眩痛を止め、功力は石膏に等しい。その地方の者は石膏の代りにこれを用ゐる。

龍石膏 別錄に曰く、有名未用に屬する。毒なし。消渴に主效があり、壽命を益す。（二二）杜陵に生じ、（二三）鐵脂の如くにして中が黃色である。

理石（本經中品）

和名 纖維石膏
學名 Fibrous gypsum

（二〇）金陵本、兩ヲ字ニ作ル。

（二一）密州ハ今ノ山東省高密縣ノ地、舊治ハ高密ノ南方諸城ニアリ。九仙山未考。

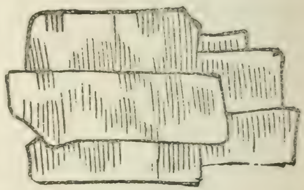
（二二）杜陵ハ今ノ陝西省西安ノ南ニアリ、漢書地理志杜陵ノ註ニ『古杜伯國、漢宣帝葬此。因曰杜陵。

在長安南五十里」トアリ。西ハ南鄭ノ西方ヨリ東ハ鄖陽ニ亘ル。
(二)鐵脂、詳ナラズ。

(一)漢中ハ漢ノ郡名、今ノ南鄭縣ハソノ舊治ナリ。
(二)梁州ハ金部金ノ註、及ビ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。
(三)青州ハ雲母ノ註ヲ見ヨ。
(四)寧州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(五)大觀本草、正ヲ黄ニ作ル。
(六)唐ノ襄州ハ今ノ湖北省ノ襄陽ニ舊治アリ、汎水ハ襄陽ノ西穀城ニテ漢水ニ合スル一支流ナリ。

【釋名】肌石（別錄）立制石（本經）時珍曰く、理石は石膏の理が併行して微し硬く、肌があるものである。故に理石、肌石といふ。弘景曰く、仙經に長理石と呼ぶものである。石膏も一名立制といひ、今また理石をも立制といふが、或は錯誤があるかに疑はれる。

【集解】別錄に曰く、理石は石膏の如く、理が併行して細かい。(一)漢中の山谷、及び盧山に生ずる。採取に一定の時期はない。弘景曰く、漢中は(二)梁州に屬し、盧山は(三)青州に屬する。今は(四)寧州から出るが、俗間には用うるものが稀である。恭曰く、此の石は兩石の間に夾れる石脈の如きものだ。打碎いて用ゐる。或は土中に重り合つて生ずるもあり、皮が(五)正赤で肉は白く、鍼の如き理文であつて、全く石膏とは似て居らぬ。商人は皮を削り去つて寒水石に代へ、または礜石として賣つて居るが、いづれも贋物である。現に盧山には一向この物がない。(六)襄州の西の汎水附近から出るものを見ることがある。宗奭曰く、理石は長石のやうではあるが、理石は理が石膏の如く併行して細かい。理が併行せず細かでないものが長石である。時珍曰く、理石は、石膏中の醫療上の性質、作用の點は相遠からざるものである。



〔石理〕

文理が長く細い直線で絲の如く、色は明潔で微青を帶ぶるものである。唐時代には石膏を寒水石といひ、長石を石膏といつてゐた。それで蘇恭は石膏に似て居らぬといつたのである。この石は軟石膏と一類中の二種で、やはり通用し得る。石膏の條下に詳說してある。

【氣味】「甘し、寒にして毒なし」別錄に曰く、大寒なり。之才曰く、滑石が使となる。麻黃を惡む。【主治】「身熱に胃を利し、煩を解し、精を益し、目を明にし、積聚を破り、三蟲を去る」（本經）「營衞の中の去來大熱、結熱を除き、煩毒を解し、消渴、及び中風、痿痺を止める」（別錄）「酒に漬けて服すれば癖を療じ、身體を肥らし艶かにする」（蘇恭）

【附錄】**白肌石**（別錄）有名未用に曰く、味辛し、毒なし。筋骨を強くし、渴を止め、飢ゑず、陰熱、不足に主效がある。一名を肌石といひ、また一名を洞石といひ、（七）廣卷山の青石の間に生ずる。時珍曰く、按ずるに、これは理石のことである。その形といひ、作用といひ、氣味といひ、療用上の主たる效力といひ、皆同

（七）廣卷山、廣州ノ卷山ノ意ナランカ。未考。

じである。

長石（本經中品）

和名　硬石膏（無水硫酸石灰）
學名　Anhydrite

〔釋名〕方石（本經）直石（別錄）土石（別錄）硬石膏（綱目）

〔集解〕別錄に曰く、長石は理が馬齒の如く、四角で潤澤あり、玉の如き色である。長子の山谷、及び太山、臨淄に生ずる。採收に一定の時期はない。弘景曰く、（一）長子縣は（二）上黨に屬し、臨淄縣は青州に屬する。俗方にも仙經にも此の物は用ゐてない。恭曰く、此の石は、形狀は石膏と同じだが、分厚で大きく、理が縱に長く、文は馬齒に似て居る。今は（三）均州の遼坂山にもこれがあつて、土地の者はこれを理石といつて居る。頌曰く、今はただ（四）潞州にあるものが蘇恭のいふ長石のやうである。按ずるに、本經では理石、長石二物は味も效力も別なものとしてあり、また『理石は石膏に似て、理が併行して細かい』といつてある。陶隱居は『やはり長理石と呼ぶものだ』といふ。今の靈寶丹に用ゐる長理石は同一物だ。醫家に襲用されて居るが、これは石膏に似たもので今の潞州から出る長石と異らない。しかし諸處の州

（一）長子縣ハ今ノ山西省冀寧道ニ屬ス。
（二）上黨ハ戰國ノ韓ノ地、秦ニ上黨郡ヲ置ク、今ノ山西省冀寧道南部ノ地ナリ。
（三）唐ノ均州ハ今ノ湖北省襄陽道均縣ノ地ナリ。
（四）潞州ハ今ノ山西省長治縣ニ舊治アリ。

郡にも理石といふものの出るところがなく、醫方にも單獨に用ゐるものを聞かないので、往往長石を呼んで長理石といつて居る。

○○時珍曰く、長石とは俗にいふ硬石膏である。形狀は軟石膏に似て居るが、塊が扁平でなく、性は硬く、色は潔白、理は粗く、齒のやうな稜角がある。撃てば片片が横に碎け、光は明で雲母や白石英の如く、やはり墻壁もある。方解石に似て居るが、ただ碎ける片が四角の塊にはならぬものだ。これも燒けば粉爛して散易くない。方解石も同樣だが、ただ燒けばその(五)烢聲が異ふ。往昔はこの石を石膏といひ、又は方解といひ、今は一般に寒水石といふ、いづれも皆誤である。ただ方解とは一類中の二種なるところから、これも方石と名けるのであつて、氣味、功力共に同じく、通用して妨げない。唐、宋時代の諸方に用ゐてある石膏は多くはこの石なので、昔の醫者もやはりこれで效力を現してゐたのである。石膏と通用して差支はないのであつて、ただ肌を解し、汗を發する作用がないだけである。


〔長 石〕

(五) 烢聲ハ炸裂スル響。

〔氣味〕【辛く苦し、寒にして毒なし】〔主治〕【身熱、胃中の結氣、四肢の寒厥、小便を利し、血脈を通じ、目を明にし、翳眇を去り、三蟲を下し、蠱毒を殺す。久しく服すれば饑ゑない】（本經）【消渇を止め、氣を下し、脇肋、肺間の邪氣を除く】（別錄）

方解石（別錄下品）

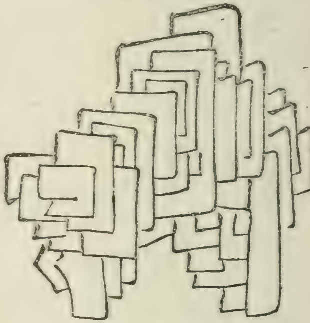
和名　方解石（炭酸石灰）
學名　Calcite, Calcspar

〔釋名〕**黃石**　志曰く、敲き破れば塊がざくざくと四角に崩れるからかく名けたものである。

〔集解〕別錄に曰く、方解石は（一）方山に生ずる。採取に一定の時期はない。弘景曰く、本經に、長石、一名方石とあるは、醫療上の性質、作用が相似て居る。疑ふらくはこの物のことであらう。恭曰く、この物は大體石膏と相似たもので、他の石に附著して生ずるのではなく、端然として獨立するものである。大なのは升ほどあり、小なるは拳ほどだが、特に大なるものは一尺四方ほどのものもある。或は土中から、或は溪流中に生ずるもので、その上皮はその土なり水なりのために苔色に

（一）方山ナル山ハ江蘇省江寧縣ノ東南ニアリ。又、六朝ノ時ノ方山府ハ今ノ六合縣ノ東ニアル方山ノ地ナリ。又山東省昌樂ノ南二十五支里ニ方山アリ。

（三）沙州ハ石部馬齒ノ註ヲ見ヨ。



〔方解石〕

なつて居て、破れば四角に崩れる。今は一般に石膏と稱して用ゐて居る。風を療じ、熱を去る點は同一であるが、肌を解し、汗を發することは石膏に及ばない。志曰く、今は（三）沙州の大鳥山から出るものが佳い。

頌曰く、方解石は、本草には『方山に生ず』といひ、陶隱居は、長石と同一物だらうと疑ひ、蘇恭は『熱に對する治療の效力が石膏に劣らない』といふ。かかる次第で、通用するも差支ないらしいが、ただ頭風に對する主效の點では石膏に及ばない。その肌理や、形狀や、剛柔やはすべて同一であつてただ石に附著するとせざるとの點に差異を付するだけで、それが直ちに功力に對してかくも甚しき相異となるべき道理があらうか。雌黃、雄黃の如きにも、やはり獨り離れたものもあれば石に附著して生ずるものもあるのだが、それがために名稱を異にし、功力に相異を認めるといふことを聞かぬのである。

時珍曰く、方解石と硬石膏とは相似たるもので、いづれも白石英の如く光潔なものだ。ただ敲けばその片が段段に碎けるものが硬石膏、箇箇の塊が四角の稜角をなすものが方解石である。蓋し一類の二種であつて、互に通用し得るものだ。唐、宋時代の諸方には皆これを石膏としてあり、今は一般に寒水石といつて居る。いづれもその稱呼は正しくはないが、その性寒にして熱を治する功力は大抵違からぬものである。ただ肌を解し、汗を發する點で硬石膏に及ばぬだけの異りだ。

【氣味】【苦く辛し、大寒にして毒なし】之才曰く、巴豆を惡む。【主治】【胸中の留熱、結氣、黃疸。血脈を通じ、蠱毒を去る】（別錄）

滑石（本經上品）

和名　くわつせき・滑石
學名　Talc

【釋名】**畫石**（衍義）**液石**（別錄）**膋石**　音は遼（レウ）である。**脫石**　音は奪（ダツ）である。**冷石**（弘景）**番石**（別錄）**共石**　宗奭曰く、滑石は今は畫石といふ。そのものが軟滑で寫畫の用となるに因る。時珍曰く、滑石は性は滑で竅を利しその質もまたなめらかだ、故にかく名けたものである。（一）表畫家はこれを粉の代り

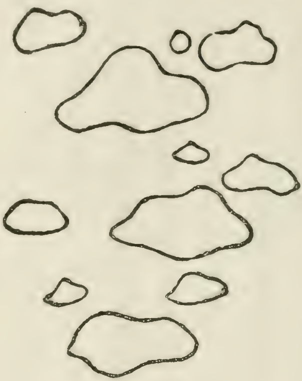
（一）表畫家ハ經師屋、

卽袪裝飾。

(一)赭陽ハ後魏ノ縣名、漢ノ堵陽縣、秦ノ陽城縣ノ地ニシテ今ノ河南省南陽ノ東北、裕ノ地ナリ。
(三)掖北トハ掖卽チ今ノ山東省萊州ノ東北方ヲ指ス。
(四)白山ハ今ノ長白山。
(五)卷山、未考。
(六)弘景當時ノ湘州ハ今ノ湖南省、及ビ廣東省ノ韶州、廣西省ノ桂林ノ地ニ亘リ、今ノ湖南省長沙ニ州治ヲ置ク。
(七)始安郡ハ今ノ廣西省桂林ヲ中心ニ附

に紙に刷くが、色が最も白くしてキメが滑になるものだ。脣とは脂膏のことで、脣の字を縣名に用ゐたのは脣石を産するからである。脫とは肉に骨なきをいふ。この物は最も滑膩で硬い部分のないものを良しとする。以上のやうな理由で種種の名稱が生じたのである。

【集解】別錄に曰く、滑石は(一)赭陽の山谷、及び太山の陰、或は(三)掖北、(四)白山、或は(五)卷山に生ずる。採收に一定の時期はない。弘景曰く、滑石は色が正白のもので、仙經では之を用ゐて泥にする。今は(六)湘州、(七)始安郡の諸處に産し、採取した當初には泥の如く軟なものだが、久しく時が經つに隨つて堅强になる。世間では多く塚中に入れる葬祭用器物をこれで作る。赭陽は南陽に屬し、掖縣は



〔滑石〕

青州の東萊に屬し、卷縣は(八)司州の(九)滎陽に屬する。又冷石といふものがあるが、

近一帶ノ地ナリ。（八）弘景當時ノ司州ハ河南洛陽ヨリ開封ニ亘ル京畿一帶ノ地。（九）滎陽ハ今ノ河南省滎陽縣ノ東方滎澤ノ地ナリ。卷縣、未考。（一〇）齊州ハ古ノ齊國ノ地、舊治ハ今ノ山東省歷城縣ナリ。

（一一）道州ハ水銀ノ註

少し青黃なものだ。いづれも冷利なるもので、よく衣類の油で汚れたものを熨す。

恭曰く、この石は所在いづれにもあるが、嶺南の始安に產するものは凝脂の如く白く極めて軟滑である。掖縣から出るものは理が粗く質が靑く、黑點がある。器を作る材料にはなるが藥には入れられない。（一〇）齊州南山の神通寺の南谷にも多量にあつて、色が靑白くて佳くないが滑膩な點だけは勝れて居る。

藏器曰く、始安、掖縣兩處の石は形、質も異り、用途も違ふ。始安のものは軟滑で藥に入れてよいが、東萊のものは硬く澀く靑く、器を作る石材である。

斅曰く、凡そこれを使ふには種種の差別がある。白滑石なるものは方解石のやうで色は冰のやうに白く、石の上へ畫いて見て白き膩文のあるものが眞物である。烏滑石は鷖のやうなもので、石の上へ畫いて靑白の膩文がある。これも藥に入れて妙である。綠滑石は性寒にして毒がある。藥用には入れない。黃滑石は金のやうでその顆が皆圓く石の上へ畫けば靑黑色がある。人を殺すものだから藥には用ゐられぬ。冷滑石は靑蒼色で石上へ畫けば白い膩文を現すが、これも用ゐてはならぬ。

頌曰く、今の（一一）道、（一二）永、（一三）萊、（一四）濠の各州に皆あるが、凡そ二種あつて、道

州、永州に産するものは白く滑で凝脂のやうだ。南城志に『(一五)膋成縣に膋石が出る。卽ち滑石であつて、地方のものはこれを(一六)燒器に作り魚を烹て食ふ』とあるがそれである。萊州、濠州に産するものは理が粗く、質が靑く、黒點があり、また斑石ともいふ。この二種共に器を作るべく甚だ精好なもので、取つた當初は柔いところから彼の地方では石坑中で製作し、大いに勞力を省いて居る。本草所載の産地は皆北方に限られて居るが、今の醫家に用られる白色のものは南方から來るものである。或は(一七)沂州に産するものが甚だ白く佳良なものだともいふ。これは本草にいふ太山の陰のものと相合するものだが、しかし彼の地ではそれを藥としては用ゐない。今濠州から供給する靑滑石は性寒にして毒なく、心氣の澁滯に主効があるとも云ひ、本經の所説と大同小異である。又、張勃の呉錄地理志、及び大康地記には『(一八)鬱林州布山縣の馬湖、馬嶺山には、いづれも甚しい毒を有つて人を殺す(一九)虺が居るが、その毒を解する冷石といふものがある。その石は色が赤黒く、味は苦く、これを屑にして虺の瘡中へ著け、切齒して痛を忍んで居れば立ろに蘇る。一名切齒石ともいふ』とある。今世間で多く冷石を用ゐ、粉にして(二〇)痱瘡を治療するが、

ヲ見ヨ。

(一二)永州ハ今ノ湖南省零陵縣ノ地ナリ。

(一三)萊州ハ今ノ山東省掖縣ノ地ナリ。

(一四)濠州ハ今ノ安徽省鳳陽縣ノ地ナリ。

(一五)膋成縣、未考。

(一六)燒器ハ石鍋ナリ。

(一七)沂州ハ馬腸ノ註ヲ見ヨ。

(一八)鬱林郡ハ漢ニ置ク、今ノ廣西省ノ大半、潭水、鬱水、斤員水ノ流域ニ亘リ、今ノ鬱林縣ノ西北貴縣ノ地ニ治ス。卽チ當時ノ布山縣ナリ。

或はそれが滑石だともいふ。しかし味の甘く苦い點が違ふのである。

時珍曰く、滑石は廣の桂林の各村落、及び(二一)猺峒中から出る。即ち古の始安の地だ。白、黑の二種あつて、功用はいづれも相似て居る。山東蓬萊縣の桂府村から出るものもまた佳く、醫方では桂府の滑石と桂林のものと同一に稱用して居る。今世間で圖書の版にも刻するが、甚だ堅牢でない。滑石の根は不灰木であつて、滑石の中にある明に光る黄子は石腦芝といふものである

【修治】斆曰く、凡そ白滑石を用うるには、先づ刀で刮り淨めて粉に研り、牡丹皮と共に一伏時煮て牡丹皮を去り、その滑石を東流水で淘り、晒し乾して用うるのである。

【氣味】【甘し、寒にして毒なし】別錄に曰く、大寒なり。之才曰く、石葦が使となる。曾青を惡み、雄黄を制す。

【主治】【身熱、洩澼、女子の乳難。癃閉には小便を利し、胃中の積聚寒熱を蕩し、精氣を益す。久しく服すれば、身を輕くし、饑に耐へ、天年を長くする】(本經)【九竅、六腑の津液を通じ、留結を去り、渴を止め、中を利せしめる】(別錄)【濕を

(一九)虺ハ蝮蛇ノ一種。
(二〇)痈ハ小瘡。
(二一)猺ハ蠻族、古ノ八蠻種ノ一ナリ。兩廣、湖南地方ニ多シ。峒トハ棲息地ナイフ。

燥し、水道を分ち、大腸を實し、食毒を化し、積滯を行り、凝血を逐ひ、燥渴を解し、脾、胃を補ひ、心火を降し、偏に石淋に主効を有する重要の藥である」(震亨)

【黄疸、水腫、脚氣、吐血、衄血、金瘡の出血、諸瘡腫毒を療ず」(時珍)

[發明] 頌曰く、古方に、淋瀝を治するに多くは滑石を單獨に用ゐてある。又、石韋と共に搗いて末にし一刀圭を飮服すれば更に効驗がある。又石淋に主効を擧げるには十二分を粉に研り、兩服に分けて水で調へて服するので、煩熱が落付けばその後の服用を停める。權曰く、滑石は五淋を療する。出産の重きに主効を擧げるには末を服す。又、末と丹參、蜜、豬脂とで膏にし、臨月に入つてから空心に酒で彈丸大を服し、出産に臨んで倍にして服すれば胎を滑にして分娩を易からしめ、煩熱、心燥を除く。元素曰く、滑石は氣は溫、味は甘であつて尿道の濇つて利せぬを治し、性が沈重でよく上氣を泄して下行せしめる。このゆゑに滑なれば竅を利すといふのであつて、諸種の淡、滲の藥とは同じくない。好古曰く、足の太陽の經に入り、滑にしてよく竅を利す、ゆゑに水道を通ずるのであつて至燥の劑である。豬苓湯で滑石、阿膠を用ゐるは同じく滑劑であつて水道を利す。葱豉、生薑と共に煎じ、滓を

去つて澄清したものを用うれば解利する。淡味は滲洩し、陽であるところから表を解し小便を利するのである。小便の自ら利するものには用ゐぬがよい。

○時珍曰く、滑石の竅を利するは獨り小便のみを利するのではない。上はよく毛孔、皮膚の竅を利し、下はよく精液、尿の竅を利するものである。蓋し甘、淡の味は先づ胃に入つて經絡に滲走し、津氣を遊溢し、上は肺に送り、下は膀胱に通ずるものである。肺は皮、毛を主り、水の上源である。膀胱は津液を司り、氣が化すればよく外に排出する。故に滑石は上はよく表を發し下は水道を利するのであつて、熱を蕩し濕を燥するの劑である。結果からいへば表を發するは上、中の熱を蕩するのであり、水道を利するは中、下の熱を蕩するのである。作用の上から見れば表を發するは上、中の濕を燥するのであり、水道を利するは中、下の濕を燥するのである。熱が散ずれば三焦が安になつて表、裏が相和し、濕が去れば(二三)闌門が通じて陰陽が利するのである。劉河間が益元散を用ゐて表裏、上下の諸病を通治したのは、蓋しこの關係に依つたものだ。ただ未だ理論的に明瞭にされてなかつたまでのことである。

(二三)前後ノ兩門ヲ指ス。

（二三）熱病ノ一種。

（二四）腸澼、シブリバラ。

（二五）吹乳ハ乳癰。

【附方】 曹六、新十三。【益元散】又、天水散、太白散、六一散と名ける。中暑、傷寒、疫癘、飢飽、勞損、憂鬱、過慮、驚恐、悲怒、傳染、幷に發汗後の遺熱、勞復の諸疾を解し、兼ねて（二三）兩感傷寒、諸種の藥、酒食、邪熱の毒を解し、五勞七傷、一切の虛損、內傷、陰痿、驚悸、健忘、癇瘛、煩滿、短氣、痰嗽、肌肉疼痛、腹脹悶痛、淋閟濇痛、服石石淋を治し、身熱、嘔吐、泄瀉、（二四）腸澼、下痢赤白を療じ、煩熱、胸中の積聚、寒熱を除き、渴を止め、畜水を消し、婦人の產後の損液、血虛、陰虛等の熱甚しきを解し、出產を催し、乳を下し、（二五）吹乳、乳癰、牙瘡、齒疳を治す。この藥は大いに脾、腎の氣を養ひ、九竅、六腑を通じ、留結を去り、精氣を益し、筋骨を壯にし、氣を和し、經脈を通じ、水穀を消し、眞元を保ち、耳目を明にし、魂を安んじ、魄を定め、志を強くし、身を輕くし、顏色の老ゆるを防ぎ、壽命を益し、勞役、飢渴に耐ふるの神驗ある仙藥である。白滑石を水飛して六兩、粉甘草一兩を末にし、三錢づつを蜜少量と溫水で調へて服するのであつて、實熱には新汲水を用ゐて服し、解利には葱豉湯を用ゐて服し、乳を通ずるには豬肉麪湯で調へて服し、分娩を催すには香油漿で服す。凡そ難產、或は死胎の下らぬは皆風熱

に由つて燥濇し、結滯し、緊斂して舒び緩む能はざるがためである。しかし此の藥力が至れば結滯が頓に開けて癒えるものである。（劉河間傷寒直格）【膈上の煩熱】多く渇するものに九竅を利す。滑石二兩を搗き、水三大盞で二盞に煎じて滓を去り、粳米を入れて粥に煮て食ふ。（聖惠）【女勞黃疸】日沒時に發熱惡寒し、小腹が急痛し、大便が（二六）溏黑し、額の黑くなるものには、滑石、石膏等分を硏末し、一日三回、大麥汁で方寸匕を服すれば小便が大いに利して癒える。腹滿すれば難治である。（千金方）【傷寒衄血】滑石末を飯で梧子大の丸にし、十丸づつを微し嚼み破り新水で嚥下せば立ろに止る。湯晦叔は『鼻衄は出すべき汗を出さぬために惹起すものだ。其の血が紫黑なる場合には、多少に拘らず直接これを止めてはならぬ。暫く溫和の藥を服してその營衞を調へ、出る血が鮮になるを待つて急にこの藥を服して止める』といつてある。（本事方）【（二七）乳石發動】躁熱煩渇するには、滑石粉半兩、水一盞で白汁を絞つて頓服する。（聖惠方）【突然の吐逆】食物の通らぬには。生滑石末二錢匕を溫水で服し、細麪半盞を食つて押へる。（寇氏衍義）【氣壅關格】通じがなく、小便淋結し、臍下が妨悶し、痛みを兼ぬるには、滑石粉一兩を水で調へて服す。（廣利方）

（二六）溏ハ凝結セザルヲ云フ。

（二七）乳石ハ鍾乳石ト白石英トヲ指ス。

（二八）轉脬ハ産後ノ尿閉。

（二九）冰片ハ龍腦。

【小便不通】滑石末一升を車前汁で和して臍の周圍四寸の範圍に塗り、乾けば易へる。冬季は水で和す。（楊氏産乳）【婦人の（二八）轉脬】小便を過度に忍んだために起るものである。滑石末二錢を葱湯で服す。（聖惠方）【姙娠子淋】小便の通じ得ぬには、滑石末を水で和泥して臍下二寸の處へ塗る。（外臺祕要）【伏暑の水泄】白龍丸――滑石を火で煆いて一兩、硫黃四錢を末にし、麪糊で綠豆大の丸にし、淡薑湯を用ゐて大人、小人それぞれ適度に服す。（普濟方）【伏暑の吐泄】或は吐し、或は泄し、或は瘧し、小便赤く、煩渴するには、玉液散――桂府の滑石を燒いて四兩、藿香一錢、丁香一錢を末にして米湯で二錢を服す。（普濟方）【霍亂、及び瘧】方は上に同じ。【痘瘡の狂亂】衣に循り床を摸して狂ひ、大熱引飮するには、益元散に朱砂二錢、（二九）冰片三分、麝香一分を加へ、燈草湯で二三回服す。（王氏痘疹方）【風毒熱瘡】全身から黃水を出すには、桂府滑石末を傅ければ翌日癒える。先づ虎杖、豌豆、甘草等分を湯に煎じて洗つて後に搽るのである。（普濟方）【陰下の濕汗】滑石一兩、石膏を煆いて半兩、枯白礬少量を研つて摻る。（集簡方）【脚の指縫の爛れ】方は上に同じ。【杖瘡の腫痛】滑石、赤石脂、大黃等分を末にし、茶湯で洗淨して貼る。（趙氏經驗方）【熱毒怪

病】目赤く鼻脹れて甚しく喘し、渾身に斑が出で毛髪が鐵の如くなるは、熱毒に中つて氣が下焦に結するに因るのである。滑石、白礬各一兩を末にして一服とし、水三盌で半分に煎じ、一口に休まず飲む。（夏子益奇病方）

不灰木（宋開寶）

和名　いしわた・石綿・石絨
學名　Asbestus

【釋名】無灰木　説明は次項を見よ。

【集解】頌曰く、不灰木は(一)上黨に產し、(二)澤州、(三)潞州の山中にいづれもある。蓋し石の類である。その色は白く、爛木のやうで燒いても燃えないところから此の名稱が生じたのである。或は滑石の根だともいふ。滑石の出る處にはいづれもあつて、採收に一定の時期はない。藏器曰く、燒いて灰にするには、ただ斫り破つて牛乳で煮て黃牛糞で燒けば灰になる。

時珍曰く、不灰木には木と石の二種あつて、石類のものはその體が堅く重く、紙に裹み石腦油に浸して燈に燃せば夜を徹しても灰にならぬ。世間では多くこれで小刀の(四)靶を作る。開山圖に『徐無山に不灰の木、不灰の石が出る』とあるが、その

(一)上黨ハ長石ノ註ヲ見ヨ。
(二)澤州ハ今ノ山西省晋城縣ニソノ舊治アリ。
(三)潞州ハ長石ノ註ヲ見ヨ。
(四)靶ハ柄ナリ。

山は今の(五)順天府玉田縣の東北にある。庚辛玉册に『不灰木は陰石であつて、西南蠻夷の地方や(六)黎州、(七)茂州に生ずるものが好い。狀態は針のやうな文があつて全く木を見るやうなものだが、燒いても烟がない』とある。これはいづれも石として取扱つたものである。



〔不灰木〕
—潞州—

伏深の齊地記に『(八)東武城に勝火木といふがある。野火がその一帶の地を燒いてもその木だけは燒けずに遺つて居るところから不灰木とも謂ふ』とあり、楊愼の丹鉛錄に『太平寰宇記に不灰木とあるは俗に多く(九)鋌子にするものだ。之を燒けば炭になるが灰にはならない。膠州に產し、その葉が蒲草のやうだ。今世間でこれを束ねて松明にし、萬年火把と稱して居る』とある。これはいづれも木として取扱つたものである。余(時珍)は嘗てこの火把を買つて見たが、これは草葉で束ねた中に松脂の類を夾むだもので、一夜燃しても僅に一二寸燒けるだけだつた。

【附錄】松石　頌曰く、今の(一〇)處州に松石といふ一種のものが出る。松の幹

(五)順天府卽チ淸ノ國都北京。今ノ北平。玉田縣ハ今ハ津海道ニ屬ス。
(六)黎州ハ今ノ四川省淸溪縣ノ地。
(七)茂州ハ今ノ四川省茂縣ノ地。
(八)東武城ハ今ノ山東省高密ノ南方維水ニ沿フ諸城ノ地ナリ。太平寰宇記ニハ此文ナキガ如シ。
(九)鋌ハ鑄塑。
(一〇)處州ハ[illegible]

のやうに見えるが實は石である。或は松が長年月の間に化石したものだともいふ。世間では多くこれを（一）山亭の裝飾にし、また細工を施して枕などにする。藥には入れぬものだが不灰と類似のものだからここに附錄する。

【氣味】【甘し、大寒にして毒なし】獨孤滔曰く、汞を煮、草砂を結し、（二）三黃を煆き、五金を匱す。

【主治】【熱痱瘡に棗葉、石灰と和して粉にして傅ける】（開寶）【煩熱、陽厥を除く】（時珍）

【發明】時珍曰く、不灰木は性寒であつて諸熱藥と共に用ゐて陰毒を治す。劉河間の宣明方の陽絶の心腹痞痛を治する金針丸の中にも之を用ゐて服すとあるが、蓋し寒、熱並用であつて陰陽を調停する所以である。

【附方】新四。【肺熱欬嗽】寢臥中に欬の盛なるには、不灰木一兩半、太陰玄精石二兩、甘草を炙いて半兩、貝母一兩半、天南星を白礬水で煮て半兩、これを末にして二錢づつ薑湯で服す。（聖濟錄）【咽喉の腫痛】（三）五心の煩熱するには、不灰木を牛糞で赤く燒いて四兩、太陰玄精石を赤く煆いて四兩、眞珠一錢を末にし、糯米粥

器ノ註ヲ見ヨ。

（一）金陵本「傍山亭」トアレドモ、證類本草、「飾山亭」トアルニ從フ。

（二）丹方鑑源ヲ見ルニ、結草砂以下ノ文ナシ。恐クハ衍文ナラン。

（三）五心ハ五臟ノコトカ。

で芡子大の丸にし、一日二回、一丸づつを生地黄汁、粟米泔で研り溶して服す。（聖濟錄）【霍亂煩滿】氣逆し、腹脹し、手足の厥冷するには、不灰木、陽起石を煆き、阿魏半兩、巴豆を心を去り、杏仁を皮を去つて各二十五箇、これを末にして粟飯で櫻桃大の丸にし、一の孔を穿つて一丸づつ燈火で焼き、烟が盡きてから研末して薑湯で服す。利するを度とする。（聖濟錄）【陰毒の腹痛】回陽丹——不灰木を煆き、牡蠣を煆き、高良薑を炒り、川烏頭を炮き、白芍藥と各一錢を末にして麝香少量を入れ、一錢づつを男は女の唾で調へて外腎に塗り、女は男の唾で調へて乳上に塗れば汗が出て癒える。（玉機微義）

五色石脂（本經上品）

和名　硬質の粘土又は石鹼石
學名　Agalmatolite or Saponite

【校正】五種の石脂を併せ入る。

【釋名】時珍曰く、膏の凝つたものを脂といふ。この物の性は粘着して爐、鼎を固封するに甚だ良いものだ。蓋し體と用とを兼ねた名稱である。

【集解】別錄に曰く、五色石脂は(一)南山の陽の山谷中に生ずる。又曰く、青石

(一)南山トハ終南山

脂は齊の(二)區山、及び海涯に生ずる。黃石脂は(三)嵩高山に生じ、色は鶯雛のやうである。黑石脂は(四)潁川の陽城に生ずる。白石脂は太山の北に生ずる。赤石脂は濟南、(五)射陽、及び太山の北に生ずる。いづれも採收に一定の時期はない。○普曰く、五色石脂、一名五色符といふ。靑符は南山、或は海涯に生ずる。黃符は嵩山に生じ、色は(六)豘腦、雁雛のやうだ。黑符は(七)洛西の山の空地に生ずる。白符は少室山、天婁山、或は太山に生ずる。赤符は少室、或は太山に生じ、色は眞紅にして滑なること脂の如くである。

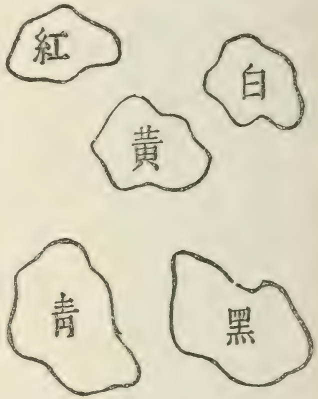
○弘景曰く、今俗間で用ゐるは赤石、白石の二脂のみであつて、その好きものは(八)吳郡に產し、また(九)武陵、建平、(一〇)義陽にも產する。義陽のものは、(一一)鄳縣界の東八十の地點に出るのであつて、狀態は豘腦のやうだ。赤石は愛すべき鮮紅色で採るに隨つて復た生ずる。その他の三色の石脂には正しき用途はない。ただ黑石脂が繪畫の顏料になる位のものである。

○恭曰く、義陽は卽ち中州である。そこから出るのは桃花石であつて石脂ではない。

白石脂は今は(一二)慈陽の諸山から出るものが他の產地のものに勝つて居る。赤石脂

ナイフ。山西省西安府ノ南ニ在リ。
(二)區山、未考。
(三)嵩高山卽チ嵩山ハ河南省登封縣ニ在リ。
(四)潁川ハ郡名秦ニ置ク。河南省ノ一部、今ノ禹縣ハ舊治ナリ。陽城ハ潁水ニ沿フテ舊治ノ西北方、嵩山ノ東南ニ當ル。
(五)射陽ハ今ノ江蘇省射陽湖一帶ノ地ヲ指ス。
(六)豘ハブタ。
(七)洛西トハ洛陽ノ西方一帶ノ地ヲ指ス。
(八)吳郡ハ土部甘鍋ノ註ヲ見ヨ。
(九)武陵ハ丹砂ノ註、建平ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(一〇)義陽ハ魏ノ郡名、故城ハ今ノ河南省桐柏縣ノ東ニアリ。
(一二)慈縣、未詳。

（一二）慈陽、未詳。
（一三）盧氏縣ハ今ノ河南省ノ盧氏縣。虢州ハ金部銀ノ註ヲ見ヨ。
（一四）陵川縣ハ今ノ山西省ノ陵川縣。澤州ハ不灰木ノ註ヲ見ヨ。
（一五）慈州ハ今ノ山西省吉縣ノ地ナリ。
（一六）呂鄕縣、元和郡縣志ニハ呂香縣トアリ。今ノ山西省襄陵縣ノ西ト吉縣ノ東ノ中間ニアリ。
（一七）宜州ハ丹砂ノ註ヲ見ヨ。



〔五色石脂〕

は今は虢州の（一三）盧氏縣、澤州の（一四）陵川縣に產し、又（一五）慈州の（一六）呂鄕縣、（一七）宜州の諸山からも出る。いづれも色理が鮮で滑なものを佳しとする。この赤、白二脂が太山にあるといふ事實は聞かない。舊と蘇州の餘杭山に出たが今では採收せぬ。

○承曰く、今は蘇州から赤、白二石脂を貢納するが、藥用としては甚だ佳いものでない。ただ延州の山中から出るものが最も良く、兩石を列べて何れを取るかといへばこれを取る。○頌曰く、白石脂、赤石脂は今は潞州だけに產出する。潞州は慈州に接近した土地だ。○宗奭曰く、赤、白石脂は各地いづれにもあるもので、理が滑で舌に粘り脣に附著するものが上等品だ。

修治　○斅曰く、凡そ赤脂を使ふには、粉のやうに研つて新汲水で三回飛過し、

晒し乾して用ゐるのである。時珍曰く、火で煆き、水で飛することもある。

[氣　味]【五種の石脂いづれも甘し、平なり】大明曰く、いづれも溫にして毒なし。黃芩、大黃、官桂を畏る。

[主　治]【黃疸、洩痢、腸澼、膿血、陰蝕、下血赤白、邪氣、癰腫、疽痔、惡瘡、頭瘍、疥瘙。久しく服すれば髓を補ひ、氣を益し、肥健にし、饑ゑず、身を輕くし、天年を延べ、五石脂各〻その五色の配當するところに隨つて五臟を補ふ】（本經）【洩痢、血崩、帶下、吐血、衄血、濇精、淋瀝を治し、(一八)煩を除き、驚悸を療じ、筋骨を壯にし、虛損を補ふ。久しく服すれば顏色を好くし、(一九)瘡癤、痔漏を治し、膿を排す】（大明）

青石脂 [氣　味]【酸し、平にして毒なし】普曰く、青符。神農は甘しといひ、雷公は酸く毒なしといひ、桐君は辛し毒なしといひ、李當之は(二〇)大寒なりといふ。

[主　治]【肝、膽の氣を養ひ、目を明にし、黃疸、洩痢、腸澼、婦人帶下、百病、及び疽痔、惡瘡を療ず。久しく服すれば髓を補ひ、氣を益し、饑ゑず、天年を

(一八)大觀本草ニ寒ニ作ル。
(一九)大觀本草ニ瘡疥ニ作ル。
(二〇)大觀ニハ小寒トアリ。

延べる』（別錄）

黃石脂 〔氣味〕『苦し、平にして毒なし』普曰く、黃符。雷公は苦しといひ、李當之は小寒なりといふ。之才曰く、曾青がこれの使となる。細辛を惡み、蜚蠊、黃連、甘草を畏る。斆曰く、これを服するには卵味を忌む。

〔主治〕『脾氣を養ひ、五臟を安んじ、中を調へる。大人小兒の洩痢、腸澼、膿血を下し、白蟲を去り、黃疸、癰疽の蟲を除く。久しく服すれば身を輕くし、天年を延べる』（別錄）

黑石脂 別錄に曰く、一名石墨、一名は石涅といふ。時珍曰く、これは石脂の黑いもののことで、やはり墨にもなる。その性は舌に粘り、石炭とは同しくない。南方の地では之を畫眉石といふ。許氏の說文には『黛は畫眉石なり』とある。〔氣味〕『鹹し、平にして毒なし』普曰く、黑符。桐君は甘く、毒なしといふ。

〔主治〕『腎氣を養ひ、陰を強くし、陰蝕瘡に主效があり、腸澼、洩痢を止め、口瘡、咽痛を療ず。久しく服すれば氣を益し、饑ゑず、天年を延べる』（別錄）

白石脂 〔氣味〕『甘く酸し、平にして毒なし』普曰く、白符、一名隨。岐伯、

雷公は酸し毒なしといひ、桐君は甘し毒なしといひ、扁鵲は辛しといひ、李當之は小寒なりといふ。權曰く、甘く辛し。杲曰く、溫なり。之才曰く、厚朴と合して米汁で飮めば便膿を止める。燕屎が使となる。松脂を惡み、黃芩を畏る。頌曰く、黃連、甘草、飛廉、馬目毒公を畏る。

【主治】【肺氣を養ひ、腸を厚くし、骨髓を補ひ、五臟の驚悸、不足、心下の煩を療じ、腹痛下水、小腸澼、熱溏、便膿血、婦人の崩中、漏下赤白沃を止め、癰疽、瘡痔を排す。久しく服すれば心を安んじ、饑ゑず、身を輕くし、天年を延べる】（別錄）【大腸を濇す】（甄權）

【附方】舊四、新二。【小兒の水痢】身體衰へ力乏しく、湯藥を用うるに勝へざるには、白石脂半兩を研粉して白粥に和し、肚をすかして食ふ。（子母祕錄）【小兒の滑泄】白龍丸——白石脂、白龍骨等分を末にして水で黍米大の丸にし、年齡の多少に隨ひ量を增減して木瓜紫蘇湯で服す。（全幼心鑑）【久泄久痢】白石脂、乾薑等分を研り、百沸湯で麪を和して作つた稀糊に搜ぜて梧子大の丸にし、米飮で三十丸づつを服す（斗門方）【小兒の臍から汁の出るもの】赤腫するには、白石脂末を熬り溫めて

一日三回づつ撲つ。抱き上げ動かしてはならぬ。（章宙獨行方）【小兒の臍の出血】多く啼くには、方は上に同じ。（寇氏衍義）【粉滓面䵟】白石脂六兩、白蘞十二兩を末にし、雞子白で和して夜塗り朝洗ふ。（聖濟錄）

赤石脂〔氣味〕【甘く酸く辛し、大溫にして毒なし】普曰く、赤符。神農、雷公は甘しといひ、黃帝、扁鵲は毒なしといひ、李當之は小寒なりといふ。之才曰く、芫花を畏れ、大黃、松脂を惡む。頌曰く、古人はこれも單獨に服食したもので、副作用が發して心痛するときは熱酒を飲み、なほ解せぬときは綿で葱豉を裹んで水で煮て飲めといつてある。

〔主治〕【心氣を養ひ、目を明にし、精を益し、腹痛、腸澼、下痢赤白、小便利、及び癰疽、瘡痔、婦人の崩中漏下、難產、胞衣の出ぬものを療ず。久しく服すれば髓を補ひ、顏色を好くし、智を益し、饑ゑず、身を輕くし、天年を延べる】（別錄）【五臟の虛乏を補ふ】（甄權）【心血を補ひ、肌肉を生じ、腸胃を厚くし、水濕を除き、脫肛を收める】（時珍）

〔發明〕弘景曰く、五色石脂は、本經では療體がやはり似て居るが、別錄では

五條に分つて具に載せてある。今ではただ赤、白二脂を下痢を斷つに用ゐるのみである。元素曰く、赤、白石脂は共に甘く酸く、陽中の陰であつて脫を固くする。杲曰く、降なる作用は陽中の陰である。その應用には二樣あつて、腸胃を固くしては收斂の能があり、胎衣を下しても峻辣なる掃蕩の作用はない。好古曰く、濇は脫を去るもので、石脂は收斂の劑である。赤石脂は(二一)丙に入り、白石脂は(二二)庚に入るものだ。

時珍曰く、五石脂いづれも手足の陽明の藥であつて、その味は甘、氣は溫、體は重、性は濇である。濇であり、重であるが故によく濕を收め血を止めて下を固くし、甘にして溫なるが故によく氣を益し肌を生じて中を調へる。中とは腸、胃、肌肉、驚悸、黃疸を指し、下とは腸澼、泄痢、崩帶、失精を指すのであつて、五種石脂の主たる治效は大抵同じものである。故に本經では條目を分たず、ただ各五色に隨つて五臟を補ふといつたのだ。別錄に五條に分載してはあるが、その記載した性味、主治はやはり甚だ相違くない。ただ五味を五色に配しただけの相違であつて、これとても强ひて分けて見ただけのものである。赤、白の二種は一は氣分に入り一は血

(二一)丙ハ心臟。
(二二)庚ハ肺臟。

分に入る。故に現今之を稱用するのである。張仲景が桃花湯を用ゐて下痢、便膿血を治したのは、赤石脂の重濇にして下焦の血分に入り脫を固くする力を取り、乾薑の辛、温で下焦の氣分を暖めて虛を補ひ、粳米の甘、温を石脂、乾薑の佐として腸、胃を潤す效果を取つたものである。

附方 普五、新七。【小兒の疳瀉】赤石脂末半錢を米飮で調へて服すれば立ろに瘥える。京芎等分を加へるが更に妙である。(斗門方)【大腸の寒滑】小便に精の交つて出るには、赤石脂、乾薑各一兩、胡椒半兩を末にし、醋糊で梧子大の丸にし、空心に米飮で五七十丸を服す。ある人がこの病で熱藥を一斗二升まで服したが效が現れず、他から教はつてこれを服すると四劑にして瘥えた。(寇氏衍義)【赤白下痢】赤石脂末一錢を飮で服す。(普濟方)【冷痢腹痛】白凍魚腦のやうなものを下すには、桃花丸——赤石脂を(一三)煅き、乾薑を炮いて等分を末にし、蒸餠で和して丸にし、年齡の大少に依り量を計つて一日三回づつ服す。(和劑局方)【老人の氣痢】虛冷には、赤石脂五兩を水飛し、白麪六兩を水で煮熟し、葱、醬を入れ臛にして空心に食ふ。三四回にして瘥える。(養老方)【傷寒下痢】便膿血の止まぬには、桃花湯が主效があ

(一三)和劑局方ニ煅ノ字ナシ。

（二四）本書ヲ按ズルニ、「背痛徹心、烏頭赤石脂丸主之。蜀椒一兩、一法二分。烏頭一分。附子半兩、一

る。赤石脂一斤を一半はそのまま用ゐ、一半は末にして用ゐ、乾薑一兩、粳米半升を水七升で煮て米が熟したとき滓を去り、毎服七合に末方寸匕を納れて日毎に三服し、癒えれば止める。（仲景方）【痢後の脱肛】赤石脂、伏龍肝を末にして傅ける。ある方では白礬を加へる。（錢氏小兒方）【反胃吐食】絶好の赤石脂を末にし、蜜で梧子大の丸にし、空腹にして十丸乃至三十丸を薑湯で服す。先づ巴豆仁一箇を破らぬやうに唾液で呑み、後にこの藥を服するのである。（聖惠方）【痰飲吐水】時節に拘らず吐くは、原因は冷き飲物の過度であつて、遂に脾、胃の氣を弱め消化不能となり、飲食物が胃に入ると皆變じて冷水となり、その結果反吐して停まぬのである。赤石脂散が之に主效がある。赤石脂一斤を搗き篩つて方寸匕を酒で飲み、隨意に三匕まで增して一斤を服し盡せば終身痰水を吐かず、また下痢せず、五臟を補ひ、肥健になる。ある痰飲の患者は諸藥を服して效がなかつたが、これを用ゐて遂に癒えた。（千金翼方）【（二四）背に徹する心痛】赤石脂、乾薑、蜀椒各四分、附子を炮いて二分、烏頭を炮いて一分を末にし、蜜で梧子大の丸にし、先づ食事を攝つてから一丸を服す。效なきときは漸次に數を增加する。（張仲景金匱方）【經水過多】赤石脂、破故紙一兩を末にし、

法一分。乾姜一兩、一法一分。赤石脂一兩、一法二分」トアリ。

(一)中州ハ今ノ河南省信陽縣ノ南ニ舊治アリ。鍾山縣ハ信陽縣ト息縣トノ中間淮水ノ南ノ地點ナリ。
(二)信陽州卽チ信陽縣ノ地。

二錢づつを米飲で服す。(普濟方)　【小便の禁ぜぬもの】赤石脂を煆き、牡蠣を煆いて各三兩、鹽一兩を末にし、糊で梧子大の丸にし、鹽湯で十五丸づつを服す。(普濟方)

桃花石（唐本草）

和名　紅色の石灰岩
英譯名　Limestone of pink colour

【集解】恭曰く、桃花石は(一)中州鍾山縣から出る。赤石脂に似てただ舐めても舌に著かぬものがそれである。珣曰く、狀態はやはり紫石英に似たもので、色が桃花のやうで光潤で重い、見たところ愛すべきものだ。頌曰く、今は(二)信陽州にある。塊の形は赤石脂、紫石英などに似たもので、採取に一定の時期はない。陶弘景は、赤石脂の義陽に出るものは狀態が豘腦のやうで鮮紅愛すべきものだといひ、蘇恭はこれを否定して、これは桃花石といふもので、久しく服すれば身體が肥えるといつて居る。今その地方人は痢を治療するに用ゐて居るが、功用は赤石脂と相違からぬものである。宗奭曰く、桃花石に赤、白の二種ある。赤地に淡白點があつて桃花の如きものと、淡白地に赤點があつて桃花の如きものとであつて、世間では往往鐫り磨いて器を作つて居るが、稀には服するものもある。時珍曰く、これは赤、白

石脂のうちの舌に粘らず、堅く、花の如き點のあるものをいふのであつて、別の種類のものではない。故にその氣味も功用も皆石脂に同しいのである。昔張仲景が痢を治するに赤石脂を用ゐた桃花湯といふがあり、和劑局方には冷痢を治する桃花丸がある。いづれもこの物を用ゐたのだ。

【氣味】【甘し、温にして毒なし】【主治】【大腸の中冷、膿血痢。久しく服すれば人體を肥澤にし、飲食を充分ならしめる】（唐本）

爐甘石（綱目）

和名　ろかんせき・菱亞鉛鑛─炭酸亞鉛と白雲石（炭酸石灰苦土）の共生混合物
英譯名　Intergrowth of Smithonite and Dolomite

【釋名】爐先生　（一）土宿眞君曰く、此の物を點化すれば神藥の絶妙なるものを得る。（一）九天、三清は倶にこれを尊んで爐先生といふ。等閑な藥ではない。時珍曰く、爐中で火力を用ゐ物を點化するものとして重ぜられ、その味の甘いところから此く名けたものである。

【集解】時珍曰く、爐甘石は所在の採鑛冶金場にいづれもあるもので、（二）川蜀、

（一）九天、三清共ニ仙術ノ名。
（二）川蜀ハ今ノ四川

湘東に最も多い。しかし(三)太原、澤州、陽城、(四)高平、(五)靈丘、(六)融縣、及び雲南のものが勝れて居る。この物は金銀の苗であつて、その塊は大小一定せず、形狀は羊腦に似て鬆く、石脂のやうでやはり舌に粘る。金坑に産する色の微黃なるを上等とする。銀坑に產するものは色が白く、或は青を帶び、或は綠を帶び、或は粉紅のものもある。赤銅がこれと合すれば黃色に變するもので、今の黃銅は皆この物で點化したものだ。造化指南に『爐甘石は黃金、白銀の氣を受け、三十年間熏陶の結果に成つたもので、(七)大穢に浸し、及び砒で煮ればすべての物を點化する。その力は(八)三黃に減ぜぬものだ』とあり、崔昉の外丹本草には『銅一斤、爐甘石一斤を用ゐて錬れば鍮石一斤半になる。これは石中からその半斤の物が取り出されたのではあるまいか』といつてある。眞鍮石は波斯に產する黃金のやうなもので、燒けば赤くなるが黑くはならぬ。

【修　治】 時珍曰く、凡そ爐甘石を用ゐるには、炭火で紅く煅いて童尿に淬すこと七回、後に水で洗淨して粉に研り、水で飛過して晒して用ゐる。

【氣　味】『甘し、溫にして毒なし』【主　治】『血を止め、腫毒を消し、肌を生

省地方、湘東ハ今ノ湖南省湘水ノ東方一帶ノ地。
(三)太原ハ今ノ山西省ノ首都太原府。澤州ハ不灰木ノ註、陽城ハ五色石脂潁川郡ノ註ヲ見ヨ。
(四)高平ハ今ノ山西省冀寧道ノ高平縣。清ニハ澤州府ニ屬ス。
(五)靈丘ハ同省雁門道ノ靈丘縣。清ニハ大同府ニ屬ス。
(六)融縣ハ今ノ廣西省桂江道ノ融縣。清ニハ柳州府ニ屬ス。
(七)大穢詳ナラズ。疑フラクハ童子小便ノコトカ。
(八)三黃ハ雄黃、雌黃、砒黃。

(九)風化消、朴硝ノ條下ニ解アリ。

(一〇)銀石器、湯煎鍋ノ如キモノカ。

(一一)五輪ハ眼球ノ膜層、八廓ハ眼ノ外廓ノ部分ナラン。

じ、目を明にし、瞖を去り、赤を退け、濕を收め、爛を除く。龍腦と共に點ければ目中一切の諸病を治す】（時珍）

【發明】時珍曰く、爐甘石は陽明の經の藥であつて、金銀の氣を受けたものだから目病を治するの要藥となるのである。余は嘗て爐甘石を煅き淬し、海螵蛸、硼砂各一兩と細末にして目の諸病に點けたが甚だ妙效があつた。朱砂五錢を入れるとその性が粘らなくなる。

【附方】新十五。【目の劇しき赤腫】爐甘石を火で煅いて尿に淬し、(九)風化消と等分を末にし、新水で一粟ほどを化して點ける。（御藥院方）【諸種の瞖膜】爐甘石、靑礬、朴消等分を末にし、一日三回、一字づつを沸湯で化開し溫めて洗ふ。（宣明方）【一切の目疾】眞爐甘石半斤を黃連四兩を豆の大さに剉んだものと(一〇)銀石器に入れ、水二盌で二伏時煮て黃連を去つて末にし、片腦二錢半を入れむらなく研つて鑵に貯へ、少量づつを頻に點けて效を取る。○又別方では、爐甘石を煅いて一錢、盆消一錢を末にし、熱湯に泡けて洗ふ。【目中の諸病】石連光明散——眼中の(一一)五輪、八廓の諸證を治する神效がある。先づ羊腦のやうな鴨頭色の爐甘石半斤を、桑柴灰

(一二)各字衍。

(一三)石、金陵本ニ二作ル。然レドモ石字ノ誤ナルコトセリ。

(一四)夾紙ハ漉紙。

一斗の火で赤く煆いて研末し、雅州の黄連(一二)各四兩を切片して煎じた水にその爐甘石末を浸し、澄まして粉を取つて晒し乾し、別に鉛粉二定を蓋に爐甘石を浸した(一三)石連水に浸して炒り、又、雄黄を研末し、その甘石、鉛粉各三分、雄黄一分と片腦半分を用ゐ、むらなく研つて眼に點けるが甚だ妙である。(張氏方)【目暗昏花】爐甘石を七回火で煆いて童尿に淬し、代赭石を七回火で煆いて醋に淬し、黄丹を水飛して各四兩を末にし、白沙蜜半斤を銅鍋で錬つて白沫を去り、更に清水五六盌を添へて熬沸した中へ入れて文武火で一盌に熬り詰め、水を滴しても玉になつて散ぜぬやうになつたとき、(一四)夾紙で漉して瓷器に入れて貯へ、日毎に頻に點ける。(衛生易簡方)【爛弦風眼】劉長春の風眼で涙が流れて爛弦するを治する方では、白爐甘石四兩を七回火で煆き童尿に淬し、地上に三日間置いて毒を出して研細し、就寝時に椒湯で目を洗つてから三四回點け、翌早朝茶湯で洗ひ去るが甚だ妙である。○又別法では、爐甘石一斤を火で煆いて黄連四兩を煎じた水に七回淬して末にし、片腦を入れて目に點ける。○宣明眼科方では、爐甘石、石膏各一錢、海螵蛸三分を末にし、片腦、麝香各少量を入れて置いて點ける。○衛生易簡方では、黄連一兩を煎じた水

に童尿半盞を入れて再び熬め、朴消一兩を入れてまた熬め、その中へ爐甘石二兩を火で煆いて七回淬し、洗淨し末にして密陀僧末一兩を入れて研勻し、貯へて置いて點ける。【聤耳の汁の出るもの】爐甘石、礬石各二錢、臙脂半錢、麝香少量を末にし、(一五)緻淨して之を吹く。(普濟方)【齒並荒く物の漏るるもの】爐甘石を煆き、寒水石と等分を末にし、少量づつを用ゐて牙に擦る。齒刷子を用ゐることを忌む。久しうして自ら密になる。(集玄方)【漏瘡の合はぬもの】童尿で爐甘石、牡蠣粉を調へて外を塞ぎ、滋補藥を內服する。(雜病治例)【下疳陰瘡】爐甘石を五回火に煆き醋に淬して一兩と孩兒茶三錢を末にし、麻油で調へて傅ければ立ろに癒える。(通妙邵眞人方)【陰汗濕痒】爐甘石一分、眞蚌粉半分を粉に研つて撲つ。(直指方)

井泉石（宋嘉祐）

和名　結粒の類
英譯名　Concretions of some minerals

【釋名】時珍曰く、性が寒で井泉の如くなるところから名けたものである。

【集解】禹錫曰く、井泉石は近道の諸處にあるが、(一)饒陽郡の産が勝れて居る。田畑や野原にあるものを地中一丈餘の深さに掘つて取るのである。色は土のやう

(一五)緻淨ハガーゼノ如キモノニテ、拭キ淨メルコトナリ。

(一)饒陽郡ハ舊ノ深州ノ地ニ屬ス。今ノ直隷省保定道饒陽縣

ノ地ナリ。

(三)深州ハ今ノ直隷省保定道ノ深縣ノ地ナリ。

だ。形は圓方、長短、大小まちまちだが、大體外形が圓く內部は實し、幾箇も相重り合つて居るものだ。採收に一定の時期はない。又、別に一種薑石のやうなものがあつて、當今の人は多くこれを井泉石といつて居るが、それは違ふ。頌曰く、(三)深州城下の西二十里の劇家村に出る。



〔井泉石〕

〔修治〕禹錫曰く、凡そこれを用ゐるには、細研して水で飛過する。然らざれば淋を發すものである。

〔氣味〕〔甘し、大寒にして毒なし〕〔主治〕〔諸熱、心臟の熱結を解す。熱嗽、小兒の熱疳、雀目、青盲、眼赤腫痛、腫毒を消す。決明、菊花と配合すれば小兒の眼疳で生じた翳膜を療し、大黃、巵子と配合すれば眼瞼の腫赤を治す〕(嘉祐)

〔附方〕新四。〔膀胱の熱閉〕小便不快には、井泉石、海金沙、車前子、滑石各一兩を末にし、二錢づつを蜜湯で服す。(聖濟錄)〔風毒の赤目〕井泉石半兩、焙じた井中の苔、穀精草一兩、焙じた豉一合を末にし、二錢づつを空心に井華水で服す。

（聖濟錄）【產後の搐搦】俗に雞爪風と名ける。舒筋散——井泉石四兩、別に研つた天麻、酒に浸した木香各一兩、人參、川芎、官桂、丁香各半兩を末にし、毎服三錢を大豆淋酒で調へて服す。汗を出して癒える。（宣明方）【痤疿瘙痒】井泉石を生で三兩、寒水石を煅いて四兩、膩子半錢を末にして撲つ。（聖濟錄）

無名異（宋開寶）

和名　鐵・マンガンを含める結粒
英譯名　Ferromagnesium concretion

【釋名】時珍曰く、無名異とは隱語である。

【集解】志曰く、無名異は（一）大食國に產する。石上に生ずるもので、形狀は黑石（二）灰の如きものだ。蕃地の者が油で鍊つて作つたものは鷖石のやうで、嚼めば飴のやうだ。頌曰く、今は廣州の山石の中、及び（三）宜州の八星龍濟山中にもある。黑褐色で大なるは彈丸ほど、小なるは黑石子ほどのものだ。採收に一定の時期はない。斆曰く、無名異は形は石炭に似て居るが味が異ふ。時珍曰く、川、廣の深山中に生ずるもので、（四）桂林に極めて多い。數百箇が一塊になつた小さい黑石子で、蛇黃に似て色が黑い。手近き處の山中にも時として出ることがある。これで蟹を煮れば

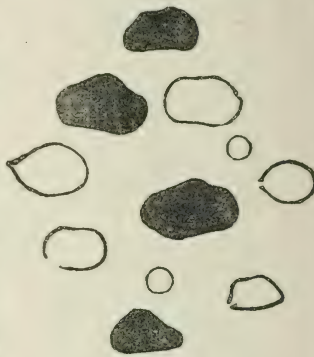
（一）大食國ハ甘露蜜ノ註ヲ見ヨ。
（二）灰ノ字、金陵本亦灰ニ作ル。然レドモ炭ノ誤字ナルコト明ナリ。
（三）宜州八星、大觀本草ニハ宜州南八里ニ作ル。宜州ハ丹砂ノ註ヲ見ヨ。八星龍濟山、未考。宜山縣ノ南龍塘江水源ノ山ヲ指スモ

ノノ如シ。(四)桂林ハ金部粉錫ノ註ヲ見ヨ。

腥氣を殺し、桐油を煎煉すれば水氣を收め、剪に塗つて燈心を切れば燈火が自ら二條に裂ける。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】○頌曰く、鹹くして寒である。硫黄を伏す。

【主治】【金瘡、折傷の內損。痛を止め、肌肉を生ずる】(開寶)【腫毒、癰疽を消



〔無名異〕

す。醋で摩つて傅ける】(蘇頌)【濕氣を收める】(時珍)

【發明】○時珍曰く、按ずるに、雷斅の炮炙論の序に『無名は痛みを止めるもので、指を切つても爪か毛を切つたやうだ』とあり、崔昉の外丹本草には『無名異は陽石である。昔、綱にかかつて其の足に負傷した山雞が、綱から逃れて一箇の石を嘴に啣へ、その負傷の箇所を摩つてゐるうちにやがて癒えて飛び去つた。それを見た者が、その石を持ち歸つて折傷に用ゐて見ると大いに效があつたので、爾來その效が世間に言ひ傳へられて居る』とある。

附方　新十。【打傷の腫痛】無名異末を酒で服すれば、四肢の末端へ逐ひ下して血が皆散ずる。(集驗方)【損傷の接骨】無名異、甜瓜子各一兩、乳香、沒藥各一錢を末にし、五錢づつを熱酒で服す。小兒は三錢を服す。服してから黃米粥を紙に塗り、左顧牡蠣の末を摻つて傷損の箇所を裹み、竹篦で挾んで置く。(多能鄙事)【臨杖(五)預服】杖刑に行はるる時に臨んで無名異末三五錢を溫服すれば、杖を受けても甚しく痛まず、また甚しく傷かぬ。(談埜翁試效方)【赤瘤丹毒】無名異末を葱汁で調へて塗れば立ろに消す。(簡便方)【痔漏腫痛】無名異を七回炭火で紅く煆き米醋に淬して細末にし、溫水で瘡を洗つてから、箸の先を綿で裹み末を含めて瘡口に入る。數回で癒える。(簡便方)【(六)天泡濕瘡】無名異末を井華水で調へて服す。(濟急方)【臁瘡の潰爛】無名異、虢丹を細研し、淸油で調へて搽る。濕れるときは乾して搽る。(濟急方)【股陰の(七)瘰癧】無名異二錢、麝香一字を研り、酒半盞で午後空腹に服すれば立ろに效がある。(多能鄙事)【拳毛倒睫】無名異末を紙撚に卷き込み、燈に點け吹き消して熏ずれば睫毛が自ら起つ。(保命集)【消渴引飲】無名異一兩、黃連二兩を末にし、蒸餅で綠豆大の丸にし、百丸づづを茄根、蠶繭を煎じた湯で服す。(聖濟錄)【脚氣の

(五) 原本預報ニ作ル、金陵本亦同ジ。然レドモ預服ノ誤ナルコト明ナリ。

(六) 天泡瘡、俗ニトビヒ又ウハヤケ。

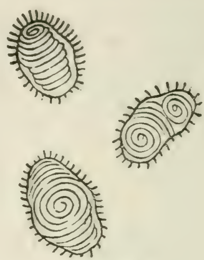
(七) 瘰癧ハ項腕兩乳傍又兩胯軟處結核。

痛楚】無名異末を牛皮膠で化し調へて塗り、頻に塗り換へる。（衛生易簡方）

蜜栗子（綱目）

和名　鐵結粒の類
學名　A species of Iron-concretion

【集解】時珍曰く、蜜栗子は川、廣、江、浙の金坑中に生ずる。形狀は蛇黃のやうで刺があり、その上を金線が纏つて紫褐色だ。これもやはり無名異の類である。丹爐家は採つて五金匱藥といふものを作り、雄黃、雌黃、硫黃を制する。



〔蜜栗子〕

【主治】【金瘡、折傷に效がある】（時珍）

石鍾乳（本經上品）

和名　石鍾乳・鍾乳石
學名　Stalactite

【釋名】(一)**留公乳**（別錄）**虛中**（吳普）**蘆石**（別錄）**鵞管石**（綱目）**夏石**（別錄）**黃石砂**（藥性）時珍曰く、石の(二)津氣が鍾集して乳となり、それが滴溜して石となつたものだから石鍾乳と名けたのである。蘆石、鵞管石といふはその中が空なる有

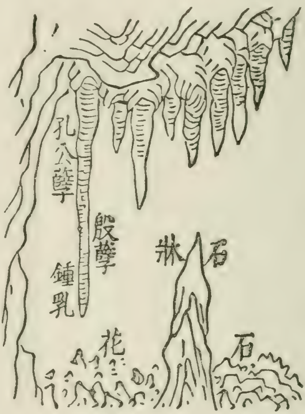
(一)唐本草、大觀本草、共ニ留字ナシ。
(二)津氣ハ津液。

樣を形容した名稱だ。

【集解】別錄に曰く、石鍾乳は少室の山谷、及び太山に生ずる。採收に一定の時期はない。普曰く、太山の山谷の陰暗な岸下に生ずる。溜汗から成るもので、乳汁の如く黃白色だ。中が空で相通じて居る。二月、三月に採つて陰乾する。弘景曰く、第一に(三)始興から出るが、(四)江陵、及び東境の名山の石洞にもいづれもある。鵞翎管のやうに中が通つて輕く薄く、碎けば指の爪のやうで內側に雁齒がなく明な光のあるものが善いのである。長く挺になつて一二尺も延びたものもあり、色は黃だが苦酒を刷いて洗へば白くなる。仙經に用ゐることは稀だが俗方では貴重なものだ。恭曰く、第一は始興のものである。それに次ぐは廣州、(五)連州、澧州、朗州、郴州等のもので比較的厚いけれども光潤愛すべく、服餌するにいづれも佳い。今の(六)陝州、(七)青溪、(八)房州の三洞に出るものも始興の產に次ぐ。その他は產地の地質が不適當なために多くは淋渴の病を發するから輕輕しく服してはならぬ。ただ搗き篩つて白き練絹で裹み、諸藥草に合せて酒に浸せば服してもよい。陶弘景が、一二尺のものがあるといふは謬說だ。思邈曰く、乳石は必ず淸白な土地に生じたもの、

(三)始興ハ土部白堊ノ條ヲ見ヨ。
(四)江陵ハ春秋ノ楚ノ渚宮ノ地ナリ。漢ニ縣ヲ置キ、唐ニ郡ヲ置キ、宋ニ府ヲ置ク。今ノ湖北省江陵縣ノ地ナリ。
(五)連州ハ今ノ廣東省連縣ノ地、澧州ハ今ノ湖南省澧縣ノ地、朗州ハ今ノ湖南省常德縣ノ地、郴州ハ今ノ湖南省郴縣ノ地ナリ。
(六)陝州ハ今ノ河南省陝縣ノ地ナリ。
(七)青溪ハ、今ノ江蘇省江寧縣ノ東北ニ

光潤で網目の様な紋があり、鳥翮、蟬翼のやうで完全に全體が白くなつたものを用ゐるがよい。適當ならざる土地に生じたものは人を殺すこと(九)鴆毒よりも甚しいものだから、決して服してはならぬ。



〔石鍾乳〕

○志曰く、別本の註に『凡て乳の生ずる深洞幽穴にはいづれも龍、蛇が潛伏するものだから、そのものに或は龍、蛇の毒氣があることがある。或はその洞口の陰陽が均衡を得ぬものがあり、或は風氣が通じたために雁齒の濇るものがあり、或は黃に或は赤くして乳に潤澤の無きものもあり、或は煎煉の(一〇)火色が調はぬがため、一日煎じた後水を易へぬために火毒を生ずるものもあり、これは服すれば淋を發するものだ。又、乳に三種ある。石乳といふは、その山洞が純石で、石の津液が相滋し、陰陽交〻備るところから、蟬翼の紋

青溪アリ、吳ノ時開鑿セル運河ナレバ恐ラクコレニハ非ザルベシ。未詳。

(八)房州ハ今ノ湖北省房縣ノ地ナリ。

(九)鴆原本鷄ニ作ル、金陵本亦同ジ。然レドモ鴆ノ誤ナルコト明ナリ。

(一〇)火色ハ熱度ノ調節。

が完全に現れ、その性は溫である。竹乳といふは、山洞の全面に小竹が生じ竹の津液が雜るところから、乳の形狀が竹のやうで、その性は平である。茅山の乳なるものは、その山が土石相雜り全面に茅草が生じて居るので、その茅の津液が相滋して乳となつたものだ。乳の色がやや黑くして滑に潤ひ、その性は微寒である。その同一種類の中にも上、中、下の等差はあるが、いづれも光澤のあるものを好しとする。此以外のところにもあるとはいふが、それは輕輕には信ぜられぬ』とある。○炳曰く、蟬翅の如きものが上等品で爪甲の如きものはこれに次ぎ、鵞管のものは下級品である。明白で薄きものならば服し得る。

○頌曰く、今の(一)道州江華縣、及び連州、(二)英州、韶州、階州、峽州の山中にいづれもある。岩穴の陰暗の處に生じ、山液が溜つて生成するもので中が空になつて通つて居る。長いものは六七寸あり、鵞翎管のやうな形で色は白く微し紅い。唐の李補闕の錬乳法に『韶州の鍾乳は厚薄を問はず、ただ表面の色がよくて明淨光澤なものならば錬り用うるに堪へるが、黃、赤二色のものは用うるに堪へぬ』とあり、柳宗元の文にも『その色の美なるものであればよく、必ずしも土質のみに信を置け

(一)道州ハ水銀ノ註ヲ見ヨ。江華縣ハ道州州治ノ南今ノ湖南省江華縣ノ地ナリ。
(二)英州ハ廣東省韶州府ノ南今ノ英德縣ノ地ナリ。韶州ハ金部粉錫ノ註、階州ハ石部玉ノ註ヲ見ヨ。峽州ハ今ノ湖北省宜昌縣ノ地ナリ。

（一三）宜ハ宜州、融ハ融州、丹砂ノ註ヲ見ヨ。

るものではない』といつてある。かかる次第で、この藥の重んずるところはただ明白なることのみを條件とする、必ずしも如上の所說の數種に限るわけではない。今醫家ではただ鵞管の如く中の空なるものを最上として居る。又、本經中品の殷孽の記載に『鍾乳の根なり。孔公孽は殷孽の根なり』とあり、石花、石牀も殷孽と同じものだ。又、石腦といふも鍾乳の類である。凡そこの五種は醫家では稀に用ゐ、ただ鍾乳だけを用ゐることになつて居る。

時珍曰く、按ずるに、范成大の桂海志に甚だ詳細明瞭に說いてある。その記事に依れば『桂林の（一三）宜、融に接近した山の洞穴中には鍾乳が甚だ多く、石脈の涌起する處を仰ぎ視ると玉雪のやうに白い乳牀があり、石液が融結して鍾乳になるのだが、乳牀の有樣は下垂して宛ら幾峯の小山を倒にしたやうに見え、峯の端が漸次に銳く且つ長く冰柱のやうになり、その柱の端は輕く薄く中が空で鵞翎のやうだ。乳水は絕えず滴瀝し、滴るに隨つて凝る。これが乳の最も精なるものだ。探るには竹の管を以て仰いでそれを承けて取るのである。鍊治家ではまた鵞管の端の尤も輕明にして雲母や爪甲の如きものを優良品とする』とある。

（一四）金銀器、圓鼎ノコトカ。

【修　治】斅曰く、凡そこれを使用するに、頭の粗く厚く尾の大なるものは用ゐてはならぬ。それは孔公石といつて用ゐられぬものである。色の黒きもの、及び大火に過つて驚過したもの、幷に久しく地上に在つたのを取つたもの、また曾て藥物を用ゐて加工したもの、いづれも用ゐてはならぬ。必ず鮮明で薄く光潤のあるものを用うるやうにせねばならぬ。鵞翎の筒のやうで長さ五六寸あるものならば上等である。凡そ修治の方法は、鍾乳八兩を用ゐ、まづ沈香、零陵香、藿香、甘松、白茅各一兩を水で煮出し、再び煮てからその煮汁で乳を一伏時煮る。それを漉し出してまた甘草、紫背天葵各二兩と共に煮て漉し出し、拭ひ乾して緩火で焙り、臼で粉に杵き篩つてから鉢に入れ、腕力の強い青年二三人に三晝夜休みなく研らせ、然る後に水飛して澄まし、絹籠に入れて日中に晒し乾し、再び鉢に入れて二萬遍研つてから瓷盒に收めて貯へるのである。愼微曰く、太清經の鍾乳を錬る法は、好き細末を（一四）金銀器中に入れて一枚の瓦で密に蓋ひ、氣の洩れぬやうにして蒸せば自然に化して水になる』とある。李補闕の錬乳法は後に掲げる。

【氣　味】【甘し、溫にして毒なし】普曰く、神農は辛しといひ、桐君、黄帝、醫

(一五)牡蒙ハ王孫ノ別名。

(一六)傷竭ハ消渴ニ通ズルガ如シ。

和は甘しといひ、扁鵲は甘し、毒なしといふ。權曰く、大毒あり。之才曰く、蛇牀が使となる。牡丹、玄石、(一五)牡蒙を惡み、紫石英、蘘草を畏れ、羊血を忌む。時珍曰く、相感志に『乳石を服するには參、朮を忌む。犯すものは多く死ぬ』とある。土宿眞君曰く、鍾乳は陽洞の内に產する陽氣の所結であつて、五金を伏して柔にし得る。麥門冬、獨蒜、韭實、胡葱、胡荽、猫兒眼草は皆鍾乳を伏し得るものだ。

【主治】【欬逆上氣。目を明にし、精を益し、五臟を安んじ、あらゆる關節を通じ、九竅を利し、乳汁を下す】(本經)【氣を益し、虛損を補ひ、脚弱疼冷、下焦の(一六)傷竭を療じ、陰を強くする。久しく服すれば天年を延べ、壽命を益し、顏色を好くし、老衰せず、子を產ましめる。錬らずして服すれば淋を發す】(別錄)【泄精、寒嗽に主效があり、元氣を壯にし、陽事を益し、聲を通ずる】(甄權)【五勞七傷を補ふ】(大明)【髓を補ひ、消渴引飮を治す】(青霞子)

【發明】愼微曰く、柳宗元が崔連州に與ふる書に『草木の生えるのは土に依るものだから、山の陰にあると陽にあると、或は木に近いものと、或は石に附くものと、それぞれその性が移るものだ。況や石鍾乳なるものは石から直接產れるものだ

から、石の精粗、疎密、大小の特異、穴の上下、土地の厚薄、石の高下測るべからざると共に、それに依つて産する以上當然その性が均一でない。さればその精密なるものに由つて生じたものは油然として清く、汩然として輝き、その竅は滑にして平均し、その肌は正しくして細である。これを食へばはればれと裕な健康になり、その氣が宣流して胃に生氣あらしめ、腸を通じ、壽命を長久にし、生涯を康寧ならしめる。またその粗疎で下質なるものは亂暴に結澀して大小一定せず、色は枯骨、死灰のやうで艶がなく、(一七)渟滯して貧弱の形をなし、糸の結節が集つたやうに齒が叢り立ち、重濁にして粗雜なものである。これを食へば足が利かなくなり、腹が脹り、元氣が無くなり、火を泄し、風を生じ、喉、及び肺を刺戟し、(一八)幽關聰ならず、心不安になつて喜怒し、肝擧り氣剛く、健康の平和を得なくなる。故に君子は深く注意してその色の美なるものを擇び、必ずしも土地のみに信を置かずして專らその至精なるを求めるは、すべて右の理由に依るのである』といつてある。

震亨曰く、石鍾乳は(一九)慓悍の劑である。内經に『石藥の氣は悍なり』とあるは誠に正確なことを道破した言葉である。凡そ藥の氣の偏するものは特定の短期間だ

(一七)原文淹頓、此頓字大觀本草ニ從フ。一本奄頓ニ作ル、頓ハ頽ノ誤。奄ハ精氣閉藏。頽ハ憔悴。

(一八)幽關ハ頭腦ヲ云フカ。

(一九)慓悍ハ强烈。

け用うべきもので、久しきに亙つて服すべきものではない。石藥は殊に偏することの甚しきものだ。唐の時代には太平が長く續いたために、富裕な階級では方士などの所謂服食に依る不老長生の説に惑ふて、體厚く氣厚き石藥を喜び用うるやうになり、爾來一般的習俗となつて宋朝の時代に入り、今日に至るもその習弊が已まぬのである。人間は何の辜があつてかかる氣悍の物の禍を受けねばならぬわけのものか。救濟の途なき現狀はまことに困つたものだ。本草では『久服延年』の功を讃稱し、柳子厚またその説に追從して稱美して居るが、予は敢て嫌味を言はざるを得ないのである。

時珍曰く、石鍾乳なるものは陽明の經の氣分の藥である。その氣は慓疾で陽氣を俄に充實し、飲食をますます進ませて身體を大いに壯盛ならしめる。愚昧な人間はかやうな效果を得ると有頂天になつてますます淫逸を肆にし、その間に精氣は暗暗に消耗して石氣のみが存することになり、孤立した陽のみいよいよ熾になつて、久しきに及んでは營衞これに伴はず、發して淋濁となり、變じて癰疽となるといふ次第である。是れ果して乳石の罪か、そもそも人間が自ら求めた罪か。

元來この物は人體の陽明の氣が衰へた場合に、諸藥に合せ用ゐてその衰耗を救ふことが本質なのである。疾が平安になれば早速止むべきものなのだ。それならば何の仔細はないのである。五穀、五肉等の通常食料に屬するものでさへ、好むもののみを久しく嗜み食へば偏絕の惡傾向があるものだ。況や石藥を用うるに至つては勿論である。種樹書に『凡そ果樹に穴を穿つて鍾乳末少量を納れて密閉して置けば、果實が多く著き且つ美味になる。少量を老樹の根皮の間へ納れるとその樹は再び繁茂する』とある。事實とすれば鍾乳が人間の氣力を益し、生殖を有效ならしめるといふ說もやはり類推すべきわけであらう。ただ問題は嗜慾の徒がその慶福を獲得せずして先づその禍殃を受けることだ。けれども異常なる天賦を有つた人もあるから一面の事實のみを固執して論ずるわけにも行かない。張杲の醫說に『武帥雷世賢は多くの侍妾を置き、常に(二〇)砂、母、鍾乳を服食し、日夜煎鍊し用ゐてその欲を遂げて居た。ところがその妾の父が寒泄のために食慾減退に苦み、世賢が用ゐる丹藥十粒を貰つて服用すると、忽ち臍腹が火のやうに覺え、しばらくすると熱狂して井戶へ飛び込んだ。救ひ上げて見ると全身に紫泡が發してゐて、遂に數日にして死亡

(二〇)砂ハ丹砂、母ハ雲母ヲ云フ。

した。けれども世賢は既に千粒餘も服食してゐるのだが、一向病らしい様子もなかつたのは誠に不思議なことである』と書いてある。沈括の筆談には『夏英公は豪華な人で、天賦が常人と異つてゐた。少しでも睡ればすぐ身體が冷えて、打僵れて死人のやうになるが、仙茅、鍾乳、硫黄を常に服すれば交會極るところを知らずといふ有様だつたので、毎朝鍾乳粉を粥に入れて食つてゐた。ところがある小吏が竊んで食つて遂に疽を發して死亡した』といふことが書いてある。これは終身附子を服しても毫も異狀のないものがあると同一例である。沈括は又『醫の術たるや、苟も心得するに非ざればよくその妙を發揮し得るものでない。もし鍾乳を服するならば終身朮を忌まねばならぬ。朮は鍾乳を煽動するからだ。けれども藥勢が上發し得ないときは煽動して激發するの必要がある。それは火が少いときは必ず風氣を借りると同様な關係で、煽つて始めて發るのだが、盛な火を更に煽つては反つて害を爲すわけである。これは自然の理といふものだ。凡そ諸藥を服するにはすべてこれに倣はねばならぬ』といつて居る。又、十便良方に『乳を服する人は、三日乳を服すれば三日補を要し、十日乳を服すれば十日補を要する。飽食を欲するならば牛、羊、麞、鹿の骨

を煎じ、それで隨意に羹を作つて食ふ。倉米や臭肉を食ふことと房事とを犯してはならぬ。かくて一箇月の後には精氣滿盛し、百脈流通し、身體に熱を覺え、臍の周圍の肉が滿ち張つて來る。さうなれば充分奏效を得たのだから、やや房事に近いても差支ない。しかし房事を頻數にしては藥氣が忽ち竭きて更にいよいよ害となるから宜しくない。充分に戒め愼むべきことである。この物の名稱を乳といふは形狀が人間の乳に似たからであつて、神丹と相竝ぶべきものだ。凡百の石とは遙に異つて居る。故に乳なる言葉で名を呼ぶのである。古語に「上士の石を服するは其の精を服し、下士の石を服するは其の滓を服す」といつてある。滓と精とでは功力が比較にならうわけがない』とある。この説は明快ではあるが、しかしこの石は眞病、命門の火の衰へたものにこそ適するが、然らざるものには餘程精細な研究と注意を要する。

附方　新十。【李補闕の服乳法】五勞七傷、欬逆上氣に主效があり、寒嗽を治し、音聲を通じ、目を明にし、精を益し、五臟を安にし、關節を通じ、九竅を利し、乳汁を下し、氣を益し、虛損を補ひ、脚弱疼冷、下焦の傷竭を療じ、陰を強くし、久しく服すれば天年を延べ、壽命を長くし、老衰せしめず、子を産ませる。韶

州の鍾乳を擇び、厚薄を問はずただ表面の色の明に淨く光澤あるものならば錬つて藥に入れるに堪へる。但し黃、赤二色のものは用ゐるに堪へない。まづそれを金銀器中に盛り、大鍋に水を入れた中へ器のまま沈めて煮る。魚眼の如く煮沸して水が減れば更に添へ、乳の少いときは三晝夜、多いときは七晝夜煮る。乾いて色が黃白に變ずれば熟したのだが、まだ生の疑あるときは更に滿十日まで煮れば最も佳い。かくて取出して水を去り、更に新に淸水で半日煮る、その水色が淸くして變ぜぬまでになれば乳が無毒になつたのである。そこで瓷鉢に入れ水を加へて玉槌で研り、乾き澁るやうなときはまた水を添へ、常に稀米泔のやうな狀態にして四五日研り、揩つて見ると滑に光つて書籍の白魚のやうになり、その時水をかけて洗つても直ぐ洗ひ落ちぬやうならば熟したのである。直ぐ落ちるやうならば更に再び研らねばならぬ。そこで澄まし取つて暴し乾し、一錢半づつを空腹に溫酒で調へて服し、また和して丸、散にして用ゐる。初め乳を煮た黃濁の水は決して服してはならぬ。これを服すれば咽喉を損じ、肺を傷め、頭痛を起し、下痢して止らぬものである。もし之を犯した場合にはただ豬肉を食へば解する。（孫眞人千金方）

【鍾乳煎】風虛勞損、腰脚

無力を治し、補益し、強壯にする。鍾乳粉を錬成したもの三兩を夾練袋に盛つて牛乳一大升で三分の二に煎じ、袋を去つて乳を飲む。二服に分けて一日一回づつ飲むのである。吐せず利せず、虛冷の人は少し溏するが氣遣ふに及ばぬ。一袋の鍾乳は三十回煮て用ゐ得るが、力が盡きたならば新に作り易へる。袋は一回煎じる毎に洗淨して空氣に當てるがよい。煎じた滓を麪に和したもので雞を飼ひ、卵を生ませて食ふ。これは崔尚書の方である。（孫眞人千金翼）【鍾乳酒】五臟を安んじ、百節を通じ、九竅を利し、風虛に主效があり、下焦を補し、精を益し、目を明にする。錬成した鍾乳粉五兩を夾練袋に盛つて、淸酒六升と共に瓶に入れて封じ、湯の中で三分の一に煮て取出し、また酒を隙のないやうに添滿して七日間封じ、日毎に三合づつを飮む。房事、葱豉、生食、硬食を忌む。（外臺祕要）【鍾乳丸】男子衰老の陽絶、肢冷、少氣、減食、腰疼、脚痺を治し、氣を下し、食物を消化し、中を和し、肌を長ずる。鍾乳粉二兩、兎絲子を酒に浸して炒り、石斛と各一兩、吳茱萸を七回湯に泡けて炒つて半兩、以上を末にして煉蜜で和して梧子大の丸にし、一日二回、七丸づつ空心に溫酒、或は米湯で服す。服して數百步步行すれば胸口が熱するを覺えるが、やや

鎮つてから乾飯、豆醤を食ふ。粗臭、惡食、及び死體その他穢れた物の臭氣を嗅ぐを忌む。初めこれを服用中七日間は陽事を止める。七日過ぎれば差支ない。そのために身を傷はぬやう用心せねばならぬ。半劑まで服して功果を覺えたならば更に續服する。これは曹公卓の方である。（和劑局方）【元氣虛寒】方は陽起石の條下にある。【一切の勞嗽】胸膈痞滿には、焚香透膈散——鵞管石、雄黃、佛耳草、款冬花等分を末にし、一錢づつ香爐の上で焚き、筒で烟を吸つて喉中に入れる。一日二回づつ試みる。（宣明）【肺虛喘急】引續いて絕間なきには、生鍾乳粉の明に光るもの五錢を蠟三兩で化し、飯に和して甑內で蒸熟して研つて梧子大の丸にし、溫水で一丸づつ服す。（聖濟錄）【吐血損肺】錬成した鍾乳粉二錢づつを糯米湯で服すれば立ろに止む。（十便良方）【大腸冷滑】滑して止まぬには、鍾乳粉一兩、肉豆蔻を煨いて半兩を末にし、煮た棗肉で梧子大の丸にし、七十丸づつを空心に米飲で服す。（濟生方）【乳汁不通】氣少く、血衰へ、脈が濇つて行らぬために乳が少いのである。錬成鍾乳粉二錢を濃煎した漏盧湯で調へて服す。或は通草と等分を末にし、一日三回、米飲で方寸匕を服す。（外臺祕要）【精滑して禁ぜぬもの】（三一）大府の溏泄、手足の厥冷。方は

（三一）大府ハ大小腸ノ

コトナルベシ。

(一)中品、當ニ下品ニ作ルベシ。

(二)梁山ハ陝西省郃陽縣ノ北、韓城縣ノ西橋頭河ノ水源ニ在ル今ノ梁山ヲ指ス。所謂禹貢龍門山ノ北ニ在ル今ノ大梁山ニハ非ズ、ソノ西南方ニ在リ。

(三)馮翊ハ漢ノ郡名、今ノ陝西省ノ中部、東ハ黄河、南ハ涇水、

陽起石の條下にある。

孔公孽（本經(一)中品）

和名　中空管を有する鍾乳石
英譯名　Stalactite with tubular hollow

釋名　**孔公石**（綱目）**通石**　時珍曰く、孔竅が空で通り、石に垂れて附き、木の芽孽のやうだから孔公孽といふ。孔公とは俗に訛つたのだ。恭曰く、この孽は鍾乳に次ぐもので、形狀が牛羊の角のやうで中に孔が通つてゐるところから通石と名ける。別錄には誤つてこれを殷孽の根としてあるが、これは俗に孔公孽と呼ぶもののことである。

集解　別錄に曰く、孔公孽は殷孽の根であつて靑黃色だ。(二)梁山の山谷に生ずる。弘景曰く、梁山は(三)馮翊郡に屬する。これは今の鍾乳の牀のことであつて始興にも出る。いづれも大なる塊なので打破つて取る。凡そ鍾乳の類の三種は同一體のもので、石洞の上部から出て溜る汁が久しく結晶したものを鍾乳牀といふ、卽ち孔公孽である。これに次ぐもので形狀の嶮しい山を小さくしたやうなものを殷孽といひ、殷孽からま

渭水ヲ限リ西ハ今ノ醴泉縣ノ北ニ洛水ヲ中心トシ、北大梁山ニ至ル間ニ亘ル。

た溜結して輕好なるものを鍾乳といつて居る。同一類ではあるが療體はそれぞれ異つて、貴賤遙なる差異がある。三種の鍾は同根に生ずるものではあるが、産地それぞれの最適な處のものが勝れて居るといふわけだ。

保昇曰く、鍾乳の類に鍾乳、殷孽、孔公孽、石牀、石花の五種あつて、同一體ではあるが治療上の主たる功果は各〻異つて居る。頌曰く、孔公孽、殷孽は鍾乳と同生するといふ以上、孽のある處には皆鍾乳がありさうな道理だが、現にさる事實を聞かぬ。これは用ゐるものが寡いために採る者も稀なのであらうか、抑〻また世人が孽中に乳のあることを知らぬために採收に氣付かぬのであらうか。はつきり判り兼ねる。恭曰く、孔公孽は鍾乳に次ぐものである。別錄には誤つて孔公孽は殷孽の根だとあるが、殷孽こそ孔公孽の根なのである。世俗に孔公孽を殷孽といふところから、陶氏がそれに依つて孔公孽を鍾乳牀といつたのは誤である。

時珍曰く、薑石、通石二石の關係を推究するに、石に附いて生ずるその粗なるものが殷孽、殷孽に接して生じ漸次に中が空に通つたものが孔公孽、孔公孽に接して生ずるものが鍾乳といふことになるやうである。蘇恭の見解の方が優つて居る。蓋し

殷孽は人間の乳根の如く、孔公孽は乳房の如く、鍾乳は乳首の如きものである。

〔氣味〕【辛し、溫にして毒なし】普曰く、神農は辛しといひ、岐伯は鹹しといひ、扁鵲は酸し、毒なしといふ。大明曰く、甘くして煖なり。權曰く、甘し、小毒あり。之才曰く、木蘭が使となる。細辛、朮を惡み、羊血を忌む。

〔主治〕【傷食、不消化、邪結氣、惡瘡疽、瘻痔。九竅を利し、乳汁を下す】（本經）【男子の陰瘡、婦人の陰蝕、及び傷食病、常に睡眠を欲するもの】（別錄）【腰冷、膝痺、毒氣に主效があり、よく喉聲を朗ならしめる】（甄權）【身を輕くし、肌を充す】（青霞子）

〔發明〕弘景曰く、孔公孽、殷孽は丸、散に用うるに堪へぬ。ただ水で煮た湯、幷に漬けた酒を飲むがよし。脚弱、脚氣を療するに甚だ效がある。

〔附方〕新一。【風氣脚弱】孔公孽二斤、石斛五兩を酒二斗に浸して服す。（肘後方）

殷孽（本經(一)中品）　和名　石筍　學名　Stalagmite

〔釋名〕**薑石**　時珍曰く、殷とは隱の意味である。石上に生じ隱然木の孽のや

(一)中品當ニ下品ニ作ルベシ。

うなものだ。恭曰く、これは孔公孽の根である。結晶の形が薑のやうだから薑石と名けたのだ。俗間で孔公孽をこの物だと思つて居るのは誤だ。詳細は孔公孽の條を見よ。

【集解】別錄に曰く、殷孽は鍾乳の根である。(二)趙國の山谷、又は梁山、及び南海に生ずる。採收に一定の時期はない。弘景曰く、趙國は(三)冀州に屬する。(四)始興からも出る。

【氣味】【辛し、溫にして毒なし】之才曰く、防已を惡み、朮を畏る。【主治】【爛傷瘀血、洩痢寒熱、鼠瘻、癥瘕、(五)結氣、脚冷疼弱】(六)(本經) 筋骨弱きもの、丼に痔瘻を熏ずる。また乳汁を下す】(七)(別錄)

【發明】孔公孽の條を見よ。

【附錄】**石牀**(唐本草)恭曰く、味甘し、溫にして毒なし。酒に漬けて服す。殷孽と功力同じ。また乳牀、逆石、石筍ともいふ。鍾乳洞中に生ずるもので、採收に一定の時期はない。鍾乳の水が滴下し凝つて筍の形に結晶したもので、久しうして漸次に長くなり上から垂れた鍾乳と相接するまで延びる。陶弘景が孔公孽を乳牀

(二)漢時ノ趙國ハ今ノ直隷省邯鄲縣ノ地ナリ。
(三)冀州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。
(四)始興ハ土部白堊ノ註ヲ見ヨ。
(五)結氣下ニ當ニ本經ノ字ヲ註スベシ。
(六)本經當ニ別錄ニ作ルベシ。
(七)別錄當ニ大明ニ作ルベシ。

といつたのは誤である　殷孽、孔公孽は上から生じ、石牀、石花は下から生ずるものだ。性、體は同じとはいへ上下の別がある。

石花（唐本草）恭曰く、味甘し、溫にして毒なし。腰、脚の風冷に主效がある。酒に漬けて服す。殷孽と功力同じ。一名乳花といふ。乳穴洞中に生ずるもので、乳水が石上に滴り落ちて霜雪のやうに結晶したものである。三月と九月に採收する。大明曰く、筋骨を壯にし、陽道を助ける。宗奭曰く、石花は色白く圓くして大馬杓を覆ふたやうだ。上部に數十の枝が錯綜し、枝の岐れた樣は鹿角のやうで上に細い文があり、それを指で撫でればさらさらと音がする。質は脆く觸れたり擊つたりすれば壞れて了ふ。多くは海中の石上に生ずるもので、世間の醫方では得難いものだ。余の親族中に曾て一本を得たものがある。本草の本條に註した說明はいづれも誤だ。時珍曰く、石花なるものは、鍾乳が石上に滴つて迸散し、久しく積つて花のやうに結晶したものだ。蘇恭の所說が甚だ明確である。寇宗奭のいふのは海中の石梅、石柏などいふ類のもので、また石花とも名ける。藥用には入れない。本草の石花とは異ふ。反つて宗奭自らが誤つて居るのだ。

石骨　恭曰く、石骨は服食しての功力が鍾乳に勝る。骨に似て玉の如く、堅くして潤がある。五石脂中に生ずるものだ。

土殷孽（別錄下品）

和名　鍾乳狀をなせる土交りの石灰華
英譯名　Earthy Calc-sinter of stalactitic form

釋名　**土乳**（唐本）志曰く、これは土脂の液である。土穴に生ずるもので形狀が殷孽のやうだからかく名けたのである。

集解　別錄に曰く、高山の厓上の陰に生じ、色は脂のやうに白い。採收に一定の時期はない。弘景曰く、これはやはり鍾乳、孔公孽の類に似たものだ。故にまた孽なる名稱を付したもので、ただ厓上に在るものなのだ。今は用ゐられないやうである。恭曰く、これは土乳のことである。(一)渭州郭縣、三交驛の西北坡の平地上や窟中に出たもので、そこには昔採收した穴が六十餘も現在し



〔土殷孽〕

(一)渭州ハ今ノ甘肅省隴西縣、郭縣ハ今モ隴西縣治ノ南方漳

て居る。その地方の者は、これを服すれば鍾乳と同功力で而も發熱しないといつて居る。陶氏その他の本草に厓上に生ずるとあるは誤だ。時珍曰く、これは鍾乳の山厓、土中に生じたもので、南方の名山に多くある。その地ではやはりこれを掘つて㈢石山に作り珍玩物として賣つて居るが、それが土鍾乳なることには氣が付かない。

【氣味】【鹹し、平にして毒なし】【主治】【婦人の陰蝕、大熱乾痂】（別錄）

石腦（別錄中品）

和名　球顆狀の石灰華
英譯名　Calc-sinter of nodular form

【釋名】石飴餅（別錄）石芝（綱目）化公石　時珍曰く、その形狀が結腦のやうだから名けたもので、昔化公なる人がこれを服したといふ傳說からまた化公石とも名ける。

【集解】別錄に曰く、石腦は名山の㈠土中に生ずる。採收に一定の時期はない。弘景曰く、この石もやはり鍾乳の類である。形狀は曾靑のやうで白色に黑斑があり、軟で破れ易い。今は㈡茅山の東、及び㈢西平山のいづれにもある。土龕を鑿

河ノ北岸ニ在リ。三交驛未攷。參考―陝西省鳳縣ニ三岔驛アリ、梁山驛ヲ距ル六十里、松林驛ニ至ル七十里、並ニ鳳縣ニ屬ス。岔ハ三叉路ナリ、故ニ俗ニ三交驛ト云フカ。

㈢石山ハ硯山、盆山ノ類、文房ノ玩物ナリ。

㈠證類本草ニハ土石中ニ生ズトアリ。

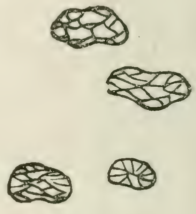
㈡茅山ハ今ノ江蘇

省句容縣ノ東南ニ在ル句曲山ナイフ。漢ノ時茅盈、茅衷、茅固ノ兄弟三人此ノ山ニ來リ住ス、世因ツテ茅山ト稱ス。陶弘景此ニ隱居シテ本草ヲ修ス。

(三)西平山、未攷。

(四)石中黃子ノコト、太一餘糧ノ條下ニ詳ナリ。

つて取り出すのだ。○恭曰く、徐州の宋里山に出る。初めは爛石の中に在つて、土中一丈以下の深さに掘つて取る。大さは雞卵ほどから棗ほどのもので、觸れば麪の如く散る黃白色のものである。その地方の者は握雪礜石と稱し、服すれば長生するといつて居る。○保昇曰く、蘇恭が握雪礜石を引用して註したのは誤だ。



〔石腦〕

○時珍曰く、按ずるに、抱朴子內篇に『石腦芝は滑石の中に生ずる。やはり(四)石中黃子のやうなものだが、どの滑石にでもあるわけではなく、大なる滑石千箇ほどを打破つて一箇を得る位なものである。破つた石中から初めて出たばかりには五色の明な光がある。自身これを採取して一升を服すれば長生し得る』と云つてある。乃ち石芝であつて、別錄に所謂石腦とあり、また仙人達の服食したといふ物もこのことであらう。蘇恭の所說は石腦に相違ないが、註に握雪礜石といつたのは誤である。握雪なるものは石上の液であつてこれとは別物だ。後に本條に掲げる。

[氣味]【甘し、溫にして毒なし】 [主治]【風寒、虛損、腰脚の疼痺。五

臟を安にし、氣を益す』（別錄）

【發明】弘景曰く、俗方には用ゐられないが仙經の劉君導仙散といふものに用ゐてある。又、眞誥に曰く、李整がこれを採つて服し、風痺虚損を療じて長生を得た。恭曰く、隋の時代に化公なる人の服したものも石腦と名けるものだといふ。時珍曰く、眞誥の記載に『姜伯眞は大横山に在つて石腦を服し、また當時の者にも與へて服ませたが、身が熱しても渇せなかつた』とあるはこの物のことである。

石髓（拾遺）

和名　炭酸石灰を含める泥狀堆積物
英譯名　Calcareous mud deposit

【集解】藏器曰く、石髓は(一)臨海の(二)華蓋山の石窟に生ずる。その地の者はこれを採り、澄まし淘り泥のやうにして彈子ほどの丸にする。白いもの、黄なるものが佳い。時珍曰く、按ずるに、列仙傳に『邛疏が石髓を煮て服した』とあるは鍾乳のことである。仙經に『神山は五百年に一度開けて石髓が出る。これを服すれば長生する。王烈は山に入つて石の裂けるのを見た。そこから髓を取つて食ひ、また少量を撮つて來て嵇康に與へたが、その時は化して青石になつてゐた』とある。北史

(一)臨海トハ台州、温州等沿海一帶ノ地方ヲ指ス。臨海縣ハ今ノ浙江省會稽道ニ在リ。唐、宋ニハ台州ニ屬ス。
(二)華蓋山ハ今ノ浙江省温州府永嘉縣ノ子城ヲ去ル一支里ノ地點ニ在リ。寰宇記ニ『其山周廻九里。

遙望如華蓋。有湧泉。旱則水不減。雨則水不加。謝公與從弟書云。地無佳井。賴有山泉』トアリ。

(三)龜茲國ハ漢時代ノ西域ノ古國、唐ニハ都督府ヲ置ク。今ノ新疆省庫車縣ノ地ナリ。

(四)并州ハ古代ノ十二州ノ一。唐ニハ棄ラ今ノ山西省太原府ヲ并州トナス。

には『(三)龜茲國の北方の大山の中から膏の如きものが流れ出て川になり、數支里の地點で地中に滲み込む。狀態は醍醐のやうなもので、服すれば齒髮が更生し、病人が服すれば皆癒える』とある。方鎭編年錄には『高展が(四)并州の判官に在任中、ある日庭の敷石の間から沫が出るのを見た。手で撮ひ取つて老吏の顏へ塗ると皺が頓に取れて少年のやうな艶になつたので、展は神藥を得たものと信じて承天道士に訊ねると、道士は「これは地脂と名けるものだ。これを食へば不死になる」といつた。そこでその庭を掘つて見たがそれきり遂に出なかつた』とある。この數說はいづれも石髓そのものに近いらしい。

【氣味】〔甘し、溫にして毒なし〕【主治】〔寒熱で羸瘦し顏色の惡きもの、積聚で心腹脹滿するもの、飮食物不消化で皮膚が枯槁するもの、小便頻數の疾、癖塊、腹中の腸鳴、下痢、腰脚の疼冷。性は壅である。寒瘦の人に適する〕(藏器)

石腦油 (宋嘉祐)

和名　石油・石腦油
學名　Petroleum

【校正】拾遺の石漆を併せ入る。

(一)肅州ハ漢ノ酒泉郡ノ地、隋ニ肅州ヲ置ク。今ハ甘肅省ニ屬シ、民國ニ至ツテ酒泉縣ニ改ム。明ニハ陝西ニ屬ス。
(二)鄜州、延州ハ土部墨ノ註ヲ見ヨ。
(三)延長ハ明清共ニ陝西省延安府ニ屬ス。今ノ延長縣ノ地ナリ。

【釋名】 **石油**（綱目）**石漆**（拾遺）**猛火油**　**雄黄油**　**硫黄油**（綱目）

【集解】 禹錫曰く、石腦油は瓷器に貯ふべきもので、金銀の器は用ゐられない。如何に完全に隙をなくした密なものでも直に透すものである。道家で多く用ゐるが世間の醫方にはあまり用ゐない。宗奭曰く、純眞なる石腦油は保存がむつかしい。大抵の器物は滲蝕するものだ。藥に入れることは甚だ稀だが、燒錬家では、研つた生砒をこの油を入れて再び膏のやうに研り、坩鍋に入れ瓦で蓋ふて下から火を焚き、油がヂリヂリと沸き盡きるを待つて取出して又研り、又油を入れて火にかけて錬る。此の如くすれば砒が伏するのだといふ。

時珍曰く、石油の出る所は各地にあるもので、(一)陝の肅州、(二)鄜州、延州、(三)延長、及び雲南の(四)緬甸、廣の(五)南雄に出る。石岩の間から泉水と雜つて汪汪と涌出し、肉汁のやうに濃いものだ。その地の者が草で缶中に酌み込むところを見ると、色は宛も淳漆のやうに黒く、雄黄、硫黄の臭氣がある。その地の者はそれで燈を點ずるが甚だ明だ。水をかければ更にますます熾に燃え立つ。食餌には入れられない。その烟は甚だ濃なもので、沈存中が西方の地に仕官の折、その煤を掃き取つ

(四)緬甸ハ卽チ今ノビルマ國ヲ指ス。雲南ノ西ニ接ス。然レドモ此ニ緬甸トアルハ南甸ノ誤寫ニハ非ザルカト疑ハル。南甸ハ今ノ雲南省騰衝縣ノ地ナリ。

(五)南雄ハ今ノ廣東省南雄縣ナリ嶺南道ニ屬ス。

(六)延壽縣ハ後漢ニ置ク、ソノ地點ハ今ノ甘肅省玉門ト嘉峪關ノ中間ニ當ル。

(七)高奴縣ハ今ノ陝西省膚施縣ノ東ニ故城アリ。

(八)高麗ハ土部墨ノ註ヲ見ヨ。

(九)嘉州ハ全部錯ノ

て墨を作つたが、光があつて漆のやうに黒く、松烟にも勝つたといふことである。張華の博物志の記載に『(六)延壽縣南山の石泉は注いで溝になり、その水に脂がある。酌み取つて器へ入れて置くと始めは黄色で後には黒くなり凝膏のやうになる。燃せば極めて明だ。これは石漆といふものだ』とある。段成式の酉陽雜俎には『(七)高奴縣に石脂水といふがある。膩が水上に浮んで漆のやうなものだ。採つて車に注ぎ、燈に燃す』と記載してある。康譽之の昨夢錄には『猛火油といふものが(八)高麗の東に出る。石が太陽の熱で烘けて出る液であつて、眞の琉璃器以外には貯へられぬ。それが燃え



〔石 腦 油〕

る中へ水が滴り落ちれば烈焰が起つて遽に餘力を發する。水に入れば魚鼈が皆死ぬ。その邊境の人民は外敵を防ぐ戰鬪にこれを用ゐて居る』と記載してある。これ等の數說はいづれも石腦油のことである。我が明朝正德の末年に、(九)嘉州で鹽井開

註ヲ見ヨ。

掘の際、偶然この油水を掘り當てた。夜間の燈明に好適なもので、その光は普通の燈に倍して明だ。その火に水をかければ焰はいよいよ甚しいが、灰で撲てば滅えるものである。雄黃、硫黃の臭氣があるので、產地の者は雄黃油または硫黃油と呼んで居る。近頃ではまた數箇の油井を開掘して事業を官營で行つて居る。これもやはり石油だがこれは井中から出るものだ。蓋しいづれも地中に產する雄黃、硫黃、石脂などの諸石の源脈が相通じて居るところからかかる物質が生ずるのであらう。王冰が『龍火は濕を得れば焰し、水に遇へば燔し、光焰天に詣り、その物盡きて始めて止む』といふも確にこの類のものだ。いづれも陰火である。

附錄　**地溲**　時珍曰く、溝や細い流れ、及び田へ水を灌いでゐる際など多くこれがある。狀態は油のやうでもあり泥のやうでもあり、色は黃金のやうで非常に腥い。冬季にこれを採り、二三囘柔鐵を赤く燒いて入れると甚だ剛くなり、玉を切れるやうになる。

氣味　【辛く苦し、毒あり】獨孤滔曰く、銅を化し、砒を制す。

主治　【小兒の驚風に涎を化す。諸藥に和して丸、散を作るに用ゐる】(嘉祐)　【瘡癬、蟲癩

に塗る。鍼箭の肉に入りたるを治する藥の中に入れて用ゐる」(時珍)

【發明】 時珍曰く、石油の氣味は雄黃、硫黃と同じ。故に蟲を殺し瘡を治するのである。その性は走竄するものだから諸器物に入れて置けば皆滲み透るが、ただ瓷器と琉璃だけは漏らない。故に錢乙が小兒の驚熱、膈實、嘔吐、痰涎を治する銀液丸中にこれを用ゐ、水銀、輕粉、龍腦、蠍尾、白附子の諸藥に和して丸にしたのも、ただこの物が痰を化する力を用ゐたのみならず、またよく經絡に透り、關竅に走る點を利用したものである。

石炭（綱目）

和名 せきたん（石炭）
學名 Coal

【釋名】 煤炭 石墨 鐵炭、烏金石（綱目）焦石 時珍曰く、石炭卽ち烏金石であつて、上古にはこれで文字を書いたので石墨といつた。今世俗に煤炭といふ。煤と墨とは發音が相近い。拾遺記に『焦石は炭のやうなものだ』とあり、嶺表錄に『(一)康州に焦石穴がある』とあるはこの石のことである。

【集解】 時珍曰く、石炭は南北の諸山中に產する處が多い。昔はこの物を用ゐ

(一)康州ハ今ノ廣東省德慶縣ノ地ナリ。

(二) 夷陵ハ春秋楚ノ祖先ノ陵墓ノ稱ニシテ湖北省ノ内ニアリ、今ノ宜昌縣ソノ一ナリ。明ニ夷陵州トナス。
(三) 劫灰ハ世界終盡ノ時ノ灰。
(四) 無勞縣ハ金部古鏡ノ註ヲ見ヨ。
(五) 彰德ハ今ノ河南

なかつたので隨つて知識もなかつたが、現在では一般に炊爨の薪の代用にもすれば製鐵用の燃料にも用ゐ、産業上の重要な資料となつて居る。その産地では山に十餘丈の深さの横穴を掘つて採るのであるが、石のやうな大塊で光のあるものもあり、



〔炭　石〕

荒く碎け散つて炭末のやうなものもあり、いづれも硫黄の臭氣がある。酒を噴きかくれば崩れるものだ。藥に入れるには堅い石のやうな塊のものを用ゐる。昔の人が『(二)夷陵の黒土は(三)劫灰である』といつたのはこの荒く碎け散つたもののことだ。孝經援神契に『王者の德が山陵にまで及べば墨丹が出る』とあり、水經に『石炭は物を書き得るものだ。これを燃せばなかなか盡きぬもので、烟氣は中毒することがある』とあり、酉陽雜俎に『(四)無勞縣から石墨が出る。これを焚けば何年でも消えない』とあり、夷堅志に『(五)彰德の南郭村の井中から石

墨が出る。(六)宜陽縣に石墨山がある。(七)汧陽縣に石墨洞がある。(八)燕の西山、(九)楚の荊州、(一〇)興國州、江西の(一一)廬山、(一二)袁州の(一三)豐城、(一四)贛州、いづれも石炭を產する。これは炊爨に使用し得るものだ』とあるはいづれもこの石のことである。

また石墨の一種に、舐めれば舌に粘り、文字を書き眉を畫き得る畫眉石と名けるものがあるが、これは黑石脂のことである。石脂の條を見よ。

【附錄】然石　時珍曰く、曹叔雅の異物志に、『(一五)豫章に黃色で理の荒い石がある。水を灌げば熱くなるので、それで鼎の物を烹ることが出來る。冷めればまた水を灌げばよい。これは張華が然石といつたもので、(一六)高安にもこの物がある』とある。

【氣味】【甘く辛し、溫にして毒あり】時珍曰く、煤氣の中毒は昏瞀して死に至るものだが、ただ冷水を飲めば解する。獨孤滔曰く、錫暈を去り、三黃、硇砂、消石を制す。

【主治】【婦人の血氣痛、及び諸瘡毒、金瘡の出血、小兒の痰癇】(時珍)

【附方】新五。【金瘡の出血】急に石炭末を厚く傅ける。瘡が深くて速に合ひさ

(六)宜陽縣ハ漢ニ置ク、戰國時代ノ韓ノ邑ナリ。今ハ河南省河洛道ニ屬ス。
(七)汧陽縣ハ後周ニ置キ、明ニハ陝西鳳翔府ニ屬シ、今ハ陝西省關中道ニ屬ス。
(八)燕トハ今ノ直隸省ノ地ヲ指ス。西山ハ宛平縣ノ西ニ在リ。
(九)楚トハ今ノ湖北省ノ地ヲ指ス。荊州ハ今ノ湖北省江陵縣ノ地ナリ。
(一〇)興國州ハ今ノ湖北省陽新縣ノ地ナリ。
(一一)廬山ハ水部溫湯ノ註ヲ見ヨ。
(一二)袁州ハ今ノ江西省宜春縣ノ地ナリ。
(一三)豐城ハ今ノ江西省豐城縣ノ西南ニ故城アリ。
(一四)贛州ハ今ノ江西省贛縣ノ地ナリ。

うもなきには滑石を加へる。(醫學集成)【誤って金銀を呑みたるもの】及び錢を呑み腹中に在って下らぬには、光ある石炭を杏核一箇ほどと、皂子一箇ほどの硫黄を末にして酒で服す。(普濟方)【腹中の積滯】烏金石卽ち鐵炭三兩、自然銅を末にし醋で熬って一兩、當歸一兩、大黄を童尿に浸し酒して一兩を末にし、二錢づつを紅花酒一盞、童尿半盞と共に調へ、一日に二服づつ食前に服す。(張子和儒門事親)【月經不通】巴豆を油を去って綠豆ほどのもの三丸を、烏金石末一錢を調へた湯で送下すれば通ずる。(衛生易簡方)【(一七)産後兒枕】刺痛するには、黑白散——烏金石を七回燒いて酒に淬し、寒水石の煨いて末にしたものと等分を用ゐ、粥飮で一錢半づつを服すれば止る。なほ止らぬときは再服する。(潔古保命集)

石灰(本經下品)

和名　いしばひ・石灰
學名　Lime

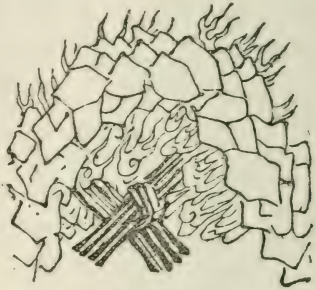
【釋名】石堊(弘景)堊灰(本經)希灰(別錄)鍛石(日華)白虎(綱目)礦灰(綱目)

【集解】別錄に曰く、石灰は(一)中山の川谷に生ずる。弘景曰く、山に近く生ず

(一五)豫章ハ今ノ江西省南昌縣ノ地ナリ。
(一六)高安ハ今ノ江西省高安縣ノ地ナリ。
(一七)兒枕痛ハ俗ニアトハラノイタムト云フヤマヒ。
(一)中山ハ戰國、及

ハ漢時代ノ國名、今ノ直隷省津海道西部ノ地ナリ。

る石で青白色のものだ。竈を作り充分に焼いて水を沃げば熱蒸して解崩する。俗に



（石灰積）

石堊と名ける。頌曰く、各地の山に近い處にいづれもある。青石を焼いて灰にしたものだ。また石鍛と名ける。これには風化、水化の二種があつて、風化とは煆いた石を風に晒して自然に解するもので、これは藥として十分力のあるものだ。水化とは水を沃いで熱蒸して解するもので、その力はやや劣る。時珍曰く、今は一般に窰を作つてこれを焼く。一層に柴を敷き、或はその最下に石炭を一層敷き、その上に青石を積み累ねて下から火を付けると、層層自ら焚けて灰になるのである。しかし藥用には風化して石の雜らぬものに限る。

【氣味】【辛し、溫にして毒あり】大明曰く、甘し、毒なし、獨孤滔曰く、雄黄、硫黄、硇砂を伏し、錫暈を去る。

【主治】【疽瘍、疥瘙、熱氣惡瘡、癩疾死肌、眉毛脫落。疥蟲を殺し、黑子、

(二)癧瘍ハ汗斑。俗ニアセナマヅ。
(三)水臟ハ腎。
(四)陰挺ハ子宮脫出。
(五)鹿活草ハ活鹿草。卽天名精ナリ。

息肉を去る】(本經)【髓骨疽を療ず】(別錄)【瘑疥を治し、惡肉を蝕し、金瘡血を止むるに甚だ良し】(甄權)【肌を生じ、肉を長じ、血を止める。白癜、(二)癧瘍、瘢疵、痔瘻、癭贅、疣子、婦人の粉刺、產後陰の合し得ぬもの。酒酸を解し、酒毒を治し、(三)水臟を暖め、氣を治す】(大明)【胎を墮す】(保昇)【血を散じ、痛を鎭め、水瀉、血痢、白帶、白淫を止め、脫肛、(四)陰挺を收め、積聚、結核を消す。口喎に貼る。鬚髮を黑くする】(時珍)

【發明】弘景曰く、石灰は性至つて烈しいもので、酒に之を投じて飮めば腹痛し下痢する。古今多く墓の構築にこれを用ゐたのは、水を防ぎ蟲を辟けるためである。故に古塚中の水で諸瘡を洗へば皆直ちに瘥えるのだ。恭曰く、別錄にもあり、今一般にもまたこれを金瘡の血止めに用ゐて大效がある。また五月五日に蘩蔞、葛葉、(五)鹿活草、槲葉、芍藥、地黃葉、蒼耳葉、青蒿葉を採り、石灰と搗き合せて雞卵ほどの團にし、暴し乾して末にしたものは、瘡を療じ肌を生ずるに大いに妙效神驗がある。權曰く、金瘡の血止めには、雞子白、敗船茹を和して用うるが甚だ良い。湯や飮にして服する藥には入れない。頌曰く、古方で多く百草に合せて團にし、末

にして用ゐてゐるが殊に勝れた效果がある。今醫家では或は臘月黄牛の膽汁で捜和して膽の中に納れ、風で乾して研つて用うるが更に草藥のものに勝る。また古方では諸草に石灰を雜へて熬煎し、疣痣、黒子に點け、丹竈家でもこれを用ゐる。時珍曰く、石灰は血止藥としての神品だが、ただ水を著けてはならぬ。水を著ければ肉を爛すものである。

附方　舊十四、新三十二。【水死者】石灰を裹んで下部中に納るれば水が盡く出て活きる。（千金方）【痰厥氣絶】心臟の邊のなほ溫なものには、千年の石灰一合を水一盞で煎沸し、その清水を棄てて再び一盞を入れて極力煎沸し、澄まし清めて灌げば少頃して痰が下つて自ら甦る。（集玄方）【中風口喎】新しい石灰を醋で炒り、泥のやうに調へて塗る。左のときは右に塗り、右のときは左に塗れば立ろに正しく牽き戻す。（寇氏衍義）【風牙腫痛】二年の石灰、細辛等分を研つて揩れば止る。（普濟方）【蟲牙の痛み】礦灰、沙糖を和して孔中を塞ぐ。（普濟方）【風蟲牙痛】百年の古石灰を末にして四兩、蜂蜜三兩をよく拌ぜ、鹽泥で固濟して火で一日煅き、研末して牙に擦れば神效がある　これを神仙失笑散と名ける。（張三丰方）【乾霍亂病】千年の古石

(六)血氣ハ經水逆上シテ臍間ヲセメ、頭目悶迷シテ人事ヲ省セズ、滿面滿頭皆赤斑トナルニ至ルモノ。
(七)血渇ハ諸失血及産婦蓐中ニ渇スルモノヲ云フ。
(八)白淫ハ遺精。

灰三錢を砂糖水で調へて服す。或は淡醋湯でもよし。これを落盞湯と名ける。（摘玄方）【偏墜氣痛】古石灰、五倍子、山巵子等分を末にし、麪と醋で調へて敷貼すれば一夜にして消する。（醫方摘要）【婦人の(六)血氣】方は獸部豬血の條にある。【産後の(七)血渇】煩せぬには、新石灰一兩、黄丹半錢を用ゐ、渇するには漿水で一錢を調へて服す。これを桃花散と名ける。（張潔古活法機要）【白帶、(八)白淫】風化石灰一兩、白茯苓三兩を末にして糊で梧子大の丸にし、二三十丸づつ空心に米飲で服するが絶妙である。（集玄方）【水瀉の止まぬもの】方は上に同じ、【酒積下痢】石灰五兩を水で和して團にし、黄泥で包んで一晝夜煅き、泥を去つて末にし、醋糊で梧子大の丸にして三十丸づつ薑湯で空心に服す。（摘玄方）【十年の長き血痢】石灰三升を黄に熬つて水一斗に投じ、澄清して一升づつ一日三服する。（崔知悌方）【虚冷脱肛】石灰を燒き熱し、古帛に裹んでそれに坐り、冷めれば易へる。（聖惠方）【産門不閉】産後陰道の閉ぢぬもの、或は陰の脱出せるには、石灰一斗を熬黄して水二斗に投じ、澄清して熏ずる。（肘後方）【産門生合】合して開かぬには、銅錢をよく磨いたもので割開き、古石灰を傅ければ癒える。（通變方）【腹脇の積塊】風化石灰半斤を瓦器で炒つて極熱

し、大黄末一兩を入れて紅く炒り、火から外して桂末半兩を入れてやや燒き、米醋を入れて和して膏にし、絹に攤して貼り、別に消塊の藥を內服すれば甚だ效がある。(丹溪心法)【瘧疾寒熱】一日一囘、或は二三囘、或は三日一囘發作するには、古城石灰二錢、頭垢、五靈脂各一錢を研末して飯で皂子大の丸にし、一丸づつを夜五更に無根水で服すれば止む。(集玄方)【老少の暴嗽】石灰一兩、蛤粉四錢を末にして蒸餅で豌豆大の丸にし、焙じ乾して三十丸づつを溫薤汁で服す。(普濟方)【突然の劇しき吐血】石灰を刀の先に載せて燒き、研つて二錢を井水で服す。(普濟方)【脫毛の止まぬもの】これは肺に勞熱があつて瘙痒するためである。石灰三升を水を拌ぜて黒く炒り、(九)酒三升に浸して三合づつ服し、常に酒氣の絕えぬやうにすれば新髮を更生する神驗がある。(千金方)【髮を染め鬚を黒くする】礦灰一兩を水に化して七日置き、鉛粉一兩を入れて研勻して好き醋で調へて塗り、一夜油紙で包む。豫め皂角水で洗淨してから用ゐるのである。(集玄方)【身體面部の疣目】石灰を六七日間醋に浸して汁を取り、頻に滴せば自ら落ちる。(千金方)【面黶、疣痣】礦灰一盞を水で調へ、好き糯米の形全きものを半その灰中に挿み、半は灰の外に出し、一夜經てば米は變

(九)大觀本草ニ一斗トス。又三合ヲ一合ニ作ル。

色して水精のやうになる。その藥を先づ黶痣を針で少し撥動してその上に少量を點け、半日經つて汁が出た時その藥を剔り落す。水に著けてはならぬ。二日で癒えるものである。(集玄方)【疣痣瘤贅】石灰一兩を桑灰の淋汁で熬膏し、患部を刺破つて點ける。(普濟方)【癰疽の瘀肉】石灰半斤を蕎麥稭灰半斤の淋汁で煎じて霜にして密封し、その都度針で患部を破つて塗れば自ら腐ち落ちる。(普濟方)【疔瘡惡腫】石灰、半夏等分を末にして傅ける。(普濟方)【腦上癰癤】石灰を飯に入れ、搗き爛して患部を合せる。(李樓奇方)【痰核紅腫】寒熱して瘰癧の如き狀態なるには、石灰を火で煅いて末にし、(一〇)白果肉と共に搗いて貼る。蜜で調へるもよし。(活人心統)【(一一)痄腮腫痛】醋で石灰を調へて傅ける。(簡便方)【多年の惡瘡】多年經た石灰を研末し、雞子淸で和して塊にし、煅いて再び研り、薑汁で調へて傅ける。(救急方)【瘻瘡の合はざるもの】古塚中の石灰を厚く傅ける。(千金方)【痔瘡の蟲あるもの】古石灰、炮いた川烏頭等分を末にし、燒飯で梧子大の丸にして二三十丸づつを白湯で服す。(活法機要)【疥瘡の蟲あるもの】石灰の淋汁で數〻洗ふ。(孫眞人方)【血風濕瘡】千年の古石灰を研つて搽る。痛が止り瘡が癒える神效がある。(藺氏方)【火焰丹毒】醋で石灰を

(一〇)白果ハ銀杏。
(一一)痄腮、俗ニオタフクカゼ。

和して塗る。或は青靛と共に塗る。(摘玄方)【突然發した風疹】醋漿で石灰を和して塗れば手に隨つて消える。これは元希聲侍郎の祕方である。(外臺祕要)【夏季の痱疱】石灰を煅いて一兩、蛤粉二兩、甘草一兩を研つて撲つ。(集玄方)【湯火灼傷】年久しき石灰を傅ける。或は油を加へて調へる。(肘後方)【杖瘡の腫痛】新石灰を麻油で調へて搽るが甚だ妙である。(集簡方)【刀刃の金瘡】石灰で裹めば痛を鎭め、血を止め、また速に癒える。瘡深くして速に口の合へさうもなきには、少量の滑石を入れて傅ける。(肘後方)【誤つて金銀を呑みたるもの】或は紙を呑み腹に在つて下らぬには、石灰、硫黃一皂ほどを共に研つて末にし、酒で調へて服す。(採用和祕寶方)【馬汗の瘡に入つたもの】石灰を傅ける。(摘玄方)【螻蛄に咬まれたもの】醋で石灰を和して塗る。(聖惠方)【蚯蚓の咬傷】その毒は大風の如く眉鬚みな落ちる。石灰水に浸すがよし。(經驗方)

古墓中の石灰を**地龍骨**といふ　主治　【頑瘡瘻瘡の膿水淋漓たるもの、諸瘡口を斂める。棺の下のものの尤も佳し】(時珍)

艌船の油石灰を**水龍骨**といふ　主治　【金瘡、跌撲の傷損、皮を破りたる出

血、及び諸瘡瘻に血を止め蟲を殺す】(時珍)

[附方] 新三。【軟癤の癒えぬもの】腐爛した船底の油石灰を研末し、油で調へて傅ける。(胡氏方)【下體の癬瘡】(一三)艌船灰、牛糞を烟に燒いて一日一回熏ずれば平安になる。(醫方摘玄)【血風臁瘡】船上の舊油灰を泥で作つた釜で火で煆き、研末して輕粉少量を入れ、苦茶で洗淨して傅ける。刺戟性の食物を忌む。(邵眞人經驗方)

石麪 (綱目)

和名　漂布土の類
英譯名　A kind of Fuller's earth

[集解] 時珍曰く、石麪は常に生ずるものではない、やはり靈的なものだ。或は饑饉荒頽のときに生ずるともいふ。唐の玄宗の天寶三年、(一)武威の(二)番禾縣に醴泉が涌出し、石が化して麪になり、貧民はそれを取つて食つたといふ。また憲宗の元和四年、山西の(三)雲、蔚、代三州の山谷の石が化して麪になり、人民はそれを取つて食つたといふ。宋の眞宗の祥符五年四月、(四)慈州が饑饉の際には鄉寧縣の山に麪の如き石脂が生じ、餅にしてそれを食つたといふ。同じく仁宗の嘉祐七年三月、(五)彭城の地に麪が生じ、同五月(六)鍾離縣の地に麪が生じ、同じく哲宗の元豐三年五

(一三)艌船ハ船ノ俗語ナリ。

(一)武威ハ漢ノ郡名今ノ甘肅省涼州府ノ地ニ治ヲ置ク。

(二)番禾縣ハ漢ノ番和縣今ノ甘肅省永昌縣ノ西ニ故城アリ。

(三)雲州ハ今ノ大同縣ノ地、蔚州ハ今ノ直隸省宣化府ノ地、代州ハ今ノ山西省雁門道ノ代縣ノ地ナリ。

月、(七)青州の(八)臨朐、(九)益都の石が皆麪に化した。人民はそれを採つて食料に充てるために各所でこれを採集し、それを考求と稱したといふことである。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【氣を益し、中を調へ、之を食へば饑を止める】(時珍)

浮石（日華）

和名　かるいし・浮石・輕石
學名　Pumice

【校正】拾遺の水花を併せ入る。

【釋名】**海石**（綱目）**水花**

【集解】時珍曰く、浮石は大河や海の細沙や水沫が凝聚し、日久しうして結晶したものである。狀態は水沫か鍾乳石のやうなもので、細かい孔が蛀の窠のやうにあり、色白く質は虛で輕い。今の(一)皮作家はこれを用ゐて皮の垢を磨くが甚だ妙である。海中のものは味が鹹く、藥に入れて更に良い。抱朴子に「泥を燒け



〔海浮石〕

(四)慈州ノ舊治ハ今ノ山西省吉縣ニアリ。鄉寧縣ハ今ノ山西省平陽府ノ鄉寧縣ナリ。

(五)彭城ハ石膏ノ註ヲ見ヨ。

(六)鍾離縣ハ漢ニ置ク、今ノ安徽省鳳陽縣ノ地ナリ、故城アリ。

(七)青州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

(八)臨朐ハ山東省青州府ニ屬ス。膠東道臨朐縣ノ南方ニ舊治アリ。

(九)益都ハ山東省青州府治、民國膠東道ニ屬ス今ノ益都縣ナリ。

(一)皮作家ハ皮革工。

ば瓦になり、木を燔けば炭になり、水沫は浮石になる。これは皆その柔脆を去つて變して堅剛となつたものだ』といひ、交州記に『海中に浮石といふがある。輕虛なもので脚を磨くによい。煮た水を飲めば渇を止める』とあるがこれである。

【氣　味】【鹹し、平にして毒なし】時珍曰く、大寒なり。

【主　治】【煮汁を飲めば渇を止め、淋を治し、野獸の毒を殺す】(大明)【欬を止める】(弘景)【目翳を去る】(宗奭)【金を淸くし、火を降し、積塊を消し、老痰を化す】(震亨)【瘤癭、結核、疝氣を消し、氣を下し、瘡腫を消す】(時珍)

【發　明】藏器曰く、水花は遠路を行き水なきときに渇を止める。苦栝樓に和して丸にし、毎朝二十丸を服すれば永く渇せない。震亨曰く、海石は老痰、積塊を治す。鹹はよく堅きを軟にするのである。時珍曰く、浮石は水沫の結晶である。色白く體輕く質の玲瓏たるは肺の象であつて、氣、味の鹹、寒は潤下の作用を有つが故に肺に入つて上焦の痰熱を除き、欬嗽を止める。堅きを軟にし、上源を淸くするが故にまた諸淋を治するのである。按ずるに、余琰の席上腐談に『肝は木に屬するものだから浮くべき筈なるに反つて沈み、肺は金に屬するものだから沈むべき筈なる

に反つて浮ぶは如何なる理由であるか。それは肝は實し肺は虛するものだからである。石は水に入れば沈む筈だが、南海には浮水の石といふがある。木は水に入れば浮む筈だが、南海には沈水の香がある。虛、實は此の如く反對の現象のあるものだ』といつてある。

附方　新十二。【欬嗽の止まぬもの】浮石の末を湯で服す。或は蜜で丸にして服す。(肘後方)【消渇引飮】本事方では、浮石、舶來の靑黛等分、麝香少量を末にし溫湯で一錢を服す。○又ある方では、白浮石、蛤粉、蟬殼等分を末にし、鯽魚膽汁十七箇分で調へて三錢を服すれば神效がある。【血淋、砂淋】小便の澁痛するには、黃に爛れた浮石を末にし、二錢づゝを生甘草の煎湯で調へて服す。(直指方)【石淋破血】浮石を片手に滿つるだけを末にし、水三升と酢一升で二升に煮詰め、澄淸して一升づゝ服す。(傳信適用方)【小腸疝氣】陰莖縮み、陰囊腫るには、直指方では、浮石を末にして二錢づゝを木通、赤茯苓、麥門冬の煎湯で調へて服す。○丹溪方では、海石、香附等分を末にし、二錢づゝを薑汁で調へて服す。【頭核腦痺】後頭部に瘰核を生じたるは、正面のものは腦、側面のものは痺である。輕虛なる白浮石を燒いて

(二)瘡ハ腫塊ヲ云フ。グリグリ。
(三)繳淨ハ脱脂綿、ガーゼノ如キモノデ清淨ニ拭キ取ルコト。

性を存して末にし、輕粉少量を入れ、麻油で調へて掃き塗る。手で按ずれば漲るものだから按じてはならぬ。或は焙乾した黃牛糞を加へるが尤も好し。また(二)頭瘡を治す。(直指方)【耳底に膿あるもの】海浮石一兩、沒藥一錢、麝香一字を末にし、(三)繳淨して吹く。(普濟方)【疳瘡の癒えざるもの】海浮石を數回紅く燒き醋に淬して二兩、金銀花二兩を末にし、二錢半づつ水で煎じて服す　病が上にあらば食後、下にあらば食前に服する。一年に亘る患者も半年で癒える。(儒門事親)【疔瘡發背】白浮石半兩、沒藥二錢半を末にして醋糊で梧子大の丸にし、六七丸づつを就寢時に冷酒で服す。(普濟方)【諸種の惡瘡】方は上に同じ。

附錄　暈石(拾遺)藏器曰く、海底に生ずるもので、狀態は薑石の如く、紫褐色で極めて堅く緊つて石のやうだ。これは鹹水の結晶で自然に暈を生じて居る。味は鹹く、寒にして毒なし。石淋に主效がある。磨つた汁を飲み、また赤く燒いて酒中に投じて飲む。

石芝(綱目)

和名　珊瑚屬の化石
英譯名　Fossil of corals

【集解】葛洪曰く、芝には石、木、草、菌、肉の五種類あり、その五種類にまたそれぞれの異があつて百種に近い。道家に石芝圖といふがある。それに依れば石芝は石が芝の形に象れたものだ。海洋中の名山、島嶼の涯の石の積つた處に生え、その狀態は肉のやうで頭尾四足ある動物が大石に附いて居るやうに見える。その赤いものは珊瑚の如く、白いものは截肪の如く、黑いものは澤漆の如く、青いものは翠羽の如く、黃なるものは紫金の如く、いづれも光明洞澈し、大なるは十餘斤、小なるは三四斤ある。所謂齋戒沐浴の後に祭祀を行つてそれを取り、末に搗いて服するのである。その種類のうちに七明九光芝といふがあつて、水に臨むところの高山石厓の間に生ずる。容積は盤か椀ほどで徑一尺以上にはならぬ。莖が連り綴つてゐて、三四寸伸びたところに七箇の孔のあるものを七明といひ、九箇の孔のあるものを九光といふ。その光はいづれも星のやうで、夜間百歩の距離でもその光が見える。秋分の日になればその所在が見付かるものだ。搗いて方寸匕を服し、口に入れると翕然として身體が熱くなる。五味具つて誠に甘美なものである。一斤を服し盡せば長生して老いず、夜中でも物が視える。玉脂芝といふは玉のある山に生ずるも

ので、玉膏が流出して千百年にして凝つて芝となつたものである。鳥や獸の形のものもあり、一定の色はないが、玄玉、蒼玉、及び水精に似て居る。これを採つて末にし、無心草汁で和して須臾にして水になつたものを一升まで服すれば長生する。石蜜芝といふは少室の石戸の中に生ずるが、谷が深くて到底それに接近するわけに行かない。ただ石蜜が石戸の上から石偃蓋の中に入るのを望見して居ると、良久しうして一滴の液が滴り落ちる。それを一升まで服し得るならば長生して老いない。石桂芝といふは石穴の中に生ずるものだ。枝があつて桂樹のやうだが實は石である。高さ一尺ばかり、光が明にして味は辛い。

○○時珍曰く、神仙の說は渺茫として事實有無のほどは判らないが、しかし葛洪の話のやうなものが無いではない。貴州（一）普定の分司署內に築山があつて、その山にある樹は根も幹も枝も皆石で中に榴のやうな葉があり、翠に茂つた美しいさまは青絲でも掛けたやうだ。桂のやうな微黃色の花が開く。嘉靖丁巳の年、僉事焦希程が詩を賦してその事實を紀し、康子の斷松が石に化したことに比してあるが、しかしその名は何といつたか不明である。余（時珍）が思ふに、石芝圖や抱朴子の說のものは

（一）普定ハ今ノ貴州省普定縣、安順府ト同城ナリ。

石桂芝のことらしい。海邊にある石梅といふはその枝や幹が横に斜に生え、石柏葉といふは側柏のやうなものであるが、これ等もやはり石桂芝の類かと思ふ。

【主治】【諸芝を搗いて末にし、或は水に化して服すれば人をして身を輕くし、長生し、老いざらしめる】（葛洪）

本草綱目石部第九卷終

本草綱目石部

第十卷

本草綱目石部目錄　第十卷

石の四　石類下四十種

陽起石 本經　慈石 本經　玄石 別錄　代赭石 本經 赤石を附す。
禹餘粮 本經　太一餘粮 本經　石中黄子 唐本　空青 本經　曾青 本經
綠青 本經　扁青 本經　白青 本經 綠膚青、碧石青を附す。　石膽 本經 即ち膽礬。
礜石 本經　特生礜石 別錄　握雪礜石 唐本　砒石 開寶
土黄 綱目　金星石 嘉祐 金石を附す。　婆娑石 開寶　礞石 嘉祐
花乳石 嘉祐　白羊石 圖經　金牙石 別錄　金剛石 綱目　砭石 綱目 石砮を附す。
越砥石 別錄 即ち磨刀石。　薑石 唐本　麥飯石 圖經
水中白石 拾遺　河砂 拾遺　杓上砂 綱目　石燕 唐本　石蟹 開寶
石蛇 圖經　石蠶 開寶　石鼈 綱目　蛇黄 唐本　霹靂碪 拾遺
雷墨 綱目

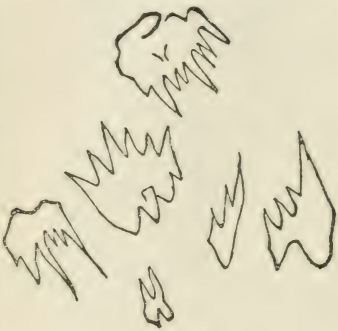
右附方　舊二十五　新九十五

石の四　石類下四十種

陽起石（本經中品）

和名　陽起石又ハ透角閃石
學名　Actinolite or Tremolite

釋名　**羊起石**（別錄）**白石**（本經）**石生**　時珍曰く、性能を以て名けたものだ。



〔陽起石〕

集解　別錄に曰く、陽起石は齊山の山谷、及び(一)琅琊、或は(二)雲山に生ずる。雲母の根であつて採收に一定の時期はない。普曰く、太山に生ずる。弘景曰く、この石の產出地は雲母と同一で、甚だ雲母に似て居るがただ厚い點だけが異ふのだ。今(三)用うるものは(四)益州の產で場所は礬石と同じく、色は少し黃黑である。礬石と雲母根と果して何れに屬

(一)琅琊ハ雲母ノ註ヲ見ヨ。
(二)雲山ハ雲母山ヲ指スモノカ、蘇恭ハ盧山ノ誤ナラントイフ。雲母ノ條雲夢山ノ註參照。
(三)用字、金陵本從ニ作ル。然レドモ意義ヲ爲サズ、故ニ別本ニ從フ。
(四)益州ハ金部金ノ

するものか判然せぬ。一般醫療には用ゐることは稀で、仙經の方で之を服する。

○恭曰く、この石は色白く肌理が殷孽のやうで雲母が附著した潤のあるものが良品である。故に本經に一名白石とある。當今純黑炭の如きものを用ゐるは誤つて居る。雲母の黑いものは雲膽といひ、健康を損ずるものだ。黑陽起石も必ず惡いに相違ない。(五)齊山は今の齊州の西北に在る山だが、そこには陽起石はない。この石の出るのは齊山の西北六七支里の(六)盧山である。本經に(七)雲山とあるは或は盧の字の書誤かと思ふ。太山、(八)沂州には黑いものがあるだけで、白いものは獨り齊州に出るだけだ。○珣曰く、太山から出る黃なるものが絕佳である。(九)邢州の(一〇)鵲山に出る白いものも好い。

○頌曰く、今は齊州に出るだけでそれ以外は何處にもない。齊州もただ一の土山で、その中から此の石が出るのである。彼の地ではこの土山を陽起山と稱して居る。その山には常に溫暖の氣があつて、嚴冬の大雪に近傍一帶が埋れてもこの山だけは白くならない。蓋しこの石の氣が熏蒸するに因ると見える。その山でこの石を取る穴は只一箇所だけで、而もそれが政府の命令で禁制され、初冬の採掘期には坑夫を各

註ヲ見ヨ。

(五)齊山ハ雲母ノ註參照。

(六)盧山ハ石膏ノ註參照。

(七)證類本草ニハ雲山或ノ三字ヲ雲山雲ニ作ル。

(八)沂州ハ馬腦ノ註ヲ見ヨ。

(九)邢州ハ今ノ直隷省大名道ノ邢臺縣ノ地ナリ。唐ニハ龍岡縣ヲ置ク。邢州州治此ノ地ニ在リ。

(一〇)鵲山、邢州ノ鵲山ハ今ノ邢臺縣ノ西方澧水ノ水源ニ在ルモノノ如シ、太平寰宇記龍岡縣下ニ『鵲

山。水經注云。鵲山有穴。出雲母。又云。廿南有龍騰溪・鶴渡嶺』トアリ。

(一二)鋪茸茁角ハ一面ニ草ノ芽ヲ吹キ出シタヤウナ有樣チイフ。

(一三)揀金山、未詳。

州から徴發し、監督官まで派遣されることになつて居る。かやうな採掘狀態が幾歳月か繼續したので、その穴はますます深くなつた。他の石屑を掘鑿してもこの石を得ることは覺束ない。就中白色明瑩にして狼牙の如きものを上等とするので、他の石の雜つた塊はあつてもそれは役に立たぬのだから、毎歳愼重にそれを撰擇して上納した殘餘が地方の藥種商の手に渡るのだ。さもなくば世間で手に入れ得やう筈はない。かかる次第で賣品もかなり多くはあるが、精好なものはまたなかなか得難いのである。舊說に、これは雲母の根で、中には雲母が附著してゐる位だといふが、今はさやうな物は見當らない。古方の服食には用ゐられなかつたものだが、今は補下藥として多く使つて居る。

時珍曰く、今は雲頭、雨脚にして輕くさらさらした狼牙のやうなものを佳品として居る(一二)鋪茸茁角なるものは佳くない。王建平の典術には『黃白で赤みがある重厚なるものが佳い。雲母の根である』といひ、庚辛玉册には『陽起は陽の石である、齊州の(一三)揀金山に出るものが勝れて居る。其の尖の箭鏃に似たものが力強く、狗牙の如きものは力が微弱である。大雪中に置けば忽ち下へ沒するものが眞物だ』

といつてある。

【修治】大明曰く、凡そ藥に入るには燒いてから水飛して用ゐる。凝白なものが佳い。時珍曰く、凡そ用うるには火中で赤く煆き酒に淬すこと七回繰返して研細し、水飛して日光で乾す。また燒酒に浸してから樟腦と共に鑵に入れて升煉し、粉を取つて用うることもある。

【氣味】【鹹し、微溫にして毒なし】普曰く、神農、扁鵲は酸し、毒なしといひ、桐君、雷公、岐伯は鹹し毒なしといひ、李當之は小寒なりといふ。權曰く、甘し、平なり。之才曰く、桑螵蛸が使となる。澤瀉、菌桂、雷丸、石葵、蛇蛻皮を惡み、兎絲子を畏れ、羊血を忌む。湯藥には入れない。

【主治】【崩中漏下、子臟中の血、癥瘕、結氣を破る。寒熱腹痛。子無きもの、陰痿不起のもの。不足を補ふ】（本經）【男子の莖頭寒、陰下の濕痒を療し、臭汗を去り、水腫を消す。久しく服すれば飢ゑず。子を產ましめる】（別錄）【腎氣精乏、腰疼、膝冷、濕痺、子宮の久冷、冷癥、寒瘕を補し、月水の不定を止める】（甄權）【帶下、溫疫、冷氣を治し、五勞七傷を補ふ】（大明）【命門の不足を補ふ】（好古）【種

種の熱腫を散ず」（時珍）

〔發明〕宗奭曰く、男子、婦人の下部の虚冷、腎氣の乏絶、子臓の久寒には、水飛して用うるがよし。凡そ石藥は冷熱いづれも毒があるから適當に斟酌せねばならぬ。時珍曰く、陽起石は右腎、命門の氣分の藥である。下焦の虚寒の者には用うべきものだが、久しく服すべきものではない。張子和の儒門事親に『喉痺は相火急速の病であつて、相火は龍火である。火を以て逐ふべきものだ。ある男子が（一三）纏喉風を病んで表裏皆腫れ、藥を飲下することさへ不能だつたが、凉藥を十餘滴鼻中へ灌ぎ込み、陽起石を赤く燒いて伏龍肝と等分を細末し、日毎に新汲水で調へて外部に百遍づつ掃き塗らせると、三日にして熱が始めて退き、腫は始めて消いた』これはやはり（一四）從合の方法である。

〔附方〕新三。【丹毒の腫痒】陽起石を煆いて研り、新汲水で調へて塗る。（儒門事親）【元氣虚寒】精が滑して止らず、大腑が溏泄し、手足が厥冷するには、陽起石を煆いて研り、鍾乳粉と各等分、酒で煮た附子末と共に麪糊で梧子大の丸にし、空心に米飲で五十丸づつを服す。癒ゆるを以て度とする。（濟生方）【陰痿、陰汗】陽起

（一三）纏喉風ハ偏桃腺炎。

（一四）一本從治。蓋シ從合ハ誤ナリ。

石を煆いて末にし、二錢づつ鹽酒で服す。（普濟方）

慈　石（本經中品）

和名　磁鐵鑛
學名　Magnetite, Magnetic iron ore

【釋名】 **玄石**（本經）**處石**（別錄）**熁鐵石**（衍義）**吸鍼石**　藏器曰く、慈石は鐵を取ること慈母が子を引著けるやうだから名けたものである。時珍曰く、石の慈ならぬものは鐵を引著ける力がない。それは玄石と謂ふものだ。而るに別錄には復た玄石を後に揭げてある。

【集解】 別錄に曰く、慈石は太山の川谷、及び(一)慈山に生ずる。山の陰に鐵のある處のその陽に生ずるもので、採收に一定の時期はない。弘景曰く、今は南方にもある。その好きものは能く鐵鍼を吹ひ上げる。三本まで吸ひ連るものが佳いのである。仙經の丹房黃白術中に多くこれを用ゐる。藏器曰く、(二)雄州の北山から出る。

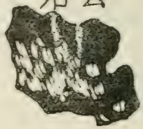
頌曰く、今は(三)慈州、(四)徐州、及び南方の海邊に臨んだ山中にいづれもあるが、慈州から每年貢納するものが最も佳く、鐵を吸ひ著けて十數本の鍼をその先に先に

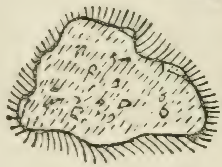
(一) 慈山トハ慈州ニ在ル山ノ意カ。
(二) 雄州ハ後周ニ置ク、今ノ直隷省保定道雄縣ノ地ナリ。
(三) 慈州ハ石類ノ註ヲ見ヨ。
(四) 徐州ハ今ノ江蘇

銅山縣ノ地ナリ。
(五)唐書地理志ニ『海豐縣南五十里、即漲海。渺漫無際』トアリ。海豐ハ今ノ廣東省惠州府ノ海豐縣ノ地ナリ。
(六)徼ハ邊際ノ地。徼ハ蠻夷ト支那トノ間ニ設ケタル關ナリト云フ。漢ニ蜀郡ノ北境、廣漢郡、隴西郡ノ西境以外ノ地ヲ徼外ト稱ス。

と連ね、或は一二斤ある刀や器物を吸ひ著けて回轉してもそれが落ちない。就中優良なものである。採收に一定の時期はない。その石は中に孔があつて孔中は黃赤色を呈し、その上に細毛のあるものが功用更に一層勝れて居る。按ずるに、南州異物志に『(五)漲海の崎の邊は水淺くして慈石が多い。(六)徼外の人民は鐵葉で固めた船で航行するが、その邊まで來ると動けなくなる』とあるこの言に依つて見ると海南には就中多く產するものと見える。

玄石





〔慈石〕

○斅曰く、凡そこれを使ふ場合には、玄中石、並に中麻石を誤用してはならぬ。この二石は倶に慈石に似てゐるが、ただ鐵を吸ふ力がなく、中麻石には中心に粗い赤皮があるもので鐵山の石である。誤り服すれば惡瘡を發して手當の方法がない。眞の慈石はその一片の四面に一斤の鐵を吸ふもので、これを延年沙と名ける。四面にただ鐵八兩だけを吸ふものを續采石と名け、四面に五兩を吸ふものを慈石と名ける。

宗奭曰く、慈石はその毛が輕く紫で石の表面が頗る澁り、鐵を連ねて吸ひ著ける。俗に熁鐵石といふ。玄石といふは慈石の黑色なるものである。慈石で鍼の鋒先を磨すればよく南を指すものだが、常に東に偏する傾があつて南を完全には指さない。それを完全にする法は、新しき綿の中から眞に單一の絲條を芥子半箇ほど取つて蠟で鍼の腰に綴り著け、無風の處に垂れて置けば鍼は常に正しく南を指すのである。その鍼で燈心を横に貫いて水上に浮べても南を指すが、常に丙位に偏する傾きがある。蓋し丙は大火であつて庚辛がその牽制を受けるのだ。これは現象と實體との相感である。土宿眞君曰く、鐵は太陽の氣を受けて始めて生ずるもので、その初に於ては石が産し、それが一百五十年經つて慈石となる。又二百年にして孕んで鐵となるのである。

【修治】　斅曰く、凡そ修治の方法は、慈石一斤に對して五花皮一鎰、地楡一鎰、故綿十五兩を用ゐ、この三品いづれも石の上で剉み、搥き砕いて二三十の塊にし、石を瓷瓶に入れてその中へ草藥を投じ、東流水で三晝夜煮て後漉出して拭ひ乾し、布で裹んで再び細かに搥き、更に碾つて塵の如くして水飛過し、再び碾つて用ゐる

のである。宗奭曰く、藥に入れるには火で燒いて醋に淬し、研末し水飛してから用ゐる。或は醋で三晝夜煮る。

【氣味】【辛し、寒にして毒なし】權曰く、鹹し、小毒あり。大明曰く、甘し、濇る。平なり。藏器曰く、性溫である。寒といふは誤だ。之才曰く、柴胡が使となる。鐵毒を殺し、金を消し、牡丹、莽草を惡み、黃石脂を畏る。獨孤滔曰く、丹砂を伏し、汞を養ひ、銅暈を去る。

【主治】【周痺、風濕で肢節中が痛んで物を持てず、持たんとすればぞくりとして身の毛竦立つやうに感ずるもの。大熱、煩滿、及び耳聾を除く】（本經）【腎臟を養ひ、骨氣を強くし、精を益し、煩を除き、關節を通じ、癰腫、鼠瘻、頸核、喉痛を消す。小兒の驚癇には水で錬つて飲む。また子を產ましめる】（別錄）【男子の腎虛、風虛で身強し、腰中利せざるにこれを加へて用ゐる】（甄權）【筋骨羸弱を治し、五勞七傷の眼昏を補ひ、煩躁を除く。小兒が誤つて鍼、鐵等を呑みたるには、研つて細末し、筋肉に傷が附かぬやうにして末と共に之を呑下す】（大明）【目を明にし、耳を聰くし、金瘡出血を止める】（時珍）

（七）續醫說曰、經云「脾爲黃婆、胃爲金翁。」今按黃婆指脾。嬰姹卽心腎也。

【發明】宗奭曰く、腎氣を養ひ、精髓を補塡する。腎虛、耳聾、目昏には皆之を用ゐる。藏器曰く、重は怯を去るといふは慈石、鐵粉の類をいふのである。時珍曰く、慈石は水に法り、色黑くして腎に入るものだから、腎臟系統の諸病を治し、耳を通じ目を明にするのである。ある人が頻に目を病み、漸次に昏暗にして瞖が生ずるやうになつたとき、余（時珍）は東垣の羌活勝風湯に加減の法を用ゐて與へ服ませ、同時に磁硃丸を佐とすると二个月で遂に故の如く回復した。蓋し慈石は腎に入り眞精を鎭養して神水を外に移らしめず、硃砂は心に入り心血を鎭養して邪火を上から侵さしめぬのである。それに神麴を佐とすれば滯氣を消化する。生、熟並に用ゐて脾、胃發生の氣を溫養する結果となるのである。道家にいふ『（七）黃婆は嬰姹を媒合す』なる意味と同一關係だ。方に依つて藥を調製する者は造化の堂奧に徹見することが肝要である。方は孫眞人千金方の神麴丸の說明を見よ。但し『目を明にし百歲にして細書を讀み得る』とある。その點の藥の微妙な關係は看破しかねる。しかし、いづれにしても古方が今の病の治療に應用し得ぬといふことはないのである。獨孤滔は『慈石なるものは堅頑な物であつて融化の氣がない。ただその氣を假

りて服食すべきもので、久しく服すべきではない。渣滓は必ず大患を生ずるものだ』といつて居るが、そもそも藥の目的は治病に在る、病に的中すれば能事畢るのだ。砒、硇でさへ服餌し得るではないか、何ぞ獨り慈石を服して惡いといふ道理があらう。慈石そのものも、既に錬末して用ゐる以上、また堅頑の物とはいへないのである。ただ要は藥を用うる者がよく病情を確實に識り得て、それに的中すると否とに在る。淮南萬畢術に『慈石を井に懸けて置けば逃亡者が自ら歸る』とあり、註に『逃亡した者の衣服に慈石を裹んで井中に懸けて置けば、その逃亡者が自ら歸つて來るのだ』とある。

附方　舊三、新十二。【突然の聾閉】煬鐵石半錢を病む方の耳に入れ、鐵砂末を病まぬ方の耳に入れば自然に透る。（直指方）【腎虚の耳聾】眞慈石の豆一箇大のものと、穿山甲を燒いて性を存して研り、一字を新綿で裹んで耳を塞ぎ、口に生鐵一塊を含む。耳中に風雨の如き聲を覺えて通ずる。（濟生方）【老人の耳聾】慈石一斤を搗いて末にし、水で淘つて赤汁を去つて綿に裹み、別に猪腎一頭分を細かに切つて水五斤で石を煮て二斤に煮詰めた中へその腎を入れ、鹽豉を加へて羮にして食ふ。米で粥

を煮て食ふもよし。（養老方）【老人の虚損】風濕で腰肢の痺痛するには、慈石三十兩、白石英二十兩を搥き碎いて甕に盛り、水二斗に浸して露路へ置き、毎日その水を取つて粥を作つて食ふ。年を經て氣力强盛となり、顏が少年のやうになる。（養老方）【陽事不起】慈石五斤を研つて清酒に三七日間漬け、三合づつ晝三回、夜一回服す。（千金）【眼昏内障】慈朱丸——神水が寬大となり、漸次に散じて霧の中を行くやうに昏くなり、また漸次に空花が見え、物體が二つに見え、久しくして光の收らぬもの、及び内障で神水が淡綠、淡白色なるものを治す。眞慈石を火で煅き醋に淬すこと七回して二兩、硃砂一兩、神麴を生で三兩を末にし、更に神麴末一兩で煮た糊に蜜を加へたもので梧子大の丸にし、二十丸づつを空心に飯湯で服す。服して後、俯しては物が見えずとも仰げば微に星や月が見えるやうになればその效である。また心火が金に乘じ、水が衰へて反制する病を治す。久しき病で累に發するものはこれを服すれば永く再發せない。（倪微德原機啓微集）【小兒の驚癇】慈石を水で錬つて飲む。（聖濟錄）【子宮の收らぬもの】瘣疾と名け、痛み忍び難きものである。慈石丸——慈石を酒に浸して煅いて研末し、米糊で梧子大の丸にして就寝時に滑石湯で四十丸を服し、

翌早朝慈石散二錢を米湯で服す。この散は慈石を酒に浸して半兩、鐵粉二錢半、當歸五錢を末にしたものである。【大腸脫肛】直指方では、慈石半兩を火で煆き醋に淬すこと七回して末にし、空心に米飲で一錢づつを服す。○簡便方では、慈石末を麪糊で調へて顖上に塗り、脫肛が入つて後洗ひ去る。【金瘡の腸出】納め入れてから、慈石、滑石各三兩を末にし、一日二回、米飲で方寸匕を服す。（劉涓子鬼遺方）【金瘡出血】慈石末を傅ければ痛を止め血を斷つ。（千金方）【誤つて鍼鐵を呑みたるとき】眞慈石の棗核大のものに孔を穿つて線を通し、呑んで拽けば立ろに出る。（錢相公篋中方）【丁腫熱毒】慈石末を醋で和して封ずれば立ろに根を拔き出す。（外臺祕要）【諸種の腫毒】吸鐵石三錢、金銀藤四兩、黃丹八兩、香油一斤を普通のやうに熬膏して貼る。（乾坤祕韞）

磁石毛　氣味　【鹹し、溫にして毒なし】　主治　【絕傷を補ひ、陽道を益し、小便白數を止め、腰脚を治し、瘡瘻を去り、肌膚を長じ、子を產ましめる。酒に入れて用うるがよし】藏器曰く、本經には石を說いて毛を說かぬが、毛と石とでは形狀も功用も異るのである。

玄石（別錄中品）

和名　磁力の弱い磁鐵鑛又は黒色の塊狀赤鐵鑛
英譯名　Less magnetic magnetite, or black massive hematite

釋名　**玄水石**（別錄）**處石**　時珍曰く、玄とは色を以て名けたのだ。

集解　別錄に曰く、玄石は太山の陽に生じ、その山の陰には銅がある。銅は雌、鐵は雄なのである。弘景曰く、本經には慈石、一名玄石とあり、別錄には又、玄石、一名處石とある。名も同じであるだけに療體もやはり相似たものだが、寒、溫の性の差と銅、鐵に對する畏惡の關係に相異がある。一般醫方には用ゐもせず、識るものもない。一體慈石と相類するものか否かさへ判らぬものだ。恭曰く、この物は鐵の液である。慈石は中に細孔があり、孔中が黃赤色だ。採取して間もなき好きものはよく鐵を拾ひ鍼を吸ふ。けれども孔はなく、光澤があつて純黑なものは玄石といふ。鐵を拾ふ力もなく、療體も慈石には劣つて居る。頌曰く、今北番から獻上物、進物とする慈石は、塊に多くは光澤があつて鐵を吸ふ力がない。これが恐らく玄石といふものであらう。醫方に用ゐることは稀だ。時珍曰く、慈石は山の陰の鐵のある處にあり、玄石は山の陽の銅のある處にある。形狀はよく似てゐるが性は同しく

(一)漢ノ代郡ハ今ノ直隸省ノ紫荊關ヨリ西北、倒馬關以北、天鎭、陽高ノ附近ニ至リ、西ハ當時ノ雁門郡ニ接ス。
(二)姑幕ハ今ノ山東省諸城縣ノ西南ニ故城アリ。漢時ノ縣名。
(三)雁門ハ漢ノ郡名、今ノ山西省ノ舊ノ代州、寧武ノ北部、及ビ朔平ノ南部、大同ノ東部北部ノ地ナリ。
(四)漢ノ齊國ハ今ノ

ない。故に玄石には鐵を吸ふ力がないのだ。

【氣味】【鹹し、溫にして毒なし】之才曰く、松脂、柏實、菌桂を畏る。【主治】【大人、小兒の驚癇、婦人の絕孕、小腹の冷痛、精少く身重きもの。これを服すれば子を產ましめる】(別錄)

代赭石（本經下品）

和名　たいしや・代赭石
學名　Red ochre, Earthy Hematite

【釋名】**須丸**（本經）**血師**（別錄）**土朱**（綱目）**鐵朱**　別錄に曰く、(一)代郡に產出するものを代赭と名け、(二)姑幕に產出するものを須丸と名ける。時珍曰く、赭とは赤色のことである。代は地名、卽ち(三)雁門の地方である。今俗にこれを土朱、鐵朱などと呼ぶ。管子に『山上に赭あればその下に鐵あり』とある。鐵朱なる名稱はそれから出たものかも知れぬ。單に形狀や色澤に由つた名ではない。

【集解】別錄に曰く、代赭は(四)齊國の山谷に生ずる。赤紅青色で雞冠のやうに澤があり、爪甲を染めて見て色の變ぜぬものを良しとする。採收に一定の時期はない。弘景曰く、これは代郡の城門下の赤土である。江東には旣に久しくこの物が無

くなつた。俗用としては等閑に付されて居るが、仙方では戎鹽、鹵鹹と共に缺くべからざる重要品となつて居る。恭曰く、この石は多く代州から來るが、山中で採取するもので、城門下の土ではないといふことだ。今の齊州の(五)亭山から出る赤石には赤、紅、青色のものがあつて、その赤きものはやはり雞冠のやうで且つ潤澤がある。その地方ではただ採つて楹柱を彩る塗料に用ゐるが、紫色で且つ暗く、代州産の物に似たものだ。古來これを用ゐたものである。現に(六)靈州鳴沙縣管下の黃河北岸の平地で四五尺の地下から採掘するものは、表皮が赤く滑に、中は紫で、大さは雞肝ほどあり、齊州、代州産の物にも勝つて居る。

頌曰く、現に河東、江東の山中にもある。古方に小兒を治する紫丸には代赭を用ゐ『眞物が無い場合には左顧の牡蠣を代用する』とあるところから見れば、眞物の得難かつたことが判る。今醫家で用ゐるには多く大塊のものを擇び取り、上に(七)浮漚丁のやうな文があつて小隆起の附いたものを勝れたものとし、これを丁頭代赭と稱して居る。北山經に『少陽の山、中に美赭多し』とあり、西山經に『石脃の山、灌水これより出づ、中に流赭有り。以て牛馬に塗れば病無し』とあり、郭璞の註に

山東省青州、臨淄、樂安、及ヒソノ以東海ニ至ル。

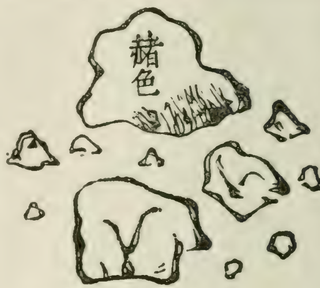
(五) 亭山ハ太平寰宇記ニ『貞觀十七年廢平陵、章邱、亭山、歷城等縣』トアリ。今ノ地點未詳。

(六) 靈州ハ今ノ甘肅省寧夏道ノ靈武縣。鳴沙縣ハ靈武、中衛二縣ノ中間、黃河ノ北岸ニ在リ。

(七) 浮漚丁ハ釘鐶ニ同ジ。ヘノジガタノクギ。鋲ノ一種。

(八) 虔州ハ江西省虔南縣ノ地ナリ。

『赭は赤土なり』とある。現に世間では赭を牛の角に塗れば邪惡を辟けるものとなつて居る。



〔代 赭 石〕

時珍曰く、赭石は諸處の山中にあるが、西北地方から出るものが大體に於いて良質である。宋の時代には(八)虔州から毎年一萬斤づつを朝廷へ貢納したものだといふ。崔昉の外丹本草に『代赭は陽石であつて太乙餘粮と共にいづれも山峽中に生ずる。研れば朱色となり、書籍の書き入れにも用ゐ得る。またこれで金を罨すればその色の赤みを益す』とある。張華が『赤土で寶劍を拭へばますますその精明を益す』といつたその赤土はこの物だ。

修治 斅曰く、凡そこれを用ゐるには、研細して臘水で幾回も飛過し、水面に浮ぶ薄雲のやうな赤色のものを取り去り、細茶脚湯で一伏時の間煮て取出し、また一萬匝研つてから、淨き鐵鍋を赤く燒いて白蜜蠟一兩を入れ、よく溶けてから新

汲水を投じ、研つた代赭をその中へ入れて二十ほど沸騰させて取出し、晒し乾して用うるのである。時珍曰く、現今では一般にただ三回乃至七回赤く煆いて醋に淬し、研つて水飛して用ゐる。これを用ゐる目的は、その相制する力と肝經の血分の引用とを作用せしむるに在る。相感志に『酒、醋で煮た代赭の中へ鐵釘を挿入して扇げば汁となる』とある。

氣味　【苦し、寒にして毒なし】別錄に曰く、甘し。權曰く、甘し、平なり。之才曰く、天雄、附子を畏れる。乾薑が使となる。

主治　【鬼疰、賊風、蠱毒。精物、惡鬼、腹中の毒邪の氣を殺す。女子の(九)赤沃、漏下】(本經)【帶下のあらゆる病、難産で胞の出ぬもの、墮胎には血氣を養ひ、五臟血脈中の熱、血痺、(一〇)血痢、大人、小兒の驚氣の腹に入りたるもの、及び陰痿不起を除く】(別錄)【胎を安んじ、脾を健にし、反胃、吐血、鼻衄、月經不止、腸風、痔瘻、瀉痢、脫精、遺尿、夜間に多き小兒の驚癇、疳疾を止め、金瘡には肉を長じ、鬼魅を辟ける】(大明)

發明　好古曰く、代赭は手の少陰、足の厥陰の經に入るものだ。怯すれば氣

(九)赤沃、ナガチ。

(一〇)血痢、一本血瘀トアリ。

が浮し、重はそれを鎮める。その關係から代赭の重は虚逆を鎮めるわけである。故に張仲景は、傷寒で汗、吐、下の後心下痞鞕し、噫氣去らぬものを治するに旋覆代赭湯を主として用ゐたのであつた。その方は、旋覆花三兩、代赭石一兩、人參二兩、生薑五兩、甘草三兩、半夏半斤、大棗十二箇を水一斗で六升に煮て滓を去り、再び三升に煎じて一日三囘に一升づつを溫服するのである。時珍曰く、代赭なるものは肝と包絡との二經の血分の藥である。故にその主たる治效のある病は皆二經血分の病なのだ。昔、小兒の患者が瀉後眼上して三日間乳を飮まず、目が金の如く黃になり、將に絕命せんとする容態であつた時、ある名醫が「これは慢驚風だから肝を治せねばならぬものだ」といひ、水飛した代赭石末半錢づつを冬瓜仁の煎湯で調へ服ませると果して癒えたことがあつた。

附方　舊二、新十四。【哮呷に聲あるもの】ために寢ても睡れぬには、土朱の末を米醋で調へて時時に一二服を進める。（普濟方）【傷寒の汗無きもの】代赭石、乾薑等分を末にし、熱醋で調へて兩手の心に塗り、合掌し握り合せて大腿の內側に夾み、寢具を厚くし溫にすれば汗が出て癒える。（傷寒蘊要）【嬰兒の瘧疾】手當の施しやう

なきには、代赭石五箇を紅く煆いて醋に淬し、硃砂五分、砒霜を豆一箇ほどを共に紙で七重に包み、濕して煨き乾し、それに麝香少量を入れて末にし、香油で調へて一字を鼻の尖端、及び眉心、四肢に塗れば神の如き應驗がある。(保幼大全)【急性、慢性の驚風】眼を吊り、口を撮し、搐搦して落ち付かぬには、代赭石を火で燒いて醋に淬すこと十回して細研し、水飛して日光で乾し、一錢或は半錢づつ眞金を煎じた湯で調へて服す。續けざまに三服して病兒の脚脛に赤斑が現れれば驚氣が已に出たのであつて病は平安になるが、斑點の現れぬものは治すべき方法がない。(直指方)【慢性の肝驚風】方は發明の條下にある。【小腸疝氣】代赭石を火で煨き醋に淬して末にし、二錢づつを白湯で服す。(壽域方)【腸風下血】血師一兩を火で煆いて米醋に淬し、その醋一升が皆盡るまで繰返してから搗き篩つて麪の如くし、一錢づつを白湯で服す。(斗門方)【吐血、衄血】方は上に同じ。【墮胎下血】止らぬには、代赭石末一錢を生地黄汁半盞で調へ、一日三回乃至五回服す。瘥ゆるを度とする。(聖濟錄)【婦人の血崩】赭石を七回火に煨き醋に淬して末にし、白湯で二錢を服す。(普濟方)【赤眼腫閉】土朱二分、石膏一分を末にし、新汲水で調へて眼の頭、尾、及び太陽穴

(一一)牙宣ハ齒齦ガ宣露シテ血ノ出ヅルモノ。

(一二)百合病、傷寒ノ一種。

(一三)淄州ハ今ノ山東省淄川縣ノ地ナリ。北海トハ山東省ノ濱海地方ヲ指ス。

に傅ける。(直指方)【喉痺腫痛】紫朱の煮汁を飲む。(普濟方)【(一一)牙宣の䘌あるもの】土朱、荊芥を共に研つて三日間揩る。(普濟方)【諸種の丹熱毒】土朱、青黛各二錢、滑石、荊芥各一錢を末にし、一錢半づつを蜜水で調へて服し、外用にもこれを傅ける。(直指方)【一切の瘡節】土朱、虢丹、牛皮膠等分を末にし、好酒一盞に投じ澄清して服す。滓は傅け、乾けばまた傅ける。(朱氏集驗方)【(一二)百合病の發作】已に汗、下してからまた發するには、百合七箇を一片づつ皆取放して泉水に一夜浸し、赭一兩、滑石三兩を泉水二鍾で一鍾に煎じ、曩の百合汁を入れて再び煎じ、一鍾を溫服する。(傷寒蘊要)

【附錄】藏器曰く、(一三)淄州、北海の山谷の土石中から出る赤土、代赭の類のものを、その地方では赤石、一名零陵と呼んで朱の代用にして居るが恐らくは代赭の類に相違ない。味甘し、平、溫にして毒なし。驚恐、身熱、邪氣に主効があり、心を鎭める。久しく服すれば眼が明になり、顏色が悅澤になる。時珍曰く、これも産地こそ違へ、やはり代赭なのである。故にその功力作用も甚しき相違はないものである。

禹餘粮（本經上品）

和名　禹餘粮・いしだんご・すゞいし、つぼいし（泥鐵鑛の球顆）

學名　Concretionary nodule of Argillaceous hydroxide of iron (Clay-iron-stone)

釋名　**白餘粮**　時珍曰く、石中にある細粉で麪のやうだから餘粮といひ、俗に太一禹餘粮と呼ぶ。太一餘粮の條を見よ。承曰く、(一)會稽山からは甚だ多く出る。彼の地では、昔大禹がこの地で(二)會稽をして食粮の計算分配を行つた時、剩餘として殘したものがこの餘粮となつたのだといふ。

集解　別錄に曰く、禹餘粮は東海の池澤、及び山島の中、或はその他の池澤の中に生ずる。弘景曰く、今は(三)東陽から多く出る。形は鵞や鴨の卵のやうで外殼が幾重にもあり、中に蒲黃のやうな黃色の細末がある。沙の交らぬものが良品だ。近年茅山で地を掘つたとき多量にこれを發見した。極めて精好なもので、狀態は牛黃のやうで幾重にも層をなし、外に甲錯があつて、その最も良き部分は紫色で麪のやうに輕く細かく、嚼んでザラザラ舌に殘るやうなことがない。仙經中の服食にはこれを用ゐる。南方ではまた平澤中に生ずる一種の藤の球根を禹餘粮と呼んで居

(一)會稽山ハ今ノ浙江省紹興縣ノ東南十三支里ニ在リ。

(二)會稽ハ會計ニ同ジ。

(三)東陽ハ秦ニ縣チ置キ、東晉以後ニ廢ス。今ノ安徽省天長縣ノ西北ニ故城アリ。

（四）澤州ハ不灰木ノ註、潞州ハ長石ノ註ヲ見ヨ。

（五）扶海、未詳。

（六）藒草ハ海草、うみごめ。

る。その藤は葉も節も菝葜に似たもので、根に節のある塊が生じ、その色は赤く、その球根の味は薯蕷のやうだ。これは池澤中に生ずる禹餘粮と髣髴たるものである。そこで疑問は、今の石中に生ずるものは太一餘粮そのものではなからうかといふことである。



〔禹餘粮〕
中に水あるものが石中黄

頌曰く、今は（四）澤州、潞州だけにある。舊説には『形が鵞か鴨の卵のやうで外殻がある』といふが、現に地方から提出した圖を見るに、全く山石の形であつて、少しも卵の形に似て居らぬ。舊説とは少少異ふ。採收に一定の時期はない。張華の博物志に『（五）扶海の洲上に生える（六）藒草は、實を食し得て大麥のやうなものだ。これを自然穀と名け、また禹餘粮とも名ける』とある。禹が水を治するに際し、その餘つた食糧を大江に棄てたのが後世藥に用ゐられる禹餘粮となつたのだといふ傳說のものは藒草のことで、この物とは異物同名か、そもそもまた池澤中に生ずるものと本來は同樣のものであつたらうか。

時珍曰く、禹餘粮なるものは石中の黄粉で、池澤に生ずるものだ。山谷に生ずるものは太一餘粮である。それは本文の通り明白だ。陶弘景は、菝葜に似た藤に禹餘粮の生ずる話を引合に出し、蘇頌は、蒒草に禹餘糧の生ずる話を引合に出して居るが、同名であつても事實そのものは異ふのだ。誠に迂遠千萬なことである。詳細は太一餘粮の條を見よ。

修治　弘景曰く、凡そこれを用ゐるには、細研して水で淸らかに淘汰し、汁を取つて澄まし、沙土を混入せぬやうに丁寧にして用ゐる。斅曰く、解說は太一の條を見よ。

氣味　【甘し、寒にして毒なし】別錄に曰く、平なり。權曰く、鹹し。之才曰く、牡丹が使となる。五金を伏し、三黄を制す。

主治　【欬逆、寒熱、煩滿、赤白を下すもの、血閉、癥瘕の大熱。錬つて餌服すれば飢ゑず、身を輕くし、天年を延べる】（本經）【小腹痛、結煩疼を療ず】（別錄）【崩中に主效がある】（甄權）【邪氣、及び骨節疼、四肢不仁、痔瘻等の疾を治す。久しく服すれば寒暑に耐へる】（大明）【出產を催し、大腸を固くする】（時珍）

【發明】 成無己曰く、重は怯を去る。禹餘粮の重は鎭固の劑である。時珍曰く、禹餘粮は手、足の陽明の血分の重劑であつて、その性は濇るものだ。故に下焦の前と後の諸病に主效がある。李知先の詩に『下焦病あるは人會し難し、須く餘粮、赤石脂を用ふべし』とあり、抱朴子に『禹餘粮を丸にし、一日二服づつ三日間服すれば氣力が多くなり、物を負ひ遠路を歩んでも身が輕く、力の盡きることはない』とある。その藥方は甚だ多いがここには記載せぬ。

【附方】 舊三、新六。【大腸欬嗽】欬する毎に遺尿するには、赤石脂禹餘粮湯が主效がある。方は下條を見よ。（潔古家珍）【冷勞腸泄】泄して止まぬには、神效太一丹――禹餘粮四兩を火で煆いて醋に淬し、烏頭一兩を冷水に一夜浸して皮と臍とを去つて焙じ、末にして醋糊で梧子大の丸にし、毎食前に溫水で五丸を服す。（聖惠方）【傷寒下痢】下つて止まず、心下が固く痞へ張り、下焦が利するには、赤石脂禹餘粮湯が主效がある。赤石脂、禹餘粮各一斤を用ゐ、いづれも碎いて水六升で煮て一升を取り、滓を去つて二回に分服する。（仲景傷寒論要）【赤白帶下】禹餘粮を火で煆き醋に淬し、乾薑と等分――赤下には乾薑を半減する――を末にし、空心に二錢匕を服す。

（七）酸餅ハ日本ノ握リ飯ノ如キモノカ。

（勝金方）【崩中漏下】靑、黃、赤、白が下れば不姙症に陷る。禹餘粮を煆いて研り、赤石脂を煆いて研り、牡蠣を煆いて研り、烏賊骨、伏龍肝を炒り、桂心と等分を末にして日每に溫酒で方寸匕を服す。葱、蒜を忌む。（張文仲備急方）【育腸の氣痛】婦人の少腹痛である。禹餘粮を末にし、一日二回、二錢づつを米飮で服すれば極めて效がある。（衞生簡易方）【產後の煩躁】（七）酸餅の如き形狀の禹餘粮一箇を半ば地中に埋め、地上に現した部分を炭灰一斤を緊く盛り固めて煆き、濕土で罨ふて一夜置き、外面の石を破つて中から細いものを取り出し、それを研つて水で五回乃至七回淘り、日光で乾して再び一萬匝研り、甘草湯で二錢を服す。一服で立ろに效がある。（經驗方）【身體面部の瘢痕】禹餘粮、半夏等分を末にして雞子黃で和し、先づ瘢痕が赤くなるほど布で拭つてから傅け、風と日光に當らぬやうにする。三十日試むれば十年のものも消滅する。（聖濟錄）【大風癘疾】眉髮脫落し、全身頑痺するには、禹餘粮二斤、白礬一斤、靑鹽一斤を末にし、罐に入れ固濟して炭火一秤で午前六時から午後八時まで煆き、やがて冷めるを待つて粉に研り、三日間土中に埋めて取出し、一兩づつに九蒸九暴して炒熟した胡麻末三兩を入れ、一日二回、二錢づつを荊芥茶

で服す。（聖惠方）

太一餘粮（本經上品）

和名　紫赤色の泥鐵鑛の球顆
學名　Dark red concretionary nodule of clay-iron-stone

【釋名】　石腦（本經）(一)禹哀（吳普）藏器曰く、太一とは道の宗源をいふ。太は大、一は道であつて、大道の師、卽ち理化神君は禹の師である。この師が嘗て之を服したといふところから太一なる名稱が起つたのだ。張司空は『これは還魂石中の黃子であつて、鬼物、禽獸が守るので妄に得られない。會稽に(二)蓼といふ土地がある。餘粮が出て土地の者が掘るのだが、代償の物を提供して幾箇欲いといふと、必ずその數だけは出て來る。如何にも神祕なものだ』といつてある。これが太一そのものではあるまいか。

【集解】　別錄に曰く、太一餘粮は太山の山谷に生ずる。九月に採收する。普曰く、太山に生ずる、表面は甲に裹まれ、甲の內部に白い物があり、その白い物の中にある黃色の雞子黃の如きものだ。採收に一定の時期はない。弘景曰く、本草に太一餘粮、禹餘粮の兩種を舉げてあるが、兩種とも治病の功用

(一)禹哀、一本禹褱ニ作ル。

(二)會稽ノ蓼ナル地ハ所在詳ナラズ。漢ノ六安國ニ蓼縣アリ、後漢ニハ揚州廬江郡ニ屬ス。李氏讀編ニ據レバ今ノ河南省固始縣ノ東北七十支里ニ在リ。楊氏地理圖ニ據レバ固始縣ノ東南決水ト灌水トノ中間合流點ニ蓼ナ置ク。

は同一である。ところが今一般にはただ禹餘粮のあることだけ知つてゐて、太一に關する智識は一向にない。登眞隱訣の長生四鎭丸の說明には『太一禹餘粮は六腑を定め五臟を鎭む』とあつて、太一、禹餘粮の二名稱を合併してあるが、果していづれをその物と指したのか明確でない。世間でも一般にやはり「太一禹餘粮」と引くるめて呼んで居る。ある人が(三)銅官で空青を採收した際、石坎中から黃赤色の石を多量に掘り出した。それは今の餘粮なるものに極めて似たものだが、その赤色が好過ぎたといふことだ。その物は此にいふ太一ではなかつたかと思ふのだが、彼の地ではこれを雌黃と呼んで居る。しかし物に塗つて見ると雄黃の色そのままだ。

〇恭曰く、太一餘粮と禹餘粮とは同一物で、精、粗に依つて名稱を別けただけのものだ。その殼は瓷のやうで方圓一定せず、まだ殼中に在つて凝結せぬうちは黃色の水のやうな狀態だ。これは石中黃子と名ける。それが久しくして凝つて靑、白、赤、黃、種種の色になり、更に多くの年月を經ると赤に變じ、赤からまた紫になる。その紫、及び赤色のものを俱に太一と名けるのであつて、他の諸色のものをば禹餘粮と總稱するのである。今は太山から採掘されぬが、會稽、(四)王屋、澤州、潞州の諸

(三) 銅官山ニ二アリ、イヅレモ漢ノ丹陽郡、卽チ今ノ安徽省黃河ノ南畔銅陵縣南十支里ニ一アリ。同ジク今ノ浙江省境ニ近キ廣德縣ノ東隅ニ一アリ。イヅレモ銅ヲ産ス。

(四) 王屋山ハ一名天

山にいづれもある。陶弘景は、黄赤色のものが太一ではあるまいかといふのだが、殼に裹まれてなかつたらしいから甚だ的確なものでない。

斅曰く。凡そこれを使用する場合に、誤つて石中黄、卵石黄を用ゐてはならぬ。この二石は眞によく似て居るが、石中黄は中味に入るほど赤黒黄色で、味が淡く、微に(五)踶する。卵石黄は味が酸く、箇箇に(六)卵のやうで内部に一塊の子を裹むものだ。いづれも使用に堪へない。若し誤つてこれを餌へば腸を乾しむるものである。太一餘粮は見たところ石のやうで輕く、敲けば直に粉のやうに碎け、また葉子雌黄のやうに幾箇も重り合つてゐるものである。

宗奭曰く、太一餘粮は殼を用ゐるものだ。故に藥に入れるには火に燒き醋に淬すことになつて居る。石中黄は殼の中で乾いたもの、及び細末のものをいひ、石中黄水とは、まだ餘粮に成らぬ黄濁の水をいふのである。

時珍曰く、按ずるに、別錄に『禹餘粮は東海の池澤、及び山島に生じ、太一餘粮は太山の山谷に生じ、石中黄は餘粮の出る處にあるもので、殼中でまだ餘粮に成らぬ黄濁の水だ』といつてある。これに據れば三者は同一物で、池澤に生ずるものが

境山トイヒ、濟水ノ水源ニシテ山西省陽城縣ノ西南ニ在リ、南ハ河南省濟源縣ニ、西ハ垣曲縣界ニ跨ル。太平寰宇記ニ『山高八千丈。廣數百里。三十六洞。小有爲群洞之尊。四十九山。王屋爲衆山之最』トアリ。

(五)踶、本草原始ニハ粗ニ作ル。

(六)箇箇卵卵、本草原始ニハ箇箇有卵ニ作ル。今之ニ從フ。

(七) 鼎州ハ本ノ朗州ノ地ニシテ、今ノ湖南省常德縣治ナリ。

禹餘粮、山谷に生ずるものが太一餘粮、その中の水の黃濁なものが石中黃水、その水の凝結して粉の如くなつたものが餘粮、凝乾して石の如くなつたものが石中黃といふことになる。明明白白議論の餘地はない。然るに註釋者が種種の臆測を加へたために、反つて事實を混亂して愈愈明白を缺くに至つたのだ。晉、宋以來、山谷と池澤と別けてある產地を混同したために太一禹餘粮と一名稱に接續して了ひ、唐の蘇恭はまた、紫、赤色のものが太一、その他の諸色のものが禹餘粮だといひ出した。これ等はいづれも本文の詳明な推究を缺いたためである。寇宗奭、及び醫方に、石殼を用ゐて禹餘粮と稱するに至つては殊に甚しい。『未だ餘粮と成らぬ黃濁の水』とある本文の記載に正しい注意を拂はなかつた結果である。その殼は粗頑なものだ。藥に入れ得べきものではない。庚辛玉冊に『太一餘粮は陰石である。所在にあるもので、片片層疊して深紫色である。その內部にある黃土を石黃と名け、性最も熱である。この餘粮がある處は冬季にも雪が眞先に消える』とある。雲林石譜には『(七)鼎州の祈闍山から出る石はその內部に黃土がある。これを名けて太一餘粮といふ。紫黑色の礧塊たるもので、大小、圓扁一定せず、外部には多くの碎石を粘綴してゐて、

（八）絶力ハ非常ニ力ガ強イ事。

內部の黄土を洗ひ落せば空虛になり、硯の水入などに甚だ面白い』とある。丹房鑑源には『五色の餘粮、及び石中黄はいづれも汞を乾して、金色を出すものだ』とある。

【修治】斅曰く、凡そ修治の方法は、黑豆五合、黄精五合を用ゐ、水二斗で煮て五升を取り、その水を瓷鍋に入れた中へ餘粮四兩を投じて煮る。最初の間はその汁が減るに隨つて注ぎ添へ、汁の全部を添へ盡すまでを度とする。それで藥氣は自然に新米のやうに香しくなる。それを搗き研ること一萬杵にして用ゐるのである。

【氣味】「甘し、平にして毒なし」普曰く、神農、岐伯、雷公は甘し、平なりといひ、李當之は小寒なりといひ、扁鵲は甘し、毒なしといふ。之才曰く、杜仲が使となる。貝母、菖蒲、鐵落を畏る。【主治】「欬逆、上氣、癥瘕、血閉、漏下。邪氣、肢節不利を除く。久しく服すれば寒暑に耐へ、飢ゑず、身を輕くし、千里を飛行し得て神仙となる」（本經）「大飽、（八）絶力で身の重さを治す」（別錄）「脾を益し、臟器を安んずる」（雷斅）「六腑を定め、五臟を鎭める」（弘景）

【發明】時珍曰く、禹餘粮、太一餘粮、石中黄水は、性、味、功用いづれも同

一であるが、これを藥に用ゐる場合にはその精粗に隨つて自ら等差あるは當然である。故に服食家では黃水を上とし、太一が之に次ぎ、禹餘粮が之に次ぐとしてある。列仙傳に『巴戎、赤斧は(九)華山に上つて禹餘粮を餌つた』とあるはこの禹餘粮のことだ。

石中黃子（唐本草）

和名　禹餘粮（つぼいし）の中に溜つてゐる泥水
英譯名　Muddy liquid in the concretionary nodule of clay-iron-stone

釋名　宗奭曰く、子の字は水と書くが妥當である。既に黃濁の水とある、子といふべきわけはない。

集解　恭曰く、これは禹餘粮が殼中でまだ餘粮と成らぬ黃濁の水のことだ。餘粮の出る處にある。頌曰く、今は(一)河中府の中條の山谷だけに出る。その石の狀態が麪劑の如く紫黑色のもので、石皮の內部の黃色のものを中黃といふ。葛洪の抱朴子に『石中黃子は所在にあるが、就中(二)沁水の山に多く、大石の中に在るので、その石は常に潤濕して燥かない。その石を打ち破ると數十層になつてゐて、中に赤黃色のどろどろとして殼中に在る雞子のやうなものがそれである。それをまだ堅ま

(九)華山ハ水部玉井水太華山ノ註ヲ見ヨ。

(一)河中府ハ唐ニ置ク、黃河ト汾河トノ中間、今ノ山西省永濟縣蒲州府ハソノ舊治ナリ。汾河ヲ距テ東南方ニ條山アリ。

(二)沁水ハ卽チ古ノ少水ナリ。山西省沁源縣ノ羊頭山ニ源ヲ

らぬうちに飲まねばならぬ。時過ぎれば次第に堅く凝つて石のやうになり、服するに適しなくなる。一箇の石を破れば多きは一升少きも數合はあるものだ。それを頓服する。機曰く、石中の乾いたもの、及び細末のものは餘粮と名くべきもので石中黄と名くべきではない。本文にある『未成餘粮』の四字を見れば明だ。時珍曰く、餘粮といふのは石中で已に凝つた細粉のものである。石中黄とは堅く凝つて石のやうになつたもの、石中黄水とはまだ凝らぬものをいふ。故に雷斅は『餘粮を用ゐよ、石中黄を用ゐてはならぬ』といつたのだ。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【久しく服すれば、身を輕くし、天年を延べ、老衰せぬ】（唐本）

空青（本經上品）

和名　球顆狀ノ藍銅鑛（鹽基性炭酸銅）
英譯名　Azurite of nodular form

【釋名】**楊梅青**　時珍曰く、空とは質を言ひ、青とは色を言ひ、楊梅とはその姿態の形容である。

【集解】別錄に曰く、空青は(一)益州の山谷、及び(二)越巂の山の銅のある處に生

發シ、東南流シテ岳陽、沁水、陽城、晉城諸縣ヲ經テ河南省武陟縣ニテ黄河ニ合ス。洪ノイフ沁水ノ山ハ沁水縣治下ノ地ヲイフカ、或ハ水源ノ羊頭山ヲイフカ明ナラズ。

(一) 益州ハ金部金ノ

ずる。銅の精が熏じて生ずるものが空青で、その腹中が空である。三月中に採收し、また時期に依らず採ることもある。よく銅、鐵、鉛、錫を化して金にする。

弘景曰く、越嶲は益州の管轄だが、益州の諸郡には一向に無い。恐らく久しく採收を廢したからであらう。今は銅官から出るものが色最も深く鮮だ。(三)始興に産するものは之に及ばない。(四)涼州の(五)高平郡に在る空青の山からも甚だ多く出る。今の空青は鐵の珠のやうに圓く中が充實したもののみで、中の空なるものはなく、いづれも土石の中を鑿つて採取する。而してこれを完全に丹に合成すれば鉛を化して金となし得るもので、諸種の藥中で特に貴重なものである。醫方には存外用ゐられず、多くは繪畫用の顏料などに充てられつつあるは如何にも惜いことである。

恭曰く、銅の出る處には同時に諸種の青を産するが、空青だけは得難いのである。今は(六)蔚州、(七)蘭州、(八)宣州、(九)梓州に産するが、就中宣州のものが最も好く、塊段が細かで時に中の空なものもある。蔚州、蘭州のものは片塊が大きく、色は極めて深いが中の空なものはない。陶氏の所謂、圓く中が充實して鐵の珠のやうだといふは白青のことである。

註ヲ見ヨ。
(二)越嶲ハ寶石ノ註ヲ見ヨ。
(三)始興ハ土部白堊ノ註ヲ見ヨ。
(四)涼州、後漢ニハ洛水水源以西陝西省ノ一部、及ビ甘肅省全部ノ地ヲ含ム。雄黃ノ註參照。
(五)高平郡ハ今ノ甘肅省固原縣ノ地ナリ。
(六)蔚州ハ石麫ノ註ヲ見ヨ。
(七)蘭州ハ漢ノ金城郡ノ地、今ノ甘肅省皐蘭縣ハソノ舊治ナリ。
(八)宣州ハ丹砂ノ註

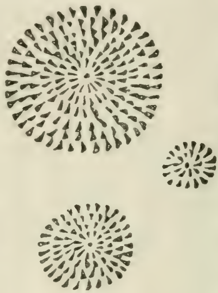
チ見ヨ。

（九）梓州ハ今ノ四川省三臺縣ノ地ナリ。

（一〇）饒州ハ土部白瓷器ノ註チ見ヨ。信州ハ金部金ノ註チ見ヨ。

（一一）治醫ノ醫字、金陵本亦同ジ。然レドモ醫ノ誤トセザレバ解シガタシ。

大明曰く、空青は大なるは雞子ほど、小なるは相思子ほどで青く、厚い茘枝の殼のやうな中にある酸く甜い漿である。藏器曰く、銅の精華であつて、大なるが空綠、それに次ぐが空青である。頌曰く、現に（一〇）饒州、信州にも時に出ることがある。形狀が楊梅のやうだから楊梅青と名けるのだ。その腹中を破つて漿のあるものは絶えて得難いものである。宗奭曰く、眞宗皇帝が嘗て詔して中に水のある空青を採らしめられた時、久しい期間を要して漸く採取した。それは楊梅青といふもので、信州で山を掘つて採つたのだが、兎に角極めて得難いものである。（一一）治醫に極めて功があつて、內部にはやはり水があるものもあり、功用は空青と同樣だが、ただ優劣の差等はある。



〔空　　青〕

時珍曰く、張杲の玉洞要訣に『空青は楊梅に似たもので、赤金の精、甲乙陰靈の氣を受けたものだ。泉の近くに生じ、久しく潤を含むもので、坎から出たばかりに鑽り破れば中に水があるが、久しく經てば乾いて燦燦たる金星のやうな珠になる』

(一二)上饒ハ金部鐵ノ註ヲ見ヨ。
(一三)蜀トハ今ノ四川省ノ地ヲ指ス。石琅玕ノ蜀郡ノ註。爐甘石ノ川蜀ノ註參照。
(一四)北代トハ今ノ山西省ノ北部雁門以北ノ地方ヲ指ス。代赭石、代郡ノ註參照。

とある。庚辛玉冊には『空青は陰石である。(一二)上饒に産する鍾乳に似たものが佳い、紫色を含み光彩のある大片である。これに次ぐものは(一三)蜀の嚴道、及び(一四)北代の山から出る。この物は金坎の中に生じて生生已まざるものなるが故に、青が後には丹となる。拳ほど、及び卵ほどで、中が空で油のやうな水を有つものがある。これは盲を治するに立ろに効がある。銅坑から出るものも佳い。繪具にも使へる。又、楊梅青、石青などいふもあつて、皆同一體のものだが氣に精粗の差があり、物を點化するには曾青を上とし、空青は之に次ぎ、楊梅青はまたそれに次ぐ』といつてある。造化指南には『銅生成の經過は、先づ紫陽の氣を得て綠が生じ、その綠が二百年經て石綠を生じ、その中に始めて銅が生ずるのである。曾、空の二青は石綠がそれぞれの道を得て成るもので、均しく之を鑛と謂ふ。又、二百年を經てその間に青陽の氣を得れば化して鍮石となる』といつてある。これ等の諸説に由つて觀れば、空青には金坑のものと銅坑のものとの二種あるわけで、或は大にして拳や卵ほどのもの、小にして豆粒ほどのもの、或は片、塊と成つたもの、或は楊梅の如きもの等種種あつて、それぞれ精粗の差はあるが、いづれにしても漿のあるものを上級

品とし、中が空ならぬもの、また漿のないものを下級品とする。方家に、藥を銅の器物に塗つてそれに生じた青を刮下し、それを空青と僞るものもあるが、それは全くの銅青だ。石綠の道を得て成立したものではない。

【氣味】【甘く酸し、寒にして毒なし】 別錄に曰く、大寒なり。權曰く、兎絲子を畏る。酒に浸し醋に拌ぜて制すれば變化する。

【主治】【青盲、耳聾、目を明にし、九竅を利し、血脈を通じ、精神を養ひ、肝氣を益す。久しく服すれば、身を輕くし、天年を延べる】（本經）【目赤痛を療じ、膚翳を去り、涙の出るを止め、水道を利し、乳汁を下し、關節を通じ、堅積を破り、物忘れせず、志高く神仙となる】（別錄）【頭風を治し、肝を鎭め、瞳人の破れた者をして再び物を見ることを得せしめる】（甄權）【孔を鑽り明けて漿を取り、多年の青盲、内障、翳膜に點け、精氣を養ふ。その殼で翳を摩す】（大明）【中風の口喎不正には、豆ほどを含んで嚥めば甚だ効がある】（時珍） 范汪の方にある。

【發明】 保昇曰く。空青は木に法るものだから色青くして肝を主る。頌曰く、眼の翳障を治するに最要の藥である。時珍曰く、東方甲乙の方位は人體に於ては肝、

（一五）天德、月德、共

膽の生態を現すもので、その氣の淸なるものは肝血となり、その精英なるものは膽汁となり、外部に開く竅は目である。血は五臟の精華であつて、いづれもこの血が注ぐに因つて靈妙な働を發し、膽汁が充實すれば目が明になり、減ずれば目が昏くなるのである。而して銅なるものも靑陽の氣から生ずるもので、その氣の淸なるものが綠となるは人體に於て肝血となると同じく、その精英なるものが空靑の漿となるは人體に於て膽汁となるに同じ關係である。空靑が目を治する神藥となるは蓋し亦類の相同じき關係から相感應するに外ならぬ。石の中の空なものを三日乃至五日間土中に埋めて置くと、自ら漿水がその中に生ずるものだ。

附方　舊二、新三。【眼の𥉌𥉌として明ならぬもの】空靑少量を一夜の間露に漬して點ける。（千金方）【黑瞖の覆瞳】空靑、礬石を燒いて各一兩、貝子四箇を研細して日毎に點ける。（聖濟錄）【膚瞖昏暗】空靑二錢、蕤仁の皮を去つたもの一兩、片腦三錢を細研して日毎に點ける。【一切の目疾】雀目、赤目、靑盲、內外障瞖、風眼等にこれを用うれば、目の中に涼冷を覺えて効驗がある。楊梅靑を洗淨し、胡黃連を洗ひ各二錢半、槐牙を日出前に人に知らせず採つて靑竹筒に入れ、（一五）天月二德の方

ニ吉神ノ方。

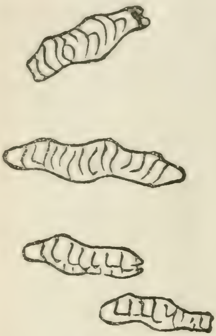
(一)越雋ハ賓石ノ註ヲ見ヨ。

に吊つて雞、犬に見せぬやうにして乾して末にしたもの一錢半、以上三藥の末に龍腦一字を入れて密封して貯へ、就寢時毎に先づ口を嗽いで頭を仰向け、その末一字を兩鼻孔に吹き入れて睡る。隔夜に用ゐる。（聖濟錄）【中風口喎】主治の項を見よ。

曾　青（本經上品）

和名　藍銅鑛（炭酸銅）の層理をなせるもの
學名　Azurite of lamellar form

[釋名] 時珍曰く、曾は音層（ソウ）である。その青は層層として生ずるものだから名けたのである。或はその生成が、中の充實したものから中の空なものになり、更にその空なものから層になるものだから曾青と名けるともいふ。



〔曾　青〕

[集解] 別錄に曰く、曾青は蜀中の山谷、及び(一)越嶲に生ずる。採取に一定の時期はない。よく金、銅を化するものである。普曰く、蜀郡の石山に生ずる銅のある處の陽から出るものだ。青は銅の精である。弘景曰く、舊說に空青と同一の山に生じ、療

體も相似たものだとあるが、現に銅官には一向に曾青は無く、始興だけに出る。形狀は累累として黃連の相綴つたやうなもので、色、理も類似して居る。空青は甚だ得難いものとして高價であるが、仙經には用ゐることが少だ。金を化するに用うる方法は空青と同樣である。恭曰く、(二)蔚州から出るものが好い。(三)鄂州のものはこれに次ぎ、その他の諸州から出るものはいづれも役に立たぬ。

〇〇時珍曰く、これは銅の出る處に年古りて生ずるもので、形は黃連の相綴つたやう、また蚯蚓屎のやうで稜が方である。色は深くして(四)波斯青黛の如く、層層たるそのものを打てば金聲のやうな音を發するものが眞物である。造化指南に『層青は銅礦の中に生ずるもので、石綠の道を得たものであり、肌膚は(五)東方の正色を得たものであるから、大丹を合錬すべく、點化するには三黃と共に用ゐれば(六)齊驅する』とある。衡山記には『この山に層青の岡があつて層青が出る。これは仙藥に合せるものだ』とある

修治　〇斅曰く、凡そこれを用ゐる場合に夾石、及び銅青を用ゐてはならぬ。曾青一兩に對して紫背天葵、甘草、青芝草の三件を(七)乾濕して各一鎰を用ゐ、先づ

(二)蔚州ハ石麪ノ註ヲ見ヨ。
(三)鄂州ハ今ノ湖北省治ナリ。
(四)波斯ハ土部伏龍肝ノ註ヲ見ヨ。
(五)東方ノ正色ハ青。
(六)齊驅トハ人物ノ才ト力ト相等シキノ意ヲイフ語ナレバ、此ニハ化合各成分ノ均整ヲ得ルノ意ナルベシ。
(七)乾濕ハ乾燥スルナリ。

この三藥草を細かに剉んで瓷鍋中に入れ、その中に曾青を置き、東流水二鎰を入れて緩緩と煮ること五晝夜。其間水加減火加減を變へぬやう注意する。かくて曾青を取出して東流水で浴し洗ひ、粉のやうに研乳して用ゐるのである。

氣味　【酸し、小寒にして毒なし】之才曰く、兎絲子を畏る。獨孤滔曰く、曾青は火を任める。膏としたものは汞を結し、丹砂を制し得る。蓋し含金の氣に因つて生じたものだからだ。酒、醋で漬けて煮て用ゐる。葛洪曰く、曾青を鐵に塗れば銅のやうに赤色になる。

主治　【目痛には涙の出るを止め、風痺には關節を利し、九竅を利し、癥堅、積聚を破る。久しく服すれば身體を輕くし、老衰せぬ】(本經)【肝膽を養ひ、寒熱を除き、白蟲を殺し、頭風の腦中寒を療じ、煩渴を止め、不足を補ひ、陰氣を盛にする】(別錄)

發明　時珍曰く、曾青の目を治する對症上の關係は空青と同じである。古方の辟邪太乙神精丹に之を用ゐ、扁鵲には積聚、留飲を治するに層青丸なるものがあつて、いづれも古今錄驗方に記載してある。その藥は甚だ多いが省略する。

【附方】 新三。【斑瘡の目に入つたもの】退かぬには、曾青一錢、丹砂二錢を末にし、蛴螬五箇を搗いた汁で和して點ける。（聖濟錄）【風熱目痛】曾青散——一切の風熱、毒氣の上攻で目赤く、或は爛れ、日光を怕れ羞ぢ、隱澁し眵淚し、或は痒く、或は痛むを治す。曾青四兩、蔓荊子二兩、白薑を炮き、防風と各一兩を末にし、少量づつ鼻中に嗃けば立ろに效果がある。（和劑局方）【耳內の惡瘡】曾青五錢、雄黃七錢半、黃芩二錢五分を末にして傅ける。（衞生寶鑑）

綠青（本經上品）

和名　くじやくせき・孔雀石・岩綠青（鹽基性炭酸銅）
學名　Malachite

【釋名】 石綠（唐本）大綠（綱目）

【集解】 別錄に曰く、綠青は山の陰の穴中に生ずる。色は青白である。弘景曰く、これは畫に用ゐる綠色の繪具で、やはり空青の中に挾り付いて出るものである。今の畫工はこれを碧青と呼び、空青を綠青と呼んで居る。全然反對だ。恭曰く、綠青卽ち扁青である。畫工はこれを石綠と呼ぶ。碧青と呼ぶそのものは白青のことで繪具には用ゐない。頌曰く、舊本は產地の州郡を記載せず、ただ『山の陰の穴中

(一)益州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(二)韶州ハ金部粉錫ノ註ヲ見ヨ。

(三)古江、未詳。廣

に生ず』とあるだけで、空青の條の『(一)益州の山谷、及び越嶲の山の銅のある處に生ずる』の文を承けてあるのだから、この物も山の陰に生ずるといふ意味に解すべきである。現今では(二)韶州、信州に出るものが色が青白で、畫工は綠色を現すにこれを用ゐて居る。現物は極めて大塊のものがあつて、中に青白の美しい花文がある。



〔綠青〕

信州地方では雕刻を施して腰間に帶び、又は器物にし、婦人の裝身具などに作つて居る。藥用には顆塊で乳香の如きものを用ゐるが佳い。

宗奭曰く、その色の黒綠色のものが佳い。

時珍曰く、石綠は陰石であつて、銅坑の中に生ずる。乃ち銅の祖氣であつて、銅生成の過程として紫陽の氣が綠を生じ、綠が久しうして石と成る。その石を石綠といふのだ。銅はその中に生ずるのだから、空青、曾青と同一根源なのである。今一般には大綠と呼んで居る。范成大の桂海志には『石綠は銅の苗であつて廣西、(三)古江の銅の出る處の石中に生ずる。質の石の如きものを石綠

西省太平府土州ノ地ハ古ニ江ト稱ス。或ハソノ地ヲイフカ。一本右江ニ作ル。
(四)原本一斤ノ二字ヲ脱ス。
(五)暗色毎ノ毎字ハ石ノ誤ナルベシ。
(六)齅鼻ハ流涕。

と名ける。脆爛で碎土の如き一種の物は泥緑と名ける、品位は最下等だ』とある。大明會典には『青緑石礦(四)一斤から淘淨して得る緑は十一兩四錢、暗色緑(五)毎礦一斤から淘淨して得る緑は十兩八錢、硇砂一斤から焼いて造る硇砂緑は十五兩五錢とある。

【氣味】時珍曰く、小毒あり。【主治】【氣を益し、洩痢を止め、(六)齅鼻を療ずる】（別錄）【風痰を吐するに甚だ効がある】（蘇頌）

【發明】頌曰く、今醫家で多くこれを用ゐて風痰を吐かせる。その用法は、上色精好のものを揀み、研り篩つて水飛し、再び研つて用ゐる。風痰眩悶の場合には、二三錢を生龍腦三四豆ほどの量と共にむらなく研り、生薄荷汁に酒を合せたもので温調して服し、少時側臥する。口角から涎が流れ出れば癒え、再び嘔吐しない。その功果は他薬よりも速だ。現に一般にこの方でいづれも奏效して居るからここに記錄して置く。宗奭曰く、硇砂と共に上涎を吐する薬とすれば效驗はあるに相違ないが、やはり心を損じ勝ちなものである。時珍曰く、痰が上に在るは吐するがよく、下に在るは利するがよい。それも必ず患者の虚實、強弱と脈とを觀察した上で投薬

すべきである。初虞世が金虎、碧霞の戒は正にこの意味である。金虎丹は風痰を治する藥で、天雄、膩粉の諸藥を用ゐるものだ。

【附方】 新四。【急驚昏迷】人事不省なるには、石綠四兩、輕粉一錢を末にし、薄荷汁を入れた酒で一字を調へ服して吐かす。（入門方）【風痰迷悶】碧霞丹——石綠十兩、烏頭尖、附子尖、蠍梢各七十箇を末にして糊で芡子大の丸にし、一丸づつ薄荷汁を入れた酒半合に化して服すれば、少頃して痰涎を吐出する。（和劑局方）【小兒の疳瘡】腎疳、鼻疳、頭瘡、耳瘡の久しく瘥えぬには、石綠、白芷等分を末にし、先づ瘡を甘草水で洗つて拭淨して傅ければ一日で瘥える。（集玄方）【腋下胡臭】石綠三錢、輕粉一錢を濃醋で調へて塗れば五回で根治する。（集玄方）

扁青（本經上品）

和名 扁青石？
學名 Lapis lazuli ?

【釋名】 石青（綱目）大青 時珍曰く、扁とはその形を以て名としたものだ。

【集解】 別錄に曰く、扁青は（一）朱厓の山谷、（二）武都、（三）朱提に生ずる。採收に一定の時期はない。弘景曰く、朱提は殊匙と發音する、南海中の土地である。仙經、

（一）朱厓ハ後漢ノ縣名、舊治ハ今ノ廣西
[illegible]

俗方ともに都て用ゐない。普曰く、蜀郡に生ずる。恭曰く、これは綠青のことだ。朱厓已南、及び(四)林邑、扶南方面から輸入するものは、形が拳ほどの大塊で色はやはり青い。時に中が空になつて居るものもある。武昌のものは片塊は小さいが色は一段と佳い。(五)簡州、梓州のものは形が扁く片をなし、色は淺い。時珍曰く、蘇恭が綠青のことだといふは誤だ。これは今の石青のことである。畫家が用ゐてその青翠の色が渝らない。俗に大青と呼ぶもので、楚、蜀の諸處にもある。今販賣されて居る石青は天青、大青、西夷、回回青、佛頭青など種種不同であるが、就中回青が最も高價である。本草所載の扁青、層青、碧青、白青はいづれもその類のものなのだ。

氣味　【甘し、平にして毒なし】普曰く、神農、雷公は小寒にして毒なしといふ。

主治　【目痛に日を明にし、折趺、癰腫、金瘡の瘳えざるもの、積聚を破り、毒氣を解し、精神を利す。久しく服すれば身體を輕くし、老衰せぬ】(本經)【寒熱、風痺、及び男子莖中の諸病を去り、精を益す】(別錄)【男子の內絶を治し、生殖を完からしめる】(吳普)【風痰、癲癇を吐し、肝を平にする】(時珍)

中間ノ地ニ在ルモノノ如シ。
(二)武都ハ丹沙ノ註ヲ見ヨ。
(三)朱提ハ漢ノ縣名、今ノ四川省宜賓縣ノ西南ニ在リ。朱提山マタソノ地ニ在リ。
(四)林邑ハ土部伏龍肝及ビ金部金ノ註ヲ見ヨ。扶南ハ金部金及ビ石部玻璃ノ註ヲ見ヨ。
(五)簡州ハ今四川省成都府ニ屬ス、簡陽縣ノ地ナリ。梓州ハ空青ノ註ヲ見ヨ。

【附方】新一。【頑痰の化せざるもの】石青一兩、石綠半兩をいづれも水飛して末にし、麪糊で綠豆大の丸にし、十五丸づつを溫水で服すれば一二盌ほどの痰を吐き去り、人體を損じない。（瑞竹堂方）

白青（本經上品）

和名未詳
學名未詳

【釋名】碧青（唐本）魚目青

【集解】別錄曰く、白青は(一)豫章の山谷に生ずる。採收に一定の時期はない。これで消して作つた銅劍は五兵を辟け得る。弘景曰く、醫方には用ゐず、販賣する者もなく、仙經の三十六水方中に時に用ゐる場合がある。銅劍の法は九元子術の中にある。恭曰く、これは陶氏の所謂『空青は圓くして鐵の珠の如し、色白くして腹が空ならず』といふその物である。研つて見ると色白くして碧のやうなところから碧青ともいふが、繪具には用ゐない。空青のない場合に之を用ゐることもある。魚目青と名けるは魚目の形に似て居るからだ。今は簡州、梓州に出るものが好い。時珍曰く、これは石青の屬のものだ。色の深きを石青、淡きを碧青といふ。現に繪畫

(一)豫章ハ古代ニ淮南、江北ノ一帶ヲ指シタル稱ナレドモ、漢ニハ江南ニ移シテ郡ヲ置ク。卽チ今ノ江西省南昌縣ノ地ハソノ郡治ナリ。

の彩色に用ゐる。范子計然に『白青は(一)弘農、豫章、及び(二)新淦に産し、青色のものが善し』とあり、淮南萬畢術には『白青は鐵を得れば化して銅となる』とある。

【氣味】『甘く酸く鹹し、平にして毒なし』普曰く、神農は甘し、平なりといひ、雷公は鹹し、毒なしといふ。【主治】『目を明にし、九竅を利す。耳聾、心下の邪氣。吐かしめて諸毒、三蟲を殺す。久しく服すれば神明に通じ、身體を輕くする』(本經)

【附錄】**綠膚青**　別錄に曰く、味辛く鹹し、平にして毒なし。蠱毒、及び蛇、菜、肉の諸毒、惡瘡に主效がある。久しく服してはならぬ。爲に瘻となるものである。一名推青、また一名推石といふ。益州の山谷に生ずる。弘景曰く、俗方、仙經共に用ゐない。一般人も識らぬ。

碧石青　別錄に曰く、味甘し、毒なし。目を明にし、精を益し、(四)白瘲を去り、天年を延べる主效がある。

石膽（本經上品）

和名　たんばん・膽礬（硫酸銅）
學名　Calcanthite, Copper vitriol

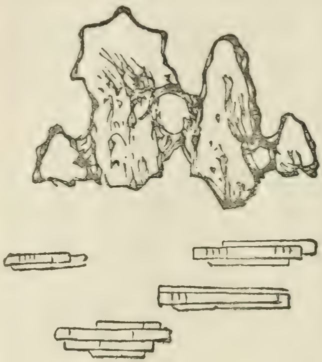
(一) 弘農ハ漢ノ郡名、河南省洛陽以西同省陝縣ニ至リ、又舊南陽府ノ西境及ビ陝西省商縣ノ地ニ亘ル。故城ハ今ノ靈寶縣ノ南ニ在リ。秦ノ函谷關ノ地ナリ。

(二) 新淦ハ今ノ縣名、漢ニ置ク。故城ハ今ノ江西省清江縣ノ東北樟樹鎭ニ在リ。

(四) 瘲ハ癬ト通ズ。

釋名 膽礬（綱目）黑石（本經）畢石（本經）君石（當之）銅勒（吳普）立制石 時珍曰く、膽とは色と味とからの命名である。俗間では礬に似て居るところから膽礬と呼ぶ。

集解 別錄に曰く、石膽は(一)秦州、(二)羌道の山谷の大石の間、或は羌里の句青山に生ずる。二月の庚子、辛丑の日に採收する。その石たるや青色で白い文が多く、破れ易い。形狀は空青に似て居る。よく鐵を化して銅にし、金銀を合成するものである。弘景曰く、仙經には時に用ゐるが俗方には甚だ稀で、この藥は殆ど絕えて了つた。今世間で時に採るものもあるが、その色は青綠で狀態は琉璃の如く、白き文があつて破折し易い。(三)梁州、(四)信都には一向に無い。俗に青色礬をこの物として居るが、全然似も付かぬものである



［膽　石］

(一)當時ノ秦州トハ今ノ陝西省西北部、及ビ甘肅省ノ東部ヲ指スモノノ如シ。水銀、秦州ノ註參照。

(二)漢ニ羌中ト稱ス。今ノ甘肅省甘州、肅州ノ南方及ビ四川省ノ西半部、並ニソノ以西ノ地ヲ指ス。羌里亦羌中ノ地ヲ指ス。句青山、未攷。

(三)梁州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(四)信都ハ漢ノ郡名、今ノ直隷省冀州、深州、冀州等ノ地ニ亘

恭曰く、この物は銅の出る處にあるもので、形は曾青に似て綠を兼ね交へ、味極めて酸く苦く、鐵を磨すれば銅色になるものが眞物である　(五)蒲州虞卿縣の東亭の谷窟、及び(六)薛集の窟中から雞卵ほどの塊のものが出る。これも眞物である。陶弘景が琉璃に似たものといふは絳礬のことで、近來世間でも其說に從つて居る。又、青礬を醋で揉んで作るものがあるが、いづれも贋物だ。

頌曰く、今は(七)信州の鉛山縣だけに有つて、銅坑中から採取して煎錬して作るのである。又、自然生のものがあつて、それは就中珍貴なものだ。いづれも深碧色である。今南方の醫師は多くこれを使用し、その著錄した說に依ると『石膽の最上品は蒲州に出る。大なるは拳ほど、小なるは桃、栗ほどで、擊てば縱橫に崩れて皆疊文を成し、色は青い。久しく風に當れば綠になるが、打破つて中を見ればやはり青い。これに次ぐは(八)上饒、(九)曲江の銅坑の間から出るもので、粒は細かで稜角があり、釵股か米粒ほどのものだ。本草に青礬を醋で揉んで贋物を作るとあるが、全然違ふ。それは粗惡な石膽を取つて消石と合せ、銷溜して作るのである。塊が大きく、色は淺く、渾渾として脈理が無く、擊てば碎けて稜角の無いものである。また氣扶

ル。故城ハ今ノ冀州ノ東北ニ在リ。
(五)蒲州ハ唐ノ河中府治ニシテ今ノ蒲縣ガソノ舊治ナリ。石中黄子河中府ノ註參照。虞卿縣卽チ今ノ山西省虞卿縣ノ地ナリ。
(六)薛集、未詳。
(七)信州鉛山縣ハ金部自然銅ノ註ヲ見ヨ。
(八)上饒ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(九)曲江ハ縣名漢ニ置ク、今ノ廣東省曲江縣ノ西ニ故城在リ。

石といふは石膽牀を削り取つて銷溜して造るもので、製作の際消石中に投じて凝著させたものなのだ』といふ。

時珍曰く、石膽は蒲州の山穴中に出る鴨背色のものを上とする。俗に膽礬といふものだ。羌里から出るものは色が少し黒くして次位にあり、信州のものは又それに次ぐものだ。これ等の物は石に生ずるのだが、煎錬を經たものは大抵は贋物である。また試に火で燒くと汁になるものは必ず贋物だ。鐵、及び銅に塗つて燒くと紅くなるものが眞物である。また銅器に水を盛り、中に少量を入れても青碧とならず、數日を經てそのままのものならば眞物である。玉洞要訣に『石膽は陽石であつて(一〇)嵩嶽、及び蒲州の(一一)中條山に出る。靈石の異氣を稟けたもので、形は(一二)瑟瑟の如く、その性は流通する。精が感じて石に入つたもので、よく五金を化し、無限に變化するものである』とあり、沈括の筆談には『鉛山に苦泉があつて流れて澗となる。その水を酌んで熬れば膽礬となり、熬るに用ゐる釜は久しく經つときは化して銅となる』と記載してある。これ等のものは煎熬して作つた贋物で眞の石膽ではない。藥には入れられぬ。

(一〇)嵩嶽、即チ嵩山。河南省登封縣ニ在リ。
(一一)中條山ハ石中黄子河中府ノ註ヲ見ヨ。
(一二)寶石集ニ云、碧者唐人謂之瑟瑟。

【氣味】【酸く辛し、寒にして毒あり】普曰く、神農は酸し、小寒なりといひ、李當之は大寒なりといひ、桐君は辛し、毒ありといひ、扁鵲は苦し、毒なしといふ。大明曰く、酸く濇し、毒なし。權曰く、大毒あり。之才曰く、水英が使となる。牡桂、菌桂、芫花、辛夷、白微を畏る。

【主治】【目を明にする。目痛、金瘡、諸癇痙、婦人の陰蝕痛、石淋の寒熱、崩中下血、諸種の邪毒氣。生殖を完からしめる。錬つて服餌すれば老衰せず。久しく服すれば壽命を増し、神仙となる】(本經)【癥積、欬逆、上氣、及び(一三)鼠瘻、惡瘡を散ず】(別錄)【蟲牙、鼻内の息肉を治す】(大明)【帶下赤白、(一四)面黄、婦人の(一五)臟急】(蘇恭)【風痰を吐する藥に入れて最も速效がある】(蘇頌)

【發明】時珍曰く、石膽は氣は寒、味は酸、辛で少陽、膽の經に入り、その性は收斂し上行する。故によく風熱痰涎を涌し、風、木の相火を發散し、また能く咽喉、口齒の瘡毒を治する奇功がある。周密の齊東野語に『密が(一六)南浦を旅行した際、ある老醫から喉痺で忽ちに瀕死の者を治する方を授つた。それは眞鴨觜膽礬末を醋で調へて灌ぐので、大いに數升の膠痰を吐出して直に瘥える。(一七)臨江の一老兵

(一三)鼠瘻ハ瘰癧。
(一四)面黄ハ萎黄病ノコトナラン。
(一五)臟急ハ子宮痙攣。
(一六)南浦ハ今ノ江西省南昌縣ノ西南ノ地ナリ。又、今ノ湖北省武昌縣ノ南三支里ニ南浦水アレドモ此

ニイフ南浦ニハ非ズ。
(一七)宋ノ臨江軍、明ノ臨江府ハ今ノ江西省清江縣ソノ舊治ナリ。
(一八)脾鬼、一本脾塊。
(一九)胡餅ハ胡麻ノ入リタル餅。名義考ニ據レバ今ノ燒餅ナリトイフ。

の妻がこの病で三日の間固形物も通らなかつたが、この藥を法の通りにして用ゐると直に癒えた。屢々實驗して奏效確實なる神方だ』とある。又、周必大の陰德錄には『蠱脹、及び水腫を治する祕方に、蒲州、信州產の明亮で翠琉璃の如く鴨觜に似た膽礬を米醋で煮て、君臣の藥を用ゐて服する方がある。鐵砂、鐵蛾に勝るものだ』とある。蓋し膽礬は銅の精液であつて、辛、酸の味が肝、膽に入つて(一八)脾鬼を制するがためである。安城の魏淸臣の腫科黑丸子は石膽を用ゐたもので、腫を消するに甚だ妙だといはれたが今は傳らない

【附方】舊五、新十五。【老人、小兒の風痰】膽礬末一錢——小兒には一字——を溫醋湯で調へて飮下し、涎を吐出すれば淸快になる。(譚氏小兒方)【婦人の頭運】天地の轉動するやうに覺ゆるをば心眩と名ける、血風ではない。膽子礬一兩を細研し、(一九)胡餅を用ゐて共に一箇の齊子とし一指の厚さに平く押し、篦子で撥して骰子の大さに切り目を入れ、切れ目の斷ち離れぬやうにして瓦の上で焙じ乾し、その一骰子づつを末にして燈心竹茹湯で調へて服す。(許學士本事方)【喉痺喉風】二聖散——鴨觜膽礬二錢半、白殭蠶を炒つて五錢を研り、少量づつを吹き込んで涎を吐く。(濟生

方）【齒痛、及び齒落】研細した石膽を人乳、石膏に和し、一日三四回づつ擦れば痛が止り、また齒を復生する。百日後復舊したならば使用を止める。その間毎日新汲水で口を漱ぎ淨めねばならぬ。（王燾外臺祕要）【口舌に生じた瘡】あらゆる手當で瘥えぬには、膽礬半兩を銀鍋に入れて火で赤く煆き、一夜間毒を出して細研し、少量づつ二三回傅けて酸涎水を吐出すれば瘥える。（勝金方）【(二〇)走馬牙疳】北棗一箇を核を取去つて鴨觜膽礬を入れ、紙に包んで赤く煆き、火毒を出して研末して傅け、涎を追ふ。（楊起簡便方）【小兒の齒疳】鴨觜膽礬一錢を匙上で紅く煆き、麝香少量を入れてむらなく研り、齦上に傅ければ立ろに效がある。（活幼口議）【小兒の(二一)鼻疳】蝕爛するには、膽礬を烟が盡くるまで燒いて研末し、一二日摻れば癒える。（集簡方）【風眼赤爛】膽礬三錢を燒いて研り、湯に泡けて日毎に洗ふ。（明目經驗方）【蟲類の耳に入りたるもの】膽礬末を醋で和して灌げば出る（千金方）【風犬の咬毒】膽礬末を傅ければ立ろに癒える。（濟急方）【一切の諸毒】膽子礬末を糯米糊で雞頭子大の丸にし、朱砂の衣をかけて尚ほ朱砂で養ひ、冷水で一丸を溶して服すれば立ろに癒える。（勝金方）【(二二)挑生蠱毒】胸口の痛むものである。膽礬二錢を茶淸に泡けて服すれば吐出す

(二〇)走馬牙疳ハ口腔壞疽。

(二一)鼻疳ハ齊膿症ナラン。

(二二)醫學入門云、嶺

南有挑生者、乃挑毒於魚肉菜菓酒醋之中、以害人。

る。(嶺南衛生方)【腋下胡臭】膽礬を半生半熟にし、膩粉少量を入れて末にし、自然薑汁で調へて塗れば十分に熱痛して止む。數日に一回用ゐ、癒ゆるを度とする。(黎居士簡易方)【赤白癜風】膽礬、牡蠣粉各半兩を生で研り、醋で調へて塗擦する。(聖濟錄)【甲疽腫痛】石膽一兩を烟の盡くるまで燒き、研末して傅ける。四五回を過ぎずして瘥える。(梅師方)【痔瘡熱腫】鴨觜靑膽礬を煆いて研り、蜜水で調へて傅ければ消脫する。(直指方)【腫毒の破れぬもの】膽礬、雀屎各少量を傅ける。(直指方)【楊梅毒瘡】膽礬末を醋で調へて搽る。痛み甚しきには、乳香、沒藥を加へる。惡水を出して一二回で乾く。○又別方では、膽礬、白礬、水銀各三錢半を星の見えぬまで研り、香油、唾液各少量を入れてよく和し、帳內に居て兩足心にその藥を塗り、兩手心でその足心を摩擦し、良久して再び塗り再び摩擦し、藥全部を用ゐ盡してから橫臥して汗を出す。或は大便から垢穢を去り、口から穢涎を出せば奏效の驗である。一回分の量は、强壯者には四錢を用ゐ、虛弱者には二錢を用ゐ、三日連用して同時に疎風散を服し幷に澡洗する。(劉氏經驗方)

礜石（本經下品）

和名　硫砒鐵鑛・毒砂・白どうきん
學名　Arsenopyrite, Mispickel

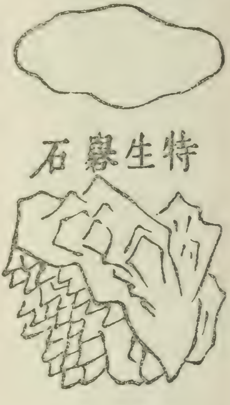
【釋名】**白礜石**　**太白石**（別錄）**立制石**（本經）**青介石**　**固羊石**（本經）**石鹽**（別錄）**澤乳**（呉普）**鼠鄕**（呉普）時珍曰く、礜の意義は判らない。許氏の說文には『礜は毒石なり』とあり、西山經には『(一)皐塗の山に白石がある。名を白礜といひ、鼠を毒殺するものだ』とあり、郭璞の注に『鼠が食へば死し、蠶が食へば肥える』とある。鼠鄕といつた意味はこれから出たものであらう。

【集解】別錄に曰く、礜石は(二)漢中の山谷、及び(三)少室に生ずる。採收に一定の時期はない。當之曰く、或は少室に生じ、或は(四)魏興に生ずる。十二月に採收する。弘景曰く、今は蜀、漢にも有るが、好きものは(五)南康の南野溪、及び(六)彭城の界中、(七)汶陽縣の南塹から出る。又、(八)湖東、(九)新寧、及び(一〇)零陵にも皆白礜石がある。よく金を柔にするものだ。黄泥で包み炭火で一晝夜燒けば碎けて用ゐられるやうになる(一一)丹方、及び(一二)黄白術に多く之を用ゐる。恭曰く、この石はよく火を拒むもので、久しく燒いてもただ解するだけでその堅質は脫しない。今の商人

(一)皐塗之山、未攷。
(二)秦ノ漢中郡ハ今ノ陝西ノ南部漢中、興安及ビ湖北ノ鄖陽諸府ニ亘ル。
(三)少室ハ嵩山ノ少室山。
(四)魏興ハ今ノ陝西省商州山陽縣ノ西北ノ地ナリ。
(五)宋ノ南康軍ハ江西ニ屬ス彭蠡湖ノ西北岸、今ノ星子縣ハソノ舊治ナリ。

（六）彭城ハ石膏ノ註ヲ見ヨ。
（七）汝陽縣ハ今ノ山東省寧陽縣ノ北ニ故城アリ。
（八）湖東、未詳。或ハ湘東ノ誤字カ、湘東トハ湖南省湘江ノ東岸一帶ヲ指ス。
（九）新寧ハ今ノ四川省新寧縣ノ東ニ西魏、唐ノ故城アリ。
（一〇）零陵ハ雄黄ノ註ヲ見ヨ。
（一一）丹方ハ丹藥ヲ煉成スル方。
（一二）黄白術ハ道士丹業ヲ燒煉シ、黄金白銀ヲ化成スル、之ヲ黄白ノ術ト云フ。
（一三）漢川ハ漢中、川蜀ヲイフ。
（一四）武當ハ漢ノ縣名、今ノ湖北省均縣ノ北ニ故城アリ。故城ノ南一百支里ニ武當山アリ。

は潔白な理石をこの物として瞞着するが、焼けば灰になつて了ふ。現在では（一三）漢、川、（一四）武當の西遂坂にある礜石谷といふ處が眞物の産地である。少室には粒で細理のものがあるが、漢中のものには及ばない。頌曰く、今は（一五）



〔礜　石〕

文州、（一六）階州にもある。時珍曰く、詳細は特生礜石の條を見よ。

【氣味】【辛し、大熱にして毒あり】別錄に曰く、甘し、生のものは溫、熟せるものは熱なり。普く曰、神農、岐伯は辛し、毒ありといひ、桐君、黄帝は甘し、毒ありといふ。權曰く、甘し、小毒あり。鉛丹が使となる。羊血を惡む。湯藥には入れない。之才曰く、火を得て良し。棘針が使となる　馬目毒公、鶩屎、虎掌、細辛を惡み、水を畏る。

【主治】【寒熱、鼠瘻の蝕するもの、死肌、風痺、腹中の堅癖、邪氣】（本經）【熱を除き、目を明にし、氣を下し、膈中の熱を除き、消渇を止め、肝氣を益し、積

(一五)文州、一本ニ梁州トアリ。文州ハ今ノ甘肅省階州ノ文縣。梁州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(一六)階州ハ玉ノ註ヲ見ヨ。

聚を破る。痼冷腹痛。鼻中の息肉を去る。久しく服すれば筋攣を發す。火で百日錬つて一刀圭を服するものである。錬らずして服すれば人、及び百獸を殺す」(別錄)「胸膈の間の積氣を除き、冷濕風痺の瘙痒積年のものを去る」(甄權)

【發明】弘景曰く、常に生礜石を取つて水中に納れて置けば水が氷らないといふ。この說の通りならば生のものの性も大熱だ。張仲景は『一生で用ゐれば人の心肝を破る』と言つて居る。恭曰く、この藥は積冷の病を直接驅除するに良いもので、他の物をこれに代用しては治療に效果がないといふは正にその(弘景の大熱の說を指す)ためである。宗奭曰く、久積、及び久病の腹冷を治するに功はあるが、同時に大いに警戒を要する。その毒は輕輕に試むべきものでない。

時珍曰く、礜石の性、氣は砒石と相近い。蓋しその類のものなのだ。古方に礜石、礬石は常に相混淆して記されて居るが、蓋しこの二字の形が似て居るための寫し違ひなのだ。しかし字は誤寫にしても、礬石は性寒で無毒だが礜石は性熱で有毒なものだからよく審なる注意を要する。陸農師は『礜石の力は鍾乳に十倍する』といつて居る。按ずるに、洪容齋の隨筆に『王子敬の靜息帖に「礜石は餘程疑問のものだ。

(一七)荊州ハ石炭ノ註ヲ見ヨ。
(一八)鄣山、未詳。
(一九)洛水ハ陝西省西定縣東南ノ白於山ニ源ヲ發シ、渭水ヲ合セテ黃河ニ入ル。又一ノ洛水ハ陝西省雒南縣西北ノ冢嶺山ニ源ヲ發シ、澗、瀍、伊ノ諸水ヲ合セテ黃河ニ入ル。

凡そ好んで散を服むものは大抵癰を發する」とある。散とは寒食散のことだ。古人は多く服んだものだが、その中にある礜石は性熱で有毒だから、それで餘程疑問だといふのである。後漢の劉表が(一七)荊州にゐた頃、王粲と共に(一八)鄣山に登つたことがある。その時全面に草の生えぬ一箇の岡を見て、粲は「これは古冢に相違ない、葬られた人が生存中生礜石を服したので。その熱が外に發散せずに內に籠るために草木が焦滅するのだ」といつた。表が發いて見ると、果して冢一面に礜石が滿ちてゐたといふ。又、現に(一九)洛水の氷らぬのも、河床にやはり礜石があるからだ。世に溫洛といふはそれである。この石を水甕に入れて置けば水がやはり氷らない。文鸛が卵を孵化する時はこの石を巢に入れて溫氣を助けるといふ。かくの如き性の物だから服するといふは問題であらう。余(洪邁)の兄文安公は金陵を管領して居たが、秋暑の頃食欲が減じたので、醫師の湯三益は礜石丸を服用させた。服用して見ると食欲が進むやうになつたので、大いに信用して服んでゐると、十月を過ぎてから毒が發して一斗ほどの衄血を出し、後日數〻發して止まず、遂には精液枯竭に陷つて死亡した』と書いてある。時珍竊に謂ふに、洪文安の病は必ずしも礜石の毒發のた

めとも言はれない。その際健啖になつたのを好いことにして厚美の食を貪り、房勞を放縱にして攝生を顧みなかつたのが原因で、遂に精が竭きて死んだのだ。一體食が減じたので石藥を服したのだから、食が進めば目的の病が去つたのだ。服藥は當然停止すべきものである。然るに藥さへ服めばその力が續くものと妄信し、藥のみを的にして無分別な放肆を試みては堪らない。果して藥の罪と言へやうか。

【附方】新一。【風冷脚氣】白礜石を煆いて二斤を酒三斗に三日間漬け、少しづつ飲む。（肘後方）

特生礜石（別錄下品）

和名　硫砒鐵鑛・毒砂の特生するもの
英譯名　Arsenopyrite of isolate occurrence

【釋名】蒼礜石　蒼石（別錄）鼠毒　恭曰く、特生礜石、一名蒼礜石といふ。梁州の礜石にも靑いものがある。漢中地方ではこれも殺鼠劑に用ゐる。方藥には用ゐない。宗奭曰く、礜石、特生礜石は同一物で、ただ特生すると特生せざるとの相異だけである。所謂特生とは他の石に附着せずして單獨に生ずるといふことである。今は用ゐることが甚だ少い。時珍曰く、礜石に蒼、白の二種あつて、蒼いものは多

く特生する。故に此に一名蒼礜石といつたのだ。別錄には蒼石を重出してあるが、治病上の效用もすべて同一である。本書は一條に併記した。

集解 別錄に曰く、特生礜石、一名蒼礜石。西域に生ずる。採取に一定の時期はない。又曰く、蒼石は西域に生ずる。採取に一定の時期はない。弘景曰く、舊說に(一)鸛の巣の中のものが佳いといふ。鸛は常に水に棲み身體が冷えるので、卵を抱くのにこの石を取つて熱せしめるといふのであるが、今は得るわけに行かぬ。ただ漢中に出るもので外形が紫赤色で內部が霜のやうに白く、中央が臼のやうになつた齒の如き形のものが佳い。又、(二)荊州新城郡の房陵縣から出る縹色、白色、赤色のものも好い。やはり先づ黃土で包んで一日間燒き、また斧孔へ納れても燒く。現に諸種の玉壺丸に合せるが、仙經には故に特生とは言はず、ただ白礜石としてあるのみである。

恭曰く、陶弘景の說に、齒のやうな臼形のものといふが正にそれである。今は(三)梁州の(四)北馬道に產し、(五)成澗中にもある。形塊は白礜石より小いが肌粒の大さは數倍して小豆ほどある。白礜石の粒は粟米のやうな細かいものだ。今の房陵、漢川、

(一)鸛、金陵本ニ鵲トアレドモ鵲ノ誤タルコト明ナリ。鸛ニ改ム。

(二)新城郡ハ三國魏ニ置キ、隋ニ房陵郡ニ改ム。今ノ湖北省房縣ソノ治ナリ。

(三)唐ノ梁州ハ興元府治、南鄭卽チ漢中ノ地、今ノ陝西省漢

中道南鄕縣ナリ。
(四)南鄕ノ西襄水ヲ距テタル襄城縣ノ西ニ在ル古ノ牛頭山ハ馬道嶺トモイフ。北馬道ハソノ北方ニ通ズル一坂路ヲ指スモノナラン。
(五)成澗モ亦牛頭山中ノ一澗谷ノ名稱カ未詳。
(六)均州ハ長石ノ註ヲ見ヨ。
(七)荊州ハ石炭ノ註ヲ見ヨ。

(六)均州、(七)荊州に白礜と同一箇所にある青色のものがそれである。

○○宗奭曰く、博物志に『鸛が卵を抱くには礜石を巣に入れて暖氣を助けるもので、方藥にはこの石を得て用うることが正しいのだ』とあり、陶氏がそれを引用して特生礜石の下に註したに見れば、二石が元來同一物なることは明である。しかし屢々鸛の巣を檢べて見るにこの石は入つてない。況や礜石なるものがさやうに諸處に有りさうなわけもあるまい。若し鸛が水中で冷えるからこの石を取るといふならば、鸕鷀などの類の水に棲む鳥も皆この石を必要としさうなものだが、やはり皆自然に孵化して繁殖する。かかる說は俗士の言に過ぎないのだ。未だ嘗てその事實を究めその理致を窮めた說ではない。

○○時珍曰く、礜石には、白礜石、蒼礜石、紫礜石、紅皮礜石、桃花礜石、金星礜石、銀星礜石、特生礜石などの數種類あるが、すべて同一物である。ただ形態色彩の差異に依つて區別を付けたものであつて、性は皆熱毒である、いづれも鼠を殺し、汞を制するものだ。が、藥用には蒼、白の二種のみである。これ等諸種の礜石のある山は草木が生えず霜雪が積らない。また水中に在れば水が凍て冰らず、或は溫泉が

ある。その氣の熱なることは以て知るべきである。庚辛玉册には『礜は陽石である。山谷、水中に生ずるもので、濯ひ取つて見ると礬に似て中に横に截れた文理のあるものが佳い。伏火すれば砂汞を制する。その形狀は頗る方解石に似て居るが、水に投じて水の氷らぬものが眞物である。金穴中から出るものは握雪礜石と名ける』とある。

氣味 【甘し、溫にして毒あり】之才曰く、火で煉るがよし。水を畏る。

主治 【目を明にし、耳を利す。腹内の絶寒。堅結、及び鼠瘻を破り、あらゆる蟲、惡獸を殺す。久しく服すれば天年を延べる】(別錄)【蒼石は寒熱、下氣、瘻蝕に主效があり、禽獸を殺す】(別錄)

發明 時珍曰く、別錄に『礜石は久しく服すれば筋攣を發す。特生礜石は久しく服すれば天年を延べる』といひ、丹書にも『礜石の化した水は能く水銀を伏す。煉つて長生の藥に入れる』などといつてあるが、これ等はいづれも方士の謬說だ。砒石や汞の場合でもやはり服すれば長生するなどいふと同一筆法で、死んでも惜くない者の話である。

握雪礜石（唐本草）

和名　黝銅鑛？
學名　Tetrahedrite, Fahl ore?

集解

恭曰く、握雪礜石は(一)徐州の宋里山から出る。土中一丈餘の深さに入つて爛土石の間から取るもので、細かに散つた麪のやうな黃白色のものである、その地方人は、握雪礜石、一名化公石、一名石腦と呼び、服すれば長生すると言つて居る。

時珍曰く、謹んで按ずるに、獨孤滔の丹房鑑源に『握雪礜石は曲灘澤に出る。盛寒の時に石上に生ずる髓であつて、一分を採つて用ゐれば汞十兩を結し得る』とある。又按ずるに、南宮從の岣嶁神書に『石液、卽ち丹礬の脂液であつて、この石は(二)襄陽の曲灘澤中から出る。或は山に在り、或は水に在り、色白くして粗糯なるものだ。冬季になるとその上に脂液が出るが、それは朝は見えるが日中には見えなくなるものだから、日出前に銅刀で刮取り、器に入れて火で全體を赤く煆き、取り出して楮汁で丸にするものである。その液の沾ふ處は鐵のやうな色のもので、液一銖で水銀四兩を制し得る。器中に入れて火にかければ立ろに乾くものだ。但しこの液も

(一)徐州ハ慈石ノ註ヲ見ヨ。宋里山、未詳。

(二)襄陽ハ三國ノ郡名、湖北省襄陽縣ハソノ舊治ナリ。曲灘澤未詳。

多くは得られぬ。それは神意がこれを惜むのだ。採るには必ず白雞、淸酒を用ゐて神を祭らねばならぬ。この石は華山、嵩山にいづれも出るが、脂液のあるは曲灘のものに限る』とある、又、熊太古の冀越集には『丹山礬十兩は汞十兩を乾し得る。これは格物の精に入り天地の祕を發するものだ』とある。以上三書の引說に據れば、握雪礜石といふは石の液であつて、土中の石腦ではないのである。蘇恭の言ふ握雪礜石は石腦を指すのであつて、その說は別錄、及び陶弘景の石腦の說明と符合し、握雪礜石の註解には更に該當しない。又諸書を按ずるに、或は礜石と書き、或は礬石と書き、孰れが正しいか判斷に苦むが、古書には往往この二字を混淆してある。文字に拘泥せず理論上から推究するに、ここに言ふ物は礬石をいふらしい。何となれば礜石は有毒、礬石は無毒だからである。

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【痼冷積聚。身體を輕くし、天年を延べる。多く食すれば人をして熱せしめる】（唐本）【大風瘡を治す】（時珍）

砒石（宋開寶）

和名　砒・自然砒
學名　Nutive Arsenic

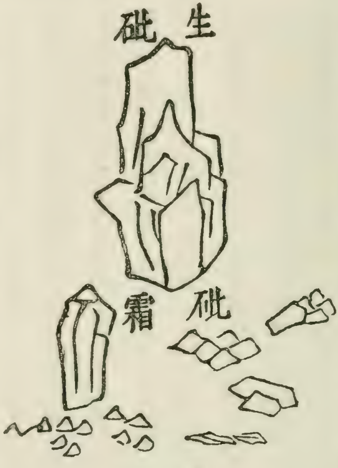
(一)信州ハ土部墨ノ註ヲ見ヨ。

【釋名】**信石**　**人言**（綱目）生なるをば砒黄と名け、鍊りたるをば砒霜と名ける。時珍曰く、砒はその性猛烈なること貔の如しの意味で名けたものだ。(一)信州だけに出るので一般に信石と呼び、又その信の字を隱語にして人言といふ。

【集解】頌曰く、砒霜はその產地の郡縣が著錄されてない。今はやはり銅山の附近にあつて、信州から出る佳いものにはその塊の甚だ大なるものがあり、色は鵞子黄のやうで、明澈で雜物がない。この類のものは本場でも實は得難いもので、眞物の一兩の大塊があるといへば、世人は非常に珍重して千金をも惜まず手に入れることを競爭する。古の服食方の中にも、これを用ゐるには必ず此の類の物を得て藥に入れよと記載してある。藥種商の所持品は細屑のやうな片で土石の交つたもののみだ、藥に入れて服しては非常な害をなす。

承曰く、信州の玉山に砒井といふがあつて、官憲の禁制が甚だ嚴重である。生で石を交へぬものは色が赤くして雄黄よりも甚しく、冷水に磨つたものは熱毒を解し、火に近ければ人を殺す。所謂金よりも高價のものとは此の物である。現に藥種商が販賣するものは、山中から砂石の交つたものを取つて燒烟し、飛して霜としたもの

である。これは碎屑で芒刺があり、火に傷むこと多きもので、塊が大きくて微黄である。所謂鵞子色の如くして明澈なるものとは此の物である。古方ではいづれも藥に入れない。ただ燒煉丹石家だけが用ゐる。近來一般に多く瘧を治するに用ゐるが、



〔砒石〕

それは瘧の原因が暑に傷むからであり、この物の生なものはよく熱毒を解するものだからである。當今の俗醫は、その理を究めずして燒いて作つた霜を服ませるが、必ず大いに吐下を發する。幸に平安を得る者もあるが、結局そのために身を損はれることが多いのである。大いに警戒を要することだ。そもそも砒石を霜に燒く時には、取扱ふ者は十餘丈以外の距離の風上に毒を避けねばならぬ。風下の近くは草木までも皆枯死するものだ。又、これを飯に和して鼠に食はせて毒殺するが、またその死

鼠を犬猫が食つても皆毒死する。その毒は射罔よりも遙に劇烈なものである。(二)衡山から出る一種は、信州のものに比すれば力がやや劣る。

宗奭曰く、現に信州で坑井を掘下げて採取するのだが、その坑は平時は封鎖して置く。中には濁綠の水が溜るので、先づその水を汲み盡してから中に降つて生砒を鑿取るのだ。これを砒黃といふ。色は牛肉のやうで、或は淡白の筋の有るのもあり、石かといふに石でもなく、土かといふに土でもない。酒に磨つて飮めば積氣を治するが、少しでも火があれば毒があるから輕卒に服してはならない。用うるに適當ならしむる法は、生砒を火の上へ置いて上へ器を覆ふて置けば、上飛する烟が器に著いて凝結し、纍然として乳首のやうに下垂する。藥に入れるには、それが勝れて居るので、下垂せず平に短いものは之れに次ぎ、大塊のものは下等、細屑の如き片のものは極下等だ。

時珍曰く、これは乃ち錫の苗である。故に新しき錫器に日久しく盛つた酒はよく人を殺すといふは、砒毒があるためである。生砒黃は赤色のものを良とし、熟砒霜は白色のものを良とする。

(二)衡山ハ即チ南嶽衡山、五嶽ノ一ナリ。湖南省衡山縣ノ西北三十支里ニ在リ。山ニ七十二峯アッテ舊長沙衡州二府境ニ跨ル。宇内ノ名山ナリ。

(三)木律ハ胡桐涙ノ集解中ニ見ユ。

修治　斅曰く、凡そこれを使用するには、小瓷瓶に盛り入れてから、紫背天葵、石龍芮二味を入れ、午前十時から午後四時まで火で煆き、それを甘草水に午後四時から午後十二時まで浸して取り出し、拭ひ乾し瓶に入れて再び煆き、別に三萬匝研つて用ゐる。時珍曰く、本草家は皆『生砒は輕輕しく火を見すれば毒が甚しくなる』といふが、雷氏の修治法では『火を用ゐて煆く』とある。今一般に多く飛錬したものを使用するのは、蓋しいづれも速效を求むるに急にして結果の毒をば怖れぬのであらうが、然らば何故に思ひ切り生の勝れた方を用ゐぬであらうか。

氣味　【苦く酸し、暖にして毒あり】時珍曰く、辛く酸し、大熱にして大毒あり。大明曰く、綠豆、冷水を畏る。もし藥に入れるならば醋で煮て毒を殺して用ゐる。土宿眞君曰く、砒石は草を用ゐて制錬すれば金花を出して汁となり、銅を化し、汞を乾す。靑鹽、鶴頂草、消石、蒜、水蓼、常山、益母、獨帚、(三)木律、菖蒲、三角酸、鵞不食草、菠薐、萵苣はいづれもよく砒を伏す。

主治　【砒黄は、瘧疾腎氣を治す。之を帶ぶれば蚤、虱を辟ける】(大明)　【冷水で磨つて服すれば熱毒を解し、痰壅を治す】(陳承)　【磨つて服すれば癖、積氣を治す】

（四）齁ハ鼻聲。

（宗奭）(四)【齁喘、積痢を除き、肉を爛し、瘀を蝕し、瘰癧を腐す】（時珍）【砒霜は、諸瘧、風痰の胸膈に在るを療ず。吐藥となし得る。久しく服してはならぬ、健康を傷める】（開寶）【婦人の血氣衝心の痛を治し、胎を落す】（大明）【癰疽の敗肉を蝕し、痔を枯し、蟲を殺し、人、及び禽獸を殺す】（時珍）

發明　宗奭曰く、砒霜は瘧患者に用ゐる。もし劑を過せば吐、瀉同時に發るが、その場合は必ず綠豆の煎汁と冷水とを飲む。徐純曰く、瘧丹には多く砒霜の大毒の藥を用ゐる。本草に『主として諸瘧、風痰の胸膈にあるには吐藥となすべし』といふがそれである。蓋し性至烈にして大いに痰を燥するものだからだ。しかし痰を燥する功はあるに相違ないが、大いに胃氣を傷るものだから脾胃の虚する者は絶對に戒めねばならぬ。

時珍曰く、砒は大熱、大毒の藥であつて、就中砒霜の毒は激烈である。鼠や雀は極少量を食へば死ぬ。その死んだ鼠や雀を食つた猫犬までも危い。人間は一錢ほど服めばやはり死ぬ。鉤吻、射罔の毒力と雖もこの激烈さには敵はぬのである。然るに宋時代の人が本草に著錄して、その毒に關して十分な說明を加へなかつたのは何

事であらう。これも古代には礜石の一種としてあつたもので、若し同時に酒や燒酒を服めば腸胃を腐爛して頃刻に人を殺す。綠豆や冷水を飲んだ位で到底解し得るものではない。現に酒を瓶詰にする際、砒烟で瓶を熏じて酒の腐敗を防ぐものが往往あるが、營利本位も此に至つては誠に殘忍と言はねばならぬ。知らずに飲むものは中毒しても一切酒の咎だと思つて居るのだ。

この物は煎藥や水藥には入れない。入れるのはただ丹、丸だけである。凡そ痰瘧、及び齁喘に用ゐれば確に病を刼して立地の效はあるが、しかしその場合は冷水で呑むべきもので、釀造、調理した物は飲んではならぬ。靜臥して一日若くは一夜經つても吐かぬときは、何か微少の物で引促して吐かねばならぬ。この物の燥烈純熱の性は燒酒や焰消の氣と同じきものだ。寒疾、濕痰が刼されて怫鬱の頓に開くのはそのためである。現に烟火製造に少量を用ゐればその爆音が一層強大になる。これを見ても如何に性の急烈なるかが判るであらう。この藥はやはり粗食淸素で生活する山野藜藿の人だけに用うべきもので、世上の贅澤な美酒、膏粱を嗜む者には用ゐられない。病もまた再發する。それは口慾を愼むことが出來ないからだ。

凡そ頭瘡、及び諸瘡の血を見る者には用ゐてはならぬものだ。その毒が經に入れば必ず人を殺すものである。李樓奇方に『ある婦人は心痛を病んで數年癒えなかつたが、一醫師が人言半分、茶末一分を用ゐ白湯で調へて服ませると、瘀血一塊を吐いて癒えた』とあるが、これは日華子大明の『婦人の血氣心痛を治す』といふ意味に適合したものと見える。

附方　舊五、新十。【中風痰壅】四肢自由ならず、昏憒して醉へる如きには、砒霜綠豆ほどを研り、新汲水で調へて少量を服し、熱水を飲んで大いに吐すれば癒える。なほ吐かぬときは再服する。（聖惠方）【寒熱(五)痁疾】孫貞宗の祕寶方では、信砒二兩を粉に研り、寒水石三兩を別に末に搗き、一箇の(六)生鐵銚を用ゐて先づ銚の中へ寒水石末を鋪き、その上へ砒を鋪き、更にその上を寒水石末で蓋ひ、その上から厚い盞で覆ひ、醋糊と紙條で十餘重に密封し、それを炭火一斤で煆いて紙條が黒くなるを見計つて取出し、冷えてから盞の內側に附著した砒末を刮り取つて(七)乳細し、粟米飯で綠豆大の丸にして辰砂を衣にかけ、三四丸づつ——小兒は一二丸——を發作の日の早朝に臘茶淸で服す。その日一日間は熱物を食つてはならぬ。男子の病に

(五) 痁ハ瘧疾ナリ。

(六) 生鐵銚、新シキ鐵銚。

(七) 乳細ハ乳鉢ニテ研ク。

は婦人が薬を口に入れてやり、婦人の病には男子が薬を口に入れてやる。○本事方では、人言一錢、綠豆末一兩を末にし、無根水で綠豆大の丸にして黄丹を衣にかけて陰乾し、發作の日の夜五更に冷水で五七丸を服す。○衞生寶鑑では、一剪金――人言を醋で煮て硫黄、綠豆と等分を末にし、豆一粒ほどづつを紅絹に包んで絲で堺して括り留め、その一粒づつを剪り取つて新汲水で空心に呑下す。治瘧の聖薬である。○醫壘元戎の九轉靈砂丹――砒霜、黄丹、紫河車各一錢を末にし、雄黒豆一百粒を水に一夜浸して研泥で和して梧子大、綠豆大、黍米大三様の丸にし、一二十丸づつを發作の日の五更に東に向つて無根水で服す。紫河車、綠豆、黒豆はいづれも砒毒を解するためである。○本草權度の不二散――砒一錢、麪二兩をむらなく和し、香油一斤で黄色に煎じて油を絞り去り、茶三兩を入れて末にし、一錢づつを發作の日の早朝冷茶で服す。【一切の積痢】砒霜、黄丹等分を蠟で和して取收め、旋めて綠豆大の丸にし、米飮で三丸づつを服す。（普濟方）【休息下痢】一二年を經て瘥えず、瘦せ衰へたるには、塊に成つた砒霜を末にし、黄丹と各半兩を用ゐ、蠟を化した中へ砒を入れて柳條で攪き廻し、焦げれば七本まで柳條を換へ、取上げて一粒づつ旋め

(六)齊上トハ劑ノ分量ヲ増サヌコトカ。

て梧子大の丸にし、冷水で服す。小兒には黍米大にする。(和劑局方)【脾疼腰痛】卽ち上記の方を冷水で服す。【婦人の血氣】心痛するもの、方は發明の項にある。【走馬牙疳】惡瘡。砒石、銅綠等分を末にして紙上に攤して貼れば神の如き效がある。○又別方では、砒霜半兩を醋で糊のやうに調へて盌に盛り、乾くを待つて刮り下し、粟米ほどを綿に裹んで齒縫に置き、翌日取出せば蟲は自ら死ぬ。久しく患ふものも三日に過ぎずして癒える。(普濟方)【項上の瘰癧】梁州の砒黃を研末し、濃墨汁で梧子大の丸にし、銚内で炒乾して竹筒に盛り、その都度針で破つて藥半丸を貼れば自ら落ちる。蝕し盡くるを度とする。(靈苑方)【痰喘齁鮯】方は穀部、豉の條にある。【一切の漏瘡】孔あるには、信石を新しき瓦で火で煅いて研末し、唾液で少量を調へ、紙に撚り込んで挿入すれば惡管漏の多きを蝕し去る。(六)齊上せず、最も妙である。(急救易方)

土黃(綱目)

和名　土狀の雌黃?
學名　Earthly orpiment?

修治　時珍曰く、砒石二兩、木鼈子仁、巴豆仁各半兩、硇砂二錢を用ゐて末

(一)濠州ハ滑石ノ註ヲ見ヨ。幷州ハ石髓ノ註ヲ見ヨ。

にし、木鼈子油、石腦油で和して一塊にし、油で裹んで土坑中に四十九日間埋め、取出して劈いて小塊にし、甆器に貯へて用ゐる。

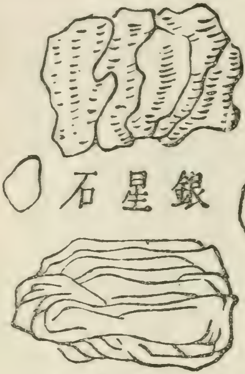
【氣味】【辛く酸し、熱にして毒あり】獨孤滔曰く、土黃は雄黃を制す。

【主治】【瘤贅、痔乳を枯し、瘻癧、竝に諸瘡の惡肉を食す】（時珍）

金星石（宋嘉祐）

和名 きんせいせき（雲母の一種）
學名 Golden coloured mica

銀星石を附す。



〔金星石〕

【集解】頌曰く、金星石、銀星石、いづれも(一)濠州、幷州に出る。採收に一定の時期はない。二石の主たる效は大體相似て居る。宗奭曰く、この二石は大風疾を治す。それには別に法があつて、燒いて用ゐるのである。金星石は蒼石の內部から出るもので、外面に

金色の(二)麩片があり、銀星石には銀色の麩片がある。又、深青色で堅く潤ひ、中に麩片のやうな金色のある一種もあるが、これは藥用には入れない。飾工が碾つて器にし、或は婦人の頸飾に作る。

時珍曰く、金星には數種あつて、蘇頌のいふ二石は(三)武當山にもある。或は金星は(四)膠東に、銀星は(五)雁門に出るともいふが、蓋しこれは礞石の類らしい。寇宗奭のいふ『二石は大風を治す』の說に就いて、聖惠方の大風門を參照するに、いづれも金星礜石、銀星礜石と書いてある。これで見れば礜石の類のやうでもある。丹房鑑源の礜石篇中にもまた二石の名を記載してあるが、それは蘇頌のいふものと同一でないらしい。且つ『金星、銀星は毒なし。熱涎、血病に主效がある。礜石は毒あり、風癩疾に主效がある』といふ。これ等の說を綜合すると、金星、銀星共に藥に入れ、それぞれ二種類の物があることになる。又、(六)歙州の硯石にも金星、銀星と呼ぶものがあり、(七)瑞州にも金星石と呼ぶものが出る。これはいづれも硯に作るものである。翡翠石はよく金を屑にするもので、これも亦金星石と名を呼ばれる。これ等はいづれも同名にして異物なのだ。劉河間の宣明方の點眼藥方中に、『金精石、

(二) 麩ハ屑皮。
(三) 武當山ハ礜石武當ノ註ヲ見ヨ。
(四) 膠東ハ漢ノ王國名、今ノ山東省ノ膠河以東、治水ノ沿流、萊陽、平度等諸縣ノ地ナリ。
(五) 雁門ハ水精、代赭石ノ註ヲ見ヨ。
(六) 歙州ハ今ノ安徽省徽州府ノ歙縣ソノ舊治ナリ。硯石ハ安徽省婺源縣ノ歙溪ヨリ出ヅ、世ニ歙硯ト稱ス。
(七) 瑞州、即チ瓊州

ハ唐ノ府名、今ノ廣東省瓊山縣。

銀精石を用う』とあるが、これは金星、銀星その物をいふのか否か判らない。

氣味 【甘し、寒にして毒なし】 **主治** 【脾、肺の壅毒、及び肺損の吐血、嗽血。熱涎を下し、衆毒を解す】（嘉祐）【水に少量を磨つて服すれば心神の不寧を鎭める。また骨哽を治す】（時珍）

附方 新三。【吐血、嗽血】肺損である。金星石、銀星石、玄精石、不灰木、陽起石、雲母石等分を用ゐ、先づ一箇の坩鍋に冬季の水牛糞を一二寸厚さに鋪き、その上に右の諸藥を一層鋪き、その上に又灰を二寸厚さに鋪き、更にまた藥一層を鋪き、層層に重ねて鋪いた上へ灰を蓋ふて鹽泥で固濟し、炭一秤の火で一晝夜煅いて一夜土中に埋め、然る後藥塊を取出して灰を去つて末にし、一兩づつに龍腦、麝香各半錢、阿膠二錢半を入れて炒り、一日三回、一錢づつを糯米湯で服す。（聖惠方）【大風蟲瘡】五色の蟲あるを取下す諸石丸——金星礬石、銀星礬石、雲母石、禹餘糧石、滑石、陽起石、慈石、凝水石、密陀僧、自然銅、龍涎石等分を擣き碎き、瓶に盛つて鹽泥で固濟し、炭火十斤で煅いて末にし、醋糊で小豆大の丸にし、一日三回、十五丸づつを白花蛇酒で服す。癒ゆるを度とする。（太平聖惠方）

(八)五臺山ハ菩薩石ノ註ヲ見ヨ。

附錄　新二。金石（拾遺）藏器曰く、味甘し、溫にして毒なし。久しく羸瘦し、食事不能にして顔色なきものに主效があり、腰脚冷を補し、人をして健康ならしめ、陽を益し、暴熱の髮毛脱落に主效がある。飛錬して服す。(八)五臺山淸凉寺に生ずる石中金屑は赤褐色である。

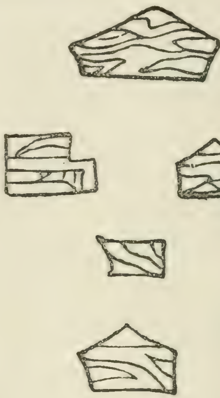
婆娑石（宋開寶）

和名未詳
學名未詳

釋名　摩挲石　時珍曰く、姚亮の西溪叢話に『船舶が石を産する山下を通る時、其石を愛して手で捜り取るところから摩挲といふ』とあるが、事實か否か判らない。

集解　志曰く、婆娑石は南海に生じ、胡人が採つて來る。その石は綠色で斑點がなく、金星があつて磨れば乳汁のやうになるものを上とする。又、豆斑石といふもあり、毒を解するものだが功力は婆娑石に及ばない。また鄂綠と稱する文理のある石もあり、鐵を磨けば銅色にするもので、世間では多くはこれを婆娑石だといつて居るが、事實その物ではない。眞物を試驗するには水で磨つて雞冠に點けて見

て、熱血が化して水になるものならば眞物である。宗奭曰く、この石は淡色石緑のやうで間に微に金星のあるものが佳い。又、豆斑石なるものもこの石のやうだが、それには黒斑があつて金星がない。頌曰く、胡人は非常にこれを珍貴なものとし、金で施工して（一）指彄に作つて指に著け、食事の畢る毎にそれを含んで數回吮ふ。毒を防ぐためだといふ。今世間で、指の腹ほどの塊を手に入れるには代價百金を要するといふ。



〔婆娑石〕

時珍曰く、庚辛玉冊に『摩挲石は陽石である。（二）三佛齊に出るもので、海南のある山は五色聳峙し、その石から光焰を放つてゐて、その附近は水が箭のやうに波打つて流れて居る。船がその岸下を通る時、船人が刃物を揮つて撃ち取るのだ。燒けば硫黄の臭氣がある。形が黄龍の齒のやうで堅く重いものが佳い。五金を（三）匱し、三黄を伏し、銀、汞を制す』とある。

（一）指彄ハ指環。

（二）三佛齊ハ南朝ニハ千陀利トイヒ、唐ニハ室利佛逝トイヒ、宋ニ至ツテ三佛齊ト稱ス。今ノスマトラ島ノ東部パレンバンヲ指ス。同島中有數ノ都市ナリ。

（三）匱ハ金石ヲ鍊化

スル鑵ヲ云フ。此處ハ此名詞ヲ動詞ニ使ヒシモノナラン。

〔氣味〕【甘く淡し、寒にして毒なし】〔主治〕【一切の藥毒瘴疫、熱悶、頭痛を解す】（開寶）

礞石（宋嘉祐）

和名　雲母の一種
英譯名　Micaschist of blue-black colour.

〔釋名〕**青礞石**　時珍曰く、その色が濛濛然たるところから名けたものだ。

〔集解〕時珍曰く、礞石は（一）江北の諸山に往往あるが（二）旴山に出るものを佳とする。青、白二種あつて青いものが佳い。堅細で青黒く、打破ると中に白い星點があり、煆いた後星が黄色で麩金のやうになるものだが、星點の無いものは藥用に入れない。（三）通城縣のある山に產し、工人はそれで器物を作る。


〔青礞石〕

〔修治〕時珍曰く、一箇の大坩鍋へ礞石四兩を打碎いて入れ、消石四兩を拌ぜ合せ、炭火十五斤を周圍に築き廻して煆き、炭全部が燃え盡きて石の色が金のやうになるを度として取出し、それを末に研つて後に水飛して毒を消し、更に晒し乾し

（一）江北ハ揚子江以北ノ總稱、今ハ一般ニ江蘇省ノ大江以北ノ地ヲ稱ス。
（二）旴山、未詳。
（三）通城縣ハ湖北省武昌府ニ屬ス。

て用ゐる。

【氣味】【甘く鹹し、平にして毒なし】【主治】【食積不消化で臓腑に留滯し、宿食癥塊となつて久しく瘥えざるもの、小兒の食積羸痩、婦人積年の食癥で心腹を攻刺するものには、巴豆、硇砂、大黃、荊三稜を適度に合せて丸にして服するがよし】（嘉祐）【積痰驚癇、欬嗽喘急を治す】（時珍）

【發明】時珍曰く、靑礞石は氣は平、味は鹹で、その性は下行し、陰であり沈であつて厥陰の藥である。肝經の風、木が大いに發展すれば脾土を壓迫し、氣の運化を阻止して積滯し、痰を生じて上、中二焦に壅塞し、それが變じて風熱の諸病を生ずるといふ關係だから、此の藥の重墜が適するのであつて、消石を用ゐて制すれば性が速快となり、木を平ならしめ、氣を下して痰積が通利し、諸種の病狀が自ら除けるのである。湯衡の嬰孩寶鑑に『礞石は驚を治し痰を利するの聖藥であつて、水の上へ痰を吐き、それにこの石末を摻れば、痰は忽ち水の底へ沈下するを見ても性の沈墜なることが判るのである。けれどもこれを用ゐるは急を救ふ場合に限るので、氣弱、脾虛のものは久しく服してはならぬ』といつてある。楊士瀛は『その功

はよく痰を利するけれども、その性は胃の弱い者には好ましくない。慢性の驚の類の如きものにはいづれも木香を佐とするがよい』といつて居る。ところが王隱君は『痰はあらゆる病の因となるから、虚實、寒熱に拘らず概して滾痰丸を用ゐて、それ等のあらゆる病を通治する』といつて居るが、これは正しい理論とはいひ兼ねるであらう。朱丹溪は『ある老人が突然目盲を病んだ、それは大虚の症狀である。ある醫師が礞石を與へて服させたので、その夜に入つて死亡した。悲しい哉、醫師そのものが盲目だつたので、爲に虚せるものを更に虚せしめた過失である。礞石そのものがいかで人間を殺さうか。況や目盲の病と礞石とは全然沒交渉なものではないか』といつて居る。

附方　新四。【滾痰丸】痰に因するあらゆる病を通治する。ただ水瀉と（四）雙娠の者は服してはならぬ。礞石、焰消各二兩を煆いて研り飛し、晒し乾して一兩を取り、大黃を酒で蒸して八兩、黃芩を酒で洗つて八兩、沈香五錢、これを末にして水で梧子大の丸にし、常に一二十丸を服す。大便を利せんとするには一二百丸を溫水で服す。（王隱君養生主論）【一切の積病】金寶神丹――一切の虚冷、久積、滑泄、久痢、

（四）雙娠ハ二子ヲ懐姙スルモノカ。

癖塊、血刺心腹、下痢、及び婦人の崩中漏下を治す。靑礞石半斤を末にし、消石末二兩と坩鍋の内に鋪いて頭を蓋ひ、底に炭火二十斤を詰めて煆いて取出し、赤石脂末二兩を入れて水を滴して芡子大の丸にし、乾くを俟つて坩鍋に入れ、小火で紅く燒いて取收め、一丸乃至二三丸づつを空心に服し、温水少量を飲んで壓する。久病瀉利には五七丸まで增加する。(楊氏家藏方)【急性、慢性の驚風】奪命散——急性、慢性の驚風で痰涎が咽喉を壅塞し、將に絕命に瀕するには、これを服すれば風痰を墜下する。乃ち驚を治し痰を利するの聖藥である。眞礞石一兩、焰消一兩を共に煆いて末にし、毎服半錢、或は一錢を、急驚痰熱には、薄荷自然汁に生蜜を入れて調へて服し、慢驚脾虛には、木香湯に熟蜜を入れて調へて服す。また或は雪糕で綠豆大の丸にして二三丸づつを服す。(湯氏嬰孩寶鑑)【小兒の急驚】靑礞石を水に磨つて服す。(衞生方)

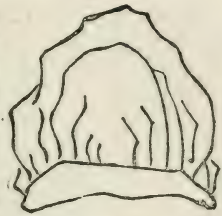
花乳石 (宋嘉祐)

和名未詳
學名未詳

【釋名】**花蕊石** 宗奭曰く、黄色の石の中に淡白點が間つてあるので、花の字

を名に附けたのだ。圖經に花蕊石としたのは色の黃なるを以てである。

【集解】禹錫曰く、花乳石は(一)陝州、(二)華州の諸郡に出る。正黃色で形は大小、方圓一定せぬ。頌曰く、陝州(三)の閿鄉に出る。體は至て堅重で色は硫黃の如く、形塊は極めて大なるものがあつて、陝西地方では鑴つて器に作る。採收に一定の時期はない。時珍曰く、玉冊に『花乳石は陰石であつて、(四)代州の山谷中に生ずる。五色のものがあり、丹砂の(五)匱藥の代用になる。蜀中の(六)汶山、(七)彭縣にもある』とある。



〔花蕊石〕

【修治】時珍曰く、凡そ丸、散に入れるには、罐に入れ固濟して頂火で煆き、火毒を出して研細し飛して晒し乾して用ゐる。

【氣味】【酸く濇し、平にして毒なし】【主治】【金瘡出血には、刮つて末にして傅ける。瘡口が合して膿を持たぬものだ。又、婦人の(八)血運、悪血を療ず】(嘉祐)【一切の失血、傷損內漏、目瞖を治す】(時珍)

【發明】頌曰く、花蕊石は古方にはなかつたものだが、近世ではこれを硫黃と

(一)陝州ハ石鍾乳ノ註ヲ見ヨ。
(二)華州ハ今ノ陝西華省縣ノ地ナリ。
(三)閿鄉ハ縣名、河南省陝州ニ屬ス。
(四)代州ハ石麪ノ註ヲ見ヨ。
(五)匱藥ハ丹藥鍊化ニ用ウル藥。
(六)汶山ハ漢ノ郡名、隋ノ縣名、今ノ四川省茂縣ノ北ニ故城アリ。
(七)彭縣ハ唐ノ彭州、明ニ縣ニ改ム。今ハ四州省成都府ニ屬ス。
(八)血運、メマヒ。

合せて共に煆き、研末して金瘡に傅けるが神の如き效がある。また突然金刄の負傷で煆き制する暇なき場合には、ただ刮つて末にして傅けるも效がある。

○○時珍曰く、花蕊石は舊本に氣味を掲げてないが、今嘗め試むるにその氣は平、その味は濇つて酸い。蓋し厥陰の經の血分の藥であつて、その功力は血を止めるを主とし、よく血を化して水にし、その酸はこれを收斂するものである。而して又よく死胎を下し、胞衣を落し、惡血を去る。つまり惡血が化するから胎と胞とに阻滯の患がなくなるのである。東垣の所謂『胞、胎の出ざるには濇劑で下すがよし』とはこの意味だ。赤石脂が能く胞、胎を下すのも同一意味である。葛可久の、升、斗ほどの夥しき吐血を治するものに花蕊石散があり、和劑局方には、諸血、及び損傷、金瘡、胎産を治する花蕊石散があつて、いづれも能く血を化して水にするといふに見れば、此の石の功力は蓋し尋常草木の比ではないやうである。

【附方】 新五。【花蕊石散】五内崩損で升、斗ほどの噴血を出すはこの藥で治癒する。花蕊石を煆いて性を存して粉の如く研り、童尿一鍾に、男子患者には酒一半を、婦人患者には醋一半を入れ、煎じ温めたもので三錢を調へて食後に服す。甚し

きも五錢を服すればよく瘀血を化して黄水にする。服して後獨參湯で補ふ。（葛可久十藥神書）【花蕊石散】一切の金刃、箭鏃の傷、及び打撲傷損、狗の咬傷を治す。死に至らんとする者には、急にこの藥を傷處へ摻ればその血が化して黄水となり、再び摻れば復活して疼痛せぬ。內損で血が臟腑に入つた場合には、童尿を煎じて酒少量を入れ、熱して此の藥一錢を調へて服すれば立ろに效がある。牛馬豚等の畜類に抵傷された腸出には、その腸が損ぜぬものは急にそれを納れ桑白皮の纖維で縫合してこの藥を摻る。血が止つて立ろに活きる。婦人產後の敗血が盡きずして血運し、惡血が心に奔るもの、胎兒が腹中で死亡せるもの、胞衣の下らぬもの等で死に至り、ただ心頭の溫暖なものには、急に童尿で一錢を調へて服すれば猪肝のやうな惡物を取下し、終身（九）血風、血氣を患はぬ。もし膈上に血あればそれを化して黄水にして卽時に吐出し、或は小便と共に排出して甚だ效がある。硫黄四兩、花蕊石一兩、いづれも粗き末にして拌ぜ、膠泥で固濟して日光で乾し、一箇の瓦罐に入れて口を泥で封じ、焙じ乾して西方の磚の上へ置いてその磚上に八卦五行の文字を書き、炭一秤を簇匝して午前十時から十二時まで下方から火を付けて煆き、炭が燃え盡きて全く

（九）血風ハ經期ニ臨ミ風邪ニ犯サレ血ノ逆上スル病。血氣ハ心腹ノイタム病氣。

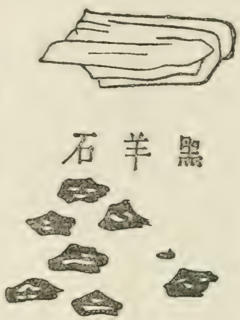
（一）兗州ハ雲母ノ註ヲ見ヨ。
白羊山、官山、未攷。

冷めた時取出して細末にし、瓶に入れて貯へる。（和劑局方）【金瘡出血】方は主治の項にある。【多年の障翳】花蕊石を水飛して焙じ、防風、川芎藭、甘菊花、白附子、牛蒡子各一兩、甘草を炙いて半兩、以上を末にして半錢づつを臘茶で服す。（衛生家寶方）【脚縫出水】好き黄丹に花蕊石末を入れて摻る（談埜翁試效方）

白羊石（宋圖經）

和名　未詳
學名　未詳

【集解】頌曰く、（一）兗州の白羊山に生ずる。春季中に地を掘つて採つた白色で瑩なものが良し。又、黑羊石といふもあり、兗州の官山の西に生ずる。これも春季中に地を掘つて採つた黑色で墻壁があり光が瑩なものを上とする。



〔白羊石〕

【氣味】【淡く、生は凉、熟は熱、毒なし】

【主治】【藥毒を解す。黑羊石も同じ】（蘇頌）

金牙石（別錄下品）

和名　黃鐵鑛
英譯名　Iron-pyrite

釋名　**黃牙石**　時珍曰く、象形の名稱である。

集解　別錄に曰く、金牙は蜀郡に生ずる。金の如き色のものが良し。弘景曰く、今は蜀、漢に出る。粗金に似て碁子ほどの大さの方形のものだ。また銅牙といふもあり、やはり似たもので外部が黒く内部は少し色が淺い。藥用には入れぬ。恭曰く、金牙が發生した場所から離れて土水中に久しく入つてゐたものは皆黒いのである。これを殊更に銅牙といはねばならぬわけはない。これは漢中の金牙湍から出るもので、



〔金牙石〕

湍流の兩岸の石の間から出るものは内部が金色だが、岸が頽れて久しく水に入つてゐたものは皆黒い。近頃(一)南山の溪谷、(二)茂州、(三)維州にも漢中のものに勝るもの

(一)南山ハ卽チ終南

山、五色石脂ノ註ヲ見ヨ。
(二)茂州ハ不灰木ノ註ヲ見ヨ。
(三)維州ハ唐ニ置ク、今ノ四川省理番縣ノ西十里ニ故城アリ。
(四)雍州ハ古ノ九州ノ一ニシテ、今ノ陝西省ノ大部分、及ビ甘肅省ヲ統ベ、宋ニハ萬年、長安、鄠縣、藍田、咸陽、醴泉、涇陽、櫟陽、高陵、興平、昭應、武功、乾祐ノ十三縣ヲ領ス。
(五)水臟ハ腎臟。
(六)風毒ハ脚氣ノ一種、轉筋攣急スルモノヲ云フ。

がある。頌曰く、今は(四)雍州にもある。

時珍曰く、崔昉の本草に『金牙石は陽石であつて、川、陝の山中に生ずる。蜜栗子に似て金の點形のあるものが妙だ』とある。聖濟經には、癘風を治する大方の中に金牙石、銀牙石を用ゐてある。銀牙とは恐らく金牙石の白色のもののことであらう。方書にはいづれも言及したものがないから、そのまま闕いて置く。

修治 大明曰く、藥に入れるには、赤く煆いて粗い部分を去つて用ゐる。

氣味 【鹹し、平にして毒なし】大明曰く、甘し、平なり。

主治 【鬼疰、毒蠱、諸疰】(別錄)【一切の冷風氣の筋骨攣急、腰脚不遂を治す。燒いて酒に浸して服す】(甄權)【腰膝を煖め、(五)水臟を補す。驚悸、小兒の驚癇】(大明)

發明 弘景曰く、金牙は酒、散、及び五疰丸に用ゐるだけで、他の方に用ゐることは稀である。頌曰く、葛洪の肘後方の(六)風毒厥を治する大、小金牙酒といふは、ただ浸してその汁を飲むのである。孫思邈の千金方には、風毒、及び鬼疰、南方の障氣、傳尸等を治する大、小金牙散といふがある。陶氏のいふ酒、散とはこれ

等の類のことだ。小金牙酒は(七)風疰の諸病の虚勞、濕冷、緩弱不仁で歩行不能なるに主效があり、近代世間でも用ゐて多く效果を擧げて居る。故に此にその法を掲げて置かう。金牙、細辛、莽草、防風、地膚子、地黄、附子、(八)茵蕷、續斷、蜀椒、蒴藋根各四兩、獨活一斤、以上十二物を用ゐ、金牙をば末に搗いて別に練絹の嚢に盛り、他の物をば皆薄く切つて一大嚢に入れ、淸酒四斗の内へ共に漬け、器の口を泥で密封して四晝夜の間置けば酒になる。その酒を一日二回、二合づつを溫服して效を取る。

金剛石（綱目）

和名　金剛石
英譯名　Diamond

【釋名】金剛鑽　時珍曰く、この物の砂は玉を鑽り、また瓷を補ふところから鑽といふ。

【集解】時珍曰く、金剛石は(一)西番、(二)天竺の諸國に出る。葛洪の抱朴子に『(三)扶南に金剛が出る。鍾乳のやうな狀態で水底の石上に生ずるものだ。體は紫石英に似て玉を刻み得る。人間が水底へ潛入して取るのだが、鐵椎で擊つたのでは傷

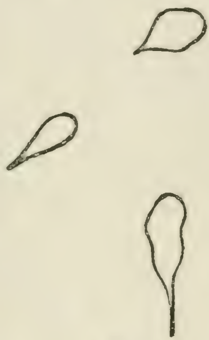
(七)風注ハ死人ノ魂魄人ニ著イテ病ヲナスヲ云フ。

(八)茵蕷、毒草部ニ出ヅ。

(一)西番ハ今ノ青海、新疆ノ二省、及ビソノ以西ノ地ヲ指ス。

(二)天竺、卽チ印度ヲ指ス。

さへ付かぬ。ところがただ羚羊角で扣くとさくさくと氷のやうに崩れるのだ」とある。丹房鑑源には『紫背、鉛はよく金剛鑽を碎く』とある。周密の齊東野語には『玉工が玉を細工するには、恒河の砂を用ゐて金剛鑽で鏤める。その物は形が鼠糞のやうで、青黑色の石のやうな鐵のやうなものだ。西域、及び(四)回紇の高山の頂上に出るもので、世間の傳聞に依れば、鷹や隼が食ふ餌に著いて腹に入つたものを、(五)河北地方の河原の砂磧地へ糞と共に遺して行くといふことだが、果して事實か否か判らない』とある。玄中記には『(六)大秦國に金剛が出る。一名削玉刀といひ、大なるものは長さ一尺ほど



〔金剛石〕

ある。小なるものは稻、黍ほどのもので、それを指環に着けて玉を刻むといふ』とある。これで觀れば金剛にも非常に大なるものがあると見える。印度僧が佛牙と稱して貴ぶものはこのものだ。眞僞を辨別するには、但だ赤く燒いて醋に淬せば判る。依然として酥碎せぬものならば眞物である。またその鑽が鈍くなつた場合には、赤

(三)扶南ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(四)回紇ハ寶石ノ回鶻ノ註參照。

(五)河北ハ舊直隷省、今ノ河北省ノ地方ヲ指ス。

(六)大秦國ハ玉ノ大秦ノ註ヲ見ヨ。

く暇いて冷して置けば鋭くなる。かやうに質が堅く壞れぬところから、印度、西域地方では金剛を以て佛性に喩へ、羚羊角を煩惱に喩へるのだ」とある。十洲記には『(七)西海流砂に昆吾石といふがあり、これを鍛へて劍を作れば鐵の如く、光明は水精の如く、玉を割くこと泥を割くが如くだ』と記載してあるが、これも金剛の大なるものの例である。玉を切る物に就ては、貘や齧鐵狡兎などといふ鐵を食ふ獸類があつて、その糞を鍛へて刃物にすれば玉を切れるともいふが、それに關しては獸部、貘の條下に詳說する。

[主治]『水に磨つて湯火傷に塗る。釵、鐶等の裝身具として佩ぶれば、邪惡、毒氣を辟ける』(時珍)

砭石 (綱目)

砭の音は邊(ヘン)である。

和名　はりいし
學名　未詳

[釋名] 鍼石

[集解] 時珍曰く、按ずるに、東山經に『(一)高氏の山、鳧麗の山にいづれも鐵石がある』とあり、郭璞の注に『砭鍼を作るものだ』とある。素問の異法方宜論に

(七)沙漠地ヲ瀚海ト稱シ、流沙ト稱ス。西海流沙、即チ西番ノ沙漠地ノ意ナリ。昆吾石トハ昆吾國ニ產スル特殊ノ石ノ稱ナラン。昆吾國ハ今ノ新疆省ノ東北部哈密ノ地方、即チ古ノ回鶻、伊吾ト稱シタル地ナリ。

(一)高氏之山、未攷。今ノ河南省禹縣ニ高氏亭アリ、コノ附近

は『東方の域は魚鹽の地であつて、海に濱し水に傍ふ。その病は瘡瘍である。その治法は砭石がよし』とある。して見れば砭石もやはり東方から來たものであらう。王冰の注に『砭石は玉の如きものだ。鍼に作り得る』とある　蓋し古代には石で鍼治を行つたが、後世には石に代るに鍼を以てしたものである。現今ではまた瓷鍼で病を刺すが、これも砭の遺意である。但し砭石そのものを識る者はないが、(二)石砮などの屬のもので作つたのではあるまいかと思はれる。

附　錄　**石砮**　時珍曰く、石砮は(三)肅愼國に出る。その地の人民は枯木で作つた矢に青石の鏃を著け、毒を施して人を射るが、中つた者は卽死する。その石は山中に生ずるものだ。禹貢に『荊州、梁州、皆砮を貢す』とあるはこの石のことである　又、南方の(四)藤州では青石で刀劍を作る。宛も銅鐵を用ゐるやうなものだ。婦人はそれで環、玦などの裝身具を作る。(五)琉璃國の人民は石で作つた長さ尺餘の刀で田を墾くなどといふ。いづれも此の類の石であらう。

主　治　【あらゆる病、癰腫を刺す】

ノ山ヲ指シタルモノノ如シ。皐麗之山、未攷。

(二) 石砮ハ石鏃。

(三) 肅愼國ハ古ノ國名、今ノ吉林省、及ビ露領沿海州ノ地ナリ。

(四) 藤州ハ今ノ廣西省梧州府ノ藤縣ノ地ナリ。

(五) 琉璃國、未詳。

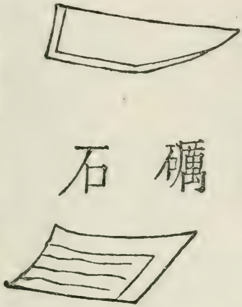
越砥（別錄中品）

和名　細粒の砥石・あげと・かみそりど
英譯名　Fine-grained whetstone

【釋名】磨刀石（藏器）羊肝石（綱目）礪石

【集解】時珍曰く、尚書に『荊州は厥の貢砥礪』とあり、注に「砥は細密を以て名とし、礪は粗糲を以て稱とす』とある。俗に羊肝石と呼ぶはその形と色とからである。弘景曰く、越砥は今の細礪石である。（一）臨平に出る。

【氣味】【甘し、毒なし】



（越砥）

【主治】【目盲に痛を止め、熱瘙を除く】（本經）【磨汁を目に點ければ障翳を除き、赤く燒き酒に投じて飲めば血瘕痛（二）切を破る】（藏器）

礪石　【主治】【宿血を破り、石淋を下し、結瘕を除き、鬼物惡氣を伏す。赤く燒いて酒中に投じて飲む。世間で之に（三）蹋すれば帶下を患ふと言ふが、その根據は判らない】（藏器）

（一）臨平ハ山名、今ノ浙江省杭縣ノ東北ニ在リ。
（二）切字、大觀本草ニ功字ニ作リ、且下句ニ屬ス。時珍ガ引用ノ際下句ノ字此ニ竄入スルモノナリ。
（三）蹋ハ踏ム、又蹴ル。

（一）至戾トハ暴風大雪ノ如キ天變ヲ指スカ、至幽トハ幽邃ノ處ヲ指スカ、石モ地ニ屬スレバ薑石ハ幽玄ノ形質アルモノナルベシ。

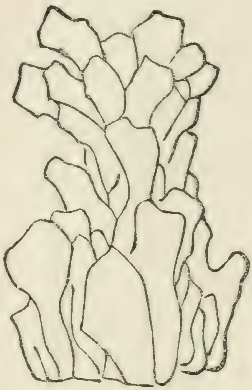
（二）歷城ハ今ノ山東省濟南府。

磨刀塹 一名龍白泉粉 [主治] 【蠼螋尿瘡に傅けて效がある】（藏器）【瘰癧結核に塗る】（時珍）

薑石（唐本草）

和名 黃土中の黃土人形（炭酸石灰の結粒）
英譯名 Loess-child in the Loess(concretion of calcium carbonate)

[釋名] 礓礫石 時珍曰く、薑石とは形に因つて名けてたものだ。或は礓礫と書く。邵伯溫の『天に（一）至戾あれば地に至幽あり、石類が之を得れば礓礫となる』といふはこれである。俗に礓礫とも書く。



［薑 石］

[集解] 恭曰く、薑石は所在にある。土石の間に生じ、形狀は薑のやうだ。五種あるが、色白く爛れて沙の交らぬものが良く、齊州（二）歷城の東のものが好い。採收に一定の時期はない。宗奭曰く、所在に皆ある。日色を見ぬうち急いで取らねばならぬもので、微白なるが佳し。

【氣味】【鹹し、寒にして毒なし】【主治】【熱疿豆瘡、丁毒等の腫】（唐本）

【附方】舊二、新二。【丁瘡腫痛】白薑石末を雞子淸で和して傅け、乾く毎に易へれば丁が自ら出る。神の如き效驗がある。（崔氏方）【乳癰腫大】盌ほど腫れて痛むには、上記と同じ方を用ゐる。（外臺祕要）【産後の脹衝】氣噎するには、疏礓石、代赭石等分を末にして醋糊で梧子大の丸にし、三五十丸づつ醋湯で服す。（潔古保命集）【全身の水腫】薑石を赤く燒き、黑牛尿中に入れて熱服する。日毎に一升を飲む。（千金方）

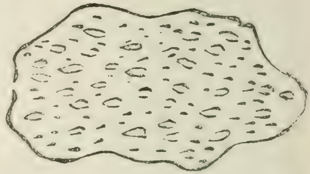
麥飯石（宋圖經）

和名　麪狀方解石、魚卵石
學名　Calcareous oolite

【釋名】時珍曰く、形狀に因る名である。

【集解】時珍曰く、李迅は『麥飯石は處處の山溪中にある。大小不定なもので拳ほどのもの、鵞卵ほどのもの、盞のやうなもの、餅のやうなものがあり、大體の狀態が一團の麥飯の握飯のやうなもので、豆や米のやうな粒點があり、色は黃白である。ただ溪間の麻石の中から搜し出して右の如き狀態のものがあればそれであ

る。古方に、曾て磨臼に用ゐたものが佳いとあるは誤だ。この石は磨臼に作り得るものではない。またこの石が無い場合には古い麪磨臼の齒に近い部分の石を代用するが、それはそこにある麥の性を用うるわけである。



〔麥飯石〕

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】

【主治】【一切の癰疽發背】（時珍）

【發明】○頌曰く、すべて石類は多くは癰疽に主效があるものだ。世間に傳る發背瘡を治する麥飯石膏といふは中岳山人呂子華の秘方であつて、裴員外はこの方の傳授を得んとして立派な大邸宅を與へて買收せんと試み、河南の尹は重刑に處すると脅迫したが、呂はなほ榮華の望を絶ち死を賭して傳へなかつたといふ大事な方である。その方は、この石を取つて碁石ほどの大きさに碎き、炭火で赤く燒いて米醋中に投じて浸すこと十回繰返し、研末し細かに篩つて乳鉢に入れ、數人で更に五日乃至七日間硾り、麪のやうに細かく滑になつたもの四兩、鹿角を生で腦骨を連ねて取つたもの一揃——自然に脱けた角は用に足らぬ——

を二三寸づつに截り、炭火で燒き烟を盡して細かに研末したもの二兩、白蘞を生で研末して二兩、以上を用ゐ、先づ三年經つた米醋で銀石器で煎じ、魚目の如き氣泡を立たせた中へ旋しながら前の藥を入れて竹枝で一二時の間手を休めず攪廻して熬め、濃淡適當の加減になつたとき盆に傾け移し、冷えてから塵の入らぬやうに紙で蓋ふて取收める これを用ゐる際には(一)鵝翎で膏を搵つて腫物の周圍に掃き、赤くなつた部分を盡く塗つて中央に錢の大さほどを殘して氣を洩す。腫物に膿のないものならば內消し、已に膿を洩さんばかりに頂點の形成されたものは全體を撮少し、已に潰れたものは湍水の如く排膿する。若また病久しくして肌肉が爛れ落ち、筋骨が露出したものには、細かい布に塗つて貼り、乾く毎に貼り易へれば日を逐ふて瘡口が收斂する。皮膚と腫毒との間に隔があつて穴の開かぬものならばこれで瘥えぬといふことはない。已に潰れたものに用ゐるには、先づ豬蹄湯で膿血を洗ひ去り、故帛で挹いて乾してからこの藥を用ゐる。その瘡は手で觸れて嫩肉を動かすことを忌む。同時に口氣で風を吹きかけてはならぬ。また腋臭のある人、月經の婦人、姙婦に見せてはならぬ。これは藥を合せる際にも忌むのである。使用の當初には一日

(一) 鵝翎ハ鳥ノ羽

に一回洗つて一回換へ、十日後には二日に一回換へる。尙ほ注意すべきことは、この藥は極めて細かにするほど效があるので、細かならぬものを塗れば激しく痛むものである。右の方は孫眞人の千金月令にも已にあるのだが、かやうに詳細を悉してないのである　又、北齊の馬嗣明が楊遵彥の背瘡を治療した際には、鵞卵大の粗黃石を取り、猛火で赤く燒いて濃醋中に入れて屑を醋中に落し、それを再び燒き再び淬して石全部を屑にして落し盡し、その屑を取つて日光で乾し、擣き篩つた極細末を醋に和して塗つたので立ろに癒えたのである。劉禹錫の傳信方にもこれを鍊石法といひ、癰腫に傳くれば效驗あらざるなしといつてある。

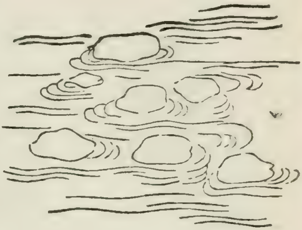
水中白石（拾遺）

和名　白色硅岩の礫・白さこいし
英譯名　Gravels of white quartzite

【集解】時珍曰く、この石は處處の溪澗中にある。大なるは雞子ほど、小なるは指頭ほどのもので、黑、白の二色あるが藥には白くして小なるものを用ゐる。

【主治】【魚鱠を食つて多く脹滿し、瘕となつて痛悶し、日一日と羸弱するには、數千箇を取つて赤く燒き、五升の水中に入れること七遍して熱飮すれば三回乃

至五回で寝を利出する。又、焼いて水中に淬し、鹽三合を入れて風瘙癮疹を洗ふ』(藏器)『背上が突然盤の如く腫れ、病名の何なるや判明せぬには、一二盌を取つて焼き熱して水中に投じ、その水で頻に洗へば立ろに瘥える』(蘇頌)



〔水中白石〕

發明　時珍曰く、古い時代に、石を煮て食料にする法といふがあつたが、それはこの石を用ゐたので、その法は、胡葱汁、或は地楡根等と煮熟すると芋のやうになる。これを石羹と稱したものだといふ。抱朴子に『洛陽の道士董威の辟穀方は、防風子、甘草の屬十種ばかりを用ゐて散にし、先づその散三方寸匕を服してから卵ほどの石十二箇を呑む。それで滿百日間何物をも食はずして氣力も顏色も故の如く變らない。改めて食物を攝らうとする時は、葵湯を飲んで曩に呑んだ石を下し去る。又、赤龍血、青龍膏などいふもあつて、いづれも石を煮熟し得るものだ。又、引石散といふがあり、方寸匕を投じて白石一斗を煮れば立ろに熟して芋のやうに食ひ得る』とある。

河　砂（拾　遺）

和　名　かはずな
英譯名　River sand

釋名 砂とは小さき石である。この字は少に從ふ石の會意の文字だ。

主治 【石淋には細白沙三升を取つて炒り熱し、酒三升で淋汁を取り、一日二回、一合づつを服す。又、絞腸沙痛に主效を取るには、赤く炒つて冷水に淬し、澄清して一二合を服す】（時珍）【風濕頑痺の不仁、筋骨の攣縮、冷風癱緩、血脈斷絕には、六月河砂を取つて烈日に暴し、極めて熱した中に伏坐して冷えれば取易へ、熱を徹せしめて全身汗を出し、然る後病に隨つて藥を用ゐる。風冷、勞役を絕對に忌む】（藏器）

附方 新一。【溺死者】白沙を炒つて死者の面から上下身體を埋めて（一）七孔だけを露出し、冷濕すれば取易へる。（千金方）

杓上砂（綱　目）

和　名　杓子の上の砂
英譯名　Sand on the rice-spatula

（一）七孔ハ眼鼻耳口。

【集解】時珍曰く、これは米を淘げる杓である。木杓もあり、瓢杓もあり、いづれも用ゐ得る。

【主治】〔顔面の風粟で或は青く或は黄赤で何となく澀痛するもの、及び唇に瘡の生じたるには、その患者の家の杓に附著してある唇砂一二粒を刮り去つて用ゐれば平安になる。又、婦人の吹乳には、其砂七箇を取つて溫酒で服す。更に炊帚枝を用ゐれば乳孔を通ずるが、これはいづれも何の關係であるか解らない〕（時珍）

石燕（唐本草）

和名　腕足類の一種スピリファーの化石
英語名　Fossil of Spirifer Sp.

【集解】李勣曰く、石燕は(一)零陵に出る。恭曰く、(二)永州祁陽縣の西北十五里の地點に土岡があつて、深さ一丈餘掘つてこれを取る。形は(三)蚶に似て小く、石のやうに堅く重い。俗に雷雨がある時に石穴中から出て雨に隨つて飛び墜ちるなどいふは妄言だ。頌曰く、祁陽縣の江畔の沙灘上にある。或は洞中に化石したものがよいといふ。採收に一定の時期はない。宗奭曰く、石燕は蜆、蛤のやうな形狀で、色は土の如く、石の如く堅く重い。翼のないものがいかで飛出す道理があらう。飛

(一) 零陵ハ雄黃ノ註ヲ見ヨ。
(二) 永州ハ滑石ノ註ヲ見ヨ。祁陽縣ハ今ノ湖南省內永州府、卽チ衡陽ニ屬ス。
(三) 蚶、アカガヒ。

ぶなどいふは妄に近い。

時珍曰く、石燕に二種ある、一種は乃ち石類だ。形状は燕に類して文があり、圓



〔石燕〕

くして大なるを雄、長くして小なるを雌とする。一種は鍾乳穴中の石燕で、蝙蝠に似て居る。これは鍾乳の乳汁を食物とするよく飛ぶ禽類だ。禽部に記載してある。

この禽類の石燕は乳を食物とするところから、この石燕を食へば鍾乳と同一の補、助の功がある。それ故に方書に、陽を助くる藥として多用ゐてある。俗人はこれを知らずして往往此の石を陽を助くるの藥として用ゐ、著く之を書にまで書いてあるが、とんだ誤だ。

氣味 【甘し、涼にして毒なし】

主治 【淋疾には煮汁を飲む。婦人の難産には兩手に各一箇を握れば立ろに效驗がある】（唐本）【眼目の障瞖、諸種の淋瀝、久しき消渴、臟腑の頻瀉、腸風痔瘻が年久しく瘥えずして顏色虛黃し、飲食味なきもの、婦人の月水湛濁、年久しき赤白帶下を療ずるには、毎日磨汁を飲む。一箇を三日に用ゐるを標準とする。また

末にして水飛し、毎日半錢乃至一錢を米飲で服するもよし。一个月に達すれば諸疾は悉く平癒する』（時珍）

〔發　明〕時珍曰く、石燕は性涼であつて、竅を利し濕熱を行る物である　宋代の人が本草を補修して、鍾乳を食ふ禽類の石燕を混同して此の石燕の條下に入れたために、世俗ではその正反對なるを知らずして、此の石を能く陽を助くるものだと誤傳して居る。

〔附　方〕舊一、新七。【傷寒の尿澁】小腹脹滿には、石燕を末にし、葱白湯で半錢を調へて服す。尿が通じ脹の引くを度とする。（聖惠方）【小便淋痛】石燕子七箇を黍米大に搗き、新しき桑根白皮三兩を(19)剉んで拌ぜ、七帖に分けて一帖づつを水一盞で七分に煎じ、午後空心に各々一回服す。（簡要濟衆）【血淋心煩】石燕子、商陸、赤小豆、紅花等分を末にし、一錢づつを葱白湯で調へて服す。（聖惠方）【年久しき腸風】石燕を水に磨つて常服する。中途で止めてはならぬ（靈苑方）【赤白帶下】多年止まぬには、石燕一箇を水に磨つて服すれば立ろに效がある。（徐氏家傳方）【襁褓吐乳】欬嗽して久しく癒えぬには、石燕子を末にして蜜で少量を調へ、一日三回乃至五回、

(19)剉ノ字、金陵本到ニ作ル。誤刊ナルコト明ナリ。

(一)漂字、金陵本標ニ作ル。漂ノ誤ナルコト明ナリ。

唇上に塗る。(衛生寶鑑) 【拳毛倒睫】石燕子の雌一箇、雄一箇を水に磨つて眼に點搽する。先づ鑷子で拳毛を摘去してから藥を點け、後に黄連水で洗ふ。(乾坤生意) 【牙を牢くし痛を止む】石燕雌雄三對を火に煆いて醋に淬すこと七回、青鹽、乳香各一兩、細辛半兩と共に末にして牙に揩り、荊芥湯で口を嗽ぐ。ある方では、乳香、細辛を去つて麝香を加へる。【齒疎にして堅からぬもの】石燕子五對を火に煆き米醋に淬すこと七回して末にし、青鹽、麝香各少量と共にむらなく研つて日毎に牙に揩り、後に溫酒で口を漱いで嚥む。(元遺山方) 【服石發動】石燕子七箇を打碎き、水三升で煮て二升を取り、頻頻と流しかけて洗ふ。瘥ゆるを度とする。(聖濟)

石蟹 (宋開寶)

和名 蟹の化石
英譯名 Fossil of Crab

【集解】 志曰く、石蟹は南海に生ずる。これは只の蟹が幾年月かの間水沫が著いて遂に化石し、海潮に淩はれて(一)漂出したものだといふ。又、年久しく洞穴中に在つて成る一種もあり、同一物である。いづれも細研し水飛して諸藥に入れて相助くるに用ゐる。頌曰く、近海の州郡のいづれにも有る。體質は石ですべて蟹そのまま

だ。ただ泥と粗石とが附著して居る。

時珍曰く、按ずるに、顧玠の海槎錄に『(二)崖州、楡林港内半里ばかりの地は土が極めて細膩で最も寒く、蟹がその土中に入れば運動し得なくなつて忽ちに化石する。世間ではこれを石蟹と名け、求め獲て机上の飾などにし、能く目を明にするといふ』とある。また石鰕といふ鰕に似たものが海邊に出る。石魚といふ魚に似たものも(三)湘山縣の石魚山に出る。石魚、石鰕はいづれも藥用には入れない。一統志には『(四)鳳翔汧陽縣の西に山魚隴といふがあり、地を掘り石を破つてこの物を取る。蠱を辟け得るものだ』とある。



〔石蟹〕
南恩州

氣味　【鹹し、寒にして毒なし】

主治　【靑盲、(五)目淫、膚瞖、丁瞖、漆瘡】(開寶)【一切の藥毒、並に蠱毒を解す。天行熱疾、分娩を催し、胎を墮し、血運を療ず。いづれも熱水に磨つて服す】

(二)崖州ハ今ノ廣東省崖縣。

(三)湘山縣、未詳。

(四)鳳翔ハ漢ノ右扶風ノ地、唐ニ鳳翔府トナス。今ノ陝西省ニ屬ス。鳳翔縣ハソノ舊治ナリ。汧陽縣ハ今尚ホ存ス。

(五)目淫ハ目浸ノコトナラン涙出デテ收

ラザルヲ云フ。
丁瘡ハ赤腫疼痛シ、醫釘ノ如ク高ク突出シ、栗ノ如クナルヲ云フ。

（大明）【醋に磨つて瘰癧に傅ける。熟水に磨つて服すれば金石の毒を解す】（蘇頌）

附方 新一。【喉痺腫痛】石蟹を水に磨つて飲み、並に喉の外部に塗る。（聖濟錄）

石蛇（宋圖經）

和名 せきぢや
英譯名 Fossil Ammonite

集解 頌曰く、石蛇は南海地方の水に沿へる山石の間に出る。その形はとぐろを卷いた蛇のやうで首も尾もなく、中は空で紅紫色だ、左卷のものを良とす。又車螺の形に似たものもある。何物の化石か判らないが、大抵石蟹と同類のものであらう。功用もやはり相近



〔石蛇〕
南温州

い。宗奭曰く、石蛇は古墻上の土のやうな色で、盤結して査、梨の大さほどのものだ。中は空で兩端も中腹の太さと同樣である。石蟹と同類ではない。石蟹は蟹の實物の化石だが、石蛇は蛇の實物の化石ではないのである。今は用うることが甚だ稀

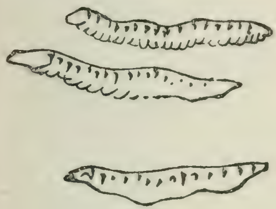
である。時珍曰く、按ずるに、姚亮の西溪叢話に『(一)南恩州海邊のある石山の山角は蟹が通ると化して石になり、蛇が通つてもやはり石になる』とある。この說の眞否は判らないが、若し事實だとすれば石蛇もやはり實物の蛇の化石であらう。

【氣味】【鹹し、平にして毒なし】

【主治】【金石の毒を解す】(蘇頌)

石蠶(宋開寶)

和名 みどりいし
英譯名 Fragments of coral stone



〔石蠶〕

【釋名】石殭蠶(綱目)

【集解】志曰く、石蠶は海岸の石傍に生ずる。狀態は蠶のやうだがその實は石である。

【氣味】【苦し、熱にして毒なし】藥訣に曰く、苦し、熱にして毒あり。獨孤滔曰く、丹砂を制す

【主治】【金瘡に血を止め、肌を生じ、石淋、(二)血結を破る。磨つて服すれば(三)碎石を下す】(開寶)

(一)宋ノ南恩州ハ今ノ廣東省陽江縣ノ地ナリ。

白井曰、石蠶、眞物詳ナラズ。今小野蘭山ノ說ニ從ヒ姑クみどり石ヲ充ツ。みどり石ハ圓壔形石珊瑚ノ破片ニシテ長二寸許直徑二三寸ノモノナリ。

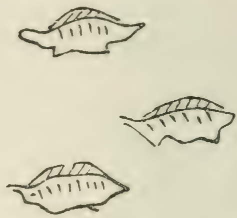
(二)血結ハ血積ノコトカ、血積ハ子宮癥瘕。

石鼈（綱目）

和名　亀甲石
英譯名　Septarien Nodule.

【集解】時珍曰く、石鼈は海邊に生ずる。形状といひ大さといひ(一)䗪虫にそつくりだ。蓋しこれも化石したものであらう。䗪虫は俗に土鼈と呼ぶものである。

【氣味】【甘し、凉にして毒なし】【主治】【淋疾、血病には水に磨つて服す】（時珍）



〔石　鼈〕

蛇黄（唐本草）

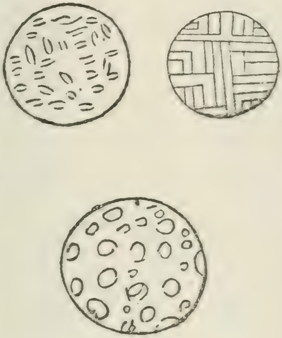
和名　球状の白鐵鑛
英譯名　Marcasite of spherical form

【集解】恭曰く、蛇黄は嶺南に出る蛇の腹中から取るもので、圓く重く、錫のやうで黄、黒、青の雑色である。志曰く、蛇黄は多くは赤色のもので、蛇が吐出したものを、山野に住むものが得ることもある。頌曰く、今は、(一)越州、信州にもある。現に醫師の用うるものは、蛇が冬眠中に含む土を春冬眠から起つた時に吐出す

(二)砕石ハ尿石ナラン。
(一)䗪虫、四十一卷虫部ニ見ユ。
(一)越州ハ今ノ廣東省合浦縣ノ地ナリ。

(三)說ハ石ノ誤ナルコト必セリ。

そのものだ。大さは彈丸ほどで石のやうに堅く、色は外が黄で內は黑い。二月に採收するものだといふ。舊說と相違するがいづれが正しいとも判らない。



〔蛇黄〕

時珍曰く、蛇黄は蛇の腹中に生じ、正に牛黄の發生と同樣のものだ。しかし一般には得難いので遂に蛇含石を代用にするやうになつたのだ。それは同じく蛇から出るからといふわけである。廣西の平南縣に蛇黄岡といふがあつて、その地の者は九月にその岡を七八尺掘下げて採取する。大なるは雞子ほど、小なるは彈丸ほどのもので色は紫だ。庚辛玉册に『蛇含は元來一種の石である。蛇が蟄に入る時に含む一塊の土が、蟄を起つた時に化して黄石となるのだといふは無稽の言だ。ある者が蛇窟を掘つて探して見たが、一向その(三)說の如きものは無かつた』とある。

修治　大明曰く、藥に入れるには、赤く燒いて醋に淬すこと三四回、硏末し

水飛して用ゐる。

【氣味】【冷にして毒なし】

【主治】【心痛、疰忤、石淋、小兒の驚癇、婦人の難產。水で煮て研つた汁を服す】(唐本)【心を鎭める】(大明)【磨汁を腫毒に塗る】(時珍)

【附方】新六。【(三)暗風癇疾】突然地に仆れて人事不省となり、しばらくして甦るには、蛇黄を火に煆き醋に淬すこと七回にして末にし、二錢づつを酒で數回服すれば癒える。年深きものにも效がある。(危氏得效方)【驚風癇疳】神穴丹——急驚風、癇疾、天弔疳熱等の證を治す。紫色の蛇黄四兩を煆き、豶豬屎の小さきもの二兩を泥固して煆き、鐵粉一兩、朱砂半兩、麝香一錢と末にし、糯粉糊で芡子大の丸にして漆盤に入れて晒し乾す。その乾いたところを看ると一一その丸に一小穴があるところから神穴丹と名けるのである。これを一丸づつ薄荷酒で化して服すれば立ろに甦る。疳熱には冷水で化して服す。(靈苑方)【小兒の項軟】風虛に因する。蛇含石一塊を七回煆き七回醋に淬して研り、鬱金と等分を末にして麝香少量を入れ、白米飯で龍眼大の丸にし、一日一回、一丸づつ薄荷湯で化して服す。(活幼全書)【(四)瘴瘧、

(三)暗風ハ產後ノメマヒ。

(四)瘴瘧ハ嶺南風瘴

ノ地ニアリ。按ズルニマラリヤ熱。

(五)食瘧ハ胃瘧トモ云フ。口五味ヲ亡ヒ、飲食スレバ腹痛ミ膨脹スルナリ。

(一)雷州ハ今ノ廣東省海康縣ノ地ナリ。河東トハ今ノ山西省一帶黃河ノ東ヲイフ。

鬼瘧】及び(五)食瘧には、蛇含石末一兩、信石末一兩を研勻して水火鼎內に入れ、上を盞で蓋ふて六一泥で固濟して煅き、藥が蒸昇して盞の內側に著いたものを刮り落して末にし、米糕糊で綠豆大の丸にして雄黃を衣にかけ、一丸づつを黑豆を研つた水で夜五更に服す（摘玄方）【血痢の止まぬもの】蛇含石二箇を火に煅き醋に淬して研末し、三錢づつを米飲で服す（普濟方）【腸風下血】脫肛、蛇黃二顆を火に煅き醋に淬すこと七回して末にし、三錢づつを陳米飲で服す（普濟方）

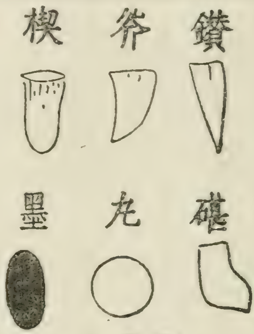
霹靂碪（拾遺）

和名　きつねのまさかり
英譯名　Stone ax

【釋名】雷楔　時珍曰く、楔の字を舊本に針、及び屑と書いてあるは誤である。

【集解】藏器曰く、この物は落雷した場所を確めて三尺深さに掘下げて取る。その形は一定せぬが、斧刀や剉刀に似たものがあり、二箇の孔のあるものがある。一說には、(一)雷州、幷に河東の山澤の間に出るもので、落雷後に多く取れる。斧に似て青黑色で斑文があり、玉のやうに至つて硬いといふ。或はまたこれは世間で造つて天神の眷屬に奉納したものだなどともいふが事實とは思はれぬ。

時珍曰く、按ずるに、雷書に『雷斧は斧の如く銅鐵で作るものだ。雷碪は碪に似たもので石である。紫黑色のものだ。雷鎚は重さ數斤あり、雷鑽は長さ尺餘あり、いづれも銅鐵の如きものだ。雷神はこれを以て物を裂き物を撃つ。雷環は雷神の遺落した珮である。雷珠は神龍が含むものを遺落したので、夜間でも一室を明にするほど光るものだ』とある。又、博物志には『世間で往往見る形の小い斧のやうな細石を霹靂斧、一名霹靂楔といふ』とある。玄中記に『(二)玉門の西に國があつて、その國では山上に廟を立て、年年鑽を雷神の使用料に奉納する』とあるは妄言である。雷なるものは陰陽の二氣が激搏して轟音を發するのだが、實は神祕なるある者が司るので、それ故に萬物と共に啓蟄するのだ。斧、鑽、碪、鎚、いづれも實物である。若また天に在れば象となり地に在つては形となるものとすれば、星が隕ちて石となると同樣、金、石を雨し、粟、麥を雨し、毛血、及び諸種の異物を雨す事



〔霹靂石〕

(二)玉門ハ甘肅ノ嘉峪關ヲ出テ西方、新疆省ノ東端、蘇賴河ノ中洲ニ今尙ホ在リ。玉門ノ西、卽チ新疆省ノ地ヲ指ス。

も、やはり地上に達してから吾人の目撃する形質があるのだと謂はねばならぬ。かかる現象は、必ず大虚の中に神祕なものの力があつて現れるものであらう。南朝陳の時代の蘇紹の得た雷鎚は重さ九斤あつたといふ。宋の時代の沈括が落雷した木の下で得た雷楔は、斧に似て孔が無かつたといふ。鬼神、靈界の問題は誠に幽玄微妙にして究極すべからざるものである。

【主治】【毒なし、大驚で失心し、恍惚として意識不明のもの、並に石淋に主效がある。磨汁を服し、また煮て服す。枕に作つて用ゐれば魔夢不祥を除く】（藏器）

【刮り末にして服すれば瘵疾に主效があり、勞蟲を殺し、蠱毒を下し、洩泄を止める。箱篋の間へ置けば蛀蟲が生ぜぬ。諸種の雷物を珮ぶれば神を安んじ、志を定め、驚邪の疾を治す】（時珍）　雷書に出づ。

雷墨（綱目）

和名　隕石？
英譯名　Meteorite, Meteoric stone?

【集解】時珍曰く、按ずるに、雷書に『凡て雷が木、石に物を書いたものを木札といふ、それは木、石に二三分深さに入つて青黃色のものだ。或は雄黃、青黛、

丹砂で合成し、雷楔を用ゐて書いたものだといひ、或は蓬萊山の石脂で書くともいふ。雷州では大雷雨毎に沙石のやうに降る。大なるは塊の如く小なるは指の如く、石のやうに堅硬で色は黒く、光澤があつて極めて重い』とある。劉恂の嶺表錄には『雷州では驟雨後に人民が山野に行つて鷖石のやうな石を取り、雷公墨と呼んで居る。扣けば錚然たる音があり、美しい光澤がある』とある。又、李肇の國史補には『雷州には雷が多く、秋になれば蟄伏する。その形は人間のやうなもので、掘取つて之を食ふ』とある。これで觀れば雷といふは果して一の物があることになる。

【主治】【小兒の驚癇、邪魅の諸病には、桃符湯に磨つて服すれば平安になる】(時珍)

本草綱目石部第十卷終

本草綱目石部

第十一卷

本草綱目石部目錄　第十一卷

石の五　鹵石類二十種、附錄二十七種。

食鹽 別錄　戎鹽 本經　光明鹽 唐本　鹵鹹 本經

凝水石 本經 即ち寒水石。　玄精石 開寶　綠鹽 唐本

鹽藥 拾遺 懸石を附す。　朴消 本經　玄明粉 藥性

消石 本經 即ち焰消。　硇砂 唐本　蓬砂 日華 特蓬殺、

石藥を附す。　石硫黃 本經　石硫赤 別錄　石硫青 別錄 硫黃

香を附す。　礬石 本經　綠礬 日華　黃礬 綱目

湯瓶內鹼 綱目

右附方　舊一百零二、新二百四十九。

附錄諸石　二十七種

石の五　鹵石類二十種、附錄二十七種。

食鹽（別錄中品）

和名　しほ・食鹽（鹽化曹達）
英譯名　Common salt or Table salt (NaCl)

〔校正〕 志曰く、元は米部に在つたが今は此に移し入る。時珍曰く、本經の大鹽を併せ入る。

〔釋名〕 鹺　音は磋(サ)である。時珍曰く、鹽の字は器の中で鹵を煎ずる有樣を形容したものである。禮記には鹽を鹹鹺といふ。爾雅には『(一)天の生ぜるを鹵といひ、人の生ぜるを鹽といふ』とあり、許愼の說文には『(二)鹽は鹹なり。東方には之を斥といひ、西方には之を鹵といひ、河東には之を鹹といひ、黃帝の臣宿沙氏が初めて海水を煮て鹽を爲つた』とある。本經に大鹽とあるは、卽ち今の(三)解池の顆鹽である。別錄には食鹽を別條に重複してあるが、本書には此の一項に併記した。方士は鹽を海砂と呼ぶ。

〔集解〕 別錄に曰く、大鹽は(四)邯鄲、及び(五)河東の池澤に出る。恭曰く、大鹽

(一) 天ノ生ズル云云ハ說文ノ鹽字ノ解ニアリテ爾雅ニハナシ。
(二) 鹽ハ鹹ナリトハ說文ニハナシ。爾雅ニ、濱鹶ハ鹹苦ナリトアルヲ引用セルモノカ。東方云云ハ說文鹵字ノ解ニ「東方謂之庍、西方謂之鹵」トアリ。本草綱目ノ引證コノ類ノ淆訛枚擧ニ遑アラズ。
(三) 解池、卽チ解州ノ鹽池ナリ。
(四) 邯鄲ハ土部白堊ノ註ヲ見ヨ。
(五) 河東ハ今ノ山西省地方。丹砂ノ河東ノ註參照。

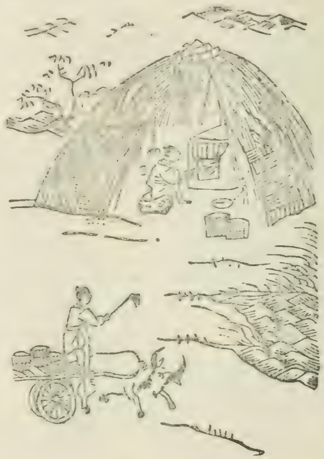
とは河東の印鹽のことで、一般に常食とするものだ。形は食鹽より粗い。弘景曰く、東海鹽、北海鹽、南海鹽、河東鹽(六)池のもの、(七)梁州、益州の鹽井のもの、西羌の山鹽、胡中の樹鹽となどいふがあつて、品級、種類にはそれぞれの差異はあるが、河東のものを優良品とする。東海(八)鹽官の鹽は白色で(九)草粒が細く、北海鹽は黃色で草粒が粗い。魚鮓や鹹葅を作るに用ゐては比較的北方のものが勝れて居るといふが、しかし繭を貯藏するには必ず鹽官のものを用ゐる。蜀中の鹽は少し淡く、廣州の鹽は鹹く苦い。かやうに品種の別はあるが、治療上の效力に果して優劣ありや否やは判らない。藏器曰く、四海の內凡そこの物のない處はあるまい。ただ西南の諸蠻地には稍少いので、その地では皆竹や木を燒いて得るところの鹽分を代用して居る。

頌曰く、(一〇)并州の末鹽といふは鹹を刮つて煎錬したもので甚だ佳くない。所謂鹵鹹である。大鹽は河東の池澤に生ずるもので、末鹽より粗い。卽ち現今の解鹽である。(一一)解州安邑の兩池で鹽を採る法は、池の傍の地を耕してそれに池水を沃ぎ入れて貯へて置く、強い南風さへ吹けば一夜にして全體の畦が鹽になつて了ふのであ

(六) 池州ナル地名アレドモ、池州ハ唐ノ府名ナリ此ニハ鹽池ト讀ムベキガ如シ。
(七) 梁州、益州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(八) 鹽官ハ地名、今ノ浙江省海寧縣ハ晉ニ置キタル縣ノ舊治ナリ。
(九) 草粒ハ結晶ノコトナラン。
(一〇) 并州ハ石髓ノ註ヲ見ヨ。
(一一) 解州ハ今ノ山西省河東道解縣ソノ舊治ナリ。安邑ハ當時解州ノ管下ニ屬ス。昔禹此ニ都シ、漢ニ縣ヲ置ク。卽チ今ノ夏縣、安邑縣ノ地ナリ。後魏ニ南安邑、北安邑ノ二縣ニ分ツ、此ニイフ兩池トハソノ二縣ノ鹽池ヲイフ。

（二二）滄州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。密州ハ石膏ノ註ヲ見ヨ。楚州ハ今ノ江蘇省淮安縣ノ地ナリ。秀州ハ今ノ浙江省嘉興縣ノ地ナリ。溫州ハ今ノ浙江省永嘉縣ノ地ナリ。台州ハ同省臨海縣ノ地ナリ。明州ハ同省鄞縣ノ地ナリ。泉州ハ今ノ福建省晉江縣ノ地ナリ。福州ハ同省閩侯縣ノ地ナリ。廣州ハ土部伏龍肝、金部金ノ註ヲ見ヨ。瓊州ハ金星石ノ註ヲ見ヨ。宋ノ化州ハ唐ノ辯州、今ノ廣東省高雷道化縣ノ地ナリ。

る、彼の地ではこの方法を種鹽と稱へ、その鹽は最も精好なものである。東海、北海、南海の鹽といふは、今の（二二）滄、密、楚、秀、溫、台、明、泉、福、廣、瓊、化の諸州で海水を煮て作るものだ。これを澤鹽といひ、醫方では海鹽といふ。海岸へ坑を掘つて上に竹や木を渡し、その上を蓬や茅で覆ふて更にその上へ沙を積んで置くと、潮汐が滿つる毎に海水が沙上を浸して鹵鹹をその坑の中へ淋下する。かくて、水が退いてから炬火で照して見て、鹵氣の爲にその火が消えるまでに積つたとき、その海鹵を取り盤中に入れ貯へ、それを煎じると頃刻にして鹽が出來上るのである。漢の時代にはこの鹽を煮る器を牢盆といつたものだ。今では或は鐵を鑄冶して作り、南海地方では竹を編んで作る。それは横一丈、深さ一尺、



（海　鹽）

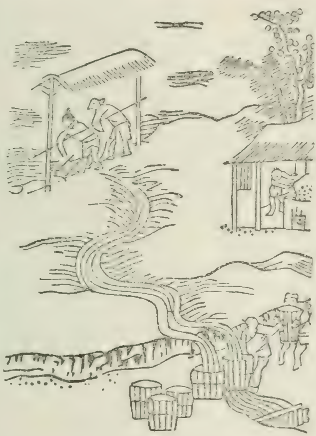
(一三)歸州ハ今ノ湖北省ノ秭歸縣ノ地ナリ。

(一四)濱州ハ今ノ山東省武定府濱縣ノ地ナリ。

(一五)通州ハ今ノ江蘇省南通縣ノ地ナリ。泰州ハ同省泰縣ノ地ナリ。海州ハ同省東海縣ノ地ナリ。

(一六)停戸ハ鹽燒ヲ業トスル部落。亭戸、唐書ニ「第五琦初變鹽法置監院游民業鹽者爲亭戸免雜徭」トアリ。

底を平にしたもので、上下に貝の燒殼を鋪いて竈の背上に置くのである。これを鹽盤と稱へて居る。梁州、益州の鹽井といふは、今の(一三)歸州、及び四川の諸郡にいづれも鹽井があつて、その水を汲み煎じて鹽にするのであつて、海水を煮る方法と



（鹽　池）

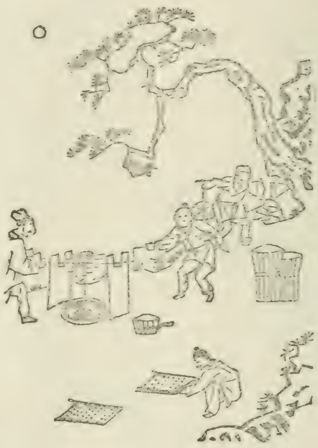
同様である。又、(一四)濱州に土鹽といふものがある。これは草、土を煎錬して作るもので、その形、色は最も粗く黑く、藥には用ゐられぬ。(一五)通州、泰州、海州にはいづれも(一六)停戸があつて鹹を刮つて鹽を煎じ、それを官へ納入することになつて居るが、幷州の末鹽などの類で味の更に優れたものだ。廣く一般各地に供給されて極めて豐富に行き渡つて居る。

時珍曰く、鹽には品等が甚だ多い。海鹽は海鹵を取つて煎錬して作るもので、今

（二七）遼ハ奉天省、冀ハ直隸省、兩淮ハ安徽、江蘇二省、閩ハ福建省、浙ハ浙江省、廣南ハ廣東廣西、及ビソノ以南チイフ。

（二八）海豐ハ今ノ山東省武定府海豐縣ノ地ニシテ今ニ海豐縣ト稱ス。深州ハ今ノ直隸省保定道ノ深縣ノ地ナリ。井鹽右ノ法參照。

の（二七）遼、冀、山東、兩淮、閩、浙、廣南各地に產出するものがそれである。井鹽は井鹵を取つて煎錬して作るもので、今の四川、雲南に產出するものがそれである。池鹽は河東の安邑、西夏、靈州に產出するものである。現今では解州だけこれが採取を行つて居るが、それは鹵を導き入れる地面に畦隴を作つて塹濠を圍し、それに清水を導き注いで久しい間累積すると、畦全面が赤色になる。かくて夏から秋までそのまま置くと、やがて南風が大いに吹き初め、一夜の內に結晶して鹽が出來上るのである。その地ではこの風を鹽南風と呼ぶ、この南風がもし盛に吹かないならば忽ち鹽の不作である。製鹽畦に濁水が沈澱して鹽中に凝著することは大の禁物だ。（二八）海豐、深州のものも海水を池に引入れて曬し作つたものである。


（井鹽）

幷州、河北に産するものは皆(一九)鹻鹽であつて、鹻土を刮り取つて煎錬して作る。階州、成州、(二〇)鳳州、四川の産は皆崖鹽であつて、土崖の間に生ずる白礬のやうな狀態のものだ。また生鹽ともいふ。以上五種の鹽はいづれも食鹽であつて、上は國家、宮廷の所用に供し、下は人民箇箇の營養の料となる。海鹽、井鹽、鹻鹽の三者は人工に依つて製出するもの、池鹽、崖鹽の二者は天然に生産するものである。周禮に「鹽人は鹽の政令を掌る。祭祀にはその苦鹽、散鹽を供し、賓客にはその形鹽を供し、王の膳羞にはその飴鹽を供す」とあつて、苦鹽とあるは顆鹽のことだ。顆のまま池から出るもので、まだ人工を加へない味の鹹苦なものである。散鹽とあるは末鹽のことだ。海、及び井から出る鹻を煮て作るもので、いづれ



(石鹽)

(一九) 鹻ハ鹹書セル鹵。

(二〇) 鳳州ハ今ノ陝西省漢中道鳳縣ノ地ナリ、階ヲ下レル誤トス。階州ハ玉ノ誤ナリ。成州ハ隴西ノ誤ナリト見ユ。

も散末である。形鹽とあるは印鹽のことだ。鹽を虎の形に刻んだものだが、或は積鹵が虎の形に結晶するものだともいふ。飴鹽とあるは飴を拌ぜて製したものだ。或はその物が戎地から天然に産出するともいひ、味甘く、美味なものである。その他種類の上からいへば、更に山崖に生ずる崖鹽あり、土中に生ずる戎鹽あり、井に生ずる傘子鹽あり、石に生ずる石鹽あり、樹に生ずる木鹽あり、草に生ずる蓬鹽がある。造化の物を生ずる玄妙さは誠に測り知るべからざるものである。

修 治 時珍曰く、凡そ鹽の製造、販賣業者は多くは礬、消、灰、石の類を混入するものだ。藥に入れるには必ず水に溶し澄して脚滓を取去り、煎鍊した白色のものを用うるが良い。

大鹽 氣 味 【甘く鹹し、寒にして毒なし】 別錄に曰く、食鹽は鹹し、溫にして毒なし。多く食すれば肺を傷め、よく欬を出す。權曰く、小毒あり。時珍曰く、鹹くして微し辛し、寒にして毒なし。保昇曰く、多く食すれば顏の色澤を失ひ、皮膚を黑くし、筋力を損ずる。之才曰く、漏蘆が使となる。斅曰く、敝簞は鹵を淡くし、烏賊骨も鹵を淡くする。

【主治】【腸、胃の結熱、喘逆、胸中の病。人をして吐かしめる】（本經）【傷寒寒熱、胸中の痰癖を吐し、心腹の卒痛を止め、鬼蠱、邪疰の毒氣、下部の䘌瘡を殺し、肌骨を堅くする】（別錄）【風邪を除き、惡物を吐下し、蟲を殺し、皮膚の風毒を去り、臟腑を調和し、停滯せる物を消化し、人體を壯健ならしめる】（藥性）【水臟を助ける。また霍亂、心痛、金瘡に用ゐ、目を明にし、風淚を止める。邪氣、一切の蟲傷、瘡腫、火灼瘡に肉を長じ、皮膚を補ふ。大小便を通じ、疝氣を療じ、五味を滋くする】（大明）【空心に齒に揩れば、水を吐し、目を洗へば夜間小字を見得る】（甄權）【毒を解し、血を涼し、燥を潤し、痛を鎭め、痒を止め、一切の時氣、風熱、痰飮、關格の諸病を吐かす】（時珍）

【發明】弘景曰く、五味のうちこれだけは缺くべからざるものであるが、西北方の人民は鹹い食物に耐へないけれども多くは長壽を保ち、病が少く、顏色が好い。東南方の人民は鹹い食物を甚しく欲して壽命は短く、病が多い。これを觀ると、この物が人體を損じ肺を傷める結果のやうに思はれる。けれどもこの物で魚肉を浸せば長く保存して腐敗せず、布帛を沾せば朽爛し易い。用途の如何に依つてそれぞれ

適不適が別れるのだ。宗奭曰く、素問に『鹹は血に走る』とある。それで東方の魚鹽を食ふ人民には黒色のものが多いのであつて、これは血に走るの實證である。喘嗽を病むもの、及び水腫の者は全然これを禁ずるが宜い。北狄の習俗としてこれを用ゐて屍體を漬けるのは、屍體の敗壞を防ぐことを目的とするのである。金銀を燒剝して溶した汁を藥にするには解州の大鹽を用うるが佳い。

時珍曰く、洪範には水を『潤下にして鹹をなす』といひ、素問には『水の生ずる鹹そのものは鹽の根源だ』といつてある。そもそも水なるものは天地の間に周流して潤下する性のもので、如何なる處にも必ず在る。その味は鹹味をなすもので、凝結しては鹽となる。これまた如何なる處にも必ず在る。人體に在つては血脈がこれに相應するもので、鹽の氣、味は鹹、腥であり、人の血もまた鹹、腥である。鹹なる味は血に走るものだから、血病には鹹を多食してはならぬ。多く食へば脈が凝泣して色が變ずる。これは其の類に從ふの現象だ。鹽を煎製するには皂角を用ゐて取收めるものだから鹽の味は微し辛く、辛は肺に走り鹹は腎に走るものだから、喘嗽、水腫、消渴のものには大いに鹽を忌むことになつて居る。その理由は或は痰を引い

て吐し、或は血脈を泣し、或は水邪を助くるものだからである けれども鹽はあらゆる病に主効あるもので、あらゆる病に之を用ゐぬは無いのである。されば補腎の藥を服するに鹽湯を用ゐるは、鹹は腎に歸し藥を引いてその腎臟に入るからである。補心の藥に炒鹽を用ゐるは、心の虛に苦むに對し鹹を以て補ふのである。補脾の藥に炒鹽を用ゐるは、虛すればその母を補ふの法則であつて、脾は心の子だからである。積聚、結核を治するにこれを用ゐるは、鹽はよく堅きを耎にするからである。諸癰疽、眼目、及び血病にこれを用ゐるは、鹹の血に走る力を利用するのである。諸風、熱病にこれを用ゐるは、鹽の性は寒であり、寒を以て熱に勝たしめるのである。大小便の病にこれを用ゐるは、鹹はよく潤下するものだからである。骨病、齒痛に之を用ゐるは、腎は骨を主るもので、腎に歸する鹹は骨に入るものだからである 吐藥にこれを用ゐるは、鹹は水を引いて凝聚せしむるものだからであつて、豆腐を凝收せしめると同じ意味である。諸蠱、及び蟲傷にこれを用ゐるは、その毒を解する力を利用するのである。

○頌曰く、唐の柳柳州の纂救三死方に『元和十一年十月、霍亂を發して上には吐く

を得ず、下には利するを得ず、三大斗ほどの冷汗を出して氣息が絶えたとき、河南の房偉からこの方を傳へて服用し、藥を口に入れると直に吐して、絶えた氣息が復活した。(二一)その法は、鹽一大匙を熬つて黄色にし、童尿一升に合和して溫服する。少頃して吐下して直に癒える』とある。

「附方」 舊四十二、新二十七。

【鍊鹽黑丸】 崔中丞の鍊鹽黑丸の方。鹽末一升を粗瓷瓶に充てて頭を泥で塞ぎ、初めは(二二)煻火で燒いて漸次に炭火を加へる。但し瓶の破れぬやうに注意する。やがて內部まで赤く燒け徹つて鹽が米汁の如くなつた時火を取去り、凝り固つてから瓶を破つて取出し、また豉一升を熬煎し、桃仁一兩を麩に和して炒熟し、巴豆二兩を心膜を去つて紙の中で炒つて油を出し——生、熟の程度を適當ならしめることが肝要だ。熟に過ぎれば力が少く、生に過ぎれば害がある——以上の四物を搗き勻ぜ、蜜を入れて和して梧子大の丸にし、三丸づつを早朝に服す。天行時氣には豉汁、及び茶で服す。心痛には酒で服す。口に入れれば直に止る。血痢には飲で服すれば血痢から水痢に變じて後に止る。鬼瘧には茶、飲で服す。骨蒸には蜜湯で服す。これには長く冷した漿水を忌むが、合藥して久しき時はやや之を

(二一) 其法、金陵本ニ一法ニ作ル。誤刻ナルコト明ナリ、故ニ改ム。

(二二) 煻音堂、煨火ナリ。

(二三)大觀本草ニハ、藥字ノ下ニ一刀圭ノ三字アリ。

加へる。凡そこの藥を服して後、吐、利しても疑惧するには及ばない。若し吐、利が甚だ多き場合には黃連汁を服して止める。若し又、患者が殺藥の質で藥の效力が久しきに亙つて發生せぬ場合には、更に一二丸を服す。服藥後二三日間は食合せに注意を要する。この藥は臘月中に合せて瓷瓶に入れて密封し、氣の洩れぬやうにして保存して用うれば、一劑で百人の病を救ふことが出來る。或は旅行の途中、或は邊僻の村落に住んで他に藥を求める便宜のない場合の如きは、ただこの(二三)藥を用ゐるがよい。數兩の大黃、朴消に匹敵する。その效力は曾て實驗を經て居るものである。但し小兒、女子は攪作を發するものだから服せぬがよい。(劉禹錫傳信方)【卒中尸遁】その病狀は腹脹し急して心に沖し、或は塊のやうに隆起し、或は腰、脊を牽き吊るものである。鹽湯を服して吐かす。(孫眞人方)【尸疰鬼疰】下部に蝕瘡を生ずるには、炒鹽を布に裹んでその上に坐り、また熨す。(藥性論)【鬼擊中惡】鹽一盞、水二盞を和して服し、冷水を吹きかくれば甦る。(救急方)【中惡心痛】或は腰、臍に連つて痛むには、鹽を雞子大ほど青布に裹んで赤く燒き、酒中に入れて頓服する。惡物を吐して癒える(甄權藥性論)【中風腹痛】鹽半斤を熬つて水を乾し、それを口

（二四）大觀本草ニハ、冷水盡升ニ作ル。
（二五）氣海、經穴ノ名、臍下一寸ト分ニアリ。

中に入れて熱湯（二四）三升を飲めば吐いて癒える。（肘後方）【脫陽虚證】四肢厥冷して人事不省となり、或は小腹緊痛して冷汗、氣喘するには、炒鹽で臍下（二五）氣海を熨し煖める。（救急方）【心腹の脹堅】痛悶して死せんとするには、鹽五合を水一升で煎じて服し、吐、下すれば直に鎭る。吐かぬときは更に服す。（梅師方）【腹脹氣滿】黑鹽六銖を酒で服す。（後魏書）【酒肉の過食】脹滿して不快なるには、鹽花を二三囘牙に擦つて温水で漱下すれば、雪に湯を沃いだやうに淸快になる。（簡便方）【乾霍亂病】上には吐かず、下には利せぬもの。方は發明の項を見よ。【霍亂腹痛】炒鹽一包でその心腹を熨して熱氣を透らしめ、又一包でその背を熨す。（救急方）【霍亂轉筋】瀕死の狀態で氣絕し、腹に暖氣あるものには、鹽で臍中を塡め、その鹽の上に七壯灸すれば甦る。（救急方）【肝虚の轉筋】肝臟が氣虚し、風冷が筋を搏つて、全身が轉筋し、腹に入つて忍び難きものには、熱湯三斗に鹽半斤を入れ、やや熱して漬ける。（聖惠方）【一切の脚氣】鹽三升を蒸熱し、裹み分けて壁際に置いて脚で踏み、脚の心を熱せしめる。又、槐白皮に和して蒸すが尤もよし。每夜この方を用ゐる。（食療本草）【脚氣疼痛】每夜鹽で腿部、膝部から摩擦して足の甲まで擦り降し、少時の間

足の甲をその鹽に漬けて熱湯で泡洗する。ある患者に試みて實驗がある。（救急方）【胸中の痰飮】傷寒、熱病、瘧疾で吐かすべきものには、いづれも鹽湯を用ゐて吐かす。（外臺祕要）【病後の脇脹】天行病の後、兩脇の脹滿するには、熬鹽で熨す。（外臺祕要方）【姙婦の心痛】忍び難きには、鹽を赤く燒いて酒で一撮を服す。（產寶）【逆產】鹽で產婦の腹を摩擦し、並に產兒の足底に塗つて急に爪で搔く。（千金方）【婦人の陰痛】靑布に鹽を裹んで熨す。（藥性論）【小兒の疝氣】並に內吊腎氣には、葛袋に鹽を盛つて戶口に懸け、病兒の父母がその鹽の無くなるまで手で撚り揉めば癒える。（日華子本草）【小兒の排尿せぬもの】鹽を臍に置いてその上へ艾で灸する。（藥性論）【小便不通】濕紙に白鹽を包んで燒き、少量を尿孔中に吹き入るれば立ろに通ずる。（普濟方）【氣淋臍通】鹽を醋に和して服す。（廣利方）【兩便不通】鹽を醋に和し、臍中に傅けて乾けば取換へ、鹽汁を肛內に灌ぎ、同時に內用として鹽を紙に包み水中に投じて飮む。（家藏方）【漏精白濁】雪白鹽一兩を堅く築き固めて一日煅き、火毒を出して白茯苓、山藥各一兩と末にし、棗肉と蜜で和して梧子大の丸にし、三十丸づつ棗湯で服す。蓋し甘は鹹を濟ふために脾、腎兩ながら適效を得るのである。

〔三六〕瀝却水トハ熱鹽水ノ滴ドセシムルモノナラン。

(直指方)【下痢肛痛】忍ぶべからざるには、熬鹽を包んでその上に坐して熨す。(肘後方)【血痢の止まぬもの】白鹽を紙に包んで焼き、研つて粥で調へて三四回食へば止む。(救急方)【中蠱吐血】或は血の肝の如きものを下すには、鹽一升、醋一升を煎じ化し、頓服して吐けば癒える。支太醫の方である。(小品方)【金瘡出血】出血甚しきものは、その血が若し冷えれば死亡する。炒鹽三撮を酒で調へて服するがよし。(梅師方)【金瘡中風】鹽を熱く煎じ、匙で(三六)瀝却水を抄つて熱きまま瘡上に瀉いで冷えれば更に易へ、一日間斷なく試みれば瘥を取るに大效がある。(肘後方)【小兒の撮口】鹽を搗き、臍上に貼つて灸する。(子母秘錄)【笑ひ休まざる病】滄鹽を赤く煆いて研り、河水を入れて煎沸し、それを啜つて熱痰數升を探吐すれば直に癒える。素問に『神有餘なれば笑ひ休まず』とあつて、神は心の火であり、その火が風に遭へば焔を出す。これが笑となつて現れるのである。半年程この病に罹つたある婦人患者に對し、張子和がこの方を用ゐると遂に癒えた。(儒門事親)【酒に醉はぬ法】凡そ酒を飮むに先つて鹽一匕を食つて後に飮めば平常の倍は飮める。(肘後方)【明目、堅齒】翳を去り大いに老眼を利す。海鹽を百沸湯で泡散してその淸汁を銀、石器で熬め、

雪白の鹽花を取つて新しき瓦器に盛り貯へ、毎早朝牙に揩つて水で含漱し、また大指の甲にその水を點けて目を洗ひ、少時目を閉ぢ靜坐して後洗面する。これは洞視千里法と名け極めて神效がある。（永類鈐方）【風熱の牙痛】槐枝の濃煎湯二盌に鹽二斤を入れて煮乾し、炒り研つて日毎にそれを牙に揩り、水で目を洗ふ。（唐瑤經驗方）【齒䘌齒動】鹽半兩、皂莢二挺を共に赤く燒いて研り、毎夜齒に揩る。一个月後には必ず痊えて齒が牢固となる。（食療本草）【齒齦宣露】毎早朝鹽を噙み熱水を含むこと百遍すれば五日の後には齒が堅牢になる。（千金方）【齒疼出血】毎夜鹽末で厚く齒齦を封じ、汁が盡く瀝出してから就寢する。その汁の出る際には休まず齒を咬み動す。かくすれば十夜を過ぎずして疼と血が止む。豬、魚、油菜等を忌む。極めて效驗あるものである。（肘後方）【喉中に肉の生ぜるもの】箸の先を綿で裹み、それに鹽を點けて一日五六回づつその肉に揩る。（孫眞人方）【（二七）帝鍾喉風】長さ半寸ほど垂下するには、食鹽を煆いて頻に點ければ消く。（聖惠方）【風病、耳鳴】鹽五升を蒸熱して耳を當てて枕し、冷めればまた易へる。（肘後方）【突然の耳の疼痛】方は上に同じ。【目中に淚の出るもの】鹽を目中に點けて冷水で洗ふ。數回で痊える。

（二七）帝鍾喉風ハ喉痺ノ一種。

（范汪方）【目中の浮瞖】瞳を遮るには、白鹽を生で研つて少量づつを頻に點ける。屢ゝ奏效の實驗がある。小兒にもよし。（直指方）【小兒の目瞖】生じては消え、消えては生じ、漸次に擴大して瞳を侵すには、白鹽少量を燈心に蘸けて一日三五回づつ點ける。痛まず礙らず、屢ゝ奏效の實驗がある。（活幼口議）【塵物の眯目】少量の鹽、豉を水中に置いて視詰むれば立ろに出る。（孫眞人方）【酒皶赤鼻】常に白鹽を擦るが妙である。（直指方）【口鼻の急疳】蝕爛し腐臭するには、斗子鹽、白麪等分を末にしてその都度吹く。（普濟方）【顏面の惡瘡】五色のものには、鹽湯に綿を浸して瘡上に搨れば五六回で瘥える。（藥性論）【身體皮膚上に蟲の匍ふやうに感ずるもの】風熱である。鹽一斗、水一石の煎湯で三四回浴する。また一切の風氣を療する。（外臺祕要）【瘡癬の痛痒】發生の初期には、鹽を嚼んで頻に擦るが妙である。（千金翼）【手足心毒】風氣毒腫である　鹽末、椒末等分を醋で和して傅ければ立ろに瘥える　（肘後方）【手足の疣目】鹽をその上に傅けて舌で舐れば三回を過ぎずして瘥える。（肘後方）【熱病で蠶を生ずるもの】下部に瘡あるには、熬鹽で熨す。三回以内でよし。（梅師方）【一切の漏瘡】故布に鹽を裹んで赤く燒き、末にして一錢づつ服す。（外臺祕要）

（二八）雲南ヨリ貴州ニ入リ湖南ノ界ニ亙ル烏蒙山脈ノ主峯ニシテ、今ノ雲南省昭通縣ノ北ニ在リ。又、コノ地一帶ノ蠻族ヲ烏蒙蠻ト稱ス。昭通縣東二十支里ニ舊蠻部落アリ。

【年を經たる臁瘡】鹽の中の黑泥を曬し研つて搽る。（永類方）【蠼螋尿瘡】鹽湯に綿を浸して瘡の上に搨る。（食療本草）【蜈蚣の咬傷】鹽を嚼んで塗り、或は鹽湯に浸すが妙である。（梅師方）【蚯蚓の咬毒】大風の如き症狀となり、眉髮の脫落するには、ただ濃く煎じた鹽湯に數回全身を浸せば癒える。浙西の軍將張韶がこの病に罹り、毎日夕刻になると體中に蚯蚓の鳴聲が聞えるのであつたが、ある僧がこの方を用ゐると平安になつた。蚯蚓は鹽を畏れるものである。（經驗方）【蜂蠆の叮螫】鹽を嚼んで塗る。（千金方）【黃蠅の毒を解す】（二八）烏蒙山の峽谷には小黃蠅が多い。これは毒蛇の鱗の中に生ずるもので、嚙まれても當時は判らぬが漸次に瘡となるものだ。これは搔いてはならぬ。ただ冷水を沃ぎ、鹽少量を搽れば瘡にならぬ。（方輿勝覽）【毒蛇の螫傷】鹽を嚼んで傷に塗り、三壯灸してその灸痕へも鹽を嚼んで塗る。（徐伯玉方）【虱の出る怪病】臥床中全身に虱が發生し、取集めれば五升程にもなり、ために血、肉倶に壞れ、虱は更に一夜毎に增加して痛痒名狀し難く、病牀に臥して水ばかり飲み、晝夜號泣して舌端から出血して止まず、身體と齒と倶に黑くなり、唇動き鼻開くには、ただ鹽醋湯を飲めば十數日で平安になる。（夏子益奇疾方）【狼毒の毒を解

す】鹽汁を飲む。（千金方）【藥箭の毒氣】鹽を瘡上に貼つて三十壯灸するが良し。（集驗方）【溺死者】木の倚子に足を上に投げ出して臥さしめ、鹽を臍中に擦つて水が自ら流出るを待つ、決して倒に引揚げて水を出させてはならぬ。（救急方）【潰癰の痒きもの】鹽でその四圍を摩擦すれば止る。（外科精義）

戎鹽（本經下品）

和名　鹽化曹達の昇華
英譯名　Sublimate of sodium chloride (NaCl)

釋名　**胡鹽**（別錄）　**羌鹽**（日華）　**靑鹽**（綱目）　**禿登鹽**（唐本）　**陰土鹽**　大明曰く、西番地方で食料にするものだから戎鹽、羌鹽と稱するのである。恭曰く、戎鹽、卽ち胡鹽である。(一)沙州では禿登鹽と呼び、(二)廓州では陰土鹽と呼ぶ。河岸や山坂の陰土の石間に生ずるから名けたものだ。

集解　別錄に曰く、(三)胡鹽山、及び西羌の北地、(四)酒泉の福祿城の東南隅に生ずる。北海は青く、南海は赤い。十月に採收する。當之曰く、戎鹽は味苦く臭い。これは山石に澆いだ海の潮水が長い年月を經て鹽に凝結し、石に附着して居るものを取るのである。北海のものは青く、南海のものは赤い。

(一) 沙州ハ馬腦ノ註ヲ見ヨ。
(二) 廓州ハ唐ニ今ノ甘肅省巴戎縣ノ南黄河ノ北岸ニ移ス。モト廓州ハ北周ニ置ク。即チ澆河城ナリ、太平寰宇記ニ所謂故ノ廓州城ナリ。
(三) 胡ノ鹽山未考。此ニ胡トイフハ北方ヲ指スモノノ如ク。今ノ内蒙古黄河ノ最北流、包頭鎭ノ西、今ノモルゲン山、ムニウラ山等ヲ漢以前ニハ陰山ト稱シ、黄河以内クズプチ沙地ノシラブリト湖ヲ古ハ鹽澤ト稱シタレバ或ハ此地方ノ概稱ニハ非ズヤトモ思ハル。
(四) 今ノ甘肅省ノ肅州即チ酒泉縣ハ古ノ酒泉郡治ニシテ、城下ヲ後漢ニ福祿城ト稱ス、

弘景曰く、史書に言ふ『(五)虜中の鹽に有る九種』の內、白鹽は食鹽、平常の食料とするものである。黑鹽は腹脹氣滿に主效がある。胡鹽は耳聾、目痛に主效がある。柔鹽は(六)馬脊瘡に主效がある。又、赤鹽、駮鹽、臭鹽、馬齒鹽の四種があつて、これはいづれも食料には入れない。馬齒は大鹽のこと、黑鹽は鹵鹹のことをいふらしく、柔鹽は戎鹽のことらしい。しかし近來は戎鹽をも胡鹽と呼ばれて、二三名稱と事實とが混亂されて居る。現に戎鹽は虜中に甚だ豐富に有つて、(七)涼州からも來れば(八)燉煌からも來る。その形狀は塊片になつてゐて、或は雞や家鴨の卵ほどのものもあり、菱米ほどのものもあり、紫白色で味は甚だ鹹くない。これは口に嘗め氣を嗅いで見て宛ら孵化せぬ雞卵のやうな臭味のものならば眞物である。又、河南の鹽池の泥中に自然に生ずる凝鹽に、石片のやうな狀態で打ち破れば皆青黑色のものがある。よく馬脊瘡の治療に功のあるものであるが、これも戎鹽そのものらしい。又、(九)巴東の朐䏰縣の北崖にある鹽井は、その鹽水が自然に凝結して繖子鹽となる。その大さは一二寸のもので中央が突張し、繖(傘)のやうな形態だ。また四角で石膏のやうなものや(一〇)博棊のやうなもののもある。

(五)虜中トハ中國治域外ノ諸地方ヲ指ス。西ハ裏海、黑海ノ地方ニ亘ル。

(六)病名ニ馬脊病見エズ。馬ノ脊ノ瘡ト解ス可キガ如シ。

(七)涼州ハ空靑ノ註ヲ見ヨ。

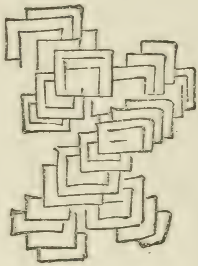
(八)燉煌ハ雄黃ノ註ヲ見ヨ。

(九)巴東ハ郡名、後漢ノ劉璋巴郡ヲ分ツテ巴東郡ヲ置ク、今ノ四川省雲陽縣奉節縣等ノ地ナリ。唐ニ廢ス。當時ノ朐䏰縣ハ今ノ雲陽縣ノ地ナリ。

(一〇)博棊ハ棊石、

（二）塊ハドテ。又ナカ。

恭曰く、戎鹽、卽ち胡鹽であつて、河岸の崖や山坂の陰土、石間に生じ、大小一定せず、堅く白くして石のやうなものだ。燒いても鳴咤の音を發てぬ。宗奭曰く、戎鹽は（二）塊を成して生ずるもので、裁ち切れば枕のやうになる。細く、白く、味は甘く鹹い。


（戎　鹽）

頌曰く、陶氏の所説の九種の鹽に就いては、今一般にはその全部を識り得ない。醫家が眼疾の治療、及び補下藥として多く用ゐて居る靑鹽が恐らく戎鹽そのものであらう。本草に『北海は靑く、南海は赤し』とあるが、現に西羌から來る靑鹽は、形塊には方稜があつて、明に透き澈り、靑黑色のものである、誠に奇なるものだ。北海から來るものは大塊で光が瑩でなく、又、蜂の窠のやうに多くの穴があり、色も西鹽よりは淺い。彼地ではこれを鹽枕といふ。藥用としてはやや劣るものだ。北胡にはまた白石を碎いたやうな片屑になつた一種の鹽がある。彼地ではこれもやはり靑鹽と呼び、箱入などにして鹽枕と共に贈答品

(一二)姜賴ノ墟未考。
(一三)晉初ヨリ隋末頃マデ今ノ熱河朝陽縣治ヲ龍城ト稱シタルモ、涼州ノ地ニハ非ズ。此ニイフ龍城ナホ詳ナラズ。本草釋名ノ鹽山ノ註參照。
(一四)青鹽池即チシラプリト湖ヲイフガ如シ、コノ湖ハ後漢富時ヨリ青鹽澤ト稱シタリ。
(一五)眞臘記即チ眞臘風土記ハ元ノ周達觀ノ著書、眞臘トハ今ノ安南ノ南部、及ビ暹羅ノ東部ノ地ニシテ、古ノ國名ナリ。元ノ成宗ノ時招撫使ヲ派遣ス、達觀乃チソノ行ニ加ツテ親シク見聞スル所ヲ記セルモノナリ。
(一六)交河ハ直隸省河間府ニ屬スル一縣名ナリ。

に用ゐてゐるが、これは一體何種類に屬するものか判らない。

○○時珍曰く、本草には戎鹽の條に『北海は青く、南海は赤し』とあり、諸家の注では白鹽をそれに該當せしめてあるが、本文とは合致しないやうである。按ずるに、涼州異物志に『(一二)姜賴の墟は今は(一三)龍城と稱する。剛鹵千里にわたり、蒺藜の形をなし、その下に鹽が碁子を累ねたやうに生ずる。胡國に出づるが故に戎鹽と名ける』とあり、その讃に『鹽山の二岳、二色質を爲す。赤き者は丹の如く、黑き者は漆の如く、小大意に從つて、之を鏤めて物と爲す。獸と作せば惡を辟け、之を佩ぶれば吉を爲す。或は戎鹽と稱す、以て疾を療すべし』とあつて、この說の方が本草の本文と合致する。しかしまた赤、黑の二色のみを擧げて白色のものに言及せぬのは、蓋し白きものは光明鹽であつて、青鹽、赤鹽が戎鹽なのである。故に、西涼記に『(一四)青鹽池に出る鹽は正方で大さ半寸ばかり、その形石のやうで甚だ甘美だ』といつてある。(一五)眞臘記には『山間に味の鹽に勝る石があつて、雕琢すれば器になる』とあり、梁の杰公傳には『(一六)交河の附近で石原を數尺深く掘下げると紫鹽がある。紅のやうでもあり紫のやうでもあり、色が鮮で甘い。その下を更に一丈ほど掘下げ

ると堅珀がある』とある。北戸錄にもやはり『(一七)張掖の池中から桃花鹽が出る。色は桃花のやうで、月の滿ち缺けに隨つて或は盈ち或は縮む』とある。今の(一八)寧夏の(一九)涼州に接近した地方の鹽井に出る青鹽は、方形の皎潔なもので石のやうだ。山丹衞は卽ち張掖の地で、その池に產する紅鹽は紅色だ。この二鹽こそ戎鹽の青、赤二色である。醫方には青鹽のみを用ゐて紅鹽をば用ゐないが、實は二鹽ともに戎鹽と名ける。また所謂南海、北海の別は(二〇)西海に於ける南北をいふのであつて、中華の南の方向に在る南海の意味ではない。張杲の玉洞要訣には『赤戎鹽は西戎に產し、自然の水、土の氣を稟けてその質を結成するもので、その土地の水、土の氣が黃、赤だから鹽もやはりその土氣に隨つて生ずるのだ。味は石鹽より淡く、力はよく陽精を伏する。これは火中で燒けば汁が紅赤に凝定して、更にますます赤くなるものが眞物で、また絳鹽とも名ける』とある。抱朴子の書には赤鹽を作るの法があり、又、嶺南地方に一種の紅鹽があるが、それは染めて作つたものでいづれも眞の紅鹽ではない。また丹房鑑源には『蠻鹽は雌黃、雄黃を伏し得る。紅鹽が上等品だ』とある。

(一七)張掖ハ今ノ甘肅省ノ甘州。
(一八)寧夏ハ今ノ甘肅省ノ寧夏縣。馬腦ノ註參照。
(一九)涼州ハ空青ノ註ヲ見ヨ。
(二〇)西海トハ今ノ裏海、黑海又ハ地中海ヲ指スモノノ如シ。

氣味　【鹹し、寒にして毒なし】宗奭曰く、甘く鹹し。大明曰く、平なり。獨孤滔曰く、戎鹽の赤、黑二色のものは、能く卵を累ね、汞を乾し、丹砂を制す。

主治　【目を明にする。目痛に氣を益し、肌骨を堅くし、毒蠱を去る】（本經）【心腹痛、尿血、吐血、齒舌の出血】（別錄）【水臟を助け、精氣を益し、五臟の癥結、心腹の積聚、痛瘡、疥癬を除く】（大明）【芫青、斑蝥の毒を解す】（時珍）

發明　宗奭曰く、戎鹽は甘、鹹であつて、その功力は（三二）血を却け、腎に入り、日中の瘀赤、濇昏を治するに任る。時珍曰く、戎鹽の功力は食鹽に同じ、煎錬を經ずして鹹き味に甘を帶ぶるものが藥に入れて勝れて居る。周禮の注に『飴鹽は味甜し、卽ち戎鹽なり』とあるが、果して然るや否やは判らない。或は飴を鹽に拌和したものだともいふ。

附方　新五。【小便不通】戎鹽湯——彈丸大の戎鹽一箇、茯苓半斤、白朮二兩を水で煎じて服す。（仲景金匱方）【風熱牙痛】青鹽一斤を先づ槐枝半斤、水四盌で二盌に煎じ詰めた汁で煮て煮乾し、炒り研つて日毎に牙に揩り目を洗ふ。（唐氏經驗方）【牙を牢くし、目を明にする】青鹽二兩、白鹽四兩を先づ川椒四兩の煎汁に拌ぜて

（三二）血ヲ却ケトハ逆上怔衝等ヲ緩和スルヲ云フ。

炒乾し、日毎に牙に揩り日を洗へば永く齒疾、目疾を患はぬ。(通變要法)【風眼爛弦】戎鹽を水に溶して點ける。(普濟方)【痔瘡、漏瘡】白礬四兩、青鹽四兩を末にし、豬の膀胱一箇に入れて陰乾し、五錢づつを空心に溫水で服す。(趙氏經驗方)

光明鹽(唐本草)

和名　結晶せる岩鹽・石鹽・山鹽
學名　Rock-salt, Halite

【釋名】石鹽(唐本)　聖石(蜀本)　水晶鹽(綱目)　時珍曰く、雷斅の炮炙論の序に『聖石は盲を開き目を明にして雲の日を離るるが如くならしむ』とある。これで見ると光明とは形色とその功力とを兼ねた名稱だ。

【集解】恭曰く、光明鹽は(一)鹽州の五原に生ずる。(二)鹽池の下を鑿つて取るもので、大なるは升ほどあり、いづれも正方で光が透き徹る。頌曰く、現に(三)階州から出る一種の石鹽は山石中に生ずるもので、煎錬を經ずして自然に甚だ色の明瑩な鹽になつて居る。彼の地のものは甚だ高價のものとして扱ひ、これが光明鹽だといつて居る。

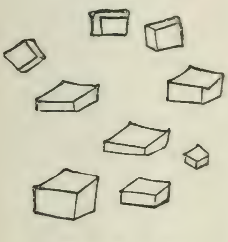
時珍曰く、石鹽には山に產するものと水に產するものとの二種あつて、山に產す

(一)唐ノ鹽州ハ楊氏唐地理志圖ニ據レバ今ノ陝西省ニ當シ、長城ノ南、靖邊縣ノ西南、定邊縣ノ東南、洛河河源ノ白於山ノ南麓ニ在リテ、州治ハ即チ五原ナリ。

(二)鹽池ハ此ニハ五原附近ニ在リタル鹽池ヲ指シタルガ如シ、但シ唐ノ鹽州ノ西、省境ヲ越ヘテ甘肅省靈縣ノ南方ニ唐ノ鹽池縣アリテ今モ鹽池ト稱ス。此ノ附近一帶黃河ノ子流ニ沿ノテ散在スル沼湖ハ多クハ鹽池ナル名ヲ呼バル。由來鹽ノ產地ナリ。

(三)階州ハ玉ノ註ヲ見ヨ。

るものは卽ち厓鹽である。一名生鹽といひ、山厓の間に生ずる白礬のやうな狀態のもので、階、(四)成、(五)陵、(六)鳳、永、(七)康の諸州各地に產出する。水に產するものは池底に生じ、水晶か石英のやうな狀態のものだ。西域の諸處に產出する。吳錄に『天竺に新淘水といふ味の甘美なものがあつて、その下に白きこと水晶のやうな石鹽がある』とあり、又『波斯には自然の白鹽で細い小石のやうなものが出る』とあり、金幼孜の北征錄には『北蠻地方には鹽の湖があつて、そこから水晶のやうに瑩潔な白鹽が出る。又、鹽池といふがあり、その鹽は色が或は靑く或は白い。軍隊はそれを採つて食料にする』とあり、これ等はいづれも水產のものに關する記載である。梁の四公子傳に『(八)高昌國の燒羊山には鹽が出る。大なるは斗ほどあつて玉のやうに白く、滿月の時に採ればその文理が粗くて氷のやうに明澈だが、月の晦い時に採ればその文理が密である』とあり、金樓子に『(九)胡中の白鹽は崖に生ずるもので、月が映ると光明洞澈して水晶のやうに見える。胡人はそ



（光明鹽）

(四) 成州ハ今ノ甘肅省渭川道ノ成縣ノ地ナリ。
(五) 陵州ハ今ノ四川省仁壽縣ノ地ナリ。
(六) 鳳州ハ食鹽ノ註ヲ見ヨ。永州ハ滑石ノ註ヲ見ヨ。
(七) 康州ハ石炭ノ註ヲ見ヨ。
(八) 高昌國ハ今ノ新疆省土魯番ノ地ナリ。
(九) 胡中トハ外國ノ意。

れをその國の首長の食料に供して君主鹽と呼び、また玉華鹽とも呼ぶ』とある。これ等は山に産するものに關する記載である。いづれも天然の鹽だ。所謂天成のものである。また益州記には『(一〇)汶山に鹹石といふがあつて、水に漬けて煎ずれば鹽になる』とある。これも石鹽の類でやや同じからぬものである。

【氣味】【鹹く甘し、平にして毒なし】

【主治】【頭痛、諸風、目赤痛、(一一)眵涙多きもの】(唐本)

【發明】時珍曰く、光明鹽は清明の氣を得たもの、鹽の至精である。故に頭風、眼目の諸藥に入れて尤も良い。その他の功用は戎鹽と同様だが力がやや次位に下る。

鹵鹹 (本經下品)

和名 鹽化曹達と他の鹽類との混合蒸皮
英譯名 Efflorescence of sodium chloride mixed with other soluble salts

【釋名】鹵鹽 寒石(吳普) 石鹹(補遺) 時珍曰く、鹹に二音あつて、咸と發音するは潤下する味を表し、減と發音すれば鹽土の名を表すことになる。後世に鹼と書き鹻と書くがそれである。許愼の說文に『鹵は西方の鹹地なり。故に字は西に從ふ省文で、鹽の形を象したものだ。東方には斥といひ、西方には鹵といひ、河東

(一〇)汶山ハ漢ニ郡ヲ置ク、即チ今ノ四川省茂縣、松潘縣ノ地ナリ。山名、長江ノ水源岷山、一名汶山ト稱ス。花乳石ノ註參照。

(一一)眵ハ目汁凝ナリトアリ。俗ニイフ目ヤニ。

には鹹といふ』とあり、その傳に『兌は澤である。そのものが地にあつては剛鹵となる。また西方の義である』とある。

【集解】別錄に曰く、鹵鹹は河東の池澤に生ずる。弘景曰く、今俗間には鹵鹹なるものを一向見ない。疑ふらくは黑鹽のことであらうといひ、又、是は鹽を煎じる釜の下に凝つた滓だらうといふが、二說共に詳でない。恭曰く、鹵鹹は河東に生ずる。河東鹽は釜で煎じるものでないのだから、凝つた滓でないことは明だ。又疑ふらくは黑鹽だらうといふが、いづれも事實ではない。ここにいふ鹵鹹とは鹼土のことだ。今は一般に皮をなめすに用ゐる。鹼地で掘り取るものだ。頌曰く、幷州地方では鹹を刮つて煎錬するが、質が甚だ佳くないといふ、これが鹵鹹そのものだ。機曰く、鹵鹹とは鹵水のことである。

時珍曰く、說文に既に鹵鹹を皆『斥地の名なり』と言つてあるのだから、凝つた滓とか、鹵水とかいふ說は皆誤で、鹵鹽と鹵鹼とも同じものでない。山西諸州の平野、及び(一)大谷、(二)楡次、(三)高亢などの產地には秋季間にいづれも鹵が生じ、これを遠望すれば水のやうで、近く見れば積雪のやうだ。地方民はこれを刮つて熬めて

(一) 大谷ハ今ノ河南省洛陽縣東ノ地名ナリ。
(二) 楡次ハ今ハ山西省太原府ニ屬ス。
(三) 高亢、未詳

（一）四黄ハ雄黄、雌黄、硫黄、黄礬。
（二）銲、金鐵ノ類ヲ附着セシムル燒キ接ギ藥。

鹽にする。微し蒼黄のものだ。卽ちこれが鹵鹽である。爾雅に所謂『天生を鹵といひ、人生を鹽といふ』とあるそのものだ。凡そ鹽は、まだ苦水を滴り取らぬものは食料とするに堪へぬもので、その苦水卽ち鹵水である。鹵水が滴下すれば澄んで鹽が石のやうに凝結する。それが卽ち鹵鹼である。丹溪が所謂石鹼と稱したものは


（鹵　鹹）

灰鹼のことで、それは土類に載せてある。呉普本草にいふ『鹵鹹、一名鹵鹽』なるものは鹵水の鹽を指すのであつて、鹵地の鹽をいふのではないが、同じ名で呼んでも差支はない。

【氣味】【苦し、寒にして毒なし】別錄に曰く、苦く鹹し、寒なり。獨孤滔曰く、鹵鹽は（一）四黄を制し、金屬を繼ぐ（二）銲藥となり、硇砂と共に鐵を罨ずれば一時軟くなる。

【主治】【大熱、消渴、狂煩、邪を除き、また蠱毒を下し、肌膚を柔くする】

(本經)【五臟、腸、胃の留熱、結氣、心下堅くして食事後に嘔逆し喘滿するを去り、目を明にし、目痛に效がある】(別錄)

附方 (新二)【風熱赤眼】虛腫し、澁痛するには、鹵鹻一升、青梅二十七箇、古錢二十一文を新瓶に入れて密封し、湯中に入れて一炊時の間煮て三日そのままに置き、それを一日三五回づつ點ける。(聖惠方)【齒の腐り、齦の爛れ】大人、小兒に拘らず、上質の好き鹹土を用ゐて熱湯で淋汁を取り、石器で熬り乾して刮り下し、麝香少量を入れて研つて摻る。(宣明方)

凝水石 (本經中品)

和名 硫酸加里と硫酸苦土の複鹽
英譯名 Double salt of Magnesium sulphate and Potassium sulphate

釋名 **白水石**(本經) **寒水石** **凌水石**(別錄) **鹽精石** **泥精** **鹽枕**(綱目) **鹽根** 時珍曰く、片に析いて水中に投ずれば水と同色で、その水を(一)凝動する。又夏季に、これを研末して湯で煮て瓶に入れ、倒に井底へ懸けて置けば凌冰が出來る。それゆゑに凝水、白水、寒水、凌水の諸名があるのだ。多く積んだ鹽の下に生ずるところから鹽精以下の諸名がある。石膏にも寒水石の異稱はあるが、これとは同一物

(一)凝動ハ冰結ノ意。

（二）常山、即チ恒山ハ五岳ノ一、北岳ナリ。今ノ直隷省曲陽縣ノ西北ニ在リ。漢ノ文帝ノ諱チ避ケテ常山ト呼ブ。又、漢、隋、唐ノ郡名、今ノ直隷省正定、趙州ノ地ニ亘ル。
（三）中水縣ハ西漢ニハ涿郡ニ屬シ、東漢ニハ河間郡ニ屬シ、晉ニハ冀州河間國ニ屬ス。今ノ直隷省交河縣ノ地ナラン。
（四）邯鄲ハ土部白堊ノ註チ見ヨ。
（五）河間ハ今ノ直隷省南皮縣、河間縣一帯ノ地ナリ。

でない。

【集解】別錄に曰く、凝水石は色が雲母のやうで析けるものだ。鹽の精である。（二）常山の山谷、（三）中水縣、及び（四）邯鄲に生ずる。弘景曰く、常山、卽ち恒山は幷州に屬し、中水は（五）河間に屬し、邯鄲は趙郡に屬する。これ等の地のものは皆鹹鹵であるところからこれを鹽精といつたのだが、碎けば朴消に似たものだ。この石は末にして水中に置けば夏季でもよく氷になるものが佳いのである。



（凝　水　石）

時珍曰く、別錄に、凝水は鹽の精なりとあり、陶氏も、鹵地に生ずるもので碎けば朴消に似て居るといひ、范子計然には『河東に出る。河東は鹵地だ』といひ、獨孤滔の丹房鑑源には『鹽精は鹽池に出る、水晶のやうな狀態のものだ』といつてある。これ等の諸說に據れば、凝水は鹽精石、一名泥精といふものである。往

昔には鹽枕といひ、今は一般に鹽根といふ。鹵地の積鹽の下に生ずるもので、精液が土中に滲入し、長年月の間に地底に達して結晶する石である。大塊で馬牙消のやうな齒棱があり、水精のやうに清瑩なものだ。また青黑色を帶びたものもある。いづれも暑季になれば(六)回潤し、水に入れて久しく浸せばやはり溶ける。陶氏が戎鹽の注に『鹽池の泥中に自然に生ずる凝鹽は石片のやうな狀態で、打ち破れば皆四角に碎け、青黑色のものがある』といふはこの物のことである。蘇頌が玄精石の注に『解池にある鹽精石は味更に鹵く苦い。これは玄精の類のものだ』といひ、又、(七)食鹽の注に鹽枕を精塊として『穴があつて蜂の窠のやうだ。緘封して贈答品にする』とあるも皆この物である。唐、宋の諸醫はこの石を識らずして石膏や方解石として誤注して居るから、今左にこれを正して置く。

〔正誤〕　恭曰く、凝水石には縱理のものと横理のものとあつて、色の清明なものが上等である。或は、縱理のものは寒水石で横理のものは凝水石だともいふ。今は(八)同州の(九)韓城に出る色の青黃で理の雲母の如きものが良い。(一〇)澄州に出る斜理の文があつて白色のものは劣つて居る。

(六) 回潤ハ溶解ノ意ナラン。

(七) 食鹽ノ註トアルハ戎鹽ノ註ナリ。

(八) 同州ハ今ノ陝西省大荔縣ソノ舊治ナリ。卽チ漢ノ馮翊ノ地、後魏ノ華州、唐ノ同州ナリ。

(九) 韓城ハ清ニナホ同州府ニ屬ス、今ノ陝西省關中道韓城縣ノ地ナリ。

(一〇) 澄州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

頌曰く、今は河東の(一一)汾州、(一二)隰州、及び(一三)德順軍にもあつて、三月に採收する。又、一種の冷油石で全くこれと相類するものがあるが、但し鐺で油を沸騰した中に投ずると油が直に冷えるものならば正しい物である。この石の性は涼で毒があり、誤つて服すれば腰以下が擧らなくなるものである。

宗奭曰く、凝水石は文理の透徹なもので、世間では磨き雕刻して暑季に用ゐる枕などに作る。藥には燒いて用ゐることになつて居る。商人はどうかすると末に輕粉を入れて眞物と僞ることがあり、殆ど見別が付かぬものだ。陶氏は『夏季に冰を作れるものが佳い』といつて居るが、さやうなものは世界中を探しても手に入るわけはない。

閻孝忠曰く、石膏は潔白堅硬で牆壁があり、寒水石は軟爛で手でも碎け、外は微し青黑で中に細文がある。

王隱君曰く、寒水石は堅く白く潔かに透き徹つて、その狀態は明礬か蓬砂の質のやうである。或は碎けば大小の粒がいづれも四角になるものもある。故に又、方解石とも名けるのだ。今一般に硬石膏と呼ぶものがその物である。

(一一)汾州ハ石膏ノ註ヲ見ヨ。

(一二)隰州ハ今ノ山西省河東道隰縣ノ地ナリ。

(一三)德順軍ハ德清軍保順軍ノ寫誤ニハ非ザルカ。未詳。

時珍曰く、寒水石に二種あつて、その一は軟石膏、その一は凝水石である。陶弘景の注にいふものは凝水の寒水石で本文と合致するが、蘇恭、蘇頌、寇宗奭、閻忠孝、四家の所說の物はいづれも軟石膏の寒水石、王隱君の所說の物は方解石である。諸家は本文の『鹽精』とある說を正確に理解せぬところから、その說が妥當を得ずして遂に石膏や方解石やを當て箝めて寒水石として了つたのだ。唐、宋以來その誤を傳承して區別せずに二石を用ゐ、鹽精の寒水そのものをば絕えて用うることを知らなくなつたのだ。誠に千載の誤である。石膏の誤もやがて千載に近い。ただ朱震亨氏が始めて凝水の誤を明にしたのであるが、余(時珍)が深い考察を用ゐて置かぬならば、恐らくは正確を求むべき手掛りが永久に失はれて了ふかも知れないだらう。

【修治】斅曰く、凡そ之を使ふには必ず生薑の自然汁で煮乾し、研つて粉にして用ゐる。この石十兩に對して(二四)生薑一鎰の割合とする。

【氣味】【辛し、寒にして毒なし】別錄に曰く、甘し、大寒なり。普曰く、神農は辛しといひ、岐伯、醫和、扁鵲は甘し、毒なしといひ、李當之は大寒なりといふ。時珍曰く、辛く鹹し。之才曰く、巴豆の毒を解し、地楡を畏る。獨孤滔曰く、

(二四)別本生薑ノ下ニ汁字アルモノアリ、金陵本ニハ汁字ナシ。

鎰、二十兩ヲ一鎰トナス。

〔一五〕轉脬ハ小便閉。

丹砂を制し、玄精を伏す。

主治 【身熱、腹中の積聚、邪氣、皮中が火で燒く如くして煩滿するには水にて飲む。久しく服すれば飢ゑぬ】(本經)【時氣の盛熱、五臟の伏熱、胃中の熱を除き、渇、水腫、小腹痺を止める】(別錄)【丹石の毒風を壓し、傷寒の勞復を解す】(甄權)【小便白を治し、內痺に血を涼し、火を降し、牙疼を止め、牙を堅くし、目を明にする】(時珍)

發明 時珍曰く、凝水石は積陰の氣を受けて成るものだから、その氣は大寒、その味は辛鹹であつて、腎に入り血に走り、熱を除くの功力は諸鹽と同じ。古方に用ゐてある寒水石はこの石だが、唐、宋の諸方の寒水石は石膏、近世の方の寒水石は長石、方解石である。いづれもそれぞれの條下に附記してあるから、用ゐんとするものはそれに就いて詳察するがよい。

附方 舊二、新三。【男女の(一五)轉脬】小便し得ざるには、寒水石二兩、滑石一兩、葵子一合を末にし、水一斗で五升に煮て、時に一升を服すれば利する。(永類方)

【齒衄の出血】穴あるには、寒水石粉三兩、朱砂二錢、甘草腦子一字を末にし、乾

して摻る。（普濟方）【湯火傷】寒水石を燒き研つて傅ける。（衛生易簡方）【小兒の丹毒】皮膚の赤く熱するには、寒水石半兩、白土一分を末にし、米醋で調へて塗る。（經驗方）

玄精石（宋開寶）

和名　含水硫酸曹達の昇華
學名　Sublimate hydrous sodium sulphate

釋名　**太乙玄精石**　**陰精石**（綱目）　**玄英石**　時珍曰く、この石は鹹鹵の至陰の精が凝結して成つたものだ。故に以上の諸名がある。

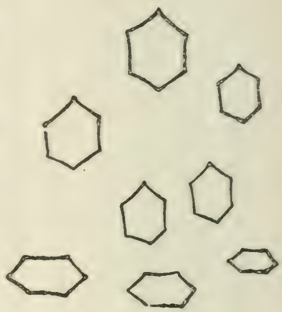
集解　頌曰く、玄精石は(一)解州の解池、及び(二)通州、泰州に產し、鹽を積んだ倉庫中にもある。その色は靑白で(三)龜背のものが佳い。採收に一定の時期はない。又、解池にある鹽精石なるものは味が更に鹹苦であるが、これもやはり玄精の類である。恭曰く近地にもあつて、色はやはり靑白だが片が大くて佳くない。

時珍曰く、玄精なるものは鹹鹵の津液が流滲して土に入り、年久しうして結晶した石片である。その片の狀態は龜背の形のやうなものだ。(四)蒲州、解州に產するものはその色が靑白で通徹し、蜀中の赤鹽の液の結晶したものは色がやや紅く光る。沈存中の筆談に『太陰玄精は解州に生ずる。鹽澤の鹵の溝渠の土中から取るもので、

(一) 解州ハ今ノ山西省河東道ノ解縣ノ地ナリ。解池ハ縣ノ北ニ在リ。又ソノ北ニアルヲ女鹽池トイフ。
(二) 通州、泰州ハ食鹽ノ註ヲ見ヨ。
(三) 龜背トハ結晶ノ形六角アルヲ云フナラン。
(四) 蒲州ハ石膽ノ註ヲ見ヨ。

（五）絳州ハ今ノ山西省新絳縣ノ地ナリ。

大なるものは杏葉のやう、小なるは魚鱗のやうだ。その尖角はいづれも整然としてゐて龜甲の形狀のやうに見え、邊端が裙襴のやうに下つたところの前はとがり後は上にとがつてゐて宛も穿山甲のやうだ。それが相拚ふたところを前から見れば龜甲そのままである。色は綠で瑩徹



（玄　精　石）

し、叩けば直理に拆け、鏡のやうに明瑩で拆けたものもまた六角になる。柳の葉ほどの大さのものを燒けば悉く解け拆けて薄い柳葉のやうな片片に離れ、霜雪のやうに白く平潔で美しいものだ』とある。この物は積陰の氣を稟けて凝結したものだから六角なのだ。今全國一般に用ゐて居る玄精は（五）絳州の山中に產する絳石であつて玄精ではない。

【氣味】【鹹し、溫にして毒なし】時珍曰く、甘く鹹し、寒なり。獨孤滔曰く、硫黃、丹砂を制す。

（六）大藥、證類本草他藥ニ作ル、之ニ從フベシ。
（七）大風瘡ハ癩病。

【主治】【風冷、邪氣、濕痺を除き、精氣を益す。婦人の痼冷、漏下、心腹の積聚、冷氣。頭痛を止め、肌を解す】（開寶）【陰證の傷寒で指甲、顏色が靑黑となり、心下脹滿し、結硬し、煩渴し、虛汗して止まず、或は時に狂言し、四肢逆冷し、咽喉利せずして腫痛し、脈の沈細にして疾きものに主效がある。他の藥の佐として服するがよい。また（六）大藥に合せて（七）大風瘡に塗る】（宗奭）

【發明】頌曰く、古方には用ゐられてないが、近世では補藥として、及び傷寒に多く用ゐ。就中顯著なるは傷寒を治する正陽丹で、汗を出すことである。時珍曰く、玄精石は太陰の精を稟けたもので、鹽と性が同じく、その氣は寒であつて溫ではない。その味は甘、鹹であつて降るものである。硫黃、消石と共にすれば上盛下虛を治し、陰を救ひ、陽を助け、危きを扶け、逆を拯ふの功力がある。故に鐵甕申先生は來復丹に之を用ゐたのであつて、正にその寒の氣を取つて消、硫の熱に配合したものである。開寶本草に『その性溫』とあるは誤である。

【附方】舊一、新八。【正陽丹】傷寒三日にして頭痛し、壯熱し、四肢利せぬものを治す。太陰玄精石、消石、硫黃各二兩、硇砂一兩を細研し、瓷瓶に入れて固濟し、

（八）雞頭子ハ芡子ニ同ジ。

炭半斤を周圍一寸に圍んで約半日焔き、藥が青紫色になつた時を計つて火を住め、冷えてから取出して臘月の雪水を拌ぜ、罐の中に入れて屋後北向の日陰の下で陰乾し、又、地中に二七日間埋めて取出して細研し、麪糊に和して（八）雞頭子大の丸にし、先づ熱水で溶して後艾湯に一丸を研下して服し、衣類寢具を蓋ふ。汗が出れば瘥える。（圖經本草）【小兒の風熱】風を挾み熱を持つて體熱するには、太陰玄精石一兩、石膏七錢半、龍腦半兩を末にし、半錢づつを新汲水で服す。（普濟方）【肺熱の欬嗽】方は不灰木の條にある。【冷熱霍亂】陰と陽とを各別に利するには、玄精石、半夏各一兩、硫黃三錢を末にして麪糊で梧子大の丸にし、米飮で三十丸づつを服す。（指南方）【頭風の腦痛】玄精石末を羊膽の中に入れて陰乾し、水で一字を調へて鼻中に吹けば立ろに止る。（千金方）【目赤澀痛】玄精石半兩、黃蘗を炙いて一兩を末にして點けるが良し。（普濟方）【赤目失明】内外障翳には、太陰玄精石を陰陽火で煆き、石決明と各一兩、蕤仁、黃連各二兩、羊子肝七箇を竹刀で切つて晒し、以上を末にして粟米飯で梧子大の丸にし、就寢時毎に茶で二十丸づつを服し、七日繼續する毎に頂心に烙して藥力を助ければ一个月で效が現れる。宋丞相の言に『黃典史が此

の病に罹つた時、夢に此の方の神傳を得て癒えた』といふ。（朱氏集驗方）【目に赤脈を生ずるもの】玄精石一兩、甘草半兩を末にし、一錢づつ——小兒は半錢——を竹葉煎湯で調へて服す。（總微論）【重舌で涎の出るもの】水、漿も口に入らぬには、太陰玄精石二兩、牛黄、硃砂、龍腦各一分を末にし、鐵で舌上を針して血を去り、湯で口を漱いでから末を摻り、その唾液を嚥めば神效がある。（聖惠方）

綠鹽（唐本草）

和名　綠色の天然食鹽
英譯名　Common salt of green colour

【釋名】鹽綠　石綠（綱目）

【集解】○恭曰く、綠鹽は（一）焉耆國に產する。水中の石下から取るもので、狀態は扁青、空青などのやうだ。眼藥として重要なものである。今は一般に光明鹽、硇砂、赤銅屑を釀して作つた綠色の塊をこれの代用にして居る。○珣曰く、波斯國に產する。石上に生ずるもので、中國へ舶來して石綠と呼んで居る。色は付けたものだが久しきに亘つて變らない。中國で銅と醋で作つたものは藥には入れられず、色も久しくは保たぬものだ。

（一）焉耆國ハ今ノ新疆省カラシヤルノ地ナリ。古都城跡今尚縣治ニ存ス。

時珍曰く、方家では、波斯の綠鹽の色が靑くして陰雨中でも乾いて濕らぬものを眞物といふ。又、鹽綠を造る方法は熟銅の器に漿水一升を盛り、その中に靑鹽一兩を投じて七日間浸し、取出して綠色になつた物を刮つて末にし、漿水に入れて再び一七日乃至二七日間浸して取出すのであるが、これは眞の綠鹽ではない。

【氣味】【鹹く苦く辛し、平にして毒なし】

【主治】【目赤で淚を出し、膚瞖膨暗のもの】（唐本）【目に點ければ目を明にし、瞖を消し、小兒の無辜疳氣を療ず】（李珣）

【附方】新二。【胎赤眼痛】鹽綠一分、蜜半兩を蚌蛤の肉で和し、毎夜就寢時に漿水で目を洗つてから、炙き熱して點ければよく根を斷つ。（聖濟錄）【目暗赤澀】淚多きには、鹽綠一錢、蕤仁を皮を去つて一錢を硏り、熱して好き酥一錢を入れてむらなく硏り、毎夜一麻子ほどを點ける。（聖惠方）

(一)鹽藥（拾遺）

和名未詳
學名未詳

【集解】藏器曰く、(二)海の西南、(三)雷、(四)羅諸州の山谷に生ずる。芒消に似た

(一)白井曰、Geerts氏ハ「鹽藥ハ曹多及加里ノ種種ナル鹽ノ不純ナル混合物ナラン

細末で、口に入れれば極めて冷かだ。南方地方では服するものがないやうだ。恐らくかの極冷のものが腹に入っては身體を傷めるであらう。これは餘程愼重にせねばならぬ。

【氣味】【鹹し、冷にして毒なし】

【主治】【眼赤、眥爛、風赤には、細研して水で和して點ける。又、水に研つて服すれば熱煩、痰滿、頭痛を去り、目を明にし、心を鎭める。又、蛇虺、惡蟲の毒、藥箭鏃の毒、疥癬、癰腫、瘰癧に主效があり、いづれも磨つて傅ける。甚しきには水に溶して服す。また(五)獨白草、箭毒を解す】（藏器）

【附錄】**懸石**　保昇曰く、常に(六)鍊石を服した人を瘞めた塚中には懸石が生ずる。それは芒消のやうで雪のやうに冷く、火毒を殺すものだ。

朴消（本經上品）

和名　芒硝（含水硫酸曹達）
英譯名　Glauber salt

【校正】別錄の芒消、嘉祐の馬牙消を併せ入る。

【釋名】**消石朴**（別錄）**鹽消**（綱目）**皮消**　志曰く、消は本體に對する名、石

カ」ト云ヘリ。
(三)海ノ西南トハ南方沿海地ノ西部ノ意ナラン。
(一)雷ハ雷州、霹靂碪ノ註ヲ見ヨ。
(四)羅ハ羅州、今ノ廣東省化縣ノ西北方羅江ノ上流ニ在リタルモノノ如シ、唐ニ州ヲ置ク。
(五)獨白草ハ烏頭ナリ。
(六)鍊石ハ鍊丹、不老長生ノ效アリトイフモノ。

は堅白なるに對する號であつて、朴とは未だ化せざるものの意味である。芒消、英消は皆これから出るものだから消石朴といふ。

時珍曰く、この物は水に遇へば消け、またよく諸種のものを消し化するところから消といふのである。鹽鹵の地に生ずるもので、形狀は末鹽に似たものだ。すべて牛、馬の諸皮は必ずこれを用ゐてなめすところから、今俗間で鹽消、皮消などと呼ぶのである。煎錬し盆に入れて凝結して造るもので、その下に在る粗朴な部分を朴消、上に在つて芒のある部分を芒消、牙あるものを馬牙消といふ。神農本經には ただ朴消、消石だけを揭げ、名醫別錄にはまた芒消を重複して揭げ、宋の嘉祐本草には馬牙消を更に揭げてあるが、それは消石、卽ち火消、朴消、卽ち芒消、馬牙消と一物で、ただ精粗の差異があるに過ぎぬといふ事實を知らぬためだ。諸家のこれに關する知識が曖昧だつたために、その說がかやうに紛糾を來したものである。本書には



(朴消 芒消)

芒消、牙消を同一條に併入することにした。

【集解】別錄に曰く、朴消は(一)益州の山谷に生ずる。(二)鹹水の陽にあるもので、採收に一定の時期はない。色の青白なるものが佳く、黃なるものは人體を傷め、赤いものは人を殺す。又曰く、芒消は朴消に生ずる。斆曰く、朴消の中から揀出するもので、形の麥芒に似たものを芒消と稱する。志曰く、暖水で朴消の淋汁を取つて半分になるまで錬り、盆に入れて一夜經つと結晶に細い芒が生ずる。故に芒消といふのである。又、英消なるものがある。その形狀は白石英のやうで四五の稜があり、瑩澈で美しい。治病上の效用は芒消に同じ。これも朴消から生ずるが、その煎錬には別に異つた方法がある。やはりこれも馬牙消と呼ぶ。宗奭曰く、朴消は、採つた原料に一回の煎錬で出來上つたもので、まだ再錬を經ないから朴消といふのである。牛、馬の生皮を熟し、また合成物の金銀を治するに用ゐる。芒消は朴消の淋汁を再錬したものだ。

時珍曰く、消に三種ある。西蜀に生ずるものは俗に川消と呼び、最も勝れて居る。河東に生ずるものは俗に鹽消と呼んで之に次ぎ、河北、(三)青州、齊州に生ずるもの

(一) 益州ハ金部金ノ註チ見ヨ。

(二) 鹹水、卽チ鹹水湖ナリ。新疆、西藏等ノ小湖、及ビ裏海、死海等ハ皆鹹湖ナリ。

(三) 青州ハ水部井泉水ノ註、及ビ雲母ノ註、齊州ハ代赭石齊國ノ註參照。

は俗に土消と呼ぶ。この土消はいづれも斥鹵の地に生ずるもので、彼の地方では刮つて掃き取り、汁に煎じ一夜置いて結晶せしめるので狀態は末鹽のやうだが、やはり沙土が雜つてゐてその色が黃白だ。故に別錄に『朴消の黃なるものは人體を傷め、赤きものは人を殺す』といつたのである。しかし再び水で煎じ溶し、澄して滓脚を取去り、蘿蔔數箇を入れて共に煮熟して蘿蔔を取去り、盆中に入れてそのまま一夜置けば冰の如く蠟の如く結晶して白消となる。故に俗に鹽消と呼ぶのである。(四)齊、衞の消は底部が多くて表面に鋒のやうな細芒が生じて居る。別錄に所謂芒消そのものだ。(五)川、晉の消は底部が少くて表面に圭角のやうな牙を生じ、六稜があり、光が縱橫に玲瓏と洞澈して誠に美しい。嘉祐本草に所謂馬牙消なるものだ。狀態が白石英のやうなのでまた英消とも名ける。右二消の原質をばすべて朴消と名けるのである。芒消、英消を再三蘿蔔で煎じて鹹味を去つたものを甜消といふ。また右二消を風や日光に暴して水氣を吹き去れば粉のやうに輕く白くなる、これは風化消といふ。朴消、芒消、英消を甘草と共に煎じて鼎鑵で升煅すれば玄明粉となる。陶弘景、及び唐、宋の諸家はいづれも、諸種消は一物であつて精粗の差異に過ぎぬことを知ら

(四)齊ハ山東地方、衞ハ今ノ河南省汲縣附近一帶ノ地ナリ。
(五)川ハ今ノ四川省、晉ハ金部鐵ノ註ヲ見ヨ。

ず、名稱のために實物に迷つて徒なる憶測を肆にし、一向的確な根據に觸れて居らぬ。詳細は消石の正誤の項を見よ。

朴消（本經）　氣味　【苦し、寒にして毒なし】別錄に曰く、苦く辛し、大寒にして毒なし。銀のやうに白く錬つたものは能く寒し、能く熱し、能く滑し、能く濇し、能く辛く、能く鹹く、能く酸く、千年地に入つてゐても變らない。權曰く、苦く鹹し、小毒あり。時珍曰く、別錄に列記したことは神仙家の側の說に據つたもので、內容は消石の功用だ。詳細は消石の條を見よ。之才曰く、石韋が使となる。麥句薑を惡む。張從正曰く、三稜を畏る。

主治　【あらゆる病に寒熱邪氣を除き、六臟の積聚、結固、留癖を逐ふ。よく七十二種の石を化す。錬つて服餌すれば身を輕くし、神仙となる】（本經）【胃中の飲食物の結熱。留血、(六)閉絕、停痰、痞滿を破り、新陳代謝せしめる】（別錄）【熱脹を療じ、胃を養ひ、穀物を消化する】（皐甫謐）【腹脹、大小便不通、婦人の月經不通を治す】（甄權）【五臟のあらゆる病、及び癥結を通泄し、天行熱疾の頭痛を治し、腫毒を消し、膿を排し、毛髮を潤す】（大明）

(六)閉絕ハ月經閉止。

芒消（別錄）［氣　味］【辛く苦し、大寒にして毒なし】權曰く、鹹し、小毒あり。

［主　治］【五臟の積聚、久熱、胃閉。邪氣を除き、留血、腹中の痰實、(七)結搏を破り、經脈を通じ、大小便、及び月水を利し、五淋を破り、新陳代謝せしめる】(別錄)【瘰癧、黃疸の病、時疾の壅熱を下し、よく惡血を散じ、胎を墮す。膝瘡に傅ける】(甄權)

馬牙消（宋嘉祐）［氣　味］【甘し、大寒にして毒なし】時珍曰く、鹹くして微甘なり。卽ち英消である。

［主　治］【五臟の積聚、伏氣を除く】(甄權)【末にし篩つて眼赤に點け、赤腫障瞖、濇淚痛を去る。やはり點眼藥中に入れて用ゐる】(大明)【功用は芒消に同じ】(時珍)

［發　明］　成無己曰く。內經に『鹹味の下泄は陰である』とあり、又『鹹は耎げる。熱が內に淫せるには、治するに鹹、寒を以てし、氣堅きをば鹹を以て耎にし、熱盛なるをば寒を以て消す』とある。故に張仲景の大陷胸湯、大承氣湯、調胃承氣

(七)結搏ハ脈搏結滯。

湯には、いづれも芒消を用ゐて堅を軟にし實を去るのであつて、熱結の堅きに至らざる者には用ゐてはならぬ。

○○好古曰く、本草に『朴消は味辛し』とあつて、これが『辛は以て腎の燥を潤す』のである。今は一般に辛の字を用ゐないで只鹹の字のみを用ゐるが、『鹹は能く堅きを耎にす』とあつて、その意義に於てはそれでもよい。本草に『芒消は小便を利して胎を墮す』とあるが、しかし傷寒妊娠の患者で下すべき症狀のものに對しては、これに大黄を兼用して藥力を導けば直に大腸に入り、燥を潤し、堅を耎にし、熱を瀉して母子倶に平安を得る。これは經に『殞はぬ理由のある場合に於ては殞ふことがないものだ』とあるその場合に合致するわけなのであらう。病の下部に在る場合でいへば、大便、小便は倶に陰であり、前と後でいへば前は氣、後は血であり、腎に就いていへば總て大小便難に主たる關係を有つ、尿の濇り便の祕結するは倶に水少く火盛なるがためであつて、經に『熱內に淫するには治するに鹹、寒を以てし、之を佐するに苦を以てす』とある。故に芒消、大黄を用ゐ、相須つて使とするのである。

（八）宿垢ハ停滯物。

元素曰く、芒消は氣薄く、味厚く、沈にして降る、陰である。その功用には二あつて、一には實熱を去り、二には腸中の（八）宿垢を滌ひ、三には堅積熱塊を破る。妊婦には三月、四月、及び七月、八月に用ゐられないだけで、その他はいづれも差支ない。

宗奭曰く、朴消は初めて一回煎じただけで成るもので、その味は甚だ濇い。ゆゑに力が緊急であつて和ぎがない。鱠を食つて消化せぬものを治するにはこれを用ゐれば掃蕩驅逐する。しかし芒消は朴消を淋して鍊り造るものだから、その性が緩和である。故に今は多く傷寒を治するに用ゐて居る。

時珍曰く、朴消は下に澄んだ消の粗なるものであつて、その質は重濁である。芒消、牙消は上に結晶する消の精なるものであつて、その質は清明である。甜消、風化消となればまた芒消、牙消から氣味を去つて甘く緩に輕く爽にしたものだ。故に朴消は平常生活の粗野なる患者に施用し、また傅、塗する藥に用うるだけのもので、湯、散として服餌するには、必ず芒消、牙消を用うるが佳いのである。張仲景の傷寒論には芒消だけを用ゐて朴消をば用ゐない、正にこの理由に據つたものだ。

（九）臘日ハ冬至後二度目ノ戌日ヲ云フ。支那ニテハ此日ヲ以テ百神ヲ祭ル。

消なるものは太陰の精を稟けた水の子であつて、氣は寒、味は鹹、血に走つて潤下し、三焦、腸、胃の實熱、陽強の病を蕩滌する。乃ち火邪を折治するの藥である。唐の時代には（九）臘の日に天子から紫雪、紅雪、碧雪を群臣に賜つた。それは皆この消を用ゐて錬成したもので、積熱の諸病を通治して神效があつたといふ。要するにその貴ぶところは醫師が藥を用ゐてその應用が的中すればよいのである。

附方　舊十七、新十五。【紫雪】傷寒、溫瘧、一切の積熱、煩熱、狂して叫走し易きもの、瘴疫、毒癘、頓死、脚氣、五尸、五疰、心腹の諸疾で㽲刺切痛するものを療じ、諸熱毒、邪熱、發黃、蠱毒、鬼魅、野道、熱毒、小兒驚癇のあらゆる病を解す。黃金百兩、石膏、寒水石、滑石、慈石各三斤を搗き碎き、水一斛で四斗に煮て滓を去り、犀角屑、羚羊角、青木香、沈香各五兩、玄參を洗つて焙じ、升麻と各一斤、甘草を炒つて八兩、丁香一兩をその煎汁の中に入れ、一斗五升に煮て滓を去り、その藥汁の中へ錬朴消十斤、消石三十二兩を入れ、微火で煎じながら柳木で手を休めず攪ぜ、水氣が盡きんとするとき木盆の中へ傾け入れ、凝らんとする時を計つて麝香一兩二錢半、硃砂末三兩を入れ、むらなく攪ぜて取收め、毎服一二錢を涼水で

服す。時に應じてその量を加減し、甚しきには一兩まで用ゐる。（和劑局方）【紅雪】風熱を治し、宿食を消化し、酒毒を解し、三焦を開き、五臟を利し、毒熱を除き、積滯を破り、傷寒、狂躁、胃爛、發斑、溫瘴、脚氣、黄疸、頭痛、目昏、鼻塞、口瘡、喉痺、重舌、腸癰等の病を治す。川朴消十斤を錬つて滓を去り、別に羚羊角屑、黄芩、升麻各三兩、人參、赤芍藥、檳榔、麩で炒つた枳殼、生甘草、淡竹葉、木香各二兩、木通、梔子、葛根、桑白皮、大青、藍葉各一兩半、蘇枋木六兩をいづれも片に剉み、水二斗五升で九升に煎じ、滓を去りて濾過したその汁を煎沸し、その中へ前の川朴消を投下して手を休めず攪ぜ、水氣の將に盡きんとするとき器に傾け入れ、凝らんとする時を計つて朱砂一兩、麝香半兩を投じて一夜置けば雪となる。それを一二錢づつ新汲水で調へて服す。充分に徹底させんと欲する時は熱湯で化して一兩を服す。（和劑方）【碧雪】一切の積熱、天行時疾で發狂し昏憒し、或は咽喉腫塞し、口舌に瘡を生じ、心中煩燥し、或は大小便不通の胃火の諸病を治す。朴消、芒消、馬牙消、消石、水飛した石膏、水飛した寒水石各一斤、これを甘草一斤を煎じた水五升の中に入れて共に煎じ、手を休めず攪ぜてよく溶け切つたとき青黛一斤を

入れてむらなく和し、盆の中へ傾け入れて一夜置けば結晶して雪になる。それを末にして含嚥し、或は吹き、或は水で二三錢づつを調へて服す。通じを付けるには熱水で一兩を服す。（和劑局方）【涼膈驅積】王旻山人の甘露飲——熱壅を治し、胸膈を涼し、積滯を驅る。蜀芒消末一大斤を蜜十二兩——冬季には一兩を增加する——にむらなく和し、新しき竹筒内に入れ、筒の半に止めて全部に滿てぬやうにし、それを炊飯の中に入れて筒を藥のある部分まで飯の中に入れ、空の部分はその上に突き出して蒸し、やがて飯が熟するを俟つて筒のまま取出して綿で濾し、瓷鉢に入れて竹篦で手を停めず攪ぜ、凝るを待つて瓷盒に取收め、就寢時に半匙づつを含んで漸次に嚥む。通轉せんとするには多量に服す。（劉禹錫傳信方）【乳石の副作用】煩悶するには、一日三回、芒消一錢を蜜水で調へて服す。（聖惠方）【骨蒸熱病】芒消末方寸匕を一日二回水で服す。（千金方）【腹中の痞塊】皮消一兩、獨蒜一箇、大黃末八分を搗いて餅にし、患部へ貼る。痞塊の消えるを度とする。（邵氏經驗方）【食物の過飽】消化せねば遂に痞膈になる。馬牙消一兩を吳茱萸半斤の煎汁に投じ、熱に乘じて服す。良久してなほ轉ぜぬときは更に一服を進むれば立ろに效がある。竇群が常州に

ゐたとき此の方で效を得た。（經驗方）【關格不通】大小便閉ぢ、脹つて死せんとするは、兩三日そのまま置けば助からない。芒消三兩を湯に泡け、一升を服して吐かすれば通ずる。（百一方）【小便不通】白花散――芒消三錢を茴香酒で服す。（簡要濟衆方）【時氣の頭痛】朴消末二兩を生油で調へて頂上に塗る、（聖惠方）【赤眼腫痛】朴消を豆腐の上に置いて蒸化し、汁を取つて點ける。（簡便方）【風眼赤爛】明淨な皮消一盞を水二盌で煎じ化し、一夜暴して濾し澄し、朝夕目を洗へば三日にして紅さが消え、半生患んだものも癒える。（楊誠經驗方）【瞖を退け眼を明にする】白龍散――馬牙消の淨く光るものを厚紙に裹み、懷中に入れ肌に着けて一百二十日間養ひ、粉に研つて少量の龍腦を入れる。眼に瞖膜を生じて遠視の明ならぬには、如何に年月を經たものでも、瞳人さへ破散せぬうちならば日每にこれを點けるがよい。（經驗方）【諸種の眼の障瞖】牙消十兩を湯に泡けて汁を厚紙で濾し、瓦器で熬り乾して一夜地上に置き、飛炒した黃丹一兩、麝香半分を入れて再び羅過し、腦子を入れて日每に點ける。（濟急仙方）【逐月洗眼の法】芒消六錢、水一盞六分を澄淸し、日取を定めて目を洗ふのである。一年間繼續すれば少年の眼のやうになる。逐月の日割は、正月は初

三日、二月は初八日、三月は初四日、四月は初四日、五月は初五日、六月は初四日、七月は初三日、八月は初一日、九月は十三日、十月は十三日、十一月は十六日、十二日は初五日。（聖惠方）【牙齒の疼痛】皂莢の濃漿を朴消と共に煎じ化して石上に淋し、霜になるを待つて擦る。（普濟方）【蟹を食つて齒齦の腫れたもの】朴消を傅ければ消く。（普濟方）【喉痺腫痛】外臺では、朴消一兩を少しづつ含む。咽に入れば立ろに效がある。或は丹砂一錢を加へる。○呼吸が塞つて通ぜぬには、生甘草末二錢半を加へて吹き入る。【小兒の重舌】馬牙消を一日三回舌上に塗る。（姚和衆）【口舌の瘡】朴消を含むがよし。（孫眞人方）【小兒の鵞口】馬牙消を一日五回舌上に擦る。（簡要濟衆）【豌豆毒瘡】まだ膿を持たぬには、豬膽汁で芒消末を和して塗る。（梅師）【代指の腫痛】芒消の煎湯に漬ける。（聖惠方）【火焰丹毒】水で芒消末を調へて塗る（梅師）【一切の風疹】水で芒消を煮た湯で拭ふ。（梅師）【漆瘡の痒きもの】芒消湯を塗る。（千金）【灸瘡飛蝶】艾灸の火瘡の痂が落ちてから後、瘡内の鮮肉が蝶のやうな片になつて飛び、空に騰り飛び去つて痛み言語に絶するものは、血肉倶に熱する怪病である。朴消、大黄各半兩を末にして水で調へて服し、微し通じを付ければ瘉

える。（夏子益奇疾方）【婦人の難産】芒消末二錢を童尿で溫服すれば奏效せぬといふことなし。（信效方）【死胎の下らぬもの】方は上に同じ。豐城の曾尉の家の猫が五匹の子を孕み、一匹だけ産んで殘り四匹が胎中で死んだとき、この方を用ゐて灌ぎ込むと直に下つた。又、ある牛に試驗したときも同樣に下つた。（信效方）【婦人の紮足】脫骨湯——杏仁一錢、桑白皮四錢を水五盌で新しき瓶で三盌に煎じ、朴消五錢、乳香一錢を入れ口を封して煎じ溶し、その上に足を置いて先づ熏じてから洗ふ。三日に一回試みれば十餘回で綿を束ねたやうに軟になる。（閨閣事宜）

風化消　修治　時珍曰く、芒消を風と日光の當る處に置き、水氣を消盡して自ら輕き白粉とならしめたものである。或は瓷に盛つて簷下に懸け、消が瓶の外部に滲み出たものを刮り下して取るもあり、又別に、甜瓜に消を盛つてその滲み出たものを取るもあり、又、黃牯牛膽に消を入れて刮り取るもあるが、いづれも甜消そのものではない。

主治　【上焦の風熱、小兒の驚熱、膈痰。肺を淸くし、暑を解す。人乳に和して塗れば眼瞼の赤腫、及び頭部、面部の暴熱、腫痛を去る。黃連を煎じて赤目に

點ける】（時珍）

【發明】 時珍曰く、風化消は甘、緩にして輕く浮く。故に上焦、心、肺の痰熱の泄利せぬを治するのである。

玄明粉（藥性）

和名　精製したる硫酸曹達の粉末
學名　Sodium sulphate, purified

【釋名】 **白龍粉** 時珍曰く、玄とは水の色である。明とは瑩澈なることである。御藥院方にはこれを白龍粉といふ。

【修治】 時珍曰く、製法は、白く清淨な朴消十斤を長流水一石で煎じ溶して滓を去り、晴れた月夜に一夜露して水を捨てて消を取り、消一斗毎に蘿蔔一斤の切片と共に煎熟し、濾し淨めて再び一夜露して取出し、一斤毎に甘草一兩を入れて共に煎じ、滓を去つてまた一夜露して取出し、一箇の（一）大沙鑵に鑵の口だけを殘して全部を充滿し、鹽泥で厚さ半寸に固濟して爐中に入れ、十斤の炭火で初めは緩く漸次に烈くして煆き、沸きの鎮るを待つて一片の瓦で鑵の口を蓋ふて他の部分と同樣に固濟し、再び十五斤の炭火を上部に置いて煆き、そのまま一伏時冷して取出し、紙

（一）大沙鑵ハ素燒ノ壺。

を隔て地上に置いて盆を覆せ、三日間火毒を出して研末し、一斤毎に生甘草末一兩、炙甘草末一兩を入れてむらなく和し、瓶に貯へて置いて用ゐる。

【氣味】【辛く甘し、冷にして毒なし】【主治】【心熱煩躁、幷に五臟の宿滯癥結】（甄權）【目を明にし、膈上の虚熱を退け、腫毒を消す】（大明）

【發明】杲曰く、玄明粉は沈であり陰である。その作用に、胃中の實熱を去ると、腸中の宿垢を掃蕩するとの二途あつて、大抵盆消の代用にするものだ。

玄明粉傳に曰く、唐の玄宗明皇帝が、終南山の道士劉玄眞が服食の法を行つて長壽を保ちつつある由を聞し召し、その法を勅問せられたとき、玄眞は『私が取調べたところに據れば、仙經に「修錬した朴消を玄明粉といふ。ただこの方をさへ服すれば遂に無病、長生する」とあつて、その藥は滓なく、性は溫で陰中に陽があり、よく一百二十種の疾を除く、生で餌つてすらなほ能く急難の性命を救ふ。況や修錬して久しく服するの偉效はいふまでもない。精を益し、氣を壯にし、陽を助け、陰を證し、男子、婦人、幼少、襁褓中の乳兒に拘らず、四季の冷熱を問はず、一切の熱毒、風冷(二)痃癖、氣脹滿、五勞七傷、骨蒸傳尸、頭痛煩熱(三)五內氣塞、大小腸不

(二) 痃癖ハ腹部心下ノ拘急スル病、及肩ノコリ。

(三) 五內ハ五臟ノコト。

通、三焦熱淋、疰忤、欬嗽、嘔逆、口苦、舌乾、咽喉閉塞、驚悸、健忘（四）營衛不調、酒、鱠の中毒、飲食過度、腰膝の冷痛、下足の（五）酸痺、久冷、久熱、四肢の（六）壅塞、背膊の拘急、目昏、眩運、視力の永續せぬもの、腸風痔病（七）血澼不調、婦人の產後、小兒の疳氣、陰毒、傷寒、（八）表裏疫癘を治す。この藥を久しく服すれば人をして悅澤ならしめ、（九）關を開き、脾を健にし、顏色の衰退を防ぎ、目を明にし、身體を輕くし、壽命を延べる。その效驗は具に述べ盡し難い。用法は、この藥一兩を十二服に分けてその時に臨んで加減を酌量する。壅熱の傾向を覺える傷寒、頭痛、鼻塞、四肢擧らず、飲食が落付かず、煩悶氣脹し、通瀉の方法に依つて平安を得べきものには、年齡の多少を計つてこの藥二錢半乃至半兩を用ゐ、桃花煎湯を使として服するを最上とし、葱湯を用ゐて服するはそれに次ぐ。もしなほ通ぜぬときは沸湯に投じて用うれば卽效がある。また諸魚、藕菜等の飲食物の諸毒を食つた場合には、この藥二錢を葱白湯で調へて服すれば毒物を立ろに泄下する。婦人の姙娠には（一〇）六甲の日毎に長く續服すれば胎を安にし、生兒にも瘡腫、疾病が起らない。若し微しづつ通じを好くして閉塞を免れるには、ただ長期に亘つて服用し漸次に效果を擧げる。

（四）血液循環ノ不調。
（五）酸痺ハ甚シキシビレ。
（六）壅塞ハ斂抵ヲ鈌クコト。
（七）婦人寒熱アリテ腰腹疼痛シ、陰裏ニ引クモノ。
（八）表裏ハ陰陽ヲ云フ。陰症、陽症ノ區別。
（九）關ハ食道ノ前後。
（一〇）甲子ノ日、年內ニ六回來ル。故ニ六甲ト云フ。

朝服して夕に反應があつても、五臟を攪亂する虞がなく、何となく快く自ら安になる。この藥を服するには、當初は毎日空腹にして酒なり茶湯なり任意のもので二錢匕を服し、良久して更に三錢匕を服す。かくすれば七日の內に常に黃黑の水、涎沫等を微しづつ泄利するが、それは諸病の根本を搜淘して排出するのだから畏れるに及ばない。七日後に及べば漸く腹內に暖さを覺え、食物が消下して氣が下り、長く服すれば古きを除き、新しきを養ひ、氣、血が日に日に安になる。使には大麻子湯を用ゐて服す。苦參だけを忌む』と答へた。詳細は太陰經中に記載してある。

好古曰く、玄明粉には『(二)陰毒を治す』の一句があるが、これは伏陽が內にある場合以外であれば用ゐてはならぬ。若し眞の陰毒を治療するに用ゐれば忽ちその人を殺す、甚だ速なものである。

震亨曰く、玄明粉は火で煅いて作るものだから、その性は溫なるべき筈である。然るに長く服し、久しく服して身體を輕くし、胎を固くし、顏色の衰退を防ぎ、壽命を益し、大いに補益の能があるといふは道理あることと思へない。予の一二の朋友は予の言を信ぜずして死亡した。これは親しく實見したことだから、特に玆に記

(二)陰毒ハ筋肉炎ノ如キ病症。

載して戒とする。

時珍曰く、神農本草に『朴消を錬つて服餌すれば身體を輕くし、神仙となる』などとあるは、方士の徒が肆に書入れたものである。この一句のために後世玄明粉を製して用ゐるが、煅錬したものは多く偏するものだ。甘草を佐として用ゐその鹹、寒の毒を去ればよい。三焦、腸、胃の實熱、積滯の患者にして年少く氣壯なるものに對しては、量を計つて服用すれば速效がある。けれどもその患者が脾、胃が虚冷し、又は陰虚火動の場合には、これを服すれば忽ちその禍を招ぐのである。

附方　新三。【熱厥氣痛】玄明粉三錢を熱した童尿で調へて服す。（集簡方）【傷寒發狂】玄明粉二錢、朱砂一錢を末にして冷水で服す。（傷寒蘊要）【鼻血止まぬもの】玄明粉二錢を水で服す。（聖濟）

消石（本經上品）

和名　天然硝石（硝酸曹達）
學名　Salpetre, Nitre

釋名　**芒消**（別錄）**苦消**（甄權）**焰消**（土宿）**火消**（綱目）**地霜**（蜀本）**生消**（宋本）**北帝玄珠**　志曰く、その物は諸石を消し溶すものだから消石と名ける。

初め煎錬したばかりには細芒があつて朴消のやうな狀態のところから芒消なる稱呼もあるが、朴消、及び別錄の芒消とは類が違ふ。宗奭曰く、消石とは再煎錬の時芒を取去つた消が下方に凝結したもののことで、精英を既に取去つた只の石のやうな餘滓である。藥に入れても功力は緩い。烟火を能く爆發さすに用ゐるだけのものだ。權曰く、芒消は一には苦消と書く。その味の苦いことを表したものだ。時珍曰く、消石は丹爐家で使用して五金、八石を制し、銀工は金、銀を溶すに用ゐる。兵家は烽、燧の火藥を作るに用ゐ、火に遭へば忽ち焰を起す。故に諸種の名稱が起つたのだ。狐剛子の錬粉圖にはこれを『北帝玄珠』といふ。開寶本草には生消、芒消を重出してあるが、本書には一括記載した。いづれも下文に詳記する。

【集解】別錄に曰く、消石は益州の山谷、及び(一)武都、(二)隴西、(三)西羌に產する。採收に一定の時期はない。弘景曰く、消石の療病の功は朴消と似たもので、仙經ではこの物で諸石を消し溶すといふが、現在ではその眞物の實際を識るものがない。或は『朴消と同一山にある。それで朴消を一名消石朴といふのだ』ともいひ、又、『一名芒消といふ』ともいふが、しかし今の芒消は朴消を煉つて作るものだ。こ

(一)武部ハ丹砂ノ註ヲ見ヨ。
(二)隴西ハ郡名、秦ニ置ク。今ノ甘肅省蘭州ノ地ナリ。又、今ハ甘肅省ニ隴山縣アリ。隴山ノ西ニ在ルヲ以テ甘肅ヲ隴西ト稱ス。
(三)西羌ハ羌中、及ビソノ以西ノ地。石膽羌道ノ註ヲ見ヨ。

れ等の事實の異同に就ては尙ほ明瞭を缺いて居る。ある人が手に入れた一種のものは、色は朴消と大同小異だが鹽、雪を握つたやうに(四)朏朏たるもので、火で燒けば紫靑の烟が起つ、これが眞の消石だといふことだつた。現に(五)宕昌以北の諸山の鹹土のある處にいづれもこの物が有る。

志曰く、これは卽ち地霜である。所在の山澤で冬季地上に生ずる霜を掃き取り、水で淋し取つた汁を煎錬して作るものだ。形狀は(六)釵脚のやうで、好きものは長さ五分以內のものである。陶氏の說にはさまざまの事實を擧げて居るが、蓋し的確な知識を有たなかつたからである。又曰く、生消石は(七)茂州の西山の岩石の間に生ずる。形は塊で大小一定せず、色は靑白だ。採收に一定の時期はない。

時珍曰く、生消石は諸處の鹵地にいづれも產するもので、就中(八)河北、(九)慶陽の諸縣、及び蜀中に多い。秋、冬の期間に大地一面に生ずる白いものを掃き取つて煎煉して作るのだ。商人は取扱が粗末だから多くは潔淨でない。再び水で煎じ溶して盆に取り、一夜置いて結晶させて用ゐる必要がある。その際下部に沈澱し凝結するものを、朴消のやうな狀態なところから生消といふので、所謂煉過して生ずる消であ

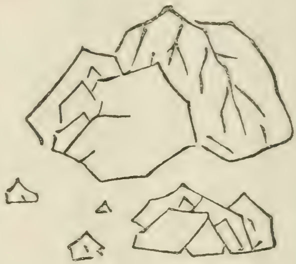
(四) 朏ハ字書ニ普沒切、月未盛明也トアリ。
(五) 宕昌ハ雄黃ノ註ヲ見ヨ。
(六) 釵脚ハカンザシノアシ。
(七) 茂州ハ不灰木ノ註ヲ見ヨ。
(八) 河北ハ今ノ直隸省ノ地。
(九) 慶陽ハ今ノ甘肅省ノ慶陽縣。隋ニ弘化郡ヲ置キ、唐ニ慶州トナシ、宋ニ慶陽府トナス。

(一〇)商城ハ今ノ河南省光州商城縣ノ地ナリ。漢ニ縣ヲ置キ、隋ニ殷城ト改メ、宋ニ商城ト改ム。今ハ汝寧道ニ屬ス。

(一一)懷衞ハ今ノ河南省懷慶ヨリ衞輝ニ至ル黄河ト衞河ノ中間ノ地ナイフカ。

(一二)烏場國、即チ烏萇國。印度、カシミールノ西北方印度河以西ノ地ナリ。西域記ニ『烏仗那國、周五千餘里。山谷相屬。川澤連原。穀稼雖播。地利不豐。人性怯懦。俗情譎詭』トアル是也。

る。上部に結晶するものには、或は芒消のやうに鋒芒のあるものと、馬牙消のやうに圭稜のあるものとある。それで消石にも芒消、牙消の名を呼ばれるのだが、朴消の芒消、牙消と名稱は同一でもその性には水と火の相異がある。崔昉の外丹本草に『消石は陰石である。この物は石類ではないのであつて、鹹鹵を煎煉して成るものである。今の焔消と呼ぶがそのものだ。河北、(一〇)商城、及び(一一)懷衞の河流に沿ふ地方の民家で刮り取つた鹵の淋汁を煉つたものだ。朴消とは少し異ふ。南方地方には産しない』とあり、昇玄子の伏汞圖には『消石は(一二)烏場國に生ずる。その色は青白い。炙き熱した白石英の上に點ければ石英が溶けてその中に入るものが眞物である。その石の出る處は極めて穢惡な臭氣を發散し、飛鳥もその上を通れない。人間が單衣を著て通れば身體に著いた諸蟲が悉く溶けて水になる。よく金石を溶して水にするものだ。これを服すれば長生する。鵞管のやうな形のもの



(消　石)

が佳い』とある。謹んで按ずるに、昇玄子の所說の物は今の消石とは異ふやうである。然るに姚寛の西溪叢話にもその說を正確なものと認めてあるが、外國產と中國產とで同じ消石に相違のあらう道理があるまい。そもそも別に右のやうな一種があるものか、該博な學者の研究是正に俟つ外はない。

【正誤】弘景曰く、神農本經には芒消がなくてただ『消石、一名芒消』があり、名醫別錄には芒消を載せてあるが、その療病の功は消石と同じである。多分これはすべて消石のことなのであらうと思はれる。昔はこれが(一三)寧州から出たもので、黄白で粒が大く、味の極めて辛く苦いものだといふが、今の醫家が多く用ゐるものは煮煉して作つたもので、色の全く白い細粒で、味は甚だ烈しくないものだ。皇甫士安の言に『朴消がなければ消石を用ゐるがよし。消石は山の陰に生ずる鹽の膽であつて、石脾と消石とを水で煮れば一斛で三斗取れる。雪のやうな正白色で、水中に投ずれは消ける。故に消石と名くるのだ。その味は苦くして毒なし、消渴、熱中に主效があり、煩滿を止める。三月に(一四)赤山で採收する。朴消もやはり山の陰に生ずるもので、鹽が有つて水の鹹く苦い處にはその陽に朴消が生ずる。その味は苦し、

(一三)寧州ハ金部金ノ注ヲ見ヨ。

(一四)赤山、未詳。

(一五)汶山郡ハ花乳石汶山ノ註ヲ見ヨ。
(一六)西川縣ノ地未詳。今ノ四川省西部ノ地ヲ西川ト稱ス。
(一七)蠶陵ハ今ノ四川省茂縣ヨリ岷江ニ沿ヒテ北方疊溪營ノ地卽チ當時ノ蠶陵縣治ナリ。

毒なし。その色は黃白である。熱、腹中飽脹を療じ、胃を養ひ、穀物を消化し、邪氣を去るの主效がある。やはり水に入れば消けるもので、「治病の功は消石と少に異ふ」とある。按ずるに、この說に從へば芒消を合煮して更に生じたものを眞の消石といふことになるが、ただ石脾なるものは一體何物を指すのか判らない。朴消で芒消を作るには、煖湯で淋汁を取り、煮て木盆に入れて一夜經てば出來るのである。今益州地方ではまた礬石を鍊つて消石を作る。甚だ柔で白く、味もあだかも礬のやうである。又曰く、朴消は今は益州の北部(一五)汶山郡の(一六)西川、(一七)蠶陵二縣の域內の山厓の上に生ずる。色は多く青白で黑斑の雜るのもある。その土地ではその白く軟いものを擇り取つて消石として用ゐて居るが、燒けば汁が沸き出て礬石のやうな狀態のものである。

藏器曰く、石脾、芒消、消石、いづれも西戎の鹵地に出る鹹水の結晶である。

恭曰く、朴消には理の直線のものと彎曲するものと二種あるが、用途に相異はない。その白く軟なものは朴消の苗であつて、虛軟で力が乏しい。鍊つて消石を作つても消石となる量は多くない。消石の代用としても功力が甚だ劣る。又曰く、消石、

卽ち芒消。朴消、一名消石朴である。今粗惡な朴消を煉り煎じて作る芒のある消は卽ち消石である。別錄に更に芒消を掲げたのは誤だ。晉、宋時代の古方には多く消石を用うとあつて、芒消を用うとあるは稀である。近代の諸醫家は芒消を用ゐるのみで消石をいふことは尠い。理論は既に明白だ　これは重複して掲ぐべきものではない。

頌曰く、舊說には、朴消、芒消、消石の三物を同種としてあつて、初め自然の原料を採り、水で取つた淋汁を煎じて結晶させたものを朴消、一名消石朴といひ、又、朴消、或は地霜を煉つて造つた石のやうに堅く白いものを消石、一名芒消といひ、又、朴消の淋汁を取り、煎錬して結晶させた細芒のあるものを芒消といふのである　が、しかし一體異名とはいへ、煉製の方法が既に異る以上、主治の效力にもやはり差別があるわけだ。けれども本經所載のものは、かやうに一種から成るのではなく二種のもののやうに疑はれる。今の醫方に用ゐるものもやはり正確とは行かぬのであつて、ただ未だ塊に錬成せぬ微し靑色のものを朴消といひ、盆中に煉成した芒のあるものを芒消とも盆消ともいひ、芒消の底部に澄み凝つたものを消石といひ、朴消は力が

緊しく、芒消は之に次ぎ、消石は更に緩いとしてあるが、いづれが正確なりやは判らない。蘇恭は『晉、宋時代の古方には多く消石を用うとあつて、芒消を用うとあるは稀である』と言ふが、按ずるに、張仲景傷寒論の承氣湯、陷胸丸にはいづれも芒消を用ゐ、葛洪肘後方でも傷寒、時氣にやはり多く芒消を用ゐ『ただ鰌を食つて消化せぬものだけは、朴消がない場合は芒消を代用する』とあるのだから、晉、宋以前の時代と雖も朴消、芒消は通用されてゐたわけだ。胡洽の方に『十棗湯には芒消を用ゐ、大五飲丸には消石を用ゐ、いづれも消石がない場合には芒消を用ゐる』とあるのだから、梁、隋の時代にも芒消、消石が通用されたわけである。これ等の說を根據とすれば、朴消、消石は精なるもの、芒消は粗なるものとも言ひ得るのだ。故に陶氏は皇甫士安の言を引用してこれを證したもので、やはり消石はその當時から已に眞なる物は得難かつたのだ。故に方書には通じ用ゐて代用したものである。又古方の金石凌法に『朴消、消石、芒消、馬牙消の四種を用ゐ、相參へて順次に投下する』とあつて、この方は唐の時代に書かれたものだが、その當時は如何にして四種の區別を付けたのか想像が付かない。又、南方の醫者の著錄した消の說に依れば

一本草には朴消、消石、芒消があつて馬牙消がない。諸家の註も結局この三種に對する明確な定說はないのであつて、或は芒消、消石は同一物だから重出すべきでないといひ、或は朴消を煎錬して盆の中に一夜置き、細芒を結晶するが芒消だといひ、或は馬牙消は別種の物といふ。ところが現にこれ等の諸消はそれぞれ實體が異つて居り、理論もこれ程判り易いに拘らず、何故にしかく惑ふたものであらうか。朴消は味苦く微し鹹く、蜀郡に出るものは冰雪のやうに瑩白で內地のものは少し黑く、いづれも脆くして碎け易く、風に當れば結晶してサラサラと粉のやうになり、熬れば熔け沸いて鑄型にも入れ得る。水で甘草、猪膽と合せて半分に煮詰つたとき大盆に入れ、また凝水石屑を投じて一夜漬け、白石英のやうに凝結したものが芒消である。地霜を掃き取つて煎錬して作り、竹の上で試みると解鹽のやうで味が辛く苦く、燒けば全部焰になるものが消石であつて、能く金石を溶し、また性が火を畏れ、よく諸石を制して火を拒ましめる。やはり天地間の神祕なる一物質である。牙消といふは芒消のことだ。又、生消といふ煮錬に因らずして自然に成るものがあるが、これも蜀道に出るもので、朴消に類して少し堅いものだ』とある。この論も解說大

いに力めたものだが、古人の所說と甚しく異つて居る。やはり全部その通りとは信用されまい。

好古曰く、消石とは消の屬の總稱であつて、ただ煎錬を經ぬものを生消、朴消といひ、煎錬を經たものを芒消、盆消といふのである。

時珍曰く、諸消に關しては、晉、唐以來諸家いづれもその名稱にこだはり、徒に憶測を逞うしただけのもので、一も定見は認められない。ただ馬志が開寶本草に、消石を地霜を錬つて作つたものとなし、芒消、馬牙消を朴消を錬つて製出したものといつた一言だけが、諸家の惑見を打破するに充分だ。諸家は蓋し、消石、一名芒消、朴消、一名消石朴とある名稱にこだはる結果、混亂して徒に辯論を費し、終に解決に到達しなかつたのだ。且つ消に水、火の二種あつて、形質は同じくとも性、氣が遙に異なることをも知らなかつたのだ。要するに、神農本經に芒消、消石の二條あるが正しいのであつて、別錄の芒消、嘉祐本草の馬牙消、開寶本草の生消は、いづれも條項を多く別け過ぎたものである。今本書にはそれ等をすべて併合した。

神農本經に記載した朴消は卽ち水消であつて、煎錬して細芒を結晶する芒消と、

馬牙を結晶する牙消との二種がある。その底部に凝結した塊をば通じて朴消といひ、その氣、味はいづれも鹹くして寒である。又、神農本經に記載した消石は卽ち火消であつて、これにも煎錬して細芒を結晶する芒消ともいふものと、馬牙を結晶するもので牙消ともいひ、また生消ともいふものとの二種がある。その底部に凝結した塊をば通じて消石といひ、その氣、味はいづれも辛く苦くして大温である。右の二消共に芒消、牙消の名稱があるところから、古方に、互に代用するの說が生れたわけであつて、唐、宋以下用ゐ來つた芒消、牙消はいづれも水消である。南方醫師の說明は明快ではあるが、しかし凝水石、猪膽と煎じて作つたものを芒消といふからは誤である。玆に全部に亘つて誤を正して置く。石脾、一名消石といふその物は加工して作つた假消石である。後の石脾の條を見よ。

修治　大明曰く、眞消石は、柳枝湯で三周時の間煎じ、湯が少くなつたときは注し加へて熬するもので、伏火すれば止める。斅曰く、凡そ消石を使ふには、先づ粉のやうに研り、雞腸菜、柏子仁共に二十五箇と一處に和して小帝珠子ほどの丸にし、瓷瓶を五斤の火で赤く煆いた中へ前の消石粉四兩を投じ、つづいて今の藥丸

を投ずれば自然に伏火する。抱朴子曰く、よく五金を柔に溶し、七十二石を溶して水にする。之を制するには、地蓮子、猪牙皂角、苦參、南星、巴豆、漢防已、晩蠶砂を用ゐるがよし。時珍曰く、溶化した中へ甘草を投ずれば火を伏す。

消石【氣味】【苦し、寒にして毒なし】別錄に曰く、辛し、大寒にして毒なし。普曰く、神農は苦しといひ、扁鵲は甘しといふ。權曰く、鹹し、小毒あり。時珍曰く、辛く苦く微し鹹し、小毒あり。陰中の陽である。陳皮と配合すれば性が疎爽となる。之才曰く、火が使となる。苦參、苦菜を惡み、女菀、杏仁、竹葉を畏る。

【主治】【五臟の積熱、胃の脹閉。飮食物の蓄結を滌去し、新陳代謝を盛にし、邪氣を除く。膏のやうに錬つて久しく服すれば身を輕くする】（本經）【五臟、十二經脈中の百二十の疾、暴傷寒の腹中大熱を療じ、煩滿、消渇を止め、小便、及び、瘻蝕瘡を利す。天地至神の物であつて、よく七十二種の石を溶す】（別錄）【積を破り、堅を散じ、腹脹を治し、血を破り、瘰癧を下し、病根を瀉出する】（甄權）【含み嚥めば喉閉を治す】（大明）【伏暑傷冷、霍亂吐利、（一八）五種淋疾、女勞黑疸、心、腸の㽲痛、赤眼、頭痛、牙痛を治す】（時珍）

（一八）金陵本ニ癃ニ作ル。然レドモ五種ノ誤ナルコト明ナリ。

生消　【氣味】【苦し、大寒にして毒なし】時珍曰く、辛く苦し、大温にして毒なし。

【主治】【風熱癲癇、小兒の驚邪、(一九)瘛瘲、風眩、頭痛、肺壅、耳聾、口瘡、喉痺咽塞、牙頷の腫痛、目赤の熱して眵涙多きもの】(開寶)

【發明】土宿眞君曰く、消石は海鹵の氣を感じて生ずる天地至神の物であつて、能く寒し、能く熱し、能く滑し、能く濇し、能く辛く、能く苦く、能く酸く、能く鹹く、地に入ること千年にしてその色が變らない。七十二石はこれがために化して水となる。草木を制服し、(二〇)五金を柔潤にし、(二一)八石を制煉する。(二二)大丹と雖も亦これを捨かぬ。

時珍曰く、土宿神君の所説は、消石の不思議な變化の妙を言つたものだ。これを別錄で朴消の條下に書き列ねたのは誤である。朴消は水に屬し、味は鹹くして氣は寒、性は下走して上升し得ない、陰中の陰である。故にただ腸、胃の積滯を蕩滌し、三焦の邪火を折治するだけのものである。消石は火に屬し、味は辛に苦を帶び微し鹹くして氣は大溫、性は上升する、水中の火である。故に能く積を破り、堅を散じ、

(一九)瘛瘲ハ搐搦。
(二〇)五金ハ金、銀、銅、鐵、錫。
(二一)八石ハ朱砂、雄黄、空青、硫黄、雲母、戎鹽、硝石、雌黄。
(二二)大丹ハ丹砂。

（三三）史記ニハ莨菪ニ作ル。

諸種の熱病を治し、三焦の火鬱を散じ、臟腑の虛寒を調和する。硫黃と共に用うればその二物各〻の氣が陰陽に配し、均調して水火を升降するの效があり、冷熱緩急の病を治す。礞石をこれで煆き制して用うれば積滯痰飮を除く。蓋し硫黃の煖にして利するその性は下行し、消石の煖にして散ずるその性は上行する。礞石の性は寒にして下り、消石の性は煖にして散ずる。これが一升一降、一陰一陽であつて、方の按配法則の妙處である。現に兵家が造る烽火、銃機等のものには消石を用ゐてあつて、恐るべき勢で中空に爆騰するところを見れば、その性の升なることを知り得るであらう。雷公炮炙論の序に『腦痛で死せんとするには、鼻に消末を投ず』とあるも、やはりその上升、辛散の力を利用する從治の法則に據るのである。本經に『寒なり』といひ、別錄に『大寒なり』とあるは、正に龍腦の性を寒なりといつた誤と同樣だ。凡そ辛苦の物の大寒なる例はない。況やこの物は火を得れば焰が生ずること樟腦、火酒の性と同じものである。性の寒、大寒なる道理があらうか。史記の倉公傳に『菑川王の美人が懷姙して難産だつたとき淳于意を召された。意が伺候して（三三）莨宕藥一撮を酒で飮ませると、やがて出產はしたが、意が復び診るとその脈が

(二四)纏喉風ハ咽喉粘膜炎ノ類。
(二五)玉鑰匙ハ藥名。

躁しい。これは有餘の病であつた。直に消石一劑を飲ませると、豆許六粒ほどの血を出して平安を得た』とある。これは血結を去るの驗證である。

附方　新十四。【頭痛で死せんとするもの】消石末を鼻内に吹き込めば癒える。(炮炙論)【諸種の心腹痛】焰消、雄黃各一錢を研つて細末にし、少量づつ點けて眥内に入れる。これを火龍丹と名ける。(集玄方)【腰腹の諸痛】方は上に同じ。【赤眼腫痛】就寢時に消石末を黍米ほど銅筯に點けて目眥に入れ、翌朝鹽水で洗ひ去る。(聖惠方)【眼目の障瞖】男女の内外障瞖で、或は三五箇月も藥の效が見えぬには、この藥を一回點ければ視力を回復する。好き焰消一兩を銅器で鎔化し、飛過した黃丹二分、片腦二分を入れて銅匙で急に鑵内へ抄ひ入れて取收め、少量づつ點ければ神の如き效がある。兗州の朱秀才が突然視力を失つたとき、朝夕天を拜して夢に神からこの方を授り、それを點けて平癒した。(張三丰仙方)【風熱喉痺】及び(二四)纏喉風病には、(二五)玉鑰匙――焰消一兩半、白殭蠶一錢、硼砂半兩、腦子一字を末にして吹込む。(三因方)【重舌鵞口】竹瀝を焰消と共に點ける。(普濟)【伏暑の瀉痢】及び腸風下血、或は酒毒下血には一服で效が現れ、歲月久しき者も三服に過ぎずして效が

（二六）飛麪ハウドンコ。

ある。消石、舶來の硫黄各一兩、白礬、滑石半兩、（二六）飛麪四兩を末にして水を滴して梧子大の丸にし、新汲水で三五十丸づつ服す。これを甘露丸と名ける。（普濟方）

【五種の淋疾】勞淋、血淋、熱淋、氣淋、石淋、及び小便不通の甚しきには、透格散——泥土の雜らぬ雪白の消石一兩を生で研つて末にし、毎服二錢を、それぞれ左記の湯を使として服す。勞淋の原因は勞倦、虛損であつて、尿が排出せずして小腹が急痛する。これには葵子末の煎湯で服し、通じて後必ず補虛の丸、散藥を服す。血淋は尿が出ずして時に下血し、疼痛、滿急する。熱淋は熱で尿が赤色になり、臍下が急痛する。この二淋にはいづれも冷水で調へて服す。氣淋は少腹が滿急して排尿後常に餘瀝がある。これには木通の煎湯で服す。石淋は尿道が痛んで尿を排出し得ず、内に小腹に引いて膨脹し急痛し、尿中に砂石を交へ下して悶絶する。これには藥末を先づ紙を隔て銚に入れて炒り、紙の焦げる程度に炒つて取出し、再び研つて溫水で調へて服す。小便不通には小麥湯で服し、卒に起つた諸淋には只冷水で服す。いづれも空心に藥を調へ、消を水のやうにして服す。（沈存中靈苑方）【蛟龍癥病】方は雄黃の發明の項を見よ。【石を服して瘡を發したもの】疼いて忍び難きには

紙で周圍を圍んで中心に消石を滿て塡め、匙で水を抄つて淋ぐ。熱痛を感ぜぬやうになれば止める。（兵部手集）【發背の初期】ぞくぞくと惡寒して已に瘡腫癮疹の生じたるには、消石三兩を暖水一升に泡けて溶し、青布を三重に摺つて患部の赤い部分へ溫搨し、熱くなる毎に頻に換へれば癒える。（外臺祕要）【女勞黑疸】仲景曰く、黃疸患者で日沒時に發熱し惡寒するは女勞であつて、膀胱が急し、小腹が滿し、身體盡く黃に、額上が黑くなり、足下が熱し、かくて黑疸になれば腹が脹つて水のやうだが、大便が黑くなつて時時溏するのだから水ではない。かくて腹滿するものは治し難いものである。消石、礬石を燒き、等分を末にして大麥粥汁で和し、一日三回方寸匕を服すれば病は大小便に隨つて去る。小便が黃に、大便が黑くなるがその徵候である。（金匱）【手足不遂】大風、及び丹石熱風の不遂には、消石一兩、生烏麻油二斤を鐺に入れてまだ燒かぬ瓦土で口を蓋ひ、紙と泥で固濟して火で煎じ、初め腥いものが熱して香しくなつたとき、更に生麻油二升に合せて煎じ、適當になつたとき潤津の外に洩らぬ器に取收め、服する時には室內に更に小紙屋を作つた中に入り、その紙屋の中で火を燃しながら一大合を服して發汗する。體力の壯なものは一日二

回づつ服すれば、三七日で頭部、面部の疱瘡が皆減する。かやうにこれを服するには必ず火を使とするのである。(波羅門僧方)

硇砂 硇は音饒(タウ)である。(唐本草)

和名 硇砂(鹽化アンモニヤ)
學名 Salammoniac, Salmiac

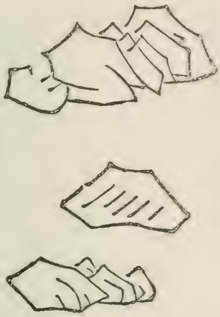
釋名 **䃘砂** 音は硇(タウ)である。**狄鹽**(日華)**北庭砂**(四聲)**氣砂**(圖經)**透骨將軍**(土宿) 時珍曰く、硇砂は性が毒で服すれば硇亂するところから硇砂といふ。(一)狄人はこれを鹽の代りに食ふ。土宿本草に『硇は性物に透る。五金は之を藉りて以て先鋒とする。故に號して透骨將軍といふ』とある。炳曰く、(二)北庭に生ずるものを上級品とし、一般に北庭砂と呼ぶ。

集解 恭曰く。硇砂は西戎に產する。形が牙消のやうで光の淨きものが良い。頌曰く、今は(三)西涼、(四)夏國、及び河東、陝西の近邊の州郡にもある けれども西戎から來るものが藥に入れて最も緊しく、顆塊に光明があり、大なるは拳ほどで重さ三五兩もあり、小なるものも指の腹ほどである。その他の邊地に出るものは雜碎で麻豆粒ほどのものだ。又、沙石が雜るものだから、用ゐるには必ず水飛し澄して悉

(一)北方ノ異種族ヲ狄トイフ。
(二)北庭ハ唐ニ北庭都護府ヲ置ク、古ノ高昌國ノ地ナリ。府治ハ今ノ新疆省迪化縣ニ在リ。
(三)西涼ハ宋ニ涼州ヲ西涼府トナシ、後ニ夏ニ侵略サル。今ノ甘肅省武威縣ノ地ナリ。
(四)夏國即チ西夏ナリ。宋ニ至リ拓跋氏元昊大ニ振ヒ、國ヲ大夏ト號シ、今ノ內蒙古ノオルトス、アルゼン、及ビ甘肅ノ西北部ヲ略ス。即チ此ニ夏國トイフハ侵サレタルソノ地、今ノ武威縣以西ノ地ヲ指スナリ。

く土石を去らねばならぬ。やはり力は無いもので、彼の地ではこれを氣砂といふ。

時珍曰く、硇砂もやはり消石の類で、鹵液の結晶したものだ。(五)青海に出る。月光の映射に因つて生じ、鹽を原質として形成されたもので、その地の人民はその原料を採り、淋汁を錬つて結晶を作る。形狀は鹽塊のやうで白く淨なものを良とする。



（硇　砂）

その性は非常に物を透るものだから(六)黝罐に入れ火の上へ懸けて常に乾して置くがよい。また乾薑を入れて置くも良い。若し冷氣に近け濕氣に遭はすれば直に溶けて水となり、或は滲みて無くなるものである。一統志に(七)『臨洮の(八)蘭縣に硇砂の出る洞がある』と記されてあり、張匡鄴の行程記に(九)『高昌の北庭山中には常に烟氣が涌起して雲霧がなく、夜間には炬火のやうな光焰を揚げ、その光で鳥や鼠などを照すと皆赤色に見える。これは火焰山といふ山で、硇砂採收者は木屐を穿いて作業して居る。皮底の穿物では直に焦げて了ふのだ』とある。北庭、卽ち今の西域の火州である。

(五) 青海ハ今ノ青海省ノ大湖青海ナリ。

(六) 黝罐、青黑ク塗リタル罐。

(七) 臨洮ハ宋ニ郡ヲ置キ、金ニ府ニ改メ、元、明コレニ因リ、蘭州府ノ地ヲ統ブ。

(八) 蘭縣ハ當時ノ臨洮府治、今ノ狄道縣ナリ。

(九) 高昌ハ光明鹽高昌國ノ註ヲ見ヨ。

【修治】宗奭曰く、凡そこれを用ゐるには水飛して塵穢を去り、瓷器に入れて重湯で煮乾して用ゐる。それはその毒を殺すのだ。時珍曰く、今は一般に水飛して淨い醋で煮乾し、霜のやうにして刮り下して用ゐる。

【氣味】【鹹く苦く辛し、溫にして毒あり】恭曰く、多く服してはならぬ。金銀を柔にし、金屬を煆き繼ぐ藥となる。權曰く、酸く鹹し、大毒あり。よく五金、八石を溶し、人の腸、胃を腐壞し、生で食へば人の心臟を溶して血にする。これに中毒した場合には生綠豆の研汁一二升を飮めば解す。漿水を畏れ、羊血を忌む。大明曰く、辛く酸し、暖にして毒なし。一切の酸を畏れる。凡そ修治には黄丹、石灰で作つた櫃で赤く煆いて使用すれば如何なる場合でも毒がない。世人は肉を爛すものと疑懼するが、刄物の斬傷にこれを罨ひ傅ければ卽座に痂が生ずる。藏器曰く、その性は大熱であつて、これを服すれば暴熱して髮を損ずることがある。溫なりとあるは誤だ。抱朴子曰く、硇を伏する藥は左の如く甚だ多い。牡蠣、海螵蛸、晩蠶砂、羊胴骨、河豚、魚膠、魚腥草、蘿蔔、獨帚、卷柏、羊蹄、商陸、冬瓜、羊躑躅、蒼耳、烏梅。斅曰く、硇は赤鬚に遇へば汞が金鼎に留る。

（一〇）胎兒ヲ殺スコト。

（一一）疼疼、證類本草ニハ心痛ニ作ル。

主治　【積聚に結血を破り、痛を止め、氣を下し、欬嗽宿冷を療じ、惡肉を去り、好肌を生じ、（一〇）胎を爛す。また驢、馬の藥にも入れて用ゐる】（唐本）【婦人、男子の羸瘦、積病、血氣不調、腸鳴、飮食物の不消化、腰脚の痛冷、痃癖、痰飮、喉中の結氣、反胃吐水に主效があり、食をよくし、肥健ならしめる】（藏器）【冷病を除き、大いに陽事を益す】（甄權）【水臟を補ひ、子宮を煖め、瘀血、宿食の不消化、肉食飽脹を消化し、夜間小便多きもの、男子の腰胯の酸重、四肢不任、婦人の血氣（一一）疼疼、氣塊、痃癖、及び血崩、帶下、惡瘡の息肉に用ゐ、金瘡に傅ければ肉を生ずる】（大明）【目瞖、弩肉を去る】（宗奭）【內積を消す】（好古）【噎膈、癥瘕、積痢、骨哽を治し、痣、黶、疣、贅を除く】（時珍）

發明　藏器曰く、一回飛すれば酸砂となり、二回飛すれば伏翼となり、三回飛すれば、定精となる。色は鵞兒黃のやうだ。諸種の補藥に入れる。丸にして服すれば暴熱することがある。頌曰く、この藥は比較的近世の唐時代に初めて現れたものである。然るに方書に、古人がこの一味を單服し、伏火して丸藥にして用ゐたとか、また硫黃、馬牙消などと合せ服するなどとも書いてあるが、果してその方が何

時の時代に初つたものか判らない、兎に角古方ではないのである。元來この物の性質は積聚を攻めるもので、熱にして毒がある。多く服すれば腸、胃を腐壞し、生で用ゐては能く心臟を溶して血にするといふ。決して平常服餌すべきものではない。しかし、西域諸國の住民は鹽の代りに灸いた肉を漬けて食つて無害だといふが、蓋し久しい間の習慣で、體質が自ら害を感ぜぬものであらう。

宗奭曰く、金、銀に不純な他の混入物あるものは、硇砂をその煮る鍋に入れると不純物が溶け盡きる。況や人の腹中の久しき停滯物の如き、腐潰せぬ筈はない。

元素曰く、硇砂は堅癖を破るものだが單にその物一種のみを用ゐてはならない。必ず多くの藥を調合した中に入れて用うべきものである。

時珍曰く、硇砂は大熱、有毒の物であつて、噎膈、反胃、積塊、內癥の病にこれを用ゐれば神功がある。蓋しこれ等の疾は皆七情と飲食物とが原因で起るもので、痰氣が鬱結し、遂に有形の物となつて通ずる道を妨礙するために、吐食し痛脹するのだから、硇砂の化し消する力を用うる以外には能く去り得るものはない。この物の性が善く金、銀、銅、錫を爛すことは、料理人が硬い肉を煮る場合に硇砂少量を

入れると直に爛れるに見ても、大抵類推し得るであらう。所謂「人の心臟を溶して血にする」などいふは、多く服するの不可を極言したまでのことだ。張杲の玉洞要訣に『北庭砂は陰石の氣を享受し、陽毒の精を含有するもので、よく五金、八石を溶し、穢を去り、陽を益す功力が甚だ著しい。その力は硫黄と匹敵する』とあり、獨孤滔の丹房鑑源には『硇砂はその性に大毒があり、五金の賊である。沈冷の疾には服するがよいが、疾が減じたならば直に止めねばならぬ。多く服すれば擁塞、癰腫を發するものだ』とあつて、この二說に甚だ明確なるにも拘らず、唐、宋の醫方に單服の法の存ずるのは、この物の陽を助くる力を賴んで淫逸を縱にしたい欲望から、陰を損じて禍を發する危險を虞れなかつたものと見える。その方は唐愼微が本草の後に收錄してあるから、本書にもその警戒すべき所以を知らしむるために、參考としてそのまま存して置く。

附方　舊四、新二十四。

【服食法】硇砂丸——硇砂を多少に拘らず罐に入れ、上部に更に一箇の罐を据ゑ、紙筋と白土で上下の罐を塗固めて晒し乾し、上の罐に水を入れ、蒼耳の乾葉を末にして頭に鋪き底を蓋ふて火で燒き、火が盡きれば更に火

(一二)一伏時ハ十二時間。
(一三)大觀本草一兩ヲ二兩ニ作ル。
(一四)繊霞草、二十卷雜草部ニ見ユ。
(一五)項火ハ沙罐ノ項部ニ火ヲ加フルナラン。

を添へ、水が盡きればまた水を添へて午前八時から午後八時まで焼き、(一二)一伏時で火を住めてそのまま動かさずに翌日まで置き、取出して研り、米醋と麪糊で和して梧子大の丸にし、溫酒、或は米飮で四五丸づつを服す。何等忌むものなし。久しく服すれば食慾を進め、痰を無くする。(經驗方)【元臟の虛冷】氣が臍腹を攻むる疼痛には、硇砂、(一三)一兩、(一四)繊霞草末二兩をよく和し、小砂罐を固濟せずに緩き火で赤く焼いた中に入れ、口を蓋はずに(一五)項火一秤を加へ、火力盡き爐の冷えるを待つて取出し、皮臍を取去つた生の川烏頭を研つた末二兩を和し、湯に浸した蒸餅で梧子大の丸にし、三丸づつを木香湯、醋湯任意のもので一日一回づつ服す。陳巽方)【腎臟の積冷】氣が心腹を攻めて疼痛し、顏色青く、足冷えるには、硇砂二兩、桃仁一兩を皮を去り、酒一小盞でその硇を煎じて十餘回沸き立たせ、砂石を去り右の桃仁を入れて攪ぜながら膏に煎じ、蒸餅で和して梧子大の丸にし、二十丸づつを熱酒で服す。(聖惠方)【積年の氣塊】臍腹疼痛には、醋で煮た硇砂二兩を木瓜三箇の瓤を去つた中に入れて盌に盛り、日中に晒して瓜の爛れたとき研り和ぜ、米醋五升で稀餳のやうに煎じて密封して貯へ、用ゐる時に少しづつ附子末を和して梧子大

の丸にし、熱酒で化して一丸を服す。（聖惠方）【痃癖癥塊】硇砂丸——痃癖癥塊を治し、水臓を煖め、三蟲を殺し、婦人の血氣、子宮の冷ゆるを治す。臘月に桑枝灰を採り、苦汁を淋し去つて日光で乾し、硇砂一兩を水三兩に溶してその灰を拌ぜ、乾濕を適度にし、瓶に灰を半寸厚さに盛つた中に入れて上部にも灰を蓋ひ、固濟して文武火で赤く煅き、全く冷えてから取出して研り、それを箕に紙を三重に鋪いた中に入れて熱水を沃いで淋し、硇の味が盡く淋下してからその汁を鉢に盛つて熱灰火中に入れて養ひ、絶えず魚眼を跳らすやうにふつふつと沸かせ、汁が乾くを待ちて瓶に入れ、再び食事の間程煅いて取出して重研し、粟飯で和して綠豆大の丸にし、空心に酒で五丸づつを服し、病が去れば服用を止める。（聖惠方）【噎膈反胃】鄧才の清興方では、北庭砂二錢を水で和して蕎麥麪に包んで煅き焦し、冷を待つて中間の濕ふた部分を取つて焙じ乾し、それを一錢に檳榔二錢、丁香二箇を入れて研勻し、一日三回、七厘づつを燒酒で服す。病が癒えれば服用を止め、爾後半月の間白粥を食つて健胃の丸藥を服する。○孫天仁の集效方では、北庭砂二兩を用ゐ、その一兩をば人言末一兩と共に罐に入れて（一六）三炷香の間文武火で（一七）升し、取出して燈盞の

（一六）線香三本ヲ燃ス間。
（一八）升ハ蒸騰サセルコト。

中で末にし、また一兩をば黄丹末一兩と共に鑵に入れて前と同一方法で末を取り、その二種の末に桑灰霜一兩を入れて研勻し、三分づつを燒酒で服して癒えれば止める。○又別法では、平胃散(一八)各一錢に硇砂、生薑各五分を入れて末にし、二錢を沸湯に點てて服すれば石のやうな黑い物を吐出する。屢〻效驗があつた。【一切の積痢】靈砂丹——硇砂、硃砂各二錢半を末にし、黄蠟半兩、巴豆仁二十一粒を膜を去り、共に石器に入れ重湯で一伏時煮て、巴豆が紫色になるを程度として十四粒を棄去り、殘り七粒に曩の二砂末を入れ、むらなく研つて溶した蠟で和して取收め、一箇づつ圓めて綠豆大の丸にし、三丸乃至五丸を淡薑湯で服す。(本事方)【月水不通】臍腹の積聚疼痛するには、硇砂一兩、皂角五挺を皮を去つて剉み、共に末にして(一九)頭醋一大盞で熬膏し、陳橘皮末三兩を入れて三百杵搗き、梧子大の丸にして五丸づつを溫酒で服す。(聖惠方)【死胎の下らぬもの】硇砂、當歸各半兩を末にし、二服に分けて溫酒で調へて服し、普通人が五支里の道を歩行するほどの時間を經て再び一服する。(瑞竹堂方)【喉痺口噤】硇砂、馬牙消等分を研勻して點ける。(聖惠方)【(二〇)懸癰卒腫】硇砂半兩を綿に裹み、含んで唾液を嚥めば平安を得る。(聖惠方)【牙齒の腫痛】老鼠

(一八)金陵本ニモ各字アリ衍ニ似タリ。

(一九)頭醋詳ナラズ。然レドモ醋ノ發明ニ宗奭曰「米醋比諸醋最釅入藥多用之」トアレバ米醋ヲ指スモノノ如シ。

(二〇)此ニ云フ懸癰卒腫ハノドホトケノ腫レル病。

（二）豉ノ集解ニ日ク豉心ハ乃チ合豉ノ時其中心ノモノチ取ルナリトアリ。

一匹を皮を剝去り、硇砂を擦り漬けて三日間置き、血が悉く爛れ溶けた時、その骨を取つて瓦の上で焙じ乾して末にし、樟腦一錢、蟾酥二分を入れて少量づつ牙根上に點ければ立ろに止る。（孫氏集效方）【偏頭風痛】硇砂末一分を水で潤し、（二）豉心一分と搗いて皂子大の丸にし、綿で包んで一部分を露出し、頭痛の左右に隨つてその痛む方の鼻孔に入れれば立ろに效がある。（聖惠方）【目を損じて瘀を生じたるもの】赤い弩肉が出て退かぬには、杏仁百箇を蒸熟して皮尖を取去り、研り濾して淨汁を取り、硇砂末一錢を入れて水で煮溶し、一日一二回づつ點ければ自ら落ちる。（普濟方）【鼻中の息肉】硇砂を點ければ落ちる。（白飛霞方）【鼻中より毛の出る病】一晝夜に長さ一二尺ばかりも伸び、漸次に粗く固まつて繩のやうになり、その痛み忍び難く、拔き去れば復た生ずるもので、これは豬、羊血の過食に因する。生乳香、硇砂各一兩を末にして飯で梧子大の丸にし、空心の時と就寢時とに各十丸づつを水で服すれば自然に落ちる。（夏子益奇疾方）【魚骨哽咽】硇砂少量を嚼んで嚥めば立ろに下る。（外臺祕要）【蚰蜒の耳に入つたもの】硇砂、膽礬等分を末にして一字づつ吹き込めば蟲が化して水となる。（聖濟錄）【爪を割いて肉まで侵せるもの】久しく瘥えぬには、

硇砂、礬石を末にして裹む。瘥えるを度とする。（外臺秘要）【蠍螫の叮螫】硇砂を水で調へて塗れば立ろに癒える。（千金方）【代指の腫痛】唾液で白硇砂を和して麪で作つた盌形の中に入れ、それに指を入れて套めば一日で瘥える。（千金方）【顔の疣目】硇砂、硼砂、鐵鏽、麝香等分を研つて三回搽れば自ら落ちる。（集效方）【疔瘡腫毒】好き硇砂、雄黄等分を研り、瘡口を銀篦で刺破つて悪血を去つてから豆一粒ほどを入れ、紙を小く切つて貼り留めれば直に效がある。毒氣が腹に入つて嘔吐するときは護心散を服す。（瑞竹堂方）【疝氣の卵腫】脹痛して忍び難きには、念珠丸——硇砂、乳香各二錢、黄蠟一兩を研り溶し、和して一百八丸に分け作り、一箇毎に綿に包んで一夜露し、翌日取出して蛤粉を衣にかけ、一日二回、一丸づつを乳香湯で服すれば效がある。（本事方）【諸勞久嗽】方は獸部を見よ。○張賓之曰く、原本には硇の字を皆硇と書いてあるが、句に從ふは誤である。今は白に從ふことに改めた。

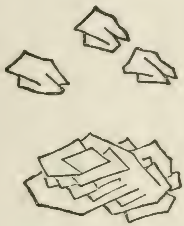
蓬砂（日華）

和名 硼砂
學名 Borax

【釋名】鵬砂（日華）盆砂 時珍曰く、名稱の意味は解らない。一に鵬砂とも

書く。或は錬つて盆に入れて結晶させたものだから盆砂ともいふ。盆消などと同様の意味だ。

【集解】　頌曰く、硼砂は(一)南海に出る。その狀態は甚だ光瑩で、やはり極めて大塊のものもある。諸種の方には稀だが、金銀の煆き繼ぎに用ゐる。宗奭曰く、南番のものは色が重褐で味が和く、藥に入れての效果が速だ。西戎のものは色が白く味は焦げ、藥に入れての功は緩い。時珍曰く、硼砂は西南番に生ずる。黄、白の二種あつて、西のものは明礬のやうに白く、南のものは桃膠のやうに黄色だ。いづれも硇砂の類のやうに錬つて結晶させたもので、西番のものは物を柔にし、垢を去り、五金を殺し、消石と同功のもので、砒石とよく合ふ。



（蓬　砂）

【氣味】　【苦く辛し、煖にして毒なし】頌曰く溫にして平なり。時珍曰く、甘く微し鹹し、涼にして毒なし。獨孤滔曰く、汞を制し、銅を啞し、砂子を結す。土宿眞君曰く、知母、鵝不食草、芸薹、紫蘇、甑帶、何首烏は皆能く硼砂を伏す。砒石

(一)南海ハ土部自然灰ノ註ヲ見ヨ。

（二）陰㿉ハ陰丸一核偏墜シ或ハ倶ニ腫レ或ハ一核腹中ヘ縮ミ入リ、痛忍ブベカラザルヲ云フ。

と共に煆けば變化する。

【主治】【痰を消し、嗽を止め、瘕結喉痺を破る】（大明）【上焦の痰熱。津液を生じ、口氣を去り、障瞖を消す。噎膈反胃、積塊の瘀肉を結せるもの、（二）陰㿉、骨哽、惡瘡、及び口齒の諸病を除く】（時珍）

【發明】頌曰く、今の醫家では咽喉を治するに最も必要のものとして硼砂を用ゐる。宗奭曰く、口中で溶して唾液を嚥めば喉中の腫痛、膈上の痰熱を治す。初期に自覺すると同時にこれで治療すれば喉痺を發さぬ。また緩に效を取るもよし。時珍曰く、硼砂は、味は甘微鹹、氣は涼、色は白く、質は輕い。故によく胸膈、上焦の熱を去る。素問に『熱が内に淫するをば鹹、寒を以て治し、甘を以て之を緩うす』とあるがこれである。その性は五金を柔にし、且つ垢膩を去るもので、噎膈、積聚、骨哽、結核、惡肉、陰㿉を治するにこれを用ゐるはこの物の垢を去る力を利用するのである。洪邁の夷堅志には『鄱陽の汪友良が、食事の際誤つて呑んだ一本の骨が咽に哽へ、あらゆる方法を講じても下らなかつたが、うとうとする夢に朱衣を著た人から「南方の蓬砂を用うるが好い」と敎へられ、一塊を含んで溶けた汁を嚥むと

脫然として哽へた骨が無くなつた』とある。これは堅いものを軟にする徴證だ。日華が『苦く辛し、暖なり』といふは誤である。

附方　新十二。【鼻血止まぬもの】硼砂一錢を水で服すれば立ろに止る。（集簡方）【勞瘵の蟲あるもの】硼砂、硇砂、兎屎等分を末にして蜜で梧子大の丸にし、生甘草一分を新水一鍾で揉んだ汁で七丸づつを服す。朔日から十五日まで五更の時刻に無言で飮むのである。（乾坤秘韞）【木舌腫強】硼砂末を生薑片につけて揩れば少時して消する。（普濟方）【咽喉の(三)穀賊】腫痛するには、蓬砂、牙消等分を末にし、蜜で和して半錢を含み嚥む。（直指方）【咽喉腫痛】破棺丹——蓬砂、白梅等分を搗いて芡子大の丸にし、一丸づつを噙み溶す。（經驗方）【喉痺牙疳】盆砂末を吹き、幷に擦る。（集簡方）【骨哽の咽に在るもの】方は發明の項にある。【小兒の陰㿗】大きく腫れてひかぬには、硼砂一分を水で研つて塗れば大いに效がある。（集玄方）【酒に醉はぬ法】豫め盆砂二錢を服するが妙である。（相感志）【毒物を飮食したとき】硼砂四兩、甘草四兩を眞香油一斤に瓶の中で浸し、有毒物を食つた場合にその油一小盞を服す。久しく浸したものほど佳し。（瑞竹堂經驗方）【一切の惡瘡】方は上に同じ。【弩肉瘀突】

(三) 穀賊ハ喉中痒ク刺シテ嗽セント欲スルヲ云フ。

黄色の南鵬砂一錢、片腦少量を研末し、燈草に蘸けて點ける。（直指方）

附錄 **特蓬殺**（拾遺）藏器曰く、味苦し、寒にして毒なし。折傷の内損瘀血で死ぬほど煩悶するものを治するには、酒で溶して服す。南番地方では毒箭に中り、また深山で大蝮に咬まれたとき、早速その患者の頭上を十字に刺して血を出し、それへこの藥末を傅け、幷に傷處へ傅ける。それで黄水數升を吐下して痛悶がなくなる。その地方の村落では大にこれを大切にし、竹筒に入れ腰に帶びて毒箭を防ぐために備へて居る。また惡瘡、熱毒、癰腫、赤白遊風、瘻蝕等の瘡を治するには、いづれも水で和して傅ける。賀州の山中の石上に生じ、碎石、硇砂の類に似たものである。

石硫黄（本經中品）

和名 硫黄
學名 Sulphur

釋名 **硫黄**（呉普）**黄硇砂**（藥性）**黄牙** **陽侯**（綱目）**將軍** 時珍曰く、硫黄は純陽火石の精氣を享有して結成し、性質は(一)通硫し、色は中黄を天賦とするところから硫黄と名けたものだ。その物の含む猛毒は七十二石の將帥たるものだから

(一)硫ハ流ニ通ズ。疏通スルノ意。
(二)牧牛ノ山、未攷。

藥品中で將軍の號がある。外科では之を陽侯とも黄牙ともいひ、また黄硇砂ともいふ。

集解　別錄に曰く、石硫黄は東海(二)牧牛の山の山谷中、及び(三)大行、河西の山に生ずる。礬石の液である。普曰く、或は(四)易陽に生じ、或は河西に生ずる。或は五色の黄があるが、これは(五)潘水の石液である。燒けば紫の焔を出さしめる。八月、九月に採收する。

弘景曰く、東海郡は(六)北徐州に屬するが、箕山にもある。今は第一位のものは(七)扶南、林邑に產し、色は鵞卵の黄味の殼から出たばかりのときのやうだ。これを崑崙黄と名ける。之れに次ぐは外國に產するもので、蜀中を經て中國へ來る色の深い(八)煌煌と光るものだ。此に『礬石の液』とあるが、現に南方にはない。礬石とあるは恐らく決定的のものではあるまい。

珣曰く、廣州記に『(九)崑崙國、及び波斯國、(一〇)西方明の境に生ず』とある。顆塊が瑩淨で石の雜らぬものが良い。蜀中の(一一)雅州からも出るが、光膩な點は甚だ好いけれども功力は舶來のものに及ばない。

牧羊之山ノ寫誤ガ。牧羊ナラバ今ノ遼東地方ト見ルベキガ如シ。弘景ガ北徐州ト見タルハ、タダ漢ノ郡ニ東海郡アリトイフニ過ギズ。

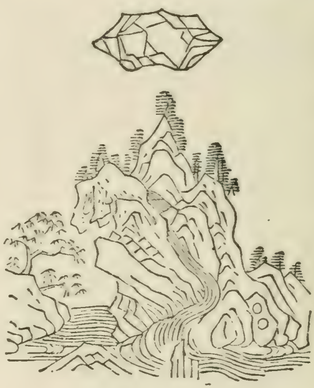
(三) 大行ハ大行山、今ノ河南省輝縣ニ在リ。淮南子ニハ五行山トアリ。河西ノ山ハ河西地方ノ山ノ意カ。河西トハ今ノ陝西、甘肅等黄河以西ノ地ヲ指ス。

(四) 易陽ハ漢ノ趙國領內ノ縣名、今ノ直隷省永年縣ノ西十五支里ノ地點ナリ。

(五) 潘、礬ト通ズ。礬水ノ石液ト云フ意ナルベシ。

(六) 北徐州トハ今ノ山東省ノ南部、江蘇省ニ接スル古ノ瑯琊ノ地方ナリ。箕山ナル山ニ五アレドモ、

頌曰く、今はただ南海の諸番地に産する。(一二)嶺外の州郡にも出ることは出るが甚だ佳良でない。鵞黄色のものを崑崙黄と名け、赤色のものを石亭脂と名け、青色のものを冬結石と名け、半白半黒のものを神驚石と名ける。いづれも藥用には役に立たぬ。又、水硫黄といふ一種が(一三)廣南、及び(一四)資州に出る。これは溪澗の水中に流出するものを、茅で收取して熬り作るもので、眞珠黄と呼ぶ。臭氣が腥いもので、ただ瘡藥に入れるに止る。また煎鍊した汁を型に入れて器などにも作る。これも色は鵞子黄のやうだ。



(石硫黄)

時珍曰く、凡そ石硫黄の産地には必ず溫泉があつて、その溫泉には硫黄の臭氣がある。魏書に『(一五)盤盤國には火山があつて、その山の近傍は焦げて數十支里の間に溶け流れて居る。それの堅く凝つたものが卽ち石硫黄だ』とあり、張華の博物志に

此ニイフ箕山ハ今ノ山東省濮縣ノ東ニ在ル箕山ヲ指スモノノ如シ。
(七)扶南、林邑ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(八)煌煌ハ光輝眩燿ノ意。
(九)崑崙國ハ馬來地方ヲ指ス。
(一〇)西方叫、未詳。
(一一)雍州ハ水部甘露ノ註ヲ見ヨ。
(一二)嶺外ハ五嶺以外所謂嶺南一帶ノ地、卽チ廣東、廣西兩省、ヲ指ス。
(一三)廣南ハ道名、宋ニ置ク。卽チ唐ノ嶺南道ノ地ナリ。後ニ東西路ニ分ツ。
(一四)資州ハ今ノ四川省資中縣ノ地ナリ。
(一五)盤盤國、唐以前ニハ今ノ暹羅國ノ地方ヲ盤盤國ト稱ス。

は『西域の硫黄は(一六)且彌の山に出る。その山は(一七)高昌を去る八百支里の地點に在つて、高さ數十丈あり、晝は穴の狀態が烟のやうだが夜は燈光のやうに輝く』とあり、庚辛玉册には『硫黄に二種あつて、石硫黄は南海、琉球の山中に生じ、土硫黄は廣南に生ずる。嚼んで音のせぬものを佳とする。舶來する(一八)倭硫黄も佳い。今は一般に消石と配合して烽燧や花火を作る。軍用品として重要なものだ』とある。

修治　斆曰く、凡そこれを使ふには靑、赤色、及び半白、半靑、半赤、半黑のものを用ゐてはならぬ。自然に黄色で中まで瑩淨なもの、名稱と實質と相應したものを貴しとする。凡そ修治には、硫黄四兩を用ゐ、先づ(一九)龍尾蒿の自然汁一鎰、東流水三鎰、紫背天葵汁一鎰、(二〇)粟遂子莖汁、以上の四件を合せ攪きまぜて坩鍋に入れ、(二一)六乙泥で底部を固濟し、硫黄を碎いて鍋に入れ、漸次に前の汁を添加しつつ火をかけてその汁が全部盡きるまで煮てから、再び百部末十兩、柳蚛末二斤、一簇草二斤を細かに剉み、東流水でその硫黄と共に二伏時煮て取出し、諸藥を取去つて熟甘草湯で洗ひ、鉢に入れて二萬匝研つてから用ゐる。

時珍曰く、凡そ硫黄を丸、散藥に入れて用ゐるには、蘿蔔の中を剜抜いて空にし

(一六)且彌ハ西域ノ古國名、今ノ新疆省鄯善縣ノ西南。
(一七)高昌ハ光明鹽ノ註ヲ見ヨ。
(一八)倭硫黄ハ日本產硫黄ヲ云フ。
(一九)龍尾ハ烏斂莓ヲ云フ。
(二〇)粟逐子、大觀本草ニ粟遂子ニ作ル。
(二一)六乙泥ハ蚯蚓泥。

た中に硫黄を入れて抱き合せ、稲糠の火で煨き熟してその臭氣を去り、紫背、浮萍と共に煮てその火毒を消し、皂莢湯で淘つてその黒漿を去つて用ゐる。また一方法は、打碎いて絹袋に盛り、(二二)無灰酒で三伏時煮て用ゐる。又、消石は能く硫を化して液體にし、竹筒中に硫を盛つて馬糞の中へ一个月埋めて置いても水になる。これを硫黄液と名ける。

【氣味】【酸し、溫にして毒あり】別錄に曰く。大熱なり。普曰く、神農、黄帝、雷公は鹹し、毒ありといひ、醫和、扁鵲は苦し、毒なしといふ。權曰く、大毒あり。黒錫の煎湯を用ゐればその毒を解し、また冷豬血を食つても解す。珣曰く、一般に能く毒を制伏し、その物の本來に歸らしめて服すればよし、あらゆる病を除く。もし毒性が發動した場合には、豬肉、鴨羹、(二三)餘甘子湯を用ゐるがよし。いづれもその毒を解す。葛洪曰く、四黄のうちただ陽侯を尊しとする。金石で煆錬したものは用ゐてはならぬが、草木で制伏したものならば藥用に堪へる。桑灰、益母、紫荷、菠薐、天鹽、桑白皮、地骨皮、車前、馬鞭草、黄蘗、何首烏、石韋、蕎麥、獨帚、地楡、蛇牀、兎絲、蓖麻、蠶砂の灰なり汁なりは皆これを伏し得る。之才曰く、曾青

(二二)無灰酒ハ火ヲ入レヌ酒。

(二三)餘甘子ハ菴摩勒ノ一名。

が使となる。細辛、飛廉、朴消、鐵醋を畏る。玄壽先生曰く、硫は礬の液、礬は鐵の精、慈石は鐵の母である。故に鐵砂、慈石を制するに硫黄を入れれば立ろに紫粉となる。獨孤滔曰く、硫はよく汞を乾し、五金を見れば黒くなり、水銀と合すれば色が赤くなる。

【主治】【婦人の陰蝕、疽痔、惡血。筋骨を堅くし、頭の禿を除き、よく金、銀、銅、鐵、(二四)奇物を化す】(本經)【心腹の積聚、邪氣、冷癖の脇にあるもの、欬逆上氣、脚冷疼弱で力なきもの、及び鼻衄、惡瘡、下部の䘌瘡を療じ、血を止め、疥蟲を殺す】(別錄)【婦人の血結を治す】(吳普)【氣を下し、腰腎の久冷を治し、冷風頑痺の寒熱を除く。生で用うれば疥癬を治し、錬つて服すれば虚損の泄精に主效がある】(甄權)【陽道を壯にし、筋骨の勞損、風勞の氣を補ひ、嗽を止め、臟蟲、邪魅を殺す】(大明)【肌膚を長じ、氣力を益す、老人の(二五)風祕にはいづれも錬つて服するがよし】(李珣)【虚寒の久痢、滑泄、霍亂に主效があり、命門の不足、陽氣の暴絶を補ふ。陰毒、傷寒、小兒の慢驚に用ゐる】(時珍)

【發明】弘景曰く、一般の醫方に用ゐて脚弱、及び痼冷を治するに甚だ效があ

(二四)奇物ハ無名ノ鑛物ノコトナラン。

(二五)風祕ハ祕結ノ一種ナラン。

(二六)不可盡劑、剩餘ヲ使用セヌコト。

る。仙經に『これを用ゐて奇物を化す』といふは、いづれも黄白術、及び合丹の法をいふのである。

○頌曰く、古方には硫黄を服餌するといふことはなかつたもので、本經にもこれを用ゐる範圍は瘡蝕を治すること、積聚、冷氣、脚弱等を攻むることに限られてある。然るに近世では錬治して常服の丸、散藥を作つて居るが、その製錬、服食の方法を觀るに、甚だ本質や原則を無視したもので、乳石の場合の如く理論、法則すべて正確なる根據の下に用ゐられるものとは趣が異ふ。故に服餌した結果、效力は顯著でも同時にその害毒は更に一層烈しいのだ。大に戒めねばならぬことである。土硫黄は辛く熱にして腥臭い。治疥、殺蟲に用うる以外には服食すべきものでない。

○宗奭曰く、今は一般に下元の虛冷で元氣の絶えんとするもの、久患の寒泄で脾、胃が虛弱し、命數盡くるに垂たるものを治するに用ゐ、服すれば必ず奏效するのである。しかし病に的中すれば直に服用を止むべきもので、(二六)劑を盡すまで服み續けてはならない。世人は一體有利の方面のみを知つて害毒の方面をば知らないが、それはこの物は效力と害毒を同時に兼有するからである。もし病勢危急の場合には丸

(二七)生魂ノ二字湯液本草ニアリ。

數を增加して服するがよい、少ければ目的の效を奏さないことがある。そこで同時に附子、乾薑、桂を加へる。

好古曰く、太白丹、來復丹の如きはいづれも硫黃を用ゐ、消石を佐として用ゐてある。これは至陽の佐として至陰を用ゐたもので、仲景の白通湯が人尿、猪膽汁を佐とし用ゐてあると大體に於て同一意味である。これは內は生冷に傷み外は暑熱に冒された霍亂の諸病を治する所以であつて、格拒の寒を去り、伏陽を兼ね有するものを治せんとするには、當然さうせねばならぬわけである。もし伏陽がないならばそれは只の陰虛であつて、必ずしも更に陰藥を佐とする必要はないのである。何となれば硫黃も將軍と號するほどの威力があつて、その功力は能く邪を破つて正に歸し、滯を返して淸に還し、陽精を挺出して陰を消し、魄を化し(二七)魂を生ずるものだからである。

○○時珍曰く、硫黃は純陽の精を享受し、大熱の性を賦與されたもので、よく命門の眞火の不足を補ふ。且つその性は熱ではあるが、大腸を導き利するもので、躁濇するものと同樣ではない。蓋しこれも危急を救ふ妙藥である。但し製錬して久しく服

しては偏勝の害を惹起する。況や常に繼續的に服食するに至つては、その害毒改めて言ふまでもない。それといふも皆この物の力を假りて淫欲を縦にしやうといふのだから、自ら求めてその害毒を招くやうなものであつて、藥そのものには何の責むべきところはない。按ずるに、孫升の談圃に『硫黄は神仙の藥である。毎歳三伏の日に百粒を餌へば臟腑の積滯を去る效驗がある。但し硫黄は石下に伏して生ずるもので、陽氣の溶液が凝結して出來たものだから、その性は大熱である。火で錬つて服すれば多くは發背疽に罹る』とあり、方勺の泊宅編には『金液丹は硫黄で錬成した純陽の物で、痼冷の患者に適當なものだ』とある。今世間で夏至の日にこれを服するが、反つてそのために大患に罹るものが多い。韓退之の如きは服食を戒める文章まで書いたが、晩年には硫黄を服して死んだのだから、大に警戒すべきものに相違ない。また夏英公は冷病があつて硫黄と鍾乳を服してゐたが、之を久服して十分天壽を全うして世を去つた。これは天稟が普通の人間と異つてゐたのである。洪邁の夷堅志には『唐與正は醫術にも心得があつて、よく理論的な方面から病を治療した人だ。呉巡檢が尿の出ぬ病に罹つて、横臥すれば微に通ずるが立てばただ一滴も出な

くなり、あらゆる通利の藥を用ゐても少しも效果が現れなかつた時、唐が巡檢の平常を訊ねて見ると、持藥として手製の黑錫丹を用ゐてゐるとのことだつた。それで病の原因を察するに、これは藥を結砂するとき、硫黃が飛散して鉛の性が完全に變化してゐなかつたに相違ない。鉛砂は膀胱に入るものだから、横臥すれば偏重するから多少尿は出るが、立てば正面に水道を塞ぐのだ。そのために不通になつたことと推定された。そこで金液丹三百粒を十服に分けて瞿麥の煎湯で服ませると、鉛は硫氣に遇ひ忽ち變化を生じて累累として水道から下り、病は遂に平癒したといふ。硫が鉛を化することは(二八)經方にも載つて居るが、苟も醫者に變通の活機がなかつたならば、いかでかやうに妙效を奏することが出來やうか』とある。類編には『(二九)仁和縣のある官吏は、早老で衰弱し、連に齒が落ちた。ところがある道人の教で、生硫黃を猪臟中に入れて煮熟し、搗いて丸にし、或は蒸餅を入れて梧子大の丸にして隨意に服すると、飲食物は平常に倍加し、歩行、運動は輕快になり、九十歳を踰えてなほ頗る健康だつた。しかし後に好んで牛血を飲んだために、遂に金水のやうなものを洞泄して俄に衰弱し死亡した。內醫官管範は猪肪は能く硫黃を制すといつたが、此

(二八)經方ハ本草藥物處方ノ書。

(二九)仁和縣ハ五代ノ梁ニ置ク、明、淸ニハ錢塘縣ト共ニ浙江省治タリ。杭州府此ニ治ス。民國改メテ仁和、錢塘ヲ併セテ杭縣トナス。

の場合猪臟を用ゐたのは就中妙機を得たものだ。王樞使も常服してゐた』とある。

【附方】 舊八、新四十一。【硫黄盃】この盃は、造化を配合し、陰陽を調理し、天地冲和の氣を奪ふ、乃ち(三〇)水火既濟の方であつて、冷ならず熱ならず、緩ならず急ならず、延年却老の功、脱胎換骨の妙があり、大いに能く上を淸し下を實し、陰陽を升降し、九竅を通じ、九蟲を殺し、夢泄を除き、容顏を悅くし、頭風を解し、胸膈を開き、痰涎を化し、耳目を明にし、肌膚を潤し、精髓を添へ、(三一)疝墜を除き、又、婦人の(三二)血海枯寒、赤白帶下を治す。その製法は、先づ瓷盌に胡桃を擦つてそれに砂のない石硫黄を生で入れ、汁に溶して明礬少量を入れ、塵垢が悉く浮ぶのを杖で掠め取つて木綿で濾し、再び盌で溶化して盃の中に傾け入れ、一面に行渡るやうに搖動して盃の形に作り、取出して二夜土中に埋め、木賊で磨いて光を出して用ゐる。色彩を紅くするには硃砂を入れ、靑くするには葡萄を入れて研り合せて煮て作る。その盃で熱酒二盃づつを早朝空心に溫服すればあらゆる病を悉く除く。この方に優るものはない。【紫霞盃】葉石林の水雲錄に『硫黄を袋に盛つて罐の中に吊り下げ、紫背浮萍と共に水で數十沸煮て取出し、乾して硏末したもの十兩に、珍珠、

(三〇)旣濟ハ卦名、水火相交ツテ用ヲナスヲ云フ。

(三一)疝墜ハ陰狐疝。鼠蹊脱腸及陰囊内臓脱。

(三二)血海ハ子宮。

(三三)紫粉霜ハ銀朱ノ一名。

(三四)丹田ハ臍下三寸。

琥珀、乳香、雄黄、硃砂、羊起石、赤石脂、片腦、(三三)紫粉、白芷、甘松、山柰、木香、血竭、沒藥、韶腦、安息香各一錢、麝香七分、金薄二十片を入れて末にし、銅杓に入れて緩き火で溶化し、形好き盃一箇の周圍を粉紙で包裹して中央に一つの孔を開け、その孔から溶けた硫を傾け入れて平に行き渡るやうに盃を旋轉し、冷水中に投じて取出し、毎早朝その盃で酒二三盃を飲む。功力は上記の方と同じ。昔、中書劉景輝が勞瘵に罹つたとき、太白山中で一老仙に親授されてこの方を服し、病は果して癒えた。人若し能く精神を清くし欲念を寡くしてこれを服するならば、やがて神仙たるべき機縁が到來する』とある。【金液丹】眞氣を固くし、(三四)丹田を暖め、筋骨を堅くし、陽道を壯にし、久寒痼冷を除き、勞傷虛損を補し、男子の腰腎の久冷、心腹の積聚、脇下の冷痛、腹中の諸蟲、失精、遺尿、身體瘦せ力弱きもの、腰膝の痛弱、冷風頑痺、上氣衄血、欬逆、寒熱、霍亂轉筋、虛滑下痢を治し、又、痔瘻の濕䘌で瘡を生じ、下血止まぬもの、及び婦人の血結、寒熱陰蝕、疽痔等を治す。石硫黄十兩を研末して甆盒に盛り、水と赤石脂を入れて口を封じ、鹽泥で固濟して日光で乾し、先づ水を滿てた一箇の小罐を地中に埋めてその中へ今の盒子を入れ、

泥で固濟して七晝夜緩き火で養ひ、十分と思ふ時頂火一斤を加へて煅き、冷えてから取出して研末し、一兩毎に蒸餅一兩を加へ水で浸して梧子大の丸にし、三十丸づつを早朝、或は空心に米飮で服す。又、傷寒身冷で脈の微なるもの、或は吐き、或は下し、或は自汗して止まず、或は小便の禁ぜぬものは、いづれも之を服するがよい。身體が熱して脈の出るを度とする。（惠民和劑局方）【腰膝を暖め益する】王方平の通靈玉粉散――腰膝を治し、水臟を煖め、顏色を益す。その功用は一一記載し難い。硫黃半斤、桑柴灰五斗で取つた淋汁を煮ること三伏時、鐵匙で抄つて火にかざして試み、伏火して居れば煮ることを止め、乾くを俟つて强力な火で煅く。もしなほ伏火せぬときは更に伏するまで煮る。煅き了つたものは研末して、地下一尺二寸の坑を掘つて水を入れ、その水を澄し取つて右の硫末を和し、坩鍋で膏のやうに煎じて鐵鏟で抄ひ出して細研し、飯で麻子大の丸にして空心に鹽湯で十丸づつを服す。極めて效驗あるもので、余が鄕黨の王昭遂は之を服して齡九十歲に達し、顏は少年のやうで力は通常人に倍した。（杜光庭玉函方）【風毒脚氣】痺弱には、硫黃末三兩、鍾乳五升を煮沸して水を入れ、三升に煎じて三合づつを服す。○又別法では、

牛乳三升を一升半に煎じ、その牛乳五合で硫黄末一兩を調へて服し、寢具を厚く被て汗を取る。風に當つてはならぬ。まだ發汗せぬときは再服し、その經過に依り調理して數日後更に服す。北方人はこれを用ゐて多く效を擧げて居る。煎じて丸にして服するもよし。(肘後方)【陰證の傷寒】極端に冷えて厥逆し、煩躁腹痛して脈なく、甚だ危篤なるには、舶來の硫黄を末にして艾湯で三錢を服し、そのまま眠に就けば發汗して癒える。(本事方)【(三五)陰陽二毒】黑龍丹――舶來の硫黄一兩を柳木で二三日擂き研り、巴豆一兩を殼のまま中味の有無を改め、先づ三升の鍋一箇の底に硫を鋪いてその上に豆を入れ、(三六)釅米醋半升をそれに澆ぎかけ、盞子で緊しく蓋ふて醋紙で固く縫合し、頻に醋で潤して文武火で熬り、中の豆が音をたてて半數ほど炸ねたと思ふ時急に鍋を火から離し、臼に移し入れて細かに搗き、再び(三七)醋兩茶脚で鍋中の藥を洗つて臼に入れ、少しづつ蒸餅を入れながら搗いて雞頭子大の丸にし、陰毒には、椒四十九粒、葱白二莖、水一盞を十分の六に煎じた汁を熱して藥一丸を呑下し、陽毒には、豆豉四十九粒、葱白一莖、水一盞を前記と同じ割合に煎じて呑下す。呑む時嚼み破つてはならぬ。かくて五六日經てまた服する。もし藥力がまだ傳

(三五)大觀本草ニハ、陰陽二毒ノ下ニ傷寒ノ二字アリ。

(三六)釅、說文ニ酢漿、廣韻ニ酒醋味厚トアリ。

(三七)醋兩茶脚、詳ナラズ。一本、醋兩茶鍾ニ作ル。從フベシ。

入せぬもの、或は制限の日數に達せぬものは服してはならぬ。姙婦の吐瀉するものも服してよし。(博濟方)【一切の冷氣】積塊で痛むには、硫黃、焔消各四兩を結砂し、靑皮、陳皮各四兩と末にして糊で梧子大の丸にし、空心に米飮で三十丸づつを服す。(鮑氏方)【元臟の久冷】腹痛、虛泄、(三八)裏急には、玉粉丹――生硫黃五兩、靑鹽一兩を細研し、蒸餅で綠豆大の丸にして五丸づつを空心に熱酒で服し、物を食つて壓する。(經驗方)【元臟の冷泄】腹痛し、極端に虛するには、硫黃一兩を黃蠟で化して梧子大の丸にし、五丸づつを新汲水で服す。ある方では、靑鹽二錢を加へ、蒸餅で和して丸にして酒で服す。(普濟方)【氣虛の暴泄】晝夜二三十囘泄痢して止まぬもの、夏季旅行の備急藥に最妙の朝眞丹――硫黃二兩、枯礬半兩を研細して水に浸し、蒸餅で梧子大の丸にして硃砂を衣にかけ、十五丸乃至二十丸づつを溫水、或は鹽湯で任意に服す。(孫尙藥祕寶方)【(三九)伏暑の傷冷】二氣交錯して中脘が痞結し、或は泄し、或は嘔するもの、或は霍亂厥逆には、二氣丹――硫黃、消石等分を研末し、石器で炒つて沙にし、再び研つて糯米糊で梧子大の丸にし、四十丸づつを新井水で服す。(濟生方)【傷暑吐瀉】硫黃、滑石等分を末にし、一錢づつを米飮で服す

(三八)裏急トハ便通ヲ催スコト。

(三九)伏暑ハ三伏ノ暑

れば止る。（救急良方）【霍亂吐瀉】硫黄一兩、胡椒五錢を末にし、黄蠟一兩で化して皂子大の丸にし、涼水で一丸づつを服す。（聖濟錄）【小兒の吐瀉】冷熱に拘らず、驚吐、反胃、一切の吐利で諸種の手當の效なきには、二氣散——硫黄半兩、水銀二錢半を星の見えぬまで研り、一字乃至半錢づつ生薑水で調へて服す。その吐は立ろに止る。或は共に炒つて結砂して丸にする。方は靈砂の條を見よ。（錢氏小兒方）【反胃嘔吐】方は水銀の條を見よ。【脾虛下白】脾、胃虛冷で停水、滯氣が凝り、白涕となつて下り出るには、舶來の硫黄一兩の研末を炒麪一分と共に研り、冷、熱水を滴して梧子大の丸にし、五十丸づつを米湯で服す。（楊子建護命方）【下痢虛寒】硫黄半兩、蓖麻仁七箇を末にして臍中を塡め、着衣の上から熱湯で熨して下痢が止れば罷める。（仁存方）【協熱下痢】赤、白を下すには、硫黄、蛤粉等分を末にして糊で梧子大の丸にし、十五丸づつを米飮で服す。（指南方）【腸風下血】方は鯽魚の條を見よ。【老人の冷祕】風祕、或は泄瀉には、元臟を煖め、積冷を除き、脾、胃を溫め、食欲を進め、心腹一切の痃癖冷氣を治す。硫黄を柳木槌で研細し、七回湯に泡け焙じて研つた半夏と等分を生薑の自然汁で調へ、蒸餅で和して百杵搗いて梧子大の丸にし、十

五丸乃至二十九づつを空心に溫酒、或は薑湯で服す。婦人は醋湯で服す。（和劑局方）【久瘧の止まぬもの】鮑氏の方では、硫黃、硃砂等分を末にし、發作の日の五更に二錢づつを臘茶淸で服す。當日或は甚しく發作するもの、或は發作せぬもの、いづれも效がある。寒多きには硫を倍にし、熱多きには砂を倍にする。○朱氏の方では、硫黃臘茶等分を末にし、發作の日の早朝、冷水で二錢づつ二回服すれば效がある。寒多きには硫を加へ、熱多きには茶を加へる。【酒鼈、氣鼈】氣血に任せて酒を嗜み、氣に凝れば氣鼈となる。酒を嗜んで痼冷し敗血に酒が入れば血鼈となる。大なるは鼈ほど、小なるは錢ほどの物が發生し、頭を搖し尾を掉つて上は人の咽喉を侵し、下は人の肛門を蝕し、或は膈背に附き、或は腸腹に隱れるものである。生硫黃末を老酒で調へて常に服す。（直指方）【欬逆のしやくり】硫黃の燒烟を嗅げば立ろに止る。（醫方摘要）【頭痛、頭風】如神丹——光明硫黃、消石各一兩を細研し、水で芡子大の丸にして空心に一丸を嚼んで茶で飮下す。（普濟方）【腎虛頭痛】聖惠方では、硫黃一兩と胡粉を末にして飯で梧子大の丸にし、痛む時冷水で五丸を服すれば止る。○本事方では、硫黃末、食鹽等分を水で調へて生麪糊で梧子大の丸にし、五丸づつを薄荷

茶で服す。○普濟方では、生硫黄六錢、烏藥四錢を末にして蒸餅で梧子大の丸にし、三五丸づつを食後に茶清で服す。【鼻端の痛み】上等の硫黄末を冷水で調へて搽る。(澹寮方)【(四〇)酒皶赤鼻】生硫黄半兩、杏仁二錢、輕粉一錢を毎夜搽る。○瑞竹堂方では、舶來の硫黄、雞心檳榔等分、片腦小量を末にし、絹で包んで日毎に塗擦する。蓖麻油を加へれば更に妙である。【鼻、顏面の紫風】風熱が陽明の經絡に上攻するものだ。また(四一)風刺癮疹をも治す。舶來の硫黄、枯白礬等分を末にし、黄丹少量づつを津液で和して塗れば一个月で效が現れる。(宣明方)【身體、面部の疣目】蠟紙に硫黄末少量を卷き込み、火を點けて焠けば音を發して疣目が取れる。(普濟方)【(四二)癧瘍風病】白色で片を成すには、布で拭つてから醋で硫黄、附子を摩つて塗る。或は硫黄、白礬を擦る。(集驗方)【小兒の聤耳】硫黄末を蠟で和して挺に作り、挿入して一日二回づつ易へる。(千金方)【小兒の口瘡】糜爛するには、硫黄を水で調へて手の心、足の心に塗り、效が現れた時は洗ひ去る。(危氏得效方)【突然耳の聞えぬもの】硫黄、雄黄等分を研末し、綿で裹んで耳を塞げば數日で人の聲を聞くやうになる。(千金方)【諸瘡の胬肉】蛇のやうに數寸出るには、硫黄末一兩を肉上に傅ければ縮む。

(四〇)酒皶ハ、ニキビバナ。

(四一)風刺ハ粉刺ナラン。俗ニニキビ。癮疹ハ猩紅熱及假性猩紅熱。

(四二)癧瘍ハ汗斑、俗ニアセナマヅ。

（聖惠方）【癰疽の瘡口の合はぬもの】石硫黃粉を箸の端につけて孔中に挿入し、瘥えるを以て度とする。（外臺祕要）【一切の惡瘡】眞君妙神散——好き硫黃三兩、蕎麥粉二兩を末にして井水で捏ね、小さき餅にして日光で乾して貯へ、使用するとき新汲水で調へて傅ける。痛むものは痛まなくなり、痛まぬものは痛んで癒える。（坦仙皆效方）【疥瘡の蟲あるもの】硫黃末を雞子で煎じ、香油で調へて搽れば極めて效がある。（救急良方）【頑癬の癒えざるもの】銀を溶すに用ゐた盞のある(四三)鑵子に硫黃一兩を入れて溶化し、取卸して冷めてから鑵を打破りて硫を取出し、盞と共に研末して搽る。（孫氏集效方）【癘風の蟲あるもの】酒で硫黃末少量を調へてその汁を飲む。或は大風子油を加へるが更に好し。（直指方）【婦人の陰瘡】硫黃末を傅け、瘥えれば止める。（肘後方）【陰門の寬冷】硫黃を水で煎じて頻に洗ふ。（心傳方）【小兒の夜啼】硫黃二錢半、鉛丹二兩をむらなく研つて瓶に入れて固濟して煆き、七日間地中に埋めて取出し、飯で黍米大の丸にして二丸づつを冷水で服す。（普濟方）【陰濕瘡疱】硫黃を一日三回づつ傅ける。（梅師方）

（四三）鑵子、ホトギ（缶）

石硫赤（別錄有名未用）

和名　セレン硫黃
學名　Selensulphur

釋名　石亭脂（圖經）石硫丹（弘景）石硫芝

集解　別錄に曰く、理が石のやうなものである。山石の間に生ずる。普曰く（一）羌道の山谷に生ずる。時珍曰く、これは硫黃の色に赤の多いもののことで、石亭脂と名ける。而るに近世石黃をまで同一に見て石亭脂といふは、この區別を考へないからである。按ずるに、抱朴子に『石硫丹は石の赤精であつて、石硫黃の類のものだ。涯岸の間に浸み溢れて居るもので、その濡濕なものは丸にして服し、堅く凝結したものは散にして服し得る。（二）五岳にはいづれもこれがあるが、（三）箕山には更に多い。許由、巢父はこれを服したもので、石硫芝といふはこの物だ』とある。

氣味　【苦し、溫にして毒なし】

主治　【婦人の帶下に血を止め、身を輕くし、天年を長くする】（別錄）【陽を壯にし、冷を除き、瘡を治し、蟲を殺す。功力は硫黃に同じ】（時珍）

附方　新二。【赤鼻の痛み】紫色の石亭脂を研末し、冷水で調へて搽れば半月

（一）羌道ハ羌中ニ同ジ。消石ノ西羌ノ註參照。
（二）五岳ハ東岳太山、南岳衡山、西岳華山、北岳恒山、中岳嵩山ヲイフ。
（三）箕山ハ山東省濮縣ノ東ニ在リ。

で根絶する。紅色のものは之に次ぐ。黄色のものは用ゐてはならぬ。（聖濟錄）【風濕脚氣】石亭脂を生で一兩、川烏頭を生で一兩、無名異二兩、以上を末にして葱白の自然汁で和して梧子大の丸にし、一日一回、一錢づつを空心に淡茶と生葱で服す。（瑞竹堂方）

石硫青（別錄有名未用）

和名　青色ノ硫黃
學名　Sulphur of blue colour

【釋名】**冬結石**　別錄に曰く、（一）武都の山の石間に生ずる。青白色のものだ。故にかく名けたのである。時珍曰く、これは硫黃にして色に青の多いものである。蘇頌の圖經に『石亭脂、冬結石はいづれも藥に入れるに堪へぬ』とあるはまだ深く考察しなかつたのだ。

【氣味】【酸し、温にして毒なし】【主治】【洩を療じ、肝氣を益し、目を明にし、身を輕くし、天年を長くする】（別錄）【瘡を治し、蟲を殺す。功力は硫黃に同じ】（時珍）

【附錄】**硫黃香**（拾遺）藏器曰く、味辛し、温にして毒なし。惡氣を去り、蟲

（一）武都ハ丹砂ノ註ヲ見ヨ。

を殺す。硫黄に似て香しい。毘南國に出るといふ。それは扶南の南方三十支里の地點に在る。

礬石（本經上品）

和名　明礬（硫酸礬土）
學名　Alum

校正　海藻の波斯礬、嘉祐の柳絮礬を併せ入る。

釋名　涅石（綱目）羽涅（本經）羽澤（別錄）煅き枯したものを**巴石**と名け、輕白なるものを**柳絮礬**と名ける。時珍曰く、礬は燔である。石を燔いて作るものだ。山海經に『(一)女牀の山、その陰處に涅石が多い』とあり、郭璞の註に『礬石である。』(二)楚の地方では涅石と名け、秦の地方では名を羽涅と呼ぶ』とある。

集解　別錄に曰く、礬石は河西の山谷、及び隴西、武都、(三)石門に生ずる採收に一定の時期はない。よく鐵を銅たらしめる。弘景曰く、今は益州の北部、西川に產し、河西を經て來る、色の青白のものだ。生のものは馬齒礬と名け、製錬した純白のものを白礬と名け、蜀地方では消石に代用する。黃黑色のものは雞屎礬といつて藥用には入れない。ただ鍍（メッキ）に使ふだけだ。これと熟銅とを合せて苦

(一)女牀之山ハ畢沅ノ山海經新校正ニ據レバ、或ハ鳳翔府岐山縣ノ岐山ナラントアリ。

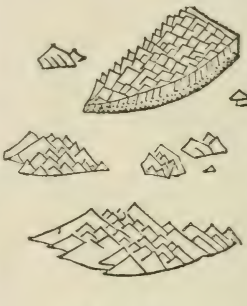
(二)楚、秦ハ金部鐵ノ註ヲ見ヨ。

(三)石門ハ山名、凡ソ八アリ。然レドモ此ニイフ石門ハ今ノ四川省慶符縣南五支里石門道ノ石門ヲイフモノノ如シ。

(四)晉州ハ宋ニ置ク、古ノ平陽邑ニシテ今ノ山西省臨汾縣ハソノ舊治ナリ。慈州ハ石[illegible]ノ註ヲ見ヨ。
(七)無爲軍ハ今ノ安徽省無爲縣ノ地ナリ。

酒中に投じたものを鐵に塗れば鐵が銅色になる。しかしこれは外面だけで、內質はやはり變らない。

恭曰く、礬石に五種ある。白礬は多くの藥に用ゐ、靑、黑の二礬は疳、及び瘡を療じ、黃礬も瘡を療じて肉を生じ、また皮革を染める。絳礬は本來は綠色のものだが、燒いて赤くなつたものだから絳礬と名けるのである。


〔礬石〕

頌曰く、礬石の生のままのものは皆石であつて、採取して燒き碎き煎錬して始めて礬となるのである。礬にはそれぞれ色の相異に依り白礬、黃礬、綠礬、黑礬、絳礬の五種類あつて、現に白礬は(四)晉州、慈州、(七)無爲軍に產し、藥にも入れるが染色用として廣く用ゐられる。黃礬は(六)丹竈家で用ゐるものだが藥にも入れる。黑礬は西戎だけに產するもので、皂礬ともいひ、鬚髮を染める藥に入れ、皮革を染めるにも用ゐる。綠礬は喉や齒の藥に入れ、染色にも用ゐる。絳礬は燒いて赤くなつたものだが、

現今では實物を見ることは稀である。又、礬精、礬蝴蝶、巴石、柳絮礬などいふはいづれも皆白礬であつて、白礬を錬る際に沸騰した中心點から物が飛出したやうに溢れ上るものを、鐵匕で抄ひ上げて蟲の形に作つたものを礬蝴蝶といひ、ただ水精のやうに光の明に透る塊のものを礬精といふ。この二物は藥に入れて普通の礬よりも力が緊しい。煎錬して作つた輕虚な綿絮のやうなものを柳絮礬といひ、また汁が盡きるまで燒いて雪のやうに白色にしたものを巴石といふ。

珣曰く、波斯、(七)大秦に產する白礬は白色で淨く透き徹り、內部に束針の文がある。丹竈家で用ゐての功力は河西、石門のものに優る。近頃は(八)文州の諸蕃地に往往この物がある。波斯には又、金線礬といふが出て、打破ると內部に金線の文の出るものを上級品とする。多くは燒煉家で用ゐるものだ。

時珍曰く、礬石は、よく研究して見ると五種類だけには止らない。白礬は方士のいふ白君であつて、(九)晉地の產を上とし、(一〇)青州、吳中のものは之に次ぐ。その潔白なものを雪礬といひ、光の明に透るものを明礬、又は雲母礬といひ、文が束針のやうで粉撲のやうな狀態のものを波斯白礬といふ。いづれも藥用としての良品だ。黑

(六)丹竈家ハ仙藥ヲ錬成スル道士ヲイフ。

(七)大秦ハ石部玉ノ註ヲ見ヨ。

(八)文州ハ礬石ノ註ヲ見ヨ。

(九)晉地ハ金部鐵ノ註參照。

(一〇)青州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。吳中ハ土部甘鍋ノ註ヲ見ヨ。

(二)六一泥ハ蚯蚓泥。

礬は鉛礬のことで、晉地に産し、その狀態の黒泥のやうなものを崑崙礬といひ、赤石脂のやうで金星のあるものを鐵礬といひ、紫石英のやうで火を引けば金線となり、刀の上へ畫けば紫赤色に見ゆるものを波斯紫礬といふ。いづれも服餌の藥には入れないが、丹竈家で用ゐ、また瘡の患者に用ゐる。綠礬、絳礬、黄礬はそれぞれ本條に掲げる。雜色のものでは雞屎礬、鴨屎礬、雞毛礬、粥礬などいふがあつて、いづれも下級品だ。やはり外丹家で使用する。

修治 斅曰く、凡そ白礬石を使用するには、瓷瓶に盛り火中に入れて内外赤く煆き通つたとき、鐵挾で蓋を取つてその中に石蜂巣を入れて燒く。その割合は礬石十兩に巣六兩を用ゐ、燒き盡くるを度として取出し、冷して粉に研り、紙に裹んで五寸深さの土坑内に一夜置いて取出して用ゐる。又別法では、水晶のやうに光の明で酸、鹹、澁の三味を完全に含んだものを粉に研り、瓷瓶を(二)六一泥で塗固めて乾した中へその礬粉三升を入れ、五方草、紫背天葵の汁各一鎰を旋しながら入れ、その汁が乾いた時瓶の口に蓋をして更にその上下を泥で固め、一百斤の火で午前十時から午後二時まで煆き、火を去つて取出せばその色が銀のやうになる。それを研

って輕粉のやうにして用ゐるのである。

時珍曰く、當今ではただ煆いて汁を乾したものを枯礬と稱して用ゐ、煆かぬものを生礬といふ。服食の藥に入れるには法則の通りに修治して用ゐるがよい。按ずるに、九鼎神丹祕訣の礬石を錬つて服食に入れるの法では、淸掃した密室の中で新しき桑の（一二）合槃一揃を用ゐ、先づ火で地を燒き熱してその上に水を洒ぎ、或は苦酒を洒いで白礬をそれに布き、その上に槃を覆せ、四面を灰で圍つて一夜置き、覆せた槃の內側へ悉く飛升する石精を掃き卸して取收め、なほ充分飛升し盡きぬときは幾囘も前記の法を繰返す。かくて取收めたものを礬精といふ。もし水にしやうとならば、掃下した礬精一斤を三年經つた苦酒一斗の中へ入れて淸す。これを礬華といふ。百日淸せば更にいよいよ佳いが、急の場合に用ゐるには七日でもよし。

【氣味】【酸し、寒にして毒なし】普曰く、神農、岐伯は酸し、久しく服すれば人の骨を傷めるといひ、扁鵲は鹹しといひ、雷公は酸し、毒なしといふ。權曰く、濇し、涼にして小毒あり。之才曰く、甘草が使となる。牡蠣を惡み、麻黃を畏る。獨孤滔曰く、紅心灰藋は礬を制す。

（一二）槃ハ盤ト同ジ。

(一三)白沃ハ白帶下。
(一四)齆鼻ハハナタケ。
(一五)鼠瘻ハ瘰癧。
(一六)嵌甲ハ足ノ指ノ爪ノタダレル病。
(一七)飲澼ハ胃腸病。
(一八)疸疾ハ黄疸。

【主治】【寒熱泄痢、(一三)白沃、陰蝕、惡瘡、目痛。骨、齒を堅くする。錬つて服餌すれば身體を輕くし、老衰せず、天年を增す】(本經)【固熱の骨髓に在るを除き、鼻中の息肉を去る】(別錄)【風を除き、熱を去り、痰を消し、渴を止め、水臟を煖める。中風失音を治するには、桃仁、葱を和した湯で浴して發汗するがよし】(大明)【生で含んで唾液を嚥めば急喉痺を治す。鼻衄、(一四)齆鼻、(一五)鼠漏、瘰癧、疥癬を療す】(甄權)【枯礬を(一六)嵌甲に貼る。牙縫の中から衄血の如く血の出るを治す】(宗奭)【痰涎(一七)飲澼を吐下し、濕を燥し、毒を解し、涎を追ひ、血を止め、痛を鎭め、惡肉を蝕し、好肉を生じ、癰疽、疔腫、惡瘡、癲癇、(一八)疸疾を治し、大小便を通ず。口齒、眼目の諸病、虎、犬、蛇、蠍その他あらゆる蟲の咬傷に用ゐる】(時珍)

波斯白礬(海藥)【氣味】【酸く濇し、溫にして毒なし】

【主治】【赤白漏下、陰蝕、泄痢、瘡疥。一切の毒蛇蟲等の毒を解し、目赤暴腫、齒痛を去る。火で錬つて用ゐるが良し】(李珣)

柳絮礬(嘉祐)【氣味】礬石に同じ。

【主治】【痰を消し、渴を止め、心、肝を潤す】(大明)

「發　明」弘景曰く、俗間で藥に合すには火で熬つて燥する。それで齒痛を治療して、多過ぎれば齒を壞めるは即ち骨を傷める意味を含んだものだ。然るに經に『骨、齒を堅くす』とあるは誠に疑はしい。

宗奭曰く、多く服してはならぬ、心、肺を損ずるものだ。それは水を却けるためである。水に溶して紙に物を書けばその部分だけ水に濡れぬを見れば、その性の水を却けることが判る。膈下の涎を治する藥に多く用ゐるはその意味だ

時珍曰く、礬石の應用に四途ある。風熱の痰涎を吐、利するはその酸、苦にして涌泄する點を取り、諸血痛、脫肛、陰挺、瘡瘍を治するはその酸、濇にして收斂する點を取り、痰飮、泄痢、崩帶、風眼を治するはその收斂して濕を燥する點を取り、喉痺、癰疽、中蠱、蛇蟲の螫傷を治するはその毒を解する點を取るのである。按ずるに、李迅の癰疽方に『凡そ癰疽發背の患者は、老少を問はずいづれも黃礬丸を服するがよい。一兩以上服すれば奏效せぬといふことはない。特に疼痛を止め、臟腑を動ぜずして人を活かすこと擧げて數ふべからざるものである。明に透る白礬一兩を生で研り、溶化した好き黃蠟七錢で和して梧子大の丸にし、每服十丸から漸次二十

(一九)裏ニ托シテ内部ニ捿止スルヲ云フ。

丸まで増加して熱水で服す。まだ破れぬものは内消し、已に破れたものは瘡口が合する。金石を服して瘡を發した場合に、引くに白礬末一二匙を溫酒で調へて服すればやはり三五服で效が現れる。全身に蛇頭の如き狀態の瘡が生じたある患者にも、やはり此の藥を服ませて效があつた。諸種の方に用ゐていづれも奇效を稱されて居る。但し一日に百粒近くまで服して充分の效力を發揮する。この藥は痛を止め、肌を生ずるのみならず、能く毒氣の內攻を防ぎ、膜を護り、瀉を止め、(一九)裏に托して膿を化するの功甚だ大なるもので、半斤まで服するが尤も佳い。鄙近なものとして徒に侮つてはならぬ。白礬の大なる解毒の功は周知せしめたいものである』とある。今も一般に蠟礬丸と名けて用ゐて居るが、確に效驗がある。

附方　舊二十六、新六十。【中風痰厥】四肢自由ならず、氣閉膈塞するには、白礬一兩、牙皂角五錢を末にし、一錢づつを溫水で調へて服す。痰を吐するを度とする。(陳師古方)【胸中の痰澼】頭痛して食慾なきには、礬石一兩を水二升で一升に煮詰め、蜜半合を入れて頻に服すれば少頃して大いに吐く。なほ吐かぬには少し熱湯を飲んで吐を導く。(外臺祕要)【風痰癇病】化痰丸——生白礬一兩、細茶五錢を末に

して煉蜜で梧子大の丸にし、一歳の小兒は十丸を茶湯で服し、大人は五十丸を服す。久しく服すれば痰が大便から出て病は根絶する。（鄧筆峯雜興）【小兒の胎寒】前に身を乗り出して啼き、癇を發するには、白礬を煅いて半兩を棗肉で黍米大の丸にし、一丸づつを乳で服ませて癒えれば止める。最良藥である。（保幼大全）【産後の言語不能】明氏の孤鳳散——白礬末一錢を熱湯で調へて一日一回づつ服す。（婦人良方）【牙關緊急】開かぬには、白礬、鹽花等分を搽れば涎が出て自ら開く。（集簡方）【(二〇)走馬喉痺】生白礬末を綿針の端に塗り、それで喉中を按ずれば立ろに破れる。綿針とは楡の枝の端へ棗ほどに綿を著けたものである。（儒門事親方）【喉癰(二一)乳蛾】濟生帳帶散——礬三錢を銅銚中で溶化し、劈き開いた巴豆三粒を入れて煎じ乾し、豆をば去つて礬を研つて用ゐる。喉に入れば立ろに癒える。甚しきには醋で調へて灌ぐ。通關散とも名ける。○法制烏龍膽——白礬末を猪膽中に入れて風で乾して研末し、一錢づつを喉に吹込めば涎を取出すこと妙である。【咽喉の(二二)穀賊】腫痛するには、生礬石末少量を腫れた部分に點ける。涎を吐き、痒くなるを度とする。（聖惠方）【風熱喉痛】白礬半斤の研末を溶した水に新しい瓦一箇を幾回か浸して晒し、礬水

(二〇)走馬喉痺ハ扁桃腺炎。

(二一)乳蛾ハ扁桃腺炎。

(二二)穀賊ハ咽喉ガイライラスルコト。

全部を浸し盡してからその瓦を糞厠中に一个月浸して取出し、洗つて光線の入らぬ場所に置いて霜を出させ、それを掃ひ取つて半錢づつを水で服す。(普濟方)【懸癰の垂長せるもの】咽中の煩悶するには、白礬の燒灰、鹽花等分を末にし、その藥を箸の端で頻に點けて置けば(二三)涎を去る。(孫用和祕寶方)【小兒の舌膜】初生兒が白膜皮で舌を裹まれたもの、或はその膜が舌根まで裹んだものは、指の爪で膜を刮破して血を出し、燒礬末を綠豆半分ほど傅ける。若し膜を摘出せねばその兒は必ず啞になる。(姚和衆至寶方)【牙齒の腫痛】白礬一兩を灰に燒き、大露蜂房一兩を微し炙き、二錢づつを水で煎じて含嗽し、涎を取去る。(簡要濟衆方)【齒の碎壞するもの】やがて齒の全部が碎け盡さんとするには、常に礬石を綿に裹み含み嚼んでその汁を吐き去る。(肘後方)【齒齗の出血】止まぬには、石礬一兩を燒き、水三升で一升に煮て含嗽する。(千金方)【木舌で腫れ强るもの】白礬、桂心等分を末にして舌下に置く。(聖惠方)【(二四)太陰口瘡】生甘草二寸、白礬粟一粒ほどを噙んで唾液を嚥む。(活法機要)【口舌の瘡】下虛上壅に因る。定齋方では、白礬を湯に泡けて足を濯ふ。○張子和方では、白礬末、黃丹を水飛して炒り、等分を研つて擦る【小兒の鵞口】口全體が白爛

(二三)去涎ノ二字、大觀本草ニ叢ノ一字ニ作ル。

(二四)太陰トハ熱性ナラザルノ意ナラン、口瘡トハ舌ニ粟粒ノ如キモノヲ生ズルヲ云フ。

するには、枯礬一錢、朱砂二分を末にして少量づつを傅け、日毎に三回試みれば神驗がある。（普濟方）【小兒の舌瘡】乳を飮めぬには、白礬を雞子に和して醋の中に入れて置き、その兒の足底へ塗れば二周間で癒える。（千金方）【口中の氣臭】明礬に麝香を入れて末にし、牙の表面へ擦る。（生生編）【衄血】枯礬末を吹込むが妙である。（聖濟方）【鼻中の息肉】千金方では、礬を燒いて末にし、豬脂に和し綿に裹んで塞ぐ、數日にして息肉は藥に著いて出る。○ある方では、明礬一兩、蓖麻仁七箇、鹽梅肉五箇、麝香一字を杵いて丸にし、綿で裹んで塞げば水に化して下る。【眉毛の脫落】白礬十兩を燒いて研り、蒸餠で梧子大の丸にして空心に溫水で七丸づつを服し、四十九日間一日に一丸づつ增加してまた一丸づつ減じ、七丸まで減じてからまた繰返す。癒えるを度とする。（聖濟錄）【奇怪なる症狀の發斑】ある患者は、眼が赤く、鼻が張り、大いに喘し、全身に斑を發出し、毛髮が銅鐵のやうになつた。これは熱毒の氣が下焦に結するに因るものである。白礬、滑石各一兩を末にして一服とし、水三盌で煎じて半減し、一氣に飮盡さすと平安になつた。（夏子益奇疾方）【目翳努肉】白礬石を黍米大ほど目に入れて淚を出す。日毎に用ゐれば惡汁が盡きて日毎に疾が

減ずる。（外臺祕要）【日の白膜】礬石一升、水四合を銅器で半合に煎じ、少量の蜜を入れ調へて綿で濾し、毎日三四回づつ點ける。（姚和衆延齡至寶方）【赤目風腫】甘草水に明礬を磨つて眼胞上に傅ければ效がある。或は枯礬を眉の心に頻に擦る。（集簡方）【爛弦風眼】白礬を煆いて一兩、銅青三錢を研末し、湯に泡けて澄して點け洗ふ。（永類方）【汁の出る聤耳】枯礬一兩、鉛丹を炒つて一錢を末にし、毎日吹入る。（聖濟錄）【卒死壯熱】礬石半斤を水一斗半で煮た湯に脚、及び踝を浸せば甦る。（肘後方）【脚氣衝心】白礬三兩を水一斗五升で煎沸して浸し洗ふ。（千金方）【風濕膝痛】脚氣、風濕で虛汗し、力なくして多く痛むもの、及び（二五）陰汗には、燒礬末一匙頭を沸湯に投じて患部に淋しながら洗ふ。（御藥院方）【黃腫水腫】推車丸——明礬二兩、青礬一兩、白麪半升を共に炒つて赤くし、醋で煮た米粉糊で丸にして棗湯で三十丸を服す。（濟急方）【女勞黃疸】黃疸患者にして日沒時に發熱し、その反動として惡寒し、膀胱が急し、少腹に滿し、身體盡く黃色になり、額上が黑くなつて足下が熱し、遂に黑病となつて腹は水を入れたやうに脹り、大便が必ず黑くなつて時時溏泄するは女勞の病である。水ではない。大勞、大熱の際交接して後に水に入つたために發る

（二五）陰囊ヽ兩股ニ汗ヲ發スル病。

ものだ。腹の滿するものは治し難い。礬石を焼き、消石を黄に熬つて等分を散にし、大麥粥汁で和して一日三回方寸匕づつを服すれば、病は大小便に從つて去る。(二六)小便が正黄に、大便が正黒になるはその證候である。(張仲景金匱方)【婦人の黄疸】經水不調の際房事を犯すが原因である。白礬、黄蠟各半兩、陳橘皮三錢を末にし、蠟で化して梧子大の丸にし、五十丸づつを滋血湯、或は調經湯で服す。(濟陰方)【婦人の白沃】經水が利せず、子臟が堅僻し、中に乾血があつて白き物を下すには、礬石三分を焼き、杏仁一分と研りまぜて煉蜜で棗核大の丸にし、(二七)腸中に入れて一日一回易へる。(張仲景金匱方)【婦人の陰脱】痒きには、礬石を焼いて研り、一日三回、空心に酒で方寸匕を服す。(千金翼)【男女の遺尿】枯白礬、牡蠣粉等分を末にし、一日三回、方寸匕づつを溫酒で服す。(余居士選奇方)【二便不通】白礬末を臍中に塡滿して新汲水を滴らす。冷さ腹に透るやうに感ずれば自然に通ずる。臍の平なるものには周圍を紙で圍ふ。(經驗方)【霍亂吐瀉】枯白礬末一錢を百沸湯で調へて服す。(華佗危病方)【伏暑の泄瀉】玉華丹——白礬を煅いて末にし、醋糊で丸にして大人、小人それぞれ量を計つて木瓜湯で服す。(經驗方)【老人の泄瀉】止まぬには、枯白礬

(二六)小便ノ二字原文ニ無シ脱字ナリ。

(二七)腸字、本書ニハ藏ニ作ル。卽陰門ナリ。

(二八)飛羅麪ハ石末ノ交ラヌ精製ノウドンコ。

一兩、訶黎勒を煨いて七錢半を末にし、米飯で二錢を服して瘥を取る。(太平聖惠方)【赤白下痢】白礬を飛過して末にし、好き醋と(二八)飛羅麪とで梧子大の丸にし、赤痢には甘草湯、白痢には乾薑湯で服す。(生生編)【氣痢】巴石丸——白礬一大斤を淨き地上で炭火で燒き、汁が盡きて雪のやうな色になつたものを巴石といふ。それを一兩取つて研末し、熟豬肝で梧子大の丸にし、患者の年齡、强弱に依り量を加減して空腹に用ゐる。豬肝に代へて水牛肝を用うれば更に佳し。平常食物の簡素な患者には蒸餅で丸にする。或は白礬中の靑黑のものが巴石だともいふ。(劉禹錫傳信方)【冷勞泄痢】食少く諸藥效なきには、白礬三兩を燒き、羊肝一頭分を脂を去つて釅醋三升で煮爛し、泥に擂つたもので和して梧子大の丸にし、朝夕二十丸づつを米飮で服す。(普濟方)【泄瀉下痢】白龍丹——明礬を燒いて末にし、飛羅麪と醋で作つた糊で梧子大の丸にし、二三十丸づつを、白痢には薑湯、赤痢には甘草湯、泄瀉には米湯で服す。(經驗方)【瘧疾寒熱】卽ち上記の方を東南の枝に生つた桃の心七箇を煎じた湯で服す。【反胃嘔吐】白礬、硫黃各二兩を銚中で燒き、硃砂一分を入れて末にし、麪糊で小豆大の丸にして十五丸づつを薑湯で服す。〇又ある法では、枯白礬三兩を

蒸餅で梧子大の丸にし、空心に米飲で十五丸づつを服す。（普濟方）【痰を化し嗽を治す】明礬二兩、(二九)生參末一兩を苦醋二升で熬膏して油紙に包んで取收め、旋めて豌豆大の丸にし、一丸づつを舌下に置けば嗽は立ろに止り、痰も消える。○定西侯方では、只明礬末を醋糊で梧子大の丸にし、就眠せんとするとき茶で二三十丸づつを服す。○摘要では、明礬を半生半燒にし、山梔子を黑く炒つて等分と末にし、薑汁糊で丸にして上記の如く服す。○雜興方では、白明礬、建茶等分を末にし、糊で丸にして服す。【諸種の心氣痛】儒門事親方では、生礬を皂子一箇ほど醋一盞で七分に煎じて服すれば立ろに止る。○邵眞人方では、明礬一兩を燒き、硃砂一錢、金箔三枚と末にして一錢半づつを空心に白湯で服す。【諸蟲の中毒】晉礬、建茶等分を末にして新汲水で二錢を調へて服すれば瀉、吐して效がある。なほ吐かぬときは再服する。（濟生方）【蛇、蟲の諸毒】毒蛇、射工、沙虱等の傷で口噤し、目闇み、手足强直するは毒氣が腹に入つたのである。白礬、甘草等分を末にし、冷水で二錢を服す。（瑞竹堂方）【驢、馬の汗の毒】傷瘡の痛むには、白礬を飛過し、黃丹を紫色に炒つて等分を貼る。（王氏博濟方）【虎、犬の咬傷】礬末を入れて裹む。痛を止めること

(二九)生參、生ノ人參。

尤も妙である。(肘後方)【蛇、蠍の咬傷】刀の先を赤く燒いた上へ白礬を載せ、傷所にその熱汁を滴らせば立ろに瘥える。これは神驗の方であつて、貞元十三年にある二人の僧が南方に行脚して鄧州まで來たとき、二人とも蛇に嚙まれたが、この法を用ゐさせると直に瘥え、他に何の苦痛もなかつたといふ。(劉禹錫傳信方)【(三〇)壁鏡の毒】大抵死亡するものである。白礬を塗る。(太平廣記)【刀斧の金瘡】白礬、黄丹等分を末にして傅けるが最も妙である。(救急方)【折傷の止痛】白礬末一匙を一盌の湯に泡けて(三一)帕を浸し、熱に乘じて患部を熨すれば少時して痛が止る。然る後に筋骨を排整して藥を貼けるのである。(靈苑方)【漆瘡の痒きもの】白礬湯で拭ふ。(千金方)【(三二)牛皮癬瘡】石榴皮に明礬末をつけて塗抹する。決して醋を用ゐてはならぬ。これで蟲が沈下する。(直指方)【小兒の風瘮】痒きには、白礬を燒いて熱酒中に投じ、馬尾につけて塗る。(子母祕錄)【小兒の臍腫】汁が出て止まぬには、白礬を灰に燒いて傅ける。(聖惠方)【乾濕頭瘡】白礬を半生半煅にし、酒で調へて瘡上に塗る。(生生編)【身體、面部の(三三)瘊子】白礬、地膚子等分を水で煎じて頻に洗ふ。(多能鄙事)【腋臭】礬石を絹袋に盛つてその粉を常に腋下に撲つが甚だ妙である。(許堯臣方)【(三四)魚口瘡

(三〇)壁鏡、ヒラタグモ。

(三一)帕、手帕、即チ日本ノ手拭ノ如キモノヲイフ。

(三二)牛皮癬、魚鱗狀癬。俗ニコセガサ。

(三三)瘊ハ疣ノ小ナルモノ。

(三四)魚口ハ横痃ノ一

毒】枯白礬を研り、(三五)寒食麪糊で調へて傅ければ直ちに消える。(救急良方)【臼狀の陰瘡】高昌の白礬、麻仁等分を研末して豬脂で膏に和し、先づ瘡を槐白皮の煎湯で洗つてから塗り、その上に楸葉を貼れば三回で癒える。(葛洪肘後方)【蟲の生ずる足瘡】南方の地方は卑濕なために足瘡の患者が多く、歲月久しくして蛭のやうな蟲が生ずる。これは風毒がその瘡に集注するのである。牛、或は羊、或は豬の腸の囊を取去り、洗はずに研つて泥のやうにし、瘡の大小に隨つて量を計り、煅いた泥礬半兩以上を入れて、むらなく研り、布片に塗つて貼れば少頃して痒さが心に入る。その時徐徐に布片のまま剝取つて火で炙けば、絲か髮か馬尾かを千筋にしたやうな、色も靑、白、赤、黑、樣樣の蟲が出る。かくて瘡を湯で洗ひ、三日一回づつ試みれば數回で蟲が盡き瘡が癒える。(南宮從峋嶁神書)【嵌甲瘡】足趾の甲が肉に入つて瘡となり、履物を穿けぬには、礬石を灰に燒いて傅ければ惡肉を蝕し、好肉を生じ、細かに甲角が割け落ちて十日程で癒える。この方は神の如き效がある。(肘後方)【(三六)雞眼肉刺】枯礬、黃丹、朴消等分の末を塗つて翌日洗へば二三回で癒える。(多能鄙事)【冷瘡の漏と成るもの】明礬を一半は生、一半は飛し——飛したものは肉を生じ、

名、俗ニヨコネ、便毒トモ云フ。

(三五)寒食ハ淸明前二日冬至ヲ去ル一百六日ヲ云フ、支那ノ古俗火ヲ焚クヲ禁ゼシ日ナリ。

(三六)雞眼ハ挑イヲノメ。肉刺ハハナヂズレ。

（三七）五靈芝恐ラクハ五靈脂ノ誤。

（三八）卵腫ハ睪丸炎。

生のものは膿を追ふ——（三七）五靈芝を水飛し、各半錢を末にして唾液で和し、皮紙に卷き込んで小撚にし、別に香油で末を捏ね濕してそれに施き、剪つて大小の撚にして漏孔へ入れ、朝入れたものは正午に取換へ、膿が出盡きて後に些の血が出るやうになれば水が乾く、その時藥を止めれば、自然に肉が生じて痊えるものだ。（普濟方）【魚睛丁瘡】枯礬末を寒食麪糊で調へて貼れば腫が退き膿がなくなる。（崔氏方）【丁瘡腫毒】雪白の礬末五錢を煨熟した葱白と搗き和して梧子大の丸にし、二錢五分づつを酒で服し、なほ效なきときは再服する。久病患者と姙婦は服してはならぬ。（衛生寶鑑）【癰疽腫毒】方は前の發明の項にある。【陰汗の濕痒】枯礬を撲つ。○又湯に泡けて沃ぎ洗ふ。（御藥院方）【交接に因る勞復】（三八）卵腫、或は縮んで腹に入り、絕息する程痛むには、礬石一分、消石三分を一日三回、大麥粥淸で方寸匕づつを服すれば熱毒は二便から出る。（肘後方）【婦人の陰痛】礬石三分、炒つた甘草末半兩を綿に裹み、導入して痊を取る。（肘後百一方）【丁腫惡瘡】二仙散——生礬、黄丹等分を用ゐ、使用する時三稜針で血を出し盡して傅ける。三回を過ぎずして必ず癒える。これは太醫李管勾の方である。（衛生寶鑑）【蟲、蛇、獸の毒】及び蠱毒には

生明礬、明雄黃等分を端午の日に研末し、黃蠟で梧子大の丸にして七丸づつを藥王菩薩を七遍念じて熱水で服す。(東坡良方)

綠　礬　(日　華)

和名　綠礬・ろうは(硫酸鐵)
英譯名　Iron vitriol (Sulphate of iron)

[釋　名]　皂礬(綱目)　靑礬　煆いて赤くしたものは絳礬(唐本)　また礬紅　と名ける。時珍曰く、綠礬は(一)皂色を染め得るところから皂礬といふ。又、黑礬も皂礬と名ける。服食には堪へぬもので、ただ瘡の治療だけに用ゐる。煆いて赤くしたものを俗に礬紅といひ、それをまた更に朱と紅とに別けて呼ぶ。

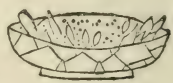
[集　解]　頌曰く。(二)隰州の(三)溫泉縣、(四)池州の(五)銅陵縣に出る。いづれも礬を煎錬する地方に生ずるものだ。初め出たばかりには皆石であつて、それを煎錬して作るのだが、その形は朴消に似て綠色である。これを取つて鐵板の上に置き、炭を聚めて燒けば礬が沸いて流れ出し、色が赤くて金汁のやうになるものが眞物である。沸が鎭れば汁が盡きて黃丹のやうな色になる。この外に皂莢礬なるものがあつて、或はそれを綠礬だともいふ。恭曰く、綠礬は、穴から出たばかりでまだ風に當らぬ

(一)皂色ハ黑キ色。
(二)隰州ハ凝水石ノ註ヲ見ヨ。
(三)溫泉縣ハ今ノ山西省寧鄉縣ノ南孤岐山ノ麓ノ地ナリ。
(四)池州ハ今ノ安徽省貴池縣ノ地ソノ舊治ナリ。
(五)銅陵縣ハ今ノ安徽省銅陵縣ノ地ナリ。

(六)瓜州ハ石部馬腦ノ註ヲ見ヨ。
(七)河內ハ佛領東京ノ首府ヲ河內トイフ。然レドモ此ニイフ河內ハ漢ノ河內郡ノ地、今ノ河南省中ノ黃河以北ノ地ヲ指ス。
(八)西安ハ古ノ長安、今ノ陝西省西安府、及ビソノ一帶ノ地ヲ指ス。
(九)沙州ハ石部馬腦ノ註ヲ見ヨ。

うちは宛も琉璃のやうな色である。一般にはこれを石膽といひ、燒けば赤色になるところから絳礬と呼ぶ。(六)瓜州に出るものが良い。

時珍曰く、綠礬は晉地、(七)河內、(八)西安、(九)沙州の各地に產する。焰消のやうな狀態のものの中から揀出した深青色の瑩淨なものが青礬、煆いて赤色に變じたものが絳礬であつて、泥細工や漆細工の材料として多く用ゐる。それ等の關係から、商人の販賣するものには沙や土を雜ぜて塊にしたものもある。昔の人が往往青礬を石膽といつたのは誤だ。


綠礬

氣味 【酸し、涼にして毒なし】

主治 【疳、及び諸瘡】(蘇恭)【喉痺、蟲牙、口瘡、惡瘡、疥癬。鯽魚を釀し灰に燒いて服すれば腸風瀉血を療ず】(大明)【積滯を消し、脾濕を燥し、痰涎を化し、脹滿、黃腫、瘧痢、風眼、口齒の諸病を除く】(時珍)

發明 時珍曰く、綠礬は酸涌し、濇收するもので、濕を燥し、毒を解し、涎を化するの功用は白礬と同樣だが、力がやや緩い。按ずるに、張三丰の仙傳方に載

せてある伐木丸の説明に『これは上清金蓬頭祖師の所傳の方であつて、脾土が衰弱して肝木の氣が盛なために、木が土を剋して心腹中滿を病み、或は土色のやうに黄腫するものを治す。これを服すれば土を助け、元を益す。蒼朮二斤を一晝夜米泔水に浸して黄酒麴麪四兩と共に赤色に炒り、皂礬一斤を醋で拌ぜて晒乾して瓶に入れ、煆いて末にして醋糊で梧子大の丸にし、一日三回、三四十丸づつを好き酒、米湯の任意のもので服す』とある。時珍も嘗て、この方に平胃散を加へてある賦役者の中滿腹脹を治療したことがあるが、果して效驗があつた。蓋しこの礬は色は緑、味は酸で燒けば赤くなるものだ。よく血分に入つて木を伐ち、また能く濕を燥し、涎を化し、小便を利し、食積を消化するのである。故に脹滿、黄腫、瘧痢、疳疾の方に往往之を用ゐる。この方の源流ともいふべきは、張仲景が礬石、消石を用ゐて女勞黄疸を治したことに發し、その方の中から變化して來たものである。頌曰く、劉禹錫の傳信方に『喉痺を治するには、皂莢礬を好き米醋に入れて共に研り、含んで汁を嚥めば立ろに瘥える』とある。この方は李讓から出たもので、甚だ奇效ある妙方だ。皂莢礬とは緑礬のことである。

附方　舊一、新十九。【重舌、木舌】皂礬二錢を鐵の上で紅く焼き、研つて摻る。(陸氏積德堂方)【喉風腫閉】皂礬一斤、米醋三斤を拌ぜて晒し乾して末にし、それを吹入れて痰涎を出し盡し、良薑末少量を入れた茶で口を漱いで嚥めば癒える。(孫氏集效方)【眼の俄に赤爛するもの】紅棗五箇の中へ綠礬を入れて火で煨熟し、河水、井水各一盌で桃、柳の心各七箇を煎じた湯で調へ、小量を點けて背上に入れる。(摘玄方)【爛弦風眼】青礬を火で煅いて火毒を出して細研し、湯に泡けて澄して點け洗ふ。(永類方)【倒睫拳毛】方は上に同じ。【瘧疾寒熱】礬紅、煨いた獨蒜頭等分を搗いて芡子大の丸にし、一丸づつを嚼んで白湯で服す。藥は端午の日に合せる。(普濟方)【少陰瘧疾】嘔吐するには、綠礬一錢、乾薑を泡け、半夏を薑制して半兩を末にし、發作の日の早朝半錢を醋湯で服す。(聖濟錄)【翻胃吐食】白麪二斤半を蒸して一箇の大饅頭を作り、上部に口を開け中を空に剜つて皂礬を詰め、新しい瓦で圍んで泥で固く封じ、土窰の奥へ入れて文武火で一晝夜燒いて取り出し、研末して棗肉で梧子大の丸にし、二十丸づつを空心に酒、湯の任意のもので服す。酒色を犯すことを忌む。(醫方摘要)【大便不通】皂礬一錢、巴霜二箇を共に研つて雞子中に入れて

攪きまぜ、殼へ開けた穴を封じて濕紙で裹み、煨熟して食ひ酒で飲下せば通ずる。(集玄方)【腸風下血】積年止まずして虛弱甚しきものも一服で效を擧げる。綠礬四兩を砂鍋に入れて新瓦で蓋ひ、鹽泥で固濟して赤く燒いて取出し、靑鹽、生硫黃各一兩を入れて研り勻ぜ、再び鍋に入れ固濟して赤く煆き、取出して火毒を去つて研り、熟附子末一兩を入れて粟米粥糊で梧子大の丸にし、空心に米飲、溫酒の任意のもので三十丸を服す。(永類方)【婦人の血崩】靑礬二兩、輕粉一錢を末にして水で梧子大の丸にし、二三十丸づつを新汲水で服す。(摘玄方)【血證黃腫】綠礬四兩、百草霜一升、炒麪半升を末にし、沙糖を和して梧子大の丸にし、三四十丸づつを食後に薑湯で服す。鄭時擧の所傳である。○又ある方では、小麥を淘り淨めて一斤、皂礬半斤を共に黃色に炒つて末にし、黑棗肉半斤と搗きまぜて米醋糊で梧子大の丸にし、一日三回、八九十丸づつを薑湯で服す。(簡便方)【脾病黃腫】靑礬四兩を煆いて赤い珠にし、當歸四兩を酒に七日(一〇)酵浸して焙じ、百草霜三兩と共に末にして藥を浸したその酒で作つた糊で梧子大の丸にし、五丸乃至七丸づつを溫水で服す。一个月後には黃が去つて立ろに效がある。これは祖傳七世の方である。○又ある方では、綠

(一〇)酵ハ醉字ノ訛ナリ。醉浸トハ充分ニ浸シ透ラスコトヲイフ。

(一二)酒黄ハ飲酒ニ因ル黄疸。

(一三)食勞ハ食復勞復ノ略。食復ハ病後食物ノ不注意ヨリ病ノ再發スルコト。勞復ハ房勞ヨリ再發スルコト其ノ爲ニ起ル黄病。

礬四兩、百草霜、五倍子各一兩、木香一錢を末にし、酒で煎じた飛麪で梧子大の丸にし、空心に酒で五丸づつを服す。〇又ある方では、平胃散と青礬二兩とを末にし、醋糊で丸にして米飲で服す。或は烏沈湯四兩を加へて酒糊で丸にするもよし。(潔古法活機要)【(一二)酒黄水腫】黄腫積痛には、青礬半斤を醋一大盞で和して瓦盆で乾くまで煆き、平胃散、烏藥、順氣散各半兩を末にし、共に醋で煮た糊で梧子大の丸にし、酒、或は薑湯で二三十丸づつを服す。口に忌むものなし。鍋灰を加へることもある。(趙原楊眞人濟急方)【(一三)食勞黄病】身體から目まで黄なるには、青礬を鍋に入れて炭で赤く煆き、米醋を拌ぜて末にして棗肉で和して梧子大の丸にし、二三十丸づつを食後薑湯で服す。(救急方)【腹中の食積】綠礬二兩を研り、米醋一大盞と瓷器に入れて煎じて柳條で攪拌しながら煎膏し、赤脚烏一兩を入れて研り、綠豆大の丸にして空心に五丸づつを溫酒で服す。(聖惠方)【疳蟲で土を食ふもの】及び生物を食ひたがるには、綠礬の研末を豬膽汁で綠豆大の丸にし、米飲で五七丸を服す。(保幼大全)【小兒の疳氣】治療の手段なきには、綠礬を三回赤く煆て醋に淬して末にし、棗肉で和して綠豆大の丸にし、一日三回、十丸づつを溫水で服す。(集驗方)

【(一三)走馬疳瘡】綠礬を鍋に入れて炭火で赤く煆き醋を拌ぜ合すこと三回、末にして麝香少量を入れ、温漿水で瘡を漱き淨めてから摻る。（談野翁試效方）【白禿頭瘡】皂礬、楝樹子を燒き研つて搽る。（普濟方）【小兒の頭瘡】綠礬一兩、淡豉一兩を黑く炒つて膩粉二錢を研り勻ぜ、桑灰湯で瘡を洗淨して摻るがよし【小兒の(一四)甜瘡】大棗を核を取去つて中へ綠礬を詰め、燒いて性を存して研つて貼る。（拔萃方）【耳の爛瘡】棗子を核を取去つて靑礬を詰めて煆き、研つて香油で調へて傅ける。（摘玄方）【蚰蜒の耳に入りたるとき】綠礬を水で調へて灌ぐ。（普濟方）【蛆の耳に入つたとき】綠礬を摻れば化して水となる。（摘玄方）【瘡に蛆の生じたもの】綠礬末を摻つて貼れば化して水となる。（摘玄方）【湯火傷】皂礬を涼水で和して澆けば疼きが止り、腫も退く。（楊誠經驗方）【癬瘡の痒きもの】螺螄十四箇、槿樹皮末一兩を盌に入れて蒸熟し、礬紅三錢を入れて搗きまぜて搽る。（孫氏集效方）【(一五)甲疽の爛れて蔓延するもの】崔氏の方では、甲疽、或は甲を割つて肌を傷けたため、或は甲が延びて肉を侵した等が原因で遂に瘡腫となり、黃水が穢く浸み流れ、五本の指全部が爛れて漸次に脚趺へ上り、泡漿が四邊に流れ出て火燒瘡のやうになり、日夜怪しくも增大し

(一三)走馬疳瘡ハ小兒ノハクサト云フ病ニシテ、一方頰部ニ發スル寒壞疽ナリ。

(一四)甜瘡ハ顏面水泡疹ノ俗ニミツガサト云フモノ。

(一五)甲疽ハ足ノ爪ニ出來ル瘡腫ノ

て手當の途なきを治するには、綠礬石五兩を汁の盡きるまで燒き、研末して黃丹のやうな色になつたものを取收め、先づ鹽湯で瘡を洗ひ拭つてから末を厚く傅け、軟い布で緩く裹む。その當日に直に汁が斷えて瘡が乾く。かくて毎日一回鹽湯で膿の部分を洗淨してはその痂に傅ける。乾いた部分に近けてはならぬ。但し急痛するものには酥少量を塗つて潤はす。五日經てば上痂が生ずるやうになるが、相變らず洗つて傅ければ十日目頃までには痂が漸次に剝げ盡きる。軟き部分に或は更に白膿泡を生ずることもあるが、その時はそれを擦破して傅ければ自然に瘥える。張侍郞がこの病に罹つた時は六十日間も病臥して、京中の醫師がそれぞれ手當を加へ藥を用ゐたが效がなく、この法を用ゐて始めて神ある如く平癒した。（下蘇外臺秘要）【婦人の甲疽】婦人の趾甲の內側に瘡を生じ、惡肉が突出して久しく瘥えぬものを臭田螺と名ける。皂礬を晝は日光に晒し夜は夜氣に露し、この一兩を湯に煎じて浸し洗ひ、然る後礬末一兩に雄黃二錢、硫黃一錢、乳香、沒藥各一錢を加へて研勻ぜて摻る。（醫方摘要）【白髮染め】綠礬、薄荷、烏頭等分を末にし、鐵漿水に浸して日毎に染める。（相感志）【腋臭】綠礬を半生半煅にして末にし、輕粉少量を入れて薑汁で半錢

を調へて溶後に搽る。十分熱痛すればそれで止る。（仁齋直指方）

黄礬（綱目）

和名　硫酸礬土に水酸化鐵及び硫酸鐵を混ずるもの
學名　Ferrugin us Sulphate aluminium

〔集解〕恭曰く、黄礬は丹竈家の材料だが、皮革を染めるにも用ゐる。時珍曰く、黄礬は陝西、瓜州、沙州に產するもの、及び舶來のものを上級品とする。色は黄で狀態は胡桐淚のやうなものだ。一般に綠礬中から揀出した黄色のものを此の物として居るが、眞物ではない。波斯產の物は打破れば中に金絲の文があつて金絲礬と呼び、これで刀劍を磨けば花文が顯れる。丹房鑑源には「五色山脂は吳の黄礬だ」とある。

〔氣味〕【酸く濇く鹹し、毒あり】

〔主治〕【瘡を療じ、肉を生ず】（蘇恭）【（一）野雞瘻痔、惡瘡、疥癬】（李珣）陽明の風熱の牙疼を治す】（李杲）

〔附方〕新五。【汁の出る聤耳】黄礬二兩を燒き枯し、二錢を綿に裹んで塞ぐ。（聖惠方）【婦人の頰瘡】毎年頻發するには、水銀一兩半を猪脂で揉み擦つて盡く溶し、

（一）野雞病ハ痔ノ一名。

(二) 疳ハ小兒ガ菓子ノ喰過ギカラ作ル病トイフ。

(三) 男子ノ陰部ニ生ズル腫物、初メ粟粒ノ如クシテ紅ク腫レ後ニ臼狀ニ凹ム。

黄礬石末二兩、胡粉一兩を入れ、再び猪脂を加へ和して泥のやうにし、瘡を洗淨してから塗つて上に別の胡粉を塗る。これは甘家の祕方である。(肘後方)【身體の瘢痕】黄礬石を汁が盡きるまで燒き、胡粉を黄に炒り、各八分の細末を臘月の猪脂で泥のやうに和して研り、生布で痛い程揩つて五回この藥を塗り、更に鷹糞白、燕巢中草を灰に燒いて等分を人乳に和して塗る。瘢痕は自ら消えて肉も故の通り平になる。(崔元亮海上集驗方)【(二)急疳蝕齒】黄礬、青礬半錢、白礬を燒いて一錢、麝香一分を末にして傅け、涎を吐く。(聖惠方)【(三)妬精陰瘡】黄礬、青礬、麝香等分を末にして傅ける。三回以上の必要なし。(千金方)

湯瓶內鹼(綱目)

和名 湯垢
學名 Incrustations in a kettle

【集解】時珍曰く、これは湯を煎じる瓶中に澄んで結晶する細砂のやうな水鹼である。

【主治】【消渴を止めるには、一兩を末にして粟米燒飯で梧子大の丸にし、二十丸づつを人參湯で服す。又、小兒の口瘡には、就寢時に醋で末を調へて兩足心に十

文字に塗る】(時珍)

【附方】新二。【消渴引飲】湯瓶内鹼、葛根、焙じた水萍等分を五錢づつ水で煎じて服す。○又ある法では、湯瓶内鹼、炒つた菝葜根各一兩、烏梅を核のまま二兩を焙じて散にし、一日一回、二錢づつを水一盞で石器に入れて七分に煎じ、溫にして呷ふ。(聖濟方)

附錄諸石　(二十七種)

時珍曰く、別錄の有名未用の諸石、及び諸家の本草に列記してあつて詳ならぬもの、又、類別附載し難きものを一括してここに附錄する。

石脾(別錄)有名未用に曰く、味甘し、毒なし。胃中の寒熱に主效があり、氣を益し、生殖を完からしめる。一名胃石、一名膏石、一名消石といひ、(一)隱蕃の山谷の石の間に生ずる。色黒く大豆ほどのもので赤文があり、やや黄なるもあり、輕く薄く、碁石のやうである。採收に一定の時期はない。

弘景曰く、皇甫士安は『消石は、石脾と消石とを取つて水で煮れば一斛から三斗

(一)隱蕃、未攷。

(二)峨嵋山ハ菩薩石ノ註ヲ見ヨ。

を取り得る。雪の如く正白のもので、水の中に投ずれば消けるから消石と名ける』といつて居るが、按ずるに、これは消石を合煮して作る眞の消石をいふのであつて、石脾なるものはそもそも何物か判らない。本草に石脾、石肺なるものがあるが、何人もその實物を識るものはない。藏器曰く、石脾は西戎の鹵地に生ずる鹹水の結晶だ。

時珍曰く、石脾は自然に生成するものだ。陶氏のいふ物は製造した物である。按ずるに、九鼎神丹經に『石脾は陰陽の結氣、五鹽の精が礬を原質として成るものだ。(二)峨嵋山に多く有るが、俗間には識る者がない。故に古人は合製したものをこの代用に充てたので、その合製法は、白礬、戎鹽各一斤を末にし、苦參水二升を取つて鐺で煮て五沸したところへ入れて半分に煮詰め、滓を取去つて乾せば雪のやうに白色になる、これが石脾である。石脾、朴消、芒消各一斤を末にし、苦參水二斗を銅鐺で煎じて數沸したところへ入れて半分に煮詰め、滓を取去つて煎じて器に入れ、冷水に一夜漬けて置けば消石となる。これは諸石を化して水にし得る』とある。これは焔消の消石とは同一物でないが、しかしいづれも眞物ではない。

石肺　別錄に曰く、味辛し、毒なし。癘欬、久しく寒して瘻するものに主效があり、氣を益し、目を明にする。水中に生ずるもので、狀態は覆肺の如く、黑き光澤の中に赤い文がある。水から出せば直に乾くものだ。弘景曰く、今の浮石も欬を療じ、肺には似て居るが、黑澤がないからこの物ではない。

石肝　別錄に曰く、味酸し、毒なし。身體の痒きに主效があり、顏色を美くする。常山に生ずるもので、色は肝のやうだ。

石腎　別錄に曰く、味鹹し、洩痢に主效がある。白色で珠のやうだ。

紫石華　別錄に曰く、味甘し、平にして毒なし。渴に主效があり、小腸の熱を去る。一名茈石華といひ、(三)中牟山の陰に生ずる。採收に一定の時期はない。

白石華　別錄に曰く、味辛し、毒なし。痺、消渴、膀胱の熱に主效がある。(四)掖北鄉の北邑山に生ずるもので、採收に一定の時期はない。

黃石華　別錄に曰く、味甘し、毒なし。陰痿、消渴、膈中の熱に主效があり、あらゆる毒を去る。掖北の山に生ずる黃色のものだ。採收に一定の時期はない。

黑石華　別錄に曰く、味甘し、毒なし。陰痿、消渴に主效があり、熱を去り、月經

(三) 中牟ハ今ノ河南省中牟縣ノ地、卽チ古ノ鄭ノ中牟ナリ。又、古ノ趙ノ中牟ハ今ノ同省湯陰縣ノ地ナリ。

(四) 掖北鄕ハ滑石ノ註ヲ見ヨ。

(五)弗其ハ不其ト書ク、漢ノ縣名、今ノ山東省卽墨縣ハソノ故城ナリ。縣ノ東南ニ不其山アリ勞山ニ連瓦ス、因ッテ名ク。

(六)勞山ハ今ノ山東省卽墨縣ノ東南ニ在リテ海ニ臨ム。一ニ牢山。嶗山ニ作ル。一ニ大勞、小勞ノ二山相連ル。

(七)華山ハ水部玉井水太華山ノ註ヲ見ヨ。

(八)陵陰ハ陵陽山ノ山陰ヲイフカ。陵陽山ハ今ノ安徽省宣城縣ニ在リ、漢ニ今ノ安徽省石埭縣ノ東ニ陵陽縣ヲ置ク。

(九)常山ハ凝水石ノ註ヲ見ヨ。

(一〇)少室山ハ嵩山ノ一峯、五色石脂嵩高山ノ註參照。

(一一)虎尾之山、游戲之山、嬰侯之山、豐

不通を療ず。(五)弗其(六)勞山の陰の石間に生ずるもので、採收に一定の時期はない。

陵石 別錄に曰く、味甘し、毒なし。氣を益し、寒に耐へ、身を輕くし、天年を長くする主效がある。(七)華山に生ずるもので、その形は薄く光澤がある。時珍曰く、按ずるに、聖濟錄に『發汗後に耳聾するには、銀眼の如き竅のある陵石を末にし、一錢づつ冷水で服す』とある。

終石 別錄に曰く、味辛し、毒なし。陰痿痺、排尿困難に主效があり、精氣を益す。(八)陵陰に生ずるもので、採收に一定の時期はない。

封石 別錄に曰く、味甘し、毒なし。消渴、熱中、婦人の疽蝕に主效がある。(九)常山、及び(一〇)少室山に生ずる。採收に一定の時期はない。時珍曰く、(一一)虎尾の山、游戲の山、嬰侯の山、豐山、服山に封石多しといふはこの石である。

遂石 別錄に曰く、味甘し、毒なし。消渴、傷中に主效があり、氣を益す。太山の陰に生ずるもので、採收に一定の時期はない。

五羽石 は復別錄に曰く、身を輕くし、天年を長くする主效がある。一名金黃といひ、海水中の(一二)蓬葭山中に生ずるもので、金の如く黃色だ。

山、服山、イヅレモ山海經中山經ニアリ。豐山ハ、畢沅ノ考證ニ據レバ、今ノ漢西鄂縣ノ豐山ナラントイフ。ソノ他無攷。

(一二)蓬葭山、未詳。

(一三)邯鄲ハ土部白堊ノ註ヲ見ヨ。

(一四)郅支國ハ漢ノ時ノ匈奴ノ地ナリ。郅支トハ匈奴單于ノ號ナレバソノ所都ヲ郅支城トイフ。

紫佳石　別錄に曰く、味酸し、毒なし。痺、血氣に主效がある。一名赤英、又は石血と名け、(一三)邯鄲に產する石で、爵茈の如きものである。二月採收する。弘景曰く、三十六水方では紫賀石と呼ぶ。

火藥（綱目）　時珍曰く、味辛く酸し、小毒あり、瘡癬に主效があり、蟲を殺し、濕氣、瘟疫を辟ける。これは焰消、硫黃、杉木炭で合製したもので、烽燧、銃機の諸藥として用ゐるものだ。

石耆　別錄に曰く、味甘し、毒なし。欬逆の氣に主效がある。石の間に生ずるもので、色は鐵脂のやうに赤いものだ。四月に採收する。

馬肝石（綱目）　時珍曰く、按ずるに、郭憲の洞冥記に『(一四)郅支國から馬肝石百片を獻上した。青黑く馬肝のやうなもので、金函に水を盛つてその中に養ひ、それで白髮を拭へば手に應じて悉く黑くなる。九轉丹に和して一粒を吞めば幾年かの間飢ゑない。硯にもなる』とある。

猪牙石（綱目）　時珍曰く、目を明にし、瞖を去る。西蕃に出るもので、文理が象牙棗のやうで紅色だ。

（一五）齊州ハ今ノ山東省歷城縣ソノ舊治ナリ。後魏ニ州ヲ置キ宋ニ改メテ濟南府トナス。

碧霞石（綱目）時珍曰く、目を明にし、瞖障を去る。

龍涎石（綱目）時珍曰く、大風癘瘡に主效がある。（一五）齊州に出るもので、一名龍仙石といふ。

鉛光石（綱目）時珍曰く、哽骨に主效がある。

太陽石（綱目）時珍曰く、劉守眞の宣明方の、年古きと日淺きと一切の目疾を治する方に「太陽石、太陰石、碧霞石、豬牙石、河洛石、寒水石、紫石英、代赭石、菩薩石、金精石、銀精石、禹餘石、礬礦石、雲母石、爐甘石。井泉石、陽起石、滑石、烏賊骨、青鹽、銅青各一兩、硇砂半兩、密陀僧一兩、鵬砂三錢、乳香二錢、麝香、腦子一錢、輕粉一錢半、黄丹四兩を用ゐて各〻末にし、熊膽一斤、白砂蜜二斤を井華水九盌で四盌に熬め、水の中へ滴しても散らぬを程度にし、濾淨して貯へて點ける」とあるが、この方に用ゐた太陽石、太陰石等の石は一向的確な考證がない。しばらく此に附錄する。

朶梯牙（綱目）時珍曰く、周憲王の普濟方の眼科の部、瞖を去る方に「水飛した朶梯牙、火で煅いた大海螺、碗糖霜を末にして日毎に點ける」又ある法では、可鐵

（二六）回回ハ石部青琅玕ノ註ヲ見ヨ。

刺一錢、阿飛勇一錢、李子樹膠四錢、白雪粉八錢を末にし、雞子白で調へて錠にし、用ゐる都度女兒を產んだ母の乳汁に磨つて點ける。又ある法では、安咱蘆――（二六）回回の地方に產する――黑丁香、卽ち蠟糞、海螵蛸と各〻末にして日每に點ける』とある。所謂、朶梯牙、盌糖霜、安咱蘆、可鐵刺、阿飛勇とはいづれも何物のことか判らない。ここに附錄して後賢の研究に俟つ。

白獅子石（拾遺）　藏器曰く、白虎病――江東地方で呼ぶ歷節風――に主效がある。この石を病者の前に置けば自ら癒える。やはり禁咒などの意味であらう。白虎とは糞神の名であつて、その形狀は猫のやうなもので、若し糞を掃いて門の附近へ置けばこの病に罹らせるといふ。療法は、雞子を患部に揩つて祈願の呪文を唱へながらそれを糞堆の上へ送るのであるが、その際振返つて見てはならぬといふ。

鎭宅大石（拾遺）　藏器曰く、災異を起らしめぬことを主る。荊楚歲時記に『十二月晦日に宅地の四隅を掘つて大石各一箇を埋めて鎭宅とする』とあり、鴻寶萬畢術には『丸石を宅地の四隅に埋めて桃核七箇を搥けば幽鬼が殃をなさぬ』とある。

神丹（拾遺）　藏器曰く、味辛し、溫にして小毒あり。萬病の寒溫あるに主效があ

り、飛した金石、及び諸薬と合製して服すれば長生して神仙となる。

烟薬（拾遺） 藏器曰く、味辛し、溫にして毒あり。瘰癧、五痔、瘻瘍、瘤瘡根、惡腫に主效がある。その方は、石黃、空青、桂心いづれも四兩、乾薑一兩を末にし、鐵片の上で燒いて猪脂を盌に塗つて覆ひ、薬をその盌の內側に飛升し付着させ、この方法を五回繰返してその付着したものを取り、瘡の大小に隨ひ鼠糞大に圓めて孔中に納れ、麪で上を封ずる 三回試みれば根が出る。瘡に孔のない場合には針で破つてこれを納れる。

本草綱目石部第十一卷 終

昭和四年十一月二十五日印刷
昭和四年十一月二十八日發行

頭註國譯本草綱目（第三卷）

非賣品

監修兼飜譯者　白井光太郎
鈴木眞海

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行者　和田利彦

東京市日本橋區通三丁目八番地
印刷者　木村謙吉

東京市日本橋區通三丁目八番地
刊行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一・三七八八
振替口座東京一六一七

東京・日東印刷株式會社印行・木綿



東春陽堂
京出版